

國語學史目次

はしがき

目次	七	六	五	四	三	二	一	上	序
五十音圖	片假名の發生	平假名の發生	眞假名の發達	上代中古に於ける辭書	宣命書	一記紀時代の文字	代	說	
三	三〇	二六	二四	一九	一七	九	九	三	

11

[illegible]

DE

[illegible]

六

[illegible]

三十六	大正末期より昭和へかけての文典（その二）	：	：	：	：	：	：	：	：	三三七
三十七	大正末期より昭和へかけての文典（その三）	：	：	：	：	：	：	：	：	三六〇
三十八	大正末期より昭和へかけての文典（その四）	：	：	：	：	：	：	：	：	三九一
三十九	昭和期に於ける方言の研究	：	：	：	：	：	：	：	：	三九七
四十	國語の音聲學研究	：	：	：	：	：	：	：	：	四〇九
四十一	音聲學協會の誕生とその後	：	：	：	：	：	：	：	：	四二六
四十二	昭和期に於ける國語學史	：	：	：	：	：	：	：	：	四三七
四十三	國語史の研究（その一）	：	：	：	：	：	：	：	：	四三九
四十四	國語史の研究（その二）	：	：	：	：	：	：	：	：	四五五
四十五	ラヂオ放送とことばの講座	：	：	：	：	：	：	：	：	四六五
四十六	國語科學講座と岩波講座日本文學、岩波講座國語教育	：	：	：	：	：	：	：	：	四七一
四十七	フランコ・スイス學派の紹介及び國語解釋學と表現學	：	：	：	：	：	：	：	：	四八五
四十八	記念論文集に於ける國語學	：	：	：	：	：	：	：	：	四九七
四十九	日本言語學會及び日本方言學會の設立	：	：	：	：	：	：	：	：	五三三

目 次

五十 歐米人の日本語研究の一瞥 …… 五二五

結 語 …… 五三九

年 表 …… (五五一—五八四)

索 引 …… (五八五—六二五)

國語學史

序 説

國語は國家
の藩屏、國
民の慈母

上田博士は嘗て「國語は國家の藩屏なり、國語は國民の慈母なり」との二句をモットーとして國民を指導しようと斯界に獅子吼された。我等は朝に夕に日本語を用ゐて父母・兄弟・夫婦・隣人とおのが意志を通じ互ひに親しみを増すのである。これは母の膝に懷かれ乳房をすふ時から白髪を戴き腰のかどまるまでもかはらない。この國語は國民の慈母であることは疑はない。この國語が國民の團結をかため、日本といふ國家を擁護してゆくのである。されば國民は國語を愛さなくてはならぬ。國語を重んじなくてはならぬ。國の爲に國家の藩屏である國語を考究することは銃をとりて戰に赴くものにも決して劣るものではない。我等の祖先はうるはしい日本語を使用し、これを子孫に傳へてくれた。我等はその血液をうけてゐるやうに國語の相續者であり、またこれを次の子孫に傳へなくてはならぬ。この國語の現象をきはめ、その理法を明かにするのが國語學である。

國語學史の
目的

序 説

國語學史は國語に關する推究や實證の跡をたづね、その進展を明かにする學問である。これが系統の

序 説

研究の方法

立つた一つの學問になつたのは比較的新しいことであるが、その由來するところは頗る古くて、少くとも千數百年にも溯ることが出來ると思ふ。この綿々として久しく續いてゐる國語の研究も便宜上いくつかに區切りて見る要がある。その區分の方法は種々ありて、國語を構成してゐる詞辭・音韻・文字・章句等に分けて時代を追うて考究する法もある。或は優れてゐた研究者を中心として古い時代より次第に新しい時代に降りゆく法もある。或は斯學に於ける名著を中心として一つの書から他に進展した跡を年代的にたづねる法もある。社會の事相或は他の學問と關聯して説く法もある。これらの事項・人物・著書・背景の諸法はそれ／＼長短があるが、比較的古い時代には事項分により、近代に於ては人物中心に叙述するのが効果的と思はれるので、本書には折衷法に據ることとした。あまりに系統論にとらはれるのは事象の全貌をつかむのに却つて不便があるやうに考へられる。

時代の區劃

これが時代の區劃は固より政治史などにはよられない。語の變遷の上から考へると、奈良朝で上古時代をくぎり、平安朝時代の院政の始まつた頃、もしくは鎌倉幕府創立以前を以て中古時代をくぎり、それから後室町時代の末期までを近古時代とし、江戸幕府時代を近世時代、明治時代以降を現代と分けるのが適當であらうが、國語學史の區分は貞享・元祿の頃圓珠施契沖の出現を以て上代と近代との境界となすのが一般になつてゐるのでこれに隨ひ、尙それを細かに區分する。

上 代

茲に上代といふは上れる代の義で、自分は便宜上推古天皇の御代から靈元天皇の天和・貞享頃までを

近代

包括する。その間ざつと千百年、その中、武家政治の始まるあたりに線を引き、前期と後期とを分ける。と、前期が六百年に近く、後期が五百年に近い割合となる。近代はその後から慶應の末までとすれば、約百八十年あまり、これに明治の初期を加へると二百年にあまるが、王政維新は社會制度を始めいろいろの方面の變革があつたから、姑くそこに界線を引く。この間を更に小刻みに分けると、貞享・元祿の初から明和・安永の頃までざつと百年間を第一期、それから嘉永二年頃まで七十年間を第二期、以下二十年足らずの間を第三期とし、この三つを國語學勃興時代、國語學隆盛時代、國語學衰退時代と名づけても宜しい。明治維新以降七十餘年を現代とするが、その中始めの三十年は現時の隆昌時代を生み出す準備時代と見做し、近代の中に入れないこととした。

(備考一) 推古天皇以前の千數百年のことはあまり分明でないから、これを省いたが、上代前期の中に包括せしめて然るべきである。

(同 二) 明和・安永で小期を分けたのは斯界の偉人富士谷成章・本居宣長の出現により、嘉永の初で分けたのは橘守部の他界によつたのである。

史によると、推古天皇より三百餘年前、應神天皇の御代に漢籍が百濟から奉獻されてゐるが、當時に誌されたものが残つてないので、姑く金石文字の現存してゐる推古天皇の時代を斯學の起源とした。さうして當時の宮名・地名・人名に充てた眞假名の研究資料につきての當時の人の意圖を和察することに

金石文字

よつて語學の濫觴となした。下つて記紀が擧まれ、萬葉が出づるに及んで大いに進展して來た。こゝに一小期を書してもよろしい。

次に平安朝に至り、片假名・平假名の發明が起り、一方には漢字の字引が出来、漢文の訓讀上から點法が起り、反切も頻りに論じられ、悉曇學の輸入につれて音圖が成り、言語の變遷につれて古語の解釋が盛んになつて來、語の雅俗から方言なども意識されるに至つた。これをまた一小期として宜しい。

院政の半ば頃より東西の方言が相雜り、鎌倉時代に至りて假名遣の混亂を生じ、歌道の權威京極中納言が假名遣を定め、卜部懷賢の日本紀の研究、仙覺律師の萬葉研究、この三人の出現によりて鎌倉期の語學が築かれ、それに續きて吉野朝・室町幕府時代に歌・連歌の上から新しい語學がうち立てられ、その末期に及んでは手爾波口傳などが起り、徳川時代の初期で、切字の論などもこの時代に成立したが、傳授の幕に遮られて一般に傳播するに至らなかつた。

契沖を以て上代と近代とを分つたのは室町末期から學問が祕傳的專賣的に墮してゐたのを開放的公開的に改めた點を主とし、古典の研究を起し、四五百年ちかくも權威となつてゐた定家假名文字遣には學的根據のないの指摘し、歴史的假名遣を唱道したのは洵に禮證に餘りありといふべく、その後富士谷成章・本居宣長出で、こゝに日本語學の勃興期を現出した。それより本居・富士谷兩流の繼承派と創見に富んだ橋守部の出現があり、嘉永以後明治三十年前の頃までは和蘭語學等の輸入はあつたが、一體に

語學衰頹期であつた。以上で近代の幕は閉ぢるのである。

維新以後の三十年は斯學勃興の準備時代と見られるが、一般には尙不振の状況であつた。その頃より團體上の運動や研究が起り、帝國教育會に設けられた國字改良部・言文一致部・假名部・羅馬字會が起つて各地の新聞もこれに和し、終に政府を動かして國語調査會の設立となり、國語問題の討究が旺然として盛んになつて來、數多の學者が出て立派な著作を出すに至つた。方言の調査に、上代・中古・近古・現代の文語及び口語語典の研究に、近接せる言語との比較に、音韻やアクセントの研究に、假名遣に、外國語學との交流に、その他各方面に研究の手を擴め、斬新の説が日に月に盛んになり、終に音聲學會・方言學會・言語學會等の學會が成立し、機關誌を發行し、語學講座を設け、ラヂオを通じてことばの講座を放送するなどの盛況を見るに至つた。

上代

一 記紀時代の文字

我が國は「言魂の幸はふ國」(萬葉集卷五好去好來歌に「言靈能佐吉播布國」)とか「言魂の助くる國」(萬葉集卷十三「志貴島倭國者事靈之所佐國叙」)とか萬葉歌人が諡つてゐるやうに、古來より國語を重んじてゐた。國語に靈の力の存することを信じてゐた。しかし上代には一般に共通する文字をもたなかつた。崇神天皇の御代に任那が入貢し、垂仁天皇の御代には新羅王子天日槍が歸化し、景行天皇の御代には漢との交通があり、仲哀天皇の諒闇中には神功皇后は三韓を征平せられ給ひ、應神天皇の御代には漢籍が渡來し、その前後に朝鮮半島より歸化するものも多く、漢字を用ゐて國語を誌することが起つて來た。漢民族の徧く使用してゐた文字は性質を異にしてゐる我が國語をうつすには相當の困難があつたことは太安麿の古事記の序に由つても知られる。音韻の組織が同一でない。品詞の排列も異つてゐる。我

古京遺文

に存して彼れに無いものを如實に示すには、漢字の意義内容を顧みないで、唯字の形と音とを假りて表音的に示すより外に道がない。當時の金石文を集めた、古京遺文を繕いて見ても分る。

船首王後墓志に

生於乎婆陀宮治天下天皇之世

奉仕於等由羅宮治天下天皇之朝

至阿須迦宮治天下天皇之朝

婦安理故能刀自

元興寺露盤銘に

大和國天皇斯歸斯麻宮治天下阿米久爾意斯波羅支比里爾波彌已等世奉仕巷宜伊那米大臣
佐久羅韋等由良宮治天下名等已彌居加斯支夜比彌乃彌已等

甥名有麻移刀等已彌々乃彌已等

眞假名

に於けるが如く、人名・宮名等は漢字の形音ばかりを假りて現してある。かういふ類を眞假名と名づけ標音文字を用ゐたのである。これが發案者は誰なるか明かでないが、推古天皇の時代には相當ひろく用ゐられたらしく、大和河内の史部の人もかういふ仕事に與つたとも思はれる。或は菟道稚郎子皇子は漢文に御造詣も深くあらせられ、百濟よりは阿直岐・王仁の如き宏學の人がその頃來朝してゐるから、そ

漢吳音以前
の音

の時代まで溯ることが出来るかも知らぬ。

尙當時の字音中、移の字をやとよみ、里をロとよみ、宜をガとよみ、居をケとよみ、彌をノにつかつた如きは漢音でも吳音でもない。或は周代の古音と見做す人もある。（大矢透博士「周代古音」參照）唐時代の音以往の東晉・北魏時代の音（春日政治博士「假名發達史序説」參照）と見るべきか、その邊はまだ決定するに至らない。

漢字の使用が漸次盛んになつて來たので、我が國史も地誌も法典も和歌も悉くこれを以て書かれるやうになつた。それらが全部音字で書かれると發音には間違ひはないが、文字の數が多くなり、息字を用ゐると似たものと間違へ易い。古事記には音訓を交へて書いてあるので、特別に發音を要する文字には別に音字で註を加へて混淆を防ぐやうにしたところもある。

久羅下那洲多陀用弊琉（統字以上十字以音）

麗壯夫（訓壯夫云
鬱等古）

皇產靈（美武須臈）

四聲の標記

に於けるが如く、漢字には音と訓とを併用した。そればかりでなく、漢語は單綴語に屬し、我が國語は漆着語に屬する相違があり、隨つて漢字には一字に平上去入の四聲を分けたが、國語にはさういふ細かい差別は存してゐない。けれども古事記の神名に

宇比地邇上神 須比智邇去神

記紀時代の文字

記紀の假字
の相異

と發音に關する註を下し、一方の邇の字には小さく上と誌し、他の方には何も誌してないところを見ると、平聲と上聲とは意識して區別したものと見える。

漢字の形音の二つを假りて國語をさながらにうつす音字は場合によりてさまざまの漢字をあてゝ統紀するところが無いやうに見える。例へば素盞鳴尊の八雲の神詠でも、古事記には

夜久毛多都 伊豆毛夜幣賀岐 都麻基微爾 夜幣賀岐都久流 曾能夜幣賀岐袁
と書し、日本書紀には

夜句毛多菟 伊都毛夜霸餓岐 菟磨語味爾 夜霸餓枳菟俱盧 贈迺夜霸餓岐廻

と記してある。これを比較して見るに、兩書同一の音字は、夜・毛・多・伊・岐・爾の六字で、他は異つてゐる。その撰著の間が十年を経過してゐないのに斯くの如くである。尙、書紀だけに就きててもカ・キの二音を第二句・第五句には餓・岐とし、第四句には餓・枳としてある。これを萬葉集に徴してみると、（キ）の音を示すに

キの音の假
名

岐・支・伎・妓・吉・棄・枳・企・祇・紀・己・忌・歸・幾・機・基・奇・綺・騎・寄・貴
・癸

の諸字を以てしてある。これによりて考ふるに、同音なればいづれの音字を用ゐても差支へないとしてゐたのか、或は數多の人々により別箇にこれを試みたものか、或は或字に限りて一方の音字を用ゐ、他

の場合には別の音字を區別して用ゐたものがあるかも知れぬ。これを統制して單一化するには多くの年所を経なくてはならなかつた。

併しまた考ふれば、漢字を音字として假名に用ゐることは日本書紀神功紀より欽明紀までの間に引用されてある百濟記・百濟新撰・百濟本紀等には我が國の人名を音寫したものがあつた。例へば、

千熊長彦を職麻那那加比跪

襲津彦を沙至比跪

押山公を意斯移麻岐彌

河内直を加不至費直

などと誌してゐる例があるから、彼れに倣つたものか、或は我に創めたものを彼れが倣つて用ゐたものか速斷は出来ぬ。一派の學者が唱ふるやうに、朝鮮の吏道に據るとする説は彼れの年代より考へて首肯は出来ぬ。(春日政治博士假名發達史序説參照)

漢字を音字として用ゐた眞假名は一音一字のものが多く、三内撥音 m・n・r 及び三内入聲 p・t・k を有する有尾文字には難波をナニハとよむが如く、下に來る音と熟合して、我が國の一字を二音節に假用したやうな少數の例外もある。かういふ點を考へると、古人が當てた假名には相當の原據があつたものと見るべく、本居宣長が古事記傳の總論、假字の事の條に同音と考へられる假名の中にも、語に

假名遣奥山路

橋本博士の
考究

推古朝遺文
假名字母表

随つて使用する文字が定まつてゐるものがあり、コ₁の假名に許・古二字がある中に、子には古をのみ書いて許の字を用ゐることなく、メの假名に米・賣の二字を用ゐる中に、女₂には賣の字をかぎりと用ゐるが如き例十三四種を挙げ、書紀にも萬葉にも同様の事實があることを指摘してある。これにヒントを得てその門人石塚龍麿は假名遣奥山路を著し、

エ・キ・ケ・コ・ソ・ト・ヌ・ヒ・ヘ・ミ・メ・ヨ・モ

の十三音にも假名字に二類が嚴存したとなし、近時橋本進吉博士は「國語假名遣研究史上の一發見、石塚龍麿の假名遣奥山路について」を發表し、その所説を闡明して不動のものとした、春日政治博士は更にこれを推古朝の假名にも及ぼすべきとし、大矢博士の假名源流考を本として溫湯碑・露磐銘・丈六佛銘・繡帳銘・釋迦光背銘・上宮記・太子系譜中より所用の假名を摘出して推古朝遺文假名字母表を作つた。

漢字を意字として國語をうつすことにも我等が祖先は多大の努力を掃つた。山を「やま」、川を「かは」と訓する如きは容易であつたかも知れぬが、水神、即ち「みづは」といふに罔象を充て、人民即ち「あをひとぐさ」といふに蒼生の字を以てするが如きは随分困難な事であつたに違ひない。時代は違ふが、バンクに銀行の二字を宛て、ケミストリーに化學を宛てた明治時代先進の苦心も想ひ合はれる。記紀撰述者の斯學の上に遺した功績は著大である。

言語の雅俗
正訛の意識

言語は時所によりて變遷を生ずる。記紀・萬葉・祝詞・宣命・風土記等の古典撰修者は當時に於ける言語の雅俗・正訛・古今等に就き相當の認識を有してゐた。記紀に訓註を加へたものは多くは古語である。例へば

妍哉 阿那而惠夜

盟神探湯 此云區訶陀智

顧眄之間 美屢摩婆可利爾

の如きはそれである。古事記には

天鈿女命 古語天乃於須女

今俗強女謂之於須志此緣也

と見え、古語拾遺には古語（毀昨 古語阿波那智等）と指すもの二十餘を數へ、繼體紀には

謂海中島曲碕岸也俗云美佐那

と見え、欽明紀には語訛不正未詳などとあり、風土記には地名起原を述べ、その訛を説くところが少く

ない。古語拾遺には

今俗號稚子謂和可古是轉語也

今俗謂之掃守者詞之轉也

記紀時代の文字

などとなり、萬葉集東歌に至つては

筑波禰爾由伎可母布良留伊奈乎加母

(1) 降れる

加奈思吉兒呂我爾努保佐流可母

(2) 兒ら
(3) 布

賀美都氣野久路保乃禰呂乃久受葉我多

(4) 乾せる
(5) 嶺

可奈師家兒良爾伊夜射可里久母

(6) かなしき

等に於けるが如く俚言を多く交へてあること一々擧げるに堪へない程である。

二 宣命書

漢語には國語と違つて用言の活用語尾變化といふべきものがなく、助辭の如きも極めて乏しい。従つてこれらを漢字で寫さうとすると、非常に不都合を生ずるので、古代の詔勅たる宣命を書くにはそれらを音字で小書にする方法が我等の祖先によつて夙く案出された。續日本紀に載つてゐる六十二の宣命文はこれらを小書にする所謂宣命書を用ゐられてゐる。その第一詔文武天皇御即位の宣命の

貴^支高^支廣^支厚^支大命^乎受賜^利恐坐^可此乃食國天下^乎調賜^是天下^乃公民^乎惠賜^比撫賜^{牟止}隨神所思行^{佐久止} 詔

天皇大命^乎諸聞食^止詔

に於ける如く、形容詞の語尾の「き」、動詞・助動詞の語尾「り」「ひ」「て」「む」「さく」及び助辭の「を」「の」「と」「なも」の類を上の子の下右によせて細書する形式を用ゐて、その混殺を防ぐに便じた。

同書第十詔には

不忘不失表^{等之互}

宣命書

第二十六詔には

乾政官大臣^{仁方}敢^天仕奉倍^支人無時^波空^久買^月在官^{爾阿利}

第二十七詔には

不言^{佐辭}辭^母言^奴不爲^{岐行}爲^母奴

第二十八詔には

今^乃勅^乎承用^{與先爾詐}天^{勅止稱}天在事^乎承用^{流已止}不得^止云^天

第五十九詔には

其仁孝者百行之基^{系利}

宜命小書に
關する意識

等に於けるやうに種々區別してゐる。受身・使役・打消・意欲・未來及び推量の「べし」「や」「之」。「者」の如き助辭は小書にしてないが、辭及び語尾變化といふ意識があつて、以上の如き發展を示してゐるのである。萬葉集には小書にはしてはないが、辭といふ名辭は用ゐてゐたことは大伴家持が天平勝寶二年に詠んだ

萬葉人の氏
爾波の意識

我門從喧過度霍公鳥伊夜奈都可之久雖聞飽不足

の左註に「毛能波氏爾乎六箇辭闕之」とことわつてあるので知られる。蓋し普通には多く用ゐる辭をこの歌にかぎり特に使用しないで、一首を仕立てたことを知らしめたのである。

三 上代中古に於ける辭書

汎く單語を集め、その意義を註し、必要に應じて引き出すやうにしたるものは辭書である。これを座右に置けば師傳に代りておのが用を資ける。漢字の使用頻繁なるにつれてその類が生み出される。支那には夙く説文があり、玉篇がある。これらは字形引で、切韻や廣韻は韻引であり、爾雅は意義を部門引にしたものである。それらの書は夙く我に渡來した。

隋唐との交通が盛んなるにつれ、留學生・學問僧の彼の邦に渡るものも少くなかつた。中に空海は平安初期に於ける最も卓出した善智識であつて、東洋修辭學の嚆矢とも見るべき文鏡祕府論や文筆眼心抄を著したが、別に篆隸萬象名義三十卷を著した。この書は玉篇に據つたものであるが、本邦人の手に成つた現存字書中最古のものであつて、永久二年六月に書寫された一本が梅尾高山寺に存し、近年に至り刊本となつた。

篆隸萬象名義

玉篇

顧野王の玉篇は夙く支那には亡んでその一部分が我に残存してゐるに過ぎないが、この書は支那の六朝及びその以前、また我が奈良朝前後の漢字研究に大切なものである。

上代中古に於ける辭書

東宮切韻

菅原是善の東宮切韻は十三家切韻を集めて一家の作となしたことが江談抄に載せてあるが、今は傳はらない。尤も岡田希雄氏によれば、菅原爲長の和漢年號字抄に多く引用されてゐて、その形が觀察されるといふ。それは後に詳説する。

楊氏漢語抄

古く養老の頃に楊氏の漢語抄を始め、他にも何々の漢語抄などいふ書もあつた。また辨色立成などの書も楊氏の漢語抄と共に倭名鈔に引かれてあるが、今は全きものはない。

新撰字鏡

これに亞いで釋昌住の新撰字鏡がある。この書は寛平中に始めて稿を起し、昌泰中に増して十二冊となした。その一部は群書類從卷四九七に收めてあるに過ぎなかつたが、安政三年に至り天治元年五月の全き寫本が現れ、後明治の御代に至りてその全本が刊行された。この書は漢字の偏旁によりて大體分類された辭書で、偏旁の數百六十、文字の數二萬四百六十字、これに小學篇の字四百、二合字・重點字を合せ、二萬九百四十字となる。玄應の一切經音義に基いて編み、後、文華秀麗集・小學篇・本草等の文字を加へた。本邦及び支那の字音研究、我が古語の研究、假名の字體研究などに缺かれないもので、偏旁の順序は天・日・月・肉・雨・風・七・連火・人・イ・親族・身・頁・面・目・口・舌・耳・鼻・齒・心・手・足・皮・毛・色・病・骨・尸・女といふ如く、天象・人間といふが如き部類分によつたもので、畫數の多少によらない。尙、卷十二は別に雜字・重點・連字・臨時雜要字・載九章・舍之章・農業調度字・男女裝束及び資具等名之字・馬調度名之字・木工調度之字・田畠作名之字・諸食物名之字・機

小學篇の字

調度及び織物名字・海菜名之字の如く、事項分となしたもので、當時の生活並びに文化に關する文字を一目で知ることが出来る。小學篇の字といふのは

編纂者 梓阿豆佐

茶伊太止利 神佐加木

の類で、漢字典には見えない文字である。重點といふのは文筆眼心抄に重字とあると同じく、洵々・浩々の如く同字を重ねた語、連字といふのは文筆眼心抄に疊韻双聲とあるに同じく、また色葉字類抄に疊字とあると同じ類にて苗裔・不肖・沛然等の語を稱してある。

倭名類聚抄

倭名類聚抄は源順が醍醐天皇の皇女勤子内親王の令旨を奉じ、承平年間に著したもので、十卷本・二十卷本・五卷本がある。十卷本は原形を傳へたもの、二十卷本は後人の増補したもの、五卷本はその合冊で、十卷本は天地部・人倫部等二十四部百二十八門に分ち、二十卷本は四十部二百六十八門に分けてある。漢語に一々出典を挙げ、漢文にて注し、萬葉假名で和名を挙げ、國語と關係が深く、日常に便益の多い辭書で、その編纂に方りては辨色立成・楊氏漢語抄・延喜新抄・倭名本草・日本紀私記・類聚國史・萬葉集より、支那の唐韻・四聲字苑・兼名苑・說文・廣雅・切韻等多くの書を引いてある。狩谷棧齋の箋註倭名類聚抄は、これが研究に劃期的なもので、校異二冊がある。棧齋の研究は文政十年五月成稿、明治十六年印刷局で出版された。

上代中古に於ける辭書

類聚名義抄

これに次いで成つたのは類聚名義抄十一卷である。菅原是善の作と傳へてゐるが、それより降つて後一條天皇より堀河天皇の頃までに成つたもので、全卷を佛法僧の三卷に分ち、三萬に上る漢語を扁旁によつて類別し、片假名を以て音訓を注してある。觀智院本は正音は朱書し、和音は墨書し、反切を示し、清濁を次の如く點によりて分ち、右旁の一點を以て清音をあらはし、二點を以て濁音をあらはしてゐる。

清・濁

また所々音の高低をも示してある。扁も人部より始まり、酉の部に終つてゐるなど、説文にも玉篇にも見ない序列である。假名にも

古體假名

于ウ しキ ハス テテ 戸ホ 下マ アミ 与ヨ 赤ワ

名義抄の異本

の如き古體を用ゐてある。この書は一に三寶名義抄とも、三寶字類抄ともいふ。觀智院本は建長三年の寫にかゝり、近年複成が出来た。その外に西念寺本・梶尾本・蓮成院本がある。小山田與清は天保四年これをいろは順に排列し、類聚名義抄索語九と題した。

伊呂波字類抄

平安朝時代の末期に至り橘思兼の伊呂波字類抄が成つた。この書は天養から治承まで三十餘年を費して稿を了へた國語辭書で、解釋の爲といふより表現の爲に撰まれたものと見るべきである。排列は語頭の音によりていろは引とし、各部を更に天象・地儀・植物・動物・人倫等二十一に分け、各語は漢字で示し、音訓共に片假名で記し、所々解釋も加へてあるが、出典も示してない。二卷本・三卷本・十卷本

がある。中に二卷本は長寛の頃脱稿したもの、三卷本はこれを増補して治承の頃に成つたもの、十卷本は後人の増補にかゝる。從來世上に流布してゐた。三卷本は前田侯爵家に上下二卷だけ存し、近年覆成され、二卷本は永祿八年の寫本が前田侯爵家に存し、黒川本が復成され、十卷本は色葉字類鈔と題し、古典全集に收めてある。

以上が平安朝時代に成つた字書の主なるものである。最初は漢字ばかりで出来てゐたものが、音訓に假名を用ゐるに至り、更に進んで國語を旨とする辭典の發生を見るに至つたのである。さうしていろは引になつたのは一段の進歩である。

四 眞假名の發達

大寶戸籍帳
に見える假
名の字母

漢字を音字に假りて國語を表記したことは既に述べたが、尙、その發達を検討して見るに、推古天皇時代_{に於ける}金石文には單に地名・人名・宮號・氏族名等の固有名詞に限られ、記紀には歌謠の部に主として使用されてゐたが、記には字母として用ゐられた漢字は多くはないに、紀にはその數が頗る多く、且字劃の繁なるものを採つた傾がある。大日本古文書に收めてある大寶戸籍帳に見ゆる固有名詞は概して字母が少い。これは紀は外國の史書に對し特に莊重にかきあらはす意圖の爲に特にむづかしい漢字を用ゐ、戸帳の人名などは平易を喜ぶ民衆の常用する爲に自ら簡易のものを用ゐたと見るべきであらう。尙、戸籍帳にはム(ム)・マ(ヘ)・ツ(ツ)等の略體文字を混用し、村を寸に作つたり、日下を早に作つたりする略體や合字をも混用し、との如き躍字も使つてある。孰れも一音一字のもので、他と紛れる處はない。

萬葉の用字
例の複雑

然るに萬葉集を見ると、その用字例が極めて複雑となつてゐる。卷五を始め十四・十七・十八・二十の卷々には一音一字式を以て表してあるが、その他は音訓併用式で、而もその訓には正字を當てないで

假借がある。その音には新古をまぜ用ゐた類もある。氣は古くはケばかりであつたのをキとも用ゐ、都はツの外にトにも使つてある。訓に於ても、麻に朝を、現に卯管、「見つる」を「見鶴」、「來座す」を「來益」と書く類が少くない。一字を音にも訓にも用ゐるものもある。麻はマともソともヲとも使用してある。海藻をメに、羊蹄をシに充てゐるが如き二字を一音に用ゐたものや、「潜り」を「八十一里」と書いたり、「出で」を「山上復有山」と書いたりするやうな遊戲的技巧を用ゐたり、その用字は單一化とは反對に様々の字母を使ひ、時に漢文にまがへて文字を轉置したり、或は國語に大切な耳爾波を省いたりしてゐる。これは撰者もしくは作者が文字を弄したもので、おのが漢字の力に任せ、趣味的遊伎的に考へた結果である。春登上人の萬葉用字格を見ても一つの音にくさんくの字母を使用した跡が分る。その多いものは一音で清濁合せて三十餘字に上るものもある。同じ萬葉集の中でも詠まれた時代の新しいものに一音一字式にあらはしたのはその表現の簡易化を考量したものと思ふ。これが次第に平假名發生の導きとなつた。

五 平假名の發生

天長の成實論の假名

こ・し・ち・ぬ・ま・む・め・あ

金剛般若經讚述の假名

こ・し・た・ま・ゐ

天安の大智度論の假名

お・か・く・け・こ・し・せ・た・つ・と・は・ひ・や・ゆ・ら・る・ゐ

元慶の地藏十輪經の假名

え・お・か・く・こ・し・そ・た・ち・て・と・は・へ・め・ゆ

音字に假用した漢字は字割が多いのが普通であつて、これを書寫するに煩勞を感ずるので、次第に草體にくづつて書くことが行はれて來たのは自然の結果である。最初は誰が始めるともなく、所々で各人が多少これを試みたものであらう。その時代は平安初期と見るべく、天長五年の點ある成實論中には

の假名があり、嘉祥四年の點ある金剛般若經讚述_下には

の假名があり、天安二年の點ある大智度論には

の假名があり、陽成天皇の元慶元年の點がある地藏十輪經には

の假名がある。斯くの如く僧侶が佛典を讀むに草字にくづした數十の平假名を用ゐたのを見る。斯く訓

貞觀の戸籍帳

點資料以外にも貞觀九年讃岐國戸籍帳に記入された大屬有年の文も發見された。紀貫之が承平四年に書いた自筆の土佐日記を定家卿の臨摸したものも粗々今日の草假名の字體に近い。文鏡祕府論や篆隸萬象名義を書いた弘法大師が、いろは歌を書いたといふ傳説もかなり古くからある。凌雲集所載の仲雄王の「謁海上人」と題した詩に

字母弘三乘 眞言演四句

伴信友の空海説

大矢氏の説

とあるのを徴として伴信友は空海説を主張し、大矢透氏は天曆時代に於ける源順の天地の歌が、四十八字の無同字の歌から成り、源爲憲の口遊に載せてある太爲爾歌が四十七字から成る無同字の歌であるから、いろは歌は太爲爾の歌と同じく四十七字の無同字歌で、つまりあ行のエとや行のエとが混一した後のものと見て、それより後のものと云つてゐる。

いろは作者に關する諸説

尙古來いろ／＼の説がある。

(一) 河海抄引く所江談抄

イロハニホヘトチリヌルヲ 護命僧正作。

ワガヨタレゾよりエヒモセズまで弘法大師作。

京。傳教大師作。

(二) 明魏の倭片假字反切義解

平假名の發生

弘仁天長年中弘法大師釋空海造四十七字伊呂波イロハ。

(三) 一條兼良の日本紀纂疏

和字則起于弘法大師空海。

(四) 良鏤のイロハ天理抄

弘法大師作、延暦十六年歟。

(五) 釋如得のいろは抄

文字歌共に弘法作。

(六) 岡島隆紀の假名考

空海説と聖德太子説。

(七) 僧全長の伊呂波字考錄

四句の文を和解することは動操護命空海等、平假名は空海一人。

(八) 多田義俊の伊呂波聲母傳

空海。

(九) 岡村良通の國隸原

簾中抄を引き、護命空海の作。

(一〇) 諦忍の以呂波間辨

歌は空海、文字は神代より。

(一一) 平澤元愷の謨微字說
空海説を否定す。

(一二) 柿原芳野の文藝類纂

(一三) 黒川眞頼の碩鼠漫筆

空海説否定。

六 片假名の發生

片假名は經文や漢籍を訓讀するに方り、その旁に記入して誦讀にたよりあらしめた略體假名で、眞假名の形態を極めて簡單にくづしたものである。

倭片假字反切義解の説

聖語藏御本の眞假名の研究

その作者に關し、吉野朝時代の明魏法師が倭片假字反切義解に始めて吉備眞備説を唱へて以來、その説を信するものが少くないが、それよりも少し降るやうである。大矢透博士は假名遣及假名字體沿革史料に重要な參考資料を提供された。春日政治博士によれば、正倉院聖語藏御本の景雲寫の根本説一切有部毗奈耶・同苾芻尼毗奈耶古點の如きは眞假名字母三十五あるに對し略體字母は(イ・小・ヲ・モ)四つだけであり、唐寫阿毗達磨雜集論古點の如きは六十四五の眞假名字母に對し三十前後の略體字母を有するに過ぎないといふ。

天長點成實論に於ける片假名

大矢氏の擧げられた天長五年點成實論は、平安寛都後三十年のものなれば、奈良朝末期のその萌芽を見、平安朝の初に至り成立したと見るべきである。成實論には

アにア、イにイ、ウに子、エにエ、キにレ、ケにハ、スにス、タに太、トに止、ナに小、ハにハ、

靈異記に於ける假名字體

ハにフ、ヘにフ、ホにホ、ミにム、モにニ、ラにリ、ルに尸、レに多、ワにホ、ヲに、その他デに天又豆、マに万、メに目、ヤにや、ユに由、エに江、井ニぬ、エにあなどをを用ゐてあるところを見れば、當時猶真假名の草體をも用ゐてゐたことが分る。

また沙門景戒が撰んだ日本國現報善惡靈異記に附してある語釋によりても省畫省字が徐々に用ゐられていつた跡を想像することが出来る。

測 多波加利

倅 去々ロウ古又

偉 タ、波シ久

慌 ゲレテ

馴 名ツ岐

竹 ノツしチ

過 スミヤカ爾

覆 カヘ爪

尚、字母の單純化につれて濁音假名の失はれたことが、奈良朝末期に加へた經典の點と平安朝初期に於ける經典の點とによりて知ることが出来る。而して後世ほど一定の字母をとるに至つたのは天曆以降のやうである。

七十五音圖

第五韻次第

漢籍や佛典が入つて以來、國語の意識が進歩したことは既に述べたが、平安朝に至り音圖の出來たことは特記すべきである。當時はこれを五音と呼んだ。大矢博士が音圖及手習詞歌考に紹介された五韻次第（芝葛康が寛文五乙酉五月初日に寫した谷森善臣氏の複寫本）にはその初に眞假名を以て、今日行はれてゐるものと同じ排列であると記されてある。

阿 𑖀 伊 𑖄 烏 𑖅 衣 𑖆 於 𑖇

可 𑖈 枳 𑖉 久 𑖊 計 𑖋 古 𑖌

左 𑖍 之 𑖎 酒 𑖏 世 𑖐 楚 𑖑

多 𑖒 知 𑖓 津 𑖔 天 𑖕 都 𑖖

那 𑖗 余 𑖘 奴 𑖙 祢 𑖚 乃 𑖛

波 𑖜 比 𑖝 不 𑖞 倍 𑖟 保 𑖠

摩 𑖡 弥 𑖢 牟 𑖣 咩 𑖤 毛 𑖥

梵字形音義

夜	以	由	江 ^盛	与
羅	利	留	札	呂
和	爲	于	惠	遠

これは我が國悉曇中興の祖と仰がれる明覺の「梵字形音義」中の五十音圖とは殆ど一致してゐて、五音圖の古きものには違ひないが、中に云つてある音圖相承の次第は史實に合はない點があり、天台の良源の傳本と見るには異論がある。

反音作法

また明覺が寛治七年十二月に著した反音作法は嘉保二年の寫にかゝる神尾本、嘉曆三年の寫にかゝる田中勘兵衛氏本と觀智院本との三様があつて、縦の順序は五韻次第と同様であるが、横の次第は阿・加・夜・左・多・那・羅・波・摩・和となつてゐる。

孔雀經音義

醍醐三寶院藏孔雀經音義は寛弘より萬壽頃の寫しと云はれてゐるが、その末に附してある音圖はア・ナ・ラ三行を缺き、縦の順序も

キ	コ	カ	ケ	ク
シ	ソ	サ	セ	ス
チ	ト	タ	テ	ツ
イ	ヨ	ヤ	エ	ヨ

五十音圖

上代

ミ モ マ メ ム

ヒ ホ ハ ヘ フ

キ ケ コ ケ ウ

となつてゐる。斯くの如く排列は本によりて區々であつたが、オ・ヲの所屬は亂れてゐない。その錯つて來たのは鎌倉以降の事に屬する。

五韻次第は僧侶の手に成つたもので、五音の起るところを説き、詞の相通の次第・新濁・本濁・四聲等・言詞音韻に關することを述べてあり、反音作法は内外典をよむに當り、音の發生を反切によつて鮮明することを主としてあるが、その中にある音圖制作の目的は今日一般の思惟するやうに當時の音聲表として作つたものか、本居宣長の漢字三音考に云つてあるやうに悉曇字母によりてその學の爲に作れるもので、皇國の語音の爲にしたものではないとするか、橋本進吉博士が説の如く、「外國語學殊に漢字音の反切の爲に作られ」たとするか、その作者も山田孝雄博士の五十音歴史に説かれた如く、遠く吉備眞備時代に溯り、漢字反切の用にその道の學者たちが、外國の思想によらないで用ゐ來つた反切法によつて作つたとするか、種々の問題が湧いて來る。管見には悉曇の智識ある學者が我が當時の音韻の大概をも考へて反切用に充てる爲に作つたものと思ふ。

元來反切といふものも印度の經典を支那譯にしたるを讀解する爲に設けられたもので、悉曇に交渉が

音圖制作の
目的

漢字三音考
の說

橋本進吉氏
の說

五十音歴史
の說

悉曇の研究
史

ある。

圓 仁

圓仁慧覺大師はこの學を起したもので、三代實錄貞觀六年の條に

學西天悉曇、聲韻分明、千古所疑、一時冰釋

安然の悉曇
藏

と誌されており、その弟子安然は清和天皇の勅を奉じて悉曇藏を撰み、この學の冠冕であり、稍、後れて明覺はこの道の泰斗であつて、悉曇要訣・悉曇大抵・梵語抄等の著がある。安然より明覺に至る間に音圖は成つたものかと思ふ。

音圖と悉曇
との關係

音圖が悉曇と關係あることは悉曇が十二の摩多即ち母韻と三十五の體文とを合せて成る。體文は今日の破裂音と鼻音とに相當する二十五の五類聲と半母音・摩擦音及び流音にほゞ該當する十の遍口聲から成る。これを合すると四十七音となり、五類聲の加・者・多・那・波・麼に遍口聲の也・羅・嚩を順に列ねると、我が音圖のカ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワの順序を得る。これを比べて見ると、悉曇と我が五十音との密接の關係のあることが了せられる。これが作者は悉曇家に擬する所以である。而して源順の倭名鈔天文本の首に出した音圖を字切といひ、反音作法といひ、反切に用ゐられてゐたことより、却つてこの爲に創作されたやうに思はれるに至つたと見るべきであるまいか。

明覺の悉曇
要訣

明覺は悉曇を鮮明する爲に和漢の例を引き、言語の根本原理を説いた。悉曇要訣は悉曇を説くが主で

方域による
言語の差異

あるが、國語の原理を示した。言語は方域によつて差異のあることを

本朝北州風強人剛、故其音濁鹿矣、越中越後ニモリヲホリトイヒ、イヒモルヲイヒホルトイフ。南州其

音柔也。

階級による
言語の差異

と叙し、時代によつて變遷あることを認め、王城の人の語は他國語を學んで展轉改變し、古語は却つて
田舎に存すといひ、また階級によりて言語の相違あることを指摘し、

下人サシスセソヲ云ニタチツテト一ト、サルベキラ云ニタルベキ一、スルヲ云ニツル一ト、シリテヲ云ニチリ

テ一ト、セメテヲ云ニテメテ一ト。

音韻の組織

例を引いてゐる。音韻組織に關しては

以ニ梵文意竊案之、以ニ九字ニ爲レ經、以ニ五字ニ爲レ緯、織ニ成四十五字一

堅讀ニ五字ニ爲レ紐、横讀ニ九字ニ爲レ韻、大唐天竺於ニ此韻紐、或有ニ通用一、本朝或通用時

相通説

といひ、天竺は紐音が多く、唐土は同韻が多く、我が國は人多く堅の五音は通用し、横の韻は通用しないと云ふは誤なることを辨じ、「書キテ」を「書イテ」、「ムラアメ」を「ムラサメ」、「ナマイネ」を「ナマシネ」といふが如き横の相通の例を挙げ、韻通音通はいづこに於ても同様なことを説いてある。また「デノゴイヲタノゴイト云ヒ、フネビトラ云フナビト」類は同聲であるので通用すると説いてゐる。

この相通説は鎌倉及び室町時代の語釋に屢々用ゐられた。尙、悉曇の研究史は別に説くべきである。

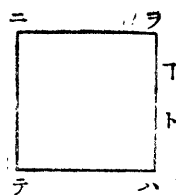
八 點 圖

漢籍及び佛典を訓讀するに、漢字の四聲點の如く、文字の四隅上下等に種々の符をつけてよみ方を示

すことは片假名と同じく平安朝の初より行はれた。王朝時代に於ける博士家また僧家にも用ゐられた。これをヲコト點譜といふ。例へばその普通なるものは上圖

ヲコトハ點

博士家及び
僧家の點



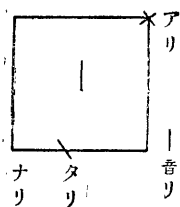
に示すが如く、右傍の文字を縦に訓みてヲコト點またヲコトハ點といふ。

群書類從卷四九五また榊原芳野の文藝類纂にも收めてある。この點圖は博士家に於ても菅家と江家とで別があり、寺院に於ても各寺で異つてゐた。蓋し師傳を

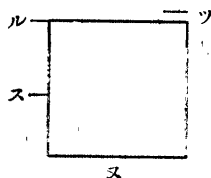
吉澤博士の
研究

重んずる祕密性から自ら異同があるのである。この研究を深く究められたのは吉澤義則博士で、氏は昭和二年十一月狩野博士の還暦記念に際し、王朝時代に於ける博士家使用のヲコト點譜十八種を支那學論叢に寄せ、後これを國語說鈴に收められた。

宇多天皇宸翰周易抄御點

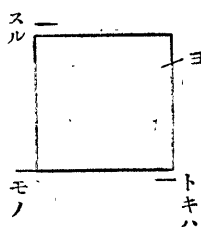
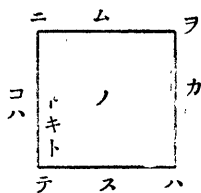


訓



(以上はその一部を
取り合せて出した)

延喜時代に於ける岩崎 庫所藏尙書點



(同 右)

天爾乎波

此の如くその式が様々であるが、その普通なものゝを左の下端より同上端に、次に右の上端、次に下端に及ぶやうに訓めばテニヲハとなる。随つて助詞をてにをはともまたをこと點とも呼ぶことになつた。この天爾乎波はまた略しては天爾波ともいふ。順徳天皇の八雲御抄卷六用意部に「てにをはといふ事」といふ一節があり、當時既にその用法に注意されたことが分る。和歌連歌の上にてにはの使用に深く注意されたことは後に述べる。

九 古典研究より起つた語學

日本紀開講

日本紀は我が古典として最も大切なものゝ一つで、古來朝廷に於てこれを重んぜられたことは一方でなかつた。撰修の翌年養老六年からその道の博士に命じて開講させられた。養老の初度から村上天皇の康保二年まで七回行はれたことが國史に載つてゐる。大臣以下の官人がその筵に列りて講を聴き、その満了に方りて竟宴を行はれ、史中の人物を題としてこれを詠じたもので、その歌を集めたものが日本紀竟宴歌集であり、開講の博士が研究の要項を録したものが、所謂日本紀私記である。この開講が國體の明徴、國民精神の作興に力あつたことは云ふまでもなく、また古典研究の導火線となつた。源順の倭名鈔にはこの私記を引くところが少くない。弘仁私記の一部は今に存してゐる。また文永の頃に成つた卜部懷賢の釋日本紀中に引用されたものもある。

弘仁私記

この開講から解釋學の個々の原子が拾ひ出される。またその中には百二十餘の歌が入つてゐるので、それらの特別な詞の性能を説いた表現學上の因子も混在してゐる。我が國に特有な枕詞に關しては次の詞を云ひ出すためにまづ發する詞としてこれを發語と命じてゐる。「つぎねふ」は山城を詠まんとする時

發語

敬稱
對稱・他稱
の區別

五音相通

に、「あをによし」は奈良を云ひ出さうとする時に、「百足らず」は八十をいはんが爲に置くことを説いてある。今日は枕詞の中に數へてゐる「うまし稻」の「うま」、「玉きはるうちの朝臣」の「たま」の如きは寝詞と名づけてゐる。また兩親の義である「かぞいろ」といふ語も面對の時は「かぞいろの命」といひ、姉といふ語も面對の時は「なねの命」といひ、否らざるときは單に「いろね」といふと斷つて敬稱を認め、今いふ對稱・他稱の一部を認めてゐる。天折の二字は「あからさまにす」と訓すべく、「あからさまにせしむ」と訓んではならぬといふが如きは、能動と使役相との區別を實地に區別した類が認められ、更に釋日本紀には悉曇語學の影響を受け、五音相通・同響・縮詞・略語・體詞等の名目をも見るに至つた。

「いそのかみ」(石上)を「いすのかみ」といひ、「あめなるや」(天在や)を「あもなるや」と云ふが如きは五音相通で、潮を「うしろ」と呼ぶが如きは同響、「こやせる」は「寝臥せる」の縮、「めで」は目出の略、「吾は苦しゑ」の「ゑ」の如きは體詞と名づけてある。

十 歌道より起つた語學

以上は古典研究から發生した國語學の胚芽であるが、これと共に和歌の上にも同じ機運がめぐり來た。

歌 合

奈良朝の末期光仁天皇の寶龜年中に藤原濱成は歌經標式を撰み、六朝詩學に倣つて歌の形式を説き、病犯を論じた。平安朝に至つて喜撰式・孫姬式・石見女式が生じ、それより真正の歌學が生れて來た。共同的に作を試み、互ひに批評をなす歌合が元慶の頃に起り、寛平の頃やうやく盛んとなり、その優劣を判じ、勝負を定める爲に歌學が隆盛となつた。その判詞を味讀すれば、修辭學・國語學等の重要な要素をその中に包含することが分る。

和歌十疊

壬生忠岑の和歌十體、藤原公任の新撰體調等は修辭學の方面のものであるが、藤原仲實・同範兼・藤原清輔・顯昭等が著作は古歌の解釋に關するものが主となつてゐる。

萬葉の調點

村上天皇が源順等五人に命じて禁中の梨壺に於て萬葉の調點を施さしめられたのは日本紀開講と軌を同じうするものと見られる。雄略天皇御製の「籠毛與美籠毛知」が「カタマモヨミカタマモチ」と訓せられたのもこの時である。

歌道より起つた語學

古點と次點

最初の訓點即ち古點について次點を試みた人々には藤原道長があり、藤原敦隆等がある。これらは點だけで説明は添へてないが、源俊賴以下の歌人の書には長文で注解を試みてゐる。まづ俊賴の山木藍麴一名俊賴祕抄には「賛すとも」「野守の鏡」「鬼のしこ草」「豐はた雲」の類百十語の解釋を試みてゐる。

和歌童蒙抄

藤原範兼の和歌童蒙抄は卷十ばかりが純粹の歌學に屬するものであるが、首から九卷は天象以下獸魚鳥蟲等事項分にして古歌を釋してある。一面から云へば歌の分類した辭典と見られる。

奥儀抄

六條家の清輔の奥儀抄三卷中初の方は歌學を彙類してあるが、末には古歌五十首、後撰集四十九首、拾遺集二十一首、後拾遺集三十八首の難歌を釋し、顯昭の袖中抄には「ひをりのひ」「おにのしこ草」「あちむらごま」「ひぢかさあめ」「もすのくさぐき」「かびやかした」の如き古歌の難解の語句を考説してある。

綺語抄

これらの注釋書とは別に歌の字典としては範兼・清輔等の先輩であつた藤原仲實の綺語抄が三卷ある。その成立年時は明かでないが、仲實の歿したのは保安二年であるから、大凡の時代が推測出来る。この書は部類を天象・時節・坤儀より動物・植物に至る十七の部門に分ち、各部に屬する語を萬葉・古今・後撰等の歌集から例證を引き、簡單に説明を加へてある。その解義には一見して首肯しがたいものも多いが、とにかく歌の辭典として史的にながめて値のあるもの。純國語的辭書である伊呂波字類抄に先ちて成つたものである。

なほこれに先ちて成つた能因法師の歌枕の如きは歌學上より見た一種の名所地誌の嚆矢とも云ふべきものである。

和歌色葉抄

平安末期の歌學を綜輯した觀がある和歌色葉抄は上覺の撰であつて、後の八雲御抄の先驅をなしてゐる。これには通用名語に對し、夥しい活用言を擧げてある。これらの歌學書における解釋には悉曇に云つてある相通説が屢々適用されてゐる。素よりこれより先の古典にも古事記に伊弉美といふ山城の地名を今伊豆美といつたり、日本紀に梅豆羅といふ地名を今松浦といふ類を擧げて轉訛としてゐるが、こゝにより同行同列の相通などを考へた。

反音抄

見治七年の反音抄にア・イ・ウ・エ・オの五字は諸字の通韻で、阿字はカ・ヤ・サの響、伊字はキ・イ・シの響などと説き、五韻次第には音の發生を説きて、

アイウエオ ナニヌノ 初後相通

マミムメモ ラリルレロ 二四相通

ヤイユエヨ ワヰウヱヰ 二五相通

を示し、清濁を論じてある。藤原教長の古今集註には

タテの二字ハ舌内ノ一音ナレバ云々

ラレロルリハラナジ五音ナレバ云々

歌道より起つた語學

清輔の奥儀抄には「いそのかみ」を「いすのかみ」と云ふ條には

五音の字なればかよはせるにや。

と見え、顯昭の袖中抄には

クトカト五音通也。

など同行にての相通を説き、同書にはまた横の通に關して

めとわと同ひゞきなり。

など述べてある。これは國語の解釋に關するもの、表現に關しては歌合の判の詞にも屢々見えてゐる。

歌の吟味に關しては

承暦二年内裡歌合二番

十二番歌合判

俊賴口傳鈔
清輔の和歌
初學抄

の如きが最もよくあらはれてゐる。詞の連續に關しては、俊賴口傳抄三十二歌詞の條などその適例を示したものの。詞の正雅鄙俗などの選擇に關していろ／＼と述べたところがある。特に清輔の和歌初學抄の如きは表現上當時に於て最も見るべきものであつて、中によせ、秀句、似物、喻來物等の名を以て力ある表現の諸例を擧げてある。

一語に兩義をこめたもの。例へば浪速に「何は」をよせ、鳥羽に常をいひかけ、「着し」に岸を云ひかけ

るを秀句といひ、一つのことを説くに別の表現を用ゐ、「數多き」といふ義に「濱のまさご」といふが如きを喩來物と稱し、また或詞を強張する爲に花を「錦」といひ、螢を「川邊の星」といふが如きを似物といひ、一の語に對し相關するもの、例へば日に對しては照し、かゞやく、さす、入る、影の如きを縁語と呼び分けてゐる。これらは和歌に於ける力ある表現上より國語を分類したものである。

この他數多き歌合の判詞には和歌式などにより、これは同字同聲病とか嫌詞なども擧げてゐる。これらは表現病理學の要素をなすものである。

十一 古典の研究に見えたる語學

鎌倉時代に於ける註釋家の双璧とも見るべきは、仙覺律師と下部懷賢とであらう。懷賢は日本紀の研究に、仙覺は萬葉の註釋考勘に一生をゆだねた。

仙覺は萬葉の用字法を検し、眞名と假名と正字と假字義讀との四つとなし、古點・次點を整理して新點を加へたものも少くない。先進の訓讀により古典の徵證により新たにこれが註釋を作つた。

諷詞 概するに新意に満ちた人、語學の上に於ても枕詞の如きも諷詞と名づけ、語幹に添加する接頭辭の如きも、例へば「たなびく」の「た」の如きを從來の歌學者間に用ゐてゐた體の詞の名を廢してたすけ詞

また詞の助と名づけ、重點の詞、例へば愈の意なる「いよく」の如き、すべて重ねる場合には重ねる語の首の音を略くのがきまりと説くなど新見がある。悉曇にも通じ、明覺の説を甘なひ、語釋をなすに、切りに相通をふりまはしたもので、豎の相通を五音相通・同内相通・親類相通の名を用ゐ、横の相通を同韻また同韻相通と呼び、あ行の韻を本韻、その他の韻を末韻と呼び、更にあ列の音を男聲、その他の音を女聲と稱し、國語の理法を無視して傳會の説を立てたところも少くない。例へば「な」の音を釋し

て

「ナ」の詞ハ男女トモニ通ヘリ。男ヲ心サシテイヘル「ナ」ハ上聲、女ヲ心サシテ云ヘル「ナ」ハ

平聲ナルベシ云々

とか、富士の芝山の義を釋して、

富士トハ火シゲシトイフコトバ也、ハヒフヘホ共ニ火界ヲ結ベル詞ナレドモ「フ」ト云ヘルハ黑色

ヲ顯ス詞ナレバケブリニ象レルナルベシ云々

といつたり、言左敝久韓とつゞける枕詞の左を右と誤つてある本により牽強の説を立てゝある如きが雜つてゐる。

ト部懷賢

懷賢は私記の考説、師説、風土記等による先進の説を參酌し、五音相通・同響・略字・音の添加など説いたが、仙覺に比し保守穩健の説が多い。

十二 鎌倉室町時代の辭書

字鏡集

鎌倉時代に於ける辭書としてはまづ第一に字鏡集を挙げねばならぬ。菅公の後裔である菅原爲長が寛元の頃に著したものと云はれ、卷數二十、しかし七卷本もある。字形引の字書で、漢字を冠扁旁に従ひて彙類し、それを天象・地儀以下雜事部に至る十三部に次第し、各字には右肩に所攝の韻字を記し、下に反切を挙げ、その下に音・訓を悉く片假名にて註してある。その體裁辭書編纂史上注目に値するものがある。鎌倉時代の古辭書としてその時代の國語研究に重要なものを收めてあるが、また普通に用ゐない文字を收めてあるものが多い。

寛元の奥書本があり、應永の寫本がある。近年野口恒喜氏が三本を校合して稀觀書刊行會から出版し、別に字訓索引一卷を添へた。（字鏡類字抄出・一卷・綠川眞澄參照）

平他字類抄

同じく鎌倉時代のものに平他字類抄三卷があり、類從本に收めてある。小さな漢和字書で、排列はいろは字類抄を逆に分類體を主とし、その中をいろは引としてある。唯かはつてゐる所はまづ平聲の字を舉げ了つて、次に上去入三聲を一括して他の部として挙げ、每語簡單に釋を下し、次に音を註してあ

る。蓋し詩作の爲のものか。

下學集

次に室町時代に至り、文安の頃下學集二卷が出た。これは分類體の辭書で、部門を天地門から疊字に至る十八に分けてあつて、その當時より世に用ゐられ、江戸時代に至りては元和以降屢版を改め、或は眞草下學集・増補下學集・平假名下學集・和漢新撰下學集など改訂して大いに世に行はれた。

撮壤集

享徳の頃に至り飯尾永祥の撰んだものに撮壤集三卷がある。これも類從本の中に収めてある。分類體の字書で、註は少く、ある部は全く加へてないところもある。併し一般國史・宗教史・風俗史等の資料となるものが多い。禪宗の行はれた時代の作として請客・監寺・行者・下火等の如き宋音によつた語類も多く集めてある。

類集文字抄

尙、室町時代に成つた辭書の一つに類集文字抄がある。上卷は佚して今下卷のみが存してゐる。この一卷は分類體にして珍寶・農類以下十六部に分けてあつて、註は少く、或は全く缺いだものも多いが、同じ類の様々の字を一所に集めてみる便がある。例へば玉の部に於て

玉・珠・瓊・琪・璞・瑛・瑠・火珠・月珠

等に於けるやうである。

節用集

室町中期以後最も廣く行はれた辭書は節用集で、世俗に字書といへば、直ちに節用集を思ひ浮べるばかり行はれたものである。その體裁はいろは引と分類引とを併用し、語釋より文字を知るを旨としたもの

異本三様の、如く、異本が頗る多い。併し伊勢にて始まるもの、印度で始まるもの、乾で始まるもの、大様三種に分類される。中に乾で始まる易林本は最も廣く流布し、慶長十六年刊行の眞草二行節用集はその後の模範となつた。上田萬年・橋本進吉二氏の共著にかゝる古本節用集の研究は大正五年東大文科大學紀要として刊行せられ、節用集の検討は勿論、我が國辭書の沿革を知るに最も都合のよきもの、参照すべきである。(龜田次郎氏の明應本節用集に就いて・昭和八年五月・國語と國文學も参照。)

この外に文明十六年に大伴廣公の著した溫故知新書三卷は五十音順に詞を集め、各音の中は部類分にしてある。日野資始が永祿六年に記した玉塵抄五十五卷は韻書の次第に隨つて漢字の熟語・故事等を擧

溫故知新書

玉塵抄

元龜字叢

げ、俗語で解題してある。この他元龜字叢一卷があり、元龜二年二月に宗珠藏主が書き畢つたもので、日月より魚に至る三十二部、字形により類集したもの。

仙源抄

國語の専門字書としては長慶天皇が弘和の頃源氏物語の難語を抽出し給ひ、いろは順に列ねて一々解釋遊ばされたものに仙源抄があり、下つて永享三年に釋竺源が撰んだ類字源語抄三卷があり、仙源抄にならつていろは順に詞を集め、漢字を充てゝある。

類字源語抄

萬葉集に關しては釋山阿の詞林采葉抄十卷が應永二年に成つた。この書は辭書の體は具へないが、萬葉の第一卷より卷を追うて難語百二十五篇を考證してある。

連歌の方面には宗祇が門人に書いて與へた分葉一名歌林山分衣の類がある。これは同じ語にて意義の

異なるもの、及び、紛れ易き類語九十五を擧げて註を加へたもの。その門人宗碩に藻汐草二十卷の著があり、天象・時節等二十綱の部門に分ち、各部門はそれ／＼いろは順に列ねて註を加へてある。後人その體に倣ひ、萬葉集の詞を部類して續藻汐草十卷を作る。前書は寛文九年に上本した。

尙、一般のものには天文十七年の作にかゝる運歩色葉集四卷あり、いろは順に語を並べ、註を加へ、時には漢文をも引いてある。

往來物

尙、字書ではないが、當時の往來物は社會事項の文字を彙めて書牘中に列擧したもので、辭書の資料として共に考ふべきである。古き雲州往來のことは茲に略するも、當時に於ては北小路玄慧の作と云はれる庭訓往來を始めとしてその他にも少くない。

新撰類聚往來

中に丹峰和尚の撰んだ新撰類聚往來の如きは次位・氏姓・名乘・書具・料足・茶名・紙名・珍寶・屋具・屋舂・堂塔・番匠之具・鍛冶具・草花美術・走獸・藥名・煎點・調菜方・海草野菜・樂器・十二律・樂名・藥種名・飾具・道具名・天象・地類と類を分ちてその名目を別々に列擧してあつて、これに注文が加へてある。一つの百科字典・社會字彙となるべきもので、洞院公賢の拾芥抄と合せて見るべく、東山往來が佛教に關し、蒙求臂腕往來が隱詞を集めてある如く特殊語の研究に資すべきである。

拾芥抄 東山往來と 蒙求臂腕往來 塵袋

尙、附記すべきは語學に關する隨筆體のものに言及しなければならぬ。それは作者不明の塵袋十一卷である。部を天象・神祇・諸國・内裏・地儀・植物以下詞字・疊字に至る二十二部に分け、その一つ一

つに就きてそれに關する説話を擧げてある。鎌倉中期の作か、弘安の比の作ともいふ。帝室博物館には永正五年高野の印融法印の手寫にかゝるものが存する。その卷十に詞字、卷十一に疊字を説いてある。この詞字は用言を主としたもので、應安新式に助辭を指すもの、連珠合璧集の詞類に交渉がある。これと壺囊抄との關係は後に述べる。

十三 假名遣

假名の成立した當時に於ては音のまゝに文字を使用したもので、別に假名遣問題は起らなかった。然るに言語はうつり易いが、文字はものとまゝであるとき相互の間にくひちが生ずる。この紛れを無いやうにするのが假名遣である。奈良朝時代に於て夙くも一二の假名遣の誤があつたと見えるが、その甚だしきに至らなかった。併しア行のエとヤ行のエとは既にその差別を失ひ、天曆以降に至りて言語のうつりかはりがあつて、假名の混亂がやうやく生じた。鎌倉初頭に至りては殊に甚だしくなつた。

京極中納言定家はこゝに留意し、多少これに關する覺書やうのものを認めたらしく、歌草子の書き方を記した下官抄(底ともいふ)といふ一冊子はそれであらうと想定される。書名はその中に「下官用之」、「下官付此説」の如く撰者自稱の下官といふ文字があるに因みて後人が假に附けたものと見える。これに弘安七年識と文永三年識との二種の寫本があるが、文永本が原本と見るべく、假名遣に關する部は一嫌文字事の條であつて、その初に

嫌文字事

他人惣不然、又先達強無此事、只愚意分別之極僻事也、親疎老少一人無同心之人、尤可所謂道

假名遣

理、況且當世之人所_レ書文字之狼藉過于古人之所_レ用來_二心中恨_レ之
と編纂の趣旨を明かにし、七十餘語を擧げて、その末に

右此事は非_ニ師說_一、只發_レ自_ニ愚意_一、見_ニ舊草子_一可_レ思_レ之

と書いてある。

人丸秘抄

三類八字

定家卿口傳また人丸秘抄と題した寫本もこれと同じく、三藐院關白臨定家卿書も同一のものである。
これには「を」と「お」、「え」と「ゑ」と「へ」、「う」と「ゐ」と「ひ」の三類八字の用方を例で示してあるが、弘安本には更に「ほ」の一項を増補してある。この書は假名文字遣のやうに廣く流布しなかつたが、赤堀氏の語學叢書第一卷に收め、始めて活字になつた。

假名文字遣

假名文字遣は又定家假名遣ともいふ。正しくは行阿假名遣ともいふべきか。序によると、定家卿がその家集拾遺愚草の清書を大炊介源親行に託した時、親行は稿本の假名遣の區々であるのを見て一定することを諮つた。中納言はまづ案を作らしめた。親行は

を お　ゑ えへ　い ひる

行　阿

の三類八字の假名を定めて提出し、定家はこれを可としたとある。拾遺愚草の成立は建保四年の頃と云はれてゐる。後親行の孫知行、入道貞治三年して行阿といふが、更に

わは　はむ　うふ

親行と行阿

六つの種類を加へて大いに増補したのが假名文字遣である。文明十年甘露寺親長の寫した假名文字遣には附録に定家卿口傳及び人丸秘抄を加へてある。慶長の刊本は連歌師里村紹巴の校勘し、天文二十一年三條西公條の奥書を加へた本で附録がない。その後、正保・萬治・貞享・元祿・寛政にも刊行された。定家は歌道の宗匠となり、「凡歌道に於て定家を難ぜんものは冥加あるべからず、必ず神罰を蒙るべきなり」と云はれた程世の讃仰を受けてゐたので、この書の汎く流布されたことが知られる。従つて後人の増補した部分も少くなからうと思はれる。慶長頃の板本は千九百五十五語の多きに上つてゐる。親行の案を立てた三類八字の部が千三百六十七語、行阿の補つた六字の部が五百八十八語である。今板本を検するに「お」「を」の假名が古典と異なるものが多く、

お・をの別

(一) 行のおとわ行のをは音の高低によりて區別した。親の一語である場合にはおやと記し、親子と合するときはをやとする類。

(二) 品詞の種類により假名を異にした。恐るの語も名の時はををそれ、言ひ切る場合におそとする類。

(三) 多少詞の活用を認め、は行のへ・ふとや行のゑ、わ行のうと區別すべきことを示した。

(四) き・くのい・うと轉じた音便を認めて發音的に書いた。かいまみ、辛うじての類。

(五) 古うと發音したものを當時はむと唱へた類は悉く發音のまゝにした。馬をむまと書く類。

(六) 物名の假名は必ずしも字音に従はないで歌集に使つてある例によつた。紅梅をこをばい、芭蕉をば

せをと記す類。

(七)二音より成る字音假名のうち、い及びゐは一樣にいを用ゐ、う・ふの音は一樣にうを用ゐた。加陪をかかひ、垂跡とすいじやく、陸王をりやうわう、十帖をじうでうとする類。

この假名文字遣は定家假名遣と呼ばれてあるが、その内容は異つたものが加はつてゐる。定家も唯獨斷で定めたのではなく、舊草子に範を取つたが、草子類が早已に混亂してゐたので、古典の假名に合致しないのが自らある譯である。これが後に非難を招くことになつたのである。

釋成俊

萬葉の研究家釋成俊は文和二年に萬葉集に奥書し、

天下太底守ニ彼式(定家卿)而異レ之族一人而無レ之、依レ之人々似レ背ニ萬葉古今等之字義ニ者といひ、

依ニ當世之音義書、用ニ共和字之則一、違ニ萬葉集義理之事一

といつてその假名と定家のそれとが一致しないことを指摘し、違は登保であるを當世は登乎と書くなどと示してゐるが、定家の説を全然否定するまでには至らなかつた。また長慶天皇は御著仙源抄の跋に定家の假名遣が音にもあらず、義にもあらず、何等の根據もなく一定の條理のないことを痛烈に御非難遊ばされた。その御理由として

仙源抄の跋

おほよそ漢字には四聲をわかつて、同文字も音にしたがひて心もかはれば、子細にをよばず、和字

は文字一に心なし。文字あつまりて心をあらはすものなり。されば古くより聲のさたなし。

と仰せられ、我が語は「いづれの文字にも平上去の三聲はよまるべきなり」と述べさせ給ひ、か_レと_レみを合せても神・上・紙と用ゐる。同字同心のものでも神と神々とは違ひ、神々のかは去聲に讀まれると仰せられ、また

定家のかきたる物にも緒の音「を」、尾の音「お」などさだめたれば、音につきてさたすべきかと聞えたり。しかれどもその定たる所四聲にかなはず、又一字に儀なければ、そのもじ其訓にかなふべしといひがたし。音にもあらず、儀にもあらず、いづれの篇に付てさだめたるにかおほつかなし。と述べさせ給うた。御趣旨は後に契沖の研究に暗示を與へ給うたと見るべきであらう。

悦目抄

假名使用上の差別

當時假名遣は書道の上からも重んじられてゐた。下官集にも書_レ詞事の條にそれを示してある。悦目抄の如きは藤原基俊の作としては時代があまりに古く、假托の書となつてゐるが、その烏丸本悦目抄の如きは鎌倉の末期を下るものではあるまいと思はれる。流布本の中には休め字・切れ字・助け字、また假名の紛れ易いもの、書法上の習慣・剛き假名・和ぐる假名・けすしき假名等の目を立てその使用上微妙な差別のあることを説いてあつて、歌學上から來つてゐるものが多い。

上に書く_い 下に書く_ひ 口合に書く_ゐ

上に書く_わ 下に書く_は

假名遣

上に書くお 下に書くを

上に書くう 下に書くふ

上に書くえ 下に書くへ 口合に書くゑ

書道上の假名遣

と五類十二字の差別を擧げたるは定家の假名遣と交渉があり、また書道上より

上に書かざるもの

下に書かざるもの

上下を嫌はず書くもの

の別を設けたのは懷紙などを書くに方り字のすわりの美醜より考へた書道上の假名遣である。

行能卿假名遣

世尊寺家は行成卿以來能書の家である。延應の頃に行能卿がゐてその家に傳へた行能卿家傳假名遣といふ一本がある。これには頭に書くい以下三十七項に分ち、いろは順に詞を列ね、紛れ易い假名を語中の位置によりて區別し、連聲によりて假名のかはるものを擧げ、音便に關する假名の一部を説き、訓と音によりて區別する假名（貝かひ、海かい）を擧げ、引音の假名・二字假名・三字假名・入聲假名等に關し説いてある。行能卿の記しとゞめたものにその子孫が行阿の假名文字遣などを參考斟酌して新たに加へたものと見える。

後普光園院抄

その後に出た二條良基の作といふ後普光園院抄、一條兼良の假名遣近道、三條西實隆の假名遣つらら

假名遣近道

折、牡丹華宵柏のかなづかひ近道略歌、三條西實隆の假名遣近道抄より江戸の初期にかけては荒木田盛
徴の類字假名遣、延寶四年に刊行された一步、元祿四年刊の初心假名遣、同八年刊の蜷縮涼鼓集の如き
類が續出した。

後普光園院抄
發字の假名遣

宵柏の假名遣
ちかみちの歌

中に後普光園院抄は永徳二年に誌されたものといふ。定家假名文字遣に多少の法則を立てようとした
跡が見える。語頭にあたるを父字とし、語の中尾にあるを母字と區別し、野字の目には撥音に關する規
定を設けんとし、丹波（たには）の如くにの音にて撥ねるもの、涙（なみだ）の如くみの音にて撥ねる
別をいふなど悉曇に於ける唇内・舌内の差別に基いたもので、字音中撥ねる詞を訓讀するに際し、母字
の方におの如く發音するものは顔・鹽などに於ける如くほと書くと規定してある。これは宵柏の假名遣
ちかみちの歌に

顔竿とはねたる文字には

ほの字を書きてをとは讀むなり

ふ・む・う
三音通用

とあると同様であるが、竿は古代にはさと書いてあつて、假名文字遣のさほとあるに由つてゐる。ま
たふ・む・う三音通用の條には煙・眠の如くりの音に熟する文字にはふを用ゐ、馬・梅の如く唇音に呼
ぶものはむを用ゐ、鬼・牛の如く齒音に呼ぶものは皆うを用ゐ、字音中入聲に呼ぶものは葉・集の如く
ふを用ゐ、その他精・經の如きは皆うを用ゐ、夕・今日の如く訓の延假名（引音を指す）は「ゆふべ」。

假名遣

「けふ」の如くふを用ゐるなど連接の狀、發音の性質等により律すべき規則を立てんとしたところに多少の進展を見る。但し歸納の結果といふより一二の例につき演繹的に説示したのは當時學問の猶幼稚の時代とていかんともすることが出来なかつたのである。

類字假名遣

一語々々の假名遣を容易に檢索するは執筆者の便とするところ、伊勢の荒木田盛徴が編んだ類字假名遣七卷の如きはその完備したもので、源氏・萬葉・紀・本草・倭類秘抄・八雲御抄・言曉集等より廣く詞をぬき、いろは引としてある。手引の書ではなく、實は大きなつかひの辭典である。出典を考へるが如き歴史的用法に據らうとする意圖はありながら、今一步を進めて古典に溯り、基礎的な研究に入らなかつたのは遺憾である。蓋し古典を讀破する力に缺けてゐたので、今日より見れば浩瀚なものであるに拘らず、價值は乏しい。この書は萬治三年に成り、寛文六年に刊行された。初心かなつかひは、正誤かなつかひであつて、分類體にしたのは辭書に倣つたに過ぎない。

一 步

活用や三時
を説く

一步は手爾波遠と假名遣二部から成り、手爾波遠を上中二冊に分けてある。俳諧者流の手になつたと覺しく、引例に連歌の句を引いたり、俗文を挙げたりしたところ頗る新味がある。特に上中の二冊には詞の活用を考へたり、時に過現未の三つがあることを説き、詞のとまりを考へ、これらの點から假名遣を知らしめようと企てたところ吾人の目を惹くのである。關東に於ては戸田茂睡が出て二條家の制詞を難じようとした時代、近古の假名遣を據としながら、定家の假名文字遣を全部禮讀しないところに、時

運の動きを見るべきかと思ふ。

蜺縮涼鼓集二卷は鴨東藪父の著となつてゐる。著者の實名は分らないが、特に濁音かなづかひといふ特別の一書を公にするとところ注目に値する。その引例は盛徴の類字假名遣より取つたものである。その凡例に橋・箸・端等の語につきてアクセント問題に觸れ、また方言に説き及んだところはさすがに一見識ありと謂ふべきである。

十四 連歌より起つた語學

連理秘抄

附く附かぬ

吾人は爰に連歌道より起つた語學を考察して見る。斯道の建立者二條攝政良基は斯界の長老救濟法師をかたらひ、菟玖波集二十卷を撰んで勅撰に准じられ、連理秘抄・筑波問答以下の學書を著して應安新式を制定し、斯道の式目を定めて偏へにこの道を興隆せしめた。貞和の頃に成つた連理秘抄の中にてにをは大事のものなり。いかによき句も、てにをはの違ねれば、惣て附かぬものなり。事により斟酌すべし。

と云つてある。連歌は和歌から派生したものとといへ、彼一句、我一句、後者は前者の句に基きて、更に新意を附け、二者各獨立して而も連繫をたもち、不離不即前後相待つて妙趣を醗釀する。随つて詞句の斷續は大切である。かくて和歌よりもてにはの検討が一層大切となるのである。「て」とか「に」との一つのてにはの置所に就いても説いてゐることは悦目抄に腰の句、末句に蹈みて優しい文字を擧げてあるのと、ものは違つても意は同一の精神から來てゐる。

知連抄

公の知連抄にはてにをはの六次第三種を説いてある。請てにをは・掛てにをはの如き名稱を立てゝあ

るが、前者は

來む秋の心より置く袖の露

に附けた

かゝる夕は萩のうは風

に於ける前句の露を後句でその縁語のかゝるにて受けたとして、後者は

すむかひもなき草の庵かな

はや結ぶ岩屋の内のたまり水

に於ける附句の末の水といふが、前句のすむにかゝるので、區別したものを表現の技巧から見た名稱である。

斯界に於ける七賢の随一たる高山宗砌は連歌の大事三百五十九ヶ條の中に「てにはに過ぎたる大事なし。てにはの詞五十一、中に切てには十五」などと説いてゐる。「こそ」「ぞ」「や」「は」等の使用を密傳抄その他にも細かに説いてゐる。

雨夜記

柴屋軒宗長の雨夜記などには今の動詞・形容詞・活用連語・助動詞・助詞ばかりでなく、「げに」「いとど」の如き副詞より「また」の如き接續詞及び知らず顔の「かほ」までをてにをはの中に包含せしめてゐる。

連歌より起つた語學

切 字

田舎への状

十八切字

連歌の上には一般に發句の獨立を重んじ、句の斷止を喜ぶ結果、切字の目を立て「切れる」・「切れぬ」の論が熾になつて、宗樹が田舎への状などにも「らむ」及び「や」の「切れる」・「切れない」の區別を細かに説いてあり、池坊の專順法眼詞秘之事の中には發句の十八切字を擧げてある。所謂十八字切字は

かな けり もがな らむ し ぞ か よ せ や つ れ ぬ
す に へ け じ

の十八で、これを今の品詞に分けてみると、

助 辭 かな もがな ぞ に や か よ

助動詞 けり らむ つ ぬ す じ

動 詞(四段の
倫令形) せ れ へ け

形容詞 し

のやうである。和歌は續くことを要とし、連歌は切することを要とする。隨つて連歌のてにはは切字を以てすべてを攝する。これを置かないで、切れる

五月雨は峰の松風谷の水

目下部忠説
の留書

の句の如きを自讀してゐる。宗樹門下の目下部忠説なども切字に關して留書を遺してゐる。一つの助詞でその表現を異にするものがあるので、連歌「や」に七の次第ありと標して、

やの七種

きるや 中のや すてや 疑のや はのや すみのや 口合のや
の七種を分けることも起つて來た。これを例によりて見るに、

切るや 散る花や嵐につれて迷ふらむ

中のや 鳥歸る雲や霞に目の入りて

捨てや 斯くしても身のあるべきと思ひきや

疑のや 思へばや鶉鳴くまで止まるらん

はのや 今ははや訪はじと月に鳥鳴いて

すみのや 思ふやと逢ふ夜も人を疑ひて

口合のや 月や花よる見る色の深み草

斷止するもの、列舉するもの、反語となるもの、存疑を示すもの、詠歎を示すもの、疑問が引用された形となるもの、選擇の意にあてるものを表現の性質や詞の斷止の位置等雜駁の分類である。また連歌の句は半ば言ひさして句をとめたものが多い。これによりて留り五つの次第とか「ぞ」「か」「よ」のことなど一種の呼應に關して目を立てたものもある。

又よとの情は後の涙にて

里人の山は降るかと雪まちて

連歌より起つた語學

又よとは止むる情に云ひ捨て、

宗養三卷抄

の如きはそれである。また十八切字はその後増補されて、宗養の三卷抄には

やは かはこそ

なり けりな もなし みむ

誰か いく いつ いかゞ

て な め

無言抄

を増し、木食上人の無言抄には

いづく いづこ いづれ いかゞ いく

などの疑の詞

なれや けれ き たり めり はなし

及び下知の「寒かれ」、禁止の「な」の類をも擧げてある。表現から起つた語學であるが、種々と細かい區別を立てるに至つた。

十五 品詞の觀念 詞辭の分別

上代人も概念を示す實體語と關係を示す形式語との二つは、おぼろげながら多少意識はもつてゐたとしても、我が國語の實體語は變化をもたない性質であるから、別にこれに意を注ぐものは少く、形式語はその運用により種々の意義をあらはすので、比較的夙くよりこの語に注意を拂つてゐたことは宣命書によつても知られ、萬葉集に於ても辭に注意してゐたことが想ひやられる。特にてにをは・ヲコト點と同一の起源、同一類のものであることは既に述べた通りである。長秋記天永二年の條にはテニヲハ點の語さへ見えてゐる。併しその範圍は漠然たるものであつた。

長秋記

通用名言

品詞分類の觀念の如きは文學とは後れて近古に至りやうやくその萌芽を見る程度である。平安末期に出た上覺上人の和歌色葉集には通用名言に對し、辭といふ名の下に多くの活用する詞を彙めてある。但しその中には今の副詞に屬する語をも混じてゐる。實體を示す概念語と否らざるものとを分別してゐたことは知られる。この辭といふ文字をテニヲハと訓したものかは明かでないが、鎌倉時代にはテニヲハの語が諸書に見え、歌人はその取扱ひに關し深甚の意を用ゐてゐた。順徳院の八雲御抄にてにをはの使

八雲御抄

品詞の觀念

用に關し御意を述べさせ給うたところがある。阿佛尼の夜の鶴、定家の作と傳へられた愚秘抄にもこの語が出てゐる。仙覺は文永三年萬葉集卷一の末に

所謂不_レ勘_二古語_一之點并手爾乎波之字相違等皆以糾青令_レ點直_レ之也

と書いてゐる。順徳院は和歌の天才でゐらせられ、世のかいなでの歌人があまりにこれに拘泥して創作の眞諦をつかまぬを御指摘遊ばされてゐる。而しててにをばといふ中に助動詞並びに助詞が含まれてゐることが例によりて拜察することが出来る。夜の鶴にはてにはの略稱を用ゐ、

てにはもうちははず、もと末もかけあはぬ事のみこの頃はおほく見え候にや。

悦目抄と上下の呼應用格などにつき時代の錯誤を示唆してゐる。その用格は委しくは分らないが、悦目抄にも

「上下を心得よ」とか、「詞の上下をせざれ」等の條もみえ、歌合の判にも上下の呼應を説いたところもあるから、まとめての記述はなくとも實地の取扱ひにはもつと細かい部にもはいつてゐたと想はれる。

竹園抄 藤原爲世の弟爲實の苦と云はれる竹園抄には

如此上下の句の中にも一句のうちにもてにはの字、もしは物の名、詞字にても、みみにたつを可_レ嫌也。

詞の字とある。てにはと詞の字とを區別してある。弘安の頃に成つた塵袋卷十には詞字の部がある。この頃は詞の字をてにはを除いた活用語を指してゐたものと見るべく、然れば名と詞とてにはと國語に三品類の

存在と認めてゐたらしく、後の學者の體言・用言・辭の三分類を夙くも指示してゐるのである。併し二條良基の連理秘抄や連歌新式には詞字にてには合せた義に用ゐてゐる。一條兼良の連珠合璧集には詞類といふは竹園抄と同じく、主として活語を指してある。

かういふ諸書を経て手爾波大概抄は出た。この書は僅々六百四十餘字から成る記錄體の漢文から成つてゐて、定家卿の作と云はれてゐる。室町期には定家の作と銘をうつた假託の書が多く出た。これも詠歌大概に倣つて連歌の僧などが作つたものではあるまいか。その書の傳承は

爲世—頓阿—經賢—堯尋—堯孝—常緣—宗祇—實隆—公條—實枝—公澄—藤孝—實條—通村—氏成—
宣之—宣易……

と繼承譜も出來てゐるが、古人も定家の眞作ではあるまいと疑つてゐる。この書には詞と手爾波とを並べ出し、その關係を

詞は寺社の如く手爾波は莊嚴の如し。

手爾波の効力

と喩へてゐる。また手爾波の効力を叙して、

詞は際限ありといへども、これを新にし、これを自在にするものは手爾波なり。

と云つてゐる。大きい部をもつ詞よりそれに添うていく小さい手爾波が多様多様に活くことを云つたものの。莊嚴の手爾波を以て寺社の尊卑を定むとさへ述べてある。次に斷止の大切なことをいひ、切るには

品詞の觀念

つゝ留

種々の法がある。切詞を用ゐるが普通であるが、云ひ切らない詞で切る法もある。一首の内で處々に切るのは堪能の人でなければ出来ない。留めには「つゝ留」及び「見ゆ留」がある。「見ゆ留」はう・く・す・つ・ぬ、い・き・し・ち・にの通音で押へて留める。「こそ」はえ・け・せ・て・ねの通音、「し」・「しか」の手爾波、尤之詞下を受けて留むといひ、「そ」はう・く・す・つ・ぬの通音、「き」・「し」・「を」・「しに」・「しか」・「らむ」を以てこれを抑へ、「にて」はう・く・す・つ・ぬの通音、を・は・も・か・らの五音にて押へるといふ。その中には誤謬もあるが、押へと留り、反言すれば、かゝへと留りの關係を概括的に述べてある。

押へと留り

歌道秘藏録

この書は歌道秘藏録と深い交渉があるやうに思はれる。また助辭の中「や」に十品、「か」に二品、「はぬる」には三品、「も」に二品、「かも」に二品、「かな」に六品あることも説いてゐる。

(や) (一)也や (二)疑心 (三)手爾波 (四)願 (五)尤 (六)詞 (七)様サマ (八)推量 (九)殘詞 (十)略や

(か) (一)疑 (二)哉

(勿字) (一)疑 (二)手爾波 (三)詰刻

(飄之詞) (一)かは (二)やは (三)めや

(も) (一)休 (二)兼

手爾葉大概
抄之抄

(かも) (一)疑之心 (二)哉に通ふ

哉 (一)願 (二)贅 (三)治定 (四)有心 (五)手爾波 (六)吹流

(かし) 眞名の置字乎矣の留

これに對し、飯尾宗祇は文明十二年手爾葉大概抄之抄といふ註釋を作つた。手爾葉大概抄の成立を比較的古く見る人もあるやうであるが、室町幕府の初期にのぼるものでなく、宗祇時代より甚だ遠いものでないと想はれる。

姉小路式

室町末期より徳川初期にかけて歌人の間に行はれた手爾波の書に姉小路式がある。手爾葉秘傳・天爾波抄・姉小路殿手爾越葉・和歌十三ヶ條口傳と題したものもある。十三卷から成つてゐて、その目次を擧げると、

第一卷 はねてにをはの事

第二卷 ぞといふ事

第三卷 こそといふ事

第四卷 やの字の事

第五卷 かなといふてにをはをかといへる事

第六卷 かはといふてにをはの事

品詞の觀念

第七卷 しをといふてにをはの事

第八卷 かなを略する事

第九卷 假名をやすむる事

第十卷 同じてにをはを一首の中に數多をく事

第十一卷 哉といふてにをはの事

第十二卷 比とまりの事

第十三卷 にてといふてにをはの事

の如く、その内容も自ら明かである。十三卷といへば、大部のやうであるが、一卷の紙數少く、一卷一條ぐらゐであるから、全部合せて一冊ぐらゐの量のものである。異本も多く、國語學大系に收めたものにも十本の異同を擧げて置いた程で、奥書も區々であるが、姉小路基綱卿の作であらう。姉小路家は當時歌人が續いて出た家で、三玉集の一つなる碧玉集を遺した人、永正元年領國飛驒で亡くなつた。當時は戰亂が打續き、文藝は衰へ、古今傳授などの行はれた時代であるので、この書も亦一子相傳として

右千金をあたふるとも一子ならでは不可免如件 姉小路代々龍本寺殿

の奥書がある。「五月雨の頃」の如き名詞留のものをも手爾葉に入れたのは、當時未だ分類の標準が嚴密に出来なかつた時代であるから止むを得ない。手爾波の原義に就きても點圖のことを忘れて、

手爾葉とは出葉と書なり。草木の葉なくば何の木なのに草と知りがたし。葉を出すを見て其草木と
しるが如し。

といふが如き釋義を以てすることは詠歌大概音義に歌は柯なりと釋名的に解釋した當時の習であつた。
手爾葉大概抄などより所説が細緻になり、一々證歌を引いて説明を加へ、「や」の如きは白髮集には七品
を擧げ、大概抄には十品を立てたのをこの書に十四實は十品に分け、刎字を大概抄には三品を擧げてあるに
この書には十三條を立てゝある。特に「ぞ」が上にあるときは五音の第三音で留るが、また「き」「し」
・「を」・「は」・「ね」・「しに」・「しか」・「しに」・「を」・「よ」・「にき」・「に」・「か」で留ることもあ
るといひ、同じ「し」のてにはの中、過去の助動詞の「し」と過去・現在の「し」と云つて形容詞の終
止の語尾を意義の上から區別し、抑へがあつて「と」などの助詞で受け、結の轉する場合にも説き及ん
でゐる。この係結の説明は後の學者に據るところを知らしめたものである。

この書は後に増補された。烏丸光廣が細川幽齋より承けて他の懇志の人に傳へた春樹顯秘抄は、以上
の外、「見ゆ」といふ手爾波・休字・つゝの字・助け字・入魂よむべき手爾波・かゝへなくして詠むまじ
きこと、手爾波に品々あることなどを加へ、増して二十一條となつてゐる。

この一子傳といふべき姉小路式も寛文十三年には刊行されるに至つた。これは時世の進運が然らしめ

たものである。書名の春樹は出於葉を翻したものであることは云ふまでもない。書中上にあつて係る手爾波を「かゝえる」といひ、下にあつて應ずる手爾波をおさへると云つてゐる。猶この呼應を

ぞることそれおもひきやとははりやらん

是ぞ五つのとまりなりける

和歌童翫抄

の一首を添へ、韻文記憶法を用ゐてある。烏丸光榮門下の通危子(享辨)は寶曆四年和歌童翫抄を著し、この韻文法を用ゐてには及びかなつかひを容易に記誦せしめる道をとつた。

幽齋のてにはの説を別の方面から見るには佐方宗佐の細川幽齋聞書中に切字及び手爾波の説を傳へてゐる。(増訂日本文法史三七・三八頁參照)

春樹顯秘増抄

堂上の歌學を民間に擴げた有賀長伯が春樹顯秘増抄を作り、顯秘抄を増補した。その條項は四十九條に上り、説くところ一層詳密を加へた。例へば「ぞ」の手爾波の如きもかゝへの外、「下知のぞ」、「延べてや」及び「のに通ふぞ」、「云ひ捨つるぞ」、「云ひのこそぞ」を説き、「こそ」の如きもかゝへの外に、「とをのみこそ」に於けるが如き「殘すこそ」を説き、「や」の如き、前説を整理して、「口合のや」、「呼出のや」、「疑のや」、「疑捨つるや」、「願のや」、「願ひ捨つるや」、「量るや」の七種となし、撥字の如きはかゝへを置きて「らん」と撥ねるもの、「ん」と治定して撥ねるもの、かゝへなく撥ねる所謂詰撥ねるもの、「そ」を「に」・「は」・「て」で抑へて撥ねるもの、延べて撥ねるもの、片疑ひ、諸疑ひ、こゝ

和歌八重垣

を見てかしこを疑ふはねを説くがごとき参考となる見が雜つてあるが、帳中の祕書としたのか世に多くは傳はらなかつたらしく、これに反し彼れの歌道七部書の一なる和歌八重垣元禄十三年刊の卷二には歌のときまりの事、てにをはの事、切字の事の條々中にてにはを説いた。これは廣く民間に用ゐられた。

十六 語原の研究

記紀風土記等に散見する地名起源説の如き常識的の語原研究は夙くよりその萌芽をもつてゐたが、學として見る程のものはない。竹取物語の語原説の如きは可笑の種にしたに過ぎない。平安末期に至りては藤原範兼の和歌童蒙抄や、清輔の奥儀抄や顯昭法橋の袖中抄などにこれを説いたものがある。これらも國語解釋學史上よりは重要なものには相違ないが、各所に散點するに止まつてゐる。

懷賢の釋日本紀は三十卷中、祕訓の部が七卷、述義の部が十一卷、一々其義如何、其由如何といふ風に問を設けて答へてある。

釋日本紀の
祕訓と述義

塵 袋

弘安の頃に成つたといふ作者不明の塵袋^{卷十一}は部を天象・神祇・諸國・内裏・地儀以下二十二部に分ち、一事につき、それ／＼その由來・沿革等を詳かに論述してあつて、語原を隨筆的に長々と記してある。特に卷十には詞字^{主として}、卷十一には疊字を擧げてその語原を説いてある。例へば、

一、白地^{アカサマ}トハカリソメト云フ心歟ホドナク復^{フタヘ}本歟ツネニハコノ心ナリ、アカラサマトハ暫ト云フコトバナルベシ、左傳ニハ昨^{アササキ}謂ニ林楚ニ曰ト云ヘルヲ注ニ昨ハ暫ナリト釋セリ、又ハ非分ノ心ナリ、

源氏及び伊勢物語の註釋

枕詞燭明抄註

和句解

暫モ非分モ心口通敷、日本紀ニハ中天ニ死ヌルヲバ天殘トカキテアカラサマニシヌト云ヘリ、シヌルモノ、カヘルコトナケレバ、ツネノ心ニハタガヒタル敷、常ニハ土ノイロハ黒モアリ黄ニモアリ、シラスナコヲチラスハ非分ノ事敷、サレバ本骸ノ色ニモアラネバ白地トカキテアカラサマトヨム敷トモオボユ。

に於けるやうに便宜的の解釋が多い。尋いで出た塵囊抄は六百三十六條を含んだ隨筆、後これに塵袋の中より二百一條をぬいて新たに成つたものが塵添撞囊抄である。

以上の如き隨筆中に語原を説くとは異り、一部の解釋としては紀及び萬葉と並びて源氏・伊勢等の物語の註釋も次々に出るやうになつた。中に源氏につきては辭書の部に述べたやうに長慶天皇の仙源抄、室町時代に於ける類字源語抄、江戸の初期に於ける源氏目安の如き源氏字典が出た。

連歌の方には去嫌が主となつてゐる宗碩の藻汐草が出、尋いで木食上人の無言抄や匠材抄が出た。

枕詞に關しては三條西實隆の枕詞註があり、下河邊長流の枕詞燭明抄卷三が出た。古來の説を網羅するに止まり、批判も新解もない。(尙枕詞に關しては拙著「枕詞の研究と釋義」参照)

一般語原學の最初のものとしては松永貞徳の寛文二年に上梓した和句解五卷がある。いろは順に單語を列ね、一々その語原を説いてある。例へば稻は命の根であるから起つた。犬は家の奴婢であるより、芋は子をもつ故妹にあたるとか、「いとこ」は絲の如く離れぬ子ゆゑ名づけたとか、「いくさ」は「生るは

醒
醉
笑

「幸」の義であらう。夜は晝は家人が散在し、夜は一所に寄る爲など、すべてが常識的の説明で、策傳の醒醉笑に時々人を哄笑せしめる説話と變らないものが多い。貝原益軒及び新井白石の語原研究は後に述べる。

近代

一 古學の興起

國學の盛んになつたのは荷田春滿・賀茂真淵・本居宣長三大人の御蔭によることは世の洽く知るところである。併しその礎をすゑたのは圓珠庵契沖等である。契沖や下河邊長流の時代にはまだ國學の名はなかつたが、古學といふ道を創めて立てたのである。

我が學問の淵源は頗る古いが、近古以來師範家の教にたより、祕說・祕傳を極度に重んずる弊風を生じ、自由討究の道がすたれてゐた。慶元以降幕府は學問を獎勵し、書籍の刊行を企て、國民の生活も次第に充實して來たので、民間にも學藝に志すものが多くなり、開幕八十年にして文藝の復興時代が來つたのである。幕府唯一の大學であつた昌平黉が朱子學を奉じてゐるに對し、民間には陽明學派を奉じた中江藤樹が出で、古學派を唱へた伊藤仁齋があらはれた。國歌・國文に於ても、堂上に於ける二條派に

抗し、戸田茂睡は梨本集を著して制詞の桎梏を破らむとし、契沖及び長流は師家によらず自由的の立場から古典を究め、古學の道を啓かうとした。こゝに旺盛な古學の精神が昂揚して來た。我が國語學史もこゝに時期を分たねばならぬ。契沖は傳統に抗し、萬葉の古典に溯り、これに基く實證的學風を樹立した。これは我が學術發達史上に重要な意義を有するものである。

二 圓珠庵契沖

萬葉代匠記

國語解釋學の上に契沖は萬葉代匠記五十三卷といふ大きな記念塔を遺した。その初稿本には學の兄と親しんでゐた下河邊長流の管見抄の説を引用するところがあるけれども、獨創が頗る多い。水戸黃門光圀卿の囑に應じて初稿本を奉り、更に精選本をも捧げて水戸に於ける萬葉學の興隆を助けた。

集中假名の事

その卷頭の總釋は作者・年代・枕詞その他諸種の事項を説いてあるが、その中雜説及び「集中假名の事」の題下には音韻・文字・假名遣に關する意見を述べ、今人の用ゐる假名と相違してゐるものを以爲比・乎於保・江惠倍・和波・宇布保の順次によりて摘出してその出典を註記した。或人の「假名は打混じて書くべし」との説を駁し、「もし然らんには昔の億計弘計二皇子の御名を何に由つて分つべき」といひ、和名集・日本紀・菅家萬葉の假名を見渡すに皆同一で行成卿の頃までの假名は萬葉の假名に違はないが、爾後漸く誤り來つたことを説いてゐる。

契沖の略歴

契沖は眞言の僧侶で、夙く高野に上り、長谷に赴き、室生に到つて諸行を嚴修し、河内の淨嚴に就きて悉曇を學び、音韻に委しく、その學古典を明かにするに歸納的方法を取つた。

圓珠庵契沖

和字正濫鈔

古を明かにするにつけ、近古以來世人の範としてゐる定家假名遣と違つてゐるのに疑問をもち、古典の假名遣を蒐集整理することによつて、そこに法則を見出さんとし、終に和字正濫鈔五卷の成立を見たのである。

參考資料

その第一卷は總説で、悉曇から得た智識を應用して音韻・文字の説明をなし、第二卷以下に於て二千餘語につき古典を引いて正しい假名を示さうとした。その據とするものは日本紀より三代實錄に至るまでの國史・舊事記・古事記・萬葉集・新撰萬葉・古語拾遺・延喜式・和名鈔のたぐひ、古今集及び諸家集に至るまで汎く引用してある。

山崎吉里

假名字例

倭字古今通例全書

茂睡の梨本集には世の反響がなかつたが、正濫鈔に對しては江戸の山崎吉里が反對の書を公にした。吉里の學統は分らないが、これより先吉里は延寶四年に假名字例四卷を刊行してゐたので、前書を増訂し、倭字古今通例全書八卷を協成員の名によつて上刊して正濫鈔を反駁した。收むる所の語彙は節用集に倣つて乾坤・氣形・生植・服器・雜事に類別していろは順に列ね(語數は約三千に及んでゐる)、一語毎に相當する漢字を加へて註を附した。一種の假字々典である。その初に契沖及び正濫鈔の名は出していないが、

正濫鈔を誹る

近年假名遣の書あまた出でたり。或は雜淆し、或は古書を證據に立て愚昧の慥に思ふやうにしなせり。微とするにたれりと思ふらめ、一向假名を知らざる故なり。

語聲的假名遣

といひ、範を古に取るのを誇り、また契沖の據として舉げた古典につき、「かなづかひの法往昔いまだ定らず云々、今かやうの書を假名遣の證據と定めがたし」といひ、「右の書を證據とするときは假名遣の法はなきなり」といひ、古典的の假名遣を斥け、「假名の法は平上去入の四聲に従ひて定りぬ」とか、「なんぞ舊記に泥まんや」など云ひて語聲的假名遣を唱へたが、彼れが唱へる「只理の正道に従ひて可なり」との實證は通篇に見えないで、却つて口傳に護るといふものが隨所に散見してゐる。これが契沖をして更に憤激せしめずにはおかなかつた。

和字通妨抄

千歳笑と貳過集

契沖は起つて同十年和字通妨抄四卷を著し、徹底的にその謬説に反撃を加へた。通例全書には萬葉に云々、日本紀に云々、和名鈔に何々と註してあるが、實は原典を見ないで出鱈目が多いので、それを攻撃し、成員の序及び凡例等の誤を一々指摘して成員を指して背面先生といひ、假名字例を千歳笑と呼び、通例全書を貳過集と名づけ、

腹黒き學問あをき白人は假名字例さへ赤恥をかく

といふ一首の狂歌をさへ詠み添へてゐる。篤學な而も五十三歳の老師にはいかゞと思はれるほど激越の詞を用ゐて批評を加へてある。併し感情に走つて是非をまげることなく、正濫鈔に云はざる事項を説き、足らざる證據を補ひ、自家の前説に更訂を試みたところが少くない。この稿本は北野神社に一部存するだけで、多くは世に傳はらなかつたが、契沖全集が昭和の御代に刊行されるに至り、始めて版にな

和字正濫要略

つた。契沖はその後これを考訂し、元禄十一年和字正濫要略一卷を著した。

正濫鈔には總語數千九百五十六語の中、文獻の明記されてあるものが六百八十三語で、されてないものが三分の二強に當つてゐる。その他は語源によつて定めたものや反切・延約・相通・音便で説いたものが多い。正濫要略には正濫鈔に考據を缺いてゐたもの二百三十語を加へ、更に三十の新語を補つてある。併し當時はまだ「お」「を」の所屬を訂すに至らないので、愛宕を「おたぎ」と書くのは角違ひの通ひといふが如き僻説を立てたことや、語源の常識的で根據のあふないものも多少交つてゐるが、その考究の態度は實に堂々たるものである。

契沖學

もし契沖學といふ目を立てるとするならば、萬葉集を中心とし、記紀の歌謠にも溯り、古今・伊勢・源氏・歌仙集に下り、主として古語の闡明に力を用ゐ、傳統の誤を正し、實證的方法を以て古典を明かにするにあつたといふべく、從來の歌人が準則としてゐた古今集の註釋餘材抄の如きも引證の豊富なこと他に比類のないぐらゐであるが、これも萬葉註釋の餘材を以て仕上げたもので、その他にも貴むべき著作がある。水戸中納言光圀卿の招聘にも應ぜず、飽くまで民間の學究として立つたのである。海北若沖・今井似閑・野田忠肅・安藤年山等がその説を奉ずるばかりでなく、後世國學の徒が契沖の影響を被らざるものは殆どない有様で、荷田春滿の如きも師資の關係はないが、契沖の著書を觸目してゐたのである。

門人及びその學風の影響

和字解

契沖の假名遣の研究は基礎のしつかりした上に建てられ、標音的假名遣に據らないかぎりはこの標準とすべきであるに、世の中は妙なもので、この論争の後も傳統の力は容易に消えず、定家の假名文字遣を奉ずるものは少くなかつた。中に貝原益軒の和字解はその七十歳の時の作で、假名遣の三要項を提示してあつて、一面語勢的假名遣を採用すると共に、契沖の歴史的假名遣をも參酌して兩者を折衷した。本文四十一葉の小冊子で、廣く行はれ、元祿十二年の初刊本について、元文二年刊本、延享五年本等がある。

正濫鈔と同年に出た蜺縮涼鼓集のことは既に説いた。

同十年に青木鷺水の萬葉假名遣が出た。引書百五種、舉げた語數は五千八百三十一言の多きに上つてゐるが、萬葉集には關係なく、唯多くの語を集めたもので、序によると應永三年二月耕雲が先皇御尊本に由つて寫したとある定家卿流かなづかひの一本に據つたものである。

持明院基輔は寶永三年能書假名遣を著し、十七類の假名を音訓に分ち、定家流の假名遣を書道の爲に説いた。同六年佐々井祐清は假名遣拾芥抄五卷を著し、水谷居秀は享保四年假名遣秘解を出し、服部吟照は元文五年假名遣問答抄を著した。

吟照は江戸の人、俳諧師吏道と親しく、序はその筆に成つてゐる。この書第一卷は玄談といひ、假名遣に關する理論を説く。中に古書の假名に用不用有事の條には成員の説を受けて日本紀以下古今集等に

七門の差別

至るまでの書はかなづかひの法未だ定まらざる時の書なればと云つて、契沖の歴史的假名遣を排斥してゐる。また韻鏡の方面から七門の差別を立てゝゐる。所謂七門の差別とは

五音差別 輕次重差別 開中合差別 初中奥差別 強中弱差別 長中短差別

相對差別

の七つで、初の六つは音についての差別、末の相對差別は形容詞の音便に關するものである。卷二は雜之部、卷三・四は假名遣の實際に關するものである。書中に或書の誤を指摘したところが多い。この或書とあるのは益軒の和字解を指してゐるらしく、同じ堂上の流れを追ふものにも、益軒のは多少折衷的のところがあるので、これを駁する爲に作られた觀がある。

契沖の著は通妨抄も要略も當時はまだ刊行されないで、堂上の流れを追ふものは成員の通例全書が歴史的假名遣に對し勝利を得たものと考へてゐたものも相當に多かつたのは、群盲象を評する嫌ひがないではないが、時世はまだ如何ともしがたく、中を執らうとした和字解の方が却つて批評の種となつたのは奇なる現象といふべきである。

和字大觀抄
拗音の假名
・假名反切
かな合字

韻鏡學者無相沙門文雄は寶曆四年和字大觀抄二卷を上梓した。上卷には五十音堅横の相通を基調として假名遣を説き、下卷には和字解の説をとつて五類の假名遣を示してゐる。中に拗音の假名・假名反切・反音の説の如きはさすがに音韻學に造詣深き著者の説となづかれるものがある。附録のかな合字は

諺文の形などにヒントを得て、片假名を以て一語を一まとめにし、これに「！」符を加へて四聲を示してゐるのは、明治時代の國字改良論者に一つの示唆を與へてゐるものと謂ふべきである。尙韻鏡のことは別に章を改めて説く。

その後楫取魚彦が出て契沖の古典的歴史的假名遣を完成したことは別に述べる。

三 語原の研究

圓珠庵雜記

貞徳の和句解に就きては既に述べた。契沖の圓珠庵雜記一卷は主として語原的研究に屬する雜記である。文化九年岸本由豆流が刊行した本には眞淵及び宣長の説を上欄に記入してある。和歌の爲に唯思ひつきを録したものであるから、鳥は人の取りて飼ひもし、食ひもするから埶りの義か、鶯は諸々の鳥の中に巢をうるはしく食ふなれば愛食巢と名づくるか、檐は屋の外に除きてあればいふかと云つた類が多く、自餘の著とは一つには擧ぐべきではない。

貝原益軒

日本釋名

語原につきては新井白石の東雅を以て劃期的のものとすべきである。白石に先ちこれに先鞭をつけたのは貝原益軒である。益軒も白石も著名の漢學者で、共に立派に國文も書けた。樂訓や折焚柴の記を見れば、これが鴻儒の筆に成るかと思はれる程である。益軒は我が國民は漢詩よりも和歌を詠むべしとの見を抱き、和歌紀聞抄の著もある。併しその語源研究は國學の先進の影響ではなくて、劉勰の釋名に倣つたに過ぎない。彼れは釋名に倣つて元祿十二年日本釋名三卷(六冊)を著したが、そのことは自序の中に見えてゐる。この書は分類體の辭書の如くであつて、一々語源を説いてゐる。その部門は

上卷 天象・時節・地理・宮室・地名

中卷 水火・土石金石・人品・形體・人事・鳥・獸・蟲・魚・介

下卷 米穀・草・木・飲食・文具・武器・雜器・虛字

の二十三類に分ち、各語の語原を説いてある。その解義の方針は凡例に示した八要訣に明かである。

(一) 自語 天地男女父母などの類の如く自然に言出した語。

(二) 轉語 五音相通によつて生じたもの。上から君、染ソメから墨を生ずる類。

(三) 略語 ことばを略するもの。これに上略・中略・下略の別がある。

(四) 借語 他の名とことばを借り、そのまゝ用ゐて名づけたもの。目をかりて火、炭をかりて墨とする類。

(五) 義語 義理を以て名づける。明時を曉、口無しを梔子とする類、これを合語とも云ふ。二語を合せたもの。

(六) 反語はかな返しなり。「はたおり」を服部とし、淡海を近江とする類。

(七) 子語は母字より生ずる詞。水を母とし、源・溝・汀・港を生ずる類をいふ。

(八) 音語 これに三つあり、一には字の音をそのまゝ用ゐて語とせるもの。菊・桔梗・繪馬・石榴。

これに唐音をそのまゝ和語に用ゐるのがある。杏子・石灰・菠薐ホウキなどの類、三には梵語を用ゐた

るもの、ほととぎす・尼・猿・斑などの類。

以上の要訣は條理の立つたものであるが、その個々の解釋に至つては牽強附會のもの多く、妥當を缺いてゐるものが多いのは個々の言語に對する實證の不足に依るのである。

新井白石
東雅
白石の東雅二十卷を著したのは享保四年である。白石は儒者で、且政治家で、兼ねて史學に長じて、古史通・讀史餘論・藩翰譜の如き名著があり、音韻・語學に關しては東音譜・同文通考・東雅の如き皆世に行はれてゐる。

日本釋名を
是正す
中にも東雅は東方の爾雅といふ意を以て書名となしたものであるが、日本釋名を是正して我が語原學

言語の五方
の相違

上に不朽の基礎を置いたものである。篇を天文・地輿・神祇・人倫・宮室・器用・飲食・穀蔬・果蓏・草卉・樹竹・禽鳥・畜獸・鱗介・蟲豸の十五目に分ち、これに屬する國語の名詞の語原を釋してある。

その首卷は白石の言語に對する所見を示したもので、言語には東西南北中央の五方によりて相違のあること、また同じ言語にても古と今との異同あることを認め、また同時の人の言にも雅俗の別のあることを考へ、時代的・方所的・位相的の三方面から考察すべきものとなし、我が國語の中には外國語の影響を受けてゐることが少なくないとし、三韓の服屬してゐた時代にその地方の言語の混りたるものがありといひ、支那と交通して漢學の盛んに行はれた爲に彼れの語を多く取入れて古來の言語の變化せることをいひ、佛教の熾になるにつれて梵語の混入があり、禪宗の行はれるに及びて宋元の方言の入つて來たこ

時代的方法
的位相的考
察
外來語

とをいひ、近世に及んで西洋・南蠻の語が民間に傳はつたことをいひ、一々その實例を挙げ、また内地に於ても地方語が都の中央語に與へた影響を認めてそれを述べてゐる。

かゝる意識は唯理論の上に云ふばかりでなく、朝鮮の修信使や譯官などと詞章を交換し、ヨハネ・シローテの如き拘置せる蠻人に聞きて采覽異言・西洋紀聞の如き著を遺した程であるので、獨斷的偏見に囚はれてゐない。

東 音 譜

また言語に通ぜんには音韻の學にも通すべきことを述べてゐるが、東雅を著した二年の後に東音譜を著して一種の五十音を掲げ、それに配した片假名を漢字で音註し、これに加ふるに、杭州・漳州・福州等南部支那の當時の音を圖表の中に記入し、次に五十音圖にない音のうつし方をも定めてゐる。これは東雅序論の音韻に關する理論を更に具體的に示したものと見るべきである。

同 文 通 考

文字論に就いては別に同文通考四卷の著がある。これはこの書に先ち正徳年間將軍家宣の命によつて執筆したもので、文字考または書契文談等の名で傳寫されてゐたのをその子白蟻が補ひて四卷となし、寶曆十年に刊行したものである。第一卷には漢字の起原・沿革を論じ、第二卷以下には本邦の文字を説いたもので、神代文字・平假名・片假名より我が邦で作られた漢字にまで説及んであつて、後の文字論をなすものに影響を與へてゐる。白石は語原を説くには古典にては古事記を第一とし、古語拾遺をこれに次ぐとし、次に日本紀・萬葉集の歌詞及び風土記の詞を徴として略語・轉語・反語等の方式により解

釋を試みたもので、貞徳や益軒の如く牽強傳會に陥ることを避け、苟も明徴を得ざるものは強ひて解釋を下さないで「義不詳」として後人を誤つことゝしてゐる。この學者的態度は實に欽仰すべきである。同じ轉略を説くにも益軒とは雲泥の差がある。

古 史 通

古史の解釋に關して古史通の説も參考とすべく、諸冊二尊が大八洲を産むを釋して、「うむ」に二義があつて、一つは國土を開拓經營する義と説くなど、説の當否はともあれ、一隻眼を具へたものと謂つて然るべく、東雅が釋義を名詞だけにとどめた點は惜しむべく、東音譜にも未だオ・ヲの所屬を正すに至らず、また文字論その他にも今日よりいへば議すべきものがあるが、言語學上とにかく劃期的の著と見るべきである。(上田萬年博士の言語學者としての新井白石—史學雜誌・明治二十八年三・四月號—參照)

南 留 別 志

可成談三註
ざるべし
あるまじ
非なるべし

この他漢學者で國語の語原を説いたものには荻生徂徠がある。徂徠は古文辭學派を唱へた人で、一世の鴻儒と云はれてゐる。前二氏とは異り、國學には深く入つてゐないが、隨筆南留別志を著し、四百餘項に互つて語原を説いた。中に創見といふべきものがないでもないが、才に任せた一時の思附を書いた如何はしい説が少くない。篠崎東海等三人の三註もある。その誤を是正したものに、小さなものではあるが、谷真潮の「ざるべし」があり、伊勢貞丈には「あるまじ」の著があり、銀郷散人は「南留別志の辨」を著し、富士谷成章は「非なるべし」を書いた。この書は歿後天明六年に版になつてゐる。徂徠が「みかど」は「みこと」から來たとか、葛を「かつら」と呼ぶは字音から來たといふが如きをこれゝ反

駁してゐる。

言元梯

國學者で語原の字書を作つたのはずつと下つて文政十三年に大石千引が著した五十音引の言元梯があるが、素より東雅に比すべきものではない。

四 國學の成立

國 學

圓珠庵契沖等によつて創められた古學はやがて荷田春滿によつて國家的信念に基く國學となつた。春滿は山城の稻荷の祠官信詮の二男で、家學を承け、終生戀歌を詠じなかつた人、國學三大人の一と世にたゞへられてゐる。こゝに國學といふは漢學に對するの稱で、言ひ換へれば日本學である。國史も古代法典も國文も有職故實も語法學も一切を包含する極めて廣汎な日本學の總稱である。春滿は我が古代文化の中に存する古道に理想的價值を見出してこれを復興しようとし、古學を提唱した。その意見は幕府に上つた創學校啓に明かである。

創學校啓

格律の學と 詠歌の道

古語不_レ通、則古義不_レ明、古義不_レ明、則古學不_レ復焉、先王之風掃_レ跡、古賢之意近_レ荒、

と云つて、格律の學と詠歌の道をその二大教科となさうとしてゐる。我が國は神國なりの思想は正統記にも高唱され、國語を愛用すべきことは愚管抄にも夙に唱へられてをり、また近代の意義で神皇の教、國家の學を提唱したものは山鹿素行の著作にも見えてゐるが、國學の名にてこれを理想とし、學とし、教となさうと渾身の誠意と溢れるばかりの熱情とを以て主張したのは實に春滿大人である。而してその

精神は門人賀茂眞淵によつて一般に普及されるに至つた。(創學校啓の稿本には國學の名に皇學となつてゐる。)

契沖と春満
との比較

春満と契沖と比較するに、その學は互ひに異同がある。古事記・萬葉及び伊勢物語に關しては共に著作がある。前者の代匠記や勢語臆斷に對し後者には萬葉僻案抄や伊勢物語童子問がある。前者には源註餘滴の如き文學の註釋があるが、神道や制度に關する著作はない。後者には律令の講義はあるが、源氏に關する研究は見えない。これは身分の相違からも來てゐる。等しく實證的研究態度をとつてゐても契沖は分析的、春満は總合的傾向の差があり、一方は客觀的なるに對し他方は主觀的理念的傾向が強い。契沖は悉曇に委しくて語學的考察に長じ、春満は解釋上獨創的な點はあるが、語學的の才は一籌を輸してゐる。それでも萬葉僻案抄には枕詞や序詞の稱を改めて冠辭又冠句と稱へ、疑辭・發語辭・命令辭・歎辭・決辭等の名辭を定めてゐる。

冠辭の釋義

中に冠辭の釋義に關しては燭明抄の跡を追はないで新意を述べたものがある。隱口の泊瀬を解して、上下同一にして上は古語、下はそれに對する現代語といふが如きは俄かに首肯も出來がたいが、斬新の説である。契沖は著作家、春満は講壇の人といふが如き相違があつたのではあるまいか。

春満の冠辭における研究は國學院雜誌荷田春満二百年記念號に著者の小考を載せて置いた。

五 賀茂眞淵

賀茂眞淵は歌人で哲學者で兼ねて學者である。契沖も奉滿も萬葉の研究者でそれにあこがれを以てゐたが、自家の詠風はそれ程ではなかつた。眞淵は萬葉を理念とし、その歌がまた萬葉の域に入つて古人に劣らぬものを遺した。その性格は哲人的の一面を有し、古文明主義の思想家であつて、縣居に於ける實生活も素朴な上代文化を理想化してゐたらしく想はれる。

古文明主義
の思想家

國體に關す
る著作

學は記紀・萬葉・祝詞の如き古典より、平安朝の物語・歌謡その夙き時代の和歌の如き文學より有職まで、また國體その他に關係せる意見を述べたものには國意考・歌意考・文意考・書意考より歌論に關するもの、冠辭考・語意考の如き語學に屬するもの等その方面が廣く、三卿の隨一たる田安中納言宗武卿の眷遇を蒙り、その學風は天下を風靡した概があり、國學の隆盛に與つて大いに力があつたと謂つて宜しい。但し國語學上の業績は歌文のそれに比しては遜色がある。

語意考

國語の特性

中に語意考は晩年の未定稿といはれ、稿本と板本とにより少異があるが、首に國語の特性に關する見解を述べ、次に國語理法の考究を擧げてある。我が國は支那及び印度と國柄を異にし、人心純朴で事も

五十音圖

言も少く、五十音にて事足り、この音圖は神代の昔よりかはらぬものと國粹的に述べ、悉曇家に就いては「豎なる音の起れること、縦横の音の通ふ事等聊かの事らいふのみ」と評し、「この國の上代より用來りて定めある詞の分ちは横の音にこそあれ」といつて、五十音の

第一横列には はじめのことば 初

第二横列 は うごかぬことば 體

第三横列 は うごくことば 用

第四横列 は おほすることば 令

第五横列 は たすくことば 助

初體用令助

であると命名し、用言活用を説いてある。初といふは「行かん」・「越さん」の類、體は名詞になる場合の外に言のはてに置かれるときも事定まりて動かないとし、用は「ゆく」・「越す」の類、令は「行け」・「越せ」の類、助は「をこそとのほよろお」の中、「彼を」・「彼ぞ」・「彼と」・「彼の」・「彼も」・「爲よ」・「家ろ」の如く詞の助けに用ゐるものといひ、か行とは行の第五横列には助が無いので、平言に用ゐる「行こ」・「云ほ」の類を充てゝある。次に活用言を各位に互つて表示するところもあるが、實證的でないので無理がある。例へば老の字を

研究的態度
が實證的でない

おはん・おい・おゆ・おえ・およ

賀茂眞淵

と活かすやうな失敗に陥つてゐる。もし實證的歸納的に考察すれば、各横列に活くものとその横列に限りて活くものとを區別せらるべきに、いづれの活用も同一に見倣してある。

體用の區別

體用の區別に關し、契沖は和字通妨抄中に

和語に體用にわたると、體にして用にわたらぬと、ひとへに用にして體にわたらぬとあり。

といひ、三種の區別を明確に説いてゐるのに示唆を受けたものか。

音韻の研究

次に音韻に關しては、延言・約言・略言を説き、清濁に就いてはば行とま行、ざ行とな行、だ行とな行、が行とら行の通用、漢吳二音の關係などを説いてある。谷川士清が寶曆十二年刊行の日本書紀通證の附録に五十音圖を掲げ、

あ列 聲韻　い列 未定　う列 已定　え列 告人　お列 自言

の名稱を附してゐるのと粗、時を同じくしてゐる。眞淵が國語の優越性を高唱してゐるのは春滿の國家思想に職由し、一層國粹的に考へたものである。

冠辭考

次に冠辭考はその名著の一つで、我が國語に特有な枕詞三百餘を集めて註釋したもの、長流の燭明抄が唯古人の諸説を集めたのとは異り、頗る研究的態度を以て註釋を下し、上下の連接を明かにした頗る創見に富んだものである。その名稱は師春滿の説に基き、その詞の意義に關しては從來の次の詞を云ひ出づる爲に置くといふ説を改め、歌のリズムの上から割出し、詞の足らぬところをよそひ、調べをと

その種類

のへるものとし、その種類に關しては、

ひさかたのあめは象^{かた}をたとへ、そらみつやまとはゆゑをいひ、ちはやぶる神は性^{まが}を擧げ、たちちねのははもとをたゞへ、弱草^{わかくさ}のつまはたぐひをなん引ける。

冠辭考の補篇

とその序に五種を分ち、その成立に關してはその多くは上代より用ゐ、藤原奈良朝に起るものは少いと云つてゐる。要するにこの詞に關しては劃期的の著作であつて、本居宣長の如きもこの書を読みて賛を執つて教を請はんとするに至つたと云はれてゐる。寶曆十年刊行十冊として世に行はれ、これに亞いで門人桿取魚彦の續冠辭考・冠辭懸緒、服部高保の續冠辭考、上田秋成の冠辭考續貂等續出するに至つた。尙枕詞に就きては拙著枕詞の研究と釋義に委しく説いて置いた。

六 富士谷成章の出づるまで

手爾波の研究は明和・安永の頃に至り富士谷成章・本居宣長二大家によつて劃期的の進展を來した。この兩大家の業績は方途は異つてゐるが、國語學界に投じた光は共に偉大である。一方は個々の手爾波のもつ意義と史的用法に於て、一方は歌文呼應の上に於て各道を開いたのである。吾人はまづ前期の後をうけ、二大家の前驅となつた二三子に就いて述べる。

氏通平波義
慣鈔

手爾波の歸納的研究に志した人に雀部信類がある。古寫の一本には信賴となつてゐる。その學統は不明であるが、寶曆十年氏通平波義慣鈔を著した。手爾波は神代より定まつた法があり、これに背くときは意義の通じがたきことをいひ、各種のてにはの用法を實證的に示さうとしたもので、すべての例證を古今集から取つてゐて、例の多きは時に百二百にも及ぶことがあり、その種類としては元にくぐらすもの、今のたゞち、後をかけたもの、ねがひ、うたがひ、云ひ捨つる、程ふる、添へ足らしむる等數々があるとし、一つのてにはにても種々の姿に用ゐられることを示し、一面には係結を説きて「こそ」「ぞ」「や」「か」「の」ばかりでなく、「は」「も」も結びの上に一種の制約のあることを示してゐる。本

居翁の紐鏡や詞玉緒の先驅的意義を有するもので、特に古今集一集の助辭の研究を志したところにその價值を見る。尙部分的にみれば、歌體のこと、枕辭・懸詞・延辭及び「さへ」「だに」の區別、「たゞ」「なほ」「かつ」等副詞の一部分にも説き及んでゐる。

尙、その後を追うたものに村上織部があり、明和六年古今集助辭分類を著した。てには代へるに助辭の名を以てしたるはこの書に始まる。古今一集の助辭研究はよいが、その分類といふは學術的に性質の上から試みたものではなくて、五音第一韻より次第に並べたのに過ぎない。その種類と見るべきは發語の辭・語末の助辭・反語の辭・歎の辭・助語の辭・容様の辭などである。

その翌年九月榎井道敏はてには網引綱二卷を公にした。道敏は武者小路實陰卿の門人で一室と號した京都の書籍商人である。てにはの名義に關し出葉説を斥け、ヲコト點から起つたことを説き、數百年の謬説を是正した。

またこの道に關する祕密傳受の弊風を指摘して、手爾葉大概抄は定家の著でなく、後人の假託に成つたものと斷じ、春樹顯秘抄の如きも、詞とてにはとを混じてゐて信賴するに足らずといひ、一體つゝ留・かな留は祕傳だなどといふ説を斥け、天下の道を一家の祕傳と心得るのは極めて僻事であるといつてゐる。茂睡が制詞を破し、契沖が假名遣でとつた態度を道敏はてにはの上に強調してゐる。

近代てにはの諸書に、魂を入るゝてにはと云つて、「たゞ」「なほ」「さへ」「だに」「など」「そと

「て」等を擧げてあるが、「たゞ」「なほ」「いとゞ」等は詞であつて、てにはではないとし、てにはの範圍を定めたもので、當時品詞の分類が十分でなかつた當時とて猶不十分な點もあるが、この研究に一轉機を與へようとした。

上卷には「て」「に」「を」「は」「ぞ」「こそ」「と」「の」「も」「さへ」「だに」「か」「や」及びその複合したものを説き、下卷には「けり」「なり」「めり」「たり」「せり」「べし」「ぬ」「つ」等の結となるべき辭を擧げて、その終止・連體・已然の活用形に屬すべき變化を一つ／＼説いてゐる。

上卷に「が」「なん」を逸し、下卷に打消及び未來の辭を缺き、過去の「し」「しか」を説かない如き缺漏もあるが、後人の分ける助動詞・助詞の區別があり、てにはの範疇をよく見定めて、簡にして要を得たる分類を用ゐ、最後の「てには用意の事」の一條の中には

てにはの義數品あるやうなれど、所詮は切と續くとの二つ也。文章に句讀あるが如し。

活語斷續

と云つてゐる。實にこの一書はてには研究の上に、活語斷續の上に大きな示唆を與へたものと思ふ。

蜘蛛のすがき

道敏はその後安永九年に蜘蛛のすがき二卷を著し、前言の後を承けて、甲卷にはてにはの意義を明かにし、乙卷には唯・猶・早・先・いで・いさ・將・又・且等の虚字や此・是・その・それ等の類を説いた。

詞の秋草

この二書は後合本とし、文化十一年詞の秋草と題して、上梓した。亭蘭平波の辨を書いた幻交庵はこ

の門である。虚字・實字の別は漢文に説く用語で、夙くも室町時代に一條兼良は歌林良材集に虚字言葉の稱を用ゐてゐ、道敏より後には難波の加藤景範が和歌虚詞考を書いたぐらゐで、国歌の上には多く用ゐられないが、てにはの中から副詞・代名詞に屬する類を區別したのは具眼と云つて然るべきである。

七 富士谷成章の語學說

貞享・元祿以降契沖・春滿・眞淵等の大家が出て古典の研究は略々緒に就いたが、古學提唱の盛んなるに反し、中古の和歌の研究は輕く見られてゐた。この期に至り古學研究と同じ精神を以て中古文學を檢討し、その中に存する語法の研究に進まうとするものが出て來つた。斯界の麒麟兒富士谷成章はその代表的な人である。

成章は京都の人、皆川洪園の弟で、柳川藩の富士谷家を襲いだ。歌を廣橋兼胤卿に學び、有栖川宮の御門人にも加へられた。堂上家の教を受けたが、獨創の見到に富んでゐて、その第一著かざし抄は明和四年八月に成り、門人吉川彦富・山口高瑞の筆受した稿が上木された。成章は國語を分類して挿頭・裝・

脚結・名の四種に分つた。蓋し人の身裝に象つたもので、そのことは脚結抄の首卷おほむねの中に

名をもて物をことわり、裝をもて事をさだめ、挿頭脚結をもてことはをたすく。この四のくらゐははしめひとつのことたまなり。

と云つてゐる。挿頭抄はのかざしを説いたもの、安永二年あゆひ抄六卷が筆受をうけた門人吉川彦富

・井上義胤の名によつて上梓せられてゐる。装抄は板に上せるに至らなかつた。名の事をかいた於保止布美はその稿本さへ今は分らない。この四分法は

挿 いつ
 挿 わきて
 名 こよひ
 脚 の
 装 めづらしき
 脚 かな
 挿 とても
 名 月
 装 み
 脚 ぬ
 名 秋
 脚 は
 装 なき
 脚 ものを

この歌によつて大體が知られる。一體言語全體を一つの原理から統紀のある分類をなすことは容易なことではない。成章はこの分類を試みたことだけでも語學者として相當の地位にすゑられて然るべきである。

この四種のうち装は活用言を指したもので、あゆひ抄のおほむねの下に

凡装には二むねあり。事とさまと也。こまかにいへば事に二むねあり。事とありなと也。狀に四む

ねあり。しさま・しきさま・ありさま・かへしさま也。装二むねともいひ、六むねともいふは此よ
 芝狀 鋪狀 存狀 返狀

し也。六むねをおしこめて装といふ。むねことに本・末・引・靡・きしかた・めのまへ・あらま
し、靡伏 ふし目、たちもとのすち／＼あることは、こゝにいひつくしかたし。左にいだせるかた
がきを見てかつ／＼心うべし。

といひ、装の圖を示してゐる。その圖は次頁に示す如くである。

事といふは今の動詞、
 状といふは形容詞、
 芝状は「く」活、
 舗状は「しく」活、
 孔名はら行存在動

富士谷成章の語學說

引靡と靡伏と

芝狀・鋪狀
立本と伏目

詞、在狀は形容動詞である。事と狀との全體に互りてその變化を本・末・引靡・往・目・來等に分け、それらの關係により六類に分けてゐる。本は語幹・末は終止形の語尾を指してゐる。二段一段三段活に見る第二次的の語尾は末と區別し、ルは靡といひ、レは靡伏といひ、存在詞・形容詞・形容動詞の連體形に當る語尾は、靡と云はないで引と名づけてゐる。往目來は過去・現在・未來の三形を意味し、これを活用形の範疇に入れてゐる。芝狀・鋪狀即ち今の形容詞にはその語尾を立本^{タテホ}といひ、「け」の語尾を伏

裝圖

事									
事									
思	打	見	得	寝	為	來	居	本末	
登	う	み	み	ぬ	ど	く	う	詞	
ふ	つ	ル	ル	ル	ル	ル	ル	往目來	
ひ	ち	み	え	ぬ	い	き	お	靡	
へ	て	み	え	ぬ	せ	こ	お	靡	
た	み	レ	レ	レ	レ	レ	レ	靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	
								靡	

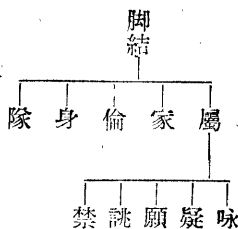
目と名づけてゐる。動詞はう緯を末とし、存在動詞は「り」、形容動詞は「り」の外に中止形に當る「に」文字を末とすることを認め、五音相通を立・起・居・伏・隱の名稱を以て區別してゐる。今日より云へば二三の指摘すべきものもあるが、用言を一括してかゝる妥當な活用圖を作製したことは洵に空前のことと云ふべく、その鬼才に驚嘆せざるを得ないのである。而してこの圖表は單に理論上から割出した空論的のもの

表裏の別

ゐるものを詳説してある。また靡の有無により表裏の別を立て、「雲霧立つ」は靡のないもので自立自添であり、「煙を立つ」は靡のある方で、立之添之である。前者を裏とし、後者を表と名づけ、後にいふ自他の相を説いてゐる。

あゆひの五
類五十種

次にあゆひは名や装の下に接するもので、今日の助動詞・助詞・感動詞及び接尾辭を總攝させたもの。彼れの脚結の研究は装と名との接續關係を考へ、時代的變遷を明かにし、箇々の意義を詳かにし、また上下の呼應を考察しようとしたのである。即ち意義と接續とにより五類五十種に分類した。



屬と家には名を受くべきもの、中に屬は主として結尾に用ゐるもの、家は否らざるものを集め、倫と身とは立居すべきもの、即ち語尾變化する助辭を集め、隊には主として動詞・形容詞に添うて副詞を作るものを集めてゐる。係結に關しては「うちあひ」といふ語を用ゐ、總括的ではないが、箇々のあゆひに就いてこれを説いてゐる。その變體である「ぞ」などの係がなくて連體形で結んだものを「なびきづ

かたひゞき

め」といひ、上に打合はないで「らん・けん」の類で結んだ類を「かたひゞき」と名づけてその區別を示してゐる。

言語の時代
的考察

六運説

昔といふにも遠いと近いとの別がある。遠き昔ばかりを究めて近き昔を疎かにするは偏つたもので、古今の言語をあるがまゝに見渡すことは言語學者の務である。成章は時代と言語といふことに着目し、縦に言語の變遷をながめようとした。その資料は和歌に限られてはあるが、上代より近世までを見渡し、て六運説即ち六期の變遷あることを唱へた。六運とは

上つ世 開闢より光仁の御代まで

中昔 其後より花山院の御代まで 二百五年

中頃 それより後白河院の御代まで 百七十二年

近昔 それより四條院の御代まで 八十四年

をとつ世 それより後花園の御代まで 二百二十四年

今の世 後花園天皇以後

である。この區分には更正を加ふべきものもあるが、語法を時代的に分けるのは歴史的文法の嚆矢といふべく、それも彼れの創見である。歐洲で始めてヒストリカル・グラママアを唱へたグリムよりも成章のこの提唱がズツト夙い時代であるのはお互ひに愉悅を感じべきである。

言語の起原

尙、脚結抄にはその序論に言語の起原説を述べて、天地の言魂はそれはじめは混沌たるもので、名にもあらず、かざし・よそひ・あゆひのいづれでもなかつたが、後にそれを分化したと云つてゐる。かくて品詞を四つに分ち、その職能を説いてゐ、また活用圖を五十音によるや、を・おの所屬を改めた點なども特記せねばならぬ。

かざしの内
容

挿頭抄は彼れの所謂かざし九十六種二百二十餘語を五十音順に列ねてその意義・用語を説き、例歌を示したもので、「あやに」「いかゞ」等の副詞に屬するものが大部分を占め、「あな」「いざ」の如き感嘆詞及び代名詞、少數の接續詞・接頭辭を含むもので、別に體系を立てないが、その國語品詞論から見ると重要な意義があるもので、從來これらの詞は皆てにはの中に混在せしめてゐたのを飾分け、文章に於ける位置の上から名詞を除いた自餘のものを包括せしめた一部門であるからである。この書は既に述べたてには網引綱よりも成立が早いのであるから、史的に見ても價值がある。況んや引例ゆたかに且あゆひ抄と同じく現代語に譯して、相互の關係を知らしめる上にも多大の勞力を用ゐたことをも認めねばならぬ。

この偉大な國語學者は安永八年四十二歳の壯齡で世を風くした。嗣子なほ幼く、門下に能繼者がなくして、その學派が大いに發展興隆するに至らなかつたのは、惜しみて惜しむべきである。

長子成壽後御杖と改む。衣鉢をつぎて幾多の著作を遺した。特に歌文の方面に良著がある。寛政四年

歌六運辨袋
則修南辨乃異

脚結翼

に出した歌袋は世に流布したもの、六運辨はその中に收めてある。弟成宗の爲に同六年に稿を起した吟
南辨乃異則はその詳説と見るべきであるが、歌學が主となつてゐる。その前年に上刊した歌道非唯抄の
附録にも冠・かざし・よそひ・あゆひなどの辨を書いてゐる。脚結翼は巻數ははつきりと分らない。二
卷はその家に傳へてゐる。

俳諧天爾波抄

門人浦井有國が筆受した俳諧天爾波抄六卷は文化四年に上刊した。俳諧に於ける切字を脚結抄のやう
に解説したもので、和歌・連歌・俳諧三道に互りて語法の共存することを示したものの。

四具攷證錄

近年發見された四具攷證錄七卷は古語の文法的辭書ともいふべきもので、古語を五十音順に列ね、名
・かざし・あゆひ等を一々記したものの。富士谷語學字典である。

門人福田美楯の筆受した裝抄によると、あゆひの被身・令身・爲身を説いたと思はれる三身圖説の如
き著もあつたらしいが、筆受を主とした爲に流布しないのは富士谷派語學の爲に惜しいことである。

保田光則

御杖に私淑した加賀の五十嵐篤好にも隨筆などに語學を説いたものがあつたが、今は散じて容易に見
られない。仙臺の保田光則に

挿頭抄増補 三卷

新撰裝抄 一卷

脚結抄増補 六卷 以上寫本

富士谷成章の語學説

裝詞打合圖・脚結詞打合圖 一摺

脚結抄増補

の著がある。中に脚結抄増補には五屬の外に

敬屬 呼屬 問屬 助辭屬

の四つを加へた。世に多く流布しないが、名の如く丹念に増補をしたに止まり、創見は極めて少い。富山の藩主前田利保侯も一時富士谷語學の影響を受け、著作を遺してゐる。

八 韻鏡の研究

國語には漢語が澤山に取り入れられてある。それを正確に取扱ふには韻鏡の知識を借らねばならぬ。

明了房信範

切要抄と開
資抄

磨光韻鏡

韻鏡は支那の音韻の圖表である。その制作は唐の末期に上らぬであらう。我が國に傳來したのは可なり早い時代であらうが、研究するものが久しくなかつた。然るに龜山天皇の文永年中奈良の轉經院の律師某が書庫の中より發見し、何の書たるを知らなかつたが、悉曇學に造詣深き明了房信範がこれに訓點を附し、漸く世に行はれるに至つた。後、後奈良天皇の享祿年中清原宣賢が跋を作り、泉州堺の宗仲か上梓した。その後住譽が切要抄を作り、宥朝が開資抄卷六を著してから、その類が無慮百五十餘卷に上るといふ。併しその多くは姓名判斷などの爲に用ゐられるに過ぎなかつた。釋文雄の磨光韻鏡が出るに及んで始めて韻鏡の韻鏡たる所以が明かになつたと云はれてゐる。

文雄は京都了蓮寺の僧、太宰春臺に學び、延享元年磨光韻鏡二卷を上梓した。

韻鏡は四十三圖から成り、每圖二十三行十六段に分けて配置してある。縦の二十三行は唇・舌・牙・齒・喉・半齒・半舌の七音を更に清・次清・濁・清濁に分け、これに三十六字母を配したもの、横の十

四十三轉

六段は平上去入の四聲を更に開・發・收・閉によつて一等乃至四等に分け、二百六韻を配したもので、縦横を合せ見て漢字の音韻を正し得るもので、四十三圖は四十三轉と云ひ、每轉十六通攝と内外及び閉合の別が記してある。

韻鏡使用法

磨光韻鏡は上卷に四十三轉輕重字母完局の圖說内轉第一合から四十三合までの圖說、下卷は韻鏡使用法の説明であつて、本來韻鏡は音譜であり、反切の爲に作つたものでないこと、唐音研究から唇音・舌音・齒音の輕重の別を明かにしたこと、開口音・合口音の區別の説明を試みたこと等その創見と云はれてゐる。この書には附録として韻鏡索隱・翻切門法・字庫・伐柯篇・指要錄及び餘論があり、九弄辨があり、字彙莊獄音があり、經史莊獄音があり、三音正譌がある。

附錄

三音正譌

三音正譌は寶曆二年の出版にかゝり、吳音・漢音・唐音の三音に就いて考究したもので、上卷は論、下卷は韻鏡の順に文字を列ね、その音を正してある。吳音は本邦讀書の舊音で、今佛氏用のゐる音である。漢音は今の儒家の傳へる音で桓武天皇より始まるといつてある。本居宣長の漢字三音考はこの書の影響を受けたところが少くない。

字音假字用格

宣長は漢字の漢音と吳音とを研究し、安永四年字音假字用格一卷を著した。字音假名遣に關しては契沖・文雄等も研究してゐるが、専らこれを考究したのはこの書を始めとする。その首にア・ヤ・ワ三行の關係を述べ、從來誤り來つたオ・ヲ所屬を是正し、三行分生圖・輕重等第圖をも加へてある。後當樞廣

同 追 考

蔭は字音假字用格追考一卷を作る。宣長のこの著は字音の假名遣にも一定の條理あることを示し、その基礎を學問的に確立したものととして重んぜられ、屢々重刊された。またこの書に對する駁論も出た。

宣長は天明五年更に漢字三音考を出し、寛政十二年に地名字音轉用例を公にして字音に對するその考究を全うした。それは別に述べることゝして茲には文雄の韻鏡に對し、泰山蔚が寛政十一年に公にした音韻斷に觸れることゝする。

音 韻 斷

韻鏡藤氏傳
の誤

この書上中の二卷は磨光韻鏡辨正とし、下卷は韻鏡非藤氏傳としてあつて、磨光韻鏡が韻鏡第十一轉を合轉に改めたのは却つて誤であるとし、その不可を論じ、また韻鏡藤氏傳がヲ・オの所屬について、ア行とワ行と相通するとする説の不當なるを説いて、本居翁の字音假字用格の説を是なりとしたこと等は注意すべき點である。

太田 全 齋

漢 吳 音 圖

漢 吳 音 微
漢 吳 音 圖 說

その後韻鏡學者として備後の太田全齋が著れてゐる。その名著漢吳音圖は、最初その妻女一子と共に自ら刻し、二十部だけを手摺にしたといふ涙ぐましい逸話が傳はつてゐる。文化十二年の刊本があり、(天保の刻本は改刪した部がある)三卷から成り、その中の漢吳音圖は内轉第一合から第四十三合までの圖を記し、漢吳音微は第一轉合より第四十三轉まで各音韻の疑はしいものを考證し、漢吳音圖説は音韻研究の必要を述べて音圖の説明をなしてある。以上三部は相關のものにて音圖に序がある。磨光韻鏡に對して、

磨光韻鏡の
批評

曩時京都ノ韻學僧文雄磨光韻鏡ヲ著ス。其餘ノ著作亦多シ。此學ニ勤メタルコト誠ニ苦メリ。後生ヲ惠ムコト殊ニ深切ナリト謂ベシ。然レドモ漢吳音圖ノ國字譯ハ錯亂訛誤甚多シ。一二ヲイハハ爲胃位ニイノ國字ヲツケ、依衣ニエノ國字ヲツケ、於ニヲ、隱ニランノ國字ヲツクル類、及哀愛ノ吳音エ、褒寶ノ吳音ホウヲ遺セルナド尙多シ。

と云ひ、本居翁の著に對して

字音假字用
格の批評

本居氏字音假字用格ハ講究詳悉誠ニ字音ニ大功アリ。然レドモ第十一轉ノ開口ナルヲ文雄ノ本ニ從ヒテ合口ナリトオモハレシヨリ、樂家ノ譜ニ據テ開合指掌圖ヲ新製セラレ、於字開合兩轉ニワタルコトヲイハレタリ。此ハ凡テオノ假名ノ字音ハ合口ナルニ、ソノ假名タル於ノ字合轉ナル故ニ說窮シタルヨリノ考ヘニテ必畢鑿說ナリ。樂家ニハサルコトモアルベケレド、字音ニハ元來管ザルコトナリ。又本居氏昔ヨリ韻學者ノ傳來スル直勘圖ヲ更メテ堅ニ黷シ、三會圖トイフモノヲ擬作セラレタリ。此二圖ハ皆贅物ナリ。然レドモアワ兩行ノ於遠ノ所屬ヲ定メラレタルハ千古ノ卓見爲ニ執鞭スベキモノナリ。

漢吳音圖の
功罪

濱野氏刊本

と評してゐる。磨光韻鏡の誤つてゐた開合を正したこと、撥音中m音韻とn音韻との區別を明かにしたこと等を始め世の學者の尊しとする著なれど、元音・次音の別を立て、諺文でこれを説いてゐるなどは大きな錯誤である。尙、濱野知三郎氏の大正四年の刊本には以上の外、

音微不盡 同窠音圖 音圖口義 全齋讀例

をも併せて出した。(漢吳音圖の解剖的批判・満田新造「大正十一」「東洋學報」參照)

關政
聲調篇方

男信質疑

これに次ぎて備中の關政方が出て音韻の學に意を用ゐ、天保十一年聲調篇二卷を著して悉曇及び韻鏡によつて發音の根源・音韻變化の沿革を説く。中に韻鏡を批評したところが多く、傾聴すべきものがある。彼れは東條義門とも書信の上で交りがあつて、男信質疑の著もあるが、その著は寫本が僅かに傳へてゐるに過ぎないで、尊き研究も未だ遍く世に知られてゐない。(國語學大系音韻篇參照)

黒川春村
音韻考證

江戸の黒川春村も音韻の學に志深く、文久二年音韻考證を著す。漢吳音圖を基とし、諸書を參考して我が國上代の漢字音を明かにした。全齋の著は統一を圖らうとして實證を缺いてゐるものがある。上代に我が邦に入つた漢字音は韻鏡に合しないものがあるに、それを同一律に扱はうとする所に無理が生ずる。春村は實證を掲げてその説を補正せんとしたものである。寫本であつて卷數は定まつてない。著者が上野國の新井守村に答へた書には四十有餘卷とあり、赤堀氏の國語書目解題には二十二卷とあり、管見に觸れたものは無窮會の二卷本である。

白井寬蔭

春村の門人白井寬蔭は萬延元年師説に基き、音韻假字用例三卷を出した。上卷は音圖、中・下の二卷は附説であつて、本居翁の説を是正するところが少くない。上卷表紙裏の書肆の言に

音韻假字用
例

此書は萬葉集の假字借字古今物名等を徴とし、韻鏡の規則によりて字音假字用格の誤をこまやかに

辨へ、かれは纔に一千七百餘字を舉たるを、これは一萬一千二百餘字を載せ、且分註に漢吳直掬の四音を舉たれば皇國の古書を解くに便よきことはさらなり云々

これは宣傳の意も加はつてゐるが、字音假名遣に根ざし、次第に是正された跡が見られる。猶義門その他の音韻に關することは本居家の語學説を紹介した後更に説くであらう。

九 本居宣長の語學

古典研究と
神ながらの
道

本居宣長は國學三大人中最も光をはなつた人で、春滿の熱意や眞淵の超越性は乏しいとしても孜々として努め、醇々として倦まなかつた人、始めは中世文學から入つたが、京都遊學中に契沖の著作に親しみ、文獻學的研究を喜び、中頃眞淵に接して古道主義に浸り、古事記の研究を學問の中心となし、古典研究によつて古の神皇のうるはしい道を體得し、神ながらの道を唱へた。また一面には中世文學の最大傑作たる源氏物語以下の文學を味讀して新しい文藝觀を主張し、講學に著作に一生を委ねて七十二歳の間滿な生活を送つた人、時代が自國愛を忘れて他を尊ぶの風が熾なるを慨して、國體の美を説いて尊内卑外の精神を鼓吹した。隨つて常に文獻學的實證派的研究態度を取りながら、一面は絶對無比の國粹の學者であつた。溫良の君子人でありながら、苟も國體に反する言説を唱へるものはこれを筆誅して止まなかつた。

國粹的の學
者

語學上の著
作

みづからは語學者を以て居なかつたが、古典並びに中古文學の研究から得た語學上の智識は相當に達して、次に擧げる七部の語學はそれ／＼後の學者に影響を與へたこと洵に大きい。

本居宣長の語學

てにを紐鏡 一舖 明和八年刊

字音假字用格 一 安永四年成翌年刊

詞 玉 緒 七 安永八年成寛政四年刊

御國詞活用抄 一 天明二年成明治十九年刊

漢字三音考 一 天明四年成同五年刊

地名字音轉用例 一 寛政十年刊

呵刈葭後篇 一 寛政二年

以上の中音韻に關するものは字音假字用格・漢字三音考・地名字音轉用例・呵刈葭の四篇であるが、字音假字用格に關しては既に説いた。爰にはまづ三音考に就きて述べん。

この書は皇國の正音・皇國の言語以下音釋呼法に至る二十項に互り、まづ我が國語は萬國に卓絶して勝れたことを述べ、漢字の漢音・吳音・唐音の來由・正否・優劣を論じたもので、三音を地理的歴史的に考察したところに價值がある。我が五十音は天地の純粹正雅の音で、外國の音は鳥獸萬物の聲に近い等の比較論は尊卑内外の思想から出てゐる。五十音圖は一音の上にも活用形の形を具へてゐて、

正 語意考の是

第一音 は未だ然らざるに用ゐ、

第二音 は方に然るを下に云ひおくるに用ゐ、

第三音 は方に然るを云ひ定むるに用ゐ、

第四音 は然せよと令するに用ゐる。

母韻の發生

といふが如く、活用形を區別して、而も語意考の説を正してゐる。母韻の發生論を説き、皇國字音の格としては單音・イの韻・ウの韻・ン₁の韻・入聲の五つの別があることを述べ、撥音三内の別は我が語音にはないと斷じ、昔はムばかりとした。この點に於て義門が後年男信を著して三内を明かにした。附録の音便論は契沖及び眞淵の説を整理して、イ・ウ・ン・促・半濁の五となしたところ簡にして要を得てゐる。

地名字音轉用例

次に地名字音轉用例は前書の姉妹篇ともいふべきもの。古く我が國の國名・郡名・郷名に充てた漢字の吳音とも漢音とも見えざるもの。例へば、山城の地名「相樂」を「サガラカ」、備前の地名「香止」を「カバト」と訓す如き類を倭名鈔その他より蒐集し、これを二十一類に分ちてその轉用の次第を明かにしたもので、併せて字音研究に貴重₁の資料を與へ、男信や音韻假字用例に影響を與へた。この二十一類といふは、ウの韻をガ・ギ・グ・ゴに用ゐたとか、またんの韻をマ・ミ・メ・モの韻に用ゐ、或はナ・ニ・ヌ・ネ、またラ行のリ・ルに用ゐるとか、撥音や入聲その他から考察してゐる。

呵刈葭は藤井貞幹の隨筆衝口發が國典よりも外國の史籍に重きを置いて、日本文化の起原を説いてゐるのに慨し、その漢意に浸毒されて本末顛倒せるを憤り、天明五年鉗狂人を著して攻撃したのを上田秋

成が評を加へて宣長の説を斥けたのを更に辨駁したもので、中に語學上に於ては、上代發音の有無に關し議論を闘はした一條と古言清濁に關する論争がある。

紐鏡
詞玉
緒鏡
三轉四十三
段

宣長の國語學上に於ける大きな功績はてにはの方則を定めたことである。それは明和八年に出したてにをは紐鏡である。それを立證した詞玉緒である。紐鏡はてにはの呼應に關する一つの指掌圖であつて歌道秘藏錄などに「かゝへ」と云つたのを係辭といひ、「おさへ」と云つたのを結と名づけ、係辭を三等に分ち、結辭を四十三種とした。所謂三轉四十三段である。三等の係辭は

第一 は・も・徒^た(¹)

第二 ぞ・の・や・何⁽²⁾

第三こそ

(1)「たゞ」は助辭を全く用ゐないもの。

(2)「何」は「なに」「なぜ」「いかに」「いかで」「いつ」

「いつく」「いつれ」「たれ」等をいふ。

で、結辭は「し・き・けれ」「き・し・しか」「ず・ぬ・ね」より「てん・てん・てめ」に至る。この四十三種の結辭は一括しててにはといつてあつても今の助辭とは範疇を異にし、動詞・形容詞・助動詞を包容したものである。また係辭の輕重により結法を異にする方則を示したもので、「こそ」や「ぞ」の呼應は夙くより認められたもの、「は」「も」「も」も結びの上に一種の制約をもつことは、氏邇乎波義憤鈔に認めたところであるが、すべての係辭を統制し、その輕重によりて三等に分ち、これを結ぶに、第一種には今いふ終止形、第二種には今の連體形、第三種には已然形の活用を以てする呼應各般の場合を考

へ、これを一つの圖表にまとめあげたことは斯學上に大きな記念塔を築いたものと謂つて宜しい。

詞玉緒七卷は、これより八年を経た安永八年に上刊せられ、豊富な例を引いて、前の規則を實證的に説明してある。初の六卷は八代集の和歌を以てし、終の一巻は古風の部及び文章の部とし、古風の部は主として萬葉集に就いてこれを説き、文章の部は古今集の序、同集の詞書及び土佐・伊勢・源氏等の日記物語の文に就いて檢し、前に擧げた法則は古今に互り歌文に通じて行はれた大道なりとした。呼應には準則はあるが、文の性質によつて種々の變體が生ずる。宣長はこれらを打切らずに變格と名づけ、いろ／＼と考察を加へ、あるがまゝを示してある。宣長のてにはの研究はその意義斷續に説き及んでゐるものもあるが、考究の中心とするところは係結にあつた。成章とは時を同じうしてゐるに拘らず、その範圍や所説が全く趣を異にし、互ひに影響の認むべきものなく、各異る方向に發展したのは兩大家の資質の相違に基くのであらう。

御國詞活用抄

「咲かば」と
「咲けば」と

宣長の活語に關する研究は三音考にも見るべく、玉緒にも見られるが、この方面の主著は御國詞活用抄である。三音考の條に述べたやうに、五十音圖に照して第一二三四と活用するものに未然・中止・終止・命令の四形あることを、別に名稱はつけないが、實體で認めてゐた。紐鏡には結辭となる終止・連體・已然の三形を、同じやうに名を設けず、實體であらはしてゐる。玉緒卷三には「ば」の接續により「咲かば」・「咲けば」の如き例により「既に然る事をいふと未然事をかねていふとの二つあり

と假定と現定との條件とを認めてゐた。而してこの然ることを云ふ「ば」はてにはの「ど」「ども」に對し、未然ことを云ふ「ば」はてにはの「と」「とも」に對する二つの條件をも説いてゐる。卷四には「いづれのてにをはにも皆つゞく辭より受くると切るゝ辭より受くるとの定まりは有事なり」といひ、「や」の助辭の文の中にある場合と末にある場合とについてその差を示してゐる。活用言とてにはの連接上に於ける一般的考究はまだ説いてゐないが、箇々に就いては以上の如く細説してゐる。

活用二十七會

御國詞活用抄は御國辭活用鏡・活用抄・活語活用抄・言語活用抄などとも呼ばれてゐる。活用を二十七會に分ち、それに屬する活用言を分類蒐集したもので、後の研究への準備的の勞作とも見える。その分類を見ると、第一會より第六會までは四段活用に當り、七會より十五會までは下二段、十五會より十二會までは上二段、二十三會は下二段、二十四會はさ行が行變格を上二段の形に、二十五會は上一段及び下一段、二十七會は形容詞に屬するものを收めてある。その中、四段のみは全活用形を擧げてあるが、二段・一段及び變格は「れ」の語尾を擧げず、形容詞も「けれ」の活用を缺いてある等不完全なところもあるが、各活用を變化によつて彙類したことはやがて八衢の粉本となつた譯である。

宣長の研究は分類や名稱や統理に遺されたところがあるが、事實は認知し示唆したものが多く、嗣子奉庭や鈴木胤や東條義門やその他の語學者の著作に影響したところが少くない。特に玉緒を研究するもの續出し、本書も多く出でて世上玉緒學者と呼ぶるゝ徒も少くなかつた。

十 本居派の語學者

すべて偉大な學者の出た後には、その學を繼承する幾多の群少學徒が出て師説を繼述するのが常である。紐鏡や玉緒の末書を舉げて見る。

ひも鏡うつし詞

ひも鏡うつし詞指一 市岡猛彦 享和四年刊

紐鏡に活用しない手爾波を少しく加へたもの。

詞の八千種

詞の八千種三卷 珠阿彌 寛政十一年刊

紐鏡を係辭の種類により三表に分ち、その結は一音のものを基準と立て、「ける」・「なる」の如きは「る」の中に攝ねさせ、次に「らし」・「まし」の如き二音のものをその次に置き、いづれも證歌を載せた。

紐鏡旁註考

紐鏡旁註考卷一 横河飲河 文化十三年寫

紐鏡の略解。

紐鏡中の心

紐鏡中の心卷二 大田豐年 文政十年刊

本居派の語學者

阿波侯夫人の爲に紐鏡を注し、玉緒にも説及んである。

賤の苧環

天爾遠波賤の苧環巻一 牛尾養庵 文政二年

紐鏡を説く。

かたばみぐさ

かたばみぐさ巻一 殿村常久 文政十三年刊

てにをはのととのへ、言葉の活きを圖表としたもの。

友かどみ

友かどみ一 東條義門 文政六年

紐鏡と春庭の詞八衢の活用圖を合せて一折の圖表としたもの。

和語説略圖

和語説略圖摺一 東條義門 天保六年刊

友かどみを改訂したもの。

次に玉緒に關するもの――

玉緒線分巻五 東條義門 天保二年起稿 同十二年成 嘉永四年刊

玉緒を詳細に批評補訂したもの。

玉緒解纏巻一 富樫廣蔭 寫

玉緒線分を評し、線分は却つてもつれを來すとし、それを解くとする。

玉緒末分櫛巻二 長野義言 天保十四年成 弘化二年刊

玉緒の肝要な部をぬき出し、不要の部を去り、足らざるを補ふ。

詞玉緒延約 卷二 幻裡庵 寫

玉緒の分類が煩雜だと云つて同類のものを彙類し、語意語釋に互りて補訂した。

てにをは係辭辨 卷一 萩原廣道 嘉永二年刊

係辭を批評し、新見を加へたもの。

詞玉緒縁接 卷一 八木立禮 嘉永四年成

玉緒に洩らした歌の格を説く。明治四十二年歌文珍書保存會にて出版。

詞玉緒補遺 卷六 中島廣足 嘉永五年成 同七年刊

繰分・末分櫛・係辭辨等に洩れたものを補ひ、誤れるを訂したもの。類書中傑出してゐる。

玉緒繕添 卷三 中村尙輔 慶應四年成

玉緒を補正したもの。

詞玉緒攷 卷一 岡本保孝

首に玉緒延約及び玉緒の批評を試み、玉緒を補正したもの。況齋叢書に收む。

玉緒頭註 卷一 權田直助 明治十六年刊

頭註を所々に加へて是正せるもの。

本居派の語學者

玉緒變格辨卷一 黒川眞頼 明治十六年刊

玉緒に變格としてある手爾波を輕重二種に分けてある。

助辭本義一覽卷二 橘守部 天保九年刊

玉緒の係辭を指辭、結辭を受辭に分け、語原を音義的に説を加へて反駁批評したもの。

直日靈

假名遣の事
清濁の假字
につきて

宣長は語學者を以て自らは居なかつた。古事記傳の完成に全幅の精神を注いでゐた。卷首の直日靈が道の信仰をいかに熱烈に述べてあるかを見る。而してその解釋には道をつくし、強辨に陥らないやうに努めた跡も明かに見られる。これと共に記に於ける用字法の研究を疎かにしなかつた。卷一に「假名遣の事」の條に假字書・正字・借字・その混用及び慣用法を説き、清濁の假字に關しては續紀以下の典籍には清濁音訓の混淆するも記紀萬葉の三書にはその區別が儼然として明かである。中にも紀には漢吳兩音を併用してゐるが、記には吳音を一字一音に使用し誤るところなく、例へば「か」の假字には清音に加・迦・訶・甲・可を用ゐ、濁音には賀・何・我を用ゐてゐる。賀の字は清濁通用を説く人もあれど、記中にこの字を用ゐるもの百三十餘、中に清音にあてたるは唯五つだけであるといふが如く、歸納的に述べてある。記紀萬葉に於ける清濁は記は最も正しく、萬葉はこれにつき、紀これに次ぐと玉勝間にも説いてゐる。

古言清濁考

この教を受けた石塚龍磨は寛政六年古言清濁考三卷を著し、記紀萬葉の清濁を實證した。龍磨はまた

古事記の假名につき、同音の假名も語によつて使用に定まりがあるとの師説に基き、記紀萬葉を始め奈良朝の文獻に於ける音標假名を精査し、

エ・ヤ・ケ・コ・ソ・ト・ヌ・ヒ・ヘ・ミ・メ・ヨ・ロ

假名遣奥山路

の十三音の假名が二類に分れ、同類は相通じ、異類には相通せず、語によつて定まりのあることを知り、假名遣奥山路三巻を著した。これにより上代の音韻組織が相當に複雑であつたことが分り、語源語釋の研究の上に新しい發見が生ずることゝなつた。

草鹿砥宣隆
古言別音鈔

後、草鹿砥宣隆がこれを理解し易からしめる爲に古言別音鈔一卷を著し、語を五十音に配列して曉り易からしめようとし、橋本進吉博士の研究によつてこの古代假名が一定不動のものとなつたことは前にも説いたやうである。

十一 歴史的假名遣の完成

尙次期の研究に入るに先ち、契沖の唱へた古典的歴史的假名遣の完成に至つた次第を述べる。

楫取魚彦

古言梯

舊派の假名遣が寶曆の頃に至つても猶跋扈してゐた次第は既に述べた。縣門の高足楫取魚彦は明和元年古事記・祝詞・萬葉・新撰字鏡・神樂・古今集・古物語等より據となるべきもの千三百八十三語を摘出してこれを五十音順に列ね、音數の少きものより次第に多きものに及ぼし、古言梯一卷を成して翌年上梓した。この書は確實な資料によつて、契沖の正濫鈔の不備な點を補足し、その出典を簡潔に標示して歴史的假名遣を大成したもので、この書出でてより語勢的假名遣派も影を潜めた觀があり、假名遣史上に一期を劃したものと謂ふべきである。

契沖の頃は時世が早かつたばかりでなく、昌佳の撰んだ新撰字鏡の如きは久しく埋れて知られなかつたのである。草創の時代に比し後人は功を成し易い。魚彦はこの時四十二歳。別に續冠辭考を著し、師の冠辭考に洩れたものをいくらか補つたことは前に述べた。

村田春海

この古言梯にも多少の増補訂正を加へるものが少くなかつた。同門の村田春海はこれが増訂を企て、

假字大意抄

假名遣に二種を認める

寛政七年古言梯再考余を上刊した。春海は魚彦の歿した後、加藤千蔭と共に江戸に於ける歌壇の中樞となつてゐた人で、文章で鳴つてゐたが、二三の國語學書も残してゐる。享和元年假字大意抄を著し、世に用ゐる假名遣に二種あることを述べ、

行阿が假字づかひといふものも、すでに幾百とせか世につかひなれたるわざなれば、今にありて一の法にこそ待るなれ云々、たゞ古の詞の本を考へていにしへの書をよまん人はかならず古の例ある假字をよく知るべき事にぞ侍りける。

と云つて、統一までと云ひ切つてゐない。

假字拾葉

田中延香と
山田常典

別著に假字拾葉といふ一寫本がある。古言梯を訂正したもので、洩れた古語を補つたものである。

門人清水濱臣が増訂を加へた享和二年の刊本もあり、文政に再刻されてゐる。田中延香も多少の校訂を加へて天保十年に上刊した。濱臣と同門の山田常典も更に百五十語を補ひ、弘化三年に^{増補}古言梯標註

市岡猛彦

雅言假字格
及び同拾遺

として上梓した。この他本居門下の市岡猛彦が文化四年に出した雅言假字格二卷及び文化十一年に出した雅言假字格拾遺は、古言梯を増補訂正したもので、前書には二百六十語を補ひ、後書には七百七十七語を補つてある。かく世に認められるにつれて、掌中古言梯・袖珍古言梯のごとき小本も行はれるに至つた。

然し堂上風の歌を學ぶもの及び俳諧者流は假名文字遣系統の假名を用ゐることはすたれなくて、垂雲

和歌爲隣抄

軒澄月の如きその隨筆和歌爲隣抄中に契沖の假名遣を改めたのを誹謗し、蓮二坊の如きは假名文字遣に據りて假名遣捷徑を著してゐる。

賀茂季鷹

正誤假名遣
わかかつら

唯狂歌を好んだ賀茂季鷹の如きは古學者と交渉もあり、天明八年和字正濫鈔と古言梯とをもとゝして正誤假名遣を著し、村田春海は「わかかつら」を著してこれを評し、蘭文典を翻譯して語學新書を著した鶴峰成申は増補正誤假名遣を著す等啓蒙的の假名遣はいつもすたらずに行はれたもので、明治御代に至るまでは兩流の假名遣が行はれてゐた。文字や假名遣の更定の困難は知るべきである。

上田秋成

尙、この項を終へようとするに臨み自由派の所説を顧る。自由派と名づけたのは、假名遣の如きは事むづかしく云ふには及ばぬ、いづれでもよいとするのである。雨月物語の著者上田秋成はその一人である。秋成は加藤宇萬伎の門で、冠辭考續紹もかいり萬葉の注釋には金砂や金砂剥言などを書いたりしてゐるが、狷介不羈の人、靈語通にその説を主張してゐる。魚彦が古言梯を上木した折にも古は假名遣のなかつたと書いたので、村田春海が「とにかくに學問に私めさるよ」と云つた時、私とは才能の別名だといひ、人の謗言に對して

大佛の柱は焼けてなくなりぬ

せゝる蟻どもたとわいたり

膽大小心録

と云つたり、本居宣長とは鉗狂人を評して争つたりした關係上、その隨筆膽大小心録に

古言をしいてとく人あり、門人を教の子と云てひろく來たるを集められし人あり、やはり此人も私の意多かりしなり、伊勢の國の人也、古事記を宗として太古をとくとせられしとぞ翁口あしくてひが言をいふてなりとも弟子ほしや

古事記傳兵衛と人はいふとも

と惡罵を放つてゐる。その性格から假名自由説を唱へたか。

靈語通

或御説

靈語通は寛政七年の序によると神名・國號・名物・詠歌・用語・假字六篇の一つだと見えてゐるが、他の諸篇は世に傳はらない。この書は首に假名に關する或御説を假つてそれを祖述敷衍するやうに書かれてある。この或御説とは萬葉集見安の作者堯以法印一流の人ともいひ、岡本保孝は田安中納言宗武卿とも云つてゐる。その説の要旨は

(一) 五十連音はすぐれたものであるが、實は以を二つ、をを一つづつ増加へたもので、實は四十四音であつて、六つの音は元來異らぬものであるのを、ふと筆に任せて書いたのを後人がこれにつきて事むづかしく云ふのである。

(二) 假名は言語を聞くがまゝに記して、その假字のまゝに讀むのが本意である。云つた通りに記さずば何を以て轉語を傳へることが出来るか。

(三) しとち、すとの濁音も意のまゝに書いてよい。

(四)「わいゑを」に「はひへほ」と書くは發音のまゝに書いたものである。

(五)「いゐ、ゑえ、おを」は言葉に云ひ分けるやうもなく、字音にも分けてない。

以上のやうであるから、假名遣といふ方則是未熟者の私に立てたもので、御國の言語の妙用をおし繞めるもののだとしてゐる。字音の如きも我が國で使用してゐる字音は漢音と吳音とであるが、これが我が國に傳はる前に百濟に於て一變した。百濟の音は重濁なので、その博士達は「いゐ」をひ、「わ」をはといふやうに發音してその通り字を書いて教へたのである。

假字は眼標のみ
然れば假字はまことの眼標のみの用なれば、打見てこゝろ得やすく、口になへて自然にかなふをこそ用ふべきを、我音ならぬ字法のいつしか學業の如くなりて是を大事と守るべくいふよ。

と假名遣を訂正する人に當つてゐる。その説の一半は假名遣の本義をつかみ、一半は例の世間の學者を罵倒すると同じ態度である。秋成はその然るべきものを制定することを志さないで、どちらでもよいと考を次の如く、

古則今法いづれによるとも、人工のわたくし物なるには、何の是非をかいふべき。たゞ歌をよみ文なだらかにほはせまほしくする人は今古いづれの便りにもよれかしと云事をおもふにまかせて書いつけおくなり。

り、況齋叢書に收めてある。今また秋成全集にも收めてある。

前に觸れた村田春海がある高貴の方の命によつて認めて奉つた假字大意抄について附け加へていふ。この書は享和四年八月に書かれ、同四年一般初學者の爲に簡明且啓蒙的に書かれてある。本文十三葉から成るうすい冊子であるが、假名に定まりがある故由、古書について假名の例を考へる故由、五十音によつて假名の例を考へること、世に用ゐる假名遣は二種あることを説いたもので、天曆以前の書は假名遣は一定してゐる。而してそれら古典の假名の字音は唐以前乃至宋初の字音に符合してゐる。例證に用ゐる古書は眞字で書かれたものに據るべきである。五十音は悉曇から出來たものであるから、その相通により假名を區別すべく、當時行はれる假名遣には行阿假名遣と歴史的假名遣とあるが、後者に據るべく、歴史的假名遣は契沖が擴めたが、文和の頃釋成俊がこれに氣附いて夙に論じてゐることを述べ、和字正濫鈔・古言梯或は字音假字用格の説を見るがよい。もし古に例證のないものは言葉の旁證を考へて推定し、その旁例のないものは語原から推定し、それらの便りがないものは姑く行阿のに由るといふことを述べてゐる。最後の一條は苦しい立場であつたに違ひないが、假名遣問題に對し重要な大綱をつかんであつて、世人を益したことは少くなかつたと思ふ。

十二 鈴木胤と本居春庭

宣長の學を受けて語學方面に最も顯著な功績を遺したのは御曹司春庭と鈴木胤とである。その他歿後の門人には伴信友と平田篤胤とが注目すべき著を出した。

胤は尾藩の士、離屋と號し、もと經學を主としてゐたが、後國學に志し、鈴門の人となつた。その雅語音聲考は語原學の時期を劃するもの、言語四種論は文典として富士谷語學に次いで夙く成つたもの、活語斷續語は活語の諸變化に關し新しい見識をもつたもの、春庭の活語研究に影響を與へてゐると思はれる。

雅語音聲考

寫聲說

まづ雅語音聲考を見る。師の三音考には國粹的の考から外國の音聲は禽獸の聲に近いとして斥け、日本語はそれと類を異にすることを述べてあるに、彼れは文化十二年にこの書を著して、純理的に言語の起源は寫聲に基くとし、その種類を四つとした。

(一) 鳥獸蟲の聲をうつしたもの

雉子の「ギギ」、鴉の「カラ」、「きりぎりす」の「キリ」の如き。「す」は聲を模したもの。

(二) 人の聲をうつしたもの

「吹く」の「フ」、「咬む」の「カ」、泣聲の「ヨ」の如き。

(三) 萬物の聲をうつしたもの

「雨そはふる」の「ソボ」、「風さやぐ」の「サヤ」、「啄く」の「ツ」、「

(四) 萬の形・有様・意・しわざをうつしたもの

赤・原・粒及び「なめらか」の「ナメ」の如き。

神傳譯と全
く反對
評雅語音聲
考

かういふ點に注目し、多くの類例を集めて分類し、その説を立てたのは卓見と謂はねばならぬ。彼れは言語と音聲との關係を論じて、音聲の意は本で事狭く、言語の意は末で事が廣い。心のある音聲と心のない音聲とが相合して共に言語を構成し、萬般の用をなす。言語の意悉くが音聲の意ではないが、言語のまことの本は音聲である。随つて諸外國の言語とも互ひに符合することがあると説いてゐる。師の神傳説とは全く反對である。この提唱は斬新であるが、その實例には往々牽強附會に陥つてゐるものがある。新庄侯戸澤正令は評雅語音聲考を書いて、その誤をたゞさうとした。(拙著「戸澤正令侯とその著作」参照)

言語四種論

次に文政七年に單行した言語四種論は國語を體の詞・作用の詞・形狀の詞・てにをはの四つに分ち、初の三詞は物事をさしあらはし、てにをはは指すところがない、三詞は詞にしててにをはは聲である。

詞とてにをはとの關係

形狀の詞と作用の詞との差別

詞は器物の如く、てにをはそれを使ひ動かす手の如し。詞はてにをはならでは働かず、てにをはは詞ならでは續くところなし。

と相互の區別關係を述べてゐる。作用の詞と形狀の詞との差別に關して、五音圖の第三の韻で切れるのは作用の詞、第二の韻で切れるのは形狀の詞であるとしてゐる。これは富士谷氏のよそひ説の影響を受けてゐる。この單語の分類は國語の性質に即したものであるが、「あはれむ」の「む」、「いまだし」の「し」の如き語尾をてにをはとしてゐるのは分類の混淆を免れない。てにをはには六つの種類を立てゝゐる。

てにをはの六種

(一) 獨立したてにをは

あはれ・やよ・いな・いく・何・誰

(二) 詞に先つてにをは

又・豈・抑も・猶

(三) 詞の中間のてにをは

の・つ・に・を・は・ば・も・か・ぞ・し・や・こそ・い・と・ど

(四) 詞の後なるてにをは

か・かも・かな・が・がな・な・ぞ・よ・ね・も・はも・や・はや・かし・らし・ず

(五) 活語につけるてにをは

形状詞には「し」と「り」の二つ。

作用詞には、く・ぐ・す・つ・づ・ぬ・ふ・ぶ・む・ゆ・る・うの十二。

(六) 詞の跡を承けて切れもし、又働きて下に續きもするてにをは

ごとし・べし・まし・り・たり・なり・せり・けり・めり・き・す・む・らむ・けむ・せむ・

てむ・なむ・ぬ・す・つ

職能
の位置と

詞辭の使用上の位置及び職能を考へて細別してあつて、(一)は感嘆を主とし、不定の代名詞を加へたもの、(二)は副詞・接續詞を指し、(三)(四)はてにをはを位置によつて分けたもの、(五)は語尾を稱し、(六)は助動詞と見えるものを彙類してあるやうで、品詞の意識は相當に働いてゐるが、中に誤謬の交つてゐるのは當時にありては致し方なかつたものか。

活語斷續譜

神宮文庫本
と柳園叢書本

活語斷續譜は活語の諸變化を考定し、その斷續を明かにしたもので、御國詞活用抄を經とし、裝圖を緯とし、その他紐鏡などを參考して作つたものである。神宮文庫本と柳園叢書所收本との二種があるが、初稿は享和三年六月に成つたと云はれてゐる。然らば神宮本が初稿と見るべく、柳園叢書本は自筆本を以て一校了の奥書があるが、詞八衢や和語說略圖の書入が加はつてあるから、天保四年以後に成つたとゝなるべく、隨つてこの書の史的價值に多大の差を生ずる。

神宮文庫本はその變化を八等に分ち、柳園叢書本はこれを七段に分けてある。蓋しある先進の批判に

よつて圖表下段の二つを合併したものと云ふ。文政七年刊行の言語四種論に「斷續ノ第四等コレ也」と記したところもあり、これと照合しても柳園叢書本は後のものと見るべく、以下神宮本に就いて述べる。
活用抄第一會「飽く」の詞につきて、

- | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ク | ク | ク | キ | ケ | ケ | カ | カ |
| 一等 | 二等 | 三等 | 四等 | 五等 | 六等 | 七等 | 八等 |

- 飽ク
一等
- 本語ニテトマル
 - 「ト」ニツマク
 - 「ヤ」ニツマク
 - 「カシ」ニツマク

- 二
等ク
- 下ノ詞ニツマク
 - ゾノヤ何ノムスビ
 - 「ハ」「モ」「ガ」ニツマク
 - 「ヨ」「カ」ニツマク
 - 「ゾ」「コソ」ニツマク

三等ク

「ヲ」ニツマク
「ナク」ニツマク
「ベシ」ニツマク
「ラン」ニツマク
「クサノ「ナリ」ニツマク
「ラシ」ニツマク
「メリ」ニツマク

四等キ

下ノ詞ト並ベ云
「キ」「シ」「ケリ」ニツマク
「アリ」ニツマク
「テ」「ツ」「ヌ」ニツマク
オホスル意ノ「ネ」ニツマク
ナカレノコヽロノ「ナ」ノトマリ
轉ジテハ體ノ詞トナル作用ノ詞ニカギレリ

五等ケ

現在ニテ「バ」ニツマク
「コソ」ノ結び

鈴木胤と本居春庭

古文「バ」文字ナクシテモ其コ、ロトナル
「ド」ニツマク

六等 ケ 命ズルコトバ

七等 カ 未來ニテ「バ」ニツマク
「ム」「マシ」ニツマク
「ズ」「ス」「ナク」ニツマク

命スル意ノ古語ノ「ナ」ニツマク
ネガフ意ノ「ナム」ニツマク

八等 カ 「シム」ニツマク
令ノ心ノ「ス」ニツマク

原圖は左の一行に等、次の行に活用、その右に接續の一つくを記し、八段となしてある。本書には助辭に「」を加へてないが、茲では混雜を防ぐ爲に加へた。

以上の如く、活用抄に載せてある二十八會の代表語を取り、その斷續點よりその變化を考へ、種々の切れる場合と續く場合とを擧げてその別を示してある。

從來活用を説くものはすべて五十音圖の次第に従つてゐたが、この書は第一に終止形、第二に連體形、

第三に終止形の一つ形に助動詞の連續するもの、第四に連用形(過去形を含む)、第五に已然形、第六に命令形、第七に未然形(未來形・否定形を含む)、第八に使役形(これは普通に未然形に合併する)をすゑてある。斯う見ると活用のある形を認めたのである。

これを富士谷氏の裝圖に比するに、彼の書に本(語幹)・末(終止)・麿(連體)・往(過去)・目(現在)・來(未然)・麿伏(已然)と次第してあるのに粗、似通つてゐる。(この排列を大槻文彦博士も語法指南に襲用された。)

この活語斷續譜には第七・第八に被動の「ル」・「ラル」、否定の「ザリ」を逸したり、その他にも多少の訂正を要するものもあるが、活用には一定の條理の存することゝ、活用により動作・形狀いろ／＼の種類のあることを示したもので、後に活用を説くものに確乎たる範疇を示した功績は没すべからざるものがある。

本居春庭は父の志を嗣いで學にいそしんでゐたが、寛政七年兩眼を失つた。後、文化三年詞八衢二卷を、文政十一年詞通路三卷を著した。

國語學者の
四大家

從來古典學の學祖として四大人を祀ることは忘れないが、國語學者として大きな業績を遺した契沖・白石・春庭・義門をさほどにも世間が思はぬのは學海の恨事であると故上田博士は嘗て論じられたが、これは洵に當然のことである。

詞 八 衢

活用言の正
格と變格

春庭の著作は少いが、詞八衢は父の御國詞活用抄を整理し、活用言に四段・中二段・下二段・一段四種の正格と「か・さ・な」三變格の別あることを認めてその活用圖を作り、各活用を六段に分ち、助辭の接續を表中に示したもので、その名稱分類は今の文法家に大體襲用されてゐる。尤も形容詞二種の活用を認めながら、これを上の七種と同格に立てなかつたことや、下一段活を立てなかつたことや、「有り」は普通の四段とは異なることを認めながら、これを變格の一つに加へなかつたことなどは云爲するものもあるが、活用研究を學制的のものに確立させた功はとこしへに没しられぬ。

活用素材の
考究

春庭は中古の歌文より各行に活用する語を蒐集するばかりでなく、その出典を挙げ、活用の變遷を説き、時には解説を加へた。その素材の考究を疎かにしなかつたことも學者的態度と謂ふべきである。また下知の詞には助辭「よ」を添へるのと添へないとの別のあることを説き、二段活用には俗語の格をも示した。

この書は妹の美濃に口授して代筆させ、文化五年に刊行されたもので、その後も文化十三年、文政元年、弘化三年、慶應二年に覆刻され、明治十七年には活字に附せられて盛んに世に行はれた。手爾波の研究者を玉緒學者といふが如く、爾後活用研究者を八衢學者と呼ぶほど有名になつた。

詞 通 路

詞の自他

詞通路はその姉妹篇であつて、活語の自他を主とし、詞の兼用・詞の延約及び詞手爾波のかゝるところを明かにした。自他に關し成章は、あゆみ抄の中に自立と立之との區別をいひ、宣長は玉叢の中にと

く紐・とくる紐などにつき、人のするわざとおのづからのことゝを述べてゐるが、詳しくに至らなかつた。

振分髮の自
他説

小澤蘆庵は寛政八年に出した振分髮の中に別の見地から自他を論じてゐるが、同じ動詞でも表現により疑問や命令は他で、意志發表は自である。推測は大抵他で、経験は自で、條件は自他兼用であると説いてゐる。文雄の文化四年に出した磨光韻鏡餘論の中には、悉曇學の波羅諷迷・阿答末墾を説いてゐるが、通路の自他説はこれに「ヒント」を得たものではあるまい。

自他六等

通路には自他を六等に分けた。

(一) 自ら然る、自ら然る⁺

(二) 物を然する

(三) 他に然する

(四) 他に然さする

(五) 自ら然せらるゝ

(六) 他に然せらるゝ

これは今日いふところの動詞そのものゝ自他ではない。動詞自身の外、助動詞「る」・「らる」・「す」・「さす」と結合して、自ら働くか、人より働きかけられるか、人を使つて働かせるか、人より命ぜられて

働かされるか、自然にさうなるのか等の動作の種々相を解析して見ようとの企であつて、彼れは自他の分岐は活用との關係上同行に分れるもの(一)と、さ行に轉りて分れるもの(二)と、ら行に轉りて分れるものとの三種あるとしてゐる。その所説は明快でないが、精緻の研究に入らうとしたもので、後の研究に大きな示唆を與へてゐると思ふ。

延約説

詞手爾波の
かゝる所

八衢の末書

延約に關しては古代には多く行はれ、古今集以後は稀になつた沿革を略述し、その種類にはさ・は・ら三行の別があるとしてゐる。詞手爾波のかゝる所の章には中世和歌に於ける詞と詞との關係を明かにし、上下の呼應を知らしめる爲に種々の記號を用ゐ、教授の上にも工夫を凝した。

八衢に關してその後多くの人々により澤山の末書が出た。左にこれを述べる。

言葉の八衢疑問 卷一 東條義門

文化八年八衢に關する數條の不審を著者に質し、自家の意見をも述べてある。

解嘲篇 岡部東平

世人が八衢を難するを嘲つた文。

詞の道しる

詞の道しるべ 卷一 東條義門

文政元年の著、八衢の補正を企てたもの。

八衢略圖會 卷一 東條義門

文政六年刊、八衢と紐鏡とを合せた指掌圖。

友鏡底廻影

友鏡底廻影卷二 東條義門

八衢に書入れた部を歿後小田清雄が拔出して一冊となしたもので、卓説に富んでゐる。書名は小田氏の命名にかゝる。

辭玉磚

詞八新撰徑
關玉鏡統括 辭玉磚想一 富樫廣蔭

文政二年成、十二年刊。

言靈抄卷一 黒澤翁滿

文政八年成る。

詞格用例卷一 黒川春村

八衢に洩れた語を集めて五十音順に排列してある。弘化四年に成る。

八衢大略卷一 足代弘訓

安政四年刊、二十五章から成る。

八衢補遺卷二 中島廣足

蔭踏道

一名を蔭踏道といふ、嘉永六年に成る。

八衢補翼卷十一 足代弘訓

鈴木康と本居春庭

活用・音韻變化・てにをはに就きてしるしてある。

詞道路二卷 山田直溫

八衢に出てゐる用語を總べて五十音順に配列してその活用を記してある。

續八衢一巻 足代弘訓

字音を活かす詞・時代により詞の活用・意義、言ひやうの變ること等凡そ二十條。

八衢僞正考一巻 足代弘訓

「分く・わくる」・「たのみし・たのめし」の如き誤り易い語を短文に綴り、訂正の用にあて、「仰付らるべき由」と「仰付らるべく由」との差、「申上べき爲」と「申上べく爲」との如き紛ひ易い例文を擧げて、その差別を知らしめた啓蒙的なもの。

詞農八衢教法 一

小川文庫藏本。

詞八衢道しるべ 一 久米千壽麿

二十五條から成つてゐる。

増補
標註 詞八衢二巻 清水濱臣

清水濱臣が増補し、岡本保孝が標註を加へたものを加部巖夫が校正し、明治十三年に出版した。

詞八衢補正

詞八衢補正^三 岡本保孝

上卷には八衢の序文の批評及び八衢に洩れた詞を擧げ、中下の卷には四種の活用及び受ける辭、略言・延言等を載せてある。

八衢輒の響

八衢輒の響^百 生川正香

用例を豊富に集めたもの。百卷と云はれてあるが、津市教育博物館に藏する自筆稿本は六十七八卷に過ぎなかつたやうに思はれる。

詞八衢頭註

詞八衢頭註^二 權田直助

諸家の説並びに自説を頭註とした。

言葉のやちまた語釋^二 渡邊弘人

八衢のむづかしい語句に口語譯を加へ、また上欄に單語の解釋、語法上の解釋を加へたもの。明治十七年刊。明治二十五年^{改正} 詞のやちまた語釋一冊刊行。

十三 東條義門

文化文政以前にありては一般の讀書界に於て語學の智識が甚だ乏しく、假名遣の議論は相當喧しくあつたが、活語の名稱の如きは古來は存しなかつたものだ、漫にこれを設けて口喧しくいふのは、斯道の煩を増すものだと言ふものさへあつた。村田春海の如きは雅文を以て最も聞えた人、然るに琴後集には「しゝ」と「せし」の區別も誤つてゐる。その他推して量られる。

この時本居派の語學を究めてその研究を完成せしめたのは若狹の妙玄寺義門である。義門は宗門の假名聖教を講ずるに方り語法學の必要を認め、書を師とし友として研鑽を重ね、京都本願寺の高倉學寮にあつた頃、八衢に關する數條の不密を録して春庭に質した。これが八衢疑問である。尋いで文化十二年指出の磯を著し、假名遣と共に活語研究の必要を唱へた。

指出の磯 琴後翁の高足清水濱臣は當時江戸の歌學・文學界に重きをなしたものの、その上洛を機とし、義門は指出の磯を示して評を乞うたところが、濱臣は假名遣を活用と同じやうに見るのは學の輕重を誤るものだと言つた。そこで義門は磯の洲崎一卷を作り、これを歸じた。この書は指出の磯と合せて天保十四年に

刊行した。

詞の道しるべ

轉に

詞の五轉の名稱

將然言 連用言 裁斷言 聯體言 已然言

の名稱を附したのはこの書を以て始めとする。八衢の四種の活用以外に一行に活くもの、二行に活くもの十三種を見出し、その活用を圖して受辭の接續を明かにした。八衢に立てなかつた「く・し・き」活の類を二行に活くものとし、これに

四種の二行活

志音談過の活 け・き・し・しか

志音局截の活 く・し・き・けれ

志音總通の活 しく・し・しき・しけれ

志音談末の活 まく・まし・ましか

の四種を分つた。形容詞・助動詞を混一して語尾變化から類別したのである。また一段活に第一轉から「らむ」「べし」に連接する古格をも一つと立てた。さ行變格の下知を示すに「よ」の辭を添へない古例を認めた。また本居家の忠臣たること杜預の左傳に於ける程度に到らざる時の著であるが、八衢の補正たるには相違ないのである。

義門の研究は活語に關するもの、手爾波に關するもの、音韻に關するものゝ三部に分けられる。始めのは春庭の著を補正し、後の二つは宣長の著を補正した。その中音韻に關しては於乎輕重義と男信とがある。

於乎輕重義

於乎輕重義は文政十年閏三月に成つたもので、これに妙玄寺本と黒川本とがある。黒川本は義門自筆の中書本の轉寫せられたもの、妙玄寺本は著者の清書本と云はれてゐる。宣長が於乎所屬辨を著して鎌倉以降數百年の誤を訂したのは大なる卓見で、音韻・假名遣・活用等に大きな影響を及ぼしたことは既に述べたところであるが、未だ論證の不充分なものがある。

於乎輕重義の上卷には二十箇條の證を挙げ、下卷にはこれに對し二個の難問を設けてこれに詳細な解答を答へ、尙上卷に於ける二十箇條の憑證に對し問答をなしてこれを辯じた。鈴屋翁の卓見がこれによりていよく明晰となつた。

男 信

男信は初稿は文化五年に成り、撥韻假字攷と題してゐたが、稿を改めて、天保六年上野の地名に基き男信と改題し、天保十三年三月に刊行したものである。

撥韻の古より存在説を立つ

上卷には物の音響を寫すの聲は自然に存するもので、人の言語の上にも上古より存在したといひ、本居翁の説を正し、古典を引き、舌内音にはナ行の音を用ゐ、唇内音にはマ行の音をあてゝ區別してゐたことを述べて、地名字音轉用例の説を裏書した。

ナ・ラ・カ行
の濁音説

尙、古書に於ける此等の用例を韻鏡の十六攝目に照し、ナ・ラ・カ行の濁音及びチ・イの音に轉用した例の字は臻山の二攝に、マ・ハ行濁音に轉用した例の字は深咸の二攝に收められる文字の韻であると論述した。

中巻には問答體により「ン」・「ム」兩存説に對する反駁論十二條を掲げ、一々これを辯明して字音假字用格及び三音考の是正を企てた。

ンとムの適
正の使用

下巻には「ン」・「ム」の適正の使用に關する發案を提示し、これが用例を廣く集めて五十音順に列ね、理論と實例との一致を適確に示し、反音抄や悉曇字記捷覽に擧げてある梵語の三内各別圖を引きて我が撥音の三内を説き、「ン」・「ム」の字源にまで説き及ぼして撥音の上に不動の説を立てた。

撥音假字攷

義門は語學を精研する間に各地に學問上の友を得た。韻鏡につきては十一歳も年若の岡本保孝に教を請うた。二十八歳も年長の太田全齋とも相知るに至つた。男信はもと撥音假字攷と名づけてゐたが、後全齋の説を聞きて書入をなし、再治本を作つた。保孝は書名の宜しくないといひ、四十七條に互りて批評を加へた。これが撥音假字攷存疑である。義門はその意見に従ふものと従ふべからざるものとを上欄に朱書して送つた。保孝は存疑とこれに對する辯言に弘化十二年の跋を加へ、明治七年再跋を加へてゐる。義門は斯くて書名を改めたのである。

撥音假字攷
存疑

男信質疑
ンの假名の
字源

備中の音韻學者關政方は天保十五年九月男信質疑一卷を著し、「ン」の假名は空海が空點をとつて「ヌ」

ツの字源に
關する説

八衢友鏡略
圖會

友鏡答問

聖教和語説
和語説略圖

に代へたといふ義門の説は叙述が十分でないとし、それは舌内音に限るべきでない。喉舌唇三内に互るといひ、また「ツ」の假名は梵書の滅點から借りたとの説は従ひがたい。古説の如く門から來たといふ説を正しいとし、義門の擧げた個々の例の中、鬼おには隱の字音であるといひ、枕草子に見える「デウバミ」は丁半の字音でなくて、重目を食ふ義であるといひ、韻の字の假名はヤ行の「イン」でない。本音「ウン」轉音「キン」で、磨光韻鏡の開轉にあてたのは誤である。支那にはア・ヤ・ワ三行が夙く混同されてゐる。漢字の古音・古義は我が國に遺つてゐる。降つた時代の例は捨て、我が古音に徴すべきなど云つてゐる。この書は義門の歿した翌年の作であるから、その辯言は見るよしもなかつたのである。手爾波のとゝのへに關する義門の研究は文政六年に出した紐鏡と八衢とを合せた八衢友鏡略圖會といふ一摺の折本から始まる。これはてにはの本末を照合する爲に紐鏡の四十三轉を増益して五轉・十九類・五十二段となしたものの。尙闕外には使令といふ一轉をあげてある。

江戸の相場長昭に答へた友鏡答問は活語雜話第二編に載せてある。これに屬した語彙と説明とは天保十三年の序ある友鏡底廼影に見えてゐる。

彼れは屢々門徒に宗派の教典を講説したが、聽者の一人にそれを筆録してゐたものがあり、題して眞宗聖教和語説と名づけてゐた。義門はそれにちなみ、天保四年友かゞみを改めて和語説略圖と題し、改定版を出した。この折圖は八衢の活用を縦にし、紐鏡の係結及び八衢各段に於ける接辭を横にし、相互

玉緒線分

の關係を一目瞭然たらしめたもので、活用につきては「射る」をや行とし、「試みる」をま行一段に改め、使令は希求と改め、古書に見える異格四種を擧げてある。

玉緒に云へる不調歌

語辭林香記

この圖表の説明と見るべきは玉緒線分である。線分は天保十二年に稿を起し、同十二年に成り、翌後嘉永四年に至り刻本となつた。目錄が一卷、本文が四卷。玉緒本文からすべてに互つて詳釋を試み、補正するところもある。不調歌としたるは多くは原本の誤寫に據つたといふ千家尊孫の鄙の歌がたりの説などを引いて正したところもある。和語説略圖に對し質問や講解を需められたので、義門はその徒の爲に講説した。語辭林香記の如きはその圖問書の一つである。西廣寺將了の和語説略圖書といふも同じ類のものらしい。

義門の活語研究に關する八衢疑問及び詞の道しるべに就きては既に述べたが、尙その後も多くの著を出した。友鏡や和語説略圖の如きも活用の部が多く入つてゐる。併しその主著は山口栞である。

山口栞

山口栞は文政の初に稿を起し、最初は二卷であつたが、天保四年に削補を加へ、同七年に刊行(三冊)して世に行はれた。已に八衢によつて活用の大綱が組織立てられたが、部分的には尙不備な點があり、その補訂として著されたもので、下卷に於ける形狀言の研究が最も見るべく、上卷總論には、言語音聲の轉ずるに三つの差別あることを説き、類似の活用で誤用され易きものゝ區別を説くこと委しく、時代によりて活用のかはりゆくこと、活用の五十音圖の一般にわたること、各行に屬することなど細かに論

じ、漢文訓讀より來る活用にも説き及んであつて、脚結抄・八衢・活語斷續讀の所説が部分的に完成されていつた。

彼れは文政より天保の間に互り、上野の石田千穎・平井重民、江戸の相場長昭・小林歌城・海野幸典・鎭木尙平、京都の城戸千楯・山本道守等と語學上の意見を互ひに交換しあつた。彼れは一々それを書き留めて置いて、その中から主として活語に關するもの三十條を撰んで天保十年出版した。これを活語雜誌第一編とする。翌年また二十五條を撰び、その第二編を、翌十三年第三編を出した。以上三編には活用に關することが八十項に上つてゐる。斷片的ではあるが、同人と往復論究したものを集録したもので、いづれも有益な小論文を含み、當時各地に於ける國語學界の動靜も窺はれる。義門は尙第四編を出す豫定もあつたが、その事は果されなかつた。

活語指南

この第三編と粗く同時に活語指南が出版された。文政元年に著した詞の道しるべもその後活語指南と名づけたが、これは別の書で、平井重民が和語説略圖を基として一々これが例證を擧げて説明を加へ、略圖考證と名づけた稿本を示されたので、自著の出版を思ひ止まり、その長所をとり、多少の補正を加へ、これに活語指南の名を與へて天保十二年に出版した。これは和語説略圖の注釋とも見るべく、義門のこの方面の主要な著作である。

活語餘論

その他隨筆に活語餘論が三卷ある。活用・音韻・假名遣・係結・語釋等諸方面に互り、いづれも學的

價値の高いものである。始めは表題に題知らずとあつたのを、活語に關することが多いので、活語餘論と名づけたのである。

言語の分類

義門は言語をどういふ風に分類したかと見るに、まづ體・用二大別となし、體を有形・無形に分ちて無形の中に語辭を入れ、用言を形狀・作用の二つに、作用言を六類三十五に分け、活用の有無を基調とし、苟も活用があれば、動詞・形容詞・助動詞の區別を立てなかつた。尙、細部につきては述ぶべきことが少くない。とにかく本居派の語學を綿密に研究して、世に動かないものとした功は第一にこの主人に捧げなくてはならぬ。

十四 本居派の語學の補正

天保以降の語學者は義門に限らず、いづれも玉緒や八衢の補正に志さぬものは極めて少い状況であつた。その末書は一括して前に舉げたが、中には特にぬき出でて説明を加へなければならぬものがある。

てにをは係
辨

玉緒の變格
の歌

紐鏡に對し萩原廣道は弘化三年にてにをは係辭辨を著し、嘉永二年に上木した。紐鏡に舉げた三種の係辭中、第一のすべてを徒なといふ名に攝し、第二の「ぞの」や「何の」の「の」は係辭でなくて餘情を含めた略語であるとし、「何」もまた係辭でなくして、その下に助詞「か」を含むか、或は餘情を含みて結ぶに過ぎない。先師が「か」を「や」に附屬したやうに説かれたのは誤である。隨つて第二の係辭は「ぞ」「や」「か」の三つとすべしといひ、玉緒卷二に變格として舉げた類は餘情を含ませた略語の格と「何」の下を通常の如く結んだものとの二つの場合を指したもので、決して變格とすべきでないとしたのは洵にすぐれた考で、玉緒研究史に特書すべきである。然るに廣道は第一種の徒の中に「て」「に」「を」「の」「は」「ど」「より」「まで」「へ」の如きものも「は」「も」と同種類の語と認め、これを合せて徒としたのは紐鏡の精神を没却したものであつて、斯界に於ける功罪は相半ばすと謂ふべきである。

橘守部が助辭本義一覽には係辭を指辭と改め、結辭を受辭と名づけて音義説により各手櫛波の語原を説き、玉緒に變格とあるは皆結句の下に「かな」また「よ」の如き歎息の意を含めたもので、實は定格と見做すべく、また手爾波不調歌とあるも首肯が出来ないと云つてゐる。

井伊掃部頭直弼に侍し、政治上の機密にも與つてゐた長野主膳名は義言は天保十四年玉緒末分櫛三卷を著して弘化二年に出版した。玉緒とは説述の順序を變へ、願辭・仰辭等の名稱を新たに立て、手爾波の洩れたるを補ひ、八衢に考へ合せて活用を未然・續用・切止・續體已然に分け、その接續を説いた。義言の著には「かつみぶり」、假字の佐太女、歌の大武根等がある。

忍藩の黒澤翁滿は縣居大人に私淑した一人で、文政八年言靈抄一卷を脱稿し、後改訂を加へて言靈のしるべと名づけた。その上編は天保四年に稿が出来あがり、嘉永五年に刊行し、中編二冊は安政三年に刊行した。上編・總論中に語法研究の史的沿革を略敘し、次に學則として詞の活・辭の結・假名遣の三つを知るべきことを述べ、學習の方法を丁寧親切に述べてある。中二段の稱を上二段と改め、か行さ行變格を三段活用と改め、四段再活を加へ、上二段にざ行を加へた如きは八衢の是正に關するもの、形容詞を三行の活・二行の活・一行の活と三類を立てたが如きは他に類を見ないところ、紐鏡の三種の係辭を「ぞ」・「や」・「か」・「の」・「こそ」の五つとしたのは却つて逆行の氣味がある。假名遣に紛ひ易いものゝ中、語數の少い方を記憶せしめる方針を示したことも語學教授の方面に見るべきものがあり、下編

や居正論などは出来上らなかつたものか、管見に觸れない。外に獨學綱などの著がある。安政六年大阪の忍藩邸で歿した。

八木立禮
詞瓊緒縁接

春庭の教を受け、義門に兄事してゐた八木立禮は前名を鎬木尙平と云ひ、音韻語格に委しかつた。嘉永四年詞瓊緒縁接三巻を著し、玉緒及び瓊緒餘^{あまのり}總^い等に洩れた歌格並びにこの二書に例を擧げて趣意を説いてないもの等凡そ九十五條を説いてあつて、玉緒線分に雁行すべきものである。自序に賤の緒環・末分櫛・係辭辨と同時に見られるのを屑しとしない旨を述べてあつて、その抱負も推量される。統合的な意見はないが、手爾波の使用上微妙な區別のあることもそれ／＼個々に就いて述べてある。

歌文要樞

文の呼應に關しては歌文要樞二巻を著し、上巻には「は」「も」「徒」「ぞ」「の」「や」「何」「七」つの承辭^{かひり}の本義を説き、下巻には「まし」「らし」「けらし」「つゝ」「かな」の如き語尾の變化しない結辭を説き、更に「の」と「が」との関係、「に」と「へ」との關係を説いてゐる。

尙平語格之
説

用語大成

また尙平語格之説といふ一卷にも「や」「よ」「なむ」「み」などに關するこまかい考がある。用語大成は八衢・友鏡・和語説略圖・玉櫛等によつて活語と係結との關係を四つの圖に示したもの、活語捷徑標識の昔もあるが、新味は乏しい。活語雜話に天保七年義門の許を訪ね來て活語に關する意見を述べたことが見えてゐる。その時は二十八歳<sup>(安政三年戊辰
十八歳による)</sup>ぐらゐである。義門の流れを追ふ一人であつた。

詞玉緒補遺

熊本の中島廣足は高本順・長瀬眞幸の後に出て肥後の國學を大成した人。嘉永五年詞玉緒補遺六巻を

著し、同七年に上木した。廣足は總分や末分櫛に見えない證歌を多く集めて用法を簡單に説いたもので、
笈集には努力してゐるが、新創の見は乏しい。この書は一名を手引の糸といふ。その中から完了を示す
かたいと

「つ」と「ぬ」とにつきての考を抄出し、更に増補して嘉永六年「かたいと」を著した。
この「つ・ぬ」の別に關しては今日に至るも種々の説を生じてゐるが、廣足は「ぬ」は物事の自然
につきて用ゐ、「つ」は施爲セトメの方につきて用ゐるとの説にも同じないで、義門の「ぬ」は物事の自然な
るにつきて用ゐ、「つ」は使然なるを受けるが、この二つばかりに限らないといふ説を贅し、その説に
裏書する爲に來・鳴・見・降・出・別等の動詞に連る多くの例を引き、主觀的でなく、詞の使用され來
つた有るがまゝを示した。

八衢補遺

八衢補遺三卷も同じ行き方である。これも嘉永六年上木されたことは前に云つたやうである。その附
録には「すさび考」「だに」「さへ」「すら」の別などを加へてある。

黒川春村
用字活用考
來字活用考

かく部分的考究に入るとは音韻考證の著者黒川春村の用字活用考・來字活用考もその例に數へられ
る。春村は多方面な學者で、須阪の堀侯を助けて扶桑畫人傳の如きを出した人、語學の方面には山口栞
の補篇として栞の折添一卷を著し、八衢に關しては芳蘭訣斷八衢打聽二卷及び詞格用例等の著がある。

十五 鹿持雅澄の語學

多くの語學者が例を中古の歌にとるのはかの時代が範となすに足るといふ意識から來てゐると思ふ。

併し萬葉集時代は時世が上つてゐるので語法も同一でない。これは別に考究すべきである。萬葉の研究に一生を捧げてゐた土佐の鹿持雅澄は萬葉集古義の附篇として、雅言成法・鍼囊・用言變格例・結詞例・舒言三轉例・言靈川等の著書を著して萬葉時代の語法を述べた。

鍼囊

正格・偏格
・別格

萬葉集の語法

その中天保九年に成つた鍼囊は係結を説いたもので、係辭を照言、結辭を應言と名づけ、應言を正・偏・別の三格に分ち、照言により應言の二轉もしくは三轉に變り得るものを正格といひ、「まし」「らし」「つゝ」「かも」等の如く語尾全く變化しない辭で結ぶものを別格とし、一段二段の係辭を結ぶ未來の「め」の如きを偏格と立てた。上に「こそ」を置きて下を今いふ形容詞で結ぶに、古は「き」の語尾を用ゐてゐたが、古今集以後その形が亡びたことを認め、また否定を示す助辭「じ」はもと^レな^レ行の第二位の「に」を濁音に通はしたもので、「に」「ぬ」「ね」「ぬ」三轉する詞であると説き、本居翁の「ず・ぬ・ね」説を訂正した。

次に動詞の活用原形が如何なるものであつたか、一元か多元かこの問題は今日もまだ一定しない。この溯源的な研究に雅澄は指を染めた。その用言變格例はこれに關する著作で、動詞活用の原形は四段活で、下二段上二段を始め、その他も皆四段活より轉成したものと説いてゐる。

古言解釋學上反切相通などの方法論を用ゐたことはその由來は遠く平安朝にあることは既に述べたところであるが、雅澄は天保六年雅言成法二卷を著して、當時の學者が古言を解釋するに、妄に反切・通略・舒約を用ゐ、何が故にその然るかを説かないのを難じ、これらは轉換を除くの外はいづれも年代の經過するにつれて生じた訛であるとし、假略・非略・相通・訛通・轉換・清濁轉訛・清濁互訛・約言・舒言の十項を立て、古言の格を明かにしようとした。

また別に舒言三轉例を著して、延言に三種あり、さ行に轉用するものは「聞とし」・「立たし」の如く敬意を示し、は行に轉用するものは「移はむ」・「語らひ」に於けるが如く事を緩める意に用ゐ、か行に轉用するものは「計りけらく」・「あらなくに」に於ける如く用を帶びたる意を示す爲に延びたものと多くの例を引いて説いた。

萬葉の解釋は古義百三十五卷の外、枕詞に關しては萬葉枕詞解五卷を文政五年に脱稿し、冠辭考の説を改めたところが少くないが、正否はいづれとも云へない。眞淵の序として取除いたものを取りあげてある。その他古言譯通五卷の如きもある。

彼れの著述は多くは天保の頃になつてゐたが、身土佐を離れないで、中央の學海とは孤立してゐたので、明治二十六年宮内省で萬葉集古義を藏版に附せられるまでは世の多くの學者に知られなかつた。常に萬葉にあこがれをもち、昨日は家持卿・憶良太夫などと手を携へて山に登り、今日は金村・蟲磨などと臂を交へて川逍遙し云々と冀つてゐる著者の靈も萬葉集復興の今日は笑を湛へてゐることであらう。

春登上人
萬葉用字格

尙、萬葉の用字法に關しては雅澄に先ち、春登上人が文化の末に萬葉用字格を著し、集中の用字を摘出して五十音順に配列し、更にその中を正音・略音・正訓・略訓・約訓・義訓・借訓・戲訓の八種に分け、仙覺以來の諸種の用字法を最も精密に考察したことを特記すべきである。

十六 平田篤胤と伴信友

國學四大人の一に數へられる平田篤胤は伴信友と共に鈴屋大人の歿後の門人である。信友は考證學に於て、篤胤は神典に於て最も著名であつた。中にも篤胤は春庭・義門とは異り思想家で、師の古道方面を發展せしめることを第一義とし、國家主義的情熱の強烈であつたことは、

ひむがしの大樹のもとに神がたり四方の草木もとをやめて聞け

と大扶桑考に語つてゐるのでも分る。飽くまでも客觀的態度を以て研究すべき國語理法の考究の如きは、その性格にふさはない。

古史本辭經

古言學由來
喉音三行辨

併し古代文化の研究に従事し、且廣き學問の間口を有してゐた彼れは自ら國語の方面にも相當の意見を抱いてゐて、神字日文傳や古史本辭經を公にした。古史とは記紀を指し、本辭は古事記の序によつたもので、一名を五十音義訣といひ、彼れの音韻論であつて、歿後嘉永三年に上刊された。その内容は發題叙言・五十音古圖記・五十音圖訂正・五十音圖活用・喉音三行辨論・五十音義解・古言清濁說・古語延約通略說・古言學由來の十項に分れ、古言學由來の條には國語學史の概要を述べてあり、喉音三行辨

平田篤胤と伴信友

五十音圖を
改む

音義説の根
柢

論には字音假字用格の説を訂正した點などはあるが、眞淵の影響を受けて我が國語音は萬國無比のもの
と考へ、五十音圖は應神天皇の御代に我が國人の手によつて作られたものと斷じ、ら行音は最も賤しい
から、音圖の最後にあるべきであるに、悉曇によつて誤つてわ行の前に置かれたものとして順を改め、
これをワ行の次に置いた。篤胤は語學上音義派の人であつて、最初に總説して音義説の根據を述べ、

情に思へば必ず聲に出づ。其聲や必ず其見る物の形象おもたに因つて其形象なる聲あり、此を音象と謂ふ。

とし、「阿ハアアリ、伊ハイリリ、宇ハウルリ、延ハエレリ、於ハオロリトシタ聲」といひ、阿行で
は宇の聲がその父聲となり、五母韻と相偶して齊へる聲となり、良行の五聲がその形象を助けて祖言が
出來、それからその糸を引く詞が成立すると考へてゐた。例へば佐行の音に就いて云へば、

一行一義説

是行ノ五聲ハ牙嚙舌末相兼タル柔音其父聲トナリ、阿行ノ元音其母韻トナリテ齊ヘル聲トモナク、
合口音ナル須流テフ言ノ出來シヨリゾ起リケル、コノ須流ノ義ニテ之ニ良行ノ五聲相添テ初段佐ハ
去ノ活用トナリ、二段志ハ著シノ活機トナリ、須・爰ノ活用、世ハ四段迫トノ活機、曾ハ五段るノ活機
トナレリ。

に於けるが如く、この行は斯くて進む意があり、

去は更・避・猿・酒の祖言

著は白・知・汁・痴・代の祖言

爰は尙・摩・爲・研の祖言

反は空・櫛・剃・其・徐の祖言

と云つてある。而して加行には極むる意、佐行には進む意、太行は立つ意、奈行は成す意、波行は含む意、麻行は滿つる意、也行は壯りなる意、和行は稚き意、良行は有在の意を含むと一行一義を唱へた。

清原道舊の言靈音義解には加行に含蓄、佐行に清進、太行に適當、奈行に實地、波行に光耀、麻行に管領の意があるといひ、鈴木重胤の語學捷徑（一つの文典の形をなした書である）には、阿行に廣厚、加行に堅牢、佐行に窄少、多行に剛直、那行に和順、波行に變更、麻行に渾融、夜行に進前、良行に形狀、和行に揉曲の意があるとしてゐる。一行一義派にも諸説がある。

荒木田守訓
言辭音の貌

伊勢の荒木田守訓は天保十一年言辭音の貌二巻を出版したが、これは四十卷あるものゝ一部分とも云はれてゐる。而して音の貌の大方は

あの行 輕き貌、動く貌、強き勢のある貌、多き貌、當る貌、披く貌

かの行 物に強くも輕くもうち當たる音をうつしいふより出でて、音に拘らず、強くも輕くもあたる

貌、又おとする貌、又堅き貌^{云々}

一音五義派とあるのを見れば、これは一行數義派である。橘守部の如きは一音五義派に屬し、その他一音一義派もある。

本 辭

篤胤は詞を古言・雅言・平言・陋言に分ち、古言即ち本辭は二千二十五言と定めてゐる。これは歸納的に算したものでなく、五十音を易の九宮成易の理より割出し、五十音に五十を乗じて成る二千五百の中より、阿行の語の下に附かないもの二百二十五言と良行の上につかない二百五十言とを扣除した數である。かういふ風に主觀的に考へたものである。富樫廣蔭・高橋殘夢・堀秀成の言靈説は後に述べる。

神字日文傳

篤胤の著に神字日文傳がある。文政二年に成つたもので、同七年屋代弘賢等の序を加へて上梓された。

和字傳來考

我が神代に我が國の文字があつたことを唱へたのは神道家跡部光海の和字傳來考に始まる。光海と同じく吉川惟足に學んだ伴部安崇は和字傳來考附録を著して同じく存在説を採つてゐる。新井白石は同文通考の中に肥人書・薩人書のことを云つてゐる。然し太宰春臺は神代文字辨を著して光海の説を斥けた。

以呂波間辨

神 字 論

斐普味の存在

その存在を強調したのは尾張の八事山興正寺の諦忍である。諦忍は延寶中美濃の黒瀧山の潮音が舊事大成經を偽造して、神字に關する空説を唱へたに誤られ、寶曆十三年以呂波間辨を著して翌年板に上せた。金龍敬雄が安永七年神字論を著すや、諦忍はまた神國神字辨論を作りてこれを駁した。彼れは天照大神が大己貴尊に授け遊ばした四十七言により大己貴尊が天八意命と謀りて作られた斐普味の存在を説いたのである。

古史微開題記

篤胤は始めは古語拾遺によりて非存在説を奉じてゐたが、古史微開題記を著す頃から前説を變じて、特に諦忍の書を読み、また諸方より各種の文字を蒐集した結果、神字存在説を主張するに至つた。開題

記に忌部正通の神代口訣やト部懷賢の釋日本紀の説から考へて象形の神代文字の存在を信じ、天武紀に見える新字四十四卷とあるは我が邦にて製した擬漢字でなくて神字であつたとし、それは神代より存してゐたのに應神天皇の御代に漢字が入つた爲にすたれて了つたと説いてゐる。

篤胤は佐藤信淵から「神世草文、中世所謂薩人書也」と奥書ある本を借覽した。また神字存在説を奉じてゐる。

京都の僧敬光 和字考

桐生の中澤宏繁 神字のしらべ

伊勢の岩田友靖 神字眞傳

上野の閑亭 皇和神代字集

疑字篇

對島文字

等の書をも見た。諸方から得た日文十三通を集めて考證し、それに疑字篇を附録とした。十三通の日文は字に眞體と草體とがあり、眞體は太兆の驗形によりて作り、草體は眞體より出たもので、その中の對島文字は諺文と關係はあるが、我が日文が舊く彼の國に傳はつたものとした。次に述べる伴信友の假字本末はこの説を斥けたもので、今日は一般に學海に承認されてゐる。

鑲本文字考
アナイチ
神代文字考

鶴峯戊申は天保九年鑲本文字考一名神代文字點畫考一卷を出し、河内國枚岡泡輪神社所藏の土笥に彫りつけてある「アナイチ」といふ神代文字四十七字に就いて述べ、嘉永元年前書を刪定して神代文字考

平田篤胤と伴信友

神字原箋

一卷を出した。阿奈以知や磨通字などいふ神代文字を釋日本紀の祕訓の中に片假名に混用したことを主として述べてゐる。篤胤の教を受けた大國隆正は神字原及び神字箋を著し、上古に我が文字のあつたとを唱へてゐる。

伴信友は篤胤・守部と共に天保の三大人の目があつて、國史神典の考證に關し偉大な業績を遺した。國語學方面では應聲考と假字本末とがある。

應聲考

應聲考は天保四年に成り、應答に關する聲は自ら阿伊宇衣於五音のいづれかを發して答ふことを説き、古文・古歌等に見える諸例を引いて考證した一冊子である。

假字本末

假字本末は天保頃の作かと覺しく、その刊行は嘉永三年で、上卷二冊は草假名、下卷は片假名の研究で、附録一冊は神代文字の辨である。

和翰名苑

岡田眞澄の假字考

假名類纂

草假名の古來諸名家の眞蹟を多く集めて模刻したものは滕孔榮が和翰名苑三卷が明和六年に上木され、假名の字體の源並びにその變遷を述べたものには岡田眞澄の假字考二卷が文政五年に刊行され、關根爲寶の假名類纂が天保十二年に刊行されてゐるが、これらはいづれも書道の爲にしたもので、全體に就きての論はない。

信友のはその起原・沿革を考證的に論究したもので、我が上代には文字はなかつたので、漢字を借りにて支那式に綴つてゐたが、表現上いろいろと不便がある爲に眞假名として漢字を使用する道を講じて、

さてその文字も正楷に書くのは煩瑣であるので草書を使用し、漸次草假名の發達を見るに至つたものと
し、後弘法大師に至つて文字も一定して伊呂波四十七文字に整理された由を述べ、附録にいろは歌は大
師の作なること、和讀・今様・巡禮歌の沿革を説きて七五調成立の次第を明かにしてある。安藤年山の
年山紀聞や、村田春海が字說辨誤（平澤元愷の片假字平假字の字源を論じた漢微字說の誤を辨じたもの）に弘法
大師説を否定し來つたのを、信友はまた舊來の説にかへしたのである。片假名に就きては、倭片假名反
切義解の説を甘なひ、悉曇の音圖にならひて天平勝寶中、吉備眞備が作つたとし、その通用・音圖・ヲ
コト點より字源異體までも説いてあることは他の類書の比ではない。

神代文字の
辨

神代文字として現代に傳はつてゐるものは、唯一神道家或はえせ學者が國體の優れてゐることを誇ら
んが爲に僞作したもので、唯いくらか據りどころのあるものは朝鮮の諺文の古體である吏道またはその
草體をいろは歌の如くひ・ふ・み・よ等と配列したもので、全くの僞作であるとしてゐる。篤胤の存在
説と全く對蹠的關係に立つてゐる。信友と篤胤とは始め漆膠の如く親しかつたが、後隙を生じて交を
絶ち、互ひに仇敵のごとき關係に至つたので、特にきつく反對したと岩崎長世の神字日文傳の序には述
べてゐる。但し信友の吏道を諺文の古體であると云つてゐるのは誤で、その二つの間には何等の系統的
關係はない。

信友の假字本末は名普であるが、いろは歌を空海の作とし、片假名を吉備眞備の創めたといふ説には

假字本末辨
妄
皇國古字微
懲狂人
沈文燐の日本神字考
チェンバレンの日本古物學神字考

日本古代文字考

爾後強い反對が起つた。神代文字否定論に對しては松浦道輔は假字本末辨妄三卷を著し、松岡調は皇國古字微一卷を著して神代文字存在説を裏付けしようとし、明治の御代に至りても矢野玄道は明治八年懲狂人二卷を著して、篤胤の古史微開題記神代文字論に對する某の駁論を駁し、清國の沈文燐は日本神字考を著して我が邦の古字を悉く漢土の古字より來つたと附會し、英人チェンバレンは日本古物學神字考に於て非神字派の説を引き、三つの假定説を立て高麗より來たものとの考を取るとした。落合直澄は明治二十一年日本古代文字考二卷を公にし、所々にある器物などの文字をも廣く集め、神代文字存在説を集大成した。併し金澤庄三郎博士の否定説が一般に信じられてゐる。

參考 吏道諺文考

岡倉由三郎

東洋學藝雜誌

一四三・一四四

日本文法論

金澤庄三郎

假名の起源

同

國語の研究所收

Über den Einfluss des Sanskrits auf das Japanische und Koreanische Schriftsystem

金澤庄三郎

音圖及手習詞歌考

大矢 透

日本古代文字考

落合 直澄

十七 江戸末期に於ける語學家

富樫 廣蔭

辭玉 玉橋
音韻出生順
次圖

活用言各種
の名稱を改
む

義門の後、本居派の語學を繼承發展せしめた一人は富樫廣蔭を推すべきであらう。廣蔭は本居大平及び春庭の教を受けて一たびは本居影友とも名乗り、その統を襲ふことゝなつてゐたが、後本居家を去つた。その國語學に關する著作は少くないが、辭玉橋と詞玉橋を主著とすべく、玉橋は委しくは詞八音捷徑 詞玉橋總括まで存へて八十一の高齡をたもつたが、辭玉橋の出版は義門の友かゝみより四年早かつた。首に音韻出生順次圖を掲げてある。即ちウ・オ・ア・エ・イの順序によつた一種の五十音圖である。彼れは八衢の活用の名稱を改めて、

四段活を 四韻詞

一段活を 一韻詞

中二段活を 伊宇韻詞

下二段活を 衣迂韻詞

江戸末期に於ける語學家

と名づけ、八衢に立てなかつた形状言を音雜詞と名づけ、各活用の變化を

未然 續詞 現然* 續體 已然

*玉橋には斷止と改む。

と稱し、一面には接續の狀況と、時制の三つとより命名し、手爾波を動辭・靜辭と分けてある。

玉橋は文政九年十一月初稿が成つたが、その後屢、改正繕寫を重ねて弘化三年二月二十五日のものが版下になつたやうである。併しこれにも頭書を加へてある。言靈舍塊老著述目錄には七卷とあるが、二卷しか見えない。或は他は脱稿しなかつたものか。

言語の分類
と新しき名
稱

動辭と靜辭
屬詞

廣蔭は言語を言・詞・辭の三つに分ち、活用名稱も改めた。言は萬の物の形を指す體言のことで、

これを形言(月・雪の如き)・様言(物・事の如き)・居言(謠・宿の如き)・略言(歌・宿の如き)・合言(春日・山川の如き)の五つに分けた。前の二つは性質上から、後の三つは成立上から區分したものである。

詞は前に述べたやうに四韻詞から音雜に至る六種に、初の五つは說動用詞、後の一つは說容體詞となし、辭は動辭と靜辭との二つに大別し、別に屬詞といふ名目を立て、使役の「さす」「す」、受身の「る」「らる」「形容動詞の「よかり」及び繼續態を示す「かけり」の類を總稱してゐる。また動辭・靜辭を細かに分けたり、紛らほしい辭の差別を示したり、古い一二の格を説いたりしてゐる。係辭に「て」「を」「ば」などを加へたのは係辭辨と同じ誤に陥つたもの、使役の「す」や受身の「る」や形容動詞の「り」の類を他の動辭とは異なるものと見て屬詞と名づけたのは紛れ易い。もし他の動助辭と異り、動

著書の多く
が世に傳は
らず

音靈幽顯論

詞と抱合することが、二段や一段やか・さ・な行變格の「る」「れ」と同じ程度のもつと見るならば格別、折角の命名が筋が立たない。また富士谷語學のかざしの類を言即ち名詞にもつてゆくか、その邊はまだ未了で終つてゐる。註に詞通路踏分にいふとか、神國音韻考に云々、音靈幽顯論に云々などのことも見え、その他詞八衢踏分・詞通路奥乗・字音假字用格追考・詞玉緒繰分解連・玉霞さめてのすさび、五十音義の著書もその著述目錄に載つてゐるが、その多くは散佚したのか、世に弘まつてゐない。尤も堀秀成や權田直助などの國學者によつて、その學風が大いに明治の御代に行はれた。

廣蔭の音義説は言靈幽顯論に委しく見えてゐる。この書には神靈成生初發考・神魂出現順次圖と人言分生始原考・五十音大旨との二篇に分れ、初の方は天神を五十音圖に配當したもので、天之御中主神を字の音に、高御產巢日神を於の音に配するといふ行き方で學術的なものでないことは云ふまでもない。後の方は言語の分生を説いたもの。音にはそれ／＼象義があるとし、例へば、

音の象義

紆マ 大きな象、太なる象、物事の多き象、物事を十分に内にもつ象、物事を多く含む象
於 おこり出る象、わかれ下る象、すばまる象、かたまりよる象、とりしまりたる象、ながくつゞく象

阿 わかれのぼる象、高くのぼる象、ひろがる象、ひらけ向ふ象、高くあらはるゝ象、遠きに及ぶ象に於けるが如く、一音に五六義があるとしてある。當時流行の思潮の一つであつたと見るべきである。

鈴木重胤
詞のちかみ

鈴木重胤の詞のちかみちも文典の體形を具へたものに近い。言語を體・用・辭の三つに分け、體言を有形・無形・用語體言・用略體言・二合體言の五つに分けた點は廣蔭の書に據るもの、併し活用の名稱は八衢を踏襲し、自他はその師大國隆正の人天合離説を引いて詞の通路を補はうとし、辭を運用活字と名づけ、その置かれる位置によりて區別し、將然・續用・絶定・續體・既然それ／＼を受ける運用活字及び指揮辭運用活字・體言運用活字・禁止辭と區別し、係辭の係辭は「は」「も」「徒」「ぞ」「や」「疑」「こそ」の七種とした。富樫の流れを汲むものは廣蔭の詞八衢捷徑を山口敏樹から借りてその説を剽盜したと誹つたさうだが、こと／＼しく云ふべき關係もない。

大國隆正
ことばの正
みち

大國隆正は平田篤胤門下で、世界の文化は皆我が國が根本であると信じた人、天保七年に出版のことばの正みちにはその大旨に

- (一)人の物に勝れたるは言語によることをあかす。
- (二)皇國の萬國にまされるは言語の美きによるよしをあかす。
- (三)皇國のことばの萬國にまされるは活語によることをあかす。
- (四)皇國の言語用法嚴にして運用自在なるよしをあかす。
- (五)皇國の古言に萬國萬世にわたるべき正理正道そなはれるよしをあかす。

活語活理抄

と述べてゐるので、その傾向が分る。活語活理抄四卷は活語には本行・借行・枝ことばの三つの差別あ

指 矮屋一家言
ことばのす
みなは
人天合離對
格

高橋殘夢

記紀縫結抄
萬葉縫結抄
縫結大概
石上枕辭例
三代枕辭例

靈の宿

ることを説いた書であるが、悉曇は我が五十音から出たといふが如く、本末顛倒の説を平氣で述べてゐ、活語を通じて自己の人生哲學を説かうとする傾があるので、語學書としての價值は失つてゐる。併しことばの正みにちに指詞といふ名で代名詞を説いてゐるのは面白い。矮屋一家言には言靈を説き、「ことばのすみなは」(天保五年刊)には語意考の通略・延約を評し、人天合離對格には詞の自他を説いてゐる。離れてあるものを合する詞は四段活天然となり、下二段活は人爲となる、即ちみづから然する、それに反して合ひてある物を離す詞は四段活人爲となり、下二段活が天然となると云つてゐる。例へば、「附か」は他、「附け」は自、「裂か」は自、「裂け」は他で、前者は合、後者は離となしてゐる。

言靈派の一人として高橋殘夢を附記せねばならぬ。殘夢は一面は歌人、桂園派の高弟であるが、一面語學家で、その語學は言靈説を唱へると共に歸納的研究を怠らなかつた。

彼れはてにを^{かみ}はの呼應を縫目結目と稱へ、記紀縫結抄四卷、萬葉縫結抄六卷、縫結大概一卷を著した。枕詞に關しては記紀萬葉のものを集めたものには石上枕辭例五卷、三代枕辭例三卷の著があり、惜しまらくは枕詞以外のものは萬葉集が主になつて結論を産み出してない。かういふ態度は父の感化があるかと思はれる。彼れの父は備中の人、平松正春といひ、富士谷成章の門人であるので、かういふ忖度もして見たくなるのであらう。

言靈説は篤胤等の影響もあるか、言靈名義考二十卷、言靈古言考三卷、靈の宿八卷、國字定源二卷等

の著があり、靈の宿は夙く天保七年十月に稿を了へたもので、當時大阪に出で眼疾を患へてゐる時、その子正純に口授して書き取らせ、成つたことが序文に見えてゐる。

一の卷には聲の産屋、眞洲鏡父聲之圖、眞洲鏡父聲全備之圖、同名義之辨、音味之辨、内外之辨、清音靈義詞の辨、濁音義詞の辨、母音之辨、要語之辨等の諸項を含んでゐる。二の卷には清濁之辨、十五階之辨、五柱之辨、約言之辨、略言之辨、延言之辨、五音相通之辨、音便之辨、表裏之辨、冠辭之辨、助辭之辨。三の卷には二重之縫目、三重之縫目、付四重之縫目。四の卷には自結自受縫目といふ如く音義説に基いた彼れ獨特の文典である。彼れは歌人であるので、世の言靈を唱ふる人がこれを歌の上、文の上に委しく説かないのを不滿とし、「歌は調に聞しるものなり、調はこと玉にこもれるものなり、歌よまんとならば調をさとりべし、調を知らんとならば言靈を窺ふべし」と云つてゐる。

一體當時の國學者は言靈を説かねば心にすまない感じがあつた程に見える。中に五十音説派に對し七十五音説を唱へるものがあつた。今一々詳述を避けるが、唯その系統だけを次に擧げて置く。

七十五音説

七十五音派

野山元盛—中村孝也—五十嵐篤好
富樫廣蔭

五十音派

平田篤胤—富樫廣蔭—堀秀成
高橋殘夢

「有り」居
「り」は果し
て終止形か

豐後の物集高世は辭につき獨自の見を抱いてゐた。それは辭格考の著となつてゐる。安政五年に上梓した辭格考抄本二卷はその拔萃である。考によると、言語を體・用・辭の三つに分けることは他と異るところはないが、體と用とは更に各これを眞假の二つに分け、活用言の希求形を截斷言に併せ、一般に良行變格としてゐる「有り」・「居り」の活用「り」の語尾は果して截斷言であるかを疑つてゐる。次に形狀言は單辭・複辭に分ち、その活用を

複辭	單辭	憎	さ	く	し	き	げ
複辭	怪	しさ	しく	し	し	き	しげ

と立てゝあるが、形狀言は本來は存しなかつたもので、本言（語幹）に辭の加はつて活用するに過ぎないものと斷じ、世上には「怪しみ」・「悲しみ」の如く「み」をもつ類を形容詞の語尾とするものがあるが、これはま行四段にうつした語尾と説いてゐる。これは一つの正しい見解であるが、條件を示す「けれ」の語尾を認めないで、四段活の「かれ」の通音であるが故に特にこの變化を立てなくて宜しいとの説は賛意を表しがたい。

「のどけし」・「靜けし」の如きは「のど」・「しづ」といふ本言に「か」及び「し」の附き、「か」の音が「け」に轉じたものの、「憂けく」・「悲しけく」の類は前者とは別で「く」を延べたものといつて區別し、

靜辭に連用
截斷の二形
あると説く

活語雜話に「さ・し・さ・げ・しげ」を擧げないのは委しくないとし、「く・しく」に助辭「は」の添うたものを友鏡に將然としたのは不可で、これを認めるなら「とも」と續くのは截斷としなければならぬといひ、これはら行四段にうつし、「か」を「く」に轉じ、ら音を省いたものと解してゐる。さうして辭を希求辭以下十二種に分ち、活用をもたない辭にも連用と截斷とを分けてゐる。例へば、

(一)花は咲くか

(二)花が咲くらむ

「ましど」を
見出す

に於て(一)の「か」は截斷であるが、(二)の「か」は連用であると説き、否定に「ましど」といふ助辭を認めてゐる。萬葉集に「秋の野の尾花がうれをおしなべて來しくもしろく^{ユタ}」とあるを詞玉緒に「しく」を一つに見たのは宜しくなう。「し」は「きしくか」の「し」で「く」は連用の辭であると解してゐる。「ましど」の助辭も認めてゐて、それは「まし」に不の意の「じ」が添ひ、「ましどく・ましどき」と活用するとの如き卓説もある。「まほし」を一つの助辭と見ないで「ま」は「ほし」とは別言で、連用の辭となすが如く、八衢や玉緒・活語雜話を是正しようと志した末書は少くないが、また從來助辭については他との連接を詳かに説かれてあるが、靜辭も動辭と同じやうに取扱はうとしたところにもその特色を見る。これを要するに、その説くところ純雜相雜つてゐる。

十八 西洋文典に則を取るもの

上記の富士谷・本居二派及びこれを繼承した諸家の文典は多少外部の刺戟があつたとしても、大體本邦固有の研究と見るべきである。然るに江戸幕府の末期に及んで和蘭文法の影響を受けて範を全く彼れに取つたものを出すに至つた。鶴峰戊申の語學新書は即ちそれである。

鶴峰 戊申

戊申は豐後の臼杵の人、蘭學の師資は明かでないが、國學・曆算の學にも通じ、四方に講説すること多年、後水戸侯に聘せられて八洲文藻や明倫歌集の編輯に與り、安政六年に歿した。

語學究理九
品九格總括
圖式
語學新書

著作は頗る多いが、中に語學に關したものも少くない。文政十三年に語學究理九品九格總括圖式を出版し、後天保二年これが説明ともいふべき語學新書二卷を脱稿して、同四年に出版した。この他に蘭字通、蘭學捷徑、悉曇字母新釋、梵語新釋、助辭頌、鍍木文字考^各、神代文字點畫考、神代文字考、増補假名遣、詞鏡等の語學關係書もある。九品九格圖式は和蘭文法の方則を以て國語の方則を説かうと企てたものである。

和蘭語の學習の跡を一わたり考察して見る要がある。耶蘇教の侵入を恐れて江戸幕府が西洋の書籍を

繙くことを禁止して以來百年、八代將軍吉宗の時、科學に關する圖書の閱覽をゆるして以來、青木昆陽を始めとして蘭學を修めるものが次第に生じて來た。

中野柳圃

安永の頃長崎の中野柳圃は十八歳で家業の通詞の職を辭し、ケールの天文學の翻譯に従事すること二十餘年、その間にかの國語に語格・詞品のあるに心づき、自家の土藏の中にひそみゐて、和蘭文法の研究に没頭した。また享和の初和蘭詞品考を草して、彼の國の文法の九品六格六時の別あることを明かにし、これを吉雄永保・馬場穀里等に傳へた。

和蘭詞品考

羽栗洋齋
和蘭文詞考

大槻盤里

長崎の人吉雄俊藏は大阪に出で、名を羽栗洋齋と改め、六格前篇といふ和蘭文詞考を著した。

中野氏に従つてゐた仙臺の大槻盤里は、文化十三年蘭學凡三卷を著し、尋いで和蘭接續詞考二卷を作つた。

藤林普山の
和蘭語法解

蘭學凡

京都の人藤林普山は文化九年和蘭語法解三卷を出し、言辭を九等として性言・名言・代言・活言・分言・添言・接言・上言・感言を擧げ、その中、性言・名言・代言・分言は六格に従ひ、活言は三世によりて變るが、添言・接言・上言・感言は絶えて變ずることがないといひ、洋齋の和蘭文詞考には九品を宗詞・名詞・斥詞・業詞・誇詞・副詞・前詞・續詞・突詞とし、六格を能格・領格・得格・任格・聽格・失格と名づけた。盤里の蘭學凡は配字學・詞性學・綴詞學の三つに大別した。

斯ういふ先進の後を受けて戊申は、まづ本居派で云はゞ紐鏡に相當する九品九格圖式を出したのであ

る。外人の書いた日本語典はアルヴァーレス、ロドリゲスや、オヤングレーンの文典が夙く出来てゐても誰も見るよしもなかつた。そこで戊申は國語の性質・形態を異にする蘭文典を型とし、國語を例に擧げて新しい日本文典を著したのである。

六 格 この圖は體・用二言を経とし、六格・三格を緯としたと云つてある。所謂六格は

能主格 所生格

所與格 所役格

所奪格 呼召格

で、次の三格は現在・過去・未來の三世を指してある。中に能主格は紐鏡に基き、「はも」の類を第一能主、「ぞのやか」の類を第二能主、「こそ」の類を第三能主格とし、結をなすものは完助辭・缺助辭の二つに分けてある。次に品詞は體言を實體言・虛體言・代名言・連體言の四つに分けた外、局外四言として形容言・接續言・指示言・感動言をすべてある。

語學新書は初刊本、後摺本、改竄本、復舊本等がある。初刊本は二冊、島田易清及び小山田與清の序が附してある。性詞即ち冠詞は我が國にはなく、前置詞も同様であるからこれを除き、その代りに助詞を以てし、名言を自立名言と附屬名言とに分けてその數を合せたり、今いふ形容詞を虛體言といつたり、副詞を形狀言といつたり、彼れの分詞を連體言と名づけたり、實體言は統稱と各稱とに、代名言を人名

係辭を三つ
の能主と立
てた
品詞の區別

活用言の九等

・物名・指物・再現・疑問・汎稱の六つに、活用言には直説・許可・使令・不定・疑問・不無・有不・附説第一・第二の九等を立てるなど、用語も難駁生硬の嫌ひが少くない。併し兎にも角にも破天荒な新しい試みであつたのであるが、その結果は失敗に終つた。改竄本の如きは見返しに「本居宣長著、言葉のにしき」としたり、内題に「詞葉の錦、本居大人著、中橋鶴峯校」とするなど射利の書林のわざには違ひはあるまいが、不成功を示してゐる。但し明治の御代に至り、蘭英の文典を骨とし、國文を肉とする人の出で來つたのは、この著の影響が全くないとは云はれない。

前田利保

富山藩主前田利保侯は本草學者として名高い人、歌も中々達者で清蘂集に佳歌が多く、歌論書も澤山に著してゐられるが、文法學に關したものも片々たるものではあるが、五六十部に上つてゐる。嘉永七年

標原

の筆に成るおもむき標原は蘭文典の影響を受けてゐる。語を添加詞と作語詞とに分ち、作語詞を名詞・業詞・

小詞類とし、名詞を更に示姓詞・湊名詞・代名詞に、示姓詞は男性・女性・中性に分ち、これに單複人稱を立てるなど蘭文典の直譯的なところが多い。格を四つに分けたのも同様である。業詞を平調業詞・

不平調業詞・不正調業詞・返己業詞・自然業詞の五つに分け、「が」「の」「に」「を」は活原四語と呼び、

活原四語と業詞

業詞の變化は活原四語から導かれると説いてある。尙韻鏡考・車門餘言・自他解等・辭公程・濁音考

自餘の著述

・三語脈餘流・收入押明方・吉野奥守・七千五百言・玉緒みだり・發語考・響尾考・幽時言串説・山途

蟲々・清渚・五十音内外傳がある。中には面白き考もあるが、用語が新造であり、且各書とも筐底に藏

せられたもので、後の影響は全くないものである。

詳くは拙著大日本歌學史前田利保侯の歌學及び増訂日本文法史を參考せられたい。

十九 江戸時代に於ける辭書

多 識 篇

江戸時代に至りて成つた漢字の字書は林道春の多識篇二冊が夙く寛永七年に出版された。分類體の字書で憑據もしつかりしてゐるので、詩作家に喜ばれ、爾後版を重ね、増補もされた。

和 爾 雅

貝原好古の和爾雅は爾雅に倣つたもので、部を天文以下言語に至る二十四門に分け、元祿七年に刊行、八卷九冊。

合 類 大 節 用 集

横島昭武の合類大節用集は大きくいろはに分け、中を分類引とし、十卷十三本として出版された。

漢字書と異り國語に關するものは鮮少でない。拙著大日本歌書綜覽歌詞の部に挙げたものは百二十餘部に上り、また萬葉集の中、語に關するものが別に百二十數部を數へられる。中に和歌に關するものが多數を占め、連歌に關するものがこれに亞いでゐる。

春 雨 抄

鱧重常が著、春雨抄は二十卷十本、いろは順に語及び句を列ね、さうやかな註を下し、數多の用例を示してある。寛永十六年林道春の序を加へ、明暦三年上木。歌人連歌師の爲に作るところ。

和 歌 吳 竹 集

寛文十三年出版の和歌吳竹集十卷、元祿三年出版の河瀬菅雄の眞名草五卷、元祿十三年出版の有賀長

和歌八重垣

まさな草

匠材抄と荻のしをり

歌林樸櫟

和訓類林

伯の和歌八重垣七卷、北村季吟の和歌詞の抄十五卷の如きは、歌詠む人の爲にものせられた小字典で、吳竹集には新吳竹集、まさな草には増補眞名草、新政名艸、掌中政名草等重刻されたものが少くなかつた。八重垣の如きは詠み方がその三分一を占めてゐる。その他詞の意義・用法を説いてあるが、歌よみの手引草としての辭書である。連歌に用ゐる匠材抄や荻のしをりも同じ系統のものである。

これらと稍、選を異にするものに松永貞徳の歌林樸櫟があり、海北若冲の和訓類林がある。前書は日本紀・奥儀抄・袖中抄・和歌童蒙抄の詞その他故事ある詞をいろは順に列ねて諸説を紹介し、次に自説を加へてある。二十八卷本・十四卷本・八卷本・二卷本等があり、近年活字に附せられた。和訓類林は日本紀を始め詩經・文選の類に至る二十餘部の書中より漢字及び諸物の名稱などを集めて、これに和訓を附し、いろは順に排列したもので、本篇は七卷より成り、附録の和訓指掌略は日本紀中の訓のみを摘出していろは順に並べてあり、啓蒙的のものではない。

貞徳の和句解や、益軒の日本釋名や白石の東雅は、語原字典として既に説いた。橋成員の倭字古今通例全書や鳴東菰父の蜺縮涼鼓集や、楫取魚彦の古言梯の如き、それ／＼字彙として見れば見られるが、假名遣の字典として別に述べた。

特別な言詞、例へば枕詞の如きは長流の燭明抄、眞淵の冠辭考、服部高保の續冠辭考、楫取魚彦の續冠辭考、上田秋成の冠辭考續貂、鹿持雅澄の萬葉枕詞解等その数が少くない。これも余が枕詞の研究と

枕詞の字典
の關するも

釋義に挙げたものが約五十部に上つてゐるが、中に冠辭考が最も優れてゐる。

萬葉集類林

萬葉集の語を釋したものには契沖門下の海北若沖が著萬葉集類林十六卷が寫本で傳はつてゐ、萬葉集の詞を釋言・釋人物・釋官・釋器・釋天・釋地・釋草・釋蟲・釋雜に分類してゐるは順に列ね、一々證歌を引いて、注釋を加へてある。その以前に出た堯以の作かと云はれてゐる萬葉集見安（萬治四年刊）、

萬葉集見安

それを池永秦良が手を加へた補正十卷は五十音順に列ね、略註を加へてある。契沖に學んだ五井持軒の

萬葉集詠

古言譯通

萬葉詞林抄

子純禎が著した萬葉集詠五卷は事項分で、その中の詞をいろは順とし、寛政九年上木した。鹿持雅澄の古言譯通は萬葉集の詞を五十音に分ち、譯語と解釋とを添へたもので、天保四年起稿、同八年全部五卷を完成した。高橋殘夢の萬葉詞林抄はその排列は五音圖に據つてはあるが、あ・わ・や・さ・は・な・た・か行の順に列ね、一行の順はか・こ・く・け・きの次第で、弘化三年に成つた。

源偶篇

源氏大和詞
源語詠

源氏物語の語を釋したものには契沖の源偶篇がある。この書は貞享二年に成り、桐壺より夢浮橋に至る五十四帖に分け、いろは順に語を集めて簡單に註し、源氏故事詞分を添へてある。（な以下はなし）後元祿九年に源氏大和詞として三卷出版された。次いで五井純禎の源語詠三卷が成つた。これは天文・地理等に分ち、その中は帖の順次によりて詞を列ねてある。荒木田守訓の源氏物語玉の御須磨流十六卷は文化十年に、菅原種文の源氏雅語纂解二卷は天保五年に成つた。これもいろは引である。尚、その他のものは藤田徳太郎氏の古刊源氏物語書目を参照。

和漢名數

その他名數の字書として貞原益軒の和漢名數同續篇各二冊が世に行はれてゐる。元祿八年開板してより屢、版を重ねた。

和訓栞

普通の字書の最もよく備はつたものは和訓栞・雅言集覽及び俚言集覽の三部を指すべきであらう。中にも和訓栞は最も優れてゐる。著者谷川士清は津の人、延享五年日本書紀通證三十五卷を著して我が古典を究明し、次には字典の撰輯に力を注いだ。前・中・後三篇合せて九十三卷より成る浩瀚なもので、生前に全部の出版は見られなかつた。十三卷までは安永六年に、二十八卷までは文化二年に、四十五卷までは文政十三年に、七十五卷までは文久二年に、九十三卷までは明治十六年に刊行された。明治三十一年に増補和訓栞が三冊、同三十二年には別の和訓栞三卷が活字に附せられた。木版本も後編は後東京で印刷したものと岐阜で板にしたものとの兩様がある。岐阜版後編は野村秋足が校訂し、多少の増補を加へてある。

増補
語林

和訓栞は平田篤胤の藏してゐた伴信友の校正書入れ本を基として井上頼園・小杉楳亭が増補したもので、語林は上欄に記してある。これには原本の前編・中編を収めて下編はない。後編は地名・草木・鳥獸・魚介の類が主となつてゐる。

この書は語を本位とし、假字を以て語を標出し、正字を以て訓詁とし、五十音圖の順に列ねてある。尤もや行の「い」「え」及びわ行の「う」は省きたれば、四十七條となり、「お」「を」の所屬はまだ是

正されていないが、假名遣は歴史的のものに據つてあつて、一々意義を説き、用例出典を示してある。首に編撰の大綱を擧げてあるが、その所説は随分委しいもので、著者の語學上の意見を窺ふに充分である。語の種類をいへば、上代の古い雅語から中世語に及び、近代の語に入り、方言をも捨てず、更に韓語・梵語・南蠻語から導かれたものにも及んでゐる。同音異義語は項を分ちて各その下に彙類する方を取らないで、一つの語の下に雜然と並べ擧げてゐるのは體裁上宜しきを得ない。また各種の手爾波を一單語と認めない爲に、他と連結して一成語となつたものばかりを擧げたり、固有名詞を普通の語と相交へて擧げたりしてある點などは贅意を表されないが、江戸時代に於ける最も整つた辭書と謂ふべきである。漢梵の國語の相違に筆を起して漢土の韻語、我が邦の訓語の差別を説き、或は素朴な古言の變じて文となり、長きもの極りて略された點などをも説き、文に於ける皇漢兩國の體用の位置を論じたり、文章と口語との別をことわり、または假名を論じ、用字法を委しく示し、更に音韻の清濁を考へ、各地の方言を述べるなど、先進の説に基いたところがあるにもせよ、自家の見を織りまぜて説を立てゝゐる。

雅言集覽

雅言集覽五十卷は石川雅望の撰にかゝり、主として平安朝時代の文學書から語を拾ひ、いろは順に列ね、用例出典を多く擧げて説明を加へたもので、「い」より「か」までの部は文化九年に、「よ」より「な」までは嘉永二年に刊行せられ、以下寫本で傳へて來たが、明治二十年に至り、増補雅言集覽全三冊が發行された。この増補は肥後の中島廣足が加へたものであるが、その生存中に上梓が出来なかつたので、

その孫の惟一が上板を企てたものである。

尙、仙臺の保田光則は本書の上梓された「い」より「な」までの部の増補を企て、文久二年十三卷を成し、更に「ら」以下原本の傳はつてゐるのを知らなかつた爲に、みづから雅言集覽續篇三十二卷を撰んだ。

雅言集覽は語原の説明は和訓栞に比べて十分でないが、引例は最もよく集めてあり、同根から派生した語は勿論、それに結合した熟語や句までも項を分けて見易くしてあり、凡例にもことわつてある如く古の雅しい語を十分に我がものとして使用するに便よからしめるやうに力を注いである。撰者が中古文をよく擬作して當時のことを巧みに書いたのは故あることゝ首肯される。

雅言集覽は寫本二十六冊、村田了阿の編と云はれてゐる。井上頼圀・近藤瓶城二氏によりて増補せられ、活字本三卷が明治三十二年に出版された。この書は主として口語を集めたもので、雅言集覽に對して編纂されたものと思はれ、配列は五十音の横列により次第してあつたが、増補本は五十音堅の順に改め、語彙解釋に於ても多く増補されてある。雅言のみの研究された時代に方り、越谷吾山の物類稱呼と共に口語の二大研究書として頗る貴いものである。諺草や本朝俚諺などから採つた「秋茄は媳に食はすな」の如き、町人囊から採つた「商人と屏風は曲らねば世にたゝす」の如く長い語句もあるが、當代通用のものを主とするので、單語に限らなかつたのが却つて讀者には便を與へたのであらう。

語林類葉

清水漬臣が語林類葉は本書二十卷、附録二卷、寫本で傳はつてゐる。多くの古書特に物語を中心として中古語を蒐集し、五十音順に列ねたもので、解釋を加へ、出典用例をも擧げてある。

據字造語抄

濱臣の著には別に據字造語抄が二卷あり、文政五年の著にかゝる。漢語を國語のやうに改作した例を集めて五十音順に列ね、その中を更に天象・地儀・人倫等に分ち載せて、多少の批評を加へたもの。例へば鹿苑を「かせぎのその」といひ、桑門を「くはのかど」と國語にうつすが如く、詠歌の參考に供した特別の小辭典である。

語作例類

この他田澤仲舒の語簾百卷、吉川忠行の作例類語六十二卷も雅言・歌語を多く集めて五十音順に列ね、注釋を加へ、使用法を説いてある。仲舒は文化頃の人、村田春海や清水漬臣等と相識の間柄であつた。忠行は秋田の人勤王を以て聞え、元治元年に歿した。

和漢三才圖會

次には百科全書的辭書の二三に就いて述べる。まづ第一位に擧ぐべきは寺島良安の和漢三才圖會である。この書は王圻の三才圖會に倣つたもので、正徳二年に成り、百五卷八十一冊の浩瀚なもので、上は天文から下は地理より人事・動植・器用に至る百般の物を部類を分ち、繪圖を入れ、漢文にて注解を下してある。明治三十九年活版に附した。もし國文にて注してあつたならばと思はしめる。

古今要覽稿

次に幕府の事業として十一代將軍の治世に屋代弘賢以下の學者に命じて編輯せしめられた古今要覽稿がある。この書は神祇・天文・地理・祥瑞・時令・居處・釋教・人物・姓氏・官職・政事・和歌・小學

嬉遊笑覽

・飲食・器財・禽獸・草木・雜事の十八部門に分ち、各部中更に門を設け、大凡一千卷を以て大成する豫定であつた。寛政十年に業を創め、或るに隨つて上覽に供したもので、文政四年から天保十三年に至るまで二十二年間に奉呈したものが五百六十冊、類書としては詳密を極めたもので、道々の學者、例へば栗原信充・松岡行義・岩崎常正等十數人業を分ち相輔け、弘賢が總判となりて撰修したもの、明治三十八年印刷に附せられた。

喜多村信節の嬉遊笑覽もこの類に數へてよい。部を居處・容儀・服飾・器用・書畫・詩歌・武事・雜伎・宴會・歌舞・音曲・翫弄・行遊・祭祀・佛會・慶賀・忌諱・方術・娼妓・言語・飲食・火燭・商賈・乞士(化子)・禽蟲・草木に分ち、その中に細かい事項を含めて一々説明を加へてある。文政十三年に成り、十二卷ある。明治の御代に至り自我自刊本として印刷に附し、また明治二十一年に至り、近藤圭藏氏が校訂して、上下二卷として出版した。古今要覽稿と嬉遊笑覽とは類書とすべきであるが、序にこれに加へた。

諸職專用詞
寄字引

この他諸職には専門の要語の小辭典の如きがある。應に關しては應詞・應詞いろは歌・應詞以呂波寄・應詞集・應詞類寄・鷹犬詞大概等の詞集がある如く、馬には馬詞集があり、建築家には大匠雛形規矩階梯を始めとし、建築辭彙に引用した諸書があるが、今一々これを擧げない。

二十 江戸時代に於ける方言語彙

言語は時代によりて變遷があり、方域によりて轉移がある。我が國古來より雅言を貴んで來たことは年尚しいものであるが、地方言もその實勢力を無視する譯にはゆかない。萬葉集に東歌のあるもこれを實證するものである。而して東歌の研究も萬葉集全般の注釋書から離れて特別にこれを扱つたものには鈴屋門下の田中道麿がある。

萬葉集東語
葉
東語例
東大寺諷誦
文

道麿は天明四年以前に萬葉集東語葉を稿した。この書は一名を萬葉集十四二十類詞略といひ、東歌の訛言を五十音順に類聚し、相通もしくは省略等によりて説明を加へたもので、その外には物集高世の分類とし、略註等を加へた東語例などがあるに過ぎない。

平安朝の初期に於て既に毛人方言・東北方言・飛騨方言の名は東大寺諷誦文に載つてゐる。更に鎌倉時代より室町時代を経て國語に著しい變化を來した。隨つて雅語・俗語の論が切りに行はれた。俳諧には俗語を採り入れることが多いので、自づと俳人には俗語研究に志すものが生じた。

安原貞室
かたこと

安原貞室が「かたこと」は夙く慶安三年に板になつてゐる。一部五卷より成り、卷一・二の兩卷は別に一

定の秩序なく目なれた詞を挙げ、三卷の中期より篇目を設けて分類別としてある。一子の言語矯正の爲に筆を執つたとある。各語の解説中には京言葉の外、吾妻言葉・北國言葉・近江言葉の名も見え、著者は今いふ標準語意識に立脚し、歴史的考察をも忽にしないで、各地各階級に互り、方言・俚言の原義を解明し、その誤を矯正しようとして企てた點から見て、國語學史上注目すべき方言辭典の最初のものである。

志不可起

次に方言研究の書として作者不明の志不可起（澁柿）七卷がある。首卷が見當らないので、著作も年代も明かでないが、中に記したことにより西鶴や近松と粗く同時代に存へた廣き教養のあつた武人の手に成つたと覺しく、いろは順に方言を擧げて釋してある。卷二は「ち」から始まつてゐる。著者は内典・外典に通じ、國文學に關しても相當深い智識をもち、有職・故實より本草・醫學に至るまで要に應じて引いてゐる。元祿時代の所産と思はれるが、町人生活のそれよりも武士階級を中心としてその言語を採つたらしく考へられる。故佐藤鶴吉氏が元祿俗語辭書として國語國文（第四卷第一號）に紹介され、余が國語學大系第十九卷に收めた。潤色詞林三知抄の著もその手に成つたことが見えてゐる。

詞林三知抄
越谷吾山
物類稱呼

都會と田舎
の詞

俳人越谷吾山は安永四年諸國方言物類稱呼五卷を刊行した。この書は全國の方言を天地・人倫・動物・生植・器用・衣食・言語等に分類した辭書で、方言研究者の必ず座右に備ふべきもの、その序に都會と田舎の言語を評して、

都會の人物は萬國の言語にわたりてをのづから訛すくなし。しかはあれど、漢土の言語に泥みて却

て上古の遺風を忘るゝにひとしく、邊鄙の人は一郡一邑の方言にして且てにはあしく訛おほし。されども質素淳朴に應じてまことに古代の遺音をうしなはず。

といひ、音韻に關しては

直音と拗音との境界線

大凡我朝六十餘州のうちにても山城と近江、又美濃と尾張、これらの國を境ひて西のかたつくしの果まで人みな直音にして平聲おほし。北は越後信濃、東にいたりては常陸をよび奥羽の國々すべて拗音にして上聲多きは是風土水氣のしからしむるなればあながちに褒貶すべきにも非ず。畿内に俗語あれば東西の邊國にも雅言ありて是非しがたし云々

と意見を述べてゐる。

藩ことば

江戸時代には三百諸侯が各地に據つて、その家の慣習に基き、制度・文物をさながら保存しようとしてゐたので、方言が澤山に分れてゐた。訛の多き國に育つた姫君が他藩にかしづく場合には御國訛が出ないようにと藩の學者・侍臣などがその地の方言の著しいものを抜き出し、上方言葉に對照したその地の方言集を編んだ類も少くない。仙臺藩の連歌師猪苗代兼郁が享保五年に著した仙臺言葉は、増補して仙臺言葉以呂波寄となり、庄内の堀季雄は明和四年國老水野華竹夫人が江戸に赴くに方り、濱荻一卷を著して贐とした。これは江戸詞を始めに出し、その下に庄内方言を載せてあるが、分類分けもなく、

仙臺言葉以呂波寄濱荻

排列にも一定の標準がない。

尾張方言

尾張の人山本格安は寛延元年尾張方言一卷を著した。これは天地・日時以下十三門に分ち、尾張方言二百六七十を擧げて注釋を加へてある。

御國通辭
水かはり
浪速方言集

南部の服部武喬は寛政二年御國通辭を著し、名古屋の石井重穂は文政年中水かはり（尾張方言）を著し、失名氏の宮訛言葉の掃溜は文化四年に、高津龍の浪速方言集は文政六年に成つた。

浪花方言

大阪方面では文政二年某氏の浪花方言が出で、又天保十五年には大阪詞大全が刊せられた。

仙臺言葉
方言達用抄

尙、仙臺藩では享和五年堀田正敦侯の仙臺言葉や文政十年大里源右衛門の方言達用抄が成り、庄内藩

莊内方言
久留米方言

の氏家剛太夫は天保年中莊内方言放を著し、久留米藩の野崎平八が久留米方言集はまおきを著し、肥後

菊池俗言考

の永田直行は嘉永七年菊池俗言考二卷を著した。

松前方言考

また淡齋如水は嘉永元年松前方言考九卷を著し、俳諧寺一茶は信濃方言雜集を遺し、長門の布施御牆

秋長夜話
丹波通辭

は他所問答中に長州訛を擧げ、香川蕪臣は秋長夜話を著して廣島方言を説き、某氏の丹波通辭や失名氏の上州言葉も幕末に成つた。

その中板になつてゐるもの、成らぬもの、近時に及んで印刷されたもの等夥しくあるが、今は説かない。例へば、淡路ことばの如き隱言集もある。斯くの如き資料は現代の方言研究の先驅をなすもので、従來は藩以外の人にはあまり注目せられなかつたが、今は國語學史上重要なものとなつた。但し音の標記の嚴密でないのは時世上止むを得なかつたのである。

沖繩方言

尙、今一つ沖繩方言に就きて述べんに、琉球語はもと我が大倭言葉の一分派で、土地が邊陲に位するので、内地との交通が杜絶するに及び次第に方言化したもので、その時代は大凡紀元後八世紀頃かと云はれてゐる。「今日はよい天氣であります」といふを、現代の沖繩語で「チューヤ、ヨイテンチビル」といふ。内地で「キ」といふ音は「チ」に似て發音し「侍る」の「ハ」音が落ちて「ビル」となつたといふ如く、彼の國古謡のおもろ草紙を検討すれば、次第にその關係が分明となる。

おもろ草紙

琉球は一時支那に内附してゐたが、島津侯の琉球入後社會制度の激變によつて、古き琉球語に一大變化を來し、古語の次第に亡んでゆくので、尙貞王の時、これを記録せられようとの御思召があつたが、實現するに至らなかつた。正徳元年攝政越來王子朝奇等が命を奉じて撰んだ混効驗集があり、往年伊波普猷氏によつて上梓された。

混効驗集

以上は余が國語學大系方言部に大略は收めて置いた。

現代

一 明治維新より三十年代まで

國學者の動
き

明治維新は制度・文物の上に空前の大變革を來した。然も國學者は平田學派を奉じたものが多數で、その當初には多少新政に參與するものもないでは無かつたが、教部省の設けられるに及び、その方面に入り、官國幣社等の祠官となるのが一般で、國語學は顧られなかつた。明治初年開成所の課程中語學として挙げたものを見ても、草創の時代とはいへ、その貧弱なことが分る。江戸末期の國語學者も次第に凋落し、残れるものも頽齡事を成すの氣力はなかつた。國語に関し新しい意見を抱いた二三の士もあつたが、まだ大きな勢力をなすに至らなかつた。斯くて政治の局面を始め各方面には大きな變易を見たが、斯學の上には著しい進展を見なかつた。而もこの間に全く記すべきことがないではない。

江戸末期の
國學者の凋
落

天保の頃より矮屋一家言や通略延約辨や、言葉の正みちや活語活法活理抄などを著してゐた神道家の

明治維新より三十年まで

大國隆正は明治四年に、富士谷語學を増補した保田光則もその前年に、本居派語學の繼承者と目された富樫廣蔭も同六年に歿した。撥音假字攷存疑・詞玉緒攷・靈語通砭鍼・古言梯補遺・詞八衢補正等を遺した岡本保孝は明治十一年に他界し、辭格考を著した物集高世は十六年に歿してゐる。古風の國語學者としては、堀秀成・權田直助・落合直澄・生川正香等が優れてゐた。

新意見を抱く人々

國語問題に關して新しい意見を抱いてゐた人々としてはまづ前島萊助(後密と改む)・柳川春三・南部義壽・森有禮等を舉ぐべきであらう。

前島萊助の建議

中にも前島は文久の末長崎に到り同志と國民教育の立場から學習に困難な漢字の廢止を議し、慶應二年將軍に「漢字御廢止之議」といふ意見を上つた程で、維新の後明治二年には「國文教育之儀に付建議」、「國文教育施行の方法」の二篇を衆議院に提出した。國文といつてあるが、國語に關することは、

國文を定め文典を制するに於ても、必ず古文に復し「ハベリ」「ケルカナ」を用ふる儀には無御座候。今日普通の「ツカマツル」「ゴザル」の言語を用ひ、之に一定の法則を置くの謂ひに御座候。

と云つてゐるので分る。

柳川春三の建議
ローマ字論者

開成所の頭取であつた柳川春三も布告の書には假名交り文を用ゐて刊行すべきことを同年に建議し、土佐の南部義壽は修國語論を大學や文部省に建議して、洋字を用ゐて國語を綴るべしといふが如き突飛な説を述べ、明治五年には Nippon Bunken Uiminanabi を著してローマ字論を唱へ、森有禮は英語を

森有禮の愚
論を馬場辰
猪痛駁

教育令と小
學校の文法
科

以て國語に代へてはといふが如き暴論をアメリカの教育雜誌に載せるなど、國語に對する自意識を缺いてゐた。馬場辰猪が倫敦にありて明治六年日本文典初歩を書いて、その序に森氏の妄を痛撃したのは當然といふも當然すぎることである。

明治五年には教育令を頒布され、小學に兎も角も文法科を置かれ、その科程も下等小學に於て第四級に詞の種類・名詞の諸變化、第三級に後詞・接詞・代詞の諸變化、二級に動詞活用 of 諸變化、一級に接詞・副詞・嘆詞を課すると定めてある。これも外國文法の直譯から來てゐることが一見して分るが、どれだけ實行されたのかも疑問である。併しかういふ定めが出来た爲に文法教科書が續出したのである。

大倭語學手引草 一冊 中金正衡 明治四年刊

語彙別記 一冊 文部省 同

皇國文法階梯 一冊 高田西野 古菴海村 明治六年刊

皇國日本文典初學 一冊 黒川眞頼 同

小日本文典 三冊 田中義廉 同 七年刊

日本文典 二冊 中根淑 同 九年刊

日語學階梯 二冊 堀秀成 同 十年刊

雅俗文法 二冊 里見義 同

明治維新より三十年まで

皇國語學自在	二卷	生川正香	同
初學日本文典	二卷	物集高見	同十一年刊
語學指南	四卷	佐藤誠實	同十二年刊
語格指南	二卷	大矢透	同十三年刊
日本文典	三卷	阿保友一郎	同十五年刊
小學日本文典	二卷	大槻修二	同
ことばのその	一卷	近藤眞琴	同十八年刊
語學自在	二卷	權田直助	同十八年刊
倭文機	二卷	里見義	同十九年刊
日本小文典	一卷	チェンバレン	同二十年刊

以上は明治二十年までの間に刊行された主要なものを挙げた。この他にも澤山ある。(拙著増訂日本文法史参照)

□範を西洋文典にとつたもの

大倭語學手
引草

中に、中金氏のは上卷に五十音・紐かゞみ及び八衢の圖表を引いて、江戸時代の國學者の説によつて

田中義廉

語法の要を掲げ、下巻は外國文典によつて實名詞・代名詞・形容詞・動詞・分詞・副詞・接續詞・感嘆詞を説き、代名詞に人・物主・疑問・複歸の四種を分ち、動詞に能動と受動との別を説き、また命令・期望・疑問の三法、過去・現在・未來・半過去・大過去・第二未來の六時を説いてゐる。分詞等を除けば、爾後の文典の術語はこれに合致するものが多い。

田中義廉氏は海軍兵學校や文部省に職を奉じ、チェンバレンとも交際があり、大木文部卿の命を奉じて同僚と共に漢字節減の目的を以て新撰字書を作り、またデニング等と官立東京師範學校の教育に與つた。その文典と中根氏の文典とは共に世間より重く見られてゐた。

學小
日本文典

動詞の原形

田中氏の^{學小}日本文典は篇を字學・詞學・文章學の三つに分ける豫定であつたが、文章學の部は出来なかつた。詞學の中、分詞を除いて七品詞とした。名詞・代名詞を細かく分けて動詞を規則動詞・不規則動詞の二つとなし、四段活と下二段とを規則動詞とし、その他を不規則動詞として動詞の原形を有・得・爲の三つと定め、形容詞は廣義にとつて、動詞の連體形や名詞に助詞の加はつたものや、數詞や接頭辭をもその中に加へてある。助詞は各品詞の附屬とみてゐる。

日本小文典

明治十年に同氏の出した日本小文典には文章論の一斑を加へて、起語・結語・連續言・切斷言・中間言・約言に分けてあるが、新しい見方を試みて、却つて誤謬に陥つたものが少くない。生川正香は爲に小學日本文典辨惑一卷を著した。(この評はまだ管見に觸れない。)

中根淑の日本
本文典

田中氏の小説
日本本文典
の正

送假名

中根氏は夙く陸軍省に出仕して少佐に任ぜられ、明治六年文部の編輯となり、後著述家となつた人、氏の日本本文典は上下二巻より成り、上巻の首に前論として人種語脈論・上古文字有無論・文字音訓論・日本語外國語論・假名文字論・字畫煩簡論・俗字論・日本外國語正否論を説き、附録には附ケ假名・送假名の二項を説いてある。品詞論中に後詞の目を立てたり、動詞中、一段活や三段活を不規則動詞と見倣さないことや、形容詞は名詞の前ばかりに置くとするのは誤と斷するなど、田中氏の本文典の非を匡さうとした所も少くない。當時に於ては高級な本文典と見られ、師範學校等の教科書にも用ゐられた。併し「くしき」活用を分解して、その連用形を副詞とし、終止形を動詞とし、連體形を形容詞と見るがごとき、吾人の贅意を表しがたい説も交つてゐる。音調論には歌行の發音格調を説き、緩急音（音便）・曲直音（アクセント）・熟語音（連濁連聲）等にも觸れてゐる。本文典に送假名法を説いたものこの書に始まる。生川正香はこの本文典に對し疑問一卷を稿したといふが、今は傳はらない。

□主として國風によつた本文典

西周の日本
語典

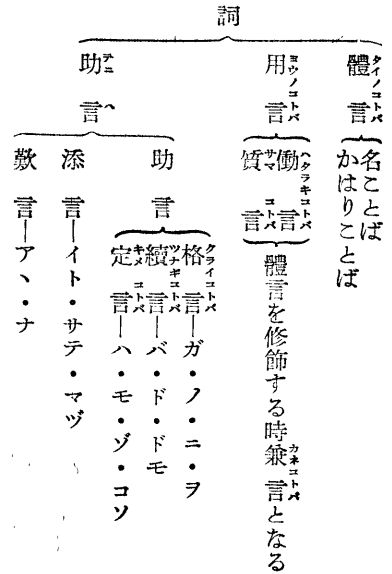
明治の新智識の一人であつた西周は、夙より國語問題に心を潜め、明治の初には日本語典を脱稿したが、世に公にはされなかつた。その大綱を云つて見れば、詞を次の如く分類した。

皇國風の分類

「ことばのその」との關係

新しい語の分類

英文日本文典初歩



その名稱は努めて皇國振に訓むやうになつてゐて、後攻玉舎を開いた近藤真琴の「ことばのその」の首卷に擧げた語法に示唆を與へたものと思はれる。氏は幕末に海外に留學し、蘭學に長じてゐたが、彼我を折衷して新しい試みを加へた。詞を三分したところ、用言を働言・質言に分けるのは國風に從つたもの、助言を格言・續言・定言と三分したのは今の格助詞・係助詞・條件を示す接續助詞と同じものであつて、中には「ど」「ども」を擧げて「とも」を逸したやうな類は他にもあるが、兎にも角にも新しいものが多いやうに見える。

馬場氏の文典は西曆千八百七十三年倫敦で出版されたもので、英文で書かれ、題簽は Elementary
明治維新より三十年まで

森有禮氏の
論を挫く

Grammar of the Japanese Language とあり、氏の二十四歳の時の作で、その序文に森氏が米國で Education in Japan の序に、我が國語は支那語の補助なしには思想交換の目的に使用されない缺點が多いといふを憤り、ジョン・ロックの國語の目的に關する三條件を引いて、我が國語の優秀な所以を論じ、二個の國語の優劣を判じるには、諸種の方面に亘り綿密な研究が必要なることを説き、法律上の語が國語にて示されないといふ説に對しては、オースチンやウエーランドの語を引き、或はホイットネーの書簡を引いてこれを駁し、森氏の洋語を以て國語に代へてはとの異論に釘をさしたものである。

口語文典

本論は品詞と文章法とに分ち、骨を英文典に取つてはあるが、外人に日本口語法の定まりを知らせる目的で撰まれたもので、夙く我が同胞の手に成つた口語文典として貴いものである。その彼我語法の關係も十八ヶ條に分ちて明示してあり、末には一百の練習問題も擧げてあるので、外人はこの書によりて日本語を學ぶ手引として尊重した。従つて三版を重ねた程である。

馬場辰猪

氏は土佐の人、夙に麒麟兒を以て目せられ、歸朝の後政海に奔走し、自由黨の創立に力を盡したが、議が合はないので、去つて米國に赴き、明治二十一年に三十九歳を以て異邦に客死した。

二 洋風を嫌つた日本文典

堀 秀成

從來の國學者の手に成つたものは洋風に則ることを屑しとしない。この側に屬する人の中、その名が最も聞えてゐたのは堀秀成であつた。

語 學 所

秀成は古河の人、嘉永の頃既に著書を出してゐる。言靈派の國學者で、その文典は富樫廣蔭の説に負ふところが少くない。明治十年に學習院語學教示を命ぜられ、英照皇太后陛下の御前に於て、皇國語法の總論を進講し奉つた。時人皆これを榮とした。本郷妻戀坂の上に語學所を設け、音義派の語學を綴り分ちて教授した。英國公史館のエルネスト・サトー氏、獨逸人コルシエルトの如きも皆就いて教を受けた。氏は舊著蘿蔓を改訂し、明治十年に本語學階梯と題して出版した。氏はその後伊勢に下り、皇學館で若い學徒にその説を傳へた。落合直文の如きもその門人である。

本語學階梯

音 義 派

音 圖 大 全

氏は音義派の殿將で、玉緒や八衢を旨とする詠歌者流の語學も喜ばなかつた。解剖などを旨とする外國流の語學も排してゐる。實に我が五十の聲音は各象義を具へてゐて、音義は即ち言詞の原因となつてゐるとし、その本を究めるのがその本領とするところであり、彼れの語學所の趣意書にも明かにそれを

洋風を嫌つた日本文典

助辭音義考

標榜してゐる。さうして音圖大全を作り、それが解五卷を著し、その附録として助辭音義考を著し、また假名音義考をも著し、語原字典として古言類韻十二卷を著すなどこの方面に著しい業績を遺した。

母音五義派

「う」の一音が母韻の分生する本原とし、これには

第一等 開ケ初ムル象

第二等 溢レ出ヅル象

第三等 動ク象

第四等 伸行ク象

第五等 大キナル象

父音三義

の五義があり、「嘯く」「歌ふ」「産まる」は第二等、「動く」「浮ぶ」は第三等、氏・末・獨活は第四等、珍

・海は五等に屬すといひ、五つの母韻及びく・す・つ・ぬ・ふ・む・ゆ・る・うの父音には各それく、三十六

の子音には大抵三義を有し、猶一音毎に閉合・出入・昇降・縮張・清濁があることを説いてゐる。尤も

言語には本末二義があり、本義のまゝなる語は音義に據りてその原義を覺むべく、末義は本義より一轉

したものであれば、その轉じたところを究めねばならぬ。末義には借言・通言・約言・略言・延言・合言の六つがあるといひ、言語八種考を著して語學階梯の附録に載せてゐる。また言靈妙用論・古文語脈

他の文典の批評

考や言語變遷考を著し、その主張を初學にも容易に分るやうにした啓蒙書も數種出してゐる。

また當時刊行された諸々の文典の批評を試み、中根氏の著日本文典辨誤を始め、物集氏の初學日本文典辨誤、里見氏の雅俗文法辨誤、黒川眞頼氏の詞の葉辨誤、權田氏の詞の經緯辨誤等の書も祖上に上せられた。そのさわやかな講演よりは聴者を酔はしめたといふ。

生川正香
地方にあつて幕末から語學書を出し明治の御代に存へてゐた一人に生川正香がある。氏は文久元年春、

言葉の二道
ぬるつるの辨

明と稱した時代に歌集類言輞のひゞき八十九卷七十七冊を撰んだ。歌語の用言を知る爲に五十音順に歌を集めたもので、その師足代弘訓の歌集類語及び春庭の詞八衢に倣つて、歌を集め、出所や作家をも併記してある。また元治元年に言葉の二道ぬるつるの辨三卷を著し、明治十六年には佐行四段と佐行下二段の活用を實證的に示す爲に活語二葉草四卷を著した。その啓蒙的な少年教授國語のさとし・皇國語學自在・百人一首文法などをも作つた。また田中・中根二氏の文典の批評をも書いた。

權田直助

堀秀成と同じく富樫の説を繼承した相模の權田直助は平田門で、官海に躓いて後、阿夫里神社の祠官となり、側ら語學を研究して家塾名越舎にてその徒を導き、幾多の著述を遺した。

詞の經緯圖
及び詞の眞
澄鏡

明治七年詞の經緯圖及び詞の眞澄鏡の折圖二摺とこの兩圖の解とを出し、後訂正を加へて三たび版を改めた。先づ體・用・辭の三分法を襲ひ、用言を作用言・形狀言に分ち、ら行四段一格と久志幾活とを形狀言に入れた。その名稱分類は普通に行はれ易きものを採つた。

形狀言八衢

玉緒・八衢及び通路の頭註を作り、獨修用の語學自在二卷を作り、形狀言八衢三卷（或は二卷）を著した。

形狀言は春庭の詞八衢に説いて尙十分でないので、東條義門も夙く山口栞に考説するところがあり、黒澤翁滿はこれを三行活・二行活・一行活の三つに分け、物集高世は單辭・複辭の二つに分け、その變化を「さ」「く」「し」「き」「げ」の五つとし、これにそれぞれ特別の名辭を附し、富樫廣蔭は久活・計久活の二種とし、鈴木重胤は久活・志久活・計久活の三種を立て、梅園春男は形狀言五種活用を唱へる等一致するところが無かつた。

形狀言五種活用

志々幾活を認めぬ

直助は富士谷氏の如く、良行四段一活と久志幾活の二つを包含せしめ、久志幾活は世の學者はこれと志久・志々幾活とを立てゝゐるのは誤であつて、志々幾活は志幾活に攝すべく、從來語根の一部を活用に見做したのが誤謬であると斷じてゐる。要するに富士谷氏及び富樫氏の説を併せて是正した觀がある。

また文章法に關しては、句を作り章を成す法格を知らしめる爲に、國文學柱二卷（明治二十年刊）を著して文體を論じ、章句の構造に關しては、起し結ぶ格以下三格を説き、綾語といふ綱を設けてその中に對語・疊語・重語・枕詞・序詞を分ち、對語を細分して段落法を説いてゐる。

國文學柱

橋守部が文政二年に著した文章撰格に實句・異類・光彩・數量・方邊・枝葉・疊句・聯疊・變疊・對句・隔句・隔對・招應・喚響・首尾・章段の十六格を設けたとは内容は異つてゐるが、文章の技巧表現

に着目した點は相通ふものがある。

而して氏の言語文章に對する觀點は我等と異り、言語は神の創めたものとし、隨つて文法は上古に折つて自然の格を探究すべきものと考へ、範を古典に求め、天曆以降には下らなかつた。

國文句讀考
また文は斷續を明かにしないと明晰を缺くとなし、國文句讀考を著して古人の施した跡を調査し、自説を述べてこの方面にも一つの基礎を置かうとした。更に漢文訓讀の跡を尋ねて漢文和讀例を著し、益軒の點例や太宰春臺の和讀要領を引いて國語法に適合するやうに讀むことを説いてゐる。舊派の語學者にして斯界に遺した業績は少くない。

落合直澄
富樫廣蔭並びに御巫清直の教を受けた落合直澄は明治の初宣敎權少博士に任ぜられ、出雲大社少宮司大教正となつた人、神典に關する著がある。語格大成圖及び同附録を作る。明治の中期に方り皇典講究所講演に載せた語學上の論説には有益な論考がある。その語學系統の一論文の如き記紀撰定より明治に至る間の語學を四期に分ち、代表的作者やその著作を擧げた。四期とは

第一期 紀記撰定の時より延喜天曆朝あたりまで

第二期 それより元祿の頃まで

第三期 元祿よりこのかた慶應まで

第四期 明治時代

洋風を嫌つた日本文典

語學者の三派

であつてよく大勢を捉へてゐる。語學の分派に關して三派あるといひ、その一は言語を古より使用した例證を舉げ、之に加ふるに通略・延約等を以て之を解釋し、假名遣に至るまで訂正を加へた派で、契沖・眞淵・宣長等がこれに屬し、第二は語格といつて古より使用する例を以て考證とし、活語・體言の連續より係結に至るまでその言語の規則を主張する派で、有賀長伯・富士谷成章・本居春庭等がこれに屬するとし、第三は五十音に備はりたる微妙なる理を説明し、一音毎の形狀より言語の本義を解釋する派で、鈴木胤や井面守訓や、橘守部や富樫廣蔭がこれに屬するとしてゐる。

言語の成立

言語の成立に關しては一つは擬聲語説を認め、鴉・雁・鷄・千鳥・鶯・杜鵑・雀・雉・鴨・鳩などの聲をうつした古今の文獻を引證とし、次には感觸より發した聲の語となるもので、これには驚愕・苦痛より發するもの、嗟嘆より起るもの、應答によるもの、招呼に屬するもの、歡笑に發するもの、泣哭に出づるものに分け、これらはア・イ・ウ・エ・オを基とし、ハ・ヤ・ワ三行に轉するが普通で、五十音圖は悉曇か韻鏡かによると云つて決定してない。

日本古代文字考

日本古代文字考は平田篤胤の神字日文傳を基礎として南部の首曆や芝浦漁人の文字や、所々より發掘した金石・器物等の文字を検討し、これが存在説を裏付けしようとしたもので、神代文字の傳來の諸説に關しては田中賴庸の神字考に據り神代文字の字源・字母・字子を明かにしようとして企て、これを卜兆字と象形字との二類十二種とし、ムサシ文字・種子字・守恒字・阿比留字・惟足文字・伊豫文字・筑紫字

・齋部字・夷奴字・豐國字・歌繪を説き、尙諺文・沖繩字・龜書にも觸れて、沈文燐の日本神字考やチンバレンの我が古代文字考の説を一蹴してゐる。神代文字の資料は集大成された觀がある。その他雜誌「國光」に載せた文字論もある。

三 「かなのくわい」と羅馬字會

國字改良の聲は維新の前後より叫ばれ議せられた。明治十五年七月吉原重俊・高崎正風・西徳次郎等十七氏によつて「かなのとも」といふ會が組織され、翌年五月より機關雜誌「かなのみちびき」といふ雜誌が發行された。この頃普通教育關係者の組織してゐた「いろは會」があり、慶應義塾關係者の團體である「いろはぶん會」があつた。この三つの會は「いろは會」の肥田濱五郎氏の斡旋で合同し、そのうちを雪月花の三部とし、「つきのぶ」は舊假名の友の同人で、歴史的假名遣を奉じ、「ゆきのぶ」は舊いろはの同人で、發音的假名遣を主とし、「はなのぶ」は中立で、合同しながらも各部の主張を曲げなかつた。

いろはぶん會
つき・ゆき・
はなの三部

かなのまな
び

「かなのく
わい」の研
究事項

そのうち有栖川宮威仁親王殿下を會長に推戴して機關誌「かなのまなび」を發行し、假名の普及運動に邁進した。やがて全國に三十有餘の支部が設置されて、すべての會員は一萬人に上り、「だいいちかながくかう」の開校を見るに至つた。これに對し漢學者や羅馬字會より非難攻撃が加へられ、會員の一人大槻文彦氏が「かなのくわい」が研究した重要な事項は

一、假名の字體の整理

一、平假名と片假名との優劣

一、假名の活字の改良

一、かなづかひの改良

一、詞の分ち書き、文章の符號の改良

一、假名文の縦書き・横書きの可否

一、假名文に於ける言語の選擇

かなのしん
ぶん

かなのくわ
い大戦争
ニホンブン
テンオホム
ネ

ローマ字會
矢田部良吉

外山正一

等であつた。「かなのまなび」は後「かなのしるべ」となり、それが「かなのしんぶん」となり、「かなのざつし」となり、「かなのてかどみ」と變つて、明治二十四年まで続いた。雑誌の外大槻文彦の「かなのくわい大戦争」「てがみのかきかた」、近藤眞琴の「ことばのその」、平井正俊の「ニホンブンテンオホムネ」の如き單行本も發行された。大槻氏、後藤牧太・杉浦重剛氏の如きも一時は假名文で互ひに贈答したものである。

國字改良を目的とする團體には別にローマ字會がある。その魁をなしたのは矢田部良吉博士である。

氏は明治十五年五月に「羅馬字ヲ以テ日本語ヲ綴ルノ説」を東洋學藝雜誌に發表し、後羅馬字早學びを著した。また外山正一博士は「かなのくわい」の有力な會員であつて、明治十七年七月東洋學藝雜誌上に

「かなのくわい」と羅馬字會

日本語の書き方

田中館氏の羅馬字新誌

日本語ローマ字

ヘボン式

末松謙澄の
日本文章論
新論

羅馬字會設立の必要を主唱した。かくて同年十二月同志七十名が集つて羅馬字會の發會式が行はれ、翌春會則など定められ、一時會員は六七千人の多きに上り、我が同胞の外チェンバレンやテヒョーの如き外國人も加はつた。同年四月羅馬字にて「日本語の書き方」といふ一書が編纂され、機關雜誌 *Ronmajiri* が明治十八年六月より發行され、「わんぱく物語」の如きローマ字綴の單行書も出版されるに至つた。この機關誌は大凡八ケ年も續いた。この他田中館博士らの音圖劃一主義で綴つた羅馬字新誌も發行された。羅馬字會では明治十八年に至り「羅馬字にて日本語の書き方」即ち羅馬字會式を定め、その要項十九箇條を制した。田中館氏はこの制定に反對し、別に羅馬字意見を發表して五十音圖によることを主張した。田丸卓郎博士はそれを「日本語ローマ字」の名を附した。これに對しローマ字會式をヘボン式と呼ぶやうになつた。蓋しヘボン氏は和英語林集成の著者で、羅馬字會がその綴方を定めるに方り氏の説を聞きて參考としたからである。この二派は後對立することになつた。「かなのくわい」と羅馬字會とはその主張は互ひに異なるのであるが、學習に困難な漢字を廢するといふ點は共に等しいので、互ひに提携したものである。末松謙澄の如きは日本文章論を著して假名の用ふべきことを説き、矢野文雄の如きは漢字制限論を唱へてその著日本文體新論の中に三千字制限論を主張した。

四 言文一致の氣運

漢字廢止を論じ國字の改良を唱へる人々の間から言文一致の説が主張される氣運になつた。矢田部良吉氏のローマ字國字論の中には東京の語を標準とすべきことをいひ、三宅米吉氏は言一致の標準を立てる爲には方言研究の必要を説き、神田孝平氏も西村茂樹氏の文章改良論に對して言文一致論を唱へ、物

方言取調仲間

集高見氏は明治十九年に言文一致といふ一冊子を出版した。斯くの如く國學者・洋學者の言説に對し、漢學者の大家川田剛・西村茂樹・井上圓了諸氏の反對があつた。山田美妙の夏木立や長谷川二葉亭の浮雲の如き立派な口語體の文學が發表され、三宅米吉氏等は方言取調仲間を組織され、明治二十二年の頃には言文一致の鬪將として山田美妙は漢學者の兒島獻吉郎氏と屢々わたり合つたもので、その論文は當時の「文」といふ誌上に載つてゐる。

五 辭書の編纂

新撰字書

辭書編纂の企は夙く明治維新の直後にはじまつた。時の文部卿大木喬任は明治五年に田中義廉・大槻修二・久保吉人・小澤圭次郎をして新撰字書を編輯させた。これは漢字省減の目的から起つたのであるが、政府は更に國家事業として國語の語彙を作らうとし、文部の編輯權助木村正辭以下横山由清・岡本保孝・小中村清矩・柳原芳野・黒川眞頼・間宮永好・埴忠寶八人に命じてそれに從事させた。あの部及びその附録語彙別記並びに語彙活語指掌を上木され、その後衣の部まで前後合せて十三冊出版した。で、その事業は中止された。この二冊の附録は後中等學校の文典教科書として使用された。

語彙及び同別記

近藤眞琴

ことばのそ

また攻玉舎を起して海軍將校の教育に努めた近藤眞琴は「かなのくわい」會員としても活動してゐたが、古代より平家物語時代までの語を集めて「ことばのそ」といふ辭書六卷を作り、明治十八年出版した。この字書は通編全く平假名ばかりで、漢字を用ゐなかつた。さうしてその首卷は一部の文典であり、その名稱の如きもすべて雅びな語を用ゐて、漢字音に呼ぶことを避けた。それは西周の日本語典の型に似てゐる。

大槻文彦

大槻文彦氏は明治八年文部省より國語辭書編纂の命を受けてそれにいそむこと十餘年、明治十九年

言海

千二百版

山田美妙の
日本大辭書
字書にアクセ
ントを附
した

物集高見の
日本大辭林
ことばの泉

十月に初編を成し、十九年三月再訂を終へたが、これも政府は出版せず、原稿並びに活字を下附されたので、明治二十四年に至つて刊行した。これが氏の言海である。語數四萬、中に和語二一八七七語、漢語一三五四六、蘭語八七、英語七三を收め、語彙も豊富で語釋も本源的のものから轉用的のものに及びし、その排列體裁、辭書としての體及び要件を具備してゐるので、廣く世に用ゐられ、版また版を重ねること千二百版に上つた程で、江戸時代に於ける和訓栞よりも數等優れてゐる。但し引例に出典を省かれたのは遺憾である。その首に載せてある語法指南は後の廣文典の基礎をなしてゐる。

これに次ぎて山田美妙は口語をもとり入れて新しい字書を撰んだ。これが日本大辭書で言海の如く廣く用ゐられなかつたが、この書には從來の辭書に全く缺いてゐる「アクセント」を加へてある。アクセント問題につき大槻・山田兩氏の論争があつた。言文一致の首唱者美妙齋が如上の如き字書を作制したのは故あることである。

その翌々年に物集高見の日本大辭林は版になつた。續いて落合直文のことばの泉は明治三十一年から二年にかけて出た。語釋は言海には及ばないが、固有名詞を加へ、挿繪を添へて一般讀書界によつて便利であるので、忽ち十三版を重ねたといはる。

六 チェンバレンの出るまで

外國人で日本文典を夙く出したのは葡人ロドリゲスである。その第一卷は慶長九年、第三卷は同十三年に完成し、第一卷は長崎で出版された。その引例には當時の連歌の句をも取り、當時の方言をも引いてある。土井忠生氏はこれが翻譯を企てゝゐられる。

爾後西班牙人コリヤードの日本文典は寛永九年ローマで出版、オヤングレーンの日本文典は元文三年メキシコで出版、その後もいろいろと出たことは、拙著日本文法史の外國人の日本語研究年表に譲つてこゝには詳説しない。

中にも獨逸人ホフマンの日本文典は行古音考を始め、動詞の語根を*ei*二種に分けること、未來のむに對する考察、動詞の受動形と能動形の關係に就き示唆に富むものがあり、數度版を重ねた。

アストンの
日本文語文
典

明治四年出版のアストンの日本小語典及び翌年出した日本文語文典は好著と謂はれ、後書の序論には日本語の特質形態を論じてチュラニアン語族の特徴を有するものといひ、歐洲語と日本語の構成及び成分の排列を説き、琉球語と朝鮮國との相關を述べて、口語は文章語と異り、附着語から屈折語に移つて

ゆく動向をもつてゐると斷じ、その他詞の分類に關しても示唆に富んだ説があり、我が新進の學徒に影響を與へたものが少くない。

これに亞いで出たのがチェンバレンで、氏は明治六年來朝、始め兵學校教官に、後には帝大の名譽教授になつた。明治十年以降次のやうな有益な研究發表をしてゐる。

- (1) On the use of pillow-words and plays upon words in Japanese poetry. 明治十年
- (2) On the mediæval colloquial dialect of the comedies. 同 十一年
- (3) Notes on the dialect spoken in Akiu. 同 十四年
- (4) Notes on Japanese philology. 同 十六年
- (5) On the various styles used in Japanese literature. 同 十八年
- (6) The so-called root in Japanese verbs. 同
- (7) Past participle or gerund. 同
- (8) Simplified grammar of the Japanese language 同 十九年
- (9) Language, mythology, and geographical nomenclature of Japan viewed in the light of Aino studies. 同
- (10) Handbook of colloquial Japanese. 同 二十一年

(11) A vocabulary of the most ancient words of the Japanese language.

上田博士と共著 同

(12) Essay in aid of a grammar and dictionary of the Tsuchuan language. 同 二十八年

博言學科
チエンペレ
ンの日本文
典
動詞の前變
格・末變格

谷千生
章魚式

帝國大學にて氏は博言學科を擔當した。文部當局は氏に囑して日本文典を撰ましめて明治二十年に之を發行せしめた。品詞篇の中、てには關係詞と命じ、働く詞を名詞と連結する位置により前變格・末變格とに分ち、末變格の中、強力關係詞を加へる場合と中止法とにより普通變格と「こそ」變格とに分け、また動詞・形容詞も法・時化・諸然・拒否をあらはすもので、法の中に直說法・曲說法・關係法・實許可法・推量法・推量許可法を立てた。國粹を重んずる學徒は、この企に憤慨したものも少くなかつた。詞の組立の著者谷千生の如きはこれが批評一卷を書いた。中に氏の文典を章魚式と名づけたものもある。名稱や分類に首肯の出来ないものは當時の人々にも多かつたのは當然である。

七 言語取調所の設立

言語取調所

その調査事項

國語國文に關し研究すべき問題は少くない。國字改良・普通文體の確立・假名遣・方言取締・標準語の決定・適正な文法等數へ來れば、十指を屈めても尙餘りがある。然も政府は内治外交に逐はれ、これらに關し何等企畫するに至らなかつた。民間に識者はあつても個々の力では世を動かすに足りない。これに黒田太久馬等の人々が發起して明治二十一年に言語取調所を設け、同十二月發會式を舉げ、佐々木高行・佐野常民等の顯官を評議員に推し、高崎五六を副會長として種々の調査事項を定め、その部員を決定した。當時設立趣意書は雜誌「言語」に載せてある。その調査事項は

普通文體 普通辭書 博言學 アストン日本文典翻譯 日本文學史 國文教科書 活語取調書
歌謠沿革史 言語矯弊 語格全圖 語學書目錄 語學辭彙 語學史

であつて、十五名の人がそれ／＼割宛てられてある。中に博言學に上田萬年、アストン文典翻譯に岡倉由三郎、國文教科書に落合直文等の名が見えてゐるが、一體に新智識の人は少く、且經費が乏しくして格別な業績を擧げるに至らなかつた。併し蒐集された文典・辭書の類は相當の數に上つたもので、これ

言語取調所の設立

らの書籍は明治二十三年十月に至り帝國大學に寄贈された。

赤堀又次郎

國語學書目
解題

この言語取調所に關係してゐた一人赤堀又次郎氏は當時語學書目錄の編纂に關係してゐたが、その後帝國語研究室に職を奉じて上田博士の下にありて國語學に關する書史的の研究にいそしみ、明治三十三年に至りその業を了へ、同三十六年帝大の藏版として國語學書目解題が出版された。この書に收めたものは

音韻五十韻に關するもの 四十一種

文字及び伊呂波に關するもの 三十五種

活用に關するもの 四十種

てにをはに關するもの 七十三種

文典に關するもの 四十七種

文典に關する圖表 三十二種

の多きに上つてゐる。明治以降のものは載せてないものが多く、その以前のものにありても内容の紹介も十分でないが、六百數十部に五り作者・校訂者・起稿・出版年月・序跋・目錄等を擧げてあつて、當時斯界における唯一の國語學書史として貴重されたものである。後氏は語學叢書の出版を企てたが、古き假名遣の部一卷だけに止まつたのは惜しいことであつた。

語學叢書

八 關根正直の語法私見とその反響を見るまで

古典講習科

井上 毅

落合・小中村の
日本文
典

大學總理加藤弘之が夙く提唱してゐた大學の古典講習科が設置されるに至つたのは明治十五年のこと
で、その出身者萩野由之・小中村義象・落合直文等の人々が歴史・法制・國文の學界に活躍したのは、
井上毅が文相となり、大いに國文教育を奨励した時代であつた。前記三氏の出版した日本文學全書は今
日より見れば、底本も宜しくないし、校訂は杜撰の譏を免れないが、當時は廣く繙讀され、博文館はそ
の發行により大をなした程であつて、落合・小中村兩氏の^{中等}日本文典は一時教科用として大いに世に
もてはやされた。堀秀成や富樫廣蔭の説に基き、更に力を文章篇に用ゐてこれを組織法と解剖法とに分
ち、前者を係結・跨續・反轉・省略・對語・疊語・重語・添詞・懸詞の九つに分ち、添詞を更に枕詞・
序詞・發語・助詞の四つに分けて詳説し、假名遣・句讀法を説き、附録には落合直澄・堀秀成の説に基
いて語學系統説や語格問答を掲げて重寶であるところ、その師の物集高見の初等日本文典や、大和田建
樹の和文典よりも廣く行はれた。

關根正直の
語法私見

關根正直の語法私見とその反響を見るまで

古典科出身の關根正直は中古文に存する語格中、時代を下るに従つて漸く頽れて來た語法を公認する

ことを希望し、明治二十八年四月早稻田文學誌上に語法私見と題する一論文を載せた。その條項は

(一) 活語の制限を弛ぶべきこと、

(二) 志久活の類の終止言を「惡し」」「嬉し」」といふも差支へなきこと、

(三) 連體言を終止言にも代用すること、

(四) 終止言は未來の詞ともなるべきこと、

(五) 「と」といふ助詞の連續法を弛ぶべきこと、

(六) 「の」といふ助詞の連續法を弛ぶべきこと、

(七) 「や」「か」といふ助詞の連續法を弛ぶべきこと、

(八) 「受けり」「見えり」の類を誤りとすべからざること、

の八項で、つまり鎌倉以降次第にくづれ來て汎く用ゐられてゐるものを許容しようと唱へたのである。

氏はこれに續いて係結に關しても同様の意見を追加した。これに對し賛否の論が囂々として起つた。上田萬年・阪正臣兩氏の如きはこれを支持し、十時彌・寺町愛山・岸上質軒等はこれに反對し、佐藤要吉・高津鋏三郎等はその一部に反對した。これが後文部省の文法許容案の基礎をなしたものである。

その賛否の
人々

九 大槻文彦の廣日本文典の出るまで

文 法 會
語 法 指 南

仙臺藩の蘭學者の家に生れ、夙く明治七年官立宮城師範學校長となり、文部省に出仕して辭書の編纂に従事した大槻文彦は明治時代の文法家として知られてゐる。氏は明治十一年の頃同志と共に文法會を起し、「かなのくわい」の爲に盡瘁したことは前に觸れて置いた。言海の初に載せた語法指南は一部の文典として特色のあるもので、代名詞に自稱・對稱・他稱・不定稱の目を立てたり、近稱・中稱・遠稱・不定稱の區別をしたり、動詞も八衢以來の何段活用の名で通つて來てゐたのを第一類・第二類といふ風に分けたり、活用の排列の順序を改め、直說法・分詞法・已然接續法・將然接續法・折說熟語名詞法・命令法となし、能相・所相の別を立て、助動詞を使役・受身・能力・指定・打消・過去・未來・推量・詠嘆・希望・比況の十一種に分ち、天爾哀波は接續の狀によりて三種に分類して接頭接尾辭を説くなど洋文典を折衷したものである。その中助辭の説明などには委曲を悉してある。

それから廣日本文典の出るまでに多くの人々の文典が出た。東京高等師範學校教授大和田建樹の和文典、女子高等師範の關根正直の國語學、夙くより通信教授で名を得てゐた林麴臣の開發新式日本文典、

大和田建樹
の和文典

大槻文彦の廣日本文典の出るまで

形容詞を職能によつて分つて後詞の新い見方係結の新い見方

林 麿臣
開發新式日本文典

存在動詞を立つ

動詞の性格
靈 辭

岡倉由三郎の日本語學一班及び日本新文典が明治二十三四年に、後れて二十六年に第一高等學校教授の高津鯨三郎の中文典、音韻假名遣に關しては札幌農學校出身で後音韻學者となつた大島正健の字音假名遣新法が明治二十五年に、國語假名遣新法が二十七年に出た。中に和文典は篇を字格・語格・章格・歌格の四つに分ち、や行わ行音を複母韻と名づけ、形容詞を前形容詞・後形容詞・從形容詞・體形容詞など職能からその變化に名を附けてあり、てには後詞と呼び、名詞と名詞との關係を示すもの、名詞と動詞との關係を示すもの、外に力後詞(ぞ・なん)及び疑問後詞を分ち、係結を二段とし、「はも」の係を廢し、句を正倒挾轉略の五つに分つて當時大分新しいところを見せてある。氏は唱歌の作詞家で、その「汽笛一聲」で始まる鐵道唱歌は三百萬部を出したといひ、後には文典唱歌まで作るに至つた。

林麿臣は明治二十年頃より通信教授をなし、開發新式日本文典といふ機關誌を刊行し、その文則批難には他の文典を批難したもので、氏の分類は極めて煩瑣で、一語一辭にも一名辭を附し、名詞を四十七品に分け、動詞といふ中に作用・存在・形狀の三つを含むとし、作用動詞だけを本作・特作・寫作・化作・變作・物作・代作の七つに分つといふのでその一端が知られる。使役受身の如き助動詞を動詞に攝し、自他も命令も一つに合せ、動詞の性格を自性格(甲)・令性格(乙)・被性格(丙)の三つとし、甲乙を天然・自爲・支配・供給の四つに、被令(丙)は受壓・能爲に分け、てには國語の精髓と見做して靈辭と呼び、これを起首・結尾・關係・接續の四大別とし、それを更に細かく分けてある。氏は體系を立て

岡倉由三郎
日本語學一斑

新文典

日本文典大綱
音韻門に新考が多い

詞章八則

ることを八釜しく述べ、連語の法には句を構へ、篇を結ぶ章段結構の規定を述べ、文體結構法には文章全體の結構に關し、綱領・收結・節段・意匠・回顧の五類に分ち、綱領を提綱・複綱・逆綱・無綱・提句・根因の六種に、收束を單收・複收・概收・詠收・證收・逆收・總收の七種に、意匠を正筆・交筆・反形・伏筆・抑揚・頓挫・起伏・餘波・波瀾の九種に、回顧を照應・反應に分け、細をきはめ、微を盡してある。漢文に於ける章法修辭を文典中に包容せしめたところ他の文法家に比し特色をもつてゐる。

岡倉氏は言語學を修めた人、その日本語學一斑は思想交換の方法より筆を起し、言語及び文の成分、言語の起原・變遷、發音機の構造、人種と言語との關係、言語の分類等十九ヶ條に互つてゐて、發音學・言語學に關する最初のものといふべく、その新文典は京城の日本語學校長在任の頃の作で、動詞の語尾を説くに羅馬字を使用し、語尾變化に從來言とか段とか云つて來たのは終止形などに於ける如く形の字を用ゐ、主格を示す後置詞の「が」は領格を示すものから來たといひ、明治三十年高等師範學校教授に任ぜられた頃日本文典大綱を出し、音韻門に創説が多い。父音十八を清擦・濁擦・清破・濁破・鼻の五種に分ち、撥音にヨの音を加へ、促音にはツの外と、もの三音あることをいひ、音韻變轉の跡を尋ねて、父韻に略・延・約・添・旋・化の六つより、子韻の上には同化・省略・旋化・合化の四つを生じたと説いてあり、文を叙述の上より平叙・想察・斷定・願望・思惟の法があるとし、詞章の排列に關し八則を立てるなど新しい試みがある。

那珂通世

普通國語學

幫助言の新
しい分類

高津敏三郎
の中文典

大槻氏の廣
日本文典

同別記

中古文典の
意義範疇

五つの呼應

那珂通世は千葉師範學校長時代に假名遣は發音的によつた程の進歩的な仕方を取つた人で、その普通國語學には音韻に關することも委しく、母韻の中あ・い・うは原始のもの、え・おはその後に發生したものとといひ、波行音は古くは^ハ音であつたと述べて、てにはを幫助言と名づけ、これを重言格(連)につくもの、思料格につくもの、終止格につくものなど新しい分類などがある。

高津氏の中文典には同時・同相を時刻法・自他法など名づけた説き方は新味を帯びてゐる。

大槻氏の廣日本文典は三十一年一月に出版された。從來出た中古文典としては最も優れたものと謂はれ、特にその別記は廣文典の注釋・敷衍・參考・考證・辨解・持論・駁論等を記したもので、氏の文法に對する方針・考察等の意見が見られ、これによりて廣文典の値を高からしめたもので、氏の中古時代といふは桓武天皇より院政の始まるまでを指し、從來例を多く歌にとつたのを散文を主とすべきことを主張してある。語法指南の新しき企を世上一般と同じやうに復舊した所にも却つて世の讀者を増したのであらう。動詞の自他を分けて有對自動・無對自動・單對他動・複對他動などと新しい名目を立てた。

また語法指南になかつた文章篇には主語・説明語・客語・修飾語の成分を説き、複雑な文を聯構文と名づけ、上下の呼應を詳かにしてこれを自他・能所・時・反語・特別副詞の五つに分けてある。今日より云へば格別新しいものも少いが、當時に於いては群をぬいたものであつて、明治時代の文典はこれに統一された觀があつた。

十 口語法の研究

佐藤誠實の
語學指南

維新後同胞の中、我が口語文法を始めて書いたのは馬場辰猪であることは既に述べた。國學者にてはその後佐藤誠實博士が明治十三年に著された語學指南の中に八衢に倣ひ俗語活用圖を掲げ、七種の活用を擧げ、その變化を五階に分けてあることなどがまづ表章されねばならぬ。

落合直澄

普通語格圖

落合直澄も同二十二年四月皇典講究所講演に「普通語に付て」の一論文を發表し、上代の言語を高尙語といひ、現代語を普通語と呼び、相互の關係を説いて普通語格圖を作成した。口語は品格の低いものとしながら、漸くその力と法規あることを認めるやうになつた。

尾崎紅葉

小説家尾崎紅葉は從來嫌な物の一つとしてゐた言文一致の文體を以て小説を書始め、明治二十九年には「多恨多恨」の如き玉成した口語體の小説を出した。

大槻文彦は廣日本文典別記に今よりは口語法制定の業を起すと誌してゐる。文法學者が口語法研究に指を染めるに至るも自然の勢である。

三矢重松
松下大三郎

三矢重松は明治三十三年の國學院雜誌に五號に互りて口語法の研究を發表し、松下大三郎は國文學界

前波仲尾

誌上に口語の研究を出した。前波仲尾は神戸師範學校にありて言文一致を獎勵し、明治三十四年三月日本語典を公にした。氏は動詞にも形容詞にも全く活用がなく、口語を組立てる要素は語根とくつとてにはの三つから成ると主張した。文は何が何を何でゝあらはされると強張されるので、土地の人はこれだけでが文典と呼んでゐた。

日本俗語文典

同年松下大三郎も金井保三もまとまつた日本俗語文典を出した。二氏共に支那留學生教授に當つてゐた人、その體驗もあつたことと思ふ。

石川倉次
はなしことばきそく

また盲啞教育に従事してゐた石川倉次は同年「はなしことばきそく」及び同附録二卷を著した。

三矢氏は口語が標準語に適するかどうかといふ問題を胸中に懷き、地方々言にも意を注いでゐたので、その所説の見るべきものが少くない。松下氏は體詞にも語尾變化があるとする説で、名詞に附加する辭もその活用と見做すので、前波氏の簡單化とは逆にむづかしく説く傾がある。石川氏は伊澤修二・土田萬年・那珂通世等の先輩の批評を乞ひ、穩健を主とした。術語は漢語によらず、假名の會で行つたやうに倭詞にかへ、全部平假名で綴つてある。三十五年發布の國語調査會の公示にも文章は言文一致體を採用してこれに關する調査を進めてゐるので、口語法研究者も續々と出づるに至つた。

同じく口語法を説くにもその目的によつて編述の法に自ら相違があるべきである。仙臺の東北學院にあつた入江祝衛の日本俗語文法論の如きは、西洋人に國語を授ける爲に執筆したものである關係上、歐

米の語に對し國語の性質に觸れようとしたところがある。先に舉げた金井保三等の日本俗語文典が支那人に國語を授ける爲に著作した關係上日支國語の對照に重きを置くのと自ら差異があるべきである。日露戰役後支那の留學生が多く來朝した頃にはそれらの教科書として松本龜次郎の^{對照}漢譯日本文典、木之崎吉辰の^新日本文法教科書、佐村八郎の漢譯日本文典の類が多く出たが、これらにつきては特に云ふべきものはない。

十一 方言の研究

維新以後我が方言に關する研究を夙く發表したのは外人で、米澤興讓館の英語教師 Dallas は明治の早い時代に米澤方言の研究を出し、チェンバレンも明治十四年に日本亞細亞協會雜誌に會津方言に關する小研究を發表し、我が同胞の中にも、方言辭書を作ることゝ明治十一年の藝術叢誌に提議したものもある。東京高等師範の三宅采吉等は明治十八年四月同志と共に方言取調仲間を語らひ合つた。森田節は明治二十一年に方言改良論を發表した。

舊幕時代には幾多の方言に分れゐたものが、新時代になりてその地方々々の方言を卑しみ、これが矯正を企てむとするものが各地に起つて來た。まづ多屋梅園が田邊方言を出版したのは明治二十一年のこととて、品詞の方言より始め、女詞や小兒詞を別に擧げ、語尾の方言・まつてんす語・でんす詞・ごやんす語・なんせ語等を擧げてある。二十二年には鹿兒島ことば、二十四年には莊内方言考、二十五年には越佐方言集などが出た。言語取調所が出來た時、上田博士と共に仙臺地方へ方言採集旅行を企てた岡倉山三郎は、明治二十六年の人類學雜誌に「方言の性質及調査方」といふ論文を載せ、大島正健は二十八

年の國民の友に「地方發音の變化及其配布」といふ論文を載せた。これは後に音韻漫録に編入してある。上田博士が國語學を開拓されて以後はその門下並びに一般にも方言の研究に指を染めるものが多くなつた。中にも保科孝一は明治三十一年の帝國文學に方言に就いて一般的にその發生の原因・研究の方法・統一の趨勢・研究の目的の五章に分けて論じ、また八丈島に渡りて彼の地の方言を調査し、これを三十三年の言語學雜誌に五回に亘りて説き、松下大三郎は新國學に遠江文典を、大山宏は方言取調法一斑を、松平圓次郎は帝國文學七卷に津輕方言考を、新村出氏は言語學雜誌三卷に方言の調べ方に關する注意を載せて、斯界に遊ぶ徒を啓蒙するところがあつた。

十二 上田萬年と國語界

博言學科の
設立

新時勢の指
導者

國語のため

國語と國家
との關係

我が國語學は明治三十年の頃を以て第三期を分つべきである。帝國大學文科大學に博言學科を置かれた明治十九年九月を以て分界となすといふ前輩の説もあるが、國語調査會の設立を絶叫され、總て建議案が帝國議會を通過したその氣勢を醸した頃に境界を立てるのが自分は穩當であらうと信ずる。而してそこに至るのは時世が然らしめたには相違ないが、それを指導した第一人者は上田萬年博士を推すべきである。博士は我が國語文法を整理すべく撰まれて獨逸に留學し、明治二十七年歸朝されるや各方面に働きかけられた。二十八年にまとめられた第一の論文集「國語のため」の卷頭には

國語は國家の藩屏なり

國語は國民の慈母なり

の金言を録して力強くまづ讀者に呼びかけた。その最初に收めてある「國語と國家と」には我が國語は日本人の精神的血液であるといふべく、我が國體はこの精神的血液で維持せられると共に、一種の教育者所謂慈母として國民的思考と國民的感動力とを教へるものであるから、我等は自國語を愛護せむばな

らぬことを強調した。

國語研究 二十七年十一月國語研究會に於ける講演「國語研究」にも、國語の地位を正にその享有すべき地位まで恢復しようと以下數項に互つて熱烈に國語愛を高唱し、また「國語會議に就きて」の一文も國語調查會の促進を志して述べられたとも見える。「今後の國語學」には科學としての國語學に於て今後開拓せらるべき分野を示してあり、「教育上國語學者の拋棄してゐる一大要點」などにつきても教へられるところがある。「標準語に就きて」には歐洲諸國に行はれてゐる綴字改良の經過を説いて、我が語學界の嚮ふところを知らしめてある。

標準語に就きて

新國字論

上田博士の企圖された事項

二十八年五月の大學通信講談會に於ける新國字論に於ては、國字改良の用意を説き、フォネチックシステムの文字を珍重することを述べてある。音韻學を起すこと、方言を研究すること、その語典を作ること、標準語を定めること、假名遣を改定すること、漢字を制限すること等の意見はその講演の中に用意深く示されてゐる。大學では國語學史や音聲學や博言學や國語學を講じた。

國語研究室

三十年四月には文科大學の内に國語研究室を設け、數多の國語國文に關する圖書を蒐集し、言語取調所にあつた書籍をも納れた。赤堀又次郎編纂の國語學書目解題の完成も博士の本志に由つたものである。

言語學會

三十一年五月にはフローレンツ・小川尙義・藤岡勝治・新村出・八杉貞利・猪狩幸之助らと言語學會を起し、二年の後に言語學雜誌を發刊するに至つた。また斯界に志ある學徒には新たに考究せらるべき

問題を與へ、その向ふべきところを示し、それに力を添へることを吝まれなかつた。

(因にいふ) 明治三十九年に臺灣總督府で刊行した日臺大辭典は小川尚義の編纂に成つたのである。

以上の如き國語問題を絶叫される以外に國語學者としての研究も發表された。「國語のため」(第一)に收めてある十四篇の中には純學術的のものもある。その續編である第二の「國語のため」には明治三十三年以後三年間に發表されたものを主とし、溯りて明治二十三年のものの四篇を附録としてある。

清濁音

言語學者としての新井白石

本居春庭傳

普通人名詞

前篇中の「清濁音」は音韻學上からその區別を明かにし、次に心理的觀點より二つの音の連想的特質十六點を對照してある。(帝文・明治二十八年六・九月號)「言語學者としての新井白石」は東雅の序によりてその言語觀を述べ、その語學上の卓見をたゞへ、語學史上の地位を決定した。(史學雜誌・明治二十八年三・四月號)「本居春庭傳」は傳記及び學說を説く。詞通路に於ける自他を沙門文雄の影響があるといつてある。(帝文・明治二十八年七月號)「普通人名詞に就きて」は人に關する名の種類と構造とを組織的に細かに説いたもの。(明治二十七年七月號)

促音考
P音考
語學創見
形容詞の成立

續編の中の促音考・P音考・假字名稱考・形容詞考は、明治三十年一月の帝文に「語學創見」と題して發表されたもので、かなの語原は梵語のカラナより導かれたとし、促音は獨立の音でなく、母韻の促るものと説き、波行の古音はpなりとの確乎たる説を立て、形容詞の成立は四期に分れ、最初の語根時代、次にキとシとの中間の音を語尾とした時代、その活用語尾がキ・シに分化した時代、活用語尾を失

土井忠生の
評

つた時代と分けて説を立てゝある。その他國民教育と國語教育、國語に就きて日本國民の執るべき大方針、内地雜居後に於ける語學問題、實業と文學、日本言語研究法、言語上の變化を論じて國語教授の事に及ぶ、日本言語研究法、歐米人の日本言語學に對する事跡の一二、本居宣長翁の百年祭に方りて、手爾波研究に於ける富士谷・本居兩家の關係に就きて等の實地問題などにも説及んである。著者は「高處に立脚し、大局に着眼し、國語の新しい研究法と進路とを教へ、國語學界に清新な氣風を興し、新生面を打開する事に力を注いだもので、明治の國語學の嚴父であり、慈母である所の面目は書中到處に觀取せられる」と土井忠生氏が評した言は、吾等の云はんとしたことを悉してある。（「國語と國文學」第十五卷第十號・上田萬年先生講義題「國語と國文學」百七十四號・昭和十三年十月參照）

十三 帝國教育會の國字改良部と言文一致部

國字改良會
帝國教育會
の國字改良
部

國語改良の
請願

文部省國語
調査委員を
任命す

上田萬年博士は明治二十九年十一月國家教育社に於て國語調査會を設置する希望を演説し、翌年教育時論に「國語會議に就きて」と題して國語統一の中樞機關を設くべきことを唱へたことは前に述べたやうである。同七月加藤弘之・井上哲次郎・上田萬年・矢田部良吉・嘉納治五郎等の人は國字改良會を設立した。三十二年十一月帝國教育會内に國字改良部が設けられ、前島密氏を部長に推し、後藤牧太・小西信八・大槻文彦・那珂通世・三宅米吉・岡田正美等を幹事とし、假名字・羅馬字・新字・漢字節減の四部の調査部を置き、委員を定め、別に編纂委員を置いて會長辻新次氏の手より「國字國語國文ノ改良ニ關スル請願書」を内閣及び文部省を始め各省大臣、貴衆兩院議長に提出した。兩院に於て調査會を設けることを可決し、文部省は同年四月國語調査委員七名を囑託とした。

委員長	前島 密	委員	上田 萬年	同	那珂 通世	同	大槻 文彦
委員	三宅雄二郎	同	徳富猪一郎	同	湯本武比古	同	追加 朝比奈知泉

これは豫備の爲の任命である。

言文一致會

帝國教育會では國字改良部と呼應して明治三十三年三月言文一致會が設けられ、翌年二月には言文一致の實行に就いての請願を坪井正五郎外二十七名の名によつて兩院に提出し、採納された。かくて翌年九月には同會は文章取調の爲十三名の委員を任命し、講演會を開いて輿論をつくることにつとめた。さうしてその講演等を集めた言文一致論集が三十五年に出版された。坪井正五郎の開會の趣旨、菊池大麓の「言文一致に就いて」以下十五家の論説がその中に收められてある。

言文一致論集

國字改良部
漢字節減部

假字調査部

新字調査部

國字改良部では各部にて調査部の議決を發表した。漢字節減部では五百字以内を限りとする未定案の外、假名でわかる言葉には漢字を用ゐぬこと以下、略字のあるものはすべて略字を用ゐることまでの五條を定め、假字調査部では、文をば縦行に記すこと、片假名・平假名併用のこと、假名の字形に改革を施さないとか、假名の中お・ゐ・ん・ゑ・ぢづを廢するとか、字音假名遣を廢して發音のまゝとするとか、單語と單語との間をはなす等十九條を定め、新字調査部に於ては十餘種の新字を調査し、小島一鵬の「日本文字ノ資格」十三條の提案に取捨を加へ、新字大體の標準十箇條を定め、速記文字を以てこの標準に該當するものと報告した。

速記術と速
記學校

(因に云ふ)我が邦速記術は田鎖綱紀を元祖とする。米國のアイザック・ピットマンの一八三七年に發明した線狀速記法に基き、明治十五年十月に新たに案出したもので、門人林茂淳・若林珪藏氏らによりて改良せられ、十七年一月「かなのくわい」の總寄合の時、外山博士の「漢字廢すべし」の演説を

速記し、二十三年十二月帝國議會の議事速記録に用ゐられて以來益々世に行はれ、毛利子爵の如きは後自宅に毛利式速記學校を起すやうになつた。

田中秀穂

新字の中には田中秀穂の如きは漢字の扁や冠に片假名を組合せたもので、例へば植物の名は松を杉、

新式
發明
日本字

茶藨を杉とし、動物は一篇の代りにイを用ゐ、熊を倭、蜘蛛を倭とし、植物の局部の名稱はこれを上下に組合すこと、根を奈、葉を芥とするやうに案じた。新式日本字一卷は三十年一月に上刊した。石川

石川倉次の
明盲共通字

倉次は明治三十三年八月の教育公報に明盲共通字を發表した。この文字は佛人 Louis Braille の創し

た訓盲點字に據つて作つた日本訓盲字から思ひ付いたもので、訓盲字は六つの點を基とし、父音と母音とを組合せ、指頭に觸れて察知する表音文字であるが、明盲共通字は訓盲字の點と點とを連ねて線とし、視覺に訴へるシラブルの新字である。

視話文字
自由假名

その他伊澤修二の視話文字、小森徳之の自由假名、増田乙四郎の改良文字、獨逸人オスカル・ゲルス
トベルガーの日本新國字等、新案を試みる人が出た。寶曆中釋文雄の試みた「倭歌は人の心を種とし
て」を「オモハヒノコヲタネトシ」の如く試みた例が思ひ合される。

十四 國語調査會

國語調査會
の設立

同會の調査
方針

明治三十五年桂内閣の下、菊池文相の時、國語調査委員會設置の豫算は帝國議會を通過し、同三月に同委員會官制が發布されて委員長以下十五名の委員が任命された。委員長には加藤弘之博士、主査委員には上田萬年・大槻文彦兩博士が任ぜられ、後芳賀矢一氏もこれに加はつた。別に本會委員・補助委員・臨時委員等を置き、隨時會して調査事項を發表した。同會の調査方針は明治三十五年七月三日の官報に公示された。

第一 文字は音韻文字を採用することとし、假名羅馬字の得失を調査すること。

第二 文章は言文一致體を採用することとし、是に關する調査をなすこと。

第三 國語の音韻組織を調査すること。

第四 方言を調査し、標準語を選定すること。

の四件を主要とし、別に普通教育上目下の急に應じる爲、次の六項を調査することと定められた。即ち次のやうに、

一、漢字節減に就きて

二、現行普通文體の整理に就きて

三、書簡文その他日常慣用する特殊の文體に就きて

四、國語假名遣に就きて

五、字音假名遣に就きて

六、外國語の寫し方に就きて

國語及び字
音假名遣

以上の中、國語及び字音假名遣に關しては、これより先、明治三十三年八月樺山伯が文相であつた時、小學校令施行規則が發布され、假名字體の限定と日用漢字の節減と共に改定され、實行にうつされた。從來區別してゐた假名のうち、國語の方では「い・ゐ」に、「ゐ」に、「え・ゑ」を「え」に、「お・を」を「お」に、「か・く・わ」を「か」に、「が・ぐ・わ」を「か」「が」に、「じ・ぢ」を「じ」に、「ず・づ」を「ず」に改め、字音の方では「あう・あふ・おう・おふ・わう・をう」をすべて「おー」と記すことに定められた。(以下の字音はこれに準ず)これは初等教育に於ては大いに便利を感じてゐたが、中等高等教育との連絡を考へる時はそこに問題が起る。歴史的假名遣を奉ずる人々の反對説や異論が次第に高まり、終に勅令を以て臨時假名遣調査委員會が設けられ、四十年九月小松原文相の時、前の規則を削除され、八ヶ年間も實施されてゐたものが忽ち舊に復された。高等教育への連絡が考へられなかつた點はあるが、教育の簡易化を圖つて既に實行されてゐた

臨時假名遣
調査委員會

漢字節減

ものが、全部改變に遇つたことは遺憾といふべきである。吾人はその朝令幕改と長大息するものである。第一の漢字の節減に就きては尋常小學讀本の漢字總數を一千二百字と定められたが、義務教育の延長等の爲四十三年の改正には更に百六十字を増加した。

漢字要覽

尙、漢字に關しては、中等教育の參考として、明治四十一年五月に漢字要覽が發行された。書中には
(一)漢字の創製及び構造、(二)漢字の變遷及び字體、(三)字音及び字訓、(四)熟字、(五)本邦假借字、
(六)本邦製作字、(七)本邦轉用字の七項に互つて叙説されてある。この執筆者は委員林泰輔であつた。
國字國語の改良に關する論説は慶應二年前島密の建議より明治三十六年十二月に至る間の書籍、新聞及び雜誌に發表されたものを博く搜り普く集め、年月の順序によりその主意を摘記し、明治三十七年四月「國字國語改良論說年表」と題して刊行された。調査會の發表としては最初のものである。これによりて國字國語問題の動きが窺はれる。

國字國語改良論說年表

文法上許容案

第二の現行普通文體の整理に關してはまづ三十八年十二月二日文法上許容すべき事項を定めて文部省より一般に告示された。これは所謂文法上許容案であつて、從來破格又は誤謬と指斥してゐたものゝ中、近古以來慣用の最も廣きものを選び、これを許容し、在來の中古文法と並行せしめることを期した。その條項は活用のことから助動詞との連續、てにはの使用に互る十六項にして、恨の如きを四段活とし、形容詞「嬉し」の終止形と共に「嬉しゝ」の類を許し、助動詞「せさす」を「さす」と用ゐ、「得しむ」を

「得せしむ」、「過しゝ」を「過せし」とつかつても差支へないとし、その他には「のと」や「の」・「や」・「と」などの使用に關するもので近古以來ややく轉じ來つたものを認めようとしたものである。

當時語法の紊亂をますと難するものも相當にあつた。これは龔に述べた關根氏の語法私見の進展とも云へよう。この許容案の理由を體系づけたものは補助委員大矢透の執筆に成つた「現行普通文改定案調査報告之一」であつて、明治三十九年三月に刊行された。蓋し漢文譯讀の影響を受けた普通文と中古文法との間に疏通の道を開き、相扞格することならしめるのを期したのである。

口語體書簡
文に關する
調査報告

第三の書簡文その他日常慣用する特殊の文體につきては漸次口語體を用ゐる方針により、文部省普通學務局長より小學校に於ける口語體書簡文の教授の實況を調査する爲に、各高等師範學校及び各府縣師範學校に諮問し、その報告を國語調査會で整理し、明治四十四年三月口語體書簡文に關する調査報告が刊行された。その執筆者は補助委員保科孝一氏で、全國七十四校の報告をまとめ、口語體書簡文の形式・用語等に關する規定、口語體書簡文の教授に關する意見感想、口語體書簡文に關する標準文から兒童の成績や教案までを擧げて教育の實地化を示してある。

片假名平假
名讀ミ書キ
ノ難易ニ關
スル實驗報
告

文字に關するものゝ中、「片假名平假名讀ミ書キノ難易ニ關スル實驗報告」は心理學の方面の先進元良勇次郎・松本亦太郎兩博士の手になつた一冊が三十七年四月に發表され、假名遣羅馬字優劣に關しては同年十一月謄寫版一枚摺が成つた。片假名が平假名に比し筆寫に速きことも證せられた。

現行普通文
改定案調査
報告之一

音韻調査報告書

音韻組織の調査に關しては委員會に於て二十九ヶ條から成る調査事項を定め、明治三十六年これを各府縣に送り、學校教育會等を通じて調査報告せしめた結果を整理せしめ、榊原叔雄・龜田次郎の作成した音韻調査報告書二冊が明治三十八年三月に刊行された。調査事項の内容は長母音の部としては母音の長音と二重母韻に關するもの九ヶ條、母音及び半母音の部として母音轉換に關するもの二ヶ條、ヤ・ワ兩行拗音に關するもの七ヶ條、ハ行轉呼音に關するもの一ヶ條、子音の部としてカ行・ガ行唇的拗音に關するもの二ヶ條、ジヂ・ズヅの發音に關するもの六ヶ條に分れてゐる。

音韻分布圖

これと同時に上田博士の監督の下に新村出・龜田次郎二氏の擔當した音韻分布圖二十九葉が同時に出版された。この圖は色別にしてあつて、極めて便利なものである。この調査によつて、

- 一、國語に於ても字音に於ても長音は存するが、字音は長音となることが多い。
- 二、字音の二重母韻^oは西南地方に存してゐるが、爾餘の地方では長音に呼ぶこと。
- 一、長音は間々短縮される場合があること。
- 一、動詞の活用する部分は二音または二重音に發音されることが多く、その分布は廣きに互つてゐること。

- 一、イ列音とエ列音、イ列音とウ列音との轉換は東北一帯に行はれてゐること。
- 一、ユ音をイ音に發音することは東北以外には廣く行はれてゐること。

一、ガ行鼻音は兵庫縣・徳島縣以東に廣く行はれ、只新潟縣東南一體から群馬・埼玉・千葉の諸縣を貫く地方に缺けてゐること。

一、カとクワとグワの區別は西南部及び北方沿海の一帯に行はれてゐるが、區別しない地方が廣いと。

一、ジヂ・ズヅの區別は九州及び西國の一部にだけ行はれてゐること。

等の問題はこれによりて明かとなり、後の音韻研究や方言調査の上に大きな示唆を與へた。

音韻調査 方言採集簿

標準語撰定のために全國の方言調査の必要があるので、音韻調査と共に語法に關するもの三十八條を撰み、各府縣に依頼してこれが報告を求めた。方言を學的に集むるにはそれ／＼項目を立てる必要がある。これがために保科孝一氏の手に成つた方言採集簿は明治三十七年十月に刊行された。

東部方言と 西部方言

各地の方言の報告は龜田次郎・榊原叔雄・神田城太郎三氏が作成し、同分布圖は岡田正美・保科孝一・新村出・龜田次郎の四氏が上田主査委員と共に調製し、口語法調査報告は二卷、口語法三十七枚は三十九年十二月に刊行されるに至つた。これによりて東部方言と西部方言との二大別が判然とし、肯定・否定・命令・未來音便の表現上相對峙してゐること、九州及び四國には古い語法が變化を受けずに昔のまゝ残つてゐることが多く、九州方言と東北方言との間に一致の存することも明瞭になつた。但し各地の報告が繁簡相雜つてゐるので、調査會は四十一年三月更に音韻取調に關する事項四十一條、口語法に

國語調査會
編纂口語法

送假名法
假名遣假名
字體沿革考
假名源流考
疑問假名遣

平家物語々
法

關する事項九十條を定め、これを各府縣に配つてその報告を徴したが、大正二年六月山本内閣の時行政整理の結果、調査會が廢止せられ、その事業の完結しなかつたのは惜しみて餘りあることである。

その後大槻文彦博士の起草し、上田萬年・芳賀矢一・藤岡勝二・大矢透・保科孝一等の整理した國語調査會編纂の口語法一卷は大正五年十二月に刊行され、また大槻氏の手に成つた同別記は大正六年四月に刊行されて、口語法に關する基準は成つた。尙これは後章に詳説する。

假名遣諮問に對する答申書は三十八年十一月に非賣品として出版され、芳賀博士の執筆した送假名法は四十年三月に出で、大矢透氏の擔當してゐた假名遣假名字體沿革資料は四十二年五月に、假名源流考考證寫眞は四十四年九月に、本居清造氏の擔當してゐた疑問假名遣二冊の中、前編は四十五年九月に、後編は大正四年一月に、大矢氏の周代古音考及同音徵は大正三年六月に、山田孝雄氏の擔當した平家物語につきての研究は四十四年十二月に、平家物語々法は四十四年十二月に刊行せられた。

以上の如き研究はいづれも斯學上貴きもので、國語調査會の事業は中道にして挫折したが、この會に携はつた委員並びに補助委員の諸氏が努力完成した諸書はそれ自身が學術上非常な價值があるばかりでなく、後の學者がこれらを基礎としてその上に更に築きあげようと導いた力は洵に偉大なものである。尙、大矢氏以下の執筆になつた諸本は後章に解説するであらう。

十五 國語學史と國學家の史傳

上田博士と
國語學史

國語學史を上田博士が帝國大學で開講されたのは實に明治二十七年に始まる。博士は東京高等師範學校でも一とせこれを講ぜられた。さうしてその時代別に關しては契沖以前と以後とを以て分界とされたことは洵に卓見である。赤堀又次郎氏は同年國語研究會でこれを講じられたが、第一期を漢字傳來より天曆の頃までとし、第二期を天曆以降王政維新までとし、第三期を維新以後即ち明治時代とされた。然し元祿期に一大時期を劃するのは妥當であることは爾來何人も異議のないところである。

上田博士はこの時代を更に三分し、契沖の生れた寛永十七年より本居宣長の歿した享和元年までを第一期とし、それより橘守部の歿した嘉永二年までを第二期とし、更にそれより明治十九年帝大に博言學科を置かれたときまでを第三期と立てられた。達人の眼は優れてゐることを、今更ながらに感ずるのである。

保科孝一の
國語學小史

その教を受けた保科孝一氏は明治三十一年に列傳體の國語學小史を著した。この書は我が國に於ける最初に公にされた國語學史である。首章に國語學史の目的を説き、師説に従つてこれを五期に分ち、第

第二章には第一期即ち契沖以前の時代を、假字遣・手爾袁波・語釋・辭書・音韻の諸項に分ち、研究事項を中心に説き、第三章以下は學者を中心として著書・學説を説き、第六章結論にはこの學が今後一層科學的に研究せられねばならぬことを論じ、文典・辭書の編纂、音聲學・比較言語學の建設並びにその進むべき方針等を述べてある。世のこの書に負ふところは少くない。但し第四期には必ず擧げねばならぬものを脱したものが少くなく、慈雲や太田全齋や白井寛蔭や岡本保孝や關政方なども顧られてないし、尙第五期には全く觸れてない。

氏は明治四十年十二月國語學史を出した。この書は前書と説述の方法を異にし、各期とも事項分けとなし、批評的態度を用ゐて説述してある。前著と相違するところも少くないが、補正した部分も相當にある。但し第五期の章は尙委しく記されてない。

余はその三年前に、日本文法史を大日本圖書株式會社より出した。教育並びに學術兩面より見たもので、第一篇は維新前、第二篇は維新後とし、第一篇は假名遣・天爾平波・動詞・形容詞及び文章結構に分ち、第二篇は全體的に著書と時勢とを明かにしようとした。而して富士谷・本居兩學派を中心として學説の發展の跡を辿ることとし、章を四十九に分ちて説き、語學者の肖像や筆跡を入れ、附録には書名・人名の索引、外國人の日本語研究年表や術語字引等を附録とした。

學習院にて貴族上流の子弟を教育するかたはら、隙を以て帝國大學國語研究室に通ひて綴り成し

たもので、乃木學習院長と上田萬年博士とにデケートしたのは全くその御蔭に依つて成つたゝめである。當時友人龜田次郎氏の懇切な批評もあつた。自分の夙い時代の作であるので絶版とした。

長連恒の日本語學史

その翌年長連恒氏が博文館の帝國百科全書の一編として日本語學史二卷を出した。この書は第一編緒論に國語研究の必要や國語研究の目的及び方法を説き、過去に於ける國語研究の缺點を論じ、第二編以下國語學を五期に分ちて、各期の學者を中心に説いてある。第五期の分ち方につき、保科氏は帝國大學に博言學科を設けられた明治十九年を始めと立て、氏は日清戰爭を以てその前後を分つた。土井忠生氏の明治大正國語書目解説に評が載つてゐる。保科氏及び余の著を集成された觀があるといはれるが、拙著の誤やミスプリントをそのまま採られたのは自分は背に汗する感がないでもない。

國語學精義

保科氏は明治四十三年に國語學精義を著し、國語問題並びに國語教育に關し大いに世をささうとされた。この書編を五つに分ち、第一編は總論として國語の言語的並びに聲音的研究を説き、第二編以下に國語學の過去・現在・將來を叙し、第五編には結論として國字問題を論じ、國語學の前途を祝福したもので、氏の國語策はこの書によりて窺ふことが出来る。氏は昭和期に入りて國語學史を改訂して新體國語學史を出した。

昭和期に於ける國語學史

昭和期に入りて伊藤愼吾氏は近世國語學史を出し、山田孝雄氏は國語學史要を著し、時枝誠記氏は岩波の日本文學講座に國語學史を出し、吉澤義則博士は文獻書院の國文學講座に國語學史を出し、重松信

弘氏は明治書院の國語科學講座に國語學史を出し、いづれも有益な研究書である。これらに就きては後章に多少觸れようと思ふ。

尙、昭和二年五月「國語と國文學」所載論說、時枝誠記氏の國語關係刊行書、國語科學講座の龜田次郎氏國語學書目解題參照。

古學小傳

次に國語學者の傳記はその學風に關係があるので、併せ考へるのも無用でない。維新前に溯るが、安政丁巳に成つた清宮秀堅の古學小傳三卷は明治十年に再訂を加へ、印刷に附さうとして歿したので、明治十九年にその孫氏の手によりて出版された。義公・契沖以下山崎知雄に至る七十六人の傳をあげ、その初に古學傳統圖をかくげ、附録には塙保己一の年譜と秀堅の小傳とを添へてある。國學傳統の闡明を志し、各學者の傳記の集成に力を盡してある。特に契沖・眞淵・宣長三人の年譜を加へてあるなど著者の志を見るに足る。

次いで中野虎三の國學三遷史は井上頼園翁の校閱を経て明治三十年に出版された。義公より本居宣長に至る國學勃興の時期、それより橘守部の歿するに至る國學完成の時期、國學衰移の時期の三つに分ちて百八人の傳を記し、著書を舉げたもので、古書小傳・群書一覽・近代名家著述目錄・雜書撰者小傳・雜書解題その他著書によるところが多く、三遷の分ち方も妥當でない。太田全齋や高橋殘夢や、六人部是香の如きは生歿も分らなかつたと見えて舉げてない。著述目錄の如きも實地に検討したものでない。

國學家略傳

小澤政齋の明治三十三年に出した國學家略傳には慶長より明治に至る三百餘年に於ける國學者五百四十人の傳を旨としたもので、國學といふ義を廣くとつて雜學家をも多く交へてある。

國學者傳記集成

これに次ぎ大川茂雄・南茂樹の國學者傳記集成は明治三十七年に出版された。この書は慶長より明治三十六年に至る間に歿した國學者約六百十名の傳記資料を蒐集して歿年順に排列し、その生歿・住所・稱號・墓地・系圖・學統・年譜・性行・逸話雜載・著書等に互りて列傳體に叙し、資料は原文そのままを引用したものが多く、卷初に學統表・姓名索引を擧げ、卷末に國學者年表・名號索引を附してあつて、その紙數も千七百頁に上り、名の如く集成されたものである。但し新井白石や松永貞徳の如き重要な地位を占めてゐた學者を逸したのは遺憾とせねばならぬ。また公卿學者の生歿を公卿補任に徴しなかつたものや、著書名が違つてゐたり、卷數など實地に當つてない爲に誤謬の雜つてゐるのは當時に於ては止むを得なかつたであらう。國學の範圍を検討し、繁簡要を得、學術の進展の跡を明かにする國學人物誌の出るまでは多數の學徒に參考せられたものである。

偉人史叢

國文學大綱

以上の如くすべての國學者を網羅するのではなく、偉大な學者は別にその人一人の詳傳を作ることが必要である。裳華房で明治二十七年より出した偉人史叢には、足立栗園の新井白石、長田偶得の平田篤胤、紀淑雄の小山田與清が各一卷となつてゐる。また大日本圖書會社が企てた國文學大綱には三十年四月に大町桂月の契沖阿闍梨を始めとし、武島羽衣の賀茂真淵、鹽井雨江の香川景樹が逐次に單行されて

村岡典嗣の
本居宣長の傳

ゐるが、主觀的の評がかつてゐる氣味がある。

村岡典嗣氏の本居宣長は明治四十四年二月警醒社から出し、昭和三年に至り岩波書店から増訂版を出した。第一編は傳の研究、第二編は宣長學の研究から成つてゐて、豊富な材料を自由に使用し、客觀的實證的な態度で明快に記述されてゐる。即ち傳記は幼時・京都遊學時代・上古學研究大成時代・學問普及時代の四章に分ち、第二編は（一）宣長の古典の研究と訓詁註釋と、（二）宣長學とその區分及び著書の概觀、（三）文學説語學説、（四）古道説、（五）宣長學の意義及び關係、（六）近世の古學、（七）宣長學の成立・契沖・眞淵と宣長、（八）宣長學の根本主義、結論としてその主張した皇國學から、文學論に於ける物のあはれの説から、その人格から學問の上に反映したことを縱横に論じ盡し、増訂本には餘論として「反本居學説及び宣長學の發展」を添へ、附録には「本居宣長の神の意義」、本居が源氏物語螢の卷の一節の解説、「本居大平が圖せる恩顧について」等を加へてゐる。個人の評傳としては洵に範を垂れたものと謂ふべきか。

賀茂眞淵と
本居宣長

佐々木信綱博士の大正六年に出された賀茂眞淵と本居宣長の一書は更に新資料をとり入れて面白く書かれてゐる。

宇田川文海
の契沖阿闍梨

古學の開祖契沖阿闍梨の傳記及びその資料は少しとしないが、明治時代に至り單行本として出版されたものには、宇田川文海の少年文學第三十二編として出した契沖阿闍梨一卷があり、大町桂月の國文學

大町桂月の
契沖阿闍梨
久松潜一の
契沖傳

大綱第一卷として公にされた契沖阿闍梨が明治三十年代に行はれてゐた。その後大阪朝日新聞社で出した契沖全集第九卷傳記及び傳記資料は久松潜一氏の努力になつたもので、昭和の今日に於てはこれに踰えるものはない。

契沖傳は編を四つに分ち、第一編は契沖生涯の研究、第二編は書史的研究、第三編は思想學說の研究、第四編は學說の系統的研究とし、前後に序結を以てし、附録には詳細な「契沖年譜」が添へてある。氏は契沖の古典研究を文獻學といふ新しい名目の下に考察を遂げたもので、豊富な資料を整理して思想學說を中心とし、その母胎である生涯をも委しく述べてゐられる。

第一編生涯の研究には少年時代・高野時代・放浪時代・今里時代・圓珠庵時代の五期に分けて説いてあり、第二編の書史的研究は代匠記・餘材抄・正濫抄・拾遺時代の著書及び歌集並びに年代未詳の著書の五章に分けて説き、第三編思想學說の研究には古典學の概念とその方法論を緒論とし、復古論・先進論・傳授論・文獻論・本文批評説・註釋説・言語説・文學批評及び歌文の製作との關係の八章に分ち、委曲を盡してあり、第四編は契沖の古典學の源委、契沖の古典學と直接の系統、契沖の古典學と古學派の系統、契沖と非古學派の四章に分ち、結論として契沖古典學の近世文化史に於ける意義に論究し、水戸義公の史學と契沖の古學とが一方は大義名分を唱道し、一方は純日本主義を高唱し、共に日本主義運動の發端となつたことを述べて筆を收めてある。

契沖傳記資料は上中下篇に分ち、生駒寶山寺藏契沖書寫儀軌奥書集以下あらゆる文獻所載のものを拾してある。

この書は昭和二年七月に出版され、菊版二段組六百十三頁の浩瀚なもの、村岡典嗣氏の本居宣長、小山正氏の賀茂真淵傳と并せ不朽のものと謂つてよからうと思ふ。

國學史概論
と國學史
野村八良の
國學全史

國學全般に關しては夙く芳賀博士の國學史概論があり、藤岡博士の國學史があり、清原貞雄博士の國學史があり、野村八良氏の國學全史があり、上下二卷昭和三年四月に完成、千五百五十頁に上る浩瀚なもので、緒論に「國學と國學者」、「國學と文獻學」、「國學の起原」、「國學史の意義と編制」から文獻研究に於ける契沖以前と以後とを説き、契沖に關しては三百頁、真淵につきて二百頁、宣長につきて三百頁を費し、その業績を明かにしてある。

小山正の賀
茂真淵傳

武島羽衣の
賀茂真淵
縣居書簡續
篇

小山正氏の賀茂真淵傳は昭和十三年に春秋社から出た。國學三大人の一人縣居翁の傳は鈴屋翁の玉勝間や平田翁の玉だすきにも見え、維新後には古學小傳、國學者傳記集成の中にも資料を集めてあり、武島又次郎氏の賀茂真淵（國文學大綱第二卷）や佐々木博士の賀茂真淵と本居宣長等新資料が追々に加へられ、増補真淵全集には岡部讓氏の縣居書簡續篇が收めてあるが、未だ完全の評傳がなかつた。小山氏は大人と同國の人、神宮皇學館に學び、郷土の國學發達史を著さうとして拮据多年、この千頁にも餘る浩瀚な著作をなしたといふ。

序説として郷國遠江國學者の學界への貢獻及びその淵源を述べ、六編に分ち、第一編には眞淵の師と郷土の學界として荷田春滿・眞淵若年に於ける師杉浦國頭・森暉昌及び柳瀬方塾渡邊蒙庵を傳し、第二編には眞淵の傳として名號・性行・系譜・父母・妻女・志學及び江戸に於て門戸を張れることを説き、第三編には思想及び研究に就いて、詠歌・道のための歌道・萬葉研究・音韻語法の研究・書風及び漢學・護國派と縣居・著作を考察し、第四編には門人に就いて從來のものを大いに増補し、第五編は歿後の追慕及びその精神發揚に關し縣居神社の建立にまで説き到り、第六編は眞淵年譜にして、岡部讓氏の撰んだ賀茂翁家集補遺を加へてある。

本書は久松博士も評されたやうに、眞淵傳の資料的研究として自他の研究を網羅されて十分に推賞されるに足るものである。羽倉信眞氏の發表された京都遊學時代の新資料や、岡部讓氏の編にかゝる百三十六道の縣居書簡後編なども丹念にしらべて、江戸時代の養子養女のこととも明かとなつてゐる。久松博士の契沖傳、村岡氏の本居宣長傳と並べて尙ぶべきもの、將來この著により眞淵の思想的研究や評論が更に生れるであらう。

加藤竹男

國學者谷川
士清の研究

和訓栞の著者として日本紀通證の著者として北勢の國學者谷川淡齋の傳記としては加藤竹男氏の昭和九年十二月に湯川弘文社より出した國學者谷川士清の研究がある。加藤氏は同じ郷國の人、醫學專攻の士、後京大國語研究室に入り、神道と近世文化の研究に没頭し、谷川神社の創建に力を竭した。隨時發

表された論文に新加のものを加へ、すべて十一篇、士清の尊皇とその國體思想・南朝正統論・醫道の上より見たる國學者谷川士清の思想とその學風・神道觀・その學流等を明かにしてある。醫道に熱入血室之辨や關格異同辨を擧げて古道醫に志したことをいひ、神道には垂加流の神道を受けながら古學に志のあつたことを説き、某氏の神路記に南朝を僞朝とするを不可とし、續大日本史私記に大日本史が神武紀に筆を立て、神代にさかのぼらぬを不滿とし、通證は素より和訓栞の中から楠氏・潤統等の語釋の條等までを搜つて、その忠魂義魄を示さうとしたり、四十七字の歌と大嘗祭をよみこんだことも説いたりした點などが首肯される。和訓栞に説ける倭語通音のことや、蠻語本草の智識などの豊富なことを説くなどその人物の躍如たらしめ、また本居宣長との關係を説き、その門人を擧げるなど明治末年に出た表彰會編纂の谷川士清先生傳の上に數歩の研究を進めたものである。唯專攻の異るところから語學上の見解につきては未だ手をそめられてゐない。

伊藤太郎の
谷川士清先生

淡齋翁に關しては伊藤太郎氏の昭和十年に出した^{日本國體化}谷川士清先生の小冊子もある。これは傳記・學說・系譜・詞藻一斑・雜纂・特纂・逸聞・附記に分けて説いてある。

平田篤胤傳

平田篤胤の傳に關しては昨年十二月に山田孝雄博士の出された平田篤胤傳がある。

十六 音聲學研究の初期

上田博士の
清濁考
P 音考

我が新しい音聲學の生れたのは明治二十七年九月上田萬年博士が帝國大學で始めて開講されたのに起つた。それから大正十五年音聲協會の設立されるまでの斯界の狀勢を一瞥して見るに、博士は明治二十八年の帝國文學に「清濁考」を發表し、三十一年の同誌に「促音考」及び「P 音考」を發表された。後者はハ行の子音が古くは p 音であつたことを唱へられたもので、(一)清音と濁音との音韻的關係、(二)h 音は古き音にあらざること、(三)アイヌ語に入りし日本語のこと、(四)上古の音は熟音的促音及び方言の上に存すること等に互つて、古代に p 音の存在を確實に立證された。これによりて金澤庄三郎氏の朝鮮語の研究、伊波普猷氏の琉球語に於ける p 音の研究を導き、遂に p f h 三音の關係が確立するに至つた。尤もその當時に於ては岡澤鉦次郎・三矢重松の如きはこれに反對説を立てたものであつた。

大島正健
字音假名遣
便法

大島正健の
音便説

大島正健も音韻の研究に傾注し、夙く漢吳音の研究を試み、明治二十五年に刊行した字音假名遣便法にも和漢音聲の差異より假名音の轉化を説き、二十八年の國民の友に發表した「地方發音の變化及その配布」といふ論文は味讀すべきもの、翌年四月發表の音便説は從來の四種音便説を斥け、k f h m n r

音韻漫錄
韻鏡と漢吳
音との研究

本朝四聲論

論語徴にあ
らはれたる
音韻論
岡倉由三郎

發音學講話

國語聲學

發音辭典

伊澤修二

視話法

ws 八種の目を立て、ハヒフヘホ古音考・タチツテト古音考・撥音と促音に關する研究を出し、三十一年にこれらを總めて音韻漫錄を出し、三十二年には韻鏡新解及び同補遺を帝國文學に發表した。

猪狩幸之助も「韻鏡と漢吳音との研究」を帝國文學に發表し、三十一年に出した漢文典には韻鏡の解釋、本朝音韻學史や Volpicelli 氏の 1886 年に成る Chinese Phonology の抄譯等を附録とした。尤も本朝音韻史と銘はうつてあつても僅々二頁位のものである。佐藤寛の本朝四聲論なども出た。後岡井慎吾の「論語徴にあらはれたる音韻論」(帝文)等も皆漢字音の研究から出來たものである。

これらに續いて類案的なものがやうやく出るやうになつた。岡倉由三郎氏の明治三十四年に出版した發音學講話は Bail, Blaserna, Ellis, Sivers, Sweet, Strong, Meyer, Brenner, Soames, Victor, Rupmon 等の入々の著書のうち、自家の音韻觀に合するものを譯出して説を立てた。平野秀吉も上田博士の指導を受け、Sweet の著により明治三十五年に國語聲學を著し、萬國音聲學協會の發音記號を始めて採用した。さうして、卷末に「發音小辭典」を附録とした。高橋龍雄もその前年發音教授法を出し、後國定讀本發音辭典をも著した。

實地にこれが應用を試みたのは伊澤修二氏である。夙く一八七八年フィラデルフィアの萬國博覽會に赴き、グレアム・ベルの出品した聴啞教育用の寫音文字の掛圖を見てわざ／＼ボストンに到り、ベル氏より直接の教を受け、明治十一年歸朝し、その後案を練ること二十年、ベル氏の Visible Speech: the

音韻新論等

Science of Universal Alphabets を譯して明治三十三年視話法を出版した。後應周音韻新論・東北發音矯正法・國語正音法を出し、樂石社に於ける聾啞の教育に資する外、東北方言の矯正を圖ることに努めた。

十七 廣日本文典から山田の日本文法論まで

白鳥菊治の
日本文典

廣日本文典が出て後は品詞論は大體これに由ることゝなつたが、文章論は十分でないので、この方面に力を用ゐる文典の發生を促したやうだ。世からあまり注意を拂はれないが、白鳥菊治の中等日本文典には文章格につきて、主格と説明格、目的格と説明格、限定格と説明格等の關係を説き、文を單複二つに、複文を重行複文と關係複文とに分ち、名詞を限局する分定格中、

東京は面積廣く人口多し

の如きを共定分定格に分つなど新味を示してゐる。

草野清民
動詞古形論
總主說
日本文典

不起の病に犯されながら、その心血を文法の上に注いでゐた草野清民は夙く明治二十七年に動詞の古形論を發表し、四段活用を以てその基本と説き、三十二年には總主說を唱へた。氏の遺著日本文典は三十五年に發行されたが、文章篇に於て詞句相互の關係を説くことが詳かで、これによりて大槻博士の上呼應に關する説も是正するところがあり、修飾語と被修飾語との關係には三個の異趣あることを唱へ、また形容詞の已然形は「ども」との接續上から來つた變體と説くなど、廣日本文典以後傾聴すべき説が

廣日本文典から山田の日本文法論まで

ある。

新式日本文典

岡田正美の新式日本文典は語形よりも思想を主としたと謂はれ、動作を有意・無意・單獨・係補・爲相・被相・自己相・使役相・使役相爲・使役相被・被役相爲・被役相被に分け、また文の成分中、生物・無生物とにより對部・補部とに分けてある。「ベッケル」や「ウルスト」の論理的文法に則つた譯ではあるまいが、我が國語の形態よりも著者の頭でひねり出した「ミネルヴ」だとの評があつた。氏はまた同年に^{文法}日本文章法大要を出し、新しい命名を用ゐて文章法を説いたが、體系に囚はれた觀がある。

文章法大要

岡倉由三郎
新撰日本文典

岡倉由三郎氏は翌三十四年に新撰日本文典を出した。「ジュエル」の解剖圖式に鑑みて新工夫を用ゐ、文及び文の解剖を旨とした啓蒙的のものであるが、新工夫の點が見るべきである。

岡澤鉦次郎
初等日本文典

岡澤鉦次郎氏も思想に據を置く文法家で、三十三年十一月に初等日本文典を出し、文の成分を主素・従素・形容素・副素・接續素に分ち、述格の上から文を寫述・記述・疑問・希求・詠嘆の五つとなし、語性篇には熟語・連語・業語の別を立て、靜辭（てにをは）を定位・定素・副用・續用・從屬の五つに分けた。帝國文學には日本音聲考附P音考斥非の如き論文を載せた。四十年には日本文典原理を出し、その翌年には日本文典要義を出した。

日本文典原
理
日本文典要
義

序に原理につきて一言をすれば、文法哲學ともいつて宜しいもので、讀下すにも多大の勞力を費さねばならぬ。とにかく思想活動の様相によつて文章を説かうと企てたもので、思案推論が極めて深密で、

四編二十六章から成り、國語の特性としては

一、一語として帶根辭語なること。

二、文章として根本に分示組織を有すること。

三、動詞概念をあらはすには「はたらき」を以てすること。

四、文を成す語が直行の序次を取ることを。

五、歌謡に押韻平仄の排列をとらずして一に境遇的自然の口調に訴ふること。

を數へてゐる。(委しくは増訂日本文法史第四十五章参照)

要義の方は初等日本文典の改定増補本とも見做さる。文の述定に關しては前述の五種の外、反語・轉語・傳述の語法のあることをいひ、靜辭の分類も一層細かく、語の成立に關し、語根・語幹・根辭の別があり、根辭には冠性・屢性・接合性の三種を分ち、連語(陰陽の如き)・熟成語(外つ國の如き)・團成語(源三位賴政の如き)・叢語(ゆかんずの如き)・訛成叢語・擬連語などの目を設けてある。

國語沿革の
大要
松平圓次郎
日本文法教
科書
佐々政一
續日本文典

教科用のものにありては教育制度に追隨することは云ふまでもない。明治三十五年二月に文部省令により中學校教授要目の改正があり、第五學年に國語沿革の大要の加へられるや、これを加へた文典が出づるに至つた。英文典と提携した上に特色をもつてゐる松平圓次郎の^{新定}日本文法教科書卷五には上古・中古・近古・近世・今代の五期に分ち、佐々政一の續日本文典の卷二には太古・上古・中古・近古・近

續新日本文
典國語沿革大
要

金澤庄三郎
日本文法論

芳賀矢一
中古文典
形容動詞

代・現代の六期に分ち、上田萬年博士と余との共著に成る續新日本文典は、七期に分ちて國語の沿革を説き、山田孝雄氏の四十年一月に出した教科用のものは國語沿革大要と銘をうつてある。以上の諸氏の文典は歴史的文典の胚芽といふべきである。後には奈良朝・平安朝・鎌倉・室町・江戸時代と各個に研究されるに至つたことは後に述べる。

この間に金澤庄三郎氏の日本文法論が明治三十六年十二月に出た。これは朝鮮語との比較研究の餘になつたもので特色がある。これは大正の初に出た日本文法新論と共に後に述べる。

芳賀矢一博士の明治文典及び中古文典は教科用のものであるが、中に形容動詞を一品詞と立てたとことは新しい。

特別なものとしては廣池千九郎の「てにをは」の研究が出た。

十八 口語法研究のその後

鈴木暢幸の
日本口語典

三矢・松下・石川・金井諸氏の口語文典のことは既に述べた。その後鈴木暢幸の日本口語典は明治三十九年に博文館の帝國百科全書の一編として出た。戦後の經營・國力發展の無形的基礎とするために、吾が日常使用するところの國語を廣く全地球上に普及せしめねばならぬとの信念が識者の心に湧いて來た。この目的の爲に標準を東京語にとり、口語研究者の參考用として心理的實際の口語を分析的方法により説明敘述したと云つてゐる。

吉岡郷甫の
日本口語法
日本方言の
分布區域
文語口語對
照語法

これと前後して吉岡郷甫の日本口語法も出た。この書は假名遣も表音的に、説明も全部口語を用ゐ、語法の分布に關することは大槻文彦博士の日本方言の分布區域といふ論文に據り、東京語と地方語との語法上の差違とか語法と文法との相違は註に示した。文章法も簡にして要を得てゐる。後^{文語}口語對照語法も出した。敬語法に關して注意をこめたところがあり、一時相應に使用された。

保科孝一の
日本口語法

國語調査會委員會の口語法調查報告書の發表されたのは明治三十九年の二月であつて、この方面に關する著作を試みるものは皆標準としたものである。その委員であつた保科孝一氏は明治四十四年一月に

日本口語法を出した。この書は夙く早稻田大學文學科の講義録として出されたものに改訂を加へられたもので、東京語に關する語法の一斑を説明すると共にその研究法にも論及した。即ち口語は國語の本體であるから、その改善を計り、口語法の整頓を企圖せねばならぬと口語の爲に大いに氣を吐き、關東及び關西方言の位地を論じ、相互の差異を説き、標準語の決定にあたり採るべきものを説き、假名遣との關係を述べ、研究資料を擧げてある。氏は現代語の普及に力を注ぐところが甚大であつた。

調査會の口語法資料

國語調査會に於ける口語法に關しては大槻博士が擔當して草案を起し、上田・芳賀・藤岡・大矢・保科諸氏の合議によりて決し、既に明治三十九年には口語法は脱稿したが、その刊行は後れて大正五年に至り始めて出版され、同別記は翌六年四月に刊行された。口語法はその骨子を、別記はその考證説明をなしたものであつて、口語の標準は明治の末年に於ける東京の智識階級の間に用ゐられたものを取り、これに地方に廣く行はれてゐるものを交へ、十品詞に分けて細敘してある。例へば數詞の中にも、物事の數のとなへ方には、日を數へる時と人を數へる時と、年月・場所を數へる時、その他分數・割合・歩合・倍數を示す場合に於ける唱へ方など一々書き分けて注意を與へ、用言に助詞の附く場合なども一切の場合を圖表で示してある。

口語の變遷を五期に分つ

別記は口語の變遷を堅に平安朝時代・鎌倉時代・南北朝時代・室町時代・江戸時代の五期に分ち、横に關東・關西・中國等地方によりて分ち、引用書は百七十六部の多きに上つてゐて、口語變遷資料とし

大槻博士の
努力

口語の變遷
の跡を明か
す

山田孝雄の
日本口語法
講義

て適當にして價值ある文獻は殆ど網羅され、從來の學者が卑めて顧みなかつた俗語を各書より一つ／＼抽き出された幸勞は實に容易なことではなかつたであらう。尤も引用された書本の時代につきましては多少異議を挟むべき餘地がないでもないが、「です」の發達變遷の説明の如き傾聴すべき卓見が少くない。その變遷の要を云つて見れば、平安朝に至り音便が盛んに起り、院政の頃には假名遣も活用も變つて來たのは東國武士の言葉が都の言葉に雜つた爲で、鎌倉期になるとそれが甚だしくなり、係結の方則も崩れそめ、應仁以後はその變化が一層ひどくなり、江戸期に入ると、長呼音便は撥音便にかはり、(頼うでが頼んでの如き)動詞のい音便は原形に復し(流いてが流しての如き)たことから、東國方言の特徴を述べ、東西方言の地理的分岐點を示し、大名の國替により局地的に東西方言の存立する狀を説き、江戸言葉の中にも町人言葉・山の手言葉・神田兒の職人言葉・吉原遊廓言葉・佃島言葉などの相違があり、武家言葉の中にも旗本言葉・御家人言葉・勤番者言葉等の區分があることを説いてある。後の口語を研究するものゝ参照としないものはない。

その後山田孝雄博士の日本口語法講義は大正十一年に刊行された。その巻首に言文一致は理論上存すべきものでないといひ、文語と口語とは用言の活用と助詞の大部門に差異を認めるばかりであるといひ、名詞にも句論の上から談話・演説・書翰等には人稱を立てる要があるとし、代名詞には說話者の意向によりて區別される稱格指示と說話者の意向を離れて實體その物を指す反射指示の二種が存するといひ、

形式用言中の有りには存在を示すものと陳述を示すものとの二様の別があるといひ、説明存在詞の「です」は大槻博士の「デゴザリマス」の轉、三矢氏の「デゴサアス」の訛とする説を排し、「デアリマス」の約と見るべしと説いてゐる。

十九 方言研究のその後

東北地方教科適用發音と文法
米澤言音考

津輕方言考
青森縣方言
訛語
秋田縣方言
佐賀縣方言
辭典
鹿兒島方言

方言の研究の初期のことは既に述べたが、明治三十三年以降の状況を見るに、爾來標準語制定の準備として、各地方に於てこれが調査を遂げることが次第に盛んになつて來た。小泉秀之助の東北地方教科適用發音と文法とは明治三十三年に單行され、また内田慶三の米澤言音考は明治三十四年に成つた。いゝゑの混同、し・ちの轉訛、さ行音の拗音化、は行「ふ」音の減してふ・ひが生じたり、濁音と清音との轉倒したりすることなど訛りの多い米澤地方の方言語典も明かとなつた。青森縣にありては武井水哉の津輕方言考は三十四年に、齋藤大衛・神正民兩氏の編纂した津輕方言集は三十五年に成つた。青森縣廳で編んだ青森縣方言訛語は四十一年に發行され、大山宏の秋田縣方言音韻及び口語法は四十四年に出版した。佐賀縣方言辭典は三十五年に、清水平一郎の編纂にかゝる佐賀縣方言語典一班は翌三十六年に刊行され、村林孫四郎の鹿兒島方言は四十一年に發行されて、衣は衽に袖腕に至る薩摩隼人の短縮緊張した砂糖が「サト」となる短音、奥様が「オッサン」となる促音化、疊が「タタン」となる撥音化、稽古が「ケコ」となる母韻の省略、挨拶が「エサツ」となる母韻の變換、焼酎が「ソツ」となる拗音の直音化、

静岡縣方言
辭典

砂が「ズナ」となる濁音、藥が「クスイ」となり、理窟が「チクツ」となる父音の變化より語法文章の上に説明を加へた。以上の如く東北地方や西南地方は訛音・訛語が多いので、これらの語典が他に先ちて着手出版を見るに至つた。その他、静岡縣方言辭典は音韻法及び口語法を附して四十三年に刊行した。その他にも蒐集刊行されたものが少くない。

國語に於ける
東國方言
の位置

中央に於ける學界の人々の中には新村出・保科孝一諸氏が活躍されてゐた。新村氏は三十八年の教育學術界に「國語に於ける東國方言の位置」を論じ、四十二年十一月の史學會の大會に東國方言沿革考につきて講演し、あづま鳥とか鬼語と評して卑しまれた東語は漸次勢力を得て來た沿革を趣味深く説き、

關東べい

江戸乃至關東語の特點であつた「ろ」に就きて種々と説かれ、保科氏は四十二年に「關東べい」に就き、

江戸言葉

同年末から翌四十三年の一月にかけて「江戸言葉に就て」の論文を東亞の光に載せた。いづれも有益な

東西兩京の
言葉戦ひ

論文である。昭和の初頭に於ける黒潮創刊號に載せた吉澤博士の「東西兩京の言葉戦ひ」と併せて讀むべきである。尙昭和期に入りてのことは後に更に述べる。

二十 三矢重松の高等文典及び古事記の訓法

高等日本文法

名詞の七格

前提法

形容詞の語尾及び助辭の起原につきて

三矢重松は國學院第一回の卒業で、文法の研究に一身を委ね、夙く口語法に注意し、またその郷國莊内方言の語法をしらべ、明治四十一年高等日本文法を著し、大正十五年それが増訂版を出した。氏の文典は廣日本文典に據り、引例は上代・中古・現代に亘り、その改むべきものは改め、加ふべきものは加ふるの方針に由つたもので、一種の混合文法である。我が音韻を百十三音と數へ、詞辭論中、名詞の格に主格・領格・副格・處置格・呼格・同格・並立格の七つを立て助辭並びに接頭接尾辭も合せて説く方針によつてゐ、中に「一の君二の君」といふが如きを並立格、「秩父、太郎兵衛」の如きを同格と云ひ、「を」の助辭を具するものを處置格といふに對し、「に」「へ」「と」「より」「から」「まで」を具するものを副格と名づけ、動詞の法を直説・命令・前提の三つに分ち、前提法は條件を示すもので、これを假定と確定とに分ち、これに順態・逆態を定め、動詞の相に關し被役相に非情の受身と自動詞の受身の二種あることを述べ、敬語は尊他・自卑・關係・對話・卑罵に分ち、形容詞の語尾「し」「き」「ち」の音から分化したもの、「く」の語尾は「こと」等の義があるとし、助動詞の「つ」「ぬ」の別に

關し、「つ」は動作的故意的にして急であり、對話文に多く用ゐ、「ぬ」は狀態的自然的にして緩であつて叙事文に用ゐる差があるとし、「如し」は助動詞と見てはならぬ、「べし」には命令の意なく、「めり」は「見えあり」の約まりでなく、「め」は「べし」の「べ」が良行變格に活いたもの、「まし」は「然せむ」とする意はなく、事實を假定する想像にして、事實に反した場合に用ゐるといひ、「な行きそ」の「な」を副詞と見る説を斥け、打消の變體とし、古代語の名の下にある「い」は主格を示すといふ説を斥け、現代語の「茶が飲みたい」の「茶が」は處置格でなく、主格を示すといひ、文中、總主に關し各種の説を擧げて批評し、單文と見做すのが正しいといひ、感嘆文は提示的のものであるから、示文と名づけたらば宜しからう、又自記と記他とを區分すべしといつてある。口語の「デス」は「デゴサアンス」・「デガンス」・「デゲイス」・「デアエス」・「デス」の經過を重ねて成つたと説いてある。増訂本には作歌と助辭・助動詞「らむ」の意義、「ごとし」の論、日本語の動作と狀態、國語に特有な文の三體等他の雜誌に載せたものを附録としてある。

古事記に於ける特殊なる訓法

古事記の訓點異同辨

氏の研究中最も價值あるは「古事記に於ける特殊なる訓法の研究」であつて、その病篤きに際し、提出された學位論文である。大正十三年その一周忌に方り出版された。蓋し古事記の訓讀は本居宣長の訂正古訓古事記が權威として行はれ來つたが、更にその訓法を検討したもので、五章より成り、第一章序論には古事記の文體、從來の訓點本、訓點異同辨を、第二・第三章には語法上の問題を、第四章には特

引用する
きの語法
シ・キ・ケ
リの再検討

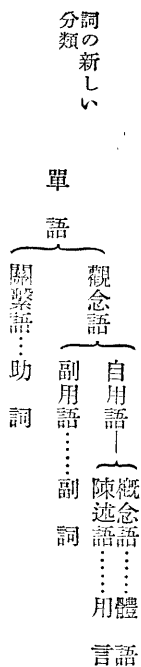
特殊の漢字
の訓法

殊なる漢字を概説と各論とに分ち、第五章には總括を擧げてある。文體が音訓併用體にも漢文としての體裁を整へんとする風があり、漢文體にも音訓を交へてあるところがあるが、大體から見ても漢文の體裁を離れないもので、當時の記録文の標準が漢文にあつたのでこれに準じたものであるとし、從來の訓點本中寛永本は誤多く、度會延佳本は舊訓を集めて大成したもの、明治の御代に至りては敷田年治の標註本、田中賴庸の校訂本があるが、その異同を天地初發の卷頭文につきて比較し、正しき訓讀を定めんとを庶幾し、語法上の問題に入り接頭敬語「ミ」を用言に附するの誤を辨じ、次に「日ハク」云々の終に「ト宣リタマフ」、「トイヘリ」と結ぶといふ宣長説とこれを補つて訓むを要せずとする飯田武郷説とを批判し、次に地の文の時制と詞の文の時制に關し、「シ」・「キ」・「ケリ」の用例を検し、對話體の過去をあらはすに「キ」を自己の過去を示す「ツ」と同様に用ゐる語を指摘し、「ケリ」は感嘆完了の外、地にも詞にも過去としては全く例のないことを注意し、特殊なる漢字としては、者・之・所・矣・而・是・將・爲・既及びその他種々の字に就きて例を擧げてその訓法を説示してある。氏は慎重の態度を取り、斷言を下してないところがあり、文字の研究につきては後の研究を待つものが少くないが、古訓の特殊な訓法の研究に重要な一石を下されたものと云へようと思ふ。

後昭和に至り門人安田喜代門が遺稿や講義筆記や他に載つてゐたものをまとめて文法論と國語學及び國語の新研究等の書を出版した。

二十一 山田孝雄の日本文法論

從來の文法は實用を旨とし、よし體系を細かく立てゝも、その組織に關する基礎的な論理的研究は未だ現れなかつた。山田孝雄氏は明治三十五年に日本文法論を著し、四十一年その後半を完成して菊版千五百頁に上る浩瀚なものを發表し、前人未開拓の論理的文法論を出し、文法史上に一期を劃した。前半には國語學の分科・文法學の内容・國語の性質等を記し、日本文法論の研究及び記述の順序を述べ、次に本論を二部に分ち、語論には諸家の分類法を批評して我が國に發生せる語法に基き、新たな體系を立てた。分類の本體として概念を示す語とその屬性を示す陳述の語とその關係を示す語とに分ち、概念を示す語を更に自用語と他に依存する副用語により次の如き分類を立てた。



複語尾

富士谷派の學說に根ざし、更に論理學・心理學の新智識を以てその區別し、複語尾說を唱へて助動詞

喚體句と述
體句

を排撃するところは廣日本文典の蒙を啓かんとする意味が溢れてゐるやうである。句論のうち、世人の文といふ稱は中らないといひ、また句の種類を分けるに、喚體句と述體句との二つとなし、その相違を明かにし、文は句の運用方法によりて成るといひ、これを單複に、複文は並立・一致・次屬の三大類に區別し、これにより重文・合文・有屬文の名を附し、係結にも「な・そ」の如き禁止のものもその一つに數へる等新しい考は相當に多く見えてゐる。叙述體の性質により引用句・準體句・連體句・修飾句に分けてあるが、連體句の如き新しい命名が少くない。これは昭和十一年に刊行された日本文法學概説の母胎となつたもので、大正十一年の日本文法講義、日本口語法講義、大正十三年の敬語法の研究、昭和十年の漢文の訓讀によりて傳へられたる語法等いづれも世に用ゐられ、文法學者の權威としてゆるされてゐること別に言を要しない。

日本文法講
義

二十二 大矢透の假名及び音韻の研究

假名遣及假
名字體沿革
資料

大矢氏は明治の早き頃、語法指南を著し、臺灣國語學校時代には島民に授ける文典などを作つてゐたが、國語調査會に入つてより假名の研究に力を盡し、奈良・京都等各地に出張し、或は公私の祕庫を歴訪して假名遣及び假名字體に關する確實な資料を蒐集し、天安二年の日附ある大智度論(石山寺藏)、沙門勝道歷山瑩玄珠碑(神護寺藏)以下平安朝のもの三十部、建久九年の祕藏寶鑑(石山寺藏)以下鎌倉時代以降のもの二十種の訓點に見えた片假名の字體を整理し、その沿革一覽を作りてこの道にたどるものゝ憑據を示した。これが即ち明治四十二年三月帝國學士院で出版された假名遣及假名字體沿革資料である。この書は唯一つ乎古止點との關係を考慮してない憾はあるが、一書毎に字體と音價の相違がある古點本をよく讀破し、かくまでに纏められた業績は偉とすべく、これにより一面には訓讀法の資料ともなり、假名の年代を區別する古筆鑑定の用をもち、利用の範圍は相當に廣いものである。

假名源流考

氏は假名の本源を知るには、古來の字音の性質及び傳來を尋究せねばならぬとし、隋唐以降の字音を交へない推古朝の遺文中時代の確實なる伊豫道後溫泉碑文、元興寺露盤銘、法隆寺金堂樂師光背銘、元

興寺丈六光背銘、法隆寺金堂釋迦佛光背銘、天壽國繡帳銘、法隆寺三尊光背銘、上宮記逸文、上宮太子系譜以下九種の金石文等によりて、その中に使用されてある字音假名を蒐集して十六類に分ち、太田全齋の漢吳音圖にて説明し得ざる字音を考證し、周代の古音の我に保存されたものと斷定した。例へば奇を「か」、宜を「が」に使つてゐるのが詩經の韻脚に合致してゐる。而も此の如き古音は應神天皇以前に我が邦に入つてゐたと史を引いて推論してある。而して以上の金石文は拓本を、文獻上に傳へたものは最古の抄本を別冊とし、假名源流考證本寫眞として根本資料の正確を期した。

周代古音考
同韻微
ツの字源を
川の古音な
りとする

推古期の遺文に見える地名・人名をうつしてある眞假名が漢吳音と異なる（移をヤ、修をク、意をオ、富をホの如き）のは周代古音と一致してゐると唱へたのは氏の創説で、これを一層確める爲に氏は周代古音考及び同韻微を著した。この書は源流考の外編に當るもので、大正三年六月に刊行された。片假名のツの字源は門の字など種々の説があるが、川の周音であると説いてゐる。（これにつきては尙檢討すべきものがあらう。）その周代の音が如何にして我に傳はつたかといふ問題に對しては、源流考の第五章に齊燕趙の亡命者が周秦の時代に傳へたものであらうとしてある。考證の尙不十分なところはあるが、一つの示唆に富んだ試論である。

氏は源流考を本編として第一に假名源流考、次に假名字體沿革考・國語假名遣沿革考・字音假名遣沿革考・音圖及手習詞歌考を、外編として周代古音考・漢吳音考・漢魏六朝古音考・韻鏡考の十編を出す

豫考であつたが、國語調査會の廢止されるに及び、全部を完成するに至らなかつた。けれども獨力その業を續けて大正七年音圖及手習詞歌考を出した。

音圖及手習
詞歌考
五韻次第
以下三十五
音圖

この書は假名通考の一篇で、天台座主良源傳本五韻次第以下古史本辭經に改訂されたものに至る三十五圖を抜き出し、その異同を比較するに、堅位は多く今の圖と一致するが、横位は一致するものが少いといひ、大體は

一、悉曇の摩多と體文との次第を墨守するもの。

二、悉曇に倣ひて國音の性質によりて次第せるもの。

三、縱横位共に悉曇に異るもの。

眞備及び空
海作の舊説
を斥く

との三種に分け、(一)と(二)とは悉曇に出で、(三)は音博士などの家に傳はつた隋唐將來の音圖でもあらうかとし、(一)は最も古い形であつて、中には行はp音、わ行はv、さ行はsh音にちかいと斷定し、(二)は縱の排列はアイウエオ順なるも横の排列が異なるもので、(一)より後に發生したといひ、(三)は悉曇渡來以前に儒家の反切に使用した圖式の殘物かとも思はれるが、(一)よりも後のものなるべく、(一)は眞言系よりもむしろ天台系のものなるべく、圓仁若しくは安然の手に成るとの説を贅し、從來の古備眞備または空海の制作説を斥け、あ・や二行の衣・江を區別してある點から天曆頃までの作と假想し、更に圓仁の悉曇字母集に充てた漢字と眞假名圖と大體一致するを認め、圓仁の三世の法嗣良源の五韻次

五韻次第

第に收めたものを五十音圖の祖圖と斷定した。併し氏の引かれた谷森本の五韻次第は再検討すべきものがあり、後山田孝雄博士は五十音歴史の中にこれが再研究を發表した。

阿米都千詞
及び大爲爾
歌
伊呂波歌の
製作時代

吉澤義則氏
の批評

次に伊呂波歌に關し、空海創作説を破する爲に阿米都千詞や大爲爾歌を引き、源順の倭名鈔を撰んだ天曆以前は四十八音時代であつて、伊呂波歌發生のいはれのないことを説き、伊呂波制作の理由、歌の形式・歌の意義・字體・字源・音數・詞格より考へて、天祿より降り、永觀前後になつたものとし、その作者は空也千觀、もしくはその徒であらうと推測を下した。この點につきては吉澤義則博士の批評がある。(國語國文の研究參考)

伊呂波字源に關し、氏は音によるもの、訓によるもの、音による中、全音をとるもの、省音によるものを區別した。中に「と」は止の頭音からでなくて、周代古韻の「トイ」から、「の」「こ」も同じ古韻の「ノイ」「コイ」から來たとし、「つ」は川の古韻であり、「へ」は部の省字だと新考を發表した。

氏は居を一時奈良に移して古經卷の訓點を尋究し、假名遣及假名字體沿革資料の第二編の一部として大正九年地藏十輪經元慶點を出し、同十一年に成實論天長點及び願經四分律古點を出版した。これらには先に出したものと異り、多くの旁訓を挙げ、また平古止點にも留意してあり、訓讀の資料を提供してある。

韻鏡考

氏はその後大正十二年に韻鏡考を著した。これは著者の假名遣通考の第五編に當るもので、韻鏡全般

に五つての研究を遂げ、叙説以下十九章から成つてゐて、音圖成立の時代・反切製作の時代・二百六韻の性質・等位の解釋・内外轉の別と十六攝目の用を骨子とし、徳川時代の學者のまた研究しなかつたものを究明した。その叙説の中に

漢音は隋唐當時に於ける讀書上の音にして是等音圖はこれを基礎として成れるものなるが、やがて宋に傳はりて經史の區々なる反切を以て宋代の一音に歸せしむる用に供せられ、夫の煩瑣なる門法の如きも殆ど皆之が爲に設けられたるものなることを知るに至れり云々

隋唐音圖

とその抱負の一端を見るべきである。この書の附録として隋唐音圖を作つた。これは氏の歿後三宅武郎氏がその遺族に請うて上梓した。韻鏡考の所論に基き、韻鏡・七音略等の宋代の音圖の上欄を集めて折衷して空窠圖を作り、之に廣韻の音頭を排列したものだと言の始めに云つてある。

假名の研究

氏は大正十五年に假名の研究を啓明會紀要第五として出した。これは氏が多年研究された假名に關する要點を摘記し、學位論文とされた小冊子で、その簡條は

一、假名研究の必要

二、研究の發端

三、漢音にも吳音にもあらぬ古假名

四、古假名と周代古書の韻との比較

五、古假名は周代古韻にして周代古韻は支那に傳はらずして我が國に造れり

六、假名研究に對する韻鏡の必要

七、内外轉の分別と四等位の差異

八、ア・ヤ二行のエの分別

九、伊呂波歌は空海の作に非ず

十、止・川等の漢吳音サ行の音の漢字を假名にてタ行の音に呼ぶ理由

十一、反切の始は魏の孫谷に非ず

十二、概括

古言衣延辨
々證

で、以上の中(三)より(五)までは假名源流考及び周代古音考の要約であり、(六)(七)は韻鏡考の要旨である。尙氏は奥村榮實の古言衣延辨の辨證を作つた。これは音聲學會出版の音聲の研究第三編に收めて出版された。

昭和三年七月の國語と國文學は大槻文彦・大矢透兩博士の記念であつた、系圖・年譜・自傳・傳記・著書論文目錄等を載せてある。未刊著書の中には正倉院聖語藏御本、東大寺並びに西大寺本經典の古點の調査されたもの十餘部及び假名沿革餘材等の既に脱稿せるもの等が擧げてある。

二十三 乎古止點及び訓法

點 圖

乎古止點は漢文の訓讀を示すに用ゐたもので、圖に示したものを點圖といふ。群書類従にも若干の點圖を收め、同文通考や文教混故にも多少觸れてはあるが、この研究をまとめたのは吉澤義則氏である。

岩崎文庫本
尙書及び日
本書紀古鈔
本に加へら
れたる乎古
止點

氏は岩崎男爵家の囑に應じ、その家に襲藏せる尙書・日本書紀の鈔本に加へてある乎古止點を研究し、大正八年四月「岩崎文庫所藏尙書及び日本書紀古鈔本に加へられたる乎古止點に就きて」を著した。

始めに乎古止點概要と題し、その名稱・時代・來由・種類を説き、次に岩崎文庫藏尙書及び日本書紀の乎古止點、博士家點史上の岩崎本尙書及び日本書紀の點の綱目によりて考説してゐる。即ち乎古止點は博士家所用の星點圖に發し、テニヲハ點とも呼ばれ、平安初期に起つたもので、始めは一定のものなく、人々家々によりても様式を異にしてゐたが、寛弘の頃より一定し、鎌倉時代に至りて殆ど廢れたが、その多様なるは學問競争の餘弊より起つたもので、密教事相部の如き極祕を重んじるものと關係があるとしてある。而してその種類は喜多院點以下釋氏點二十三種、儒教の蒼家點以下五種を擧げ、その成立をも幾多の徵證を引きて究明するところがあり、漢文訓讀の史的研究上輝しい業績を遺された。

竹添本唐鈔
漢書揚雄傳
訓點

教行信證の
訓點は阪東
語か
王朝時代に
於ける博士
家使用ヲコ
ト點譜
清原宣賢本
尚書卷七洪
範第六古訓

點本書目

氏は大正十五年十一月内藤博士頌壽記念史學編纂に井々竹添先生遺愛唐鈔漢書揚雄傳訓點といふ一大論文を載せ、首に天曆二年の奥書のある本文を掲げ、次にヲコト點・假名點を説き、博士家星點は岩崎本尚書點の解題に知恩院藏三略、圖書寮藏春秋經傳集解の點を引いて寛弘頃に定まつたやうに説いた説を天曆時代まで溯らせると是正し、假名點には珍しい字源を紹介し、單綴音を長呼する上々々言を説き、促音表記に「ム」を用ゐたことを示し、撥音「」の假名を「ム」「ウ」「イ」様々に書いた例をも挙げ、假名遣にも觸れてある。また龍谷大學論叢二四九號には「教行信證の訓點は阪東語か」の一論文を載せ、また昭和二年十一月狩野博士還曆記念支那學論叢には王朝時代に於ける博士家使用ヲコト點譜を寄せた。これには東山御文庫本宇多天皇宸翰周易抄御點以下京大本清原宣賢尚書點に至る十八種の點圖を掲げ、點圖の拾遺檢討に努められ、昭和三年十一月高瀬博士還曆記念支那學論叢には京大清原宣賢本の尚書卷七洪範第六古訓の一文を載せ、本文及び點圖を掲げた。以上三論文は昭和六年刊行の國語說鈴に收めてある。

氏は昭和六年十一月岩波の日本文學講座に點本書目一冊を出し、天長五年七月の識語ある正倉院聖語藏の成實論以下、永正九年舟橋環翠軒の奥書ある京大本孟子に至る奥書の明記された多くの點本を時代順に並べ、その卷數・所藏者・奥書等を一々挙げ、附録として點本の起原、假名點附片假名の起源、乎古止點三項に分ちて述べてある。片假名に關しては形同じくて音を異にするもの、形が異つて音を同じ

星點

ヲコト點の
種別

くするもの、同母字から發生してから種々の形をなしてゐる例を挙げ、吏道との間に交渉はないかとも見られるが、獨創的のものであつたであらうといひ、假名點は乎古止點と離れて單行したものは極めて少い事實を舉げて、次に乎古止點は江戸時代以前にその名稱は見えてゐない、古くは東大寺點またテニハ點を稱したやうである。而して星點が原始點であるから、テニヲハ點は最初は星點だけを指し、後博士家點をも呼ぶに至つたものとし、その時代に關しても釋氏の諸點を舉げてその時代の參考となる「カナ」・「ナム」・「イ」・「ソエニ」の四語につき種々の證例を挙げ、乎古止點の發生を平安朝の初期のものとの考を一層確實に説き、次に來由を説き、次の如き二種五類を舉げてある。

一、初より點として生れたもの

甲、星點　・　・　・　・　・　・　・　等

乙、線點　—　—　—　—　—　—　—　等

二、文字から轉用されたもの

甲、眞字　上ツタマ　下フタマ　等

乙、假名　マ　マ　　リリ、セリ、タ
　　ナ　　ナ　　リ、ナリ等

丙、略字　ナ有リ　人給フ　等

最後に加點様式の祕密性を帯びてゐることを説いてある。

二十四 語原の研究

日本語原の研究

語原に關して多くの人が手を染めてゐるが、優れたものが見られない。林甕臣は明治三十八年日本語原の研究を出し、自序に少壯より刻苦この研究に思ひを深めること四十年、終に一定不變の法規あることを啓發することを得たと云つて、語原學の本領・同効用・同價值・同原則・同定義・五十音圖式・五十音活用法・反切法の類別・語根語脈の九章に分つて論述してゐる。併し一切の語原を五十音圖に由つて説明を企て、通じ難き場合には反切延約を以てし、歸納によらない。隨つて獨斷に陷つてゐること、明治初期の言靈學派のそれと異るところはない。尙その説を詳しく説明した日本語原學は昭和八年に至り遺族の手によりて出版された。

日本語原學

國語之組織

國語の語根とその分類

音韻家大島正健も語原の探究は言語の意義を明かにし、人種民族の異同を詳かにするのみならず、古代の人情・風俗を窺ひて自國の特有性を覺る等々の益があるとし、大正三年國語之組織といふパンフレットを出し、また大正十五年より内村鑑三氏のジャパン・クリスチャン・インテリジェンタルに英文にて日本普通語の研究を續載してゐたが、昭和六年に至り國語の語根とその分類の一書を第一書房より出版し

大和詞にて
解釋せられ
ぬ言葉

動詞形容詞
の語根を以
て國語分類
の基礎とな
す

た。第一編總論には語原を探る興味・國語研究の範圍及び國語の構造・國語の作成・轉音轉義・濁音の用法・反對の對語七章に、本論を五十音の各行音の諸語及び語尾一般の十一章に分ち、末に索引を加へてある。春夏秋冬の語原の如きも從來一つ／＼便宜的の解釋を下してゐるが、かゝる一群の語を切り離して一語々々、單獨に説明を下すは當らずといつてゐる。我等の祖先の立國後、上古の時代よりその使用してゐる言語には他系のものが混入してゐて、動植の名特に地名には先住民の語がまじつてゐて強ひて大和詞によりて解釋するのは間違である。口・管・葦の如きは中心に穴のある物の名であり、釘・串・杭は穴を穿つものゝ名であるが、下のチ・ダ・キ・ギ・シ・ヒに至つては直ちにその義を解するところが出来ない。名詞の語根を探るはむづかしい。動詞・形容詞と同根を有する名詞はその大和語なるべきことは論を要しない。それ故に動詞・形容詞の語根を以て國語分類の基礎となすのが安全な道だとしてゐる。尤も一音一義の單語の如き一見して國語の性質を判じ得べきものは問題外と云つてある。新井白石が東雅に於て名詞ばかりの語原を説いた行き方と對蹠的である。

國語の構造を説き、構成條件を挙げ、擬聲語と擬態語とを述べ、簡單なる原始語・疑問詞・數詞を説き、次に轉音轉義一般と題してアと阿、アとヲ、ウとア、イとウの如く各行につきて轉音轉義を説き、轉音轉義四例として、身・目・手・口を中心とする音義の轉化を述べ、濁音の用法・反義の對照を擧げて本論を終つてある。輕き物の動くカラ／＼の音から空^{カラ}の出來るが如きは擬聲語で、ピカ／＼より光の

擬態語と擬
態語
轉音轉義

語の生ずるのは擬態語である。身を中心とする圓滿のマより充實のミに移り、それより幹・襖・裳(身布)・自・短・研く・皆となり、ミの轉なるムより軀・胸・剝・向・産・蟲となると説くが如きは轉音轉義の一例である。夜はヨの音に活動の止む意があり、ルは添へたもので、水の止處をよどと稱する如く、宵は止日である如く、ヨに日光の停止する暗愚状態を示す義があると説いてある。個々の發明もあるが、これはいかゞと頭を傾けられるもある。今一段に系統を立てねばならぬと思ふふしも少くない。

語尾一般

最後の語尾一般につきて、名詞の語尾には臣(身)・下(身)・友(身)・妻(身)の如く身及びその轉音の加はつたものゝ外(處)・底(處)・沖(處)・奥(處)・島(處)の如く處またはその轉音の加はつたもの等があり、また間のダ・穴のナ・端のシ・朝のサ・時のキ・空のラ・襟のリ・霞のレ・處のロの如く別に意義なく唯語調を助ける爲に附したと思はれるもの、鯛のヒ・翁のナ・鮎のナ等の如く意義の判然しない語尾を擧げて、後の研究をまつことゝしてある。語原の研究は周邊の國語を精査しなければ、理路の正しきに達することは出来ないが、幾分にてはその研究の歩武を進めたのは以て吾人は満足しなければならぬ。

松村任三

松村任三博士は大正五年に語原類解を著し、動詞・形容詞・副詞、并せて三千餘語の語原を説いた。而してその特徴は語の大部分を漢語に引きつけて説いた。

前田太郎

特殊語の研究に就きて前田太郎氏の業績に觸れなくてはならぬ。氏は明治四十二年東大を出で、大學

外來語の研究

院に入り、「言語と文化」を研究題目として學にいそしみ、イエス・ペルゼンの教授法新論を譯出し、日本語原研究に志し、多年著手するところがあつたが、大正十年過勞の爲に世を蚤くした。その遺稿外來語の研究がその一周忌に友人の手で出版された。外來語につきてはその形式より始め、外來語の生命につきては、如何なる語が勢力を持つてゐたかを語につき統計を挙げ、その生存死滅を論じ、その母語を明かにする等その研究の見べきものがある。

隱語の研究

また隱語の研究を企て、その成立に關し、海人藻介や武野俗談、御湯殿上日記、臥雲日件録等を用いてこれを説き、その構成に關し、音節の轉換・形狀の類似・色彩の近似・聯想・動作・比喩・禁忌・音の相通・字謎・符牒・音節の省略添加・類推の十二項に分けて、極めて綿密な研究を發表した。嘗て觀廳に於て隱語集の出版があつたが斯くばかり系統を立てこの語の成立や起因等を學的に研究したのは氏を以て始めとするを謂つてよいと思ふ。禁忌に關しては延喜式の昔から女諸禮集・醒醉笑・吾妻鏡・沙石集・推蓬簞語の如き和漢の書からこれに關するものを引き出で、字謎につきては謎合にも觸れ、符牒につきては吳服太物から藝人に至るまでのものを集めること文獻と實地に互りて研究を進めてある。

古代人名考

また古代人名に關し、あらゆる古文獻をあさつて動物名に因んだものを摘出し、これが統計を示した上代人の風尚を明かにした一論文もある。その他誤寫の話などもその文字の上にいかに細かい注意を常に注いでゐたかゞ分る。

井口止二氏の日本語原は昭和元年に出た。この書は篇を五つに分ち、第一篇には斯學進歩の状況より説き起し、世界言語の分類をマクス・ミュラーの説によりて挙げ、第二篇には日本語の總説を載せ、第三篇は語原の研究と題し、語根によりて音義語・音響語・偶發語の三つを立て、語の分化を説き、これに内轉・外轉・轉訛・延約・音便等の別あることを説き、第四篇は語原の説明篇として堀秀成・藤岡好古の教に基きて音義的の解説を下し、第五篇には二千有餘の普通語の注釋を試みたものである。

安井洋氏は昭和五年日本語原の心理的解釋を出した。氏は感情と表情との研究に従事するかたはらこの著を試みたもので、日本語は動詞・形容詞に互りてその大部分は解釋し得るとの信念を得、黎明期の言

語は表情の聲や擬音から起つたもので、爾後多くの歳月を経るに従ひ幾多の變遷は起つたが、一定の感情に一定の發音が伴ふことは原始時代ばかりでなく、後の世でも同じさまに働きかけるものであると云ひ、口の表情を基として語原を説いた。例へば「イ」は齒を食ひ縛つて發する怨恨の聲であり、忌々しく苛^{イラ}立たしき心情に伴うて發せられる表情の聲である。イカル(怒)、イガム(唾)、イム(忌)、イラツ(苛)等に用ゐられてゐるイにその意味が現れて居り、苛にして鋭なる感じを伴ふてゐるといひ「ウ」は口を窄め唇を失らして發する音で、不味なるものを吐出する口形から發する聲であり、忿怒拒絶の心情に伴ふて起る表情の聲である。人が怒つて格闘したり、疼痛に苦む如き場合には覺えずウウと唸るが、ウナル(唸)もウメク(呻吟)も共にこの聲から出て居る。ウナサル(寢)は惡夢によつて唸らさるゝこ

一行の概説

動詞の直説
法語尾の音
義

とである。」といふ如く、口の表情を基として説き、表情の聲を説き、一音義を説いた後には一行音の概括を述べ、アは開放、イは苛・鋭・逸の意、ウは鬱勃・擡頭・浮動・輕浮を、エは優越・激勵、オは抑壓・抑下を意味する言語となると説くが如く毎行に通じて同様の法を用ゐ、各行を説き了つた後、動詞の語尾に關し、その直説法の語尾ウ段の音には

「ク」 屈 確 來

「ス」 通 透 造 爲

「ツ」 衝

「ヌ」 滑 脫

「フ」 吹 膨 覆 合

「ム」 勃 群 結

「ユ」 搖 弛 緩 悠

「ル」 震 轉 變

の義を含んでゐることを説いてある。他の音義派の研究に一步を進めたものであらう。

この他個々の語につきて考證した類は少くない。例へば、金澤博士の敷島考・寧樂考・郡村の語原・家族の稱呼・日韓の古地名の考證はその國語の研究に、小倉博士の國語に入つた葡萄牙語・西班牙語・和

蘭語の研究は國語・朝鮮語のための中に收めてある。その他坪井博士や松岡靜雄氏の語原説は後章比較研究の題下に委しく述べることにし、爰には説かない。

佐藤仁之助氏の古語の新研究は昭和六年に出た。この書は我が古代の尊稱の意義を考説したもので、月・雪・花の三篇に分ち、月篇には麻羅・木閼^{キヤク}・羽古・麻良・彦・姫の本義、タケルの本義、麻侶・丸につきて、雪篇にはイロ以下ムチ・モチ・ヌシ・大人等二十三章、花篇は神・クレ・カハ・ミミ・クヒ・ミコト・スメ・キミ等十二章に分けて考説してある。「マラ」は梵語また僧家の隱語とする説を斥け、眞善の義、人名に木閼とあるのはその道の權威たることを示すもの、この「マラ」は後の丸と轉じたものの、「イロ」は大愛の義、これが「イリ」と轉じ、美稱に用ゐ、入彦、入姫とも用ゐ、郎子・郎女もこの義である。品部を「イルトモノヲ」と呼ぶ「イル」もこの轉であるとし、皇を「スメラ」といふも「絶對大愛」の義と説いてゐる。神漏伎・神漏彌も「カムイロギミ」、「カムイロミ」で、火瓊々杵の火は大の義、「ニニ」は好々の義、最も深く親愛する意、彦火火出見の「デミ」は「ツミ」の轉、威靈の義、神名の中の槌・筒の語も威靈の義、持又貴は眞威の義、神は靈異また奇靈、尊は眞嚴人の義と釋してゐる。從來の説と異り、獨創もあれど、また危険なものも混つてゐる。

賀茂百樹氏の日本語原は昭和十五年翁の記念刊行會より出された。上下二卷千頁に上る浩瀚なもので、明治二十八年に成り、同四十二年以來靖國神社の宮司として護國の神に仕ふる追々に加筆され、その總

日本語源問題

說十五條は昭和十一年十一月日本語源問題として出版し、あ行以下各説全部はこゝに出版を見るに至つたといふ。總說第十五に「わが古傳と言語及び本書の著述を思立ちしこと」の章に早歲にして御巫清直に就きて國體の學に志したことより、神代史を抹殺するやうな學者の言説を憤り、特殊の國體を知らしめるにこの邦の言語研究の必要な所以等四條の理由を述べてある。堀秀成等の音義説なども據とされたところもあるが、和名抄、類聚名義抄の如き古き字書は勿論、記紀萬葉・風土記の如き古典から、近世の學者白石、千引の徒の著作をも汎く参考し説いてある。

物の名の起

第一次時代
第二次時代

總論中の「物の名のなづきしゆゑよし」の條には第一次時代より第三次時代までを立て、第一次時代には性質・所作・形狀・音聲・効用・居所・誤認の七項を挙げ、第二次時代には性質・音聲・由緒・出產地・色彩・比喩・製作者の名・元質の念を襲ふもの・意義を縮少せるもの・意義を擴張せるもの・隱語・第一次の名にまた一語を合せたるもの、その關係物の轉りて名となれるもの、誤認の十四項、第三次にも七項を立て、次に動詞成立の原因を説き、形狀言はく活は斯・其・斯・斯有の變化を有することとを述べ、各行には本言から次第轉義のものに説き及ぼしてある。而して根本語から轉語となつたものを明かにしようと努めてある。

動詞成立の
原因

五十音は喉口間に十の發音部と各五つの調節部とありて、その發音する口腔の狀形によりてその音形を現し、言語の第一期に於ては延て音義をも生ずといひ、從來の音義派の如くすべてをそれにて解釋し

ようとはしないで、例へば「ア」には二十二の語群を挙げ「イ」には十八群に分ち、古典を引いて類型のものを釋する方針に由つてある。されば當らざるもの覺束なきものも雜りてあるが、亦參考するに足るのである。

二十五 日本語の系統論

井上哲次郎
博士の南洋
系説
白鳥庫吉
博士の駁論

田口鼎軒博
士のアリア
ン語説
國語上より
觀察したる
人種の初代

日本語は我が日本人種と同じく、世界のいづれの語派に屬するか明かでない。またいづれにも屬しないものかも知れぬが、多少の近似はないでもない。そこで内外の學者で我が國語の系統論を云爲するものが少くない。井上哲次郎博士は明治三十年の東邦協會報告に「人種言語及び宗教等の比較に依り日本人の位置を論ず」といふ一文を寄せて、日本語の南洋系であることを主張された。これに對し白鳥庫吉博士は史學雜誌第八編第七號に日本書紀に見えたる韓語の解釋に於てこれを駁された。蓋し井上博士は相互の根本的な單語の比較をすべきであるとし、我といふ代名詞と生活上必須な火といふ語ばかりの比較でこれを斷言されたので、危険性もあり、且語の分析などにも誤るところもあつたので、白鳥氏は多くの例を擧げて辯駁されたのである。

田口鼎軒博士は明治三十四年史學會の大會で「言語上より觀察したる人類の初代」といふ講演を試み、翌年刊行した古代の研究の卷頭に史學雜誌に發表した「國語上より觀察したる人種の初代」を收めた。氏は國語の比較は變り易い單語よりも文法を比するに越すものはなしとし、馬來・南洋・朝鮮・滿洲・蒙

新村博士の
駁論

古・土耳其・梵語・拉丁・希臘語の文法を檢し、アリアン語族の文法と我が文法とはかはらないとし、歐洲現代の各國語は後世變化したもので、土耳其語や梵語等の古い文法は日本文法の中に無疵に存在してゐるから、我々は歐洲人に比すれば、アリアン語の本家筋に近いとましく立て、新村博士はその根本より誤れることを言語學誌上に痛駁し、正統派の學説を以て彼の説を粉碎し、また史學雜誌に藤岡勝二博士の攻撃や田口博士の辨駁や新村博士の再論があつて、放膽な田口博士の説は消えた。

平井金三氏
の說
龜田次郎氏
の危險なる
言語論
木村鷹太郎

その後四十年の頃、平井金三氏は新公論誌に「日本語はアリアン語なり」及び「日本語アリアン語比較表」を掲げたので、龜田次郎氏は「危險なる言語論」を帝國文學に載せ、相互の間に議論を闘はした。プラトン全集の譯者木村鷹太郎氏は日本語希臘起源を唱へ、その日本太古史に夢のやうな説を載せ、

星健之介氏
の波斯語起
原說

「つぎねふ山背川」と古典にあるは埃及のナイル川で、「つぎねふ」は希臘語の兩岐の義の語でナイルの上流が二岐になつてゐるから、「つぎねふ山しろ川」の枕詞となつたなどいふが如き説なども唱へ、星健之介氏が語源の研究といふ個人雜誌に日本語の波斯語起源説を唱へてそれを立證しようと企てたのは、ジョン・バチラーがアイヌ語起源説と五十歩百歩と謂はなくてはならぬ。

外人の説

以上と異り、國語をウラル・アルタイ派と見る説はウイン大學のボラーの「日本語がウラル・アルタイ語に屬すべき證明」(安政三年)、ホフマンの日本文典(安政四年)、佛人ローニエの「日語とアジア大陸語との類似」(文久元年)、ウインクレルの「日本人とアルタノ族」(明治二十七年)、グルンツェル等

・現 代

二九

がその主なるもので、我が上田博士を始め新村博士等も皆ウラル・アルタイ派である。藤岡勝二博士は明治四十一年國學院雜誌十四ノ八に「日本語の位置」と題して、ウラル・アルタイ派であることを十四ヶ條に述べられた。その主要な條項は次のやうである。

一、語頭に子音が二つ來ることをウラル・アルタイ語では嫌ふ。日本語も。

二、語頭にr音のあることはない。日本語も。

三、母音調和は西はフィン語から東は滿蒙までも共通であるが、日本語にはない。

四、冠詞がない。

五、文法上性がない。

六、動詞の活用が違ふ。

七、動詞の語尾へ助辭が澤山つく。

八、代名詞が同じくない。

九、前置詞はなくて後置詞を用ゐる。……………

十四、客語が動詞の前に、形容詞・副詞は動詞の前におかれる。

語彙は擧げてないが、音韻語法の特徴を擧げてこれがやがて日本語の特徴であると説いた。朝鮮語と同系であることは金澤博士が熱心に主張されたことは別に項を設けて説く。

二十六 歴史的研究(その二)

——山田孝雄の奈良朝文法史、平安朝文法史及び平家物語々々——

奈良朝文法史

その時代分
と資料

文法を縱に見て、甲の時代から乙の時代に推移した迹を明かにする歴史文法は江戸時代に於ける富士谷成章の著に濫觴することは既に述べた。爾來系統的にこれを研究するものが出なかつたが、大正二年に至り、山田孝雄氏の奈良朝文法史及び平安朝文法史は公にされた。この二書は氏が曩に出した日本文法論の範疇によつて、確實な文獻から幾多の文法上の資料を摘出し、歴史文典を大成されようとの素願から出来たもので、奈良朝文法史に於ける序論は日本文法史通論の序説と見るべく、その時代を奈良朝以前・奈良朝・平安朝・院政鎌倉期・室町期・江戸期と區分し、各期の特徴を簡明に記述してある。

奈良朝文法史は萬葉を主とし、記紀・宣命・祝詞・風土記等の典籍、正倉院文書及び佛足石和歌の如き金石文を參考とし、藤原・奈良時代の標準語法に關する資料を整理し、最後に萬葉の東歌に見えた特殊の語法を示してある。資料の關係上から萬葉集語典と云つて然るべく、體言の部にては代名詞を説くことが委しく、「あ、あれ」と「か、かれ」の關係や「し」と「そ」の區別でも確實な資料を豊富に擧

げ、隨處に語法的の説明を加へてあり、用言や副詞や助詞につきても先進の説を斥け、新説を立てられたものが少くない。

新説を立てた

一二の例をいつて見れば、「命を惜み」の「を」は嘆辭でなく、格を示す辭、「惜み」は先行四段動詞の古形であらうといひ、「つとめたぶ」の「たぶ」「過ぎがて」の「がて」「散りこす」の「こす」の如きも助動詞でなくて各動詞と見做し、「せ」「き」「し」「じか」の如きも「き」の系統「け」「き」と「し」の系統「せ」「し」とが時代の前後もしくは意義の直寫傍觀などの差のあつたものが、久しきにつれ混合したのでなからうかといひ「ありなり」の如きは「あるなり」の誤謬とする舊説を斥け、正倉院文書を引きてその存在を實證し、「大命らま」の「ま」はもと獨立した副詞であつたといひ、格助詞「の」は「な」から發生したもので、琉球語の「ぬ」もこれと同源とし、「か」は「な」の喉音化したもの、「つ」は朝鮮語の人と同源であらうといひ、「は」「は」「もの」といふ體言から來たと説くなどそれを示すものである。

平安朝文法史

前時代の語法の廢滅したもの、新興のもの

その姉妹篇である平安朝文法史は總説に於て、平安朝文法は今日文章語の軌範となつてゐるが、仔細に檢すれば差異が少くないことをいひ、この時代に夙くも文語・話語の差を生じ始めたことを説き、その研究資料を擧げて前時代の語法の廢滅したものと新時代に起つたものゝ大綱とを示し、後の説話法の骨子となつてゐる音便は漢語の感化によることを概説し、句論に於ては係結を最も委しく説いてある。この時代は係結法の確立し嚴守されたと一般に思惟されるに拘らず、異例のあることを實證されてゐる。

和歌と散文
の語法の相
違

平安朝と現
代との文法
比較一覽

平家物語考

延慶本平家
物語

從來幾多の文法家は軌範をこの時代にとり、一般的な通則を立てるのに急であつて、當時の韻文・散文をあるがまゝに記述しないで、通則を立てるのに都合のよいものだけを取つた傾きが多かつたに、氏は飽くまで記述文法の立場を守り、この時代に於ける實相を闡明したのは洵に多とすべきである。和歌と散文との間には語法の差があり、同じく散文に於ても地の文と對話の文には異なる點のあることを指摘してある。對話には連體形留めの行はれた如きもその一つである。併し物語草子などは當時の原本がないので果して原形がどうであつたのかは根本的研究から云へば、疑なき能はずである。將來多くの點本をあさつてこれを確かめることが必要である。尙本書には附録に平安朝語と現代語との文法比較一覽が添へてあつて、その關係を一閱するに便である。

この二書に次ぎて武家時代の文法が究明されねばならぬ。國語調査會は基礎事業として各時代の語法變遷の實相を明かにする目的を以て、まづ山田氏に命じて平家物語の語法を調査せしめた。この物語は多くの琵琶法師に語られた關係上多くの異本を生じた。従つてまづそのいづれに據るべきかを決定せねばならぬ。氏はこの書の語法研究に先ち、まづ諸本を考覈した。明治四十四年の末、國語調査會で刊行した平家物語考はその研究の結果を示したものである。

この書には異本七十本を蒐集してこれを十七類三十種に分ちて論究してある。世に行はれてゐる流布本は缺陷が多く、平家本來の面目を傳へてゐるものでないとし、諸本の異同を考へ、延慶年間紀州根來

寺で寫した奥書本が最も憑據すべきことを論定し、尙平家物語は承久以前に成立して藤氏將軍の頃に増補され、始め三卷のものが六卷となり、十二卷となつたことをも詳述した。

平家物語々々法

名詞の重疊
法、代名詞
の新語

これに續いて平家物語々々法二卷が平家物語考の後篇として大正三年十二月文部省で出版された。これは山田氏個人のものでなく、國語調査委員會の事業に係るので、その體系は廣日本文典の如き一般に認容されてゐる術語範疇に由り、延慶本に存する語法事象を悉く分類列擧してある。序説に延慶本用字の説明があり、假名遣より音韻轉訛のことを説き、次に語論には名詞の重疊法を始め代名詞に新語が出來たり、「そなた」の代りに「そかた」、「いづこ」の代りに「いとこ」といふが如き）形容詞の終止形に「し」といふ形が生じたり、動詞は終止形と連體言が混一すること、不完全動詞が発生したこと、助動詞には打消しに「なんし」といふ形が生じること、「う」とか「で」の如き形が盛んになつたこと、副詞に擬聲語漢語が殖えたこと、音便には「てんげり」、「殘んの雪」、「ござんなれ」、「敵をおつめて」の如き音便が生じたこと、「行幸なる」、「御寝なし奉る」の如き敬語が行はれたこと、次に句論の種々相を述べ、最後の概括の章には延慶本に見える語法は鎌倉時代の特徴を示してゐることを他書によつて旁證してある。通篇十七章二千頁に亘る大著述である。

鎌倉時代の
語法の特徴

二十七 歴史的 研究（その二）

安藤正次
古代國語の
研究

國語史の時
代分

上代の言語の音韻や構成に關しては安藤正次氏の古代國語の研究の好著がある。氏は二十年近く研究された序説として大正十三年に内外書房よりこの書を出した。全篇を五章に分ち、序説には時代的地方的の變遷きはまりなきに係らず國語の本質特性は永久に失はれない力強さをもつてゐる、然も國語發達の初期に屬する古代の國語は最もよく國語の本質的特性傾向を示してゐて、日本言語精神を究め、國語の現在を知り、將來を圖る上に重要な意義を有することを縷説し、次章には國語の時代の方處的概説篇として、國語史の時代區劃に關し大體文化史的見地から

一、國初から奈良朝末に至る國語形成の時代

二、平安朝時代の文語發達時代

三、鎌倉・南北朝・室町の三時代の國語混亂の時代

四、江戸時代の國語分化の時代

五、明治時代の國語統一時代

歴史的 研究（三）

の五期に大別し、更に古代語の時代を三期に分ち、

第一期 日本民族がこの國に占據してわが國家を形づくるに至つた前後から崇神天皇の御代の頃までの時期、文獻の乏しい暗黒時代

第二期 それより大化の改新まで、外來文化の影響を受けた國語の混成時代

第三期 それより奈良朝の末まで、國語の成熟時代

古代國語の
音韻組織

語詞の構成
造語辭
朝鮮語のヒと
朝鮮語のチ

となし、平安朝時代も天曆以前と以後との二期に分ち、江戸時代も京都語が勢力を得てゐた時期と江戸語が標準のものとなつた享保前後の二つに分けるとした。第三章には古代國語の研究資料につきその種類・性質・價值が説かれ、第四章には古代國語の音韻組織を論じたもので、古代に於ける國語母韻の發達を論じ、チェンバレンの琉球語の研究を紹介し、鼻音を説き、波行古音に關する諸説を集成し、p音説に裏書をなし、古代の波行を寫すに用ゐられた漢字音が韻鏡の唇音に屬することや、喉頭摩擦音の存在しなかつたことや、朝鮮語や琉球語との比較をなしてp音からf音に、それよりw音になつたことを説き、第五章には語詞の構成を説いた。その中語詞の發達に關する假説を立て、我が國語は附著語でその本體は短小のもので、これに接辭や短小の造語辭が加はつて成つてゐるとし、具體的に説明を企てゝある。例へば鯛・鯉・鰻・鰯・鮪の「ヒ」の音は魚の義をもつた語であるべく、朝鮮語の魚の總名chi また mi の語を共通にもつてゐるのと比較し、鶯・鳥・雉子の如く「ス」また「シ」の語は古は鳥

の總名に用ゐたであらうとし、國語には言葉の主要成分について言葉の意義を分化させ、言葉をさまざまに變へてゆく造語的接尾辭といふべき一種の成分があるといひ、これに

詞の分化

(一) k(g)m による分化がある。例へば

sidu-ku (くぐく) sidu-mu (くぐむ)

の如きも同一源から出てゐる。中に k(g) は確實性・急迫性、m の方は動搖性・緩徐性を示す別があるやうだとし、

ita-mu (いたむ) ita-ku (いたく)

は同じ類である。「痛む」と「痛し」とは終止形に於ては全く異なるやうであるが、状態をいひあらはすのと動作をあらはすのと語義の内容から生ずる自然の差異に伴ふ結果であると見るべきであつて、動詞と形容詞とは同一根から分化したと見て説を立てゝある。次に

(二) str による分化には

(イ) ke-su (消す) ke-tu (消つ)

(ロ) ka-su (貸す) ka-ru (借る)

(ハ) hana-su (放す) hana-ru (放る)

の三様がある。(ロ)(ハ)は自他を分つものとなり、

動詞と形容
詞と同一根

(三) n による分化には

ka-sa-nu (重々)

ka-sa-mu (嵩々)

の如きがある。n には積極的の活動をあらはす力があるといひ、

(四) f (b) による分化には種々あるが、fu の中

aga-fu (贖ふ)

aga-ne-fu (贖など)

の如きは「あが」が本で、「あがなふ」が後に成つた。この「なふ」は名詞に附いて動詞に化する力をもつてゐるやうに説かれて來たが、*ra* と *fu* と二つに分けて見るべきものと改めてある。「訪らふ」の「らふ」でも同様と説いてある。以上の動詞の語根は一音節のものと見、二音節以上の動詞も語源に溯つて考察すれば、その原始の形は一音節に歸すると説いてある。以上の如き新見がある。

國語の時代區劃につきては政治史・文化史により、平安朝と鎌倉時代と截然區別したところに異論があり、母韻發生論中にも今や新説が生じ、p 音の h にうつる經路時代に關しても他に説があるが、動詞の發達論や形容詞の分化等吾人に致へるものが少くない。尙附録には久具都名義考、「國語史上より見たるシラス・ウシハク」考、「言葉と文字にあらはれた我が國民性」の三篇が載せてある。

北里
日本古代語
音組織考

大正十四年北里闌氏は日本古代語音組織考を著し、古事記・日本書紀・風土記・祝詞・宣命・萬葉集・本草和名・倭名鈔・醫心方・佛足石和歌の十書につきて漢字かきの假名を統計して約七百六十の字音

三母韻と十五の子音

表日本と裏日本の母韻組織

出雲族の語

ムルタン語やフィリッピン語との關係

日本語の根本的研究

を得、これを印度・支那・朝鮮の古代の語音に比較して當時の音價を見出さうとした。氏は四十の圖表を作り、その結果、我が國の語音は a i u の三母音と k g c j t d n p b m y l v s h の十五の子音から成つて、子母音の連結した音節からいふと四十五熟音で、獨立した三母韻を合せて四十八種であつたが、hu を表す假名がなく、また c は後に s に合併されて四十四となつたといふ。而して我が母韻は表日本と裏日本とで組織がかはつてゐて、表日本即ち天孫族の方は ai から ei が出で、au から o が出來たが、裏日本即ち出雲族の方では i u の上聲のものが去聲になつて e i が生じたといひ、天武天皇紀に見えてゐる新字四十四卷と四十四音と關聯するものと考へ、またこの新字は釋紀にいふ肥人書であらうと推し、ムルタン語やフィリッピン語と共に悉曇摩多の面影を傳へてゐるとするのは根據があぶなかしい。

氏は昭和五年に日本語の根本的研究を出して、前著を實證しようとして、上代にも濁音存在説を執り、おもしろ草紙と古典とを對考して、記紀時代に e は既に ai から ei に移り、o は長呼の時期から既に短音に移つたとし、記にはや行の i が無く、紀には以の字を用ゐてゐるのは、音韻學上 i yi の區別を意識して使つたかは疑問であるといひ、あ行とや行の i エはこの時代に既に混化したとし、は行は古代は p 音であつたが、記紀時代には p から ph に進化したのであらうとし、わ行は記紀時代に既に v から w に轉じてゐたとし、ヲ・オは對立すべきでなくワはオよりも後世のものと斷じてある。以上の結論を作るに細かい統計を擧げてあるが、その資料の考察及び取扱が十分でないところがあり、主觀が加はり過ぎた點もある。

二十八 歴史的 研究（その三）

——室町時代の音韻・語法の研究——

室町時代の
語法資料

室町時代は我が國の語法に異常な變化を來し、近世語に近似する傾向を帶びてきたことは顯著なものである。その語法資料となるべきものは武家藝術に於ける能樂の詞章並びに民衆藝術の狂言記、五山の學僧及び儒家の人々の詩文・佛典の講義筆記である抄物、また天草その他に於て基督教徒によつて發行されたドチリナ・キリシタン、金句集や、平家物語・伊曾保物語の口語譯や南蠻人の撰んだ日本文典等が主要なものである。

中に抄物に關しこれを蒐集してその語法を始めて講じられたのは上田萬年博士である。後この方面の研究を遂げたのは湯澤幸吉郎及び九大の春日政治兩氏である。

湯澤幸吉郎
室町時代の
言語研究
抄物

湯澤氏は年代または著者の明かな八種の抄物につき歸納的にその語法を究め、昭和四年室町時代の言語研究を出版した。その抄物は

勅規桃源鈔

四

寛正三年八月

瑞林之東軒

論語抄

五

文明七年

天隱龍澤

史記鈔

二十

文明九年十二月

桃源瑞仙

古文眞寶之抄

十

大永五年九月

笑雲清三註

四河入楚

二十五

天文三年七月

笑雲清三撰

蒙求抄

十

清原常忠の孫抄

三體詩絕句鈔

六

鹽瀬宗和撰

中華若木詩鈔

三

如月壽印註

抄物に於ける語法

である。今日はこの外の抄物も大分發見されたが、當時にあつてはこれだけ見るのでも容易な事ではなかつた。この書には序説につぎて抄物の意味、抄物の解題、抄物の言語と當時の口語、抄物の假名遣と發音とを説き、各品詞より始め呼應・係結・修辭法・解釋・文・總括十九章に分ち、附録として動詞活用變遷表、狀態または推量の意を表す言方、抄物に於ける語の用法三章を加へてある。總括に

一、動詞・形容詞の活用の種類を減じたこと。

二、發音の關係から活用の行に變化を來したこと。

三、活用形は用言全體に通じてその終止連體が合一したこと。

四、命令形に新しい形の勢力を有して來たこと。

一、四段活用の連用形が音便現象を起すことの多くなつたこと。

二、二段活用の下一段の如く用ゐられた例の散見すること。

三、敬讓の動詞・助動詞に新しい語が重要な地位を占めるに至つたこと。

四、「サスル」・「ラル、」が佐變動詞に、「マイ」が一般動詞に屬し、時には平安朝式以外の形をも採ること。

五、形容詞の打消に「ナイ」、動詞及び動詞的活用の助動詞のそれに「ナンド」を盛んに用ゐること、及び動詞等に「イデ」を屬けること。

六、「ウズ」・「マラスル」・「ヤラウ」の如きが一の助動詞として普通に用ゐられること。

七、「まじ」・「べし」の活用形に「マイ」・「マジイ」・「ベイ」・「ベシイ」の如き一對の異なる形を生じたこと。

八、時を表す助動詞が減じて別に「タシ」「タケル」等の生じたること。

九、指定の助動詞「なり」は助詞的に變り來り、新たに「チャ」といふ形を見るに至つたこと、及び「デアル」とその系統の語が一語の如くなつて勢力を得たこと。

等を掲げ、解釋文には「ぞ」にて結める口語調のものと「なり」に結める文語式口語のものとの二種の別があることをいひ、解釋される語には「は」・「とは」また「云は」の語句を附することを説き、「更

姦ナルモノガ侵漁スルゾ」に於ける「吏ノ」如き、元來修飾されるべき語が却つて修飾語の地位に立つのは、國語に關係代名詞の缺乏に由ると説いてゐる。各品詞の條中にも

- (1) 代名詞の對稱に「ヲヌシ」の如き接頭辭を加へたもの。
- (2) なにがし等の代りに「ソソナウ、ソコニ」を用ゐること。
- (3) わ行下二段がや行に轉じたこと、「植ゆるなり」の如くなる類。
- (4) 命令「よ」の代りに「イ」を附ける。
- (5) 「おはする」の代りに「わする」が発生したこと。
- (6) 「あり居り」の代りに「おりやる」又「おりやある」を用ゐること。
- (7) 「參らする」の代りに「まらす」を用ゐること。
- (8) 「候」の代りに「さう」また「さうず」を用ゐること。
- (9) 「……さしむ」がまた「さしも」となつたこと。
- (10) 「たりける」が「たける」となつたこと。
- (11) 指定に「ぢや」を生じたこと。
- (12) 完了に「べし」の連合した「つべい」又「つべし」を生じたこと。
- (13) 「夥しい」の代りに「なんぼう」を用ゐること。

(14)「にてもあれ」の代りに「でまれ」又「でまり」を用ゐる。

等の如き新しい形が生じたことを一々例を示して抄物に於ける語法を明かにした。尤も抄物は當時に於ける謹義體のもので、室町時代に於ける一般の口語とは多少異つたところもあるであらう。

能樂の詞章
と狂言の詞

能樂の詞章の中、對話に屬する若干は世阿彌や音阿彌の作つたものもあるが、大體が古文古歌をつぎ合せて成つてゐるから、當時の口語の全形は見られない。狂言は當時の詞から成つてゐるが、家々により口誦される間に若干の異同を生じ、而もその文詞を筆録したのは大藏流の名匠虎明が寛永十九年に二百三番に綴つたのを始めとするから、徳川時代初期のものが雜つてゐて、篩分けることが容易でない。その最も正確と思はれるのは南蠻物である。

新村出博士
の南蠻研究

南蠻との交流を明かにされたのは新村出博士である。氏は夙く南蠻記をものされ、大正十三年に南蠻更紗を公にし、大正十四年に南蠻廣記・續南蠻廣記を公にされた。これらの書はこの方面に於ける世界の金字塔であつて、序文の一篇に「顧みるにわれ十年このかた夢魂なほ海のあなたに漂ひ、黒船に縁が盡くる期なく、紅毛に深き思つながり……更紗模様に憧れては、その語源を尋ねんと願ひ、さて又珍陀の古酒の酔こゝち嘖嘖の音にひかされて耶悉若の香をかぎつ……世この老ミニョンをいかに見けむ云々」の名文に引かれ、その博識と好文字とに我も同舟の榮を願はんと志すものも少くなかつたであらう。その廣記の第二典籍篇には室町時代の言語資料を細かに紹介されてゐる。文祿年間天草で出版され

伊曾保物語

天草本平家
物語

天草本平家
物語の語法

た洋字の平家物語や伊曾保物語が大英博物館に藏されてあることは一八八八年に出したアーネスト・サトウの日本耶蘇會士刊行書目に載せてある。新村氏は明治四十四年史學雜誌に委しくそれを紹介され、次いで伊曾保物語が單行された後、植松安氏が渡英、これをロートグラフとなして將來され、その後龜井孝高氏によつて邦字に譯して藝文誌上に連載されたが、ハビアンの天草本平家物語が昭和二年六月單行されるや、湯澤氏はこれにより同年十一月雜誌教育に平家物語の語法と題する一論文を寄せ、その要點を十數條に要約して、

- 一、動詞の活用の種類は減少の方向に向つたこと。
- 一、ハ・ヤ・ワ三行の下二段活用は嚴格に區別し得なくなつたこと。
- 一、活用は用言全體に通じてその終止連體が合一して減少したこと。
- 一、命令形に新しい形の勢力を有し來つたこと。
- 一、四段活用の連用形が音便現象を起すことが多くなつたこと。
- 一、敬讓の動詞・助動詞に新しい語が重要な地位を占むるに至つたこと。
- 一、形容詞の語尾は音便と稱せられるのがむしろ主位に立つたこと。
- 一、打消助動詞「なんだ」は盛んに使用されるといふ程ではないが、次第に動詞にも附く兆しを現したこと。

一、「まゝ」・「べし」の活用形に「まゝ」・「まゝし」・「まゝし」・「べし」・「べし」の如き一對の異なる形を生じたこと。

一、時を表す助動詞の減少したこと。

二、指定の助動詞「ぢや」の用ゐられたことが、一語の如くなつて勢力を得たこと。

二、助動詞の活用形が助詞的に變つたこと。

一、助詞の用法が次第に變つて來たこと。

一、係結法に於て普通の結と「ぞ」・「なん」・「や」・「か」の結びとの區別がなくなつたこと。

等を舉げた。

橋本進吉
古利支丹教
義の研究

音韻並びに
語法に關す
る研究

また天草版のドチリナ・キリシタン即ち切支丹教義に就いては昭和三年橋本進吉氏の研究が東洋文庫論叢第九篇として發表された。この書は文祿元年出版された天草耶蘇會學林刊行の羅馬字綴日本文切支丹教義を國字に改めた上に、本書の解説を始め初期の耶蘇會刊行書を舉げ、参考書及び參考論文を載せであり、原文が口語文でないから、當時の語法研究には寄與するところはさほどにもないが、用語に就きては精細な研究が盡されてあつて、發音に關しての研究は音韻史上に貢獻するところが多い。語法に關しては行下二段がや行に變り、わ行上一段がや行上二段に轉じ、「すば」・「なくば」の條件形が亡び、「すんば」・「なくんば」がこれに代り、「あらば」が「あるに於ては」となり、「行けども」が「行くとい

春日政治
文祿伊曾保
を中心とし
た語法

土井忠生
ロドリゲス
の日本文
典の研究

慶長頃の口
語法

明治大正國
語學書目解
說

へども」と變つた類の中古の語法と異なる點を述べてある。

春日政治氏は昭和三年新潮社の日本文學講座に「國語史上の一時期——文祿伊曾保を中心とした語法」と題し、Esopono fabulas を中心として前記の平家物語その他切支丹物語等をも資料として、桃山時代の音韻語法に關し説くところがあつた。

土井忠生氏はロドリゲス著日本文典 *Arte da lingua de japon* を譯して、その説を深く探究した。

明治書院發行の國語科學講座に「近古の國語」を執筆し、その序説に近古の時代は白河上皇の院政を御始め遊ばされた寛治元年から慶長八年に至る五百十數年間を包含するとの説に據つて、近古時代に於ける音韻語法を明かにすべしとの意見であるが、中に切支丹側の資料特にロドリゲスの文典を引くところが多い。紙數の關係から語彙には説き及ばなかつたが、首に當代の口語法研究資料を解説し、音韻篇には母韻の「エ」が單一母音の e ではなく、漸強重母韻の ye で發音され、「オ」が室町時代の末には o でなく、ワ行のヲと同一なる漸強重母音の wo であることを説き、更に鼻母音、子音と言節、拗音・長音・促音・撥音・連聲・語頭音につきて一々詳説し、品詞論に於てもその要を撮み、他の説を判して新たな例を引き、簡明に妥當に述べてある。僅々百十二頁の一冊子であるが、近古の語法の要點は粗くこれに悉された概がある。氏は尙岩波の日本文學講座にも明治大正國語學書目解説一冊を綴り、重要な語學書を綿密に解説して斯道に携はるものゝ憑據すべきところを示した。

氏は昭和九年京都帝國文學會二十五周年記念論文集に天草本金句集考を載せた。

吉田澄夫
天草版金句
集の研究

天草版の金句集や勸善鈔や落葉集等に就きては新村博士は明治の末つ方に夙くこれを紹介され、南蠻廣記にも載せてあるが、吉田澄夫氏は天草版金句集の研究を昭和十四年東洋文庫論叢第二十四篇として出した。これは本來語法を主とするものではないが、その研究上から表音法・單語・訓法等に就きて論考されたところがある。

以上によりて新村博士の夙くより蒐集提唱された南蠻物の音韻・語法が次第に研究されて來た一端を知ることが出来る。

二十九 歴史的研究所（その四—江戸時代）

山田正紀
江戸言葉の
研究

江戸時代に於ける語法は大槻博士の筆に成る國語調査會出版の口語法別記に大綱を示されてより後の學者は皆これに據るところを得た觀がある。その後單行のものとしては昭和十一年に山田正紀の著した江戸言葉の研究があり、これは江戸末期の言語研究の一部として式亭三馬の浮世風呂・浮世床を資料として、それにあらはれた語法上の諸現象について、歸納的態度を以て代名詞・動詞・形容詞・助詞に分ちて一般的に記述したものである。その資料を摘出したところに本書の價値が認められるが、多少の缺漏がある。東條操氏が帝大の卒業論文に十返舎の東海道膝栗毛の文語を取扱はれてから約三十年近くもなる。同じ頃の滑稽文學の語法がこゝにまた見られたのである。

同年に出た湯澤幸吉郎氏の徳川時代言語の研究は菊判六五〇頁の浩瀚なものである。これは言語誌の一篇として刊行されたもの。江戸時代といつても元祿期を中心としてある。その資料は種々の文獻に互つてゐるが、歌舞伎狂言本と淨瑠璃本とを多く引かれてある。室町時代の言語研究によつて斯界に甚大の寄與をされた氏がそれより一層現代に近い近世語に就いて豊富に諸文獻を引いてこの著をされた業績

補助動詞

デスの語史

は謝すべきである。補助動詞の一節を設けたのは體系上から見て面白い。丁寧語の「ござる」の發生に就き、氏は漢語の「御座」に「ある」の附いて成つたものとし、從來の如く「おはす」「います」に宛てた漢字を音讀して成つたとの世説に同じない。また「です」の起原に關し「デ候」から來たと説いてある。この「デス」につきては大槻博士や三矢博士等の説もあるが、中村通夫氏の「デス」の語史についての論文が近く昭和十一年三月の國語と國文學に載つてゐる。その要を掲げて見れば、「デス」の使用例を時代的並びに方處的に考へ、一々統計などもとつた上、その語原に關しても五説を掲げ、

一、「デアリマス」起原説（アストン説）

三、「デゴザイマス」起原説（口語法別記）

三、「デ爲」起原説（山田博士——日本口語法講義）

四、「テオワス」起原説（安田喜代門——高等國語法）

五、「デ候」起原説（狂言記のデス起源）

批判を加へてあるが、斷定はしてない。湯澤氏の著には今日の「デス」に當るものとして「でえす」「でえんす」「でんす」「でえいす」の諸形が擧げられてあるが、龜井孝氏は狂言記や醒醉笑などに見える「デス」は「デソウ」（で候ふ）から説くのが正しいであらうが、傳法胤な「デス」の類は「でやんす」「でやす」に結びつけ、その崩れて「デス」になつて一源説で通さない考を述べてゐる。かう

いふ風に細部に至ると未だ決しないものが少くない。

尙湯澤氏は昭和八年六月の國語と國文學に「敬讓助動詞『せ（させ）らる』の徳川期に於ける變遷と『やんす』『やす』の本源」と題する論文を掲げ、「せらる」・「させらるゝ」が一轉して「しやるゝ」・「さしやるゝ」となり、「やす」が「ます」から來たとの説を斥け、動詞の「ある」が「やる」となり、「やります」が「やりんす」を経て「やんす」となり、それから「やる」となつたと説いた。

國語學論考

また氏は從來種々の雜誌に載せられたものを集め、昭和十四年に國語學論考として八雲書林から發行した。「口語史料としての抄物」、天草本平家物語の語法は舊著に關するもの、その他の十八篇も近古以來の口語法の歴史的研究所の分野に屬するもので、

軍記物の命令形について

敬讓動詞の分類と狂言記に現れる語詞

狂言の「です」の起原

謡曲に現れる「候」

の諸篇の如きも室町時代の言語研究の補篇と見てよいものと思ふ。その他難語考十則や、「の」「が」を伴ふ句の一形式、口語の「マス」の起原から後奈良院御撰何會^{ナニノミ}のまでも説いてある。その他は多くは江戸時代の語法を収めてあるが、今一々詳説しない。

三十 比較的研究

日韓語の比較研究

明治二十七八年日清戦役の後國語の比較的研究が漸く盛んになつた。白鳥庫吉・幣原坦兩氏は東洋史上より、宮崎道三郎・中田薫兩氏は法制史上より、金澤庄三郎・岡倉由三郎兩氏は言語學上より、國語と朝鮮語との比較研究を進められた。始めの四氏は語原語釋の上に、後の二氏は語法の上に重要な研究發表をされた。

金澤庄三郎
片假名と吏道

金澤博士は朝鮮語の權威である。夙く明治三十五年の言語學誌上に「假字の起原に就きて」の一論文を掲げ、片假名と吏道の類似關係を説き、日鮮語は共にシラビクであるから、漢字を借用するに方り自ら生ずべきもので、夙く漢字を得た朝鮮にまづ吏道が發達し、尋いで我れにも片假名が起つたことを論じ、世の學者中假名と諺文との關係をいふものがあるが、吏道と諺文とは同じ系統のものでないことを明かにした。また三十七年帝國文學に古事記の一節に關する私疑と題する一論文を載せ、日韓兩國語は同系の語で、同音異義語が多く、語戲又語病に關して同一の現象があるといひ、帝國文學十週年記念號には延言考を載せ、韓語の我が國語に似てゐるのはその外形ばかりでなく、動詞・形容詞に於ても彼

日韓兩國語
は同系

延言考

我符合するところが多いとし、その關係を説き、加行延音の如きは國語活用 of 古體なる y 形や、波行延音は m 形の轉音なることを説いた。

氏の明治三十六年に公にされた日本文法論は、大槻博士の文典に比し著しい新味がある。文字論中、

動詞形容詞
一元論

係結法成立
の原因
「こそ」と韓
語の kos

し、次に動詞と形容詞とは、もと同一の活用をなしてゐたもので、良行變格がすべての動詞の原形であり、これと「得る」といふ動詞とはもと同一で自他の關係をもつてゐるとし、下二段は動詞爲の複合もしくはその類推より成り、上二段活用は下二段活用の類推より成り、上下一段は有りの複合である等新の說を立て、動詞の活用にはそれ自身で時を示すもので、終止は現在、連體は未來、已然は過去を示すといひ、枕詞は同音異義語を區別する爲に發生したことを韓語を引いて説明し、係結法はその成立の原因に關しては語句の例置に由るとし、「ぞ」も「こそ」もとは同一で、韓語の事また物の義なる kos と同じく、「ぞ」は「こそ」の上略の爲に濁音となつたもので、古くはその結が同一であつたといひ、日韓兩國語の動詞・形容詞の連體法には共に未來の意があり、助詞「や」、「か」の例置せられて係となるときは、その語勢が強くして未來の意を一層深めるが故に、その下には未來形をもつてゐる動詞・形容詞の連體法を以て結びとなすと説いてゐる。連體形に未來があるとの説は一寸受入れがたいが、兎に角

新説に富んでゐる。

日鮮文字に於ける梵語の影響

日韓國語同系論

氏は明治四十年に日鮮文字に於ける梵語の影響 (Über den Einfluss des Sanskrits auf das Japanische und Koreanische Schriftsystem) を發表し、假名と吏道との干係を説き、神代文字を否定し、四十三年一月には日韓國語同系論を發表した。前著にも論じたところもあるが、これは銘をうつた邦人の手に成る日鮮語の比較文法論の始めをなすものである。英國公使館書記官アストンが一八七九年の東洋協會誌上に載せた A Comparative Study of the Japanese and Korean Languages に啓發されるところが少くない。氏は更に研究を重ね、組織を整へ、彼我の間に類似してゐる幾多の事實をつかみ、同系論の體系を一層確立させようと努めた。日鮮融合の上からも考へられたのであらう。序説の卷頭に韓國の言語は我が大日本帝國の言語と同一系統に屬せるものにして、我が國語の一分派たるに過ぎざること恰も琉球方言の我國語におけると同様の關係にあるものとす。

音韻の相互關係

性と數とを示す法式

「いも」・「せ」と韓語の sn 又 ann

と述べ、音韻の上に語法の上に類似點を示してゐられる。まづ音韻につきて相互の關係は、朝鮮語の h 音は國語では k 音となり、p 音は國語では h 音となる。また「タ」・「ナ」・「ラ」等の共通すること、日鮮語共に r 音を語頭にとらぬことを説き、語法に於ては用言に最も力を盡し、體言に於ては名詞の性と數を示すに特別の形式がなくて、性には國語の「いも」・「せ」に對し朝鮮語には sn また ann を冠らせて男女を分ち、數に於ては同語を繰返すか、國語の「だち」・「どち」に對しては接尾辭 deur を加へ

有りとい
の干係

ることを説き、用言に於ては動詞・形容詞が名詞法や副詞法を作るに延言考や形容詞考（教育學術界十・四）に説いてあるやうに、彼我相同じく又相通するものがあることを詳説し、我が存在動詞の「あり」が動詞活用上に種々の働きをもつやうに、朝鮮語には「が」が同様の働きをもつことより、敬語法や自他・受身・使役・否定等に就きてもそれ／＼説くところがあり、助詞に於ても主格を示す「い」、領格を示す「つ」、詠歎の「か」・「かな」・「ろかも」、疑問の「や」・「か」、反對接續の「と」・「ど」に至るまで合致するところがあるとし、文章法上語句排列の順序が類似近接してゐて同系であることを説いてある。この比較研究の上に大きな礎石を置いたことは多とすべきである。尤も朝鮮語には古文獻が少いので、我が古代語と近代の朝鮮語とを比較したり、語法上に於ても同を認めて異を捨て、顧みなかつた事など指摘されることが無いでもない。

國語の研究

氏は同年十二月國語の研究を出した。この書はその研究に成る新舊の論文三十四篇を收めたものであつて、國語と近接せる鮮滿蒙古乃至アイヌ語・琉球語・方言の研究を促進することを高唱してあるが、特に朝鮮語と國語との比較研究に關するものが多數を占めてゐて、日韓語同系論の羽翼として楠篇として差支へないものと思はれる。（一）「國語學に對する予の希望」並びに（二）「韓語研究の急務」に於てもその旨趣が十分に發揮されてゐる。（一）の中には内外人の朝鮮語研究小史を叙してある。既に述べた「假字の起源」・「延言考」・「形容詞考」などもこの中に收めてある。國語の語原を朝鮮語で説いた論

數島考

比較的研究

寧樂考

郡村の語原

文も少くない。敷島考では彼我共に都城または住所などの義を持つ普通名詞であり、寧樂考では寧樂の朝鮮字音によりナガラキを以て奈良の古名と断定し、「郡村の語原に就いて」には、村は朝鮮語 *Pin*、郡は大村であるといひ、「日韓の古地名に就いて」には日鮮兩國の古き地名中に含まれる「キ」・「シキ」は共に都城を意味するといひ、「家族の稱呼に關する二三の考」・「耳目鼻口」等も皆朝鮮語を以て國語の語源を説く旁證としてある。その他「日韓滿蒙語の研究に就いて」・「沖繩方言研究の必要」・「アイヌ語研究」の如き論もあり、それ／＼比較してある。その所説斬新にして世人を驚かすものが少くないが、文獻的の考查や時代的の考察の十全ならざるが爲に人をして直ちに首肯せしめがたいものがある。

日本文法新論

文法文字の發達

片假名と吏道

日鮮語の音韻の比較

氏は大正元年また日本文法新論を著し、我が語法を經とし、朝鮮語を緯として前の諸著に基いて獨創の見を發表した。文法の起原は希臘に於てはホーマーの文集研究の必要より、印度に於ては *Pañier* の文法は吠陀文學の研究より端を發したことより説き起し、各國文字の成立を述べ、我が萬葉假名は朝鮮の吏道に比し我が宣命書と一致することを述べ、片假名は吏道の略體と相類し、漢字の偏旁省略は朝鮮の半字法の一層發達を遂げたものとし、五十音はデヴァナガリの排列に由つたもので諺文もこれに同じとし、音韻につきても朝鮮語と琉球語とを比較して母韻中後出の「え」・「お」は琉球語には缺け、朝鮮語に於ては *ö i* の二つは今も存しないことを説き、*n t r* の三音は互ひに相通すること多く、琉球語には特にこれが等しく、*ng* の音は國語に於ても古くより存して常に綴頭にのみ立ち、朝鮮語には綴尾にのみ

代名詞を避
けて用ゐる
傾向

存し、國語のk音は朝鮮語には三つに區別することを説き、音韻の相關を説き、品詞論中、代名詞は近古以來なるべく之を避ける傾向のあることは日鮮共に同じく、アイヌは幾度も繰返す差があるといひ、副詞の末にある「ら」「ろ」の類は我にありて古く用ゐた接尾辭であるが、朝鮮語に於ては今も多く使用せられることを述べ、動詞中「有」「得」とはもと同一であつたが、自他の關係を示す爲に生じたことを朝鮮語や八重山方言で證據を立て、動詞が名詞となるには「思ひ」「思はく」に於けるが如くikの二種あり、動詞及び形容詞が副詞形となるには前者はi、後者はkの語尾に限るが、朝鮮語は名詞も副詞もおしなべてikを以て形成することを述べ、國語に於ける動詞の終止形が悉くuの音で終り、已然形がeで終るのは、前者は「有る」の省略で、後者は「得る」の複合したものであらうといひ、連體形は朝鮮語の未來連體形にeの語尾を有し、沖縄方言には一切の連體形は悉く「る」の語尾を有するを徴とし、我が國語に於ても本來はすべて「る」の語尾を有してゐたのであらうと假定説を立て、動詞の行延言説を一蹴し、か行の古活用に残つてゐると斷じてゐる。

形容詞く活
はしく活よ
り分生す

所相が勢相
とかはる

また形容詞の活用も古形は「しく」活で、「く」活は四段動詞から下二段動詞が分生したやうに「しく」活から分生したものであらうと朝鮮語や琉球方言を引いて假定説を立てゝある。助動詞は有・爲・見の少數の動詞が縱横無盡に活用して生じたもので、中に所相は朝鮮語と同じく多く用ゐられないといひ、國語にては所相轉じて勢相となり、朝鮮語は所相が勢相にも使役相にもなるといひ、勢相及び使役

否定の古形

朝鮮語の助詞の關係

相が一面には敬相に用ゐられることは日鮮相通するものがあるといひ、否定の古形はもとは副詞を以てしたもので、動詞の前に置いたが、朝鮮語では今でも *ani* を前に置き、指定の「なり」「たり」の根をなす「に」「と」には前者には經過、後者には假定現存の意があること、半過去の「ぬ」「つ」と關係があらうといひ、助詞に就いても朝鮮語に比し新説を立てゝある。我が「は」は朝鮮語では *pa* で「もの」又「こと」の義、「だに」は *tan* に似てゐる、「むた」は「及ぶ」の意なる *mit* に相當するなどと説き、係結にも *na* の係があり、未來の「ら」の連體形 *ra* で受けるのは相似てゐる。中に直ちに首肯出來ないものもあるが、比較研究から新説が立てられたのである。但し朝鮮語が果して我が姉妹語であるかは疑問である。白鳥博士の如き始め日鮮語同系説であつたが、敬詞の性質等から考へて姉妹語と見做さないのである。沖繩語は同系のものであるが、アイヌは別な語系であるから、比較の基礎を同じくしないのである。

小倉進平
國語及朝鮮語のため
日鮮語の一般的研究

朝鮮語の權威小倉進平氏は國語及び朝鮮語に關する論文三十篇を集め、大正九年「國語及朝鮮語のため」と題し一書を刊行した。初に言語の系統的分類、次に言語の形態的分類、次に國語及び朝鮮語の系統、我が帝國內の言語の四篇を擧げて國語及び朝鮮語が共に添着語に屬し、系統上ウラル・アルタイ語派の特質を具してゐることを音韻並びに文法に互りて證例を示し、我が帝國內の言語は國威の宣揚につれてウラル・アルタイ語族、單綴語族及びマライ・ポリネシア語族を包有してゐることを説いた。但し

氏は金澤博士の如く日鮮語は姉妹語であることは別に述べない。その相互關係も慎重の態度を取り、筆を止めてある。

以上の一般論に亞いで日鮮語に關する特殊研究を論ぜるもの等十數篇がある。即ち

朝鮮で學習せられた外國語

日本の朝鮮語學と朝鮮の日本語學

日本の朝鮮語學者と朝鮮の日本語學者

兩森芳洲の朝鮮語學

國語朝鮮語の語彙比較研究資料

國語字音と朝鮮字音との比較

漢吳唐音及朝鮮語の字音

漢字漢文の訓讀

國語及び朝鮮語に於ける重箱讀と湯桶讀

對島方言と朝鮮語との交渉

濟州島の方言と傳説

萬葉假名と吏讀・吐

比較的研究

漢字略體の吐と片假名

神代文字と諺文 和字と鮮字

外來語

のやうに、その他「國語に入つた葡萄牙語」、「國語に入つた西班牙語」、「國語に入つた和蘭語」の諸篇から「標準語と方言」、「文語と口語」、「假名遣、國字、國語問題及諺文研究」等の啓蒙的なものを交へてある。氏はつゝまじやかな態度で、日鮮に共通な語彙・音韻・文字上の事實を提示するに止め、相互關係を毅然と斷定することを避けた。さうして今後に進めらるべき堅實な研究への參考資料を提供することを勧められたことを多とすべきである。

日韓正宗溯源

濱名寛祐（祖光は僧籍の稱）が大正十五年に出版した日韓正宗溯源には滿洲某寺にて得た珍奇な古文書を以て古の契丹文字となし、その研究に基きて、日韓古語の同一を考へ、日韓古地名の相通等を説き、更に宗教的の觀念の一致から我が神話と大陸神話の共通を證して人種關係までも解かうとしてゐる。氏は本來の語學家でないが、彼我の一致相似を信ずること篤かつた一宗教家である。氏は昭和十一年に東大古族言語史鑑を著して相互の關係を證せんと企てた。

東大古族言語史鑑

坪井九馬三

我が國民國語の曙

坪井九馬三博士は史學の先進であるが、晩年に至り我が人種問題及び原始語に就きて考究し、昭和二年「我が國民國語の曙」と題する一書を公にした。この書は大正十年より昭和二年に至る五年間に學會に於ける講演筆記又は雜誌に載せた論文十一篇に新考四篇を加へたものといふ。項を「倭人考」、「太古

國語をモンクメール語に比す

松岡靜雄

チャモロ語の研究

ミクロネシア語の綜合研究

に於ける九州・四國・中國・紀伊・大和」、「熊襲考」、「太古人民のくらし」、「太平洋方面より出でたる國民の分子」、「三韓考」、「三韓地名考」、「韓語の數詞」、「身體各部を謂ふ韓語」、「チャム民族の土俗」、「印度並に南方部族の間に行はるゝ太陽崇拜」等に項を分ち、我が國民は

一、前印度モンクメール系（倭人）

二、前印度チャム系（筑紫派）

三、ツングース・カラ系（出雲派）

四、ツングース・ウスリー系（吾田派）

の四種より成り、我が太古の言語はモンクメール語と見做し、相互の語を比較して立説した。併しその問題はあまりに博大にして吾等の容易く首肯するに難いが、比較研究の一書として見るべきである。

瓜哇史や太平洋民族誌を公にしてゐた海軍々人松岡靜雄氏は、大正十五年我が南洋廳管下のミクロネシア叢島中、マリアナ群島に居住するチャモロ人の言語について、チャモロ語の研究といふ一冊子を出したが、爾來それら南洋語の研究が我が日本語の成立に關係するところが極めて深く、延いては日本民族の發生、文化の起原等の研究に資するところ重大なるものがあるとし、昭和五年以來はその周圍語族との比較研究をも試み、終に昭和十一年ミクロネシア語の綜合研究を完成して翌年歿した。同十二年その一周忌に方り記念出版として公にされた。

國語に及ぼした南方語の影響

語序の排列

語音の性質上の類似

「ガ」と「ノ」は同源から分化

この書の附録に載せた國語に及ぼしたる南方語の影響は比較研究史上逸すべからざるものがある。氏はこれを語排列序次、語音、接合分子、活用語尾、助動詞、助詞、代名詞、單語の八項に分ち、一々比較研究を試み、語序の排列は大體に於ては彼我全く相異つてゐるが、語音と單語との間には密接の關係があり、全然無關係と見ることは出来ない。例へば語音に就きていへば、國語の母韻中、エ母韻及びこの列の語音で始まる語は極めて少く、オ母韻及びその列の語音は古くより相當用ゐられてゐるが、尙動詞の語尾活用はあづかつてゐない。是等は蒙古語・朝鮮語・沖縄語に比べて見て粗く同様であるから、國語の母韻もヤマト語成立以前にはア・イ・ウの三音だけであつたと推すべく、南方語ではe及びoで始まる單語が多い點から見て、これを南方から將來したとも考へられるとし、またヤマト語は東部アルタイ語と同じく語頭にラ行音を用ゐぬことを特色とするが、國語には語中及び語尾にこれを有するものが極めて多い。これは南方語に起原をもつもので、助動詞「有り」及び接尾語分子「ラ」から出てゐる。國語に於ける濁音は漢字音を除くの外、音便のみに現れるのを例とするに、打消の「ジ」・「ズ」があり、この「ジ」・「ズ」から濁をとると、「シ」・「ス」となり、これを動詞の未來形に連ねると、上代に於ける敬語的表現と紛れるから、意識して濁音を用ゐたものと考へねばならぬ。この打消はインドネシア語の「タ」と同源で、ミクロネシアでは「ダ」と濁り、これに動詞語尾「ア」を連ね、更に摩擦音化して用ゐられる。これが我が國に轉入されたことは疑はない。また助詞「ガ」は「ノ」と同源から分

化したもので、目ナ尻・手ナ底等の「ナ」を原形として $no \rightarrow na \rightarrow nga \rightarrow ga$ と變遷したもので、これも南方系である。また國語には閉音節がない。これも南方人の影響を受けて終止音を省くやうになつたであらうなどと説いてある。

その他に於ても可成り注意深く比較し、また類似の單語を挙げ、相互の間に偶合以上の本質的親縁は發見される。これは同一言語を用ゐた民衆が長い〳〵歳月の間に四方に分散し、先住民又は後日の渡來者の言語と融合して各自獨特の言語を構成したものと推斷すべく、國語が大體ウラル・アルタイ語系に屬しながら、大きな異色を有するは南方系の混入の結果であらうとし、その轉入の經路變遷の様式を明かにしようと努力したのである。令人や村主の古語「トネリ」・「スグリ」の「リ」が、ボナベ語の人を「リ」といふと比較した點などを新しい發見として吾人を驚かすのである。併しこの比較は尙攷究せらるべき大問題である。

三十一 漢字の研究

後藤朝太郎
漢字音の研究

漢字制限説の由來は尙しいものであるが、國語調査會の設立後やうやく盛んなるにつれて、また一方には漢字研究が次第に起つて來た。中に後藤朝太郎氏は夙く明治四十二年に漢字音の研究といふ一書を六合館より出し、第一篇には漢字の觀かたより始め、字形・字音・音符を説き、字音の轉換には十ヶの法則が存してゐることを説いた。例へば語頭に於ては谷から俗、次に浴といふ如く、KからS・Yに移つてゆくKSYの方則以下、忽から物といふ如くKMの方則に至る七條と、語尾に於ては、キ・ク・ツ・チの語尾音の入聲が次第に消滅してゆく法則以下三條を説き、次に音の側より觀たる字形誤謬の發見に及び、第二篇には字音系統表を擧げて漢字に對する新しい觀方を發表した。

字音系統表
文字の研究

翌年氏は更に文字の研究といふ一書を成美堂より出した。自序に「著者開拓の方面は支那音韻史上より漢字の荒野を切り開かん。」と言つてゐる。羅振玉の如き支那隨一の金石學者が字形に就いて説を立てゝゐるに對し、氏は支那の音韻を明かにしようとする自任してゐた。從來の如く説文の小篆、玉篇の反切、爾雅の古訓などを以て、今日文字三方面の満足な解決を見ることは到底出來ない、宜しく根本的の觀察を

説文・爾雅
等によらな
いで籀・隸
字より

暹羅・支那
兩國語の比
較
音韻・文字
言語に關す
る參考資料

文字の沿革

漢字研究
漢字の形音
義

高田竹山
朝陽閣字鑑
漢字詳解

試みねばならぬとし、「字形の源が埃及とかアッシリアとかの西方から來たといふ類の捏造説は吾人の斷じて取らざるところ、吾人は寧ろ徐ろに夏・殷・周三代の古銅器鐘鼎古文の特色を究めて以て漢字本流の沿革を辿り、尙その音の沿革について別に古今の支那語並に支那同族語の比較上より之を推定する方法を取つた。」といひ、その一着手として「暹羅支那兩國語の比較」を試みた。而して文字論二十章、音韻論十七章、言語論十九章の外、附録には支那の文字・音韻・言語に關する參考資料を載せてある。文字篇には説文より入りて説文を超越し、新たに文字學を建てようとし、音韻篇には音韻の歴史的沿革を説き、字音轉換の法則十一條を立てた。中には雜誌に載せた常識的の論文も交つてゐるが、とにかく新味のあるものである。

その後氏は大正十五年に文字の沿革を日本大學から出した。章を文字の始めより應用文字學の範圍に至る三十一に分けて説いた。世界三大文字の起原から漢字の整理案なども説いてある。序論には支那の現代社會に行はれてゐる新字に就いての所見も叙してあるが、我が文字史に關係がないから爰には説かない。氏と前後して安達常正氏の漢字研究が明治四十二年に、その後岡井慎吾氏の漢字の形音義は大正五年に出た。安達氏のは普通教育の上から見たものである。

漢字の説文的研究を志してゐたのは高田竹山氏である。氏は本名忠周、夙く印刷局にあつて、明治三十四年印刷局より朝陽閣字鑑を出し、明治四十二年より大正元年に互り漢字詳解六卷を出した。卷一は

漢字系譜講義、卷二以下が本文で、末に索引・漢字系譜・訂正說文聲讀表を添へてある。漢字の根本となるもの六十四形、その轉變五百六十二と定めてその關係を説く。各字の部には說文を引き、段玉裁・桂馥・玉筠等の說を夾み、轉義借用に於ては専ら朱駿聲の通訓定聲に據つた。漢字を扱ふものにとりてよき指針を與へた一書である。

古 籀 篇

氏は明治十八年以來三十五年の間に互りて古文字の研究を重ねて古籀篇百十七卷を著した。大正八年帝國學士院賞を受け、やがてその刊行會が組織された。首卷一、本文百、補遺二、轉註假借說一、篆文索引六、隸文索引二、學古發凡六卷、彙に出した字鑑と說を異にするものもある。中に學古發凡是増補して別に刊行された。字原七十一則、文字變易三十二則、文法四十六則、書法四十四則、經三十五則、史七十三則、禮樂百十則、動植四十一則、計四百五十一則、聽くべき說が少くない。

補正朝陽閣
字鑑

氏は大正十四年舊著に手を加へて補正朝陽閣字鑑三十六卷を出し、三代以下鐘鼎彝器款識拓本、石鼓文、古印影本、繹山碑、琅邪刻石、會稽碑篆業等の拓本から博古圖考、古閩金石文字、金石索、淳化閣帖、金石萃篇、古籀補、金石摘等に互りその資料を索め、附録には說文字源等を載せてある。舊稿を訂したと四百八十二條に及ぶ。氏の事業は國語學史上には直接關係が疎いけれども、漢字の研究としては日支の學者の據となすべきものが多い。

滿田新造

支那古韻につきては大矢透氏・大島正健氏があり、また滿田新造氏がある。滿田氏は福島の人、明治

支那音韻斷

古韻研究に
關し清朝學
者の異說を
批判す

三十二年東京を出で、爾來支那の音韻を研究し、大正四年支那音韻斷を著す。この書は僅々百三十頁の小冊子であるが、明治三十三年以後の研究を要約したもので、創見がある。第一部を字母、第二部を韻とし、一部を三章、二部を六編十五章に分け、まづ字母三十六の區別を説き、韻鏡以後の字母分類を擧げ、韻の發音變化には先秦・漢唐・宋元以後の三期があり、漢唐を更に漢魏・晉・南北朝・唐の四小期に分ち、古詩の押韻、翻譯佛典及び我が邦並びに朝鮮の古籍に見えてゐる資料によりその變遷の跡を明かにしようとして企てゝゐる。中に古韻研究の沿革を叙して清代學者の異說を批判したり、韻鏡につきては太田全齋の説を是正しようとして企てたところもある。大正十一年漢字音の歴史的研究により學位を得たが、惜しいかな、病に臥し、大著を出さないで世を夙くした。

岡井愼吾

玉篇の研究

岡井愼吾氏は玉篇の研究に志すこと多年、これによりて學位を得た。その論文に刪補を加へ、昭和八年東洋文庫論叢第十九として玉篇の研究を出した。この書は前後兩篇より成り、前篇は玉篇考であつて、その源流と變遷とを叙し、後篇はその逸文を蒐集したるもので、顧野王之事蹟を探り、彼邦では夙く佚して我が國に遺り、我に於てはゴクヘンといへば字書の代名詞になつてゐることを説き、現存せる原本を擧げてその書の體貌を説き、顧氏の撰にあらざる諸本を擧げて倭玉篇にも説き及ぼし、逸文中には顧氏の原本と思はれるもの、それと趣を異にしてゐるものに説き及んでゐる。上田・橋本兩氏の節用集の研究と並びて古字書の研究として名ある力作である。中に龜田次郎氏の玉篇考の功をたゞへてゐる。

日本漢字學史

氏は翌年日本漢字學史を著し、上世・中世・近世三篇に分ちて漢字に關する書史を叙した。字典史・音韻史に關すること等より文字に關する種々の方面に就きて述べてある。中に語學史の資料となるものも少くない。

武内義雄
支那文字學

以上の外武内義雄氏は岩波の日本文學講座に支那文字學を出して、文字の形につきては字形の變遷、文字の構造を説き、文字の音に於ては音韻關係の文獻、音韻の變遷、古韻の研究を、文字の義につきては本義と轉注義と假借義とを明かにした。

漢語と國語
漢字の研究

岡井氏は明治書院の國語科學講座に漢語と國語及び漢字の研究を書いた。後の方は文字としての研究を前篇とし、支那語の特質と漢字より漢字の形音義を説き、後篇には形音義の我が邦に於ける研究を叙してある。

大島正健

支那古韻考

支那古韻史

漢字の音に關し數十年間心血を濺いだ一人に大島正健氏がある。氏は神奈川の人、札幌農學校の出身で、さきに音韻漫錄などを著したことは述べた。明治三十一年支那古韻考を著したが、當時はまだ顧炎武の音學五書や江永の古韻標準や段玉裁の六書音均表などを見ない時代のもので、夙く絶版となつたのを氏自らは却つて喜び、更に古韻の變遷及び古韻の發聲を稿してこれを併せて支那古韻史と題し、昭和四年に印刷に附した。これは後に氏の學位論文となつたものである。氏は先秦時代の古韻を有尾・無尾十部に分ち、これを喉韻・舌韻・唇韻の三類に攝し、王念孫の説を奉じながら、その二十一部説をとら

改訂韻鏡
新解

漢音吳音の
研究

大矢氏の周
代古音考を
評す

なかつた。また明治の末年に韻鏡音韻考を著し、韻鏡を改定して改訂韻鏡を著し、張麟之の指微韻鏡には唐代音韻の法則に合はない宋音の混入と誤寫の痕跡があるから、廣韻唐韻と鄭樵の七音略韻鑑とを參照して改訂韻鏡を作り、大正十五年には韻鏡新解二冊を出した。その前編には七音三十六字母考、内轉外轉の解、開轉合轉の解、等韻直掬の説、二百六韻考を説き、後編には更にこれを細説し、また別に韻鏡と唐韻廣韻の一冊子を著して、七音略韻略は唐韻に基き、指微韻鏡は廣韻に基きて作られたもの、陸方言の切韻の編纂者中には南人の參與したものもあつて絶對に北音のみに據つたものでない、併し陸韻を繼承した唐韻廣韻時代には南北の兩音は劃然として別れてゐたが、韻鏡はその間に介在してゐた一種の方音に據つたものかといひ、昭和六年には漢音吳音の研究を出して漢音・吳音の由來を説き、我が萬葉假名に吳音の名を附するは謂れなきことと云ひ、詩と楚辭の韻法とを考査するに、各自特徴があつたとしても南北の兩音は近似してゐて、後世の如く懸隔はなかつた。支那の南朝と直接に交通するに及んで入來つた字音は眞の吳音は漢魏音と吳地在來の音と混化したものといひ、韻鏡と古事記・日本紀・萬葉集の字音との干係を説き、全齋の漢吳音圖を評して韻鏡により系統を異にせる漢吳音圖の説明を試みたり、またこれに原音・次音の假設を設けたことを非とし、影喻兩母に關する奇説の如きは全くの臆斷であると指摘して、昭和八年には漢字の音變化を著した。

これより先大矢透氏は周代古音考^{大正三年}及び韻鏡考^{大正十三年}の二名著を出した。大矢氏は片假名の「ツ」は

先秦時代に「ツン」の音を有してゐた川の字より來るとの新説に對し、大島氏はこれを否定した。その説は漢字の音變化に附録として載せてある。兩氏の説は更に對照檢討すべきであらう。

三十二 大正昭和期に於ける辭書

日本大辭林
ことばの泉

明治の末期から大正昭和にかけて國語辭書出版の狀況を調べて見ると、三十一年から二年に互りて出版された落合直文のことばの泉は、嗣子直幸の名によつて四十一年に大増補日本大辭林ことばの泉となり、更に増補一卷を加へ、語數五萬を増加した。

訂校言 泉

その第二次の増訂は芳賀矢一博士の監修の下に行はれ、大體の體裁方針は前書を踏襲されたものゝ全般に改修を加へ、大いに面目を新たにし、題簽も訂校言泉として大正十一年その第一巻を出し、昭和四年十二月に至り全部六冊完結した。語彙は政治・宗教・哲學・醫學より自然科學に及び、固有名詞をも網羅したれば、語數も十萬を加へ、前著を合すれば二十六七萬に上るべく、引例も近世語に及び、その出典を示し、外來語には原語を添へ、挿繪も取捨選擇を加へて索引も畫引の外に發音引を附するなど一般の便益を謀つてある。

松井簡治
大日本國語
辭典

三十又餘年國語辭書に心血を凝がれた松井簡治氏は上田萬年博士と共に大日本國語辭典を著して大正四年十月第一巻を出した。大正七年十二月には第四巻を完了し、昭和三年十月索引一卷を添へられた。

諸書の索引

固有名詞を取らず、解釋の下しがたい語は捨てられたと聞いてゐるが、語數二十餘萬に上つてゐ、成句俚諺も包容して、從來出た國語辭書として學的内容と價值とを以て優つてゐる。缺と餽とで拵へた字書とは異り、引例は孫引を避けて一々原據を正し、解釋も要を得、數説あるものはまづ適當と見做すものを擧げ、次に異説を掲げて參考に供してあり、世の辭書を作るものはいづれもこの書を據りどころとしないものはない。實に學問的良心を以て成されたものである。氏はこの大著をなす爲に夙く明治二十五年頃より參考圖書の蒐集涉獵につとめられたことが六年、それよりは高田與清・岸本由豆流の企てた索引などに倣つて諸書の索引を作る爲に五年の歲月を費し、三十六年より編纂を開始し、正二年に粗稿を了へて刊行にかゝられたものといふ。その用意準備だけでも頭の下るものがある。國語史の發達しない當時の事であるから、特別な語の起原・滅亡などを明示されるには至らないものもあるけれども、それは何人でも容易に出来ないことである。爾來修訂に一身を委ねてゐられること八年、近く修訂版の出ると聞くのは日頃惠澤を被つてゐる吾れも人も大いに欣びとするところである。

上田博士は夙く明治二十二年東洋學會に於て「日本大辭典編纂に就きて」講演されたことがあり、その速記は「國語のため」の附録に載つてゐて辭書家の參考となつてゐる。

橋本進吉氏は上田博士と共に大正五年三月古本節用集の研究を東大文科大學紀要第二として世に公にされた。室町以降通俗字書として普及してゐた節用集に就いては黒川春村の節用集考があるばかりであ

上田萬年
日本大辭典
編纂に就きて

古本節用集
の研究

本邦辭典史

その内容

伊勢本・印度本・乾本の前後

黒川春村の節用集考

大槻文彦の言海

つたが、著者は更に諸本の異同を校へ、その源委を究め、詳密な書誌學的研究から辭書としての價值を明示するにつとめたもので、一面より見れば、本邦辭典史と見るべき名著である。篇を六章に分ち、第一章には研究の目的及び範圍を述べ、第二章には古本節用集解題、第三章には諸本の系統的關係、第四章には節用集の著作年代及び名義、第五章には我が國の辭書と節用集、第六章寛永以後の節用集に就いて説いたものであつて、その矚目した二十八本の寫本・刊本の書誌的研究を進め、これを印度本・伊勢本・乾本の三大別として部類別の部門の異同により十類に分ち、伊勢本は最も古く、印度本はそれより出で、乾本はまた印度本から出たとの結論も慎重な態度で定めてあり、その著作年代は下學集と比較對照してそれより後のものとし、文安元年より文明六年までの間に成つたと斷じ、且平安朝以前の辭書と鎌倉室町時代の辭書を系統を立てゝその沿革を叙し、この書は聚分韻略などを粉本とし、その韻字によりて分ち、更にこれを門別にしてあつたのを少しく改めて伊呂波分としたものと説いてあるあたり、麻姑をつかつて痒きを搔くの感じがある。尙黒川氏の節用集考を附録に收め、この類の研究には一語々々を扱ふ外に今後人の手を煩すべきものがないかと思はれる。

大槻博士の言海は出色のもので、一時は辭書界の王座を占め、世に普く行はれ、讀書子操觚者流のその惠澤を被るものが少くなかつたが、收めてある語彙はさまで多くないのと時世の進運とはこれが改訂を促すこととなり、著者は四十五年より着手し、十閏年にして阿加佐三行を了へた頃病にかかり、昭和

廣辭苑
特殊辭書

三年二月八十二歳の高齡を以て歿したので、爾後關根正直・新村出兩博士監修の下に大久保初雄氏等事に當り昭和七年第一卷を刊行し、同十年九月に至り全部四卷を刊行した。所謂大言海はそれである。引例出典は上田・松井兩博士の大日本國語大辭典に負ふところがある。語原の究明に關しては他に秀でてゐる。博士が語原の探究に熱心であつたことは大正八年の筆に成る「本書編纂に當りて」の一篇を繰讀すれば分ると想ふ。但し後半には收録語數が比較的多くない。また外國の辭書は多くの人の手に成るのが普通であるが、大槻博士は一人でその大業を完成されようとしたので、語原なども多正の改訂を加ふべきものがないでもない。不日新村博士の如き博洽の方が是正されたならば完いものとなるであらう。金澤庄三郎博士の辭林（大正十一年）、新村博士の辭苑は手頃の本で廣く學生間等に用ゐられてゐる。次には國語に關する特殊辭書に就いて少しく述べておく。

能樂大辭典 正田章次郎 明治四十二年

山本富澤新撰俳諧辭典

諺語大辭典 藤井乙男 同 四十三年

日本外來語辭典 上田萬年外四氏 大正四年

萬葉集辭典 折口信夫 大正八年

日本古語大辭典 松岡靜雄 昭和四年

語誌篇と訓詁篇

枕詞の研究と釋義 福井久藏 昭和二年

元祿文學辭典 佐藤鶴吉 昭和三年

近松語彙 樋口慶千代 昭和五年

有職故實辭典 加藤貞次郎 昭和六年

日本文學大辭典 藤村作 昭和七年

諺語大辭典

中に諺語大辭典は諺を主とし、故事・俗傳・地口・謎・隱語・俳語・異名等三萬餘を五十音順に列ね、釋義を下し、索引を加へてある。參考用としては

毛吹草 吾吟我集 世話盡 世話支那草 本朝世諺俗談 漢語大和故事 野語述說 諺草

和漢故事要言 和漢古諺 本朝俚諺 世說故事苑 和歌民のかまど 普内俗談 諺百首和歌

淺瀬のしるべ 俚諺集覽

等を用ゐたとある。この類の著としては最も權威あるもの。

元祿文學辭典

元祿文學辭典は元祿時代の句ある語彙を主として西鶴の俳諧及び小説と近松のおもなる作品よりぬいたもので、語の外に連語・句・故事・俚言等をも採つてある。その總數一萬二千二百有餘、語釋には尙研究の餘地はあるか、西鶴物は解し易くない語彙が少くないにこゝに指を染めた功は認めねばならぬ。

大正昭和期に於ける辭書

近松語彙は近松の語彙の中疑義あるものを撰みて解釋したもので、その附録として典據・地名・人名解説や古代法や經濟や動植物・礦物・色彩・病名・藥名・藥草の名彙や、巢林子略歴と著作物、巢林子時代の略年表、近松研究資料、檢出しがたきものゝ索引を添へてあつて、近松研究には座右におくべきものである。但し語彙は盡されてないことは勿論なりとする。

松岡靜雄
日本古語大
辭典

日本古語大辭典は松岡靜雄氏の著にかゝり、昭和四年に刀江書院より發行した。五十音順により古語を拾ひ、これが解釋を下し、原義を説き、出典を擧げたもので、南洋語の智識ある氏の撰とて語義に他と異なるものがある。その續篇は訓詁篇で、古事記・日本紀・萬葉集の三大古典の解讀に資する目的を以て編纂したもので、昭和七年刊行された。訓法には助語・呼應・敬語・接續詞及び副詞・尊稱・敬稱・位階・官職を説明し、附録には語要録を載せてある。氏は別に古史論究を著し、多くの著作を遺した。その説奇拔なものが少くない。

平凡社大辭
典

曩に百科事典を出した平凡社は昭和九年二月その完結するや、大辭典の編纂を企て、毎月一卷づつを出し、二ヶ年を以て完成することを圖り、朝野の學者に執筆を乞ひ、専門術語より地名・人名・書名等の固有名詞を入れ、語數亡慮七十萬に上る浩瀚のものを出した。排列は表音五十音順片假名に一定してある。その語彙に就いては刊行要旨に云つてあるやうに、

一、室町以後徳川時代の文獻

二、室町文化に關係深き日葡辭書の語

三、七萬餘の方言

四、外來語、新聞語、翻譯語、轉用語、隱語、通語

五、近接語族、アイヌ語、朝鮮語、臺灣語

六、所謂訓點もの、抄物もの、古文書の用語

七、音韻學、音義學、文法學上の語彙

八、漢字の親字を漢音、吳音、宋音各につきて

九、文獻になき職人語、商人語、農漁民語

一〇、民族學の發達に基く土俗語

一一、漢熟語、諺語、名詞、名歌

一二、和漢西の名著解題、俳句の季題、戲曲名題、書題

を採録し、實に尨雜なものである。辭典と名につけてあるが、句や文をも織りまぜてあり、また、歌詩の索引でもある。例へば「アカツキシズカニネザメシテ」は梁塵秘抄の

曉靜に寢覺めして、思へば涙ぞ抑へあへぬ、はかなくこの世をすぐしては、いつかは淨土へ參るべき、の法文歌を擧げて釋してある。「アカツキシヨースイオクンデ」は謡曲の八島の句を擧げ、その文句を

釋し、終に柳子厚の漁翁詩「曉汲清湘燒楚竹」の出典を擧げてある。「アサヒ」の條を見ると、全國各地に於ける村名數十を並べ擧げるといふやりかたである。語原の説明、引用文の新古、採録語句の選擇につきては議論のあるものもあらうが、語句の数の多い點に於ては從來のものに覺に超えてゐる。

古辭書の板行

字 籠
藏經音義隨
函錄

古代辭書の刊行され、學海に多大の貢獻してゐることを附記すれば、天治本新撰字鏡が大槻博士の手により山田孝雄氏の攷異と索引とを添へて大正五年に刊行され、倭名類聚抄は那波道圓活字本は日本古典全集に收め、眞福寺本殘缺本は古典保存會より、觀智院本類聚名義抄は昭和十二年山田孝雄博士の解説を添へて貴重圖書複製會より出し、前田本色葉字類抄は前田侯爵家育德財團より、黒川本色葉字類抄は古典保存會より、節用文字は古典保存會より、饅頭屋本節用集は珍書保存會より、易林本節用集は古典全集に收め、狩谷校齋の箋註倭名類聚抄は明治十六年印刷局で出版されたのを昭和六年野口恒喜氏が索引を加へて覆刻し、字鏡集は昭和八年野口氏が校齋所藏黒川春村校本及び塙保已一校定圖書寮本によりて出版し、字訓・索引を加へ、田澤伸舒の字籠も同氏が昭和九年に出し、更に同氏は高麗で版になつたばかりの沙門可洪の新集藏經音義隨函錄を覆刻して昭和九年第一振を、同十年に第二振を、同十一年に第三振を出してこれが索引を作らうとしてゐる。これらの字書は古典並びに特殊研究者に有用であるばかりでなく、書史的の解題を加へて索引を添へることによつて一般にも研究の便を加へるもので、隨函錄の如きは古き字體を實證的に明らかにすることを得、漢字史を究めるものが常にその惠澤を受くべきである。

易林本節用集改訂者易林の傳記については、森末義彰氏の考が昭和十一年九月の國語と國文學に載つてゐる。

岡田希雄

連歌辭書史

辭書研究に努力せられてゐる岡田希雄氏は、時々雜誌にその所考を發表される。昭和十二年三月の國語國文連歌特輯號には連歌辭書史の概觀を載せ、連歌合璧集、宗硯法師色葉詞、詞林三知抄、名所方角抄、藻汐草、勅撰名所和歌抄出、匠材抄、類字聞書、色葉抄、歌詞集、無言抄、色葉新式、春雨抄、吳竹集、付合小鏡、しをり萩について一々丹念に解題をされてゐる。普通の辭書と違ひ、付合去嫌が主になつてゐて特殊のものである。尤も一つ／＼の説明に了つてその發展を說かれるまでには及んでない。

名語記

特に記すべきは鎌倉時代の語原辭書名語記に就いて、その紹介と研究を昭和十年の國語國文の十月・十一月・十二月三號に五りて發表されてゐる。この書は十帖のうち第一卷は缺けてあるが、今より約六百六十年前に著者經堂が、金澤文庫主北條實時に進獻の爲につくつた自筆本が甲州身延山の久遠寺の支院正行院に世に知られずに存してゐたのを、今の金澤文庫の關靖氏によりて發見せられたのを考究し、蟲蝕をはらひ、卷二・十・七・九・三の五帖を調査して學的價值をも示されたのである。麻紙粘帖、全部墨附八百三十三丁に上る浩瀚なもので、いろは分けとなし、一字のもの、二字のもの、三字のもの、四字のもの、五字のものに分ち、これを一字名語以下五字名語と名づけ、問答式によりて語原を説いてある。その解釋には悉曇にも通じてゐたと見え、明覺が行つたやうに、五音堅通、同韻相通、傍韻相通、

大正昭和期に於ける辭書

轉通、略、反、反音、約等の術語を用ゐて説いてゐる。その語彙には鎌倉初期に行はれてゐたものが相當に多いといはれてゐる。二重反音の如き便宜説をふりまはし、これを純粹の國語ばかりでなく、字音の上にもまた擬聲語・擬態語の上にも適用を企てゐる如き、牽強附會の誤も少くはなく、今日より見れば學的價値のないものが相當に多いが、この時代にかゝるいろは分けの語原辭書が存在が明かになつたことは史的から見て貴いものと謂はねばならぬ。文法上の術語につきては名とことばの外にてにはの名も擧げてある。建治元年に著者が實時に贈つた自筆本に「テニハ」の語の見えるのはこの術語の使用年代の確實性が阿佛の夜の鶴よりも優つてゐると岡田氏は述べてゐる。

語原辭書史

氏はその末にこの書に尋いで語原辭書史をつけ加へ、神祇伯仲資王の撰といふ和語解十八卷、それを抜萃した和訓精要鈔二卷、和字四十卷、桑家漢語抄十卷、奉勅撰次和訓十卷、和句解六卷、日本釋名三卷、東雅二十卷、雅袖領二十卷、倭語小補五卷、倭語拾遺十五卷、和語私臆抄十八卷、言元梯一卷、名言通二卷、本朝辭源三卷につきて個別に解説を加へてゐる。

三省堂漢字典

維新後漢字典で出色のものは三省堂の明治三十六年に出した漢字典を始めとする。その體裁に新しいところがあり、一字にして二字以上あるは別に出し、多義あるは原義を前に、轉義を後にし、頭をそろへて看易くなし、その字を下に履む熟語を加へ、卷末には國訓・國字・篆文を附録としてある。

榮田猛猪大字典

次に上田・岡田・飯島三博士及び榮田猛猪・飯田傳氏との共著となつてゐる大字典は大正六年に出版

せられた。(榮田猛猪氏が主として事に當つた)この書は文字は康熙字典を取捨し、更に世間慣用の俗字・略字を加へ、毎字説文的の説明を加へて、左旁に訓、下に音及び古體を附し、訓の下に字源や注意や辨似・應用を出し、次に書數順により熟語を出してある。語數一萬四千九百二十四字で、その他に熟語を夥しく舉げ、畫引・音訓引の索引を出し、卷末に艸字彙を添へてある。

簡野道明氏の字源は大正十二年に出て廣く用ゐられた。康熙字典に據り廢字を省き、譌俗字にても日常使用されてゐるものは之を收め、熟語を擧げること頗る多く、一字にて五百八十九語をさへ載せたものもある。音訓の索引檢字を附し、卷末には數多の挿圖を加へ、草字彙や隸法彙纂を別冊としてあり、一語々々の解義も丁寧であるので、世に廣く用ゐられた。富山房より出した服部宇之吉・小柳司氣太氏の漢字典も今や大いに世に用ゐられてゐる。

特殊の漢字典としては、簡野道明氏の故事成語大辭典及び池田蘆洲氏の故事熟語大辭典が世に行はれた。前書には故事・熟語の外主要な經史子集の解題と著名な文人・墨客の事略を加へ、その數二萬五千件に上つてゐるといはれ、明治四十年十一月に發行され、二週日を経ないで再版された程である。

後書は三十九年に出した故事熟語字典を増補したもので、語數五萬をかぞへ、十年の苦心に成るといふ。各項に意義・出典を出し、更に倒語・反語・類語・原始・考異・參考使用・轉用・翻案・辨疑・訂誤・論評・餘論を加へ、挿圖を以てし、卷末には字彙索引と辭書梗概とを附してある。その紙數二千頁

に上る。

ローゼンベルヒ
五段排列漢
字典

この他露西亞人ローゼンベルヒは大正五年東洋文獻の根本的研究に志し、我が東京帝大に學び、同國ワシリエフの音符引排列より更に工夫を重ねて五段排列漢字典を著し、索出を容易くしようと企てた。

康熙字典の二百十四の部首に對し、これは筆法の五種の方角より割出し、二十四根本線より線の獨立結合等を按じたもので、末に二萬字の表も加へてある。

三十三 國語學一般概説

藤岡勝二

國語研究法

明治の末期に方り、保科孝一氏等と共に上田博士の羽翼となり、世上一般の言語文字に關する根本觀念を是正し、これが新しき研究の方向と方法とを示さうと志した藤岡勝二氏が明治四十年に三省堂から出した國語研究法は、僅々二百頁にも足らない小冊子であるが、當時實際問題の解決に一つの鍵を與へんとしたものである。本書は篇を言語の觀念、國語と方言、文語と口語、支那語・日本語・西洋語、語法と辭書、語法と論理、保守説と改定案の七章に分けて分り易く説いてある。著者は普通教育に於ける文字改良の急進派で意字よりも音字、音字の中では假名よりも羅馬字の主張者で、舊慣に拘らないで、その結論に邁進しようとしたのである。この點に於て注視すべきものである。

老 櫛

その後氏は多く著書を出さなかつたが、世に秘して近接國語である滿文の史記老櫛百八十冊の翻譯を企てゝゐたことが歿後に至り世に知られて來た。昭和十四年に啓明會の補助によりオフセット版に附せられた。

龜田次郎
國語學概論

國語學一般概説

これに次いで龜田次郎氏は明治四十二年に博文館發行の帝國百科全書的一篇として國語學概論を出し

國語研究の
目的・方法

國語系統論

文法論

動詞古形論
總主説を否
定東洋比較言
語學の建設
を望む

た。これは國語學の全般を組織的に概説した我が邦最初の著書で、篇を八つに分ち、緒論にはまづ國語研究の目的・方法・範圍等を明かにし、在來の研究の缺陷を指摘し、次に國語研究に必要な補助學科を説き、研究資料を挙げ、終に國語學史の一斑を述べてある。第二編は國語系統論であつて、それに必要な條件を細論し、各國語との關係を述べ、他國語の影響を説いてある。國語はウラル・アルタイ語派に屬するとの説を首肯し、藤岡勝二氏の國學院雜誌に掲げたその要項十四條に、關係代名詞の存在しないとの一項をも加へ、さうして他國語との關係に於てはまづアストンの朝鮮語との同系論を紹介し、これに亞いで起つた本邦學者の説を載せ、琉球語との姉妹關係についてはチェンバレンの研究を紹介し、伊波普猷氏の論文を加へて、他國語の影響を支那語・梵語・アイヌ語・歐洲語に亘つて説いてある。第三編には文法論を、まづ文法の概念を説き、文典の種類を挙げ、文法教授の目的を示し、その内容部門を説いてあるが、概念を説くあたり最も傾聴すべく、第四編は聲音論で、各種の聲音を聲音學的に委しく鮮明し、ハ行古音考に關する諸説をも博引要約して舉げてある。第五編は文字編で、神代文字有無論にも説き及んでゐる。假名遣は上田博士の説を奉じて表音的に改正することを希望し、第六編は品詞論で、中に動詞の古形論や數詞論に新見を立てゝある。第七編は文章論で總主説を否定し、枕詞の起原は金澤博士と同じく同音異義語の區別にありとし、修飾論は一擲してゐるのは尙考ふべきである。最後の第八編は東洋比較言語學の建設を高調して結論としてある。細部に於ては缺漏もあり、異論もあらうが、

當時に於ける斯學の好指鍼であつたと思ふ。

氏は國語學史の研究に意を濟め、余が日本文法史を出した後幾歳月も經ない頃に、某書肆の開店十周年記念出版に國語學史を活字に附してゐる中に火災に見舞はれて、世に公にするに至らなかつたと聞いてゐる。

日下部重太
郎
現代の國語

國字問題

日下部重太郎氏の大正二年に出した現代の國語は明治年間の紛糾した國語・國字の諸問題を詳かに且趣味あるやうに綴つてあつて、上田萬年博士が國語調査委員會官制廢止のその月その日の日附のある序文がまづ我等の心をとらへる。その内容は前後二編に分れ、前編は我が國語、祖國固有語、漢語、印度歐羅巴語、言文一致、教育と國文の六綱に分ち、漢語及び言文一致の二綱は更に數目に分ち、後編には國字問題を序説、漢字節減論、問題の假字、問題のローマ字、新字説に分ち、結論として國字改良の眞意を述べて我が國語の將來を案じ、イビー・三上博士・藤岡博士・原敬氏等の説を載せ、次に假名遣問題、ローマ字綴り問題、分ち書きの問題、漢字まじり文の問題、國語の研究調査について、國語の發展についての七項に亘り當時の狀況を目視するやうに敘してある。氏は昭和七年これを補訂して現代國語精説を、翌八年續現代國語思想を出し、國語問題に關する主なる出版物年表などを加へて生きた國語問題を詳敘した。

安藤正次
小さい國語學

大正期に入つて國語學概説を書いたのは安藤正次氏である。氏は大正十三年小さい國語學を廣文堂か

國語學史要
國語學概説

國語學通考

ら出した。これは平明にかゝれた啓蒙書であるが、よく基礎的な概念を誰にでも分るやうに書かれてある。第一章の序説には國語學の性質から研究の部門方法までを述べ、第二章には言語の本質を説き、國語の國民性陶冶に至大の關係があることを敘し、我が國語がウラル・アルタイ系であることを述べ、假名の字源・發達、いろは歌・五十音圖を説明し、第三章には國語の時代的區分を述べ、標準語と方言の性質關係を説き、方言區劃にも及んでゐる。第四章には音韻を論じ、聲音學的解釋を下して音變化の現象を脫落・添加・銕化・轉化・同化に分ちて説明し、アクセントの性質と型とに説き及ぼし、第五章には語詞論、第六章には國語學史要を敘してある。著者は國語の研究史を三期に分け、平安朝末から江戸時代の國學勃興に至るまでの第一期と、その後から維新前に至る第二期とに就きて主と説明を試みてゐる。昭和三年これを増訂して國語學概説と改題し、その組版の如きも、従前の横組を縦組に改めた。

昭和六年に至り、氏は國語學通考を公にした。全篇七章より成り、第一章には國語學の對象を、第二章には國語の體系を、第三章には國語學の展開を述べ、以下の四章には第三章の概説の後を承け、語音・語態・語法・語義の四つを詳説し、この類の書として最も參考に供するに足る。附録には「口語文の起伏」、「二語併用地域に於ける教育」、「世界の言語の國際的調査について」の論文三篇を加へてある。

唯第三章に悉曇の影響、古典の訓釋、連歌の上よりの語法等に觸れてないのは惜しい感じがする。維新後の批判は少いが、舊説に囚はれないで、自家の見を以て斯界に新生面を開かんとの期待を以て筆を執

られたごとく、從來の著作に更に花を添へたものと云ふべきであらう。

この書と前後して小林好日氏も昭和五年に國語學概論を萬上閣より出版した。氏は大正十一年に標準語法精説を出したが、またこの著を公にされた。この書は章を十三に分ち、序説には國語學の對象と研究の方法を、第二章には言語と文字の總説を、第四章には國語の系統を、第五章以下には文字・音韻・假名遣・語詞の構成・品詞・文の構成・口語と文語・方言と標準語を説き、最後の章には國語の時代を論じてある。氏は舊來の國語研究が自國我に陥つてゐるのを遺憾とし、西歐の言語學者の説を引き、我が邦の研究と對照し、それ／＼批判を下してある。また一つの問題につきても、種々の學者の説を要を撮んで擧げることゝを怠らなかつたので、概論として好箇の参考書であることは疑はない。例へば國語の系統につきても、ウラル・アルタイ語族に屬することを最初に唱へたクラプロート Kraproth よりボラー Boller の「日本語のウラルアルタイ所屬論證」、次にロスニー Rosny の日芬同系論、ウインクレル Winkler の「日本人とアルタイ族」「ウラルアルタイ語族論」及び現代に於けるウラル・アルタイ語學の權威であるラムステッド Ramstedt の説に觸れ、朝鮮語との關係に於てもアストンを始め金澤・白鳥博士の所考に及び、これが判斷に關し民族研究の必要を説き、久米邦武、小金井良精、坪井正五郎、モールス、鳥居龍藏諸氏の人種論までを引いて論ずるが如き態度をとつてある。

漢字の音につきても吳音は支那に於ける一方の方言であることを説き、本居翁の三音考、文雄の三音

經典中漢音
でよまれる
もの

正譌の古い説から、大島正健・満田新造兩博士の説から *Edkins* の説までを引き、相互の關係を説き、我が邦では佛教の經典が吳音で讀まれるに、天台宗の法華經、阿彌陀經、眞言の般若理趣經、金剛界禮懺、胎藏界禮懺等が漢音を傳へてゐる例などを擧げるといふが如く、あるがまゝを示さうと努められたことが見られる。併し文字の中、支那の語音文字から我が邦の如き音節文字を経て、單音文字に至るは文字進化の道程と見られてゐるが如く、外國の學説に傾倒される嫌ひがないでもない。

東條操
國語學新講

東條操氏は恩師上田博士の古稀の壽を祝する爲に、昭和十二年に國語學新講を刀江書院より出した。

「本書はほど國語學概論の體裁をとつてゐるが、望むところは明治より昭和に至る國語學の鳥瞰的素描にある。」と序中に誌されてゐるが如く、明治以降研究された國語學上の主要な問題は略々網羅されて遺すところがない。全篇三十章から成り、これを四つの篇に總括してある。第一篇序説には國語、國語研究の發達、國語學の成立、國語學の部門の四章、第二篇音韻文字の部には音聲と音聲研究、國語の母音と子音、音節とアクセント、文字・漢字と假名、古代の音韻、五十音圖と伊呂波歌、音韻の變遷と假名遣、國字問題の八章を、第三篇單語の部には單語、語義の研究、語構成、外來語、辭書の發達の五章を、第四篇文法の部には文法と文典、文語と口語、品詞の分類、體言・名詞と代名詞と數詞、副用言と感動詞、用言總説、動詞、形容詞と形容動詞、助辭總説・助詞、助動詞、文章論の諸問題、國語史と方言、結語の十三章を包括してある。

結語の十三章を包括してある。

概論と學史
をよく絡ま
せてある

國語學概論と國語學史とはその叙述の目的が自ら異つてゐるが、國語學史を全く離れた概論は一つの言語哲學になつてしまふ。國語學概論を顧みない國語學史は形體の不備不整になり易い。随つてこの二つは互ひに相絡ませて説く要がある。國語學史の古い時代のことは多少省略に従はれたところがあるやうであるが、最新の主要な研究の起つたその過程は一々示されてあつて、吾れも人もそのよき案内書として否批判を加へ、時に著者の意見も明示されてあつて、この道に携はるものに最良の指導を與へ、迂路や邪徑に入らないやうに説かれてあり、また新たに斯道の開拓を志すものに指針を示してゐる。また一題目の終には參考圖書を掲げる等、著者の讀者に寄せる厚情は實に謝すべきである、方言などに關する條項は特に御手のものとて要約されて示されてある。

三十四 東方言語史叢考と東亞語源志

言語學會雜誌

グリムの紹介
田口博士との論争

南蠻廣記

新村出博士が言語學界や國語學界に盡瘁されたことは年尚しいもので、國語調査會に入つて、上田萬年博士の下にありてその事業を助けられたことは、前に多少觸れて置いた。明治三十三年言語學會が成立し、會誌を出すや、藤岡勝二氏等とこれに力を盡し、獨逸文典・獨逸語史・獨逸辭書を出して大いに國語史の研究を鼓吹したグリムを紹介し、翌年史學會の大會で講演され、且史學雜誌に發表された田口卯吉博士の「國語上より觀察したる人種の初代」を批評し、その比較言語學上の新説も根據が薄弱で斷定が大いに誤つてゐることを指摘し、相互の間に論争があつたが、言語學的の基礎のない史學家の説は眞劍の立合は出來ないのであつた。氏は南蠻研究の權威であつて、極東の言語の研究に資すべきものは汎く蒐集檢討され、明治の末から大正の初にかけて發表された天草本平家物語・落葉集・懺悔錄・伊會保物語等に關する論文は大正十四年に用された南蠻廣記の典籍篇の部に收められてあり、これらによりて後の學者が室町時代の言語研究をなしとげることが出來たのである。

氏の國語の歴史的研究と、國語及び東方諸民族の言語の比較研究等に關して發表された論文は少くない。

東方言語史
叢考

國語系統の
問題

音韻變化の
諸原因

滿洲語學

イエスベル
ゼンの言語
進歩論抄

東國方言の
位置

い。その三十年間の論文を集めて昭和二年の末に出されたのが東方言語史叢考である。收めてあるものは國語及び朝鮮語の數詞について以下、西歐留學中橋本進吉氏に宛てられた通信「佛國言語學界の近況」に至る三十四篇を收めてあつて、その中、一般に關するものには「國語系統の問題」、「言語の比較研究に就きて」、「方言の調べ方に關する注意」の如きがある。國語史に關するものには「國語に於ける東國方言の位置」、「東國方言沿革考」、「足利時代の言語に就いて」等があり、音韻變化の考證にも力を注ぎ、「音韻變化の諸原因」、「音韻變化作用の消長」、「音韻史上より見たる『カ』『ク』の混同」、「琉球語の波行音の變遷」、「音韻調査報告書に就きて伊澤修二氏に與ふ」、「言語教授上聲音學の價值」等があり、近接語につきては滿洲語に關するものが多く、「高橋景保の滿洲語學」、「長崎唐通事の滿洲語學」、「滿洲語學史料補遺」、「本邦滿洲語學史料斷片」、附録として明治以前滿洲語學書簡明目錄があり、「日本人と南洋」の篇には日本語に於ける南方要素管見を述べたるもの、その他「國語問題今昔談」、「國字の將來」についての論文や物語もある。外國學者の説を紹介したものにはグリムの外、古典派に對し強弩をひいたイエスベルゼンの言語進歩論の抄譯がある。氏は一つの題目につきては内外の典籍を汎く引いて妥當の解決に導くことをとつとめ、而もその文章が趣味が多いやうに書かれてあるので、いかなる題目につきても讀者を引きつけないものはない。

國語に於ける東國方言の位置については發音上の特點として第一に母音の中ではuとoの變化が最も

多いこと、次には東國語の特質になつてゐる i と e の母音の變つてゐるものが多いこと、a と e の變化してゐること、「降れる」を「ふるる」「たてる」を「たゝる」といふ如き）子音に於ては n が落ちること、「など」が「あど」となる如き）濁音が多いこと、「かねて」が「がねて」の如き）「し」と「ち」が變つてゆくこと、これから推論して「のどけし」の「けし」は「かし」の原形があつたのであらうといひ、また家を「いは」と東語にある點から考へて、竹は熟語の上位にすゑられる時「たか」となり、船も同様に「ふな」といふはそれが原形であつて、a から e に變つていつたものと立説してある。語法に於ては打消に「なふ」といふ活く辭を用ゐること、これはなは、なへ、なふと活き、後の「ない」と關係があるらしく、命令に「ろ」の接尾辭をつけることは萬葉集には唯二つだけであるが、後には殖えて來たこと、江戸期以下のものを見ると九州地方にもこの「ろ」が存してゐることを學べ、封建時代に東國の大名が西州に封じられてゐた關係等をも考慮に入れ、東語に於ける時期を分けて説いてある。國語學上から縦に東國語の沿革を研究して横に現在の東語法の分布を調査すべきことを提言してある。

足利時代の
言語につい
て

足利時代の言語についても内國の資料としては第一古文書・古記録、第二文學及び俗謡、第三佛の教を通俗的にかいた法語御文章の類、第四節用集等の辭書、第五隨筆等の雜書、第六抄物類をかぞへ、特に第六に於ては成立の判然としてゐる史記鈔によりてその文體・活用及び語法・發音等に就いて相當つきこんで説いてある。これは明治三十八年一月の講演にかゝるもので、それについてその作者の桃源

香曲玉淵集

一、軟濁の事、三重濁りと云
ハ_ス
ヒ_ヒ
フ
ヘ_ス
ホ_フ
唇内なり_{云々}

これによりても徳川中期に於ける「普」に對する人々の感じが分ると思はれる。その他の例を引いて全本土の大部分が今日のやうに「主」を脱却して「主」になつたのは近世期の比較的後世のことであつて、「主」の

コリヤード
の日本文典

ホフマンの
日本文典の
f h 説

過渡期はかなり長く繼續したものといひ、後篇にはリチャード・コックスの元和頃の日記に我が地名のハの一音にf hの並用してゐるのを舉げ、コリヤードの寛永八年に著した日本文典にfといふ文字は日本の或る國々ではラテン語に於けるfのやうに發音するけれども又他の國々では不完全なhのやうに云ふ、fとhとの中間の發音で不十分ながら唇を合せて閉ぢて發音する云々といつてあるのを引き、波行音の本體は時代によつて變遷があり、第十六世紀より第十七世紀の少くとも初期に至るの間はなほf音が標準音であつたといふこと、並びにそのf音も既に輕微に進みつゝあつて、地方によつては最早h音の現出あつたことを承認せねばならぬといひ、トウンベルグはf hを並用し、ホフマンの日本文典には江戸にはf音全く亡び、h音のみ行はれてゐると、これに反して京都にはh音なくしてfのみ存すること、西では讃岐、東では仙臺及び東北地方ではhが無く、fが行はれてゐることを報告してゐる。それらに就いて一々批判を下し、f hの移行は西國・東北等に遅くして近畿・東海等に比較的早かつたのではないかといひ、ハ行音が全部一時に移行せず、ハは早くフは比較的遅いであらうと細かに慎重に論じてある。

隼人語と馬
來語

この書には名の如く語原に關するものが多い。隼人語と馬來語、知智乃實と銀杏、鴨胸樹の和漢名、羊の語源、馬鹿考、歌舞伎名義考、邸の字音と問の語原、家庭といふ語、日本氣質、こゝろ、左と右、天平時代の國語、言語の研究と古代史の研究と有益な考證が少くない。

三十五 大正末期より昭和へかけての文典（その二）

小林好日
標準語法精
説

品詞論にも
新しい名稱
を立つ

客語補語は
修飾語より
出づ
總主は心理
的主語

大正十一年には二つの注意すべき口語法語典が出た。その一つは小林好日氏の標準語法精説であり、一つは山田孝雄博士の日本口語法講義である。精説の方は篇を四つに分ち、第一篇緒論には口語と文語、方言と標準語、國語の發達と標準語を、第二篇には聲音と文字、第三篇に品詞、第四篇に文を論述してある。氏は國語の性質を見失はないことに注意すると同時に西洋文典の理論も尊重することを忘れてはならぬとの立場をとつてゐ、標準語の制定に關しても一つの意見を立て、國語の發達と標準語の章には簡単ながら國語史を説き、聲音論中にはアクセント論にも觸れ、品詞論には形容動詞を準形容詞と名づけ、助動詞には廣日本文典所説のものゝ外に、自發の助動詞、傳聞の助動詞、禁止の助動詞、待遇の助動詞、謙言の助動詞などの目を立て、文章篇には歸納的歴史的の研究の上に立脚すべく、また心理的の基礎の上に置かれねばならぬとし、成分中修飾部は文の主成分に非ずとの舊説を斥け、客語補語は修飾語より出たとの新説を述べ、國語に於ては、客語補語は未だ明瞭な範疇に發達するに至らないから、副詞的修飾語との區別をなす必要のないことを述べ、總主は心理的主語と見るべしといひ、語序に關しては

ヴントの説を紹介し、助詞は勿論、受身使役の助動詞も文中に於ける語と語との關係を示すが故に文法上の一範疇に算すべしと説いてゐる。山田博士の助動詞を複語尾と名づけ、一つの品詞と見ない説に反對してあるやうである。語法に關し根元的の智識を與へようと庶幾したものか。その後同十三年この書を改版して新體國語法精説として出した。

山田孝雄
日本口語法
講義

山田博士の日本口語法講義はこの年二月に公にされた日本文法講義と體制を同じくし、前著には口語法と文語とを併せ説いたのを更に一部の口語法として詳説したもので、總論、品詞論から句論、文及び語句の省略に至る四十六章に分け、文部省編修の讀本、芳智博士の帝國讀本・吉田彌平の國文教科書等より多くの實例を擧げてある。

敬語法の研
究

敬語法につきては特に注意を拂はれ、大正十三年一部のまとまつた敬語法の研究を出された。日本大學に於ける講義用として編まれたもので、前書の姉妹篇と見るべく、首にチェムバレンの「世の如何なる言語といへども日本語より多くの敬語を有するものなし。」の言を引き、敬語の大切なことを述べ、敬語には必ずしも尊崇に限らず、親愛の意をあらはす場合あり、また言語に品格あらしめる爲に用ゐることがあることをいひ、敬語は軍制時代階級制度の遺物の如く見做すは極めて淺薄の考なることを説き、世のこれに深く意を注がざるを戒め、その大綱に敬語は現代の語にも口語と候文と普通文とにより相異なる。而していづれも單語の上ばかりでなく、稱格に關係があり、自稱には謙稱を用ゐ、對稱及び他稱に

敬語法の
大綱

稱格と敬語

口語・候文
・普通文の
三種の敬語

小學讀本を
資料とした
口語法

松下大三郎
標準日本文
法

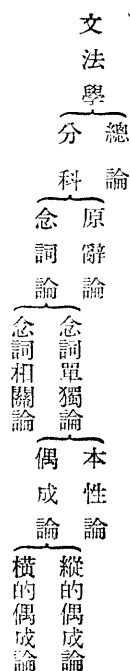
思想と言語
の構成

は敬稱を用ゐるが、對稱の敬稱は對者ばかりに用ゐ、一般の敬稱には流用することが出来ないのが本質であつて、候文にはこの種の敬稱が最もよく發達してゐる。敬語は單語の上ばかりでなく、文章語句の中にありて用ゐらるゝ時に一定の型を存す。動詞の敬語のあるものは、それが單獨の動詞として用ゐられる外に、「す」といふ語と同じ性質をあらはし、他の語を賓格として伴ひ相合して一の語たる資格をあらはし、以て敬語の用を完うするものと説いてある。斯くて口語の敬語法、候文の敬語法、普通文の敬語法を別々に詳述し、結論には以上三つの敬語法の中、敬語の法則の最も整頓してゐるのは口語であつて、候文これに亞ぎ、普通文は最も劣つてゐる。中に候文の繁文縷禮は漸次に淘汰せらるべく、他の二つの中、普通文に敬語の貧弱なるは日本國民の精神生活の核心に觸れない結果で、口語の敬語の堂々たるはこの核心に觸れるから、差等が生じたものと斷じてある。

この年鶴田常吉の小學讀本を資料とした日本口語法も出た。普通教育に於ける口語法として割合に體系も整ひ、簡にして要を得たものであることは余が訂日本文法史に説いて置いた。

松下大三郎の標準日本文法もこの年に公にされ、昭和三年にこれが増訂本が出た。氏は思想の上から語法を説かうとし、國語のあらゆる現象を捉へて新しい説明を下さうとした。従つてその體系も用語も他の文法家とは大いに異つてゐて、それを會得するに相當の努力を要する。思想の構成に斷念、觀念、觀念材料の三階段があるやうに、言語の構成にも斷句・念詞(増訂本には詞と改む)・原辭の三階段があ

るといひ、まづ次の如き體系を立てた。



斷句

斷句は説話の單位で、説話をあらはす一續きの言語である。これに單斷句と連斷句とがある。例へば

「高砂の尾上の櫻咲きにけり」

「外山の霞たゞずもあらなむ」

原辭の分類 文語完辭

口語完辭 動詞各階の 名稱變更

の一首は外面は二個の單斷句から成るやうに見えて、内部から云へば、連斷句であるが如しいひ、原辭を完辭・助辭・接辭・字音辭の四つに分け、文語完辭の中、活用のあるものを十種に分ち、その外に「所謂」・「於ける」・「いかん」の三つを動作性特別變格といひ、「斯く」「然しテ」「さテ」「無み」「同じ」の五つを形容性特別變格と名づけ、口語完辭の活用は十二種に分けてある。動詞の變化の各階には未然形・中程形・截斷形・指定形・放任形の稱を以てし、古に存した「申さく」「聞かく」の類を活用形の第六階に配し、か行變格動詞にはその命令として加へる「よ」までを語尾と見たり、口語の活用中、未來を第五段に立てる不可を極言し、その活用圖も四段主義を強調し、また形容動詞と見る「立派に」・「轟然とシテ」の類の「に」及び「とシテ」を共に尾助辭と見做し、に活と活の稱を設け、良行變格の終止

衝音と平音
活用とアクセント

形には「り」ばかりを擧げるのは善くない、普通に連體形といつてゐる「る」の語尾をもこの形に包有せしむべしといひ、アクセントは衝音と名づけ、揚げない音を平音と稱した。而して活用とアクセントの關係に就いては

晴 はる はるゝ ・衝音

青 あをき あをい ・平音

に於けるが如く、上下二段一段さな變格の第一活段が二長音から成り、最初が衝音なる時、第四第五活段が一音殖えると、衝音は下から二番目にうつり、狀態性活用を示すものが、第一から第四活用までが三音から成り、第一音に衝音のものが音便になる時は第二音目が衝音になる。もし上に衝音がなくして第五音に一番殖えるときは「あかけれ」の如く下より二番目の段に衝音がうつると活用とアクセントとの關係を説いてある。

原辭相關論

念詞本性論

八品詞乃至
九品詞の區別を
示すに品詞を認める

原辭相關論に於ては結合關係を五類二十種に分け、増訂本には對等結合と從屬結合との二大別とし、後者を更に實質・補足・客體の三つに分けてある。次に念詞本性論には職能關係により事物の概念を表すもの(名詞的)、作用の概念を表すもの(動詞的)、屬性を表し他の概念の實體を修補するもの(形容詞的)、屬性を表し他の概念の運用を修補するもの(副詞的)、直觀的概念を表すもの(感動詞的)の五つの範疇で律し、從來の八品乃至九品詞の區別を斥け、「てには」は品詞と認めてない。別に變體品詞の目を立

名詞の細分

て、「本を読むを樂とす」の「讀む」を動詞性名詞といひ、「例のが來た」に於ける「例の」を形容詞性名詞、「失敗する筈さ」に於ける「筈さ」を名詞性動詞等の區別も立てた。

形式名詞

品詞細分の條には普通固有の外、「大が『わん』と吠ゆ」の「わん」の如きを模型名詞といひ、代名詞に人稱位置時間を基準代名詞、疑問・不定・總括・暗示的なるものを非基準代名詞と區別してある。また譯・筈・爲・所・所以・儘・など・など・なんかの如きを形式名詞と名づけ、この實質的意義のない名詞の多いのは名詞の異常の發達をしたもので、國語の矜だともでいつてある。』とは云ふもの、』の「と」を寄生形式名詞といふ名目を立てゝある。

動詞の細分
合主性並び
に分主性動
詞形式のよ
り内容上よ
り分類を全
つ

代動詞

動詞の細分に於ても内容上表現上から煩瑣な區別を立てゝある。例へば「然り」又「そうです」の如きを合主性動詞、「咲く」又「散る」の如きは分主性動詞と名づけたり、また歸着性動詞・非歸着動詞の別を立て、後者を他動性、依拠性、一致性、與同性、生産性、出發性と細分してある。從來文法家が解釋しないものを取り擧げて一々精緻な分析を試みたのは偉とすべきであるが、中には如何と思はれる項目も少くない。旅行とか入學といふが如く活用をもたないものも内容から見ても動詞と名づけ、「斯く」・「然」の如きを代動詞と稱へ、世の學者が名詞に代名詞を立てながら代動詞の目を立てないのを片手落と云つて非難し、山田孝雄氏が「あり」・「する」・「如し」の三つを形式動詞を立てたのとは異りて、「商業をする」は實質動詞であるが、「勉強する」は形式動詞であると説き、

形式動詞

行きて見る(一)

教くればよす(11)

教へずともよす(11)

方格
束格
放任格
被修飾形式
動詞

念詞の相

追想態
迎想態
送想態
つ・ぬ・きけ
りの新解釋

名詞の十二格

動詞の十三格

の如きは、上下の動詞の關係をいかに見るかといふことは、實際問題として必要なことであるか、氏は(一)を方法格、(二)を拘束格、(三)を放任格と名づけ、「見る」・「善い」・「よし」を被修飾形式動詞と稱し、吾人が接續詞に數ふる「すると」・「だから」・「ですから」・「けれども」・「だか」の如きを寄生形式動詞と呼んでゐる。

次に念詞の相の編には待遇や態度の上から名詞や動詞を細かに分けてある。時法に關しては山田孝雄氏の説を甘なひ、過去を追想態、未來を迎想態、完了は送想態と名づけ、つ・ぬ等の別に關しては「つ」は對抗的、「ぬ」は逸走的といひ、三矢山田諸氏とその説を異にし、過去の「き」・「けり」につきては「き」は事件を主觀化し、「けり」は客觀化して表すといひ、「まし」につきては可然的未來といひ、三矢氏とその説を異にし、「らむ」は「あらむ」の略とする説を斥け、「ら」は「吾ら」の「ら」などと關係があると言き、次に念詞の格を論ずる編には、名詞の格を主・他動・依據・方向・到達・出發・一致・生産・與同・比較・一般・從屬の十二格に、動詞にも格を設け、終止・命令・連體・方法・狀態・拘束・放任・一致・生産・依據・他動・寄生・一般の十三格を分け、終止格に表明態と疑問態との二つを、直接終止格

には更に再指終止格を設けて、我が國民の思ひやりの深いことをたゞへてゐる。

念詞相關論

正置と國語
の優性

念詞相關論は文章法といふべきもので、これを思惟性斷句、直觀性斷句に分ち、前者を有顯的と無顯的とに、後者を概念的と非概念的とに分ち、成分の一般的關係の章には統合觀念に於ける意識の流を説き、これを正置法・倒置法の二種に分ち、前者を順態とすることを以て我が日本語が世界各國語に優ることを極言し、思惟作用に對する意識は統率語たる歸着語に覺醒すべきもので、歐洲語はこれが逆になつてゐるのは思惟の經濟から云つても損であると論じてゐる。以上略叙するとく、我が言語現象の種々相を捉へて一々新たな系統を立て細密な分析を試みたるはよけれど、中には煩瑣にして目甚だしき獨斷に陥つたところも少くないやうである。

標準口語法

未定名詞と
副體詞

地の文と對
話とで、終
止形を異に
する

昭和五年氏は標準口語法を著した。これは前書よりは分類が簡淨になつてゐると謂はれてゐる。品詞を名詞・動詞・副詞・副體詞・感動詞の五つに分ち、代名詞の目は立てないで、「たれ」「どれ」「どこ」「何」「幾つ」の類は未定名詞と名づけ、「或る男」の「或」の如きは副體詞の目を立てゝそれに入れてゐる。口語には上二段及び「ら」變のないとの世説をもどき、「信ずる」「決する」の如きは上二段であるといひ、世の文法家が文語活用圖に口語活用圖を引當てた誤を指斥し、地の文と對話とを一つに見る失を論じ、地の文は單なる客觀的記述であるから、第三階の直截終止格を叩いてよいが、口語は對話が本體で彼我の人情の共鳴を要求するから、直截終止では不十分である。それゆゑ對話には古より主として第

動助辭十種

四活用を終止格を用ゐた。物語や草子類を見れば、その間の消息がよく分るといひ、文語のさ行變格は口語には七種に分つべしとの新説を立て、動助詞の名はあるまじきものといひ、動助辭の稱を用ゐ、これを十種に分ち、「遠いさう」の「さう」は活用はないが、叙述性があるので、これを動助辭に入れてゐる。被動には利害・單純・可能・價值・自然の五種を分けてあるが、始めの二つはいかゞと思はれる。

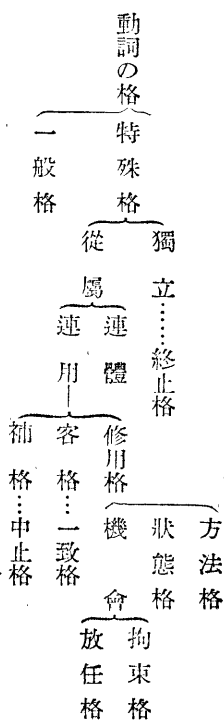
「國旗が高く檣上に掲げられた」の如き單純被動は我が固有の表現でないと説いてある。並舉を示す「彼は詩を作るし」の「し」は前言の實質的意義を自己の意義に利用するものなれば、これを寄生形式動詞といふべく、「卒業はしたけれども」の「けれども」の如きを世には接續詞とするが、これは形式動詞に化したものと云つてある如きは容易にそれと諸ひがたい。

靜助辭の分類

次に靜助辭は格助辭、感動助辭、提示助辭、名助辭、副助辭の五種に分ち、それらの語原につき一々解説を試みてある。中に拘束格の「と」は「いふ」・「ある」・「する」・「思ふ」などの意味を有する動助辭より導かれたものと説き、最後の詞の格の章には、詞が斷句中に用ゐられるには皆悉く格を有せねばならぬといひ、印歐語には動詞の格が貧弱であるが、我には次の如く豊富であると説いてある。

これを要するに氏は我が國語が添考語といふ點をいかに考へたか、助辭の獨立を認めないで、名詞や動詞に附隨したものとし、その格法を考へてゐる如く、我が國語の種々相を捉へて一々自家の埒塙にかさうとし、他の文法家の説と随分と開きのある考を述べてある。

動詞の格

國文法論纂
係結私見文の種類と
係結との關

補足語私見

松尾捨次郎氏は國學院雜誌等に發表されてゐた多年の論文等をまとめて昭和二年に國文法論纂を出した。文法教授に就いて以下十二章を本篇とし、附録には近代口語一班を添へてある。第二章の係結私見はその所論中最も重きを置いたもの、係結は國文法の根幹をなすもので、文の各成分はこれを基調として分つべく、詞の斷續もこの中に包容させてある。世には係に對して結ばないものを轉結と稱するが、それは實に意義のないことだと評し、係辭は文にも句にも置くが、結びは文にはあるが、句には存しないと斷定し、また文の種類と係結との關係を考察し、單文にはそれ〴〵係を結ぶべきことは勿論であるが、複文や重文にはその本文だけは單文と同様であつても、その句の方は係に對し結びを置くことはない。疑問文・命令文・反語文の係結に就いても説くところがあり、和田・金澤・松平・大槻諸氏の文典に於ける係結法の所説を難じてある。補足語私見の章に於ても諸家の説を斥け、却つて英文法學者齋藤秀三郎氏の説を甘ない、主語や目的と同一物を表すものを補足語とし、否らざるものを間接目的又は副

「なり」と「た
り」の區別

副詞的從屬
分

詞と見做すべしと斷じ、「風涼しくなりぬ」の「涼しく」、「晴氏は忠臣なり」に於ける「忠臣」を同じく三語と見做し、かゝる場合に於ける「なり」また「たり」は共に斷定をなすが、その間には區別があつて「なり」が永久的一般的なるに對し、「たり」は一時的特殊的たる差があると説いてある。次に「です」及び「ます」の成立的經過を詳説し、副詞的從屬分の章には、これを順的原因、逆的原因及び時を示す三種類があるといひ、廣日本文典上下照應中、上が假定的で下の既定なるを認めないのを非難し、大槻博士が旨と説かれた文法上上下呼應論の不必要を唱へ、順的原因を示すに東京・東北・庄内・秋田・京都・若狹・九州各地方により、方言の相違あることを一々例を擧げて委しく説いてある。

「て」の助辭
につき山田
博士の文法
論を斥く

金澤氏その
他の文法書
を駁す

次に山田孝雄氏の日本文法論中、古今の文法家を非難したるに慨し、「て」の助辭を複語尾の連用形に過ぎずとあるを檢討し、「て」の性質が活用語の連用形中止形に近いか若しくは接續の助詞に近いかの問題を掲げ、「て」には繼續を示すもの、並列に用ゐるもの、「ば」の意に用ゐるもの、「ども」の意に用ゐるもの、「と」の意を含むもの等様々ありて、むしろ助詞に見た方が穩當と種々の場合を擧げて論じた。

文章論雜錄中には金澤博士の「有り」といふ動詞の語根の母音を變じて他動詞「得」となるとの説及び一般の動詞が「有り」の複合動詞だとの説をもどき、連體言に未來の義があるとの説も難じてある。

「つ」・「ぬ」・「たり」・「り」の四辭に關しては源氏物語によりて統計をとり、その結果によりて、新たに説を立てたところがあり、大槻・山田・金澤三博士の著ばかりでなく、自餘の文法書の通説を是正

せんと意圖に燃えて筆を立てられたところが少くない。

國語法論考

氏はその後昭和八年に國文法概論を出し、昭和十二年には千頁に近き國語法論攷を公にされた。この書は氏の四十年間に於ける講學の結晶と云はれ、全篇七章より成り、文章法の體系を全體の骨子とし、各品詞をそれに關聯させて説いたもので、文章組織の根本は前著と同じく係結にありと説いてある。

その序論には國語學の歴史的概説を略敘し、語法の種類に關し、スキートの説を引き、妙玄寺義門の國語法研究の目的を述べ、國語の體系を説き、國語の説明は全體より部分に及ぼすのが科學的であり、且は國語の特質及び我が國の語法研究史の徑路から考へても文章論より入るべきとなし、本論に入つて係結を五章に分けて詳述し、最後の章には國語の特殊相を論じてある。

氏の係結論

客語と補足語との區別

從屬分

國語法の特
殊相

氏の係結といふは紐かゞみのそれとは異り、文の各種の成分が文を構成する法則全體を意味するものである。文の成分は主語・述語・客語・補足語・修飾語・總主語に分けてあるが、その關係一切が皆係結にすべるのである。氏は客語と補足語との區別に關しては客語は目的を示すもの、主語からその動作を受ける關係に立つものを間接目的と名づけ、主語または目的と同一の事物を再記するものが補足語であるといひ、從屬分は連體的と連用的との二種に分け、文の種類を疑問・命令・説明の三つに分ちてその係結を説き、最後の章には國語法の特殊相を敬語法、文・句の成分の位置及び省略を説いてある。浩瀚なものであるから、一々詳かに説くことは出来ないが、次の統計でその詳密なことが窺はれる。

目的等を示す「を」の検討に

二十九頁

補足語論に

三十六頁

主語特示「の」「か」の検討に

三十八頁

副詞に

三十五頁

副詞的連語を作る助詞に

四十頁

既定假定の呼應を排する條に

三十八頁

原因を示す副詞に

三十頁

時を示す副詞に

四十頁

係の下につく助詞の意義に

六十七頁

呼應説の是正

副詞に關するものが實に百八十餘頁に上つてゐる。中に大槻博士の唱へた呼應説の非を攻撃し、是正したところに力を盡してある。

三十六 大正末期より昭和へかけての文典（その二）

安田喜代門

國語法概説

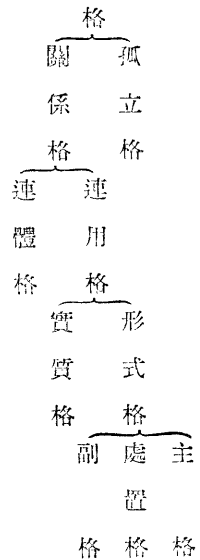
品詞の成立
を三次に分
つ

指示辭

數詞の十進
法と八進法

名詞に七格

三矢博士の門下の安田喜代門氏は昭和三年國語法概説を出した。通篇國語史の展開より眺めて品詞並びに文章を説いたもので、概説と銘はうつてあるが、ある點からいへば文法論に屬するものとも見られる。品詞をその成立上より三次に分け、主用語に屬する體言・副詞・接續詞を第一次の品詞、助詞を第二次の品詞、助動詞を三次の品詞に分けて、品詞性の強きものより次第に弱きものに説き及ぶべきことを理念として、所謂代名詞は名詞以前に存立したものと斷じ、その名稱は指示辭と稱すべく、指示は自己を中心として物の位置を割出す外に、對象の客觀的質差により分類するを適當たといひ、古は中稱を以て遠稱を兼ねたものがあると説き、次に數詞は十進法の成立以前に八進法時代があつたのではないかと假定説を立て、世上に助數詞と呼ぶものを數詞の具象化と名づけ、場所方向を示す指示辭とその成立を同じくするやうに説き、名詞に七格を立て、その中同格は連體法に外ならずとし、並立格は數的方面の觀察に過ぎないからこの二つは設立する必要がないとし、山田博士の賓格説に關しても論ずるところがある。而して文の中心を述格に置き、種々の關係を考へ、次の如き表を作つてゐる。



上一段活は古より存す

形式從屬動

動詞の法

四段活の命令には「よ」を附ける

「ます」の語史

副詞の新分類

形容詞の已然形は奈良朝にはまだ發達を見なかつたとの世説に對し既にこれありといひ、動詞の古形に關しても上一段活は古代より存在してゐたといひ、一段及び二段活等の語尾、「る」「れ」は本來は接尾辭であつたと見做し、「なり」「たり」の如き助詞を吸收した動詞は助詞の從屬性に引かれて半ば獨立力を失つてゐる。この類は宜しく形式從屬動詞と稱すべしといひ、動詞の法には完結と連綴とがあり、完結に平敘と命令とがあるが、命令完結に四段系の動詞には「よ」の助辭を附するのは從來誤といつて來つたのは宜しくないとし、平敘完結中連體形が終止形にとつて代つたのは、係結法の影響と見做してゐる。助動詞は相と態とに分ち、敬の助動詞「ます」の語史につきては「參らす」から天草本平家物語に見える「まらす」に轉じ、次に狂言記の「まつす」にうつり、それより「ます」になつたと説いてある。副詞は副格と連體格とに分ち、前者を實質修飾副詞・敘述樣式副詞に、實質修飾副詞を更に實質と形式とに分けるといふ如く細かに分類し、「いはゆる」の如きは連體格副詞としてある。助詞も孤立と關係とに大別して關係を更に形式と實質とに分ち、形式助詞を量的と質的とに分けるが如き分類を用ゐて新し

さをしてある。

口頭語と記
録語

文章論の任
務

疑問文は平
敘文の一目
とす

高等國語法

本枝増一
文語及口語
法
高等國文法
講義

文章篇に於て、世上には口頭語と記録語とがあり、會話の文には省略が多いなどと説くが如きは實は愚論であつて、これは相互に共通の雰圍氣と共通點を有する心理の流動とがある爲に、一端に觸れて全面を了解し得るのであつて、全く自然的のものである。會話でない場合は別の立場になる。これを混じてはならないと心理的自然的に説かうと企てた。次に文章論の任務を論じ、その成分を説き、主部は思想の連續形式の一つ、述部は斷止形式の普通なもので、これに感動・平敘・命令の三つを立てることは我が語法上當然のことであるが、疑問文をこれと並行せしめる要は毫もない。それは平敘の斷定文と共に對立せしむべきだといひ、次に格を論じ、句を説いてある。大體の組立骨格は山田氏の文法論に基きながら新しいものを加へてある。氏は昭和四年に高等國語法を出した。この書を骨として多くの史實を肉附けとしたものである。附録には單語構成論・敬語法・修辭法と國語法・假名遣法より動詞・助動詞活用表・分類表・引用書、年表等を添へてある。

尙氏はその後恩師三矢博士の遺稿を貰つて文法論と國語學や國語の新研究や、國文の新研究を編纂して世に出した。

奈良女教師の本枝増一氏は平凡社の國文學講座に文法及び口語法を出し、昭和四年にはこれを改訂して東洋圖書會社にて高等國文法講義を單行された。骨を廣文典にとり、丁寧親切に詳説し、問題となる

べき條項には諸家の説を一々引いて短評を加へ、斯學に志すものを導くことに努めてある。昭和六年には目黒書店より千頁にもあまる浩瀚な高等口語法を出し、昭和十二年十三年に高等國文法新講品詞篇、文章篇各一冊を東洋圖書會社より出された。品詞篇の部だけでも九百頁に近い大冊である。前書と同じやうに他の學者の説を極めて詳密に引用し、比較説明を加へて時には雜誌所載のものもなるべく漏さないやうに努めてある。氏は嘗て國語と國文學との特輯號に語性移動論を載せてその種類を三つに分けて説いてゐられるが、本書の引例に多少首を傾けられるものがある。品詞篇に載せられた中にはこれと矛盾するものがある。例へば、「づぶの素人」の「づぶ」を副詞とし、「堂々と」を形容動詞とし、接尾辭を副助詞と定めたものもある。

文と語の區別等に關しては京大の國文學記念論文集に文法的決定への疑問と題し、山田博士・松下大三郎、小林英夫等の諸氏の説を掲げて世説を質さうとした。

また昭和八年に出された假名遣研究史は帝大・帝國圖書館・靜嘉堂文庫・大阪府立圖書館等の書本を一々取調べて、定家假名遣・定家假名遣の傳説、契沖の歴史的假名遣、異流假名遣、明治・大正時代の假名遣研究、明治・大正・昭和時代の假名遣問題と章を追ひ解題的に説き、附録には假名遣の歴史的研究資料目録を加へてある。山田博士の假名つかひの歴史は往年文部省が小學校に於ける改定假名遣に反對せる熱を以て書かれたもの、これは稍々解題的に委しく記されてある。

三十七 大正末期より昭和へかけての文典（その三）

山田 孝雄
日本文法要
論

山田孝雄博士は大正十一年二月日本文法講義一冊を出し、昭和六年九月には岩波講座日本文學に日本文法要論を載せた。講座のことゝて僅々百三十頁に過ぎないが、「單語と文と」以下「語句の省略」に至る十五項、名の如く要約して述べてある。舊著に多少の改竄を改された跡も所々に見られる。語と文との關係につき、文法學上、思想を發表する材料としての語と、その材料たる語を用ゐて目的たる思想を發表する文との區別を立て、語の種類分けは富士谷成章の説に準據して（一）體言、（二）用言、（三）副詞、（四）助詞の四つとし、（一）は觀念語で名詞・代名詞・數詞を含み、（二）は屬性をあらはし、又同時に陳述の力をあらはすが、これら普通の用言の外に「あり」及び「如し」は別に形式用言の目を立て、動詞と形容詞との別に關しては、前者は事物の性質狀態が推移的發作的の觀念として意識内に描かれたるものをあらはし、後者は靜止的固定的に時間に關することなく、心内に描かれたる事物の性質狀態を説明するものとし、用言の活用を十一種に分ち、助動詞の名稱を斥けて前著の如く複語尾の稱を用ゐ、助詞を格助詞・副助詞・係助詞・終助詞・間接助詞・接續助詞の六類に分ち、中に格助詞・副助詞・係

動詞と形容
詞との別格助詞・副
助詞・係助
詞の區別

「は」と係助詞との關係
語の位格
主格と述格との關係

助詞の三種は互ひに紛れ易いが、儼然たる區別があり、中にも係助詞は接續助詞「は」の下について、その上の句とその下句との陳述の關係を嚴密に結合する用をなすことがあるが、格助詞や副助詞は決してさういふことはないことを重要な差別點とし、次に「は」と係助詞」と題して世の文法家が「は」を主格を示す助詞とするのは誤であることを縷説し、次に語の位格として呼格・主格・賓格・述格・補格・連體格・修飾格の七つを立て、主格と述格との關係につき、一般に唱へられてゐるやうに、主格は述格に對するものとの考を排し、主格は賓格に對するもので、陳述の力はそれらの外に存すといひ、「なり」「たり」・「である」・「だ」の繫辭はその役目をなすものといひ、述格は主賓二觀念が合一するか否かを決定する思想の作用を以て内面の要素とし、それを言語の上に發表したものだとし、例へば「櫻は美し」といふ表現に於て、「美し」は賓格兼述格だと説き、主格が賓格ばかりに對するとするところに問題があり、特に上例の如く形容詞が述語となる場合に、それに繫辭まで含んでゐるとするところに、議論の餘地がある。

文の研究の基礎としての句

次に「文の本質」につきては統覺作用によつて統合された思想が言語といふ形式によつて表現せられたものといひ、「文の研究の基礎としての句」に就いては、一語で文また句をなすものがある、命令文の如く主格なくして句をなすものがあるから、句は單語の結合するものとか、主語・述語を具有するものと説くが如きは従ひがたいとし、同社會の人がこれに對し一定の思想を必然的に喚起しうるか否かが、

一元式の喚
語の句と二
元式の述體
の句

語の排列に
於ける原理

句の完不完を鑑別すべきものと斷じ、次に「句の性質上の種類分け」に於ては、主格・述格を具へないで感情的發表をなす一元式の喚體の句と、命題の形をとる理性的發表の二元式の述體の句との二大別となし、前者を感動喚體と希望喚體の二つに、後者を説明體・疑問體・命令體の三つに分け、次に喚體句と述體句との交渉を説き、例へば、「世の中はつねにもがもな」の如き述體句の形式から變形した希望の喚體句は從來何人も閑却して説かざるところといひ、また「ありがたの情や」・「あはれの物語や」の如く體言を骨子としてこれに狀態をあらはす用言または副詞を連體格として加へ、述體の句を喚體の句に轉ぜしめ、賓格・述格の語が形容詞または情態副詞であるときは、例へば「君の弓勢の恐しさよ」に於ける如く主格以下の位置を變更せずに連體格に變じたり、賓格・述格を體言に變ぜしめたりしてこれを轉成することを説き、次に「語の排列に於ける原理」として、言語の本性が時間的精神的のものである爲に延長性を必とし、隨つてこれが言語排列を生ずる所以であるといひ、語の種類分けの上に存する、即ち實質用言を中心として考へるとき、觀念内容を對象とする場合にはそれに對して從屬し、または裝定する語は排列上、上行性を有し、陳述に從屬する部分は排列上下行性を有する差異がある。斯くて

(1) 主格 補格 用言 (實質用言なる場合)

(2) 主格 補格 賓格 用言 (實質用言でない場合)

(3) 主格 陳述の修飾 情態の修飾 補格 賓格 用言

用言は陳述
の中心

賓格は補格
より用言に
密接

日本文法學
概論

舊著を改め
た箇所

の如くなる。用言が陳述の中心であるから、補格は用言に從屬する度が主格よりも親密なるが故に近く置く。用言が實質用言でない時は賓格を置く。その位置は用言の直上に置かねばならぬ。蓋し賓格は補格よりも一層用言に密接の關係があるからである。修飾格は用言に從屬し、必要物といふより裝飾品であつて補格などより親密の度が軽いから、補格よりも上に置く。修飾格には情態に關するもの、陳述に關するもの等がある。情態の修飾語は用言の觀念に關し裝定するもの、陳述の修飾語は陳述の時にその對象となるものであるから、二者並用の場合には(3)の如く陳述の修飾語が上に置かれるといふ風に語の序列に關し一々理由をことわつてある。次に「文の種類及び文法學の極限」としては複文にあることをいひ、最後に語句の省略を説いて筆を收めてある。

山田博士は昭和十一年に至り、更に日本文法學概論を著された。この書は千二百頁に上る浩瀚なもので、三十年前に出された名著日本文法論を改定されたものと謂つて宜しく、氏の精力の老境に入つて益々壯んなことを想望せしめる。本書の文法説は根幹に於ては文法論と同じであるのは云ふまでもないが、他書の排撃や自説の主張は必ずしも必要がなくなつたので、すべての敘述が議論よりも説明を旨とされてある。而して舊著と異なる主なる點につきては、氏みづから卷頭に述べてある。即ち舊著に未だ論及されなかつたこと、説いて尙委しくなかつた點、多少改めねばならぬ點などにつきて、「その一二をいはず」と筆を起して、「形容詞に就きて、複語尾につきて、助詞『は』につきて、位格殊に主格述格につきて、

日本文法要
論との關係

現代文語の
標準

接續格を除
去

及び汎く句論に於いて醒る改め加へた所がある」との言に徴してその相異を知るべきである。而してその改訂された要領は岩波講座の日本文法要論に發表されたものが多い。

第一章「文法學とは何か」に於て、言語が社會的歴史的のものであることを述べ、語法は平安朝によるといふ説を斥け、現代の文語と目すべきものは「大體書籍雜誌等に於ける論説の如きもの、又所謂口語體以外の雜錄類又詔勅法令に用ゐらるゝ文章の如きものをさす」と知るべし。」と云つてある。從來奈良朝・平安朝・鎌倉時代の語法を究められた氏のことなれば、從來とは多少見解を異にされた意味が含まれ、既に前年に出された「漢文の訓讀によりて傳へられた語法」の精神もこれにこもつてゐると考へられる。全篇五十八章から成り、首の二章は序論といふべく、第三章「一の語とは何ぞや」から第二十九章「語の轉用」までは語論で、第三十章「語の位格概説」から第三十八章「修飾格」までは各品詞の用法上の横斷的研究で、運用論の中樞をなすもの、中に舊著には接續格を立てゝあつたが、この書にはこれを修飾格の變形又は特殊の場合として位格の一つに認めてない。氏は世のいはゆる接續詞は認めないで、これを副詞の中に併合してゐられる立場上から見ても當然である。第三十九章より第四十一章に至る三章體言・用言・副詞の用法は各品詞の用法上縦斷的研究であつて、第四十二章以下は句論である。前の論には口語には觸れてなかつたが、この書第一章には「純然たる言文の一致の行はるべきが如くに考ふるは一種の迷妄といふべし。」といひながら、文語と口語とは「なし得べくは之を近づかしむるを可とす。」と述べ

言文一致は
行はれない
が、文語と
口語の接近

禁止の「な」
に係辭とす
る可否

「は」の係辭

未開展の句

てゐられるが、今一步を進めてない。名詞の章には拙者・小生・迂生・手前の如きは從來代名詞と稱せられたるが、謙稱の名詞とすればよいとされてゐる。これらは品詞の移動を顧みない考のやうである。形容詞論中、「ごとし」は舊著には形式用言としてあつたが、これには形容詞の特別なものと取り扱つてゐる。複語尾の中、動詞の未來といひ、過去といふことは不合理とされることは前者と同様であるが、「けむ」は過去の事實を想像すると説明してゐるのは慥に矛盾といはねばならぬ。回想といひ、豫想といふも時制に與からぬことはないと云へぬであらうか。係助詞の中に「禁止のな」……その「な」を加へられたのは博士の一つの發見になつてゐるが、助詞は一切觀念語の上にはつかないとの規定に背く例である。元來は終助詞であるのが、ある意義を強調する爲に移動したと説くのは不倫であらうか。「は」の係辭が格助詞でないことは詳密に説かれてゐるが、一つの辭が十分に分化せずして兩方に用ゐられるとするのは不當であらうかとの疑念も起らぬではない。これを非論理的頭腦の持主の謬見と評し去るのはもう少し手柔かく説かれたならばの感なきにしもあらずである。句論「複雑なる文及び文法學の極限」には複文にあることを説かれ、種々の基形を示されてゐる。合文の中に「とまれかくまれ、疾くやりてむ」の類を擧げてゐる。「とまれかくまれ」の如き、副詞句と見るか、條件を示す文とみるか人により見解も相違があらう。最後の未開展の句と略體の文の中、前者は一語で一文をなすものをいひ、これに對象を指すものと屬性を示すものとの別があるといひ、心理學者が幼蟲狀の句と呼んでゐるが、もとより完全な句ではな

いが、放棄すべきでないとし、説明を加へてある。尙日本文法要論に述べたところがあるので、その詳説することをしなかつた。

漢文の訓讀
によりて傳
へられたる
語法

現代語法の
本質

漢文訓讀の
史的概説

家法倭點

和漢兩讀法
和讀要領

點點復古

漢文和訓例
漢文の訓讀
に傳はれる
語法の概説

山田博士は昭和十年に至り嘗て東北帝大で講義された原稿を整理して、「漢文の訓讀によりて傳へられたる語法」の一卷を出された。その卷首に「現代語法の本質」と題し、現時の普通文の語法は中古文法そのまゝではなくて、むしろ漢籍の訓讀によりて今日に傳はれる一種の語法の系統に屬するものといひ、福地櫻痴居士が明治今日の文章を論じた(明治二十六年)説を補正し、古來朝廷の公式の文は宣命以外のものは悉く漢文を用ひ、維新當時まで嚴守され來つたので、維新後漢學者流の假名交り文と國文學者の用ゐる通俗文とが融合して一體となつたものといひ、次に漢文の訓讀の史的概観につきて、新羅の薛聰が作つたといふ吏道のことに觸れ、漢文訓讀はそれよりも尙古い時代に起つたものとし、ヲトコ點を説き、室町時代に至り岐陽和尚の四書新註の和訓といふことが起り、桂菴和尚の家法倭點が出で、それより徳川時代の道春點には和漢兩讀法を用ゐてゐたが、闇齋點に至り兩讀法すたれ、太宰春臺の和讀要領の如きから三平點の如き奇矯のものも生じ、後藤點始まりて一時天下を動かし、幕末には一齋點の如きもの天下を風靡し、日尾荊山の點點復古これを矯めて道春點に復せよと絶叫したが、大なる反響なく、明治の御代に至り、權田直助の漢文和訓例の著が出で、穩健な訓みに復したことを概説し、次に漢文の訓讀に傳はれる語法の概観につきて、二様の別あり、一つは古代の語又は語法をそのまゝに傳へて今日

に至れるもの、例へば「ごとし」の如き、一つは本邦固有のものでなく、漢文訓讀の爲に案出されたもので、例へば「いたりて深き」の「いたりて」、「天下及び百官」の「及び」、「朱雀院竝に村上の云々」の「ならびに」の如きが主要なるもので、この他固有のものながら漢文のよみ方の制約を蒙りて國語本來の意義用法のいくらか變質したものである。「未だ」の副詞に否定の陳述を要するやうになつたとか、「既に」が過去のもを呼起すやうになつた如きものもある。「蓋し」とか「豈」の如き譯出にあたり適當の邦語がなかつたので、文字のまゝに直譯して置いたのが新語となつたものもある。單語の上ばかりでなく、彼の助動詞の如きは、初に副詞の如くにより、終に複語尾の如くにまた必ずまねばならぬもので、語法の上に影響を來すといひ、作文大體に擧げてある。

須 宜 蓋 當 令 將 教 遣 猶 使 未 縱

返 讀 字

の如き返讀字はそれであるといひ、以下に

ごとし いはく ねがはくば いはゆる なん／＼とす かへんなん なかりせば なかつせば し
かり しかれども しかうして しむ…………

結 論

の數四十有餘を擧げ、一つ／＼につき漢籍に於ける古訓の多くの例を載せ、結論に前説を要約して、普通文の文法の研究には漢文訓讀の影響を深く掘り下げてゆかねばならぬ、この研究はそればかりでなく、口語法の上にも忽諸に附せられない、尙漢語漢文の我が國に入りてより二三年の星霜を経てゐるから、

漢字廢斥を
難す

國語の受けた影響は甚大なるものがあるといひ、最後に漢文訓讀法につきて歴史的背景とその根柢に横る理法とを概言し、些々たるが如く見える漢籍訓讀の上にも隱微なる社會人心の發動が卜せられ、漢文の姿に即し而も國語を離れずして讀まうとすることが國語國文と漢語漢文との間に交渉を生ぜしめたもので、文化史の一面からばかりでなく、語法史の上から見ても密接の關係がある。随つて漢字廢斥の如きは今日の狀勢では言ふべくして行はれぬもの、如上の事實を顧みないでこれを排斥するが如きは角を矯めて牛を殺す類と漢字廢斥論者に忠言をして筆を收めてある。國語の簡易化を唱へる人から見れば、議論のあるところである。尙卷末に露人オヴィディエフ氏の質問に對し、答へた一書を附録として載せてある。

國語の中に
於ける漢語
の研究

國語の中に
於ける漢語
彙

山田博士は昭和十五年四月「國語の中に於ける漢語の研究」を刊行された。これは彙に出された「漢語の訓讀によりて傳へられたる語法」の姉妹篇といふべく、序によると昭和六年東北大學に於ける講義に筆を加へたもので、この方面に於ける劃期的の著作といつて然るべきであらう。章を九つに分ち、第一章序論に國語中に於ける漢語彙の量的に多大あることを言海に於ける語數の統計などを引き、外來語としての漢語が多く歸化語の階段にあることを説き、研究の範圍と目的とを示し、第二章「漢語の傳來」には漢學佛教の渡來より國語文獻に入つてゐる漢語彙を擧げ、上代より現代に至るまでの史的考察をとげ、第三章には「本來の漢語と認むべきものゝ範圍」には漢音語・吳音語・唐音語・古音語を例示して

漢語の特色

漢語の形態
の觀察及び
音の觀察

吳漢音の對
應表

源流の觀察

漢語彙と文
化史的思想
史的との關
係

佛典に見える音譯語は除いてある。第四章「漢語の特色」には單綴語で、音韻の組織が複雑なことをカール・グレンの統計を引いたりして音韻の組織を説き、語形の變化や擬人法の行はれぬこと、孤立語である爲に語の排列が文法上重要であること等を説き、第五章「漢語の形態の觀察」にはその成立につき六書説を詳述し、次に漢字の音の觀察に入り、その基本智識として韻鏡を講明し、我れに用ゐる漢字の音を吳音・漢音・古音・唐音・慣用音に分けて説き、中にも吳漢音について歴史的由來を詳かにし、その對應の表を作り、一々實例を擧げてその關係を明かにするに努め、唐音・倭音などにつきても精緻の考察がある。博士は漢學佛典にも詣りが深く、心空の法華經音義や小川本華嚴經音義私記や、承曆最勝王經音註などといった類をも自由に引據して考説してゐられる。但し倭音については異説がないでもない。第六章「源流の觀察」には東大寺獻物帳や和名本草や倭名鈔等により、動植礦物・醫藥顏料・寶貨布帛・人體病名より音樂建築・佛寺佛具・道路舟車・服飾調度・飲食・運動・遊戲等に分ち、流入した漢語を拾蒐して、學術並びに法制宗教上より眺めて、外來文化とその語彙との關係を文化史的思想史的に考察したもので、流入の手續よりの觀察は直接間接の交通輸入によるもの、漢學より傳はりたるもの、佛教の言より傳はりたるもの、洋學の翻譯より生じたるもの、四項に分ち、外來の典籍を博渉して一々その出典を求められた努力は甚大なもので、これに我が文獻に見えてゐるものを加へられたならば、錦上添花を飾るものであらう。

漢語の影響
により起つ
た國語の種
々相

第七章には「漢語の國語の内に入れる状態」を説き、第八章には「漢語の影響によりて起りたる國語の種々の状態」につきて、音韻に及ぼせるもの、造語法に及ぼせるもの、語法に及ぼせるものに分ちて説き、第九章結論には名詞・數詞及び状態の副詞には漢語が氾濫してゐるが、その他には侵入を許さぬことを述べて筆を收めてある。前四章は後の準備的の考察で、第五第六章に全力をつくしてあるやうに思はれる。

三十八 大正末期より昭和へかけての文典（その四）

細江逸記
國語の相を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原相

「る」「らる」
の語原に關し諸家の説をもどく

細江逸記氏は昭和三年岡倉教授の還暦記念論文集に「我が國語の相を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原理に及ぶ」の一論文を載せ、梵語には自動詞と所相詞とは一原から分れ、希臘語には能相所相の外に中相が存し、拉丁語には中相は亡びたが、或種の自動詞はそのなごりを留め、所相は反射性能相より來つたことより類推し、國語の古い時代には「ゆ」「らゆ」の如き中相が存してゐた。その「ゆ」「らゆ」が後に「る」「らる」となつたもので、「見ゆ」「聞ゆ」の如きは上古の中相の遺物に外ならず、「忘るる」身をば思はずの「忘らる」は「忘れらる」の省略とする一般の説を斥け、中相の「忘らゆ」より來たものと解釋し、「る」「らる」の語原に關し、ホフマン、アストン、チェンバレン、金澤博士、大島博士等の得・有の重複添加説をもどき、「昔しのばる」の如きを山田博士が受身と勢力とを混合したものであらうとの説をも難じ、勢力及び自然相は受身より夙く發生せるものと云ひ、所相は中相より發生したもので、我が國語では能相の一種に屬し、純粹の受動をあらはしたものでないといひ、また上古に於ける中相は一方所相となると同時にまた一方使役相をもあらはしたといひ、延約説をも斥け、各

現代

動詞の原形

動詞の原形は四段活であつて、その時代には相の區別は形の上には見られなかつたが、それより二段活が生じて、こゝに記紀に於けるが如く能相中相の併立時代を生じたといひ、この中相はその本質上反照性を有し、また或るものは移動性を有し、この發達の方角を律したものは

反照・使役・
他動の方則

(1) 反照 受動 自他の方則

(2) 反照 使役 他動の方則

(3) 受動 使役の方則

の三つであるといひ、自動四段言より派生した新形は他動四段言の場合より複雑にして、反照使役他動の方則が極めて有力な活動をなし、その結果として中相の下二段言より更に所相の發展を見、反照性に終始する中相はこの場合には活動力弱く、或は獨立の自動詞の如く思はれ、或は別語に變じ、その成立形式は他動四段言の場合に於ける所相と同じきに拘らず多くは四段に轉じ、またその用途により幾多の變化を生じたと説いた。

永田吉太郎
動詞の相に
關する論

その後永田吉太郎氏は昭和六年八月の國語と國文學に動詞の相に關する一論文を載せ、能相がまづ成り、その用途はひろく、國語大多數は四段活用を以て原始形とし、自動的に用ゐられた能相の中、單なる自動詞として残つてゐるものは四段活用をなすもの、反照の意義の強められたものは新たなる形を作つた。これが即ち中相にして、活用よりいへば、二段活特に下二段活に屬する大部分である。二段

活の自動詞も他動詞も共に中相より發生したとし、他動から反照性中相を生じ、自動詞より使役性中相を生じ、自動詞より反照性中相 *u, unu, ure, o* の語尾を生じ、所相の發達を見ると一方には中相として起つた「冷ゆ」・「寝ゆ」・「肥ゆ」の如きはそのまゝ自動詞として取り残され、奈行變格は能相と中相との相混じたものかといひ、上一段は文獻以前には種々の形のあつたのを四段に統一された際に尙同化されないで取り残された形と想定してある。

國語の所相は中相より分け、中相はまたやがて能相の一種なれば、自動詞にて所相の作られることも亦當然で、中相より眞の受動の外に勢力能力敬語などを表すものを生じた。また拉丁語の *Deponent Verbs* に比して「納まる」・「明かる」の如きは半所相と名づけてある。氏の企圖は中相といふ意識を語形論に加へ、活用と並びて動詞の相による語形變化を認めようとする點にある。細江氏の所考に基き一步を進めてあるが、尙實證的の考察を深めねばならぬと思ふ。

細江氏は昭和七年泰文堂より時制の研究を出した。その前年輕井澤に於ける夏期大學講演に筆を入れたもので、英語の動詞のテンスの意義につきての研究であるが、國語の上にも對照して説いてある。章を動詞とその時制 *Present Tense, Present Perfect, Past Tense, Future Tense* の五つに分ち、博く歐洲學者の説を引いて *Tense* は普通一般に時の區別をあらはすと見るが、非常に無理が伴つてゐて當らない、と斷じ、畢竟するに思想發表樣式の區別に過ぎないと、*Present Tense* は本質的に決して

直感直敘の
様式・確認
確述の語形

集注敘述の
語形

目略回想・
傳承回想

現在の時をあらはすものにあらすして直感直敘の様式、Present Perfect は確認確述の語形である。Perfect は直斷性のもの、Imperfect は低徊性のもの、Expanded Forms は通常進行現在、繼續現在と呼ばれてゐるが、英語に於ても後世は格別として、本義は Imperfect の低徊性を一層高調させたもので、随つてこれを集注敘述の語形と云ひ、Aspect には連續性と反覆性があると云ひ、以上 Perfect と Imperfect と Expanded の三つを總括して回想敘述と云ふ。我が國語の助動詞「けり」と「き」とは回想敘述に用ゐるもので、これを目略回想・傳承回想と命名し、一方を記錄、他を對談とするは委しくないと論じ、次に Future Tence に關してはこれを豫想敘述と名づくべしといひ、想像推測の敘述であつて時の上から云ふべきでないとしてある。英語の上に説くのが主になつてゐるが、所々國文法に對比してある。尙歴史的現在と稱するものにつきても、ホーマーの作には全く存してゐない。ヘロドタスより盛んに用ゐ出したものであるが、これは修辭上の論であつて文法上のことではない。英語に於てはこの類に永久の眞理をあらはすもの、習慣的動作、反覆する出來事、未來に關することながら確實性を帯びる時等の敘述も皆現在形にてあらはすが、時の上から検討するに當らないことも述べてある。歐米の學者の説を擧げて批判を加へてある中に Shall と Will との研究に關し米國の Charles C. Fries が千五百五十七年から千九百十五年の間に出した五十篇の脚本につき總合的研究を行つたことなども紹介してあつて、その所説は它山の石となすに足るのである。

現代日本語
の表現と語
法

指詞 コソア
形式名詞

銕接動詞・
接合動詞・
聯成動詞・
能所・移動
・受給關係

現代語法の
研究

心理學・音聲學の權威たる佐久間博士は昭和十一年に現代日本語の表現と語法の一書を厚生閣から出した。民族精神の所産たる文化財として日本語をその生々した現代の姿についてとらへ、その本質的なものをつかみ出す意圖を以て、昭和九年以來教育國語教育誌上に登載したものを纏め、再檢討を加へてこの書を成したといふ。その前篇には代名詞、後篇には動詞を中心としたもので、指す語を大槻博士の分類によらないで、「コソアド」の新しい術語を用ゐて共時的な指す語の語幹統一を説明してある。嘗て代名動詞と呼んでゐた「おくの方のは」に於ける「の」の如きを形式名詞と名づけ、その種別を細かに説き、動詞に於ては音便を説き、音聲轉化を論じ、自他の對立を圖式を以て現し、複合的動詞の接續の緊密の度によりて銕接動詞・接合動詞・聯成動詞の別を立て、準助動詞のかず／＼を擧げて移動の來往關係を受給關係に聯關せしめ、能所關係・移動關係・受給關係を説くことが詳かである。氏は本來の文法學者でない爲に思ひ切つて新しい觀點に立つて現代語の方則をつまゝとした。隨つて新味に富むと共に部分的に首肯しがたいものも雜つてゐる。さうして國語教育や國語政策につきても熱意を以て意見を吐露してある。

同博士の現代語法の研究は昭和十五年に厚生閣より出た。曩に著された現代日本語の表現と語法の續篇で、形容詞以下動詞に至る後半を收めてある。ある體系を備へた鳥瞰的な語法論ではなくて、東京の

吸着語

舊市域を中心して現に話される言葉につきて鑛脈を深く掘り探るやうな態度で研究されたもの、十年前から關心をもつてこれをしらべられたといふ。而して江戸末期の文獻に遺つてゐて現代の表現と同じ用例のものを引證されてあるも結構である。一つの詞をとり扱ふにもいろいろの點から考へ、標記に注意し、アクセントまで加へ、東京語の語感をあらはして出してある。古い文法の型にとらはれない。その最もかはつたものには吸着語といふ一項を立てた類である。それは松下氏が名づけた形式名詞や田丸氏の廣さ詞、橋本博士の立てた準用辭等から工夫したもの。その所論は昭和十三年の國語國文に寄せられた所論に據つたもので、名詞から性狀についての語、副詞的及び接續詞的なもの、時に關するものに互つて吸着語を説いてある。著眼は新しく面白いが、議論の多いことは云ふまでもなく。「は」と「が」の區別に關し、「雪は白い」といふのは一般的で、「雪が白い」は特殊的な表現と區別した如く卓見も少くないが、「白いのを下さい」の如き例中の「の」を形式名詞としたり、「ねえ、あなた」の「ねえ」の類を助詞としたり、陳述の詞に伴ふ前後を結びつける役割をなすもの、例へば「たとひあの人さういつたにしろ」に於ける「しろ」までを接續詞の機能として説くが如き一讀しては首を傾けられぬものも雜つてゐるが、兎に角音聲學・心理學の權威である氏の著として新味に満ちたものと思ふ。かゝる新しい觀點に立つて從來と異つた新體系の確立されるに至らば、斯界を益することが尠くないであらう。

「は」と「が」
との區別

三十九 昭和期に於ける方言の研究

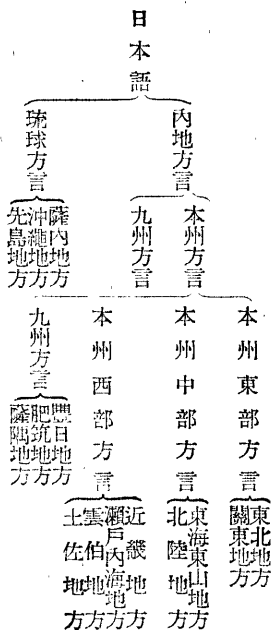
音韻分布圖
・口語法の
焼失

南方方言資
料

方言地圖及
び國語の方
言區劃

國語調査會の事務が大正五年六月文部省普通學務局で取扱はれるやうになつてから、方言の調査は東條操・湯澤幸吉郎兩氏が専らこれを擔當し、調査主任の保科孝一氏の下にその業を進め、音韻分布圖二百枚、口語法三百五十枚、音韻口語調査報告も脱稿してゐたが、出版に至らない中に大正十二年の大震災によつて一切烏有に歸したのは惜しみても餘ること、特に東條氏の南方方言資料は印刷纔に成つて一本も留めないで、同時に灰燼に歸したのは自分どもの體驗から云つても頗る同情に堪へない。

氏は昭和二年方言地圖及び國語の方言區劃を發表し、その區劃を次の如く區別した。



昭和期に於ける方言の研究

東部・西部
の外中部方
言域を立つ

九州方言の
本州方言に
異る諸點

薩隅方言の
特徴

方言採集手
帖

柳田國男

國語の方言區劃の一冊は同上地圖の説明書であつて、篇を方言の研究、方言區劃に關する諸説、國語と琉球語、古代語と九州方言、本州方言と東西方言境界線、本州の諸方言、大日本方言地圖、方言研究法の八項に分けて説いてある。從來東部方言と西部方言と二大別にして來たのをその中間地帯の本州中部方言を新設し、各方言區を更に小別してその差異を説いてある。長年月に亘り調査された結果をこのパンフレットに要約して示されてある。例へば九州方言の本州方言に對立するのはジ・ヂ、ズ・ヅの區別あること、本州のオ母音がウ母韻に轉するものが多いこと、動詞・助動詞に二段活用が昔のまゝに残つてゐること、形容詞に特別なるカの活用が残つてゐること、係結のなほ殘存してゐること、換言すれば、九州方言には室町時代以前の語法の佛が存する點を擧げ、同じ九州方言でも薩南地方は入聲の語尾や短呼の傾向が著しいとか、形容詞には「か」の如き形があるとか、二重母韻の變化が異つてゐる點で他と異るといふ如く、それ／＼各地の方言の特徴を示してある。翌年六月には方言採集手帖を出し、方言研究の獎勵に努めた。

東條氏が方言を言語學的に研究されるに對し、民俗學の上からこれを研究されたのは柳田國男氏で、氏は大正五年四月發行の郷土研究第四卷第一號に方言欄を設け、これを論じ、東條氏はこれにも刊行方言書目を發表し、先に焼かれた南島方言資料も昭和五年には増補訂正の上發刊されるに至つた。

柳田氏の方言に於ける本格的活動は昭和に入つてからであつて、同二年四月の人類學雜誌（同十二卷五號）

に蝸牛考を發表し、爾來民族その他の雜誌に矢繼ぎ早に有益な澤山の論文を發表して、漸次勃興し來つた方言研究の機運を促進指導した。

蝸牛考

方言周圍論

昭和五年七月言語誌叢刊の第一冊として蝸牛考が刊行された。この書は名は蝸牛考であるが、實質は方言學概論とも云ふべきもので、その内容は岩波の文學講座に於ける東條氏の方言研究の嚮觀に紹介されてゐるから茲には略する。中に説いてある方言周圍論は名高いものである。實に昭和時代に於ける方言學の生みの親は柳田・東條兩氏であることは云ふまでもない。氏の方言に關する論文の當時に於ける主なるものを擧げると、次のやうである。

柳田氏の論文

地名考説	民族第二卷三號	昭和二年
方言と昔	アサヒグラフ 二十九回に真る	昭和三年四月より十月に至る
蝸牛考	人類學雜誌	同 四月より七月に至る
農民史研究	斯民	同 六月より八月まで
民間些事	近代風景	同 七月より九月まで
少さきものゝ聲	信濃教育	同 九月より十一月まで

かくて東京帝大の國語研究室内の方言研究會を始め東京文理大の方言研究會、廣島文理大の廣島方言學會、京都帝大の近畿國語方言學會、國學院大學の方言研究會が次第に生れ、昭和六年九月より春陽堂

方言研究會が所々に起る方言發刊

昭和期に於ける方言の研究

言語誌叢刊

にて方言といふ毎冊八十頁の月刊雑誌の刊行を見るに至り、更に刀江書院よりは言語誌叢刊の如き純學術書が叢書體にて發刊され、また各地に於てその地方の方言集の刊行されるものが夥しく、枚舉に遑のない程である。特に個人出版として騰寫版に附したものは頗る多く、盛岡の橋正一氏の一言社にては方言と土俗が昭和五年八月よりすでに二十五冊を出してゐる。氏は昭和十一年に育英書院より方言學概論を、昭和十二年には厚生閣より方言讀本を刊行し、近くは騰寫版を用ゐて方言辭書を出さうと試みたが、病歿して完成するに至らなかつた。

雜誌方言の内容

方言特輯號

春陽堂から出した雜誌方言には、服部四郎氏の國語諸方言のアクセント概觀、東條氏の方言研究の方言、刊行方言書目解題、柳田國男氏の音訛事象の考察等有益な論文を以て充たされ、特輯號としては、瀬戸内海方言特輯號、琉球方言特輯號、アクセント特輯號を出し、多くの讀者をつないでゐたが、昭和十三年上田萬年博士逝去せられ、その追悼記念號^{百號}を以て終刊としたのは惜しいことであつた。

國學院大學
方言研究會
風位考資料

國學院大學方言研究會にては、八丈島中之郷村方言集以下各地の方言集合せて二十一集を出し、別冊としては柳田氏の風位考資料を出した。

言語誌叢刊

言語誌叢刊は第一期より第三期に至る毎期各四冊づつ合せて十二冊刊行された。

柳田 國男 蝸牛 考

東條 操 南島方言資料

三矢重松

莊内語及語釋

山口麻太郎

壹岐島方言集

(以上第一期)

小倉進平

仙臺方言音韻考

金田一京助

國語音韻論

大田榮太郎

滋賀縣方言集

荒垣秀雄

北飛方言集

(以上第二期)

湯澤幸吉郎

徳川時代言語の研究

杉村楚人冠

和歌山方言集

内田武志

鹿角方言集

眞山青果

仙臺方言考

(以上第三期)

南島方言資料
琉球の五方言

資料のかず

以上の中東條操氏の南島方言資料は昭和十二年八月第二版が世に出た。謂はゆる南島は沖繩を指してある。皇紀八世紀の頃、倭言葉から分れた琉球方言を首里・大島・國頭・宮古・八重山の五つに分ち、天文・歳時・地理・金石・動物・植物・人倫・肢體・衣食住・器財・人事・雜の十二項に分ちて語彙をあげてある。語數は約七百、南方方言として特色あるものは悉くこれを收め、次に文例として六十章の短文を載せ、その表記にも深甚の注意が加へられてある。資料としては沖繩縣で撰んだ沖繩對話や沖繩

昭和期に於ける方言の研究

語典や混效驗集やチェンバレンの論文などを參訂された上に、この地方出身の伊波普猷・宮良當壯兩氏の首理の部八重山の部の補註を加へて正確を期し、尙維新以前に於ける南島方言の貴重な資料を蒐集されてある。康熙年間に成つた徐葆光の中山傳信錄、明の萬曆の頃茅伯符の書いた華夷譯語、明の周鍾等の編んだ音韻字海三部の琉球語對照を擧げ、又別に西曆千八百十八年ロンドンに於て發行されたキャプテン・バジル・ホールの航海記の附録ヘルバルト・ジョン・クリーフォルト氏の英琉語彙の抜萃をも加へてある。著者の用意の周到なことが窺はれる。南島方言に關する琉球人、支那人、西洋人の研究がこれにコンデンスされ、更に研究を進めた金字塔たることは世の定評のあるところであらう。初刊が烏有に歸したのを更に手を加へて再刊されたことを多しとする。

山口麻太郎
壹岐島方言
集

近畿地方と
の音韻との
比較

壹岐島方言集は山口麻太郎氏がその郷國の方言を明かにしようと志し、十數年の努力の結果に成るものといふ。始めに音の表記法・音韻轉訛の一斑を擧げ、一語々々にアクセントをも附してあり、その語彙も體言・用言等の獨立詞ばかりでなく、助辭の類をも採り、單語には品詞別から活用あるものはその種類を記し、最後に東條氏の方言採集手帖による文例の方言讀をも載せてある。この書によりこの地方の母音は本州のイ音が i と發音され、その音便が e となつてゐて、室町時代末期の京畿・中國等の音を保存してゐることが分る。また連聲の方にては助詞「は」の前にある撥音は「は」と合して「な」となる。例へば、

この蜜柑は酸つばいから捨てようか

コヌ蜜柑ナスイカケニスチュー

と呼ぶ。この一例によりても「の」を「ヌ」と呼んだ古音が保存されてゐることが知られ、また敬語の「ます」が「マツスル」等一つ／＼比較するに、語音變轉に面白き現象が存することが分る。

續壹岐島方言集
自然環境と語彙

「ソレ」・「コレ」が「ソリ」・「コリ」

八二語で前篇と略相同じく、この國の詞は肥筑方言に屬するも、邊境の地その民族民衆は氏の別著壹岐島民俗志に照し見ば一層興味と理解とを助けるものがあらう。指詞の「ソレ」・「コレ」が「ソリ」・「コリ」と發音され、「爲るか」が「スツカ」・「泣くか」が「ナツカ」・「多いか」が「ウーカ」となつてゐるのを見ると、その音韻變化の一端が窺はれる。

莊内語及語釋
莊内方言考と濱嶽

仙臺方言音韻考

言語誌叢刊の一篇莊内語及語釋は三矢重松氏の著に幕末に於ける氏家剛大夫の莊内方言考及びその舅の堀季雄の濱嶽とを合綴として東條氏の出したもの。訛の多い莊内方言を語法・音韻・語彙と三方面に分擔し、過去・現在に於ける三つの研究を一つに集めてあつて、この地方の方言を縦に見られるもの、三矢氏の研究は既に述べて置いたから、茲にはその内容を略する。

次に第二期の叢刊に就いて略説して見る。その中小倉進平博士の仙臺方言音韻考は當て國學院雜誌に

仙臺方言音韻組織考

濱 荻

掲載された「仙臺方言音韻組織考」を基とし、これに増訂を加へられたものと、江戸の仙臺邸に仕へてゐた侍女匡子が仙臺に下つて住むこと十餘年の間に拾録した濱荻とを合せたもので、博士の音韻考の方は總論の首に仙臺方言に關する文獻十餘種を解説し、仙臺方言の輪廓を知らしめる爲に大里源右衛門の編にかゝる「仙臺方言」の序文と方言歌・童謡・子守歌・手毬歌を挙げ、國際音標文字を以てその發音を示し、後に註釋を加へ、第二編には母韻と子韻とその結合せるものとを詳説し、國語の標準音と仙臺地方の發音とを對比してその特徴を明かにしてある。研究の部としては第二編が眼目となつてゐる。この濱荻は仙臺方言千百三十語を收め、別人の筆に成る解釋と考證とを添へてあり、補遺も四百語に上つてゐる。

大田榮太郎
滋賀方言集方言集覽稿
金田一京助
國語音韻論人間の言語
は分節的

滋賀方言集は大田榮太郎の編にかゝり、語數千五百語に上る。この書は明治三十年十月東京帝國大學文科大學の依頼によつて滋賀縣の各郡で編んだ「方言調査書」を主とし、新舊年代の異なる既刊未刊の調査を加へて編纂したもので、表記の方は正しくゆかないが、方言釋語の下に使用地方及び書目名を擧げである。氏は方言集覽稿を出し、福島・栃木・三重・福井・奈良・和歌山各縣の方言集をも出した。言語學者でアイヌ語やアイヌ文學の權威である金田一博士が方言研究の業として言語學叢刊第二期の一篇として世に贈られた國語音韻論は趣味にみちた敘述を以て我が音韻の組織・音韻の變化その方則を講明された一本であつて、第一章緒論には人間の言語は内容と形式とに於て分節的なものであるといひ、

乾葡萄になつた言葉と生きた言葉
音韻組織
音韻變化

三十六則
當爲の法則
必然の方則
可能の方則

國語科學講座
座中の方言部

猫の言葉を四十五語、猿の言葉を六十四語を開き分けた學者もあるが、それは意味が違ふといひ、この言語には體としての言語と用としての言語とがあり、前者を言語、後者を言語活動と名づけ、この二つを混同してはならぬといひ、感聲は語句分化以前の原始的表現形式と斷じ、言語は傳承に由る存在であるから方言の發生は自然的なものといひ、日本語の方言區域に及び、柳田氏の周圈説と他の學者の二大對立説とも觸れ、方言研究は乾葡萄になつた文書上の言葉とちがひ、生きた言葉を取扱ふものであるから、やがて明日の國語學となるものと方言の爲に氣聲を揚げてある。第二章には音韻組織を論じ、國語に於ける音節は洋語のシラブルと異なることを論じ、開音節の多きこと、「ン」も促音「ツ」も一音節と認め、第三章には音韻變化を詳説し、これに脱落・同化・相通・轉倒の四種があり、それに更に細かい區別が存すといひ、三十六則を立てゝある。第四章には音韻方則を擧げ、第四章には音韻方則を論じ、音韻の方則は論理學等のいふ當爲の法則や、理化等の自然現象を論するに方り常に唱ふる必然の方則とは別で、可能の方則が行はれてゐるといつて、音韻の性質を論じてゐる。この書は方言研究にたよりになるばかりでなく、國語音韻史の概觀をも窺ふことが出来る。この書は後に増補された。

明治書院で計畫した國語科學講座のことは別に項を設けて説くが、その第七輯には方言に關するもの八種を載せてある。その執筆者と題目とは次のやうである。

方言學概説 東 條 操

昭和期に於ける方言の研究

新語論 柳田國男

言語地理學 江 實

本州東部の方言 橋正一、東條操

本州西部の方言 東 條 操

九州の方言 吉 町 義 雄

琉球の方言 伊 波 普 猷

方言のアクセント 服 部 四 郎

新語論

中に柳田氏は方言といふ語の範圍の擴大するを嫌ひ、言語の時代差と地方差は或る程度までは原因は共通であると云ひ、次に從來各所に於ける方言蒐集のその道を得てゐないことを論じ、訛語の種別を説き、音訛と語法訛の二つを判別せねばならぬとし、同語意識の崩壊、古語の保留、複合保存、限定保存と意義分化、新物新語、舊物新語、音興味と語形興味、異名と戲語と隱語、動詞増加、形容詞の缺乏、癖と能力の如き諸項を擧げて、各般の言語現象を確實に面白く説かれてゐるのが新語篇である。後増補して國語史として刀江書院より出した。

民俗語彙

氏は多くの民俗語彙の結集をなした。山村語彙といひ、分類農村語彙といひ、分類漁村語彙といひ、その他婚姻習俗語彙、産育習俗語彙、送葬習俗語彙、禁忌習俗語彙、服裝習俗語彙、歳時習俗語彙、居

方言と方言學

佳習俗語彙等十指を屈するばかり多くの書を出された。その蒐集にいかに努力されたかゞ推知される。氏の方言研究に於ける功績は今更に言あたらしく云ふまでもない。

方言研究の態度

東條氏は昭和十三年六月方言と方言學とを刊行した。氏は方言學の樹立に熱心すること十年一日の如く、斯くてこの著を見たのである。一體昭和時代に於ける方言に關する編著は雨後の筍の如くに多く出たが、これを研究する目的が様々であつて、明治二三十年代に於ける如く、尙標準語制定を目的としてゐるものがある。國語史の傍證を得る爲に調査してゐるものもある。特殊な部類の方言を蒐集してゐる民俗學者もある。方言といふ語自身のあらはす内容が區々である。これを學的に扱へば、地方言語事實といふべく、これには(一)標準語に共通するもの、(二)中央語の訛るもの、(三)中央語に見當らないもの(假に土語といふ)の三つを含んでゐる。音聲學の立場に於ては(一)を、言語地理學の方では(三)を主とし、これに(二)を加へ、方言學は(二)を主とし、(三)を従とする。而してこれを研究するに各地の記述研究を先とし、比較研究を後とすべく、その音聲の方面では佐久間鼎、神保格、服部四郎氏等の研究があり、フランスに發達した言語地理學の研究は比較の一方法であつて、柳田氏の蝸牛考の如きはその應用で十二分の功を收めたものであるが、方言學の立場は別にあるとしてその樹立に努めた。方言學は實に氏を以て起つたとするに異論はあるまいと思ふ。

方言と方言學の内容

昭和期に於ける方言の研究

氏の方言と方言學とは斯界に於ける貧乏の一の記念塔であつて、篇を五つに分ち、第一篇は方言研究法

を主としたものでその内容は主として國語科學講座の方言學概論をとり、第二篇は方言研究史の概要を記敘したもので、岩波の文學講座の方言研究の概觀を補筆し、第三篇は各地方言の素描で各その特色を記述し、第四篇は方言文學で、中に萬葉集の東歌・防人歌の研究過程をも示し、第五篇には國語方言學の樹立を説き、附録には刊行方言書目を挙げ、次には國語調査委員會取調事項を載せてある。この方面の良著で指數をうけるものが少くない。氏の二大目的の一つとしてゐられる方言辭書の編纂もやがて達成される日の近からんことを望んで止まない。

四十 國語の音聲學研究

エドワーズ

日本語の音聲的研究

高松義雄氏の譯述

文部省の國語アクセントの調査

我が日本語の音聲を實地に研究した外人は英人エルネスト・リチャード・エドワーズを最初に挙げねばならぬ。氏の我が邦に來りて新村出、八杉利貞兩氏の助を得、各地を旅行してこれが研究に從來したのは夙く明治三十三年から四年にかけてのことであつた。氏の日本語の音聲的研究 *Étude phonétique de la langue japonaise* が巴里のソルボンヌ大學に提出して學位を得たのは西曆一九〇二年のことである。佐久間鼎博士の如きもこの書が機縁となつて音聲學の研究を遂げられたと聞いてゐる。

この原文は昭和十年高松義雄氏によつて譯出され、「日本語の音聲學的研究」として厚生閣より出版された。今日から見れば幼稚なところもあるが、我が國の音聲を實驗的に調査した最初のものと云へる。日本語の語音を分析して英佛獨のそれと比較し、彼我の口蓋圖なども對照してある。它山の石として見るべきもの。高松氏の譯書には語音の表記、参考書、術語の解などを附録としてある。

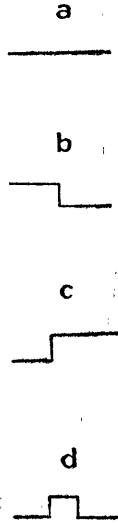
大正に入つて文部省は國語調査主任保科孝一、國語調査囑託安藤正次、東條操、神保格、佐久間鼎五氏に命じて國語のアクセントに關する一般的の事實を調査せしめ、小學校及び中等學校に於ける教授上

アクセント
とは何か

の參考にする目的を以て「アクセントとは何か」のパンフレットを編修せしめ、大正五年普通學務局より出版して全國に頒布した。

アクセント
の型

この書、前編はアクセント一般に關する説明を載せ、後編は尋常小學讀本卷一二及び尋常小學國語讀本卷一二にアクセントの符號をつけ、練習用に充てたものである。前編は文字と發音、發音の識別とアクセント、音の高低とアクセント、音節といふこと、國語のアクセントとは何か、言葉の何處が高くなるか、複合語・連語とアクセント、話の抑揚、アクセントの地方的相違、東京語のアクセントの特徴の十項に分け、實例を擧げ、平易に説いてある。一音節・二音節・三音節及び四音節以上のものに



東京語の
アクセントの
特徴

の如く、初から終まで同様の高さのもの、高まりが初の方にあるもの、高まりが終の方にあるもの、高まりが中部にあるものを分ち、關東方言と關西方言との間に著しい相違があり、東京語のアクセントの特徴として、特に關西語のアクセントの傾向と異なる點は平板的な型式のアクセントが比較的多く聞かれる等のことを述べてある。

佐久間鼎
國語のアクセ

佐久間鼎氏は心理學叢書的一篇として大正六年十一月「國語のアクセント」を出し、アクセント一般

セント

アクセント
の形式

上型と下型

上中型・下
中型・下上
型

國語の發音
とアクセント
平板式と起
伏式
アクセント
と品詞との
關係

國語アクセ
ント講話

を科學的に考察した最初のもので、その前編には標準音と訛音、連續音及び音節、アクセントの意義、アクセントの形式、文の抑揚と語のアクセントと章を分つて論じ、後編は國定讀本につきて實例を擧げ實地教育にも資せようと企てた第一書である。氏は機械を用ゐ、實驗的方法により國語のアクセントの形式は主として高低關係によるものとし、これを上中下の三階段に分ち、一音節語には上型と下型との二種があり、二音節語には更に下上型が加はつて三種となり、更に三音節以上の單語にも種々の型のあることを委しく説き、漢語の二音節で上中型であるものが、國語化しては下中型または下上型に推移することも明かにし、文の言葉の調子は低い所に始まつて次第に高まり、曲節を経た後再び低い方へ落ちてゆく抑揚法等をも心理學的に説明した。

大正八年氏は更に國語の發音とアクセントを出し、前半に發音、後半にアクセントを論じ、アクセントには平板式と起伏式(高さについていふ)の二つあることを述べ、次にアクセントと品詞との關係を考へて名詞中、三音節以下の普通名詞が固有名詞となるときは上中型の擡頭式となり、數詞は特に明瞭に言ひあらはす爲には起伏式を用ゐ、副詞及び疑問並びに不定稱の代名詞は擡頭式をとり、用言には平板式と起伏式とがあつて、その中、起伏式は上中―、下上―中の型を出でないと斷じ、發音の上にも新説を立て最後に發音統一の方策をも述べてある。

大正十二年氏の公にした國語アクセント講話は文部省が彙に出した「アクセントとは何か」の説明を

秋田・青森
地方のアクセ
ント

したものだといつてあり、アクセントの一般的事からその性質を説き、末には東北地方特に秋田・青森地方のアクセントをも説いてある。彼の地方のズーズー辯は、變的母音の使用に根ざすのであるから、これを矯正するには、イ・ウの正常な母韻の復活から始めねばならぬことより、進んでアクセントの相違に説き及んでゐる。

國語音聲學
講話
國語音聲學
概説

昭和四年に氏はまた國語音聲學講話を出し、昭和八年にはこの二書の改訂増補本といふべき國語音聲學概説を出した。これらの書は何人にも分り易く通俗的に説かれてあるが、併し一書が出るごとに新味を加へ、斯學の發展に貢獻するところが多かつた。

日本音聲學

氏は別に日本音聲學の大著を昭和四年に京文社より出した。その前篇語音篇はすべての國語音の解説を殆ど述べつくしたものと云ふべく、實に大正以來の大著で、一つの音を説くにも内外先行の文獻を遍く引用して自家の説を立てゝある。その委しきは音聲學史などに譲つて蛇足を添へることをしないが、その集大成した點からいへば、彼の實驗音聲學の權威ルスローに比すべきものと云はれてゐる。

佐久間氏と
ルスロー
神保格
國語音聲學

佐久間氏と前後して音聲學の上に力を盡されてゐる神保格氏は大正十四年に國語音聲學を明治圖書會社より出した。この書は章を分けることが十二、音聲學の對象から音聲の本質、音聲研究法、音聲器官及びその働き、單音のいろいろ、單音の連結、意義をあらはす音聲の役目、音節、文字と音聲、アクセント、音聲の具體化、國語音聲の實際問題に及び、第一に具體音聲と抽象音聲との區別を知るべきことを

提唱し、一般音聲學の事實、音聲研究法の理論、現代日本語（主として東京語）の音聲説明の上に貢獻せんことを目ざし、末に文部省から發表した「アクセントとは何か」の一篇を轉載し、文部省本にある終りの實例を削り、別に尋常小學國語讀本第四卷までの材料を採つて國語音聲の實例に充てゝある。

アクセントの法則

これに辭の附いた場合等一々例を挙げ、東京語に於ける一般の法則として

第一 單語の第一音節が低ければ、必ず第二音節が高くなる

第二 單語の第一音節が高ければ、必ず第二音節が低くなる

と定め、低い方を字の左旁に、高い方を右旁に線を引いてあらはすとすれば、

一は○○……又は○○であり、

二は○○……である。

連語とアクセント 型保存と式保存

準アクセント

(一)には○○○○……や○○○○……のやうな型はなく、(二)に○○○○のやうな型はないといひ、連語とアクセントについては、連結されても元のアクセントの型が保存されるもの（佐久間氏のいはゆる「型保存」と稱した類）とそのまゝには保存されないが、もとが起伏式であつたなら、組合せた上が起伏式となるが如きもの（佐久間氏のいはゆる「式保存」）の二様があるが、單語の固定的な高低關係でなくて、連結によつて半ば固定的になるものを「準アクセント」と稱すべきであらうと云つてある。例へば「ウ

「シガ」は三音節の單語で、アクセントは平板式であり、「イマス」は三音節の單語で、アクセントは起伏式（低高低型）であるが、これを連結して發音するときは、「イマス」の「イ」が高くなつて「マ」と同じになり、ウシガの「シガ」の部も高くなつて下上上の如くなり、全體が「ウシガイマス」と六音節から成る一單語の起伏式アクセントのやうになる、これを準アクセントとするやうである。斯くの如き準アクセントにも相異なる型のあることなどを委しく説き、音聲の具體化を説き、國語音聲の實際問題を揭げて筆を收めてある。

國語發音ア
クセント辭
典

東京 辯

音韻・アク
セントとは
何か

神保氏は昭和七年に至り常深千里氏との共著に成る國語發音アクセント辭典を出した。字書にアクセントを始めて加へたのは前に述べたやうに山田美妙子を嚆矢とする。尋いで國定讀本發音辭典を出したのは高橋龍雄氏で共に明治時代のことであつた。大正に入つて榮田猛猪・近藤久吉兩氏の合著ローマ字索引國漢辭典にもこれを附してある。今村明恒氏の東京辯の卷末にも多少これを擧げてあるが、アクセント辭典はこれを始めとする。この書に收めてある語數は二萬六千語に上つてゐる。東京人が日常家庭また社交上に使用する生きた語や舊時代の風俗文物に關し現代人の耳にする語等に一々記法を定め、アクセントを示したもので、音聲學の上から見ても貴いものである。特に卷頭に加へてある總論・音韻・アクセントとは何か、動詞及び形容詞のアクセント、各品詞の接續とアクセント、連語のアクセントと言葉調子、記憶し易いアクセントの八章に上る解説は音聲學に志の深くない人にも分り易く示してゐるのは著

者の用意の周到を示すものと謂ふべく、神保氏は音聲學の先進であり、常深氏はこの企をなし、日夜これに従事し、完成を見ないで他界した人、神保氏はこれを悲み、志村繁隆氏の助力を乞ひて世に公にするに至つたものといふ。

四十一 音聲學協會の誕生とその後

音聲學協會

音聲學の研究が微々ながらも徐々に起つて來た結果、遂に大正十五年十月に至り、音聲學協會は生れた。會長には上田萬年博士、副會長には藤岡勝二、新村出兩博士がこれに任じ、(藤岡氏の歿するや岡倉由三郎氏がその地位を襲うた)音聲學並びに日本語及び日本語に隣接する諸言語の音聲を研究することを目的とし、やがて會報を出し、論文集を發行するに至つた。

この會の斯學上に多大の業績を舉げるに至つたことを詳述するに先ち、別に二三の音韻研究を發表した人々の上につき少しく述べなければならぬものがある。佐久間・神保兩氏のことは既に略述した。この他に小倉進平・伊波普猷・北里闌諸氏の著作がその前後に發刊された。

小倉進平
國語及朝鮮
語のため

小倉進平博士は大正九年「國語及朝鮮語のため」を出し、中に國語字音と朝鮮字音との比較研究を試みられ、國語の力行へ行に發音するものが彼地ではh音に發音されることを説き、同十二年に發行された「國語及朝鮮語發音概説」には兩國語の音韻の特質を論じ、その異同を音聲學的に詳述し、方言的發音にも觸れ、史的考察をも加へ、實地の練習にも資し、特に國語の方言的發音中仙臺方言と對馬方言に關

音史上の貢
獻

し、仙臺に於ける鼻母音やpの無聲音、對島方言に1音の存在することなどを立證し、音史上に貢獻するところが少くなかつた。

安藤正次

安藤正次氏が大正十三年に出した「古代國語の研究」にも古代國語の音韻組織の一章があるが、これは別に述べたので、茲には再説しない。

北里蘭
日本古代語
音組織考

琉球母韻の
統計

聲の教育・
國語教育の
爲の音聲學

北里蘭氏は日本古代語音組織考を出した。伊波普猷氏は大正十四年その郷國琉球語の母韻統計を發表し、その母韻はa i uの三種であつて、e oの二母韻は缺けてゐて、エ列はイ列に、オ列はウ列に代表されてゐることを明かにした。その他小林光茂氏の聲の教育の著があり、石黒魯平氏は國語教育の爲の音聲學を昭和三年に出した。

音聲學協會に於ては會報を累ね、本年に入りて既に六十三號を出し、有益な研究報告を載せてゐる。

尙別に論文集音聲の研究を出すこと既に六回に上つてゐる。その中主要な題目を拾つて見ると、第一輯には

音聲の研究
第一輯

森正俊氏の「母音に關する考察二三」

佐伯功介氏の「日本語に現はれたる父音について」

宮田幸一氏の「新しいアクセント觀とアクセント表記法」

石黒魯平氏の「謡曲(觀世梅若流)の發音に就いて」

音聲學協會の誕生とその後

佐伯功介氏の「謠ひの發音(寶生流)に就いて」

の如き論說より外山高一氏の「レントゲン寫眞に依る國語母音圖形考究の一材料」、兼弘正雄氏の『北風と太陽』のカイモグラフ音聲記錄線の説明」、東條民二氏の「放送無線に於ける音の歪曲に就いて」の如き實驗、また方言に關しては N. Newby の琉球の昔話大鶉の話の發音轉寫を挙げ、表記法としては外山高一氏の「莽句兩國語の長音表記法」等を載せてある。

第二輯

第二輯には、

佐久間鼎氏の「母韻の構造とその理論」

宮田幸一氏の「日本語のアクセントに關する私の見解」

の如き論說、

外山高一氏の「國語の熟音の人工口蓋實驗圖形について」

丸山通一氏の「ラ行父音の本體」・「母音間の父音の價值」・「國語に於ける母音の無聲化」

の如き實驗、音韻史としては日下部重太郎氏の「所謂五十音圖が作られた當初の假名文字の音價如何」方言に關しては、

東條操氏の「方言の音韻に關する諸問題」・「武井氏原圖信濃方言地圖について」

三宅武郎氏の「東京下町方言の動詞活用について」

第三輯

より井上奥本氏の「日本語調學小史」及び「日本語調學年表」、及び古式のアクセント符號を振りたる日本書紀と百人一首及びその解説の如き研究史、

佐伯功介氏の「正字法と音聲記號と蓄音器との關係」

神保格氏の「音聲符號につきて疑ひ」

などを擧げてある。

第三輯には

大西雅雄氏の「國語の母韻圖表に就いての一考察」

三宅武郎氏の「アクセント二段觀と三段觀について」

柳田國男氏の「語音變化に關する研究」

森正俊氏の「母音變化の種々相」

の如き論說より實驗に關しては、佐伯功介氏のラ行の子音について丸山氏の說を評せるもの、丸山氏のラ行閉鎖音說批評に對する答辯、佐久間鼎氏の實驗音聲學の進歩に關する說があり、音韻史に關しては

日下部重太郎氏の「字音尾 *ng, n, m* の沿革」

方言に關しては

Fauvelle Thomas の「博多方言轉寫」、同上説明（森正俊氏）

音聲學協會の誕生とその後

東條操氏の「秋田方言、特に語法の資料について」

よりアクセントに關して服部四郎氏の「近畿アクセントと東方アクセントとの境界線」、日下部重太郎氏の「東西アクセントの境界について」、井上奥本氏の「舞鶴地方のアクセント」、佐久間鼎氏の「アクセント研究史の一資料」、山本靖民氏の「肥前諫早町方言誌」

よりその他大岩正伸氏の「國語の表記法」等があり、第四輯には

有坂秀世氏の「音聲の認識について」

平田鬼丸氏の「國語の撥音について」

石黒魯平氏の「ン音辯」、湯澤幸吉郎氏の「いわゆる音便について」

の如き論說より

佐久間鼎氏の「ラ行子韻の描録曲線について」、井上奥本氏の「アクセント記録裝置の二種について」

の如き實驗、

有坂秀世氏の「國語にあらはれたる母音交替について」

の如き音韻史、方言に關しては

山口秀夫氏の「鹿兒島縣出水方言素描」

佐久間鼎氏の「京都語に於けるアクセント」

服部四郎氏の「アクセント境界線及びアクセント調査について」

佐藤清明氏の「岡山縣に於けるイタドリの方言分布論」の如き、表記法に關しては

小倉進平氏の「朝鮮語母韻の記號表記法について」

森正俊氏の「Palmer 氏の Principles of Romanization を讀む」等があり、

第五輯（昭和七年刊）には史的研究としては故大矢透氏の「古言衣延辨證補」が載せられ、三宅武郎氏の「濁音考」、永田吉太郎氏の「表音文字としての假名」があり、考察には大西雅雄氏の「音聲の科學的分類について」、及び佐伯功介氏の「音韻學的概念と音聲學的概念」があり、方言に關しては、

金田一京助氏の「北奥方言の發音とそのアクセント」

菅野藏治氏の「東北方言中の訛音二三」

吉町義雄氏の「九州地方郡名現代發音」

神保格氏の「アクセントと表情」

山口秀夫氏の「出水地方方言素描補遺」

の如きがあり、雜纂には佐久間鼎氏の實驗音聲學業績などから音聲等がある。

第六輯は昭和十一年に刊行された。これは十週年の記念號であつて、その前年に出すべきを後れたものといふ。理論と考察の部には佐久間氏の「音韻のすれ」以下服部四郎氏のロシアの單語の音調とかヤ

クト族の語など近隣國語に關した新研究もあり、その他

井桁貞敏氏の「音韻變化の概観」

有坂秀世氏の「音韻論」

大岩正伸氏の「音韻單位論」

小林英夫氏の「音韻論に於ける目的説批判」

三浦勝吉氏の「音聲の本體及びわたりを論じ、Daniel Jones 氏の Phoneme 論に及ぶ」

泉井久之助氏の「ラティン語に於けるIとUの相通について」

といふ如き廣く外國語の音韻論にも及んでゐる。

實驗と統計

小幡重一

東北方言の
物理音聲學
的研究

實驗と統計の部には上田博士の卷頭の辭にもある如く神保格氏の「所謂實驗音聲學に對する誤解」には方法論に示唆を與へ、昭和七年有栖川宮記念獎學金に依る研究を引續き發表してゐた小幡重一氏が東北方言の物理音聲學的研究を遂げ、大西雅雄氏は統計調査によつて「語音頻度より觀たる十ヶ國語の發音基底」を示し、佐伯功介氏は田丸・小幡兩博士のアクセントに關する實驗を擧げ、方言と歴史の部には宮良當壯氏によつて喉頭破音考が紹介され、太田武夫・平山輝男氏によりて丹後に於けるアクセントや九州アクセントとその境界が吟味され、土井忠生氏によりてロドリゲスが研究され、十七世紀初頭に於ける日本語の發音が明かにされ、小倉進平氏は朝鮮語タ・チャ行音中の變相を説き、服部四郎氏は瀧

カイモグラフに據る實驗
オッシュログラフに據る實驗

大西雅雄
音聲學史

服部四郎
國語諸方言のアクセント概説

洲語音韻史の資料を提供し、附録にはボリヴァノフの著日本方言學資料が吉岡義雄氏の解題を附し、覆刻されてゐる。こゝ十數年の間に於ける斯學の進歩は實に驚嘆に値するものがあり、國際音聲學大會を我が邦の司會にて開催するやうになしたいとの上田博士の期待も近き將來に酬いられるであらう。

從來音聲の實驗は容易に行はれなかつたものであるが、兼弘正雄氏は大阪商科大学に音聲實驗室を有し「カイモグラフ」による實驗を重ね、昭和七年實驗英語音聲學を發表し、千葉勉氏も東京外國語學校に實驗室を有し研究するところがあり、音響物理學の權威である小幡重一氏もオッシュログラフに據る實驗も標準音の分析に成功し、現存の方言音を調査して相當の成績を擧げてゐる。

猶後にいふ國語科學講座の中に於ける大西雅雄氏の音聲學史のうち、第三章には日本音聲學發達史を三期に分ち、第一期を準備時代、第二期を覺醒時代、第三期を活躍時代と命じ、皇紀八百年頃より明治十年までを一期に、それより明治の終までを二期とし、大正以後を三期とし、韻鏡檢討、言靈觀、音義説の創説流布の第一期のことは略説し、音史考察、音聲學禱案、國音調査の着手など第二期に於けるものは稍々委しく、國音檢討、科學的實驗などの盛んになつた第三期の状況は委しく説いてある。

アクセントに關する研究は輒近盛んに行はれ來つたことは上にも縷述したが、尙記すべきことが少くない。服部四郎氏は國語諸方言のアクセント概説を音聲の研究や雜誌方言等にも載せ、方言の區劃にアクセントが重要な地歩を有することを述べ、東方々言のアクセント境界線を三重縣の長島・桑名の間か

ら岐阜の大垣に至るあたりに定め、その西方を近畿方言と定めた。アクセント表記法につきても諸家の説があるが、今一々紹介することを差控へる。服部氏は講座に於けるアクセント概説にエンファサイズ即ち強調研究がアクセントの理解を深める爲に必要な所以を説き、Prominence を卓立の強調、Intensity を誇張の強調と名づけ、アクセントは卓立の強調まではその型を保存してゐるけれども、誇張の強調によつて毀される事が少くないとし、非常に感情的な會話や朗讀演舌の口調に於てアクセントの型とは無關係な音調のあらはれることも屢々であることをいひ、またアクセントの觀察には理論上文節を出發點とすべきであるが、國語に於ては「ン」や促音の「ツ」も一字に長母韻を含む音節は二單位と見做すが便利だといひ、表記法にいろいろと説を立て、文章語のアクセントにも注意すべきことを唱へた。

吉町義雄
内地方言ア
クセント境
界線調査業
績精算

吉町義雄氏が昭和十二年の音聲學協會々報に載せた内地方言アクセント境界線調査業績精算には近畿アクセントと東方アクセントとの境界線を劃した服部線、近畿中國兩アクセントの境界を明かにしたり四國アクセントが近畿系であることなどを夙く想定した大原(孝道)線、瀬戸内海島嶼のアクセントを精査した藤原(興一)線、九州に於けるアクセントの境界を一定した平山(輝男)線、丹後に於けるアクセント境界線を定めた太田(武夫)線を説き、殘餘の課題として北陸地方・東北地方・近畿地方・中國地方・九州地方・四國地方の研究について述べるところがあり、末にアクセント地圖を掲げ、調査決定線や想定線その領域圖を載せた。また井上與本氏は日本語調學小史を出した。

九州に於けるアクセント境界線の発見者である平山輝男氏は昭和十五年六月全日本アクセント諸相の一卷を育英書院から出した。この書は篇を四篇に分ち、第一篇には東京アクセントの系統を、第二篇には近畿アクセントの系統を、第三篇には南島アクセントを、第四篇には一型アクセントの系統に分ち、第一篇を東京・中部地方・中國地方・奥羽地方・北海道地方・樺太地方・四國西南地方・九州東北部地方に分ち、第二篇は近畿・四國東北部・北陸道地方・九州西南部地方に分ち、三篇以下にも章を分ち、その形式特徴を説き、日本全國に於けるアクセントをまとめたものであつて、斯界に於ける業績は十分に認むべきである。

一型アクセント

中に一型アクセントといふのは名詞も動詞も形容詞も皆揃つて區別なく、箸と橋も花と鼻も垣と牡蠣も「着る」も「切る」も「暑す」も「厚す」もすべて一型アクセントと呼んでゐる。二つ以上の區別はなくても一つ／＼にはアクセントが無いでもないので無アクセントとは呼ばないのである。この型は服部四郎氏が仙臺方言について紹介されたのに始まり、金田一京助博士やその子春彦氏等の研究に基いたもので、その範圍は南奥、北關では宮城・山形兩縣の南部、福島・茨城・栃木の殆ど全部、北陸では福井市を中心とする地方、九州では長崎縣の北部、五島平戸、佐賀縣は北半分、福岡縣は筑後を中心とする地方等々といったやうに一々これを詳かにしてゐる。その他二種以上の型の區別をもつてゐるアクセントから段々一型化に近づいてゐる曖昧アクセント地方なども説いてゐる。

曖昧アクセント

音聲學協會の誕生とその後

附録には東京アクセント語例を拾ひ、巻首には大日本アクセント分布圖を載せ、終には全國アクセント比較一覽表を擧げてある。

菊澤季生
國語音韻論

菊澤季生氏の國語音韻論は昭和十一年賢文館から出た。國語の音韻を科學的に講明しようとの意圖に成つたと云はれてゐる。國語學上に於ける音韻論の位置を序論に述べ、國語學を分析的綜合的の二大部門に分ち、分析的方面を更に音韻論と意義論に、綜合的方面を更に様相論と構成論に分けてある。本論は音素、成音論、音韻の變化、音韻の變遷に分け、原始時代の部では*a i u*三母韻説によつてゐ、子音の中力行は*h*音、サ行は*c*音、ラ行は*y*音で、濁音は存在しなかつたと論じてゐるのは根據の薄弱で吾人の首肯し能はざるところであるが、一貫した音韻觀を基礎とし、複雑な音韻變化の現象を體系立て、論述されたところは多しとすべきである。

有坂秀世
音韻論

昭和十五年の末に至り有坂秀世氏の良著音韻論が三省堂から出た。篇を音韻觀念、音韻體系、音韻變化の進行過程、音韻變化の諸原圖、音韻の二重性格の五篇に分ち、近年世に紹介されたプラグ派の言語學者の説を光背としながら、これに囚はれないで獨自の見を以て一家の説を立てゝある。將來世の學者の注目するものとならう。

四十二 昭和期に於ける國語學史

伊藤慎吾
近世國語學
史
その内容

時枝誠記氏
の批評

伊藤慎吾氏の近世國語學史は昭和三年に大阪の立川書店より出た。篇を總論・各論に分ち、總論には緒論に次いで、江戸時代以前の國語學と江戸時代の國語學を敘し、江戸時代の國語學はまづその特質を説き、次に復古の思想、古學の先鞭、國學の曙光、國學の發達、蘭學の發達に分ち、時運の趨勢を知らしめんとし、各論に於ては文字に關する研究、音韻に關する研究、單語に關する研究を述べて結論を加へてある。而して自序に云つてあるやうに各論の章には著者並びに著書に就いて批判を下してある。部分的には獨創もあり、記述の體系は整つてゐるやうであるが、當時時枝誠記氏が批評された如く、「復古の思想」、「古典の研究」、「國學の曙光」等の項目を設けて時代の傾向を明かにしようとしながら、國語研究の母體である國學と國語學とを切り離して論じられた感があり、國語學の史的展開に對する正當の認識がどうかと思はれる憾がないでもない。例へば日本語學の重要な流れをなす本居父子の玉の緒・八衢が國學と如何なる關係にあるかといふ如き問題は正當に解されてない。またその説きぶりが從來の文學史家の批評に於ける如く極めて大様である。且參考圖書が乏しかつた爲か、普通の版本にもよら

す、百科辭典に據つたり、國書解題の解説をさながら引用された點などが讀者に好感を與へない。併し初學には參考となつたことも少くなかつたであらう。

吉澤博士の國語學史

一步抄の批評

服部吟照の假名遣問答抄評

歴史的假名遣に對する見解

時枝誠記氏の國語學史の歪められた角度から觀察

吉澤義則博士は平凡社の受験講座刊行會の國文學講座の一篇として、昭和五年四月國語學史を出された。序説に國語學と國語學史との關係を説き、これが研究の態度方法を明示し、その時代分を元祿以前とそれより明治の半ばに至るまでとその以後との三期に分ち、次に假名遣・音韻・文字・テニヲハ・活用の數章に分ち、その起原發達を明かにされた。而してその間にも問題に對する意見を隨所に交へてある。例へば假名遣につきても契沖以前の一步抄を紹介し、この書は行阿假名遣を定家假名遣として信仰的にこれを受入れることをしないで、それにも誤があるといふ點から俳諧の爲の著作と見てあり、服部吟照の假名遣問答抄は韻鏡の説もとり入れてあり、益軒の倭字解の反駁の爲に書いたものと見えるといひ、和字大觀抄の如きもさう高く評價されてない。和歌俳諧者流は從來の假名・國學者は歴史的の假名を用ゐ來つた。假名遣の歴史から考へてみても、歴史的假名遣で徹底することは出來がたい。古典の研究には必要な歴史的假名遣であるが、現在及び將來の國語を表記するに絶對の標準とすべきかどうかといふに疑はしといはねばならぬと論じてある。

時枝誠記氏は岩波の日本文學講座に昭和七年八月國語學史を執筆した。そのはしがきに「私の企圖する第一の事は日本に於いて獨自に發達した國語研究が從來或る歪められた角度から觀察せられ、剩へ、

た批評を斥く

その要求せらるべき當然の地位さへも與へられずに、非科學的なもの、無價値なものとして冷遇せられた事實に對して、それが物を素直に觀察する態度の缺如によるものであることを知るに及んで、在來の國語研究にそれが持つ正當の地位を與へようとする事であつた。」と述べてゐられる。學問の傾向の變つた西洋流の尺度で、數百年前の我が國独自の研究をいゝくらゐに批評するのを差控へねばならぬとするところに純眞な敬虔な態度が窺はれる。

第一部序説に國語研究一般と國語學史との關係、國語學史編述の態度とその方法、註釋語學より見た明治以前國語研究の一特異性を説き、第二部研究史は五期に分けて説いてあるが、昭和十五年の末に單行されたから、後それについて述べることにする。

重松信弘氏は昭和九年十一月明治書院の國語科學講座に國語學史を書いた。全篇五章、その序論に國語學史は國語の過去に於ける研究の業績を明かにすべきものとし、その主要な問題を數へ、時代を四期に分ちて説いてある。後これを基として單行されたものがあるから、これも後に委しく述べる。

自分もこの年舊著日本文法史を増訂し、成美堂より出した。實は文法學史とすべきであつたが、舊著にちなみてそれを改めなかつた。

山田博士の國語學史要は現代學術の普及版岩波全書的一篇として昭和十年に世に出た。これは日本大學及び東北大學にて講義された稿本から要をぬいたものといふ。著作の態度並びにその抱負が序に見

重松信弘氏の國語學史

増訂 日本文法史

山田博士の國語學史要

著者の學史に對する主張と態度
國語學と日本語學とを峻別す

宣命書に於ける國民の自覺

漢文の訓讀法

えてゐる「國語學史の名を冒して學者の傳記や著書や若くは學說の臚列に終るといふやうな事はしたくないと平素思つてゐる。」また「國語學は國民の國語に對する自覺反省の展開の結果が學として組織せられたもの」としてある。随つて國語學史は國民的自覺の起つた時から始むべく、國語學と日本語學とを峻別し、外國人の日本語研究は國民の國語研究と交渉を生じない限りは國語學史に織りこむべきではないとしてある。ある人は博士を以て現代の本居宣長と評したのは理由のないことでない。

本論は奈良朝時代の文獻に見ゆる當代の意識から始まり、宣命書を最初に挙げ、記載の方式を説いてある。大體について觀念をあらはす語は大字を以て書き、用言の活用・複語尾・助詞の如きを小字で書く。つまり主要語と補助語との區別を知り、又觀念をあらはす部分と言語操縱の方式の部分との區別を認め、又用言の活用と語幹との區別の存することを略識り得たといふべきである。この書き方につき委しく説き、また助辭ながら小字にかゝない種類も一々具體的に舉げてある。

次に漢文の訓讀法につき、この妥協法を考へたのも古いこととし、國語の相異により配列法の差異は漢文の原形をそのまゝにし、飛びこえて訓む法を考へ、活用語尾のないものは捨假名を附するなど工夫をし、我れにありて彼れになきものは漢字の形音を假りて別に音にうつす法などを用ゐたとし、點圖を説いた。

次に國語と漢字・漢語との對照にあたり、音註・訓義を文中に加へたり、或は一章の終に章中の語を

摘出して註を加へ、こゝに新華嚴經音義私記などの類を生じ、それが終に字書を生ずるに至つたとし、倭名鈔の出現を説き、辭書につきて述べ、次に歌學の興起と國語字書の出現に説き及ぼし、假名の發生から音通説の出現と五音の圖の成立を説き、約音略語發語につきて述べるところありて、次に定家の假名遣より手爾波大概抄及び切字の説から語の類別並びに用言の活用の認識、姉小路式及びその系統のてにをは研究までに十章をあて、以下契沖及びその後の假名遣研究より馬場辰猪及び口語法の研究に八章を充てゝ卷を了へてある。明治時代をそこで止めたのは現代は説くべき時でないとし、西洋の言語學の無理な極端から脱し、國語の眞髓をつかんで、我が國語を救済する昭和の馬場辰猪の出現を望んで止む能はざるよりそこで大切れとしたのである。

豊富な學識でよく要領をつかんで、而も學者に研究上の示唆を與へたことは少くない。但し全卷の半ば以上を契沖以前にあてた爲に後半に至り敘述すべき事項の省略したものが相當にあると思ふ。枝葉をすてゝ大綱をあげることを主眼とされたとはいへ、外人の研究を毛嫌ひせず（斯くいふは著者の本旨に背くかも知れぬが）它山の石として我が國語學の進展をいやが上に進める意味でそこにも觸れて欲しかつたものは余一人であらうか。小冊子とはいへ、現代學術普及の一書として、縦に斯學の變遷推移を敘すると共に斯界の形勢を説き、世相との關係を示したり、重要參考論書を擧げられたならば、吾等啓蒙の上に資するところが一層であつたであらう。

五十音圖の
歴史

氏は近來矢継ぎ早に有益の書を公にされる。昭和十三年九月に出された五十音圖の歴史も國語學史の一部の詳説と見られないことはない。序によると、其大學の國語の教授が發表された論文中に、五十音圖は契沖の作のやうに云つてあるのを見て、國語愛にもえる氏のこゝとて、國語の爲に泣いても泣いても泣き足らぬ悲しみを感ぜ、五十音圖のことぐらゐは國民的常識としてすべてが知つてゐなければならぬとし執筆されたものといふ。

その内容

五十音の起原に關する諸説、音通説の基礎として音圖の存在、音圖存在時期の溯源的研究、初期の正しい音圖、音圖成立の推定、中期錯亂の音圖、音圖に錯亂の生じた事情及びその影響、正しき音圖の復古、音圖の名目及び認識の變遷の九章に序結が加へられてある。

五十音圖に就きては古來多くの人が多少それに觸れてゐないものは極めて稀な程であるが、明治大正の御代にありては大矢透氏の音圖及手習詞歌考が多くの貴い資料を擧げて論じてあるので、全面的には賛意を表しなくても大體は平安朝の初期に悉曇家によりて作られたもので、それがその後排列の順を誤るに至つたと信じてゐた。大矢氏の五十音の祖圖としたのは芝葛康朝臣の寛文五年に寫した明覺の五韻次第の初に擧げてある音圖で、天台座主良源傳本とあるから、彼の音圖ばかりは「全く良源以前より天台に傳はれるものなるべきは更に疑ふところなし」と斷じてゐるが、大矢氏は葛康の自筆本を見ないで谷森善臣氏の寫した葛康本に據つてゐたのである。山田氏は葛康朝臣の後裔である芝葛盛氏からその自筆

明覺の五韻
次第

本を得て精査した結果、天台座主良源傳本の八字が該本には無いことが分り、これは大矢氏の錯誤か谷森本の誤かに違ひないことを明かにされた。

五十音圖は國語の音聲表ではない

この圖を良源所傳とすべきでないとしてゐた人には橋本進吉博士もある。日本文學大辭典の五十音の項目の處に、橋本氏は「五十音圖は國語の音聲表のやうに見えるけれども、元來國語の爲に作られたものでなく、外國語學殊に漢字音の反切のために作られたものらしく思はれる。」と述べてある。

音圖の悉曇起源説を斥く

山田博士は音圖の起源に關する古來の諸説を分つて應神天皇の御代に造られたといふ説、吉備眞備の造つたといふ説、悉曇から生じたといふ三説とし、その源委を委しく述べ、それらは皆實證せられないと斷じ、次に平安朝の末期に勃興した歌學が古語の解釋に方り五音相通及び同韻相通の説を用ゐてゐるが、これは悉曇にあかるかつた明覺の悉曇要訣や反音作法などに負ふところがあるやうに見えるが、尙

矢田部公望私記の相通説

これは溯源的研究をしなければならぬとし、日本紀私記には音の相通のことが見えてゐる。この私記を矢田部宿禰公望のとすれば、延喜の頃既に相通説が用ゐられてゐる。悉曇家のものより以前に音圖があつたと推定され、中期以降錯亂してゐる音圖を一々検討し、いづれにも漢字音の反切を説いたものが

音圖は漢字の音の反切の爲の制作

多い事實を認め、音圖のはじめは漢字の音の反切を説明する爲のものであつた。而して「反音の法はもと儒家に端緒を發し、それら儒家の間に反音を簡明に示す爲に假名を以てした音圖が生じたが、それが本邦の言語の音の組織を明かにするに足るものに發展したものであらうか。」と説いてゐられる。

小島好治氏の國語學史は昭和十四年に山田孝雄博士の校閲を経て刀江書院より發行された。その時代の區分は五期に分ち、契沖以前、本居宣長、東條義門、大槻文彦の出るまでの四期には、假名遣・てには・音韻・語格等の部目を立て、首にその期に現れた主なる學書目を挙げ、次にその序跋目次を載せ、あるものは古人の評などを加へてある。第五期は山田博士の國語學史要に則つて、明治の初年に筆を止め、國語學史の對象として論ずるに適切な時期と思はぬからといつて、近年斯學の隆盛をきはめてゐる現代に觸れてないのは吾人の賛しないところである。稍々委しき啓蒙的のものとして公にされたものかと思ふ。

重松信弘氏の國語學史概説は昭和十四年に發行された。この書は前に出された明治書院の國語科學講座の國語學史を増訂したもので、第一章序説には國語學史の意義・その研究法・組織・時代區劃を説き、第二章以下毎章一期づつとし、第五章現代で終つてゐる。その區劃は契沖以前、その後、鈴木腹、本居春庭以後、明治以後と四期に分ち、第一期は長期間に互るので、更にこれを初中後の三小期に分つてある。さうして各期乃至各小期の首に概説を挙げ、次に要項を述べ、終に結びを附してある。かくてその體系もよく整ひ、前後脈絡があつて發展の様相がよくつかまれ、豊富な内容を簡明に記し、深く原據を示す必要のあるものは末に註記してある。

第一期の初期即ち奈良朝から平安朝の中頃までの節にはまづ上代人の國語意識として、概説、古典に於ける古語、俗語方言、訛語轉語、觀念語運用辭、言葉、結びに分ち、次に日本紀私記に於ける國語研

中期の研究
悉曇學より
の國語研究

究として概説・訓註・釋義・語學的方法・結びとし、次に字書の制作につきて細くこれを敘してある。

中期の研究には悉曇學よりの國語研究、歌學に於ける國語研究、仙覺抄と釋日本紀、和漢字書の出現、假名遣の發生の五項目に分ち、悉曇學よりの國語研究は從來の國語學史にはあまり説かないところであるが、本書にはこれを當時の悉曇學と明覺、悉曇要訣、其後の悉曇應用の大勢と目を立て、詳説してある。尙附録に收めた「悉曇要訣に於ける國語研究」と併せ見る時、著者がこの點に力を注がれた意味が分る。竹田鐵仙氏が金澤庄三郎博士の還曆記念東洋語學に載せた「悉曇相通説と活用研究に及ぼせる其の影響」と共に照合すべきものである。

歌學に於ける
國語研究

歌學に於ける國語研究の中、音通・音の添加・語義研究の外、古語・世俗語・風俗の詞等の様相の意識進展を説くのは宜しいが、仙覺抄と釋日本紀の條に時枝誠記氏の古典註釋に現れた語學的方法といふ論文に全く觸れてないのを遺憾とする人もある。

契沖以後の所謂第二期については、近世國學の成立と本期の研究概観、契沖の研究と假名遣、語義語源及び方言の研究、荷田春滿と賀茂眞淵、てにをは研究と富士谷成章、本居宣長の研究の六項に分けてあるが、紙數の關係からかあまりに緊縮的な記述をとつた傾向が著しい。よく要をつかんであるとはいへ、今一段の詳説があつた方が望ましく思はれる。明治以後の部は複雑多趣なる研究業績をよくまとめられてある。著者は國語學史の思想史的意義といふ點に重點を置き、また文化史の一部門として取扱は

假名文字遣
の原始形

うとする意圖があつたやうに見える。

附録には言語第三輯に載せた「悉曇要訣に於ける國語研究」、國語研究に載せた「假名文字遣の原始形に就いて」、コトバの五巻に載せた「契沖の古語研究の理念」の三篇を掲げてある。いづれも有益な論文である。尙年表も期ごとに分けて録してある。

時枝誠記氏
の國語學史

時枝誠記氏の國語學史は昭和十五年十二月に岩波書店から出た。氏は昭和の始め頃より國語と國文學や、國語國文や、コトバや、文學や、京城帝大文學會論纂などに國語に關する新しい研究を發表されて

國語の意義
に關し山田
博士の説を
斥く

ゐる。この書は昭和七年八月岩波講座日本文學に載せられた國語學史に據り多少の筆を加へられたもので、その序説に山田博士の國語學史要に國語の歴史性や社會性を強調される立場から「國語は日本國家の標準語であつて、國家の統治上公認して標準と立てゝある言語をいふ。」と定義されてゐるのをもちき、

言語意識の
發達及び言
語研究の目
的

國語學史の
面目を一新

日本語的性格をもつた言語を意味するものを指すといひ、従つてまたたとへ外國人の日本語研究であつても山田博士のやうに、日本國民がそれをとつて研究した時に始めて我が國語學の領域に屬せしめる考には賛成しない。氏は「日本に於ける言語意識の發達及び言語研究の目的とその方法」を東大の卒業論文にされたさうで、この學史も國語學者の傳記・著書等は一切省略し、それらは日本文學大辭典や國語書目解題類や國語學大系の解説に譲り、從來の國語學史の面目を改め、國語學史上の諸問題の將來の國語研究に示唆するところのものを明かにするに努めたと自ら述べてゐる。第一部を序説とし、國語の名

義、國語學の對象、國語學と國語學史との關係、國語學史編述の態度、明治以前の國語研究の特質と言語過程、國語學史の時代區劃と各期の概觀の六章に分ち、第二部研究史は次の如く

第一期 元祿期以前

第二期 元祿期より明和安永期へ

第三期 明和安永期より江戸末期へ

第四期 江戸末期

第五期 明治初年より現代に至る

五期に分ち、現代國語書目を附録してある。過去の國語學史は明治以後に於て専ら國語の學說史と考へられた爲に、その理論と體系の貧弱なることに對して峻烈な批判を受け、價值なきものと斥けられ、多くの學者はそれらの缺陷を現代の言語學に照らしてこれを批正することが現代の國語學にとつて有効な風に考へてゐるのは不當とし、明治以前の國語研究には自らの力によつて國語現象を發見しようとする態度が著しく、従つて明治以前の國語學史は過去の研究者の國語意識の展開史であるべく、これを知ることが必要であるとの立場から論究を進めてゐるのである。

元祿期以前

斯くて元祿期以前を、まづ古代日本民族の國語に對する信仰より説き、祝詞・壽言・枉言・忌詞に觸れ、次に古典の研究解釋を目標とする語學を説き、歌學並びに連歌の作法即ち表現を目標とする語學を

現代の國語學の弊

解釋の爲の
見解の爲の
表現の爲の
見地の爲の

假名遣觀

明治期の内
容

ソシュール
の言語學說
の紹介の讚
美

論じ、解釋の爲には言語に於ける顯現の方則を説き、陳述の場面的變容を述べ、語の構成法や職能的類別に説き及ぼし、表現の爲に語の意味用例を明かにし、假名遣を規正し、てにをはの用法を明かにすることを説き、次に漢字漢語の學習並びに悉曇學を説き、辭書の編纂に及んである。元祿期以降の部に於ても上代文獻の用字法の研究以下傾聴すべきものが少くない。假名遣に於ても古くは和歌記載の爲のものであつたのが、元祿期になると語義の標識としての假名遣觀が發生し、文雄等より後は音韻の標識としての假名遣觀が成立したといふ如く、種々の觀點から述べ、明治期は國語國字改良の諸問題、改良問題の調査機關と國語研究、文典編纂の勃興、口語文典の編纂と方言調査、辭書の編纂、言語學の輸入と國語研究上の諸問題の數項に分ち、簡單に要約して大勢を説き、昭和の初小林英夫氏がフランコ・スイス學派のソシュールの言語學說を紹介され、從來の史的言語學に對し言語の體系的研究を力説された功績をたゞへて筆を收めてある。

末に自家の研究論文三十五の目録を擧げてある。併しそれらの雜誌所載の論文を集めて一々見ることは容易でないから、この書にそれらをもう少し説かれたならばと思はしめるものがある。新しい見方を開かれた點は多しとすべきであるが、紙數を惜しまずにもつと詳説して欲しかったものは余一人ではあるまい。

四十三 國語史の研究（その一）

物集高見博士の言語變遷正訛辨

大槻文彦博士の口語法別記の端書

連體形が終止形を兼ねる係結法のくつれ

日本語の發達變遷の跡を史的に考察するは國語史の目的とするところ、富士谷成章は和歌の上から六運説を立てたことは既に説いた。明治時代に至り物集高見博士は學藝志林 第七十二冊に言語變遷正訛辨を掲げ、六變遷を立てた。即ち漢字の渡來で一變し、佛教の渡來で二變し、延暦以後片假名が出來、音便が起つて三變し、天長の頃空海が伊呂波歌を作り、和文が起り、漢語を和語化して四變し、保元以後田舎武士が都に來て言語が俗化して五變し、鎌倉室町以後口語も亂れ、文語と相違が生じ、斯くて六變したと概括論を述べた。

大槻文彦博士は口語法別記の端書に我が言語の變遷を説き、奈良朝以前と平安朝との別を認め、奈良朝以前には言葉に伸び縮みはあつたが、音便はなかつた。平安朝の中でも、後三條天皇並びに白河天皇の御代から音便は勿論、假名遣も變つて來て、動詞の活用の変りもますます見え、源平等の武士の勢が盛んになつた頃から京都の言葉に變化が起り、動詞の活用の連體形を終止形にすることも多くなつて來た。鎌倉時代になつて文の掛り結びの法則が崩れ始めた。南北朝に至つては、公家の人々がいつしか言

東西方言の
境界線

安藤正次氏
の分類

ひも習はぬ阪東聲をつかふやうになり、應仁の頃から言葉が一段と變つた。織田豊臣時代に至り、「頼うで」が「頼んで」となり、「流いて」が「流して」になつたことより、江戸の言葉の成立を説き、言葉の島を生じたことや、東西言語の界線が信越・濃飛の間に南北に亘る御嶽系の大山脈でしきられること等を説かれてある。外國人のアストンやチェンバレンやノアクなども或見方をして分類してゐるが、茲には略する。山田博士は奈良朝・平安朝文法史を書かれたことは既に述べた。安藤正次氏は國語の變遷を五期に大別し、

- (一) 國語形成の時代 上古及び奈良朝
- (二) 國語發達の時代 平安朝
- (三) 國語混亂の時代 鎌倉南北朝
- (四) 國語分化の時代 江戸
- (五) 國語統一の時代 明治以降

以上の中、(一)を崇神天皇の御代までと大化改新とその以後の三小期に分ち、暗黒時代・混成時代・成熟時代と名づけ、(二)を天曆を境とし、前後の二期に、(四)を享保前後の二期に分けた。併し中古は大槻・山田兩氏の如く院政の始まるまでとし、以下は鎌倉に併せ説く説が有力である。

古代國語の
研究

安藤氏は大正十三年に出した古代國語の研究の中に上代の音韻を論じ、次に語の構成に關し、名詞は

名詞の成立

造語的接尾辭

大體に於て總稱的のものがまづ發達し、次にその中に含まれる各種の品目を示す他の言葉を加へるのが普通である。瓮がまづ成つて次に忌瓮・鍋等が出来る。動詞・形容詞は主要成分があり、その意義を分化させる力をもつてゐる造語的接尾辭を加へ、母韻の變化によつてさまざまの語尾を生ずる。而してその種類は次の四つとし、

(一) k (g)m による分化 「しづく」と「沈む」

(二) str による分化 「消す」と「消つ」

(三) n による分化 「尋ね」「たどる」

(四) fb による分化 「贖ふ」「憐ぶ」

形容詞の造語的成分

その中核となるものは極めて短小なるものといひ、形容詞の活用は從來特徴的なものと考へられ來たが、古い時代の表現のうち、自然淘汰の結果、あるものは消滅し、他の殘存したものを取合せて、同一活用系に組合せた爲に複雑の觀を呈するに過ぎない。隨つて還元すれば明瞭になるといひ、その語幹に結合する造語的成分は次の三つであるとした。

(一) m の附くもの 「痛む」の如き

(二) k の附くもの 「痛く」の如き

(三) s の附くもの 「痛さ」の如き

語に添ふ
「ら」及び
「ろ」の意
義及び成立

また語の後に添ふ「ら」及び「ろ」に關する新村博士の東國方言とする説、宣命の^{良麻}に關し、二分して「ら」は語調を助ける辭、「ま」はまに／＼と同じと説く山田博士の説、「ら」及び「ろ」に朝鮮語の造格を表す助語^{ro}に對するものと説く金澤博士の説などを舉げた後、「ろ」は「である」の義と説いてある。

安田喜代門氏の昭和四年に出した高等國語法にも上代よりの國語法史の概説を擧げてある。

國語史概説

この類の書で最も優れてゐるのは吉澤義則氏の昭和六年に出された國語史概説である。この書は首に明治以降に於ける國語史參考書の主なるものを擧げ、本文を假名の發達、音韻の發達、音韻の退化、歌語と文語、中古語の完成、近代語の發達、東西二大方言の競争の七項に分ち、末に概括を附してあつて、纏まつた國語史の最初のもつと謂つて宜しい。

平假名の成立
片假名

中に平假名は女子の手に成つたものといひ、その時代は竹取物語の成立した清和天皇の御代に近いとし、五十音圖はもとは萬葉假名で書かれたのを後片假名に書かれたもので、堤中納言物語の蟲めづる姫君の巻には片假名で歌を書いたとあるを引き、その時代を想はしめてある。

ハ行音轉化
の時期

音韻發達の條には上古時代に「ヌ」が「ノ」となり、「ク」が「コ」となり、「ユ」が「ヨ」となつたとより、ハ行音はpからfに、fからhに移つた時期に關し、雄略天皇紀の和斯里底乃と萬葉集卷五の波之利去奈々とを合せ考へて、聖武天皇の頃にpからfへ轉じたと推定した。尤もハヒフヘホ一行の中

フだけは遅くまで残存してゐた。f から h に變つたのは後奈良天皇の御宇の頃とし、撥音につきては助動詞の「む」などは奈良朝の末期に m にかはる傾向を生じ、後竹取物語の頃には n の音が認められる。

「なでふさる事かし侍らむ」の「なでふ」は「ナンデフ」に違ひない。唯撥音の表記文字が無かつたに過ぎない。r と n とは變り易く、「殘の雪」を「のこんの雪」といひ、播磨を「はりま」と呼ぶが如きその例は夙くからあるのも撥音の標記は音の存在よりも後れてゐて、天曆三年の識語ある漢書揚雄傳に加へてある傍注に m の方は一定してゐるが、n の方は

漢書揚雄傳
に加へてある
音の標記

て

禪セ 棍クン……表記なし

般パン隣リン

駢……「む」を代用

允ユン

……「い」を代用

表記法と音
價

の如く表記法が動搖してゐる。随つて土佐日記の船頭の「ていけ」のことを云つてゐるのは「テンケ」と發音したのではないかといひ、その後も n を表すにはレ印を用ゐてゐた。落窪物語に駒の嘶聲を「ひうといなくき」と書いてゐるのはヒンと云ふべく、今昔物語に「狐のコウく」と鳴く」とあるもコンコンと訓むべきでは無いかと論じてゐる。元永本の古今集に龍膽の花を「理うた有のはな」と書いてゐるのも表記法が一定してゐない證據であるとした。

音韻の退化

音韻の退化に關しては石塚龍磨がその師本居宣長の教に基き、假字遣奥山路に五十音の中

エ・キ・ケ・コ・ソ・ト・ヌ・ヒ・ヘ・ミ・メ・ヨ・ロ

音便の發生

院政時代より音便が盛んになつた

「侍り」と「さぶらふ」との用例

の十三音は記紀萬葉には同音の假名が二類に分れ、同類のものは通用するが、異類のものは相通せずとの説を挙げ、五十音圖の成立に關しては大矢透氏の説を載せ、音便の發生も音韻退化の一現象であるとし、音便中連用形のは平安朝の文學には夙く認められたが、連體形の音便は鎌倉以後に勢力を得、江戸時代には連用形の音便は勢力を得ないで明治以降關西方言に榮えてゐることを説き、音便の種々相を説いてある。次に歌語と文語との別につき、平安朝では音便が散文の上には盛んに用ゐられたが、和歌には用ゐられなかつた。これは當時の散文が言文一致であつた一つの例證となると同時に和歌の用語が話語のまゝでなくて或る距離があつたことを示すもので、院政時代になると、「急いで」に於ける如く語尾の「ギ」が「イ」に變るものや、夕行四段の動詞の語尾の「チ」が促音になるものや、ハ行四段の語尾「ヒ」が促音に轉ずる例なども出て來た。而して和名鈔の頃より雅俗の別を區別した。その標準は典據のあるものを雅とし、近代の語を俗とした。

次に「侍り」といふ敬語の用法に關し源氏物語時代には多く用ゐられたが、「候ふ」は少く、源氏全篇を通じて僅かに五六に過ぎず、而も身分ある婦人はこれを使用しなかつたが、狹衣物語になると、「候ふ」の用途が廣く、今昔物語には「侍り」と「候ふ」とは相半し、台記には「侍り」は鳥羽法皇の御消息を寫した所にも用ゐられ、他は「候ふ」のみを用ゐ、後白河天皇の御消息には「候ふ」ばかりとなつて

近代語の發達
連體形が終止形に代つた跡

ゐる。その後の御宸翰類にも皇族以外の消息には「侍り」は全く用ゐられないことを示され、話語と文語の別を擧げて、中古語は形容詞は五段の活用を全備するやうになつたこと、動詞は下一段活を生じ、四種九類となり、助動詞にも興亡があつたことに觸れてゐられる。

近代語の發達に關しては、先づ形容詞・動詞・助動詞の連體形が終止形の地位を占めたこと、二段活用が一段活用に變る傾向を生じた跡を明かにされた。連體形を終止形に用ゐることは對話の場合には夙く竹取以下の物語にも見えてゐるが、これは終を略すると物柔かな氣分が浮び出るので、この心理から終止の言ひ切つた形を用ゐずに續く心持で連體形を用ゐたものと推定し、平安朝末期になると、それが地の文にも現れ、漸次終止形の滅亡を來したとした。鎌倉時代以後は「落つ」・「受く」・「寝」・「來」・「爲す」・「被」などの終止形は殆ど亡びた。「有り居り」の終止形がなくなり、な行變格は終止形が連體形を壓迫し、變格の資格を失つたのは室町時代からといひ、形容詞は連體形の音便が次第に固定し、また終止形を同化して現代口語と同じ活用をなすこととなり、文語の四種九類の活用が現代口語の三種五類となつた。その過渡期として鎌倉・室町時代を眺め、これを助辭の上からも證據立てゝある。

敬語の「ます」の語原

助動詞の中、未來を示す「う」が文語の「む」の位置を全く奪つたのは室町時代に入つてからであるが、鎌倉時代にはまだ十分な發達を遂げてゐない、恐らくは關東方言に發達したものではあるまいかといひ、敬語の「ます」は「參らす」から出た「まらす」の變つたものであることは疑はないが、文語

東西二大方
言の競争

の「ます」の血、「申す」の血も融け合つてゐるやうで、その源を一元に歸せしめられないと論じ、次に東西二大方言の競争に關し、源氏物語や今昔物語や平家物語などには關東語が卑しめられてゐたが、鎌倉の半ば頃になると、日蓮上人は在京の弟子日進を誡めて「言ヲバ田舎言葉ニテアルベシ」と言つた如く關東方言に對する自覺を生じ、それから多くの年を累ね、江戸時代の中葉以降に至り、式亭三馬の浮世風呂に見るやうに上方言葉との地位が轉倒するやうになつたことを述べてある。

國語科學講
座に於ける
國語史學

明治書院の國語科學講座には、國語史學として安藤正次氏の國語發達史序説、佐伯梅友氏の上古の國語、安田喜代門氏の中古の國語、土井忠生氏の近古の國語、吉澤義則氏の日本文章史が收められてある。

安藤正次
國語史序説

安藤・佐伯兩氏のは刀江書院の國語史に改裝されて再び版になつた。中に安藤氏の國語史序説は多少の修訂を加へ、明治時代に關する一章を補つてある。國語の成立期を崇神天皇の前後に置き、大化の改新より奈良朝の初期に至る間を集中偏在の時代とし、鎌倉・室町の時代を分散均等時代、江戸時代を二元對立時代、明治時代を一元統一時代と改めてある。

佐伯梅友
國語史上古
篇

佐伯氏のは萬葉集を資料として、文字・歌語・音韻・外來語・東國方言・敬語・男女の言葉以下十二項に分けて説いてある。鶴を歌には必ず「たづ」と詠み、蝦を「かはづ」と詠んでゐる例によりて歌語と文語の相違があるとか、歌に君と呼びかけるは男に限るなど、澤瀉氏の國語國文に載せた説に基いて説いたところもある。山田博士の奈良朝文法文に負ふところも少くない。

安田喜代門
氏の平安朝
篇

資料價値の
検討

前代遺響

石塚龍磨の
研究の再検
討

安田氏のは最初に國語史の時代區劃につき自他の説を述べ、中古期は平安食都から院政の始まるまでとし、次に研究資料を漢文式の文獻と國文式の文獻とに大別し、その中後者は公卿・殿上人・女房たちの如き俗界の權力階級の力によりて遺され、前者は僧侶・學者の如き階級の人によりて遺されたものといつて、その資料價値を検討し、大和時代に散文に行はれてゐた助詞「ナモ」はこの時代には夙に「ナシ」に變つてゐたに拘らず、六國史に於ては、宣命に「ナモ」が多く用ゐられてゐた實例を列舉し、次に資料と時代とを検討し、前代遺響の章には大殿祭の中の所知食の註として延喜式に古語云志呂志女須とあるを否定し、萬葉時代には「シラシメス」であつた「シロシメス」は平安朝の新語であるといひ、助詞「カナ」は平安朝に起つたと一般に考へられてゐるが、常陸風土記には俗曰與久多麻禮留美津可奈とあれば、東國地方には夙くから認められてゐたかも知れぬといひ、以下第六章より第九章までは文字と音韻とにつき、大矢氏の提供した佛典の訓點その他の資料をあさつて、「ウルハシ」を「ウルワシ」と書き、容を「カヲ」と書いた例などを引きて假名遣の正しかつたといふ延喜天曆以前にも、必ずしも絶對正鵠と云へないと論じてある。石塚龍磨の發見した十三の假名とその濁音とも一部分にはやく亂れてゐる點があるといひ、「ヨ」と「ヘ」と二つの假名は日本後紀時代の宣命によると最初より混亂してゐることを示し、天長年間に至り「ケ」といふ假名にも混亂を生ずるやうになつたといひ、然らば「ヨ」の二類の假名はいつ頃までは區別してゐたかといふに、天平寶字八年の宣命に至り始めて亂れて來たと例を引

平安朝文法
概説

土井忠生氏
の近古篇

ロドリゲス
の文典の利
用

「エ」・「オ」
の漸強母音

鼻母音
子音と音節
の新しい研
究

いて證してゐる。その他につきても龍麿の提唱、橋本博士の紹介に基き、宣命を検討し、その一つ／＼の使用例をしらべて是正すべきは是正しようとの企と見られる。最後の初期の語法と語彙とに關しては助詞「ナモ」が「ナン」に變り、主格助詞「イ」が消滅し、「カモ」が亡びて「カナ」があらはれようとし、助詞「シム」が「ス」に移らうとし、「ベラ」が発生したといふ特色を述べるに止め、委しきことは改社の短歌講座に載せた「平安朝文法概説」に譲つてある。

土井博士の近古の國語は院政・鎌倉・室町三時代に互る約五百年の語法を明かにしたもので、序説に山田・湯澤・橋本・春日諸氏の研究より日葡辭書、ロドリゲス及びコリヤードの日本文典などの參考資料を紹介し、次に音韻・語法に分けてその研究を述べてある。吉利支丹側の資料、特に從來諸家が名のみを擧げて、内容を十分に検討しなかつたロドリゲスの文典を精讀し、これを利用された點に於て出色のものである。

母音「エ」は室町時代の末には單一母韻のeでなく、漸強母音の ϵ に發音せられ、「オ」もoでなく漸強重母音の ow であつて、假名遣の上に「ヲ」が「オ」に發音するやうになつたと一般に唱へられ造るが、室町時代には「オ」が却つて「ヲ」に統一せられてゐたことを證し、鼻母音が a などの破障音の前に現れる（ ヲ を「トンガ」といふ如く）ことを諸家の説を引いて述べ、子音と音節とにつきても委しく説いてあつて、 g の前の母音が

拗音の研究

入聲音の研究

促音の研究

撥音の研究

常に鼻音化した影響であらうといひ、サ行音も東北地方や出雲地方や九州地方でシエ・ジエをセ・ゼの代りに用ゐてゐるのは室町時代に廣く行はれた發音が近地に名残を留めてゐるものと見、タ行の清音は[t]で統一されてゐたが、チ・ツが *chi tu* と變化したのは近古のことで、その濁音が混同するに至つたのは應仁前後とし、ハ行音が近古の初にはf音であつたことは東禪院心蓮の口傳を記した悉曇口傳に存し、近世初頭にはf音からhへ移らんとする中間音が或る地方に行はれてゐたといひ、拗音の「クッ」は近古にも標準として行はれたが、文明中桃源瑞仙が作つた三體詩抄には京都の下層社會には「カ」と發音したことを示してゐる。「クキ」・「クエ」は近古には消滅して「キ」・「ケ」となつたことを説き、指定助動詞の「ぢや」は室町時代に發生したが、これは *che* でも *ge* でもなく、一種の中間音であつたといひ、長音の中才段のものは開合の二種があつて「ひろがり」・「すぼり」と呼んで、ゐとゐとであらはしてゐる。ウ段の長音も才段と同じく近古までは存し、入聲音は漢籍佛典を讀誦する際に正しく守られたが、p k の音の場合には開音となり、入聲の性質を失ひ、も音の場合には入聲をもち、促音は鎌倉時代には全く表記しなかつたり、表記するにしても用字が一定しなかつた。吉澤博士の調査によると、「ン」・「ツ」の外に「ケ」・「フ」の假名を用ゐたことを引き、これは親鸞に限つたことではない。さうして室町時代から「ツ」に統一された。撥音は m n ng の中 ng が早く「ウ」となり、室町時代には長音となり、連音は撥音の n を受けるとき、母音の「ア」・「イ」・「ウ」は「ナ」・「ニ」・「ヌ」となる(例へば御主

語法

を「オンナルジ」、御入り候を「オンニリ候」、寒雲を「カンヌン」と呼ぶが如く」と説いてある。

代名詞の變化

次に語法につきては各品詞別にその種々相を説いてある。名詞の複数を示すに、その名詞を二つ重ね來つたが、室町時代に至ると、固定すること、接尾辭「ども」は人以外に無生物にも添へること、敬讓を細かに説ける外、輕蔑の意を示すに「しや」の接頭辭は今昔物語の頃より用ゐ來つたこと、室町時代には最も敬意を示す接尾辭に様の字を以てせること、代名詞には自稱に室町時代より私・それがし・身ども・我身・みづから・此の方^{はう}・こち等を生じ、對稱になんだち・その方^{はう}・貴所・御邊・ねし・おねし・おのしを用ゐ、事物代名詞には「このやう」・「そのやう」・「あのやう」の意味に、室町時代に至りては「これやう」・「それやう」・「これつら」・「それつら」・「これしき」・「あれしき」が用ゐられ、人・場所などを漠然とさす場合に「そんぢやう」が用ゐられ、史記抄には「ソソヂャ」と書いたところもあるので、倭訓栞の「そんでふその」の説は疑問があるといひ、「どこ」は夙く梁塵秘抄に見え、方向代名詞「あち」は室町時代には「あちら」とも用ひ、「そなた」の外に「そかた」も延慶本平家物語に、「いづかた」より出た「どかた」は和歌童蒙抄に見えてゐることを注意してある。

格助詞の用法の變化とぬけ言葉

助詞のうち、體言の格を示す「の」と「が」につき、「の」は敬し、「が」は卑しめる相違があつたことを説き、楠格「を」の代りに「より」・「から」を用ゐることが起つたことをいひ、安藝の「とぬけ言葉」の如く、室町時代には「後ニハ富貴ニナラウ云テ」の如き例は抄物類に見えてをる。呼格には上に

置く感動詞に「ヤヲ」の如きが生じたことをいひ、形容動詞の「なる」は室町時代からは「な」が勢力を増し、連體格は勿論のこと、終止形にも「なる」の代りに「な」が用ゐられるに至つた。

動詞の活用の變化も甚だしく、二段活用的一段化は夙く關東方言にあらはれたもので、ア行・ワ行の終止連體は鎌倉時代には「ウ」・「ウル」と發音したばかりでなく、ハ行の「ふ」・「ふる」もヤ行の「ユ」・「ユル」も「ウ」・「ウル」と發音したやうであるが、室町時代になつて一部には長音化するものもあつたが、全體としては「ユル」に統一されるに至つたことを橋本博士の説を引いていろ／＼と説いてある。

用言の法の中、形容詞の敬語法に近古よりは「御戀しく」の如く御の接頭辭を直接に附ける如き傾向が生じて來たことや、動詞や助動詞の敬語法中、「なる」・「ある」を用ゐて尊敬をあらはす方法が近古以來盛んになつた。「あり」・「なり」そのものには本來尊敬の意を含んでゐないけれども、これが動作を意味する漢語の名詞か用言の連用形かを承けることによつて「御寝モ打解ケナラザリシカバ」の如く敬意を表す。これも室町時代になると、その間に他語を挿入することが殆どないやうになつた。「ご許されあれかし」の如きは天草本に見えてゐる。而して次第に「なる」よりも「あり」を用ゐることが多くなり、「ある」の代りに「候」も用ゐられ、後には「候」の代りに「サフヘ」、次には「サ」、それから「ソウ」をも用ゐるものも生じた。「おはす」の上略「わす」は鎌倉時代に始まつてゐるが、室町時代には下二段に活用させ、來るといふ意に限定して用ゐられるに至つた。その他「御りやる」・「おぢやる」等の語史

から室町時代に使つた「しも」・「さしも」・「しむ」・「さしむ」等の敬の助動詞の用法等までも一々委しく説いた。

條件法のうち、「ずは」が「ざ」となつたことや、近代肥前詞の「見うば」・「讀まうば」の如く「うば」を用ゐたことや、「たれば」の變形した「たりや」より「間」・「さかいに」などにも觸れてある。助詞にも説き及んである。中古から近古に入つて微妙な言葉、悠長な表現が次第に減じて雄勁な簡潔な表現が流行し、すべてが簡單化する傾向を生じ、中古語を特色づける多數の助詞・助動詞が變動を受けた跡を詳かに説いてある。

佐藤鶴吉氏の近世篇

資料の研究史的考察

國語學史から眺めた俳書

近世語の語彙

佐藤鶴吉氏の近世篇は近世の國語の研究史的考察が主になつてゐる。首に近世語とその研究資料の見方、そのつゞき研究史的考察、國語學者及びその他の俗語説の三(章)に分けてある。第一の首に一般に對話を口語に、地の文を文語に扱ふが、その方針が中々に徹底してゐないことを田舎源氏やおあん物語によつて證し、近世語をいかに呼んでゐたかを検討し、次に近世語研究の不振を説き、言韻及び語法に關しては研究史の資料とすべきものが管見に入らないので、語彙に關する研究と文獻とを擧げると述べ、國語學史から見た俳書につき、俳諧初學抄・はなび草・毛吹草・言葉寄・片言・御傘・世話盡を説き、更に語法書の一二と語彙研究として一步及び通言便蒙抄を見、難字訓蒙圖彙・鼈頭節用集・女重寶記・世話重寶記・和爾雅・和漢古諺・書言字考・本朝世諺俗談を解題し、それらの中に包有してゐる種

々の語彙をとりあげ、若しくは書中に述べてある言語觀にふれ、これらの中より近世語を把羅剔抉しようとしつゝゐられる。

次に國語學者の部では、白石の東雅、徂徠の南留別志、田宮仲宣の橘菴漫筆、柳里恭の雲萍雜志、獨寢、谷川士清の和訓栞、貞丈の貞丈雜記、安齋隨筆、本居宣長の遠鏡、富士谷御杖の詞葉新雅、俳諧天爾波抄、清水濱臣の濁語考、橘守部の俗語考、喜多村信節の嬉遊笑覽、大田南畝の一話一言、柳亭種彦の足薪翁記、柳亭記、柳亭筆記、小寺玉畧の難題爲可話、雀庵のさへづり草等について口語資料を指示し、江戸詞・甲斐なまり・八丈島方言・諺・消息語・忌詞・戀詞・流行語・通言・雛妓の詞・隱語等につきそれ／＼説くところがある。

湯澤幸吉郎
徳川時代
言語の研究

補助動詞・
補助形容詞

江戸時代の言葉を文法的系統に従ひて一々例を引いて説いたのは、刀江書院の言語誌叢刊の一篇として出した湯澤幸吉郎氏の^{徳川時代}言語の研究である。この書は室町時代の言語研究につぎ、更にその研究を江戸の前半期に及ぼされたもので、その研究の資料とされたものは、主として歌舞伎狂言本と淨瑠璃本とで、その他にも廣く及んでゐる。普通に廣く行はれてゐる體系によつて幾多の例證を忠實に擧げてある。中に補助動詞や補助形容詞の目を立て、前者には「遊ばせ詞」の外に「でやる」「であんす」「でやんす」「でやす」の如き、「おんじやる」「こます」「こわる」「こある」「こんす」「ごあんす」「ごわんす」「たもる」の如き類をも擧げ、後者には「おりない」の如きをも擧げてある。國語調査會

の口語法別記と共にこの時代の研究に根本資料を摘出された勞を多しとすべきである。唯室町時代の言語が江戸時代に移つてゆく全體的の姿を一章説いたらばと思ふ。尙その資料につきても笑話類の本を逸した如き嫌ひがないでもない。江戸時代の後半につきては氏の手により今後蒐集大成される日のあることを望む。

吉澤義則氏
の文章史

吉澤義則氏は文章の種類によつて用語の性質が異なることもあるから、國語の研究を徹底せしめようとするならば、まづその屬する文學の種類を究め、而して後その用語の慣例を知らねばならぬとの立場から、國語史學の一編として文章史も執筆された。講座の一篇で大きなものではないが、見るべきものがある。まづ西田直養の篠倉漫筆の説や榊原芳野の文藝類纂の文章分類を挙げ、奈良朝に行はれてゐた國文には東鑑體と宣命體と假名專用體の三つが行はれてゐたことから始め、簡単に歷朝の文章史を説き、明治の言文一致體に及んであつて、美妙の「です」調、二葉亭の「だ」調、紅葉の「である」調にも觸れてある。さうして古來人々の所説をひろく引いて次に自家の見を述べてある。

國文の三體

「です」調・
「だ」調・
「である」調

四十四 國語史の研究（その二）

小林好日氏
の日本文法
史

數詞の語原

小林好日氏は昭和八年明治書院の國語科學講座に日本文法史を執筆した。國語の語法的範疇の起原を知り、その今日までの變遷沿革を跡つけることを文法史の目的とし、七品詞に分ちて、その變遷を説いた。代名詞は尊敬・謙讓等、待遇の言ひあらはし方を要求した結果、變遷を重ねたものといひ、數詞の構成はオーストロネシア語などにも手指と關係あることを述べ、その倍加構成法も兩手の指を同數づつ並べることから來てゐるとの説を甘なひ、「ひた」は直、「ふた」はその倍數、「はたち」もこれより出で、「みつ」は充實の義、「よ」は「い」・「し」と同義、「く」の「し」は接頭辭、「つ」は手と同語源、「な」は白鳥博士の「並無」の説よりも「似無」の義ではなからうかといひ、「や」は「よ」の倍數であるが、佛經に八もしくは、その倍數を用ゐる語の多かつたことから來たものであらうと説き、「こゝ」は白鳥氏の屈む説をよしとされてゐる。

動詞の原形
語基構成用
母韻の變化

動詞の原形に關してはまづ鹿持・アストン・チェンバレン及び金澤博士の説を挙げ、活用組織は

(一) 語基構成用母音の變化 (二) 接尾語「る」「れ」の添加

國語史の研究(二)

「る」「れ」の語尾は別の民族の語法と見る

形容詞成立の想定

の二つの異つた原則の上に立つてゐるといひ、世の一派の學者が「る」「れ」の語尾をもつてゐる活用を説明する爲に、「ある」とか「うる」とか既存の語が母韻變化の活用に膠着して生じて來たものと説きなしたり、また或る一派の人はこの二種の方法を兼ね具へてゐるものを原形と考へてゐるが、共にこれは誤であるとし、大膽に四段活用を以て動詞の語形變化を形造る言語習慣を持つてゐる主要の日本民族に、他の接尾語の添加を以て活用としてゐた民族の言語が混化したものと斷言してゐられる。併し無論實證的な説明はないから、危険性のあることは免れない。

この混和は母韻變化の形式に混亂を生じ、種々の變化を生じたが、やがて類推によりその亂雜のうちに統一を生じ、上二下二といふ種類にまとまつて行つたものであらう。この類推に洩れたものが左變加變となり、二段活用が四段活用に轉じ、更に一段活用となつたと説いてある。「見る」を萬葉集には「もる」、「似る」を古事記及び類聚名義抄には「のる」と訓んだ例のあるのは四段活用に活いてゐた證と説いてある。さうして各時代の移つていつた跡をたどらうとしてある。

形容詞に二種の活用があるのは久活は夙く成り、志久活は新しく出來たもので、久活が「く」「し」・「き」の語尾を具へてゐた時代に志久活は語幹に語尾の「し」が附いてゐる唯一個の形だけで終止にも連體にも用ゐた或る時期を經過し、後整備してゐた久活に同化され、統一されたものとし、「し」までを語幹と見る説を斥けてゐる。また形容詞が兩行に活用をもつてゐるうち加行語尾に於ては動詞と同方

向の發達を考へるが、左行語尾並びに接尾語の「さ・み」等につく形に於ては形容詞獨自の發達と考へると説いてある。奈良朝の形容詞には「か・け」と活用するものが残つてゐるのは一時代前に活動したものの残骸に過ぎないと見てゐられる。「逢ふを無み・日を多み」の「無み・多み」を四段の動詞に見る金澤博士等の説は斥けてある。かういふ風に原形や推移した形を想定し、それに合ふ例を引くことを怠つてない。

「す・しむ」
の語史

助動詞のうち使役の「す・さす・しむ」につき、奈良朝には「しむ」を用ゐ、平安朝には「す・さす」が一般に用ゐられ、「しむ」は漸次減少の一路をたどつたことは、竹取物語には「す・さす」は三四十も用例があるが、「しむ」は唯二個あるに過ぎない。源氏物語には「す・さす」は數へきれない程であるが、「しむ」は一二個あるだけで、それも皆「給ふ」を伴ふものばかりであるといふ如く實證的に説いてある。これが方言は一段に化するものが普通であるが、またさ・し・す・せと四段に活くものがある。京坂から中國・四國方言には兩者を合して「さ・し・す」と活用させてある。愛媛では「さ・し・す・しやあ」と四段に活かしてゐる。古く宇津保物語に「木の葉を宿にふかさぬ秋風の」とあるは四段に活いた例である。奈良朝に尊敬をあらはす助動詞と同じものであると説いてある。待遇の助動詞につきて昭和三年十二月の國語と國文學に足利時代の言語の待遇法について論じたものを補つてある。「マラスル」・「マラス」・「オマラス」・「オマツス」・「オマス」・「マツス」・「マス」等の

待遇の助動
詞

變遷も説き、否定の「ナンダ」の古い形に「ナムシ」の存してゐたことも説いてある。

時階の助動詞と動作態の助動詞

「り」と「た」との語史

時の助動詞は過現未の主観的時間段階をあらはす時階の助動詞（き・けり）と動作の時間的態様を現す動作態の助動詞（つ・ぬ・り・たり）とに分け、「ぬ」・「つ」は共に完了態に用ゐるが「ぬ」は單なる完了、「つ」は完了と共に動作のひきおこす結果の觀念を伴ふものといひ、「り」と「たり」とは繼續・存在・完了の三態をあらはすが、中に「り」の方が古いとし、記紀の用例を考へ、繼續態は五、存在態は二九、完了態は僅かに一といふ統計を擧げてある。「たり」は記紀にはなく、萬葉集卷十四には「り」が十五例あるに「たり」は纔に一例に過ぎず、源氏物語には末摘花の卷に「り」の五十三に對し「たり」は九十四を數へるといふ如く實證されてゐる。

助詞は職分の上から文の成分の關係を規定する關係助詞と文の意味を修飾する修飾助詞と感動助詞との三つに分類して、古多かつた感動助詞が後に至るに従ひやうやくその數は減するやうになつたと簡單に説いてある。氏は岩波講座國語教育にも日本文法史を執筆した。

また昭和十一年九月刀江書院より日本文法史を單行した。大體は國語科學講座をもととし、これに副詞と形容動詞の一章と助詞の終つた後に文に關する三章を加へてある。引例等に關し龜井孝氏の批評が言語研究に載つてゐる。

單行の日本文法史

金田一京助國語系統論

金田一博士の國語史系統篇は昭和十二年に出た。序論には言語と民族より筆を起し、世界言語の形態

世界言語分
布圖等

南洋語系説
・太平洋語
系説・オー
ストロアシ
ア語系説

ウラル・ア
ルタイ語系
説に活を入
れた

的並びに系統的分類を擧げ、シュミットの世界上の言語系統圖に基き、氏の意見を加へた世界言語分布圖、雙數及び三數分布圖、單語品等差別分布圖、數詞構成分布圖を挿み、形態的分類の條にはシュタインタールの抱合語・語根孤立語・語幹孤立語・併立語・膠着語・曲折語の六分説から自家の説を擧げ、系統的分類は十二類八十餘種に分け、第二章には前期の系統論として支那語系統説より南洋語系、アイヌ語系、アリアン語系、波斯語系、希臘語系、ウラル・アルタイ語系、朝鮮語同系、琉球語同系説を紹介批判し、第三章には現代の系統論の部としてラベルトン博士の南洋語系説、ワイマント博士の太平洋語系説、ラムステット博士のアルタイ語系説より堀岡文吉氏の汎太平洋語系説、松本信廣氏のオーストロアジア語系説を擧げて批評し、次に新村出博士のウラル・アルタイ語系説を引き、南洋語と共通の單語の研究は尙同系論にまで進展することは困難であらう。朝鮮語との關係は單語の上に止まらず、明かにも相似點が次第に見出され、格助辭 *i* と *ti* の一致、複數の助辭の *ti* と「たち」の一致、代名詞 *mi* と我が古語の第二人稱の意禮、否定の「な」と朝鮮の *ani* 等の相似は決定的ではなくとも偶合でないといふ説を甘なひ、最近小倉博士の母韻協和の現象も時代が古ければ古い程、明瞭にあらはれてゐる説を引き、一時停頓してゐたウラル・アルタイ語系説に活を入れたものといひ、第四章の結論には諸學説の綜括として、グルンツェルの擧げたアルタイ語族比較文法附比較辭書は土耳其・蒙古・ツングース・滿洲語に於ては相互の間に近似するものが多いが、朝鮮語及び日本語になると大きな隔りがあつて、すぐに一緒

アルタイ語族と國語との親疎關係

日本語の系統、特に數詞に就いて

山田博士の文字篇
日本文字學概説
テールルの分類説を斥く

文字の目的と本質

我が國の文字に即した文字學

には出来ないことを對照して示し、次に母韻調和説を擧げ、有坂秀世氏の古代日本語に於ける音節結合の法則を紹介し、最後にアルタイ語族と國語の親疎關係を圖にて標識して面白く一卷を結んである。蓋し諸家の系統論を拉し來つて縦横に批評してある好著である。

因に云ふ、白鳥庫吉博士は岩波講座東洋思潮に「日本語の系統、特に數詞に就いて」を掲げ、數詞の構成法、數詞の意義、神典に現れた數詞、數詞と同語源の言語につきて一家の説を示された。

山田博士の文字篇は國語史の一篇として昭和十二年に出た。氏はさきに改造社の日本文學講座に日本文字學概説を書かれたが、この書はそれを一層詳密に説かれたもので、章を十八に分けてある。まづ文字の意義、文字の種類より筆を起し、次に「文字の種類上の分類として」の章にはテールルの分類法を擧げて批評し、表意的書き方と音符的書き方の中、繪畫的文字は原始的のもの、アルファベットの記載は最も進歩したものとして一般に考へてゐるが、それは西洋人の誤解であつて、梵字の如きは前記二つのいづれにも入れられないのを見てもテールルの説は當つてゐないと斷言し、「文字の目的と本質」の章には音字が最も進歩した文化的の文字で、原始的の文字が野蠻未開なものだといふならば、數字は漢字でも羅馬字でもアラビヤ數字でもすべて最も野蠻的なものと云はねばならぬと逆に世説を非難し、我が國の文字に即した文字學が今日に至るもいまだ成立しないのを遺憾とし、羅馬字だけの文字學の跋扈してゐるのを憤つて、筆を執つて漢字と假名とが日本の言語文章に對する本質上の關係を具有することを明か

にしようとなめられたもので、そのしごととしてはまづ

(一) 神代文字有無の論

(二) 漢字の略史とわが國に輸入せられて以後のことども

(三) 假名の發生と變遷

(四) 漢字と假名との混用

漢字の略史
書體の沿革

の順序で説を進めてある。まづその(一)に就いては有といふ説、無といふ説をひろく見て要約して述べてある。(二)に就いては、漢字は形音義の三つを具してゐるが、その本質は一定の意義をあらはす點に存する、それが不易といふ特色をもつてゐるので、時の古今、國の東西をとはず、行くところとして行はれざるは無いと禮讀し、次にその起源を敘し、發達を述べ、書體の沿革を相當委しく説いてある。從來文字史には書風のことは殆ど顧みなかつた。また書道史には字體のことを疎略して説かないが、共に宜しくないと評し、我が文字史の上に最も深い關係のあるのは王羲之であり、つゞいては唐の中期までの書家の書風・書體であり、これらが我が片假名・平假名の母體をなすものであるから、これらの書の研究が我が文字史の上から精査せられねばならぬと論じてある。

漢字及び書
道

次に本邦に傳はつた漢字及び書道の一斑の章には、我が國の書風が王羲之を祖述したものであることを東大寺の獻物帳により光明皇后の樂毅論、また萬葉集、御物喪亂帖、前田侯爵家の孔侍中帖等によりて證明し、令義解を見ても書を美術的に取扱ふことが我が國家の方針であつたことが分るといひ、次に

假名の意義

發生期の假名資料

假名の一括表

漢字を使用した當初の狀況に關しては、最初は純漢文のものから萬葉假名、和漢混淆文及び宣命體の文にも、一々必要に應じてそれらが用ゐられた所以を説き、次に假名の意義及びその發生につきて、我が假名といふものは、漢字から出でて音字となり、我が民族の慣用によつて國語を寫し、國文を書きあらはすものを指し、翰苑の殘卷や鶴林玉露や全浙兵制附錄、日本風土記に載つてゐるものは我が國字を寫した音字であつても、これらは我が民族の慣用したものでないから、假名の中に入るべきものではないといひ、また邦人の用ゐたものでも一字一音でないもの、例へば宿禰や當麻の如く二音に用ゐたものは勿論假名としないとの方針により萬葉假名を検討し、その發生は漢字をば國語に従はしめようとする民族の要求から起つたもので、漢字の束縛から國語を解放し、同時に國語をして文化史上に貢獻せしめた第一歩であると斷じ、この發生期の假名資料を擧げ、大矢氏の假名源流考以外のもの、金石文、正倉院御藏の大寶の戸籍を一々調査して、まづ古事記奏上以前の文獻に見えた假名資料から音または訓を用ゐた假名の一括表を作り、次に古事記、萬葉集、續日本紀、風土記、養老以下の戸籍帳等に用ゐてある假名を各別々に音と訓との假名表を作り、その字音の取扱ひの方針を説き、次に萬葉假名より假名への第二期に及び、萬葉假名は字數の淘汰と字形の選擇とにより簡易化されたことを具象的に明かにしようとし、萬葉假名の字數が奈良朝以前には一千八十一であつたものが漸次淘汰されて、奈良朝より平安朝には四百四十五に淘汰されていつたと計數を示し、それより種々の文獻につきて萬葉假名の字形の簡易化

國語の將來
に關して

國語の中に
於ける漢語
の研究

漢學・佛教の
渡來より國
語の文獻に
入った漢語
彙
漢語の形態
の觀察
漢吳音の歴
史的由來
倭
音

された跡をたどり、假名の確立に及び、最後に漢字と假名との用途につきて、假名專用説、羅馬字説を唱へられて五六十年、今に實用に至らず、漢字と假名の混淆文のすたらないのは、本質的に國語の特性に最もよく適してゐるが爲かと思はれると云つてゐられる。尤も漢字節減とか省字・略字等の國語政策問題には觸れてない。漢字史の方は尙詳述すべきこともあるが、假名の發生に關しては緻密の考察があり、國民の自覺の上から眺めて筆を下されるところ貴きものが少くない。

山田博士は昭和十五年四月また「國語の中に於ける漢語の研究」を出された。往年出された「漢文の訓讀によりて傳へられたる語法」の姉妹篇と見るべきもの。序説以下漢語の傳來、本來の漢語と認むべきもの、範圍、漢語の特色、漢語の形態の觀察、源流の觀察、漢語の國語の内に入れる狀態、漢語の影響によりて起りたる國語の種々の狀態、結論の九章から成つてゐて、漢字の傳來の章には史的概觀と研究方針とを示し、漢學・佛教の渡來より國語文獻に入つてゐる漢語彙も擧げてある。本來の漢語の範圍に關しては吳音・漢音・唐音及び古音語を擧げ、漢語の特色の章には國語との異同を概説し、漢語の形態の觀察の章は著者の最も力を盡したものと見るべく、韻鏡の説明も要を得、漢吳音の歴史的由來も最も詳密にして引例の文字につきても一つ／＼精密な考證を加へ、我が國に於ける特殊な國音までも説いてある。これらの倭音は小川本華嚴經音義私記や新撰字鏡や承暦最勝王經音註・類聚名義抄等より集められたものであるが、所謂吳漢音といふものも實は一種の倭音であるとも考へられる。源流の觀察の章は

源流の觀察

倭名鈔を中心とし、漢語流入の事項を種々の方面から觀て、これを文化史的に國語史的にからませて考察し、その流入の手續も委しく論じられてあり、漢語の影響によりて起りたる國語の種々の状態に關しては音韻に及ぼせるもの、造語法に及ぼせるもの、語法に及ぼせるものと區別して綿密に説いてある。字音につきては議論もあらうが、とにかく我が國の漢字史として價値の高いものである。

今泉忠義
國語發達史
大要

今泉忠義氏の國語發達史大要是昭和十四年三月白帝社から出た。著者は世上一般の國學者が平安朝至上主義に傾き過ぎてゐるのを憐れないとし、國語の成長した姿を見る必要を感じ、師範學校・中學校に國語發達の大要が新たに課せられたのを機とし上は奈良朝より平安朝・院政・鎌倉時代・室町時代・江戸時代の五篇に分ち、音韻品詞につきてその變遷を説き、國語の眞の生命を知らしめようと企てたもので、山田・湯澤諸氏の研究を利用すると共に自家の研究を加へて平明に周到に説述してある。各時代に敬語法を加へてあるのも國語の上には當然のことながら著者の注意を喜ぶべく、奈良朝には簡單ながら東語の語法の一項を加へたのも宜しく、各篇に新しい思ひつきも加はつてゐる。但し品詞の語法が主となつてゐて語彙の上にはあまり多くの紙幅を與へてないので、文法史と見る向もある。江戸時代の前半には湯澤氏の研究があるが、後期のはまだ纏まつたものが出ないが、氏は諸書を涉獵してそれを補つた部も少くない。古い自稱の代名詞「まろ」は奈良朝文法史に逸してあるが、氏は平安朝のものとし且これを婦人・小兒の語に限るとした誤など二三の指摘すべきものがないでもないが、好著の一つである。

敬語法

東語の語法

四十五 ラヂオ放送とことばの講座

ことばの講座

ラヂオ放送

國語に對する國民の自意識を強くしようとの目的で、音聲學會が放送協會にわたりをつけ、ことばの講座を設け、ラヂオで全國に放送されたのは昭和五年が始めである。第一回到放送された人士とその題目は次のやうである。

一、開會の辭

上田萬年

二、發音機關に關する(一・二)

岡倉由三郎

三、東京語のアクセントと言葉調子(一・二)

神保格

四、琉球語の母韻組織と口蓋化の法則

伊波普猷

五、文字の話(一・二)

後藤朝太郎

六、外來語について(一・二)

市河三喜

七、室町時代の通俗語と能の狂言

和田萬吉

八、意味の變遷(一・二)

藤岡勝二

ラヂオ放送とことばの講座

九、方言(一・二)

東條操

十、平假名の話

吉澤義則

十一、語源と語史

新村出

十二、……………

金田一京助

以上の講演はことばの講座第一輯として東京研究社から同六年七月發行した。

九州方言講座

九州では日本放送協會九州支部の計畫で昭和五年の十月より同六年三月まで十名の講師によつて九州方言講座が放送され、同年五月放送講演集が出版された。その題目と講師とは次のやうである。

九州方言の輪廓

吉町義雄

熊本縣の方言

田中正行

福岡縣の方言

安田喜代門

佐賀縣の方言

澁谷武夫

長崎縣の方言

吉田弘文

大分縣の方言

堀江與一

宮崎縣の方言

小川新一

鹿児島縣の方言

原田芳起

九州方言講座の後に 春日 政治

吉町 義雄

佐賀辯と唐

津辯

白杵方言と
宮崎方言

豊後淨瑠璃

鹿児島方言

東京放送局
第二回こと
ばの講座

岡倉由三郎

中に就き吉町氏のは、九州方言の古今の沿革を述べたもので、その大観をよくつくしてあり、熊本縣は從來この方面の研究があまり盛んでなかつたに、この講座によりて明かとなつたものが少くない。佐賀縣のは舊藩の關係から二つに分れてゐた佐賀辯と唐津辯との差別を明かにし、宮崎縣のは白杵方言と宮崎方言とに分ち、佐賀辯の「かんだ」・「ばんだ」・「なた」・「のまい」から、唐津辯の「け」・「ば」・「たい」より大分縣の敬の敬語の少いことや、豊後淨瑠璃や、中津方言の「何げえち」・「こげつち」・「ちこ」や西部國東地方の「お前ぐう」や鹿児島方言の急迫な音調や敬語法の「ごわす」・「おちやる」・「たもんせ」・「ぎやす」等いろいろ細かに述べられてゐる。

東京放送局では昭和七年第二回目のことばの講座を開き、岡倉由三郎氏以下十二氏に囑して放送をした。翌年十二月中央放送局編「ことばの講座」として刊行された。その題目と氏名は次のやうである。

岡倉氏はことばの話、國字の問題二講

神保格氏は標準語といふもの、標準語と東京辯、ことばの正しい読み方話し方の三講

市河三喜氏の現代語について、外國語の読み方について、外來語についての三講

玉井幸助氏の漢字の読み方

橋本進吉氏の假名遣について

ラジオ放送とことばの講座

新村出氏の標準語の問題

東條操氏の方言について

伊波普猷氏の琉球の方言

吉町義雄氏の九州方言

泉井久之助氏の近畿の方言について

岡田稔氏の名古屋の方言

金田一京助氏の東北方言について

以上の十七講を収めてある。

放送協會では昭和十年二月より三月にかけて第三回目のことばの講座を開き、柳田國男氏以下十三氏が放送をした。この講演を集めて同五月「ことばの講座」第二輯として刊行した。前の放送は主として日本現代の言語の實際にわたる諸問題の解法に資する方針であつたが、このたびのは時代の變りや趣味に關する傾向が多い。即ち

家具に關する日本語 柳田國男

食物に關する言葉の變遷 木枝増一

服飾に關する言葉の變遷 宮本勢助

洒落と地口の今昔

近藤忠義

平安朝のことば

吉澤義則

武家のことば

野間光辰

町人のことば

木谷蓬吟

流行語

土岐善麿

日本語の中の外國語

神保格

手紙のことばの變遷

宮田和一郎

苗字の話

太田亮

學校すらんぐ

石黒魯平

婦人のことば

吉田澄夫

感動詞の歴史

柳田國男

中に感動詞の歴史は各地の方言につきその發生を細かに説いてある。婦人のことば・町人のことば・武家のことば等階級によつて相異なる言語研究は面白く、その他大衆向に短い時間に放送されることであるので、委しくはないが、限られたものにつき研究の片鱗は窺はれる。これらにより大衆の國語に對する自意識は次第に發展せらるべきである。

現 代

改造社の短歌講座第九卷修辭文法篇（昭和七年七月）には福井久藏の枕詞と序詞、山田孝雄博士の奈良朝文法概説、安田喜代門氏の平安朝文法概説、松山愼一氏の萬葉集の用字法、橋本德壽氏の萬葉集の助辭、松尾捨治郎氏の歌學文法の諸篇を載せてある。大正の末から昭和三年にかけて新潮社の日本文學講座には國語學に關するものは殆ど載せなかつたのに比し著しい對照であると思ふ。

四十六 國語科學講座と岩波講座日本

文學、岩波講座國語教育

明治書院の
國語科學講
座

晩近科學の進歩につれ、國語を心理學や美學や音聲學や社會學や地理學などと交渉をもたせ、新しき研究の分野が續々と開かれるに至つたことは實に昭代の慶事である。随つて近年に至り明治書院は國語科學講座の刊行を企て、昭和八年五月第一回配本を始め十年三月十二回分を完了した。その部門や執筆者を擧げると次のやうである。

音聲學・言
語學一般に
關して

○音聲學・言語學一般に關するものは

音聲學概論 佐久間 鼎

言語學概説 神 保 格

言語學史 小林 淳 男

言語史講話 石 黒 魯 平

音聲物理學 小 幡 重 一

言語社會學 田 邊 壽 利

國語科學講座と岩波講座日本文學、岩波講座國語教育

現代

國語音聲學 神保 格

應用音聲學 大西 雅雄

比較言語學 福島直四郎

音聲學史 大西 雅雄

音聲生理學 岡田和一郎

言語心理學 神保 格

言語美學 金原省吾

○國語學・國語學史・國語學書目に關するものは

國語位相論 菊澤 季生

國語書目解題 龜田 次郎

國語學總說 安藤 正次

國語學史 重松 信弘

漢文訓讀と國文法 山田 孝雄

○國語の系統及び國語と他國語との關係に屬するものは

漢語と國語 岡井 愼吾

國語學・國語學史・國語學書目に關するもの

國語の系統及び國語と他國語との關係

國語の時代
的研究

梵語と漢語

長井眞琴

アイヌ語と國語

金田一京助

朝鮮語と日本語

小倉進平

國語系統論

新村出

西洋語と國語

重久篤太郎

○國語の時代的研究に關するものは

上古の國語

佐伯梅友

中古の國語

安田喜代門

近古の國語

土井忠生

國語發達史序説

安藤正次

日本文章史

吉澤義則

○文語・口語法及びその史的研究に屬するものは

日本文法史

小林好日

文語法精説

木枝増一

口語法精説

湯澤幸吉郎

國語科學講座と岩波講座日本文學、岩波講座國語教育

現代

文法の原理 小林英夫

音聲口語法 三宅武郎

國語法要説 橋本進吉

方言に關するもの

○方言に關するものは

方言學概説 東條操

アクセントと方言 服部四郎

本州東部の方言 橘正一・東條操

新語論 柳田國男

本州西部の方言 東條操

言語地理學 江實

文字に關するもの

○文字に關するものは

文字學概説 後藤朝太郎

漢字の研究 岡井慎吾

萬葉假名 遠藤嘉基

片假名の研究 春日政治

國文・國歌
の表現に關
するもの

○國文・國歌等の表現に關するものは

平假名の研究 吉澤義則

ローマ字の研究 日下部重太郎

國語韻律論 相良守次

國語文章論 波多野完治

兒童語の表現 松本金壽

表現學序説 城戸幡太郎

國語形態論序説 松本金壽

國語と國民性 三井透

國語と社會性 澤田恭輔

解釋に關するものは

○解釋に關するものは

近世解釋學 佐藤鶴吉

中世解釋學 能勢朝次・小野直

古代解釋學 山岸德平・川瀬一馬

解釋學序説 石山脩平

國語科學講座と岩波講座日本文學、岩波講座國語教育

現代

國語教育に
關するもの

○國語教育並びに實地の取扱ひに關するもの

國語教育史 渡邊 茂

國語教材の變遷 佐々木 一二

國語の學力測量 田中寛一・丸山良二

讀方教育論 西尾 實

綴方教育論 丸山林 平

國語教育學 石山脩 平

國語科學教育史 飛田 隆

○教育政策に關するものは

國語政策論 保科 孝一

標準語の問題 石黑魯 平

假名遣問題 三宅 武郎

國字問題 日下部 重太郎

國語陶冶とラヂオ 岡倉由三郎

國語純化と基本語 土居 光知

で七十二題目に分れてゐる。以上の中には新考の見えるもの、努力を累ねたもの様々であるが、國語に關する諸門に互り新舊相雜りて總動員した觀がある。國語學の諸方面に於て大きな示唆と教訓とを與へたことが少くない。

岩波書店はこれに先ちて昭和六年から同八年にかけて岩波講座日本文學を出したが、その二十回に互る講座の中には次の如き國語學に關するもの十一篇をまじへた。

萬葉集の研究 用語法を主として 森本治吉

(1)

日本文法要論

山田孝雄

(4)

支那文字學

武内義雄

(5)

方言研究の概觀

東條操

(13)

國語音聲學

安藤正次

(14)

國語學史

時枝誠記

(15)

國風暗黒時代に於ける女子をめぐる國語上の諸問題

吉澤義則

(17)

國語學 概論_{上下}

橋本進吉

(17
19)

明治
大正 國語學書目解説

土井忠生

(18)

假名發達史序説

春日政治

(20)

國語科學講座と岩波講座日本文學、岩波講座國語教育

言語學概論

新村 出

(20)

數字はその取め
たる巻を示す橋本進吉氏
の國語學概
論

中に橋本博士の國語學概論は全篇を九章に分ち、國語學の概念、日本語の概念、國語學の諸問題、國語學の資料及び研究法、日本の方言、日本の標準語、口語の變遷、日本の文字、日本の文語の九章に分ち、丁寧親切に解説して所々に参考書目をも舉げてある。藤村作博士の編纂にかゝる日本文學大辭典の中に氏のかゝれたるものと參照して見るべきもので、日本の音韻及び國語の系統論には觸れなかつたのは、安藤氏の國語音聲學との重複を避けられる意味もあつたと思はれる。

安藤正次氏
の國語音聲
學

安藤氏の國語音聲學は一般音聲學と國語音聲學、國語の母音の考察、國語の子音の考察の三章に要約して説き、連音論に及ばなかつたことを斷つてゐられ、その基本的ものはこれを明かにされてゐる。

時枝誠記氏
の國語學史

時枝氏の國語學史は觀點の新しいものがある。別に單行本につきて述べた。山田博士の日本文法要論はその前著日本文法論の改定の要旨を窺ふべきものであるが、これは文法の條に説いた。

武内義雄氏
の支那文字
學

武内氏の支那文字學は支那の文字の形、文字の音、文字の意義の三章に分ち、文字の形の章は字形の變遷、文字の構造の二節に分ち、我が明治三十二年河南安陽縣で發見された殷時代の龜甲文の研究から漢代の學者に夙く注意された錯鼎等の金石文字の研究に及び、秦篆の制定・唐楷の整理に至るまでの變遷を明かにし、六書說文につきては吳大澂の字說、孫詒讓の名原、羅振玉の殷墟書契考釋の如き支那近代學者の説に私案を加へてこれを明かにし、文字の音には音韻關係の文獻を擧げて、それに基づいて次に

變遷を説き、魏晉以前、六朝末から唐初まで、その中葉時代、宋時代、元明以後の六期に分ちて論じ、

次に古韻の研究に入り、王念孫と江晉三の古韻二十一部表や孔廣森の陰陽説を折衷した大島正健氏の説などを引いてその説をまとめてある。名の如く支那文字學であるが、我が文獻學には漢字を離れられない關係上國語學の中に攝して差支へない。

春日政治氏の
假名發達
史序説

春日政治博士の假名發達史序説は推古朝に於ける眞假名の發生より説き起し、次にそれ以後眞假名の發達の跡をたづね、奈良期に於ける眞假名の隆盛から平安朝初期に於ける略體假名の成立を叙し、草假名に關しては尾上博士の「歌と草假名」、「平安朝時代の草假名の研究」にゆづり、乎已止點と假名點との先後については吉澤博士の説の如く、假名點に次いで乎已止點の起つたものとし、國語音の變化については奈良朝文獻に權を加伊、申を麻字勢、神風を加牟加是と呼ぶが如き所謂音便らしいものゝあることを注記し、假名と文體にふれてある。

尾上八郎氏の
平安朝時
代の草假名
の研究

因に云ふ、尾上氏の草假名の研究は大正十四年の著にかゝり、古筆切等の資料の研究を遂げ、當時の假名の系統を八類に分ち、書道史上より説き、古典主義・新古典主義・浪漫主義・武強主義等の各傾向や國文學との關係を論じたこの方面に於ける劃期的の研究であると謂はれてゐる。

森本治吉氏の
萬葉集の
研究

森本氏の萬葉の用字法研究は初に仙覺・由阿・契沖・春登・鹿持雅澄・高橋殘夢より武田祐吉・吉澤義則・橋本進吉等の現代の人々の説を擧げ、そのいづれにも満足が出来ないとし、自家の體系を立て大

綱を完讀と不完讀との二部に分ち、第一部を讀用と義用とに區分し、更にそれを音と訓に、その各、を純・不純に細分し、一字一音、一字數音、一字一訓、一字數訓等に分ち、第二部を讀音不足・文字不足に分ち、前者を省讀・不讀、後者を略書・讀添に區分し、それらを更に細分して諸例を示してある。

東條操氏の
方言研究の
概観

東條氏の方言研究の概観にはまづ方言學と言語地理學と題し、東西諸國に於ける方言研究の起原より説き、近世紀の初に佛蘭西のジイエロンが出て佛蘭西言語圖卷を公にしてから方言研究の新潮が起つたことを述べ、方言と言語地理學との關係を説き、言語形式より寧ろ多くの單語を材料とする言語地理學には從來の方言區劃を認めないで、單語の改新波や等語線のあることを説き、相互の差異を明かにし、次に國語方言研究の回顧の章には、萬葉の東歌の研究より人國記・毛端私珍抄以下現代の研究までを説き、參考書を註記し、次に現代方言學の展望に及び、最後に方言研究法に關し意見を細かに述べてある。

吉澤義則氏
の論文

吉澤氏の論文は、白鳳期には國語學が隆盛であつたが、漢學の極度の獎勵が國風暗黒時代を生じ、女子は學問に無縁になり、随つて平假名を發達せしめ、却つて國語を愛撫彫琢する機縁となつたことを述べ、平假名の發生を詳かに説いてある。

土井忠生氏
の國語學書
目解説

土井忠生氏の國語學書目解説は外題にある如く、明治・大正時代に於ける國語書を總説、雜纂、國語學史、傳記、解題、歴史的研究、比較的研究、音韻、假名並びに假名遣、訓點並びに平古止點、辭書の十一目に分ち、その重要なものゝ内容を検討し、その長短を品隋してある。その批評は肯綮に中つて

ゐて、これを按排すれば一つの國語學史をなし得ると思はれる。唯その採録するものは四十七種に過ぎないのは惜しい感じがする。

この年に岩波書店から出た平岡伴一氏の國字國語問題文獻目錄は解説は短いが、その採覧には頗る力を盡されたもので、部を

I 國字國語問題研究の土臺となる參考書

II 國字國語問題の理論

III 國字問題の實際

VI 國字國語問題と他の諸問題

の四部に分ち、第一部を言語學・音聲學・國語學・文字學・假名の研究・教育科學・實驗心理學・眼科學・印刷術に分ち、その中の國語學を更に國語學總論・國語學史・國語史・國語學各論・論文集隨筆集・語原・文法總論・口語文法・文法各論・論文といふ風に細目を立て、書の體裁・裝釘・頁數・著者・出版所・發行年月等より或るものはその内容をも簡單に誌してあつて參考として重寶なものである。

岩波講座國
語教育
日本學の體
系と國民教
育及び國語
教育思潮

これに次ぎて岩波書店は昭和十一年十月より同十二年九月にかけて岩波講座國語教育を發行し、第一卷を日本學の體系と國民教育及び國語教育思潮とし、第二卷を國語教育の學的機構とし、第三卷を國語教育の方法的機構及びその實際的機構とし、第四卷を國語教材の形態的研究とし、第五卷を國語教育の諸

問題とし、第六卷以下十二卷まで小學國語讀本綜合研究として十二回に互つてこれを刊行した。これは小學校の國語教育の改善を旨としたもので、その内容は次のやうである。

國語教育の
學的機構

日本學の體系と國民教育に關しては日本學の樹立(藤村作)、國學と教育(山田孝雄)、神道と教育(河野省三)、日本儒教と教育(西晋一郎)、日本佛教と教育(花山信勝)、科學的精神と教育(石原純)等の諸種の題目を含み、國語教育の學的機構としては

日本文法學	福井久藏 (第一回)
言語心理學	波多野完治 (第二回)
社會學より見たる言語	田邊壽利 (同)
國語解釋學	勝部謙造 (第四回)
言語美學	小林英夫 (第七回)
國語教授の根本問題	長田新 (同)
日本文獻學	久松潛一 (第八回)
文藝哲學	垣内松三 (同)
言語哲學	小林淳男 (同)
方言學	東條操 (第九回)

國語史 安藤正次 (第十回)

昔の國語教育 柳田國男 (同)

日本文學史 島津久基 (第十一回)

國語表現學 城戸幡太郎 (同)

日本文法史 小林好日 (同)

國文學の文藝的研究 高木市之助 (第十二回)

國語學と國語教育 橋本進吉 (同)

國語教材の
形態的研究

の諸項を含んでゐる。國語教材の形態的研究としては神話(倉野憲司)、童話(金田鬼一)、歌謠(藤田徳太郎)、日記・紀行・隨筆(玉井幸助)、物語(池田龜鑑)、軍記(高木市之助)、史話(山岸徳平)、謡曲狂言(能勢朝次)、淨瑠璃(高野辰之)、歌舞伎(守隨憲治)、傳説(島津久基)、和歌(尾上八郎)、俳諧(岩田九郎)、現代詩(湯地孝)等を收め、國語教育の方法的機構としては讀み方・話し方・書き方の教授體系にも及び、國語教育の諸問題としては、

國語教育の
方法的機構

國民生活と國語教育 藤村 作 (第一回)

現代社會と國語教育 保科孝一 (第五回)

古典及び古典教育 岡崎義惠 (第十二回)

國語科學講座と岩波講座日本文學、岩波講座國語教育

現代

國語教育と民間傳承

金田一京助 (第九回)

中世以降に於ける 國語教育の發達

石川 謙 (第五回)

國語運動と國語教育

新村 出 (第十二回)

國字 國語問題

安藤 正次 (第六回)

漢字の話附 新讀本の字體

大岡 保三 (第十回)

ラヂオによる國語教育

崎山 正毅 (第八回)

海外に於ける國語教育

佐野保太郎 (第四回)

諸家國語教育論敍説

石山 脩平 (第七回)

國語學力測定法

武政 太郎 (第四回)

國語教育問題史

海後 宗臣 (同)

等の論文を收めてある。

四十七 フランコ・スイス學派の紹介及び

國語解釋學と表現學

言語學が國語研究の上に影響を及ぼしたことは前にも述べた。フランツ・ボップやヤコブ・グリンが紹介され、比較文法が漸く起つた。またホイットニーやイエス・ペルゼンが紹介されて言語の自然の發達を論ずるものが多くなつた。

昭和の初に至り若き語學の天才小林英夫氏が出で、フランコ・スイス學派のソシュールの言語學原論を昭和三年に譯出し、ラングとランガーの區別を説き、從來の史的言語學に對し、言語を社會學的の立場より觀察し、共時的言語學を高唱し、これと共に通時的言語學をも説き、また、地理言語學や逆説言語學をも紹介してから斯界に別箇の新しい雰圍氣を生ずるに至つた。

氏は雜誌民族に「方言學その理論と實際」を載せ、またジリエロンに倣つて言語地理學を説き、ロシア語とフランス語に於ける態の表現法を研究して我が現代語に類似の現象の有無を檢した。

その翌年にはソシュールの高弟でジュネーブ大學の教授をしてゐるバイエ (Charles Bally) の生活

言語地理學
バイエの生活表現の言語學

小林英夫
ソシュールの言語學原論を譯出す
共時的言語學と通時的言語學

文體論を組
立つ
セシエの理
論言語學

表現の言語學を譯出した。バイエはフランス語の表現手段を研究して文體論を組立て、英國流の如く修辭學を語學から分立させるのを斥けて、表現上純客觀的な科學に組立てようとした人、同門のセシエ (Albert Sechenaye) はこの文體論を丹念に考へ、バイエの説を補ひ、理論的言語學の綱目と文法や、文の論理的構造等の著を出した人、小林氏はこれらの人々の新しい著作に親しみ、その文體論や理論言語學を譯出した。

昭和六年にはフォスレル (Karl Vossler) の言語學に於ける實證論と觀念論を譯出した。同八年にはフレエ (Henri Frey) の誤用の文法を出した。小林氏は世人の多くが文法とは何であるか、文法の單位は何であるか、文法學は言語學に如何なる關係を有するかの問題を閑却してゐるのを慨し、フランス語學者の説を撮つて、昭和七年京城帝大法文學會の編にかゝる言語文字論纂に「一般文法成立の可能性について」の序説を載せ、パウル、シュタインタール、ガベレンツの古いところからフォッセル、シェ

一般文法成
立の可能性
について

ハール、ユンケル、ドラクロア等の説を引いたり、山田博士・安藤正次・永田吉太郎氏等の説を評し、最後にコペンハーゲン大學の比較文法教授のイエルムスレーヴ (Louis Hjelmslev) の學説を紹介して岩波書店よりはその批判的解説一般文法の原理を譯出し、明治書院の國語科學講座には文法の原理を執筆した。また雑誌方言にはトルベツコイ (N. S. Trubetzkoy) の形態音韻論やヴンドリエス (Joseph Vendryes) の音韻法則の省察など新しいところを紹介したり、小倉博士の仙臺方言音韻論考により仙

臺灣方言音韻論試作をものし、博士の通時的研究の資料を用ゐて共時的音韻論を建立しようと企てた。

昭和九年には岩波講座世界文學第十四回配本には言語美學を執筆した。これはフォスレルを中心に主として獨伊の學説を紹介したもの、尋いでまたシュビッツェル (Leo Sütterlin) の語詞藝術と言語學を譯出した。氏の言語美學といふは主として文體論を指すもので、前に云つたやうにフランコ・スイス學派の流れを酌む人々は表現手段の科學的研究を指してゐる。修辭法としての如く技術として扱はないのである。語よりもむしろ語が部分をなすところの印象的語群や觀念の噴起する短い文肢を重んじなければならぬといひ、語群や成句の上に力を用ゐてゐる。昭和十二年岩波講座國語教育に載せた言語美學には波多野完治氏が文章心理學に谷崎潤一郎と志賀直哉の文體を取扱つたやうに、島崎藤村の「夜明け前」を檢討し、「から」で止めるもの、副文にて止めるもの、配分法・反覆法・點描法・名詞止め・史的現在等十三ヶ條の特質を挙げ、「親しみの文學」と結んでゐる。その後岩波の雜誌文學にも現代作家の文體を解剖してゐる。

氏は昭和十年に言語學方法論考を三省堂より出した。この書は既刊・新刊の單行文五冊と時々の論文の中より創作十六篇・翻譯十一篇を選んだものと自序にいつてある。篇を八つに分ち、第一篇には言語の本質と言語學の分科を、第二篇には象徴音の研究を、第三篇には文法學の原理的考察、第四篇には意味論、第五篇には音韻論、第六篇には比較言語學と方言學、第七篇には言語美學、第八篇には隨筆風に分

つてある。

國語解釋學並びに表現學といふことが近來に至つて盛んに唱へられるやうになつた。國語國文の解釋特に和歌の解釋の如きは遠く平安朝の頃より起つてゐるが、解釋の方法論を喋々と多くの人が説くに至つたのは昭和に入つてからのことで、獨逸のデイルタイの解釋學を譯出されたことも與つて力あることと思ふ。

解釋學の成立

垣内松三
實踐解釋學
考・國語の
力

時枝誠記

古典註釋に
現れた語學
的方法

昭和五年に土田杏村の編纂した國文學研究に栗林茂氏はデ氏の解釋學の成立を譯出し、池島重信氏は昭和七年九月岩波書店の哲學叢書的一篇としてその全譯を出した。この方面に夙くより力を盡したのは、東京高等師範學校の垣内松三教授で、國語教育科學講座に國語解釋學概説や國語表現學概説を執筆し、實踐解釋學考や國語の力などを單行してゐられ、センテンス・メソッドなども説かれてゐる。

京城帝大の時枝誠記氏はこれらとは別に、古典研究の本來の姿から離れて單に語學的にばかりながめてゆく世上一般の國語研究を憚らないとし、昭和六年九月刊行の京城大學法文學會の編纂にかゝる日本文化叢考に古典註釋に現れた語學的方法と題する長論文を載せ、特に仙覺律師の萬葉集抄につきて中古に於ける語學的註釋法の種々相を明かにされた。總論、萬葉集仙覺抄の研究、文字より言語への還元、語の意味の理解の數項に分ち、百三十一頁に上つてゐて、古典註釋に對する綜合的な批判的研究の一階段を作らうと試みられた。

古典註釋史上に於ける仙覺抄の價值
仙覺抄の價値
仙覺の言語意識

古典註釋史上に於ける仙覺抄の價值を論じ、その註釋の方向につき、まづ文意の直觀に統率せられた心の存在を強調し、本文批評も訓點の施行も意味の詮索も、悉く一の直觀的理解より分裂してゆくといひ、註釋の結果に對する妥當性の批判はその言語意識とそれから導かれた方法を明かにすべく、その意識を

(イ) 言語の新古に對する意識

(ロ) 先驗的、正規的言語の存在に對する意識

(ハ) 音義意識

(ニ) 語の職能に對する意識

(ホ) 語の構成に對する意識

(ヘ) 語の本義に對する意識

(ト) 言物意別の意識

(チ) 語と記載法との關係に對する意識

の八項に分ち、(ロ)は更に本韻・末韻・男聲・女聲・相通・略言・約言の目を立て、仙覺の抱いてゐた言語意識を測定し、この意識が如何なる方法を興へてゐたかを檢する爲に、その出發點たる文字より言語への還元に関し彼がとつてゐた方法を

(イ) 語句の連接の關係より文字を言語に還元する方法

文字より言語への還元の方法

フランコ・ニイス學派の紹介及び國語解釋學と表現學

語義の發見
に至る過程

(ロ) 文字と語句の對譯の例を基として文字を言語に還元する方法

(ハ) 用字例の研究より文字を言語に還元する方法

(ニ) 字音研究より文字を言語に還元する方法

の四つに分ち、次に語の意味の理解が成立するには語義の發見に至る過程とかくてその語義の妥當である説明が豫想されるといつて、その過程を

(イ) 歸納的方法による意味の理解

(ロ) 比例法による意味の理解

(ハ) 文字と語句の對譯例を基としての意味の理解

(ニ) その他の言語意識より導かれる意味の理解

に大別して一々例を引いて説き、結論として西洋の文獻學のやうに獨立した語學研究のそれではなくて、飽くまでも註釋を本體とし、古典の理解の爲に導き出された國語に對する考察及びその結果に就いて立論したことを述べてある。その研究が日本的のものを樹立するにあつたと云ふべきである。

明治書院の國語科學講座には、數人の人が解釋學につきて執筆してゐる。即ち石山脩平氏の解釋學序説、山岸德平・川瀬一馬氏の古代解釋學、能勢朝次・小野直氏の中世解釋學、佐藤鶴吉・飛田隆氏の近世解釋學はそれである。

石山脩平氏
の解釋學序
說

石山氏のは篇を四つに分ち、第一篇には理會の意義、解釋及び解釋學の意義を、第二篇には解釋の對象として文の表現過程、文の構造及び性格を、第三篇には解釋の方法としてその方法上の諸原理及び解釋の實踐過程を、第四篇には解釋の可能根據及び妥當性を言語哲學的に説き、終に内外の參考文獻を載せてある。

山岸・川瀬
兩氏の古代
解釋學
能勢・小野
兩氏の中世
解釋學
佐藤・飛田
兩氏の近世
解釋學

古代解釋學に於ては前篇は山岸氏が古代文學の環境と諸相を説き、後篇には川瀬氏が研究參考要目を舉げ、中世解釋學に於ては能勢氏が中世文學相の斷面を説き、小野氏は和歌及び歌論以下有職等に至る十二章に分ちて、中世文學の研究要目を載せ、近世解釋學に於ては佐藤氏は近世註釋研究と解釋學、近世文學史と近世解釋學、解釋の實習的手法と參考文獻の三部に分ちてその專攻せる假名草子・浮世草子・淨瑠璃文學につきて論じ、字書類・往來物・重寶記・圖會の類にまで説き及んである。飛田氏のは對象と方法、技術の根據、技術の規定の三部に分ち、近世文學圖表を主としてある。

教育的解釋
學
解釋學と意
義學

石山脩平氏は教育的解釋學を賢文館より出し、興水實氏は「解釋學と意義學」を不老閣より出した。石山氏のは篇を五つに分ち、第一篇には理會・解釋及び解釋學の意義を、第二篇には解釋の對象を、第三篇には解釋の方法を、第四篇には解釋の可能根據及び妥當性を、第五篇には解釋學略史をいづれも教育的視角から系統を立て、論じ、興水氏のは序説、解釋と意義、前篇解釋學研究、後篇意義學の研究、附錄學說の展望の四部に分ち、啓蒙的に説いてある。

フランコ・スイス學派の紹介及び國語解釋學と表現學

城戸幡太郎
表現學序説
國語表現學

國語の表現
法と日本人
の思想形態

フイंकの
分類に同じ
ない

日本人の世
界觀

表現學に關しては城戸幡太郎氏は昭和九年國語科學講座に表現學序説を執筆し、第一章には表現學の問題を、第二章には言語表現學の方法、第三章には言語表現の構造を説いた。同十年十月國語表現學を賢文館より出した。章を表現學の問題、表現の様相、國語の形態、國語の形成、國語の教育の五つに分ち、序に氏は心理學徒として、フッセルの現象學からデイルタイの心理學及び解釋學、マルチイの言語哲學、ラツァルス及びシュタイントールの民族心理學、フェスレルの言語哲學等を究めてから、終に日本人の思想は日本語でなければ充分に表現されるものでないとの感じを深めて來た述懐談をのべ、ラツド博士獎學金によつて研究した「國語の心理學的研究」並びに有栖川宮獎學金によつて研究をつづけた「國語の表現法と日本人の思想形態」の一部分として發表したものと述べてある。

表現學の問題のうち、フイंकが言語と民族性につき、多血質・膽汁質・粘液質・憂鬱質の四分法に基いて表象型・感情型に各國語を分類したけれども、我が國語はそのいづれに屬すべきかは疑問である。ウラル・アルタイ語派であるとすれば、我が同胞は粘液質に屬すべきであるが、かゝる結論は俄かに是認し難い。またマルチイは言語の意味を語意論と文意論とに區別し、語序や語法は文意論の問題として論じたが、國語に於てはこの二つの領域を判然と區別し難いものがあるといひ、デイルタイやマウトナーの如きあらゆる現象の主體として自我を認むる觀念論や理想主義は日本語には認められない。敘述に於ける自己度外視即ち觀察に於ける主觀の排除といふ認識の方法が日本人の世界觀であるといひ、「月

無主命題

「を見る」を歐洲語に譯するとその主語として人稱代名詞を必要とする。歐洲語に於ける受身の形式は本來の日本語には無意味である。日本語には完全に無主命題と稱すべきものが存する。歐洲語には動詞から名詞になるものが多いが、國語では逆である。日本人の世界觀は名詞的世界觀のうちに動詞的世界を表現する生活實現論といふべきものであらうといひ、國家民族性を示す詞につきて解釋を下してある。

表現の様相

次に表現の様相につきては一般論であるから、これを略するが、言語の「あらため」の一節には音韻の民族性と形態化、言語の歴史性と生活化、表現の法則性と合理化につきて述べてある。

國語の形態

色彩感覺の表現

次に國語の形態につきては、まづ體・用・辭の三つを言語心理學の立場から表現の詞、關係の詞、實現の詞と區別し、體言と存在の表象の項には國語による色彩感覺の表現を明かにする爲に男女三百二十六名につきて實驗し、その統計を示し、物と色との關係、色と人との關係、色と所との關係、色と時との關係、色と詞との關係を論じてゐる。

助辭と關係概念の節には助詞の分類は語意學より分つべく、その職能は心の趣向性或は意識の對象化をあらはすもので、その對象化の次元は助詞表現の語序によつて規定されてゐるやうだといひ、山田博士の分類を評して、

助辭の對象化の次元

第一次の對象化 格助詞、並立助詞、準副體助詞

第二次の對象化 係助詞

フランコ・スイス學派の紹介及び國語解釋學と表現學

第三次の對象化 接續助詞

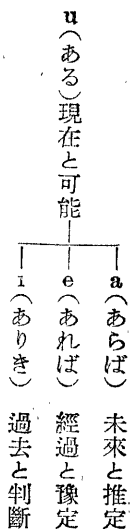
第四次の對象化 終助詞

第五次の對象化 間投助詞

に分ち、第一・第二次は表象作用、第三・第四次は判斷作用、第五次は意欲作用と説いてある。

用言と機能
概念と判斷
時相と判斷
の様相

用言と機能概念につき、動詞の活用は存在の時相をあらはすと同時に判斷の様相をあらはすといひ、「有る」に於て



自他を立てる要はない

の如き表現を認め、「有り」は名詞であると同時に動詞の不定法と云つてある如き、容易に受入れ難きものがある。自他を立てる要のないことを述べ、寧ろ存在の判斷と意欲の所行とに分つべしとし、「花が咲く」の如き自動詞と稱するよりも存在の状態を判斷した動詞といふべく、「暴風を恐る」といへば、所行をあらはす述語的表現だと説き、形容詞は意義學から見れば、存在を實體と屬性とに判斷する詞で存在判斷の言葉といつた方が宜しいといひ、ブレンターノの分類に従つて、表象を示すものと判斷を示すものと意欲を示すものとその一つ／＼につき多くの兒女につきて實驗の結果を擧げ、統計を示してある。

副詞に添へる助詞の統計

次に副詞につきては山田博士が體・用・辭の外に置きたるに異見を挟み、國語辭典に載つてゐる漢語を除出した千百二十三語につきそれに添へる助詞を統計し、「に」が三七一、「と」が二二一、「て」が五三といふ如く數計し、助詞を伴はないものと與び、判斷や意欲に關するものは音韻の性質・疊詞・促音その他助詞によつてあらはされることを詳かにし、形成の過程と結果並びに形成の位相と時相を説いてある。

了解の曖昧性を試みる實驗

國語の統整

幼兒の言語發達

國語教育問題史

國語の形成の章には最初に言語の意味の融通性・多義性によつて國語の變容することを説き、了解の曖昧性を試す爲に形容詞六百九十六種を採り、大學以下の男女學生三百餘人に最もよく形容される名詞を書かしめ、了解度による頻數分配圖を作り、その統計を示し、次に國語の統整の章には、表記法の統一、語法の調整、用語の整理を説き、實驗の計數を示してその主張に裏附をなし、國語の發育につきては生後二年間幼兒の言語發達を驗し、その段階を(一)言葉の形成期、(二)言葉の表現期、(三)言葉の選定期の三大別とし、(一)を發語期・獨語期・分化期・轉化期の四つに、(二)を遊戲期・變容期・表象期・融通期の四つに、(三)を模倣期・質問期・概念期の三つに分ち、國語の變質・形態等につきても論じ、國語の教育の章には國語教育の問題史として言祝教育と辨證教育、福音教育と訓誥教育、實語教育と術語教育を發達に従ひて説き、附録には引用書目及び註釋を擧げてゐる。

中には首肯しかねる節もないではないが、心理學の立場から表現學を系統的に構成されたことは特記すべきである。

文法の形態は意義と相關をもつ。随つて形態論を考へると共に意義論が成立せねばならぬ。意義をいふには表現といふことが相離るべからざるものである。表現には單語や文節を連結した文章を研究せねばならぬ。近來國語表現學の一部として國語文章論の再檢討が起つて來た。波多野完治氏が日本語の表現價值として文章心理學を出したのもその一例である。氏は曩に國語科學講座に國語文章論を執筆し、

言語のエコノミズムを基調として建てたスペンサーの修辭論や聯想中心のペインの修辭學を斥け、新たに思想の上から説かうとし、昭和十四年に増補して文章心理學を出したのである。その緒論にレトリックの再生を論じ、第一篇に文章心理學の原理を、第二篇に文章性格學を説き、文章樣式學を論じ、現代作家の中志賀直哉や谷崎潤一郎の文章を捉へてその表現手段を論じ、文の長さ・句讀點・品詞・比喩・

文體論

構文等につきて比較を示したりした。近時文體論が國語學上に取扱はれようとする傾向が著しくなつて來た。

京城帝大の小林淳男氏の如き昭和の初にソシュールの言語學を輸入し、國語學界に清新の寒風を醸成してゐたが、最近には現代作家の文體を考究して文學等に發表してゐる。今後外國學者の體系にすぎらないで我が國獨自のものが漸次産み出されるであらう。

四十八 記念論文集に於ける國語學

碩學の高壽を祝する爲に、若しくは追悼の爲に知友門下の執筆寄稿した論文集の發行は輒近に至り漸く盛んとなつて來た。その始めは關係の深き雜誌に特輯號として出す類が多かつたが、近時は頗る浩瀚な集を見るに至つた。我が國語國文の大家は少しとしない。それらのすべてを検するは容易な事ではないが、國語學史上に大切な資料となるものも多いやうに思はれるので、少しくそれらにも觸れて置く。

藤井乙男
萬葉集の研究

澤潟氏の戯
書について

京大の藤井乙男博士の還曆に方り昭和三年國語國文の研究第二十二號はそれを記念すべく、「萬葉集の研究」を特輯號として出した。收めてあるもの八篇に過ぎない。中にその門下の佐伯梅友氏の萬葉集の助詞二種には集中に見えるの・がとや・かの二助詞の用例を多く集めて歸納的結果を見ようとしたもの。澤潟久孝氏の「戯書について」は春登上人の萬葉用字格の分類法は極めて常識的であつて、用字上の正確な分類といふことが出来ないとし、集中の諸例を集めて、文字の上のたはむれ、擬聲語によるもの、數のたはむれ、所謂義訓の複雑なるものゝ四種となし、所見の卷數及び作家を圖表に作つて、時代及び作家の考察に資せんと企てたもの、創見のひらめきを見る。

佐伯梅友氏の
の不知の訓
考

佐伯氏のは萬葉集卷二柿本人麿の作にかゝる「日月毛不知戀渡鴨」と「隱沼乃去方乎不知舍人者迷惑」の二首に於ける「不知」の二字を「シラニ」と訓むか、「シラズ」と訓むべきかにつき、古人の説を擧げ、集中に於ける幾多の例を引きて、「知ラニ」と訓む方は次に來る事柄の理由を表すときに用ゐ、「知ラズ」と訓む方は單に狀態を表すのに用ゐる差のあることを明かにしてある。

岡倉山三郎

英語學界並びに言語學界方面に多年活動され、晩年ラヂオでお馴染の深い岡倉山三郎氏の還暦記念論文集は昭和三年市河三喜博士の手によつて編輯出版された。中に音韻に關しては神保格氏の「音聲研究方法論の考察」、橋本進吉博士の「波行子音の變遷について」、金田一京助博士の「アイヌ語清濁考」があり、文字に關しては後藤朝太郎氏の「支那俗間に見る俗字の趨勢」があり、文法に關しては細江逸記氏の「我國語の動詞の相を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原理に及ぶ」等の論文が載つてゐる。中に細井氏の論文は拙著^{増訂}日本文法史に一章を設けて紹介をなし、本書第三十八章にも略敘した。

橋本進吉氏の
の波行子音
の變遷につ
いて

橋本氏の論文は我が古韻史上に新しい研究を發表されたものであつて、波行子音が古くp音であつてそれからf音にうつり、更にh音になつたことは Hoffmann, Edkins, Satow, Chamberlain, 上田萬年博士、大島正健博士、岡倉山三郎氏、金澤庄三郎博士、伊波普猷氏、安藤正次氏など内外學者の等しく説くところであるが、その推移の時代に關しては未だ明確を缺いてゐる。pからf音への推移の年代は上田博士は奈良朝以前とし、安藤氏は奈良朝とし、fからh音にかはつたのは新村出博士は江戸時

代であるとされた。橋本氏は菅公の孫で石山寺の座主となつた淳祐の手書した悉曇字母の中に引いた圓仁記即ち慈覺大師の在唐記の中には明かに *f* と發音した證跡があり、また天台宗に於ける古代の佛教讚歌の一つである法華讚嘆の「法華經を我が得し事は云々」の「は」は *ha* と發音する習ひとなつてゐることをも説き、*f* 音と發音し來たことは平安朝初期までに溯ることが出來ると立證した。新村博士の *f* 音が江戸時代の初に方り *h* 音にかはつたことの證明と共に慥かな足どりて研究を發表されたもの。

金田一氏の
アイヌ語の
清濁考

金田一氏のは、我が國音がアイヌに入りては清濁の區別のない點につき、バチラーの *Aino-english-japanese dictionary* には *BDJ* の部は、それに屬する語をそれ／＼ *ptkch* の部に出してゐるが、*Sumners* の亞細亞協會々報に出した語彙や *Dobrotvorsky* のアイヌ・ロシア辭典には *BD* の部を設けて多くの語をあげてある事實を擧げ、實地に自家がアイヌの酋長につきて聞いたところによりて明快の判斷を下されたもので、我が音韻との比較をなすに方り參考となるもの。

後藤朝太郎
氏の支那俗
語に見る俗
語の趨勢

後藤氏のは、四川の奥地で使用される略字などにつき面白き例を示されたもの、歸の字に歸と書いた、劃の多いとき「ヌ」の字を代用する、例へば、難の字を難、權の字を权を代用するが如きは我が國にも行はれてゐるが、無學の民衆が己が姓にも適正の字を書き得ないで、略字を用ゐる例を示されたもの、趣味的に述べられたものである。

松井簡治

大日本國語辭典の著者松井簡治博士の古稀記念論文集には國語に關するものには春日政治氏の「假名
記念論文集に於ける國語學

の發生に關する考察」、木枝増一氏の「文法の立體的研宄」、内野台嶺氏の「論語を中心として觀たる訓點の變遷」、日下部重太郎氏の「國語法に於ける *syntaxis* の發達に就いて」、保科孝一氏の「友鏡底の影について」等の論文がある。

保科孝一氏の友鏡底の影について

保科氏のは義門の語學資料としてその門下の青山如幻茂春が新井守村に送つた書狀四通を載せ、義門が友鏡底の影を著さうと志して詞の八衢に書入れして置いたものを小田清雄が抄録したに過ぎないが、その中に卓れた考などのあるのを摘記されてある。

春日政治氏の假名の發生源に關する考察

奈良朝文書の略體

草化は書道趣味から始めは單純化を急がなかつた

春日氏のは我が國最古の文獻である推古期以下の金石文を檢討して、无、私、与等の文字や尔、祢、弥、万、公等の簡易な字形も見えるが、これらは支那に倣つたもので、それより奈良朝文書に用ゐてある門の代りに「部」の代りに「マ」の如き省文、麿の如き合字、行書化した書體等があらはれて來たが、これらは實用一遍のものでない。その私的文書の如きは字體の簡易化を欲するやうになり、中にツ・ヘ・ム・の如き文字が奈良朝文書に見え、寶龜二年以前と見られる唐招提寺文書にはム、甲、尹の如き略字が載つてゐる。これらの省文は宣命書の小記に用ゐられ、略體假名の發生する一大原因をなしてゐる。眞假名で國訓をうつす場合には手数を少くする爲、字體を行化、また草化する傾向を生じて來たが、漢文に従屬したものや官用のもものは保守的因襲的な傾向が強かつた。併し草化は平安朝に至り一層盛んになつたが、傳道風の秋萩帖や傳佐理書賀歌切などを見るに、文學に隨伴し、また書道趣味の上から、その

片假名は實用上夙く簡易化した

金澤庄三郎
東洋語學の
研究

武田祐吉氏
の形容詞論

古代形容詞
の根本意識

「シ」の語尾
はもと添辭

母胎となるべき原字の單純複雑の上には、あまり意を注がれなかつた爲に夙く符號化するに至らなかつた。これに對し訓點に用ゐる爲に生じた片假名は漢文の行間に細書するとか、講義を聞きつゝ記入する等の爲に字畫の簡易化を要とし、夙く發達した次第を種々の文獻によりて説かれたのはその所説肯綮にあたつてゐる。

金澤庄三郎博士の還暦記念東洋語學の研究は昭和七年の末に發刊された。吉澤義則博士の「所謂『ヲ』に通ずる助詞『ガ』に就いて」より加藤玄智博士の「宗教學上の言靈私考」に至る二十四家の論文を收めてある。中に形容詞の論につきて武田祐吉博士は、我が最古の國語資料たる記紀に見えてゐる萬葉假字で記されてある形容詞五十七語を採り、一々その變化及び語幹のみの用例を圖表とし、まづ語尾を有せざる形容詞が、連體法・連用法・體言法・副詞法・敘述法の諸法に用ゐられてある諸例を挙げ、古代形容詞の根本意識は物を稱美するにあつたと推定し、觀察力・思索力が進み、思想を完全に表現しようとするに及んで、話用語尾を有しない形に不満足を感じてこゝに活用語尾を生じたものと見做し、從つて形容詞は體言の形が本體で、その原形は連體形であると云ひ、これに活用語尾「シ」が生じて活動が圓滑になつていつた。この「シ」は「たましひ」の「し」、「としへ」の「し」の如く添辭であつて、それと指示する程の意であると斷じ、「シ」の語尾で示す終止法・體言法・連體法・副詞法を示し、また一方には他の動詞活用の模倣運動が主として力行を中心として起つたことを述べ、活用語尾「ケ」の終

ケレのレは
元は助動詞

止法・連體法・體言法・將然法・已然法・連用法を擧げ、「ケレ」と續く形は從來形容詞の活用語尾と考へられてゐたものであるが、その原始時代には「レ」を助動詞と見る方が適切であるとなし、東歌に存する久爾乃登保可波の「カ」は「クアラ」の約でこの轉と見るべきものに「サ」があり、動詞性のものに「ビ」・「ミ」・「ク」・「ル」があり、感動詞性のものに「ヤ」・「ラ」の存することを説いた。

折口信夫氏
の形容詞論

「し」の原義

折口信夫氏の形容詞の論には主として語尾「し」の發生につきて論じ、この發生を追及してゆくことは、同時に日本文章組織の或る一面の成立を暗示することになると提言し、國語に於ける所謂形容詞の生命を扼するものは、その語尾なる「し」であるが、この「し」に紛ひ易いものがある。「とこしへ」の

形容詞の語
尾「し」の進
化した過程

「じもの」
新解釋

「し」の如き領格「つ」にかよひ、「けたし」の「し」は形容詞語尾の感覺に近く、「やすみし」の上の「し」は敬語の助動詞、下の「し」は熟語を構成する一つの形式的要素と見做し、枕詞の種々の例についてこれを證し、更に進んで過去の「し」の起原は一種の囁し詞のやうにも見え、又一時的には其の割り込みと見てもすむが、囁し詞と見るのはその後代的氣分より成るもの、其と見るのも或は却つて順序轉倒で、この「し」も形容詞語尾の「し」と同源であると説き、形容詞の語尾「し」の獨立或は固定の妥當的な感覺を導いた過程については、第一「し」を含んだ語根時代、第二領格としての用語例に入つた「し」の時代、第三領格の對象語の脱落した時代、第四語尾としての「し」の獨立時代といふ區劃を豫想し、枕詞の語尾と考へて來てゐる「じもの」につきては形容詞の「し」の本來もつた「し物」の義

今泉氏の助
動詞「き」に
關する説

がもとでその古い「じもの」を以てあらはす固定した表現法があつて、咒詞・宣命・祝詞の表現法の古式として繰り返されてゐる間に新しい文學がその様式をとり込み、更におし擴げ、「じもの」が次第に展開して多く用ゐらるゝに至つた。「馬じもの」・「鴨じもの」等、皆降伏奉仕の形容に用ゐられたものである。「じもの」の語源につきて、「其物」^{そぶつ}「狀物」^{じやうぶつ}などいふ印象分解説はあるが、それは宜しくない。ものは靈魂の義である。その威力を指す義があると示唆的に説き去つた。

今泉忠義氏の助動詞「き」の連體形の論文に於ても、我が最古の文獻にあらはれてゐる「し」は神武天皇紀の「みつ／＼し久米の子らが垣もとに植ゑし葎」の「し」の如く、それが連用形と體言との間に挟まつてあつても、必ずしも過去をあらはすとは限らなかつた。一面は助詞であり、一面は助動詞であつた。この「し」は動作の強めを表すといふよりは次第に過去の時を表すやうに職能が確立されていつた。それには平安に入つてから完了態の助動詞の活躍がめざましくなつて來たことも原因の一つをなしてゐる。最後に形容詞の終止形の「し」が「さかし女」などの如く連體法の語尾から轉用せられ、固定したであらうと考へる時、この「し」と過去の「し」と一脈相通するものがあらうと述べてある。氏は夙く昭和五年にかくの如き考を國學院雜誌にも發表してゐる。

竹田鐵仙氏
の悉曇相通
説

岩崎小彌太氏は「デアル」と「デアリマス」について、竹田鐵仙氏は我が邦に於ける悉曇學の沿革を明かにしようと志してゐる人、悉曇相通説と活用研究に及ぼせるその影響を論じた。

伊波普猷氏の
語音翻譯

方言に關して東條操氏は明治以後の方言研究を、安田喜代門氏は九州方言及び琉球方言に於ける代名詞の研究を、沖繩方言に關しては、中叔舟の海東諸國記の附録に古琉球の見本として載せた語音翻譯全部の釋義を伊波普猷氏が丹念に筆を執られたもので、琉球語の史的研究もこの書によりて輒くたどることが出来る。

宮良當壯氏の
虹考

語原に關しては安藤正次氏の宇禮牟會考、生田耕一氏の保止につき委しく考證した安寧天皇御陵名義私考、筑紫豐氏のそほ考、宮良當壯氏の虹の語學的研究等があり、宮良氏は琉球諸島言語の實地調査研究をなしてゐる人、曾て國學院雜誌に載せた虹考を改題訂正したもので、「ニジ」は古く「ヌジ」といひ、蛇類の總名である「ナギ」(ナジ)から來つてゐることを史的並びに音韻的に考察したものである。

金田一氏の
北奥地名考

比較研究に關しては金田一博士の北奥地名考があり、小倉進平博士の朝鮮の眞言集につきての考究は貴重なものであるが、我が國語學には直接の關係はない。金田一氏のは項を

一、序論 在來の學說と新しい方法論の提唱

二、奥州蝦夷語はアイヌの古い一方言である

三、津輕海峽南北の地名の似寄

四、北海道地名轉訛の一般

五、推定される奥州のアイヌ地名

チェンバレン氏のアイヌ地名原義説を斥く

バチラーの説を斥く

京都帝國大學文學會創立二十五周年記念論文集

六、結論 再建される本州アイヌ語彙とその分布に分ち、序論に我が東洋比較言語學の創始者チェンバレン氏が全土に亙る日本地名をアイヌ語を以て解釋した試みは随分大膽奇抜で學界を聳動し、爾來これに倣はうとする學者が少くないが、眞を誤つてゐるのを博士は慨いてこれを是正せんと筆を運ばれてゐる。例へば我が名山富士をアイヌ語とし、刀根も能登も同じくそれを説くものが多い。アイヌ語の大家バチラー博士の如きも行き過ぎた解説を下してゐるので、金田一氏はその謬妄を正されてゐる。例へば富士をアイヌ語の Huchi から來つたとするが如き、國語の音韻史を無視したもので、もしアイヌ語で Huchi と發音するものは我が邦ではクヂまたクジと發音すべきであるといひ、富士の語源をアイヌの火となすのも誤で、アイヌ語の火は ape 又 abe であり、Huchi は翁に對する老女また嬬、または祖母の義である、バチラー氏が Huchi を宛てたのは無理誣ひであると學徒の蒙昧を挫いてある。その他支那字學につきては、小柳司氣太博士の「小學に就いて」、池田四郎次郎氏の「説文五百四十部の次序に就いて」等の論文がある。今一々説くことを控へた。

京都帝國大學國文學會にては昭和九年創立二十五周年に相當し、二百數十名の卒業生を出したので、藤井乙男・吉澤義則・新村出三博士の指導の下に二十五周年記念論文集を出版した。春日政治氏以下四十三氏の國文國語に關する論文を載せてあるが、中に國語學に關するものは春日氏の「聖語藏御本中觀論の古點について」、横山英氏の「萬葉集の用字に關する一考察」、宮田和一郎氏の「源氏物語から見た

平安朝時代の形容詞、土井忠生氏の「天草本金句集考」、新谷恒藏氏の「志布志方言の研究と鹿兒島方言文獻目錄」、木枝増一氏の「文法的決定への疑問」、その他福田良輔氏の萬葉集の「之」字の訓について等の論考である。

聖語藏御本
中觀論の古
點について

春日氏のはその舊稿「金光明最勝王經註釋の古點について」(日本文學論纂)「成實論天長點續紹」(昭和八年一月國語國文)、「片假名の研究」(國語科學講座)との比較補正ともいふべきものであつて、點と假名字體を究めて飯室點と西墓點との中間に位するものとし、大矢・吉澤兩博士の研究を追はれたものである。

萬葉集の用
字に關する
一考察

横山英氏のは吉澤博士の「萬葉集に於ける文字の文學的用法に就て」(國語國文昭和八年一月號)や森本健吉氏の「萬葉集の字訓假名について」(日本文學論纂)等に次いでこれが縱横の研究を遂げんとし、まづ「作者によつて用字に區別ありと認めらるゝもの」(甲)、「卷別にうかゞはれる用字の差異」、「作者個人の用字と卷別の用字との交錯」の三つに大別し、ある假名を擧げてその統計を示し、次の如き結びをつけてある。但し卷一より卷十三までに止めたことを斷つてある。

作者によつ
て異なるもの

卷別による
もの

(一)作者によつて用字に相違を見出し得るものが相當にある。殊に入麿歌集・福麿歌集の類に於て著しく、卷三・六にもこれを見出すことが出来る。

(二)卷別に用字の相違を見出し得る。卷四(卷八)等は作者個人々々の相違よりも卷としての用字に支配されてゐるらしい。

編者の考に
よるもの

宮田和一郎
氏の源氏物語
から見た
平安朝時代の
形容詞

(三)右の二つの事實と兩者の交錯した例から考へて、萬葉集においては全體原本の用字を以て採録したのであるが、或る程度まで編者の自由に用字のかきかへをしてゐるらしい。

宮田和一郎氏は平安朝に於ける物語的作品に於ける形容詞を通觀して、最初はク活に對シク活が次第に殖えて來た比率を示し、

伊勢物語……………〇・四八

大和物語……………〇・五五

宇津保物語……………〇・八〇

落窪物語……………〇・八五

源氏物語……………〇・九七

の如き計數を擧げ、源氏物語に存する五百五十の形容詞を構造によりて分ち、他にありて源氏物語にな
い形容詞、當代の作品に最も多く用ゐられた形容詞の圖表を作つてその趨勢を示してゐる。

遠藤嘉基氏の助詞の考察には混じ易き助詞「だに」「さへ」「すら」の三つの中源氏物語には「すら」
の助詞を用ゐてないことを説いてある。門前眞一氏は夕顔卷「おのがいとめでたしと見奉るをば」の「を
ば」の研究を試み、大井廣氏の「あはれ」と「はかなさ」の論文には萬葉集から八代集に通じて「かな
し」「あはれ」「はかなし」「さびし」「心細し」五語につきて統計を示してある如く實證的傾向のも

土井忠生氏の
天草金句集
新谷氏の志
布志方言

藤岡勝二
言語學論文
集

有坂秀世氏
の宣命の改
訓

安藤正次氏
の疊音・疊
語の研究

のが少くない。土井氏の天草本金句集考は、ロドリゲスの研究など南蠻物に深い研究を進めてゐるゝ手に成りたるもの、新谷氏の志布志方言には南九州方言を細かに分ち、その特徴を説き、研究文獻書目を多く擧げてある。その他語原の研究をもした二三の人々の論文もあるが、今は省略に従つて置いた。

藤岡勝二博士の還曆に方り、翌昭和十年に出された功績記念の言語學論文集は二十四篇の論文集を含み、中に國語に關しては橋本進吉氏の「國語の形容動詞について」、小林好日氏の「動作態と國語の文法的範疇」、湯澤幸吉郎氏の「徳川前期の珍しい言ひ方」、東條操氏の「中國地方の方言に關する一二の考察」、安藤正次氏の「疊音と疊語の一研究」、横山辰次氏の「熟語の研究」、有坂秀世氏の「不可能を意味する『知らず』について」等がある。

有坂秀也氏は宣命に「進母不知退母不知」とあるを本居宣長の「ス、ムモ知ラニ、シゾクモ知ラニ」と訓したのを「ス、ミモ」、「シゾクモ」と改むべきことを云つてある。横山氏は熟語特に身體的部分的名稱を應用したものにつき廣く例を拾つて説いてある。

安藤正次氏のは疊音・疊語に於ける語の反復には完全に語全體を繰返すものと、語の一部分だけを重加するに過ぎないものがある。インドネシア語族では疊音・疊語が縮小義をあらはすものがあるが、我に於ては事物の複數や動作・狀態の繼續・反復を示すものがあるといひ、世界各國語に互りて疊音・疊語の性質を説いてある。

東條操氏の
中國地方の
方言
湯澤幸吉郎
氏の江戸前
期の珍しい
言ひ方

橋本進吉氏
の形容動詞
について
小林好日氏
の動作態と
國語の文法
的範疇

東條操氏のは中國方言の特徴「マイ」が「マー」となり、打消の「ザッタ」といふ形のあること、その行はれてゐる地域について調査されたもの、湯澤幸吉郎氏のは、江戸時代の前期に於ける特殊の口語中、未然を示す「う」に助詞「ば」の結合せる「うば」、肯定に用ゐる「ません」、下一段活用用ゐられる「進ぜる」、動詞の接頭辭として、御の字を用ゐた「御知る人」・「御許さるゝ」及び「ある」と「ゐる」と「をる」の今日と異なる用例を拾つて説を立てゝある。

橋本進吉氏のは形容動詞の性質や由來を詳説し、山田博士、吉澤博士の説に觸れ、「かり」・「なり」・「たり」の三種の中「かり」を除くべきことを論じてある。小林氏のは歐洲にても長い間動作態は時化の概念の中に過現未の範疇に混淆されてゐたが、十八世紀の末葉からこの研究が始まり、特に Curtius の希臘文法が出て以來明確になつたと前置きし、從來時の助動詞と考へてゐた「つ」・「ぬ」・「り」・「たり」の如きは「き」及び「けり」とは別で、時化をあらはすといふよりは動作態を示すもので、その古に溯つてみると、「ながらふ」・「かくさふ」の如きは繼續態を示したもの、「あやかよひ」・「ありたゝし」の如きも存在もしくは繼續態を示すものといひ、一步・玉霰・活語雜話・末分櫛・玉霰窓の小篠などの説を引き、長野義言の動作の進行・繼續・結果の存在・動作の完了の三項を立てたのを警眼とし、氏は動作態を三つに分ち、繼續態・存在態・已然態の三つを立て、これらの動作態は主觀によつて認識せられる關係的概念を示す時階とは自ら異なるものと區別を嚴にしようと企てた。

峯村氏の韻鏡の内外轉について

この他峯村三郎氏は「韻鏡の内外轉に就いて」、古來の説より近代碩學の大矢透・大島正健兩氏及び羅常培の説を引きて立説し、服部四郎氏は「朝鮮勅詞の使役形と受身・可能形」を説き、小林英夫氏は「韻譯の問題」をとり及び、内顯法と外顯法を説き、具體的に國語の性質十二項を擧げてある。一般論としては神保格氏の「所謂音韻學と音聲學」、佐久間鼎氏の「音聲的描寫による語構成」があり、言語學や外國語に於ける研究論文を含んでゐる。

東宮切韻佚文の研究

和漢年號字抄

我が辭書史に深い關心をもつてゐられる岡田希雄氏は昭和十年發行の立命館三十五周年記念論文集に和漢年號字抄と東宮切韻佚文の研究論文を發表した。これは同大學發行の雜誌に載せた東宮切韻攷の姉妹篇といふ。前田侯爵家藏の和漢年號字抄の委しい紹介をなして、その中に文德天皇の東宮におはしました頃菅原是善が撰んだ東宮切韻の性質を明かにしようと志したもので、和漢年號字抄は菅原爲長が嵯峨天皇の寛元から後深草天皇の寶治年間の作と推定し、その書中に東宮切韻を引くこと實に百七十四條の多きに上つてゐることを述べ、同書が漢文で書かれ、支那の典籍を引き、音義を説いたものであることを明かにした。爲長は菅家の嫡流であつて、高齢をたもち、文鳳抄や、管蠡抄の著者である點から推斷されたものである。

藤村作

藤村作博士の功績記念會では昭和十一年十一月に國文學と日本精神と近世文學の研究の二冊を出版してその前年還暦で東大を去られた同博士に捧げた。その中に語學に關するものは前卷には岡本千万太郎

岡本千太郎氏の國語觀

氏の「國語觀」、吉澤義則氏の「總主語說覺書」、小林好日氏の「假字遣「お・」を」の混同、湯澤幸吉郎氏の「腹(い)るとその關繫語」、岩淵悅太郎氏の「古語の清濁に就きて」、中島悦次氏の「上代國語法の分化性の一考察」等があり、後書には橋本達吉氏の「上田秋成の靈語通と徳川宗武の假名遣說」、吉田澄夫氏の「難波鉦用語考」等である。

岡本氏の所論はまづ國語觀の必要をまへおきに述べ、次にその歴史的概觀として、明治以前には自覺のない漢學者型のもと、支那崇拜に激して立つた國學者型の二つを敍し、次に明治以後の改革派・保守派の國語觀を説いたもので、むすびに國語觀・世界觀とを非常な熱と力とを以て書き去つてある。文化一般について廣く深く洞察し、世界觀・文化觀を樹立しなければならぬ、これなくてはたとひ豊富な國語智識の所有者でも、國語學と國文學との關係や國字改良や國語政策、國語教育を論する資格はないと述べてゐる。

吉澤義則氏の總主語說覺書
小林好日氏のお・をの混合說

吉澤氏の「總主語說覺書」は主語と見ると係結法に牴觸するから提示語の一種と見るとの結論を示されたもの。小林氏の「お・を混合」は平安朝の長保頃の佛典の加點から見ても夙より混同してゐることを考證し、假名遣の誤は單なる誤でなく、發音に關係して生じたものといひ、ア行音のワ行音に轉ずる例は「お・」をの混する以前、奈良朝以前にもある。「あ・」あれが「わ・」われ」となるは一種の添音の現象である。「お・」をが「を」に歸してゆくまへに、鎌倉時代頃から「お・」をが無差

別に用ゐられてゐた。このことは別に歴史的假字遣の成長（文化二卷五號）にも説いて置いたが、遂に室町時代に入り、「を」の假名がア行・ワ行兩行を支配するに至つたとその變遷を説いてゐる。

岩淵悦太郎
氏の古語の
清濁

湯澤氏のは「腹ぬ（い）る」の語史を説いたもの。岩淵氏は時代によりて清濁を異にする語が少くないことを「炊ぐ」・「防ぐ」・「騒ぐ」の如き動詞はもとといづれも清音に呼んでゐた證をあげ、次に「すさまじ」・「むつまじ」の如き形容詞もとは澄みて發音し、「慌し」・「夥し」の如きも平曲では濁らないし、「イチシルシ」・「ケタカシ」・「タソカレ」・「クワタツ」・「ハカリコト」・「コトツテ」の如きも日葡辭書には現在と異り、いづれも皆澄みて讀んだ例などを引き、清濁を論じてある。

品詞未分化
時代の語法

中島悦次氏のは品詞未分化時代の語法における一試論で、文と語、用言と體言、助辭と助動辭、助辭の分化前の用法を述べてある。

西下經一氏
の自他融合
の文

西下經一氏の「自他融合の文」の一篇は平安朝文學の中破格といふべきものを拾つて、今日我々が分析から綜合に向はうとするに對し、當時の人はこれと逆に綜合から分析に向はうとする考へ方の相違がある。自他對立にしないで、一元的に考へる傾向があつた。例へば枕草子の「淑景含東宮にまゐり給ふほどの事」の段に

うへ近う寄り給ひてもろとも書かせ奉り給へばいとどつゝましげなり

の一節の如きはそれであると、誤謬としないで、當時の人々の文章心理と説かうと企てた。これは一つ

橋本進吉氏
の論文

吉田澄夫氏
の女房詞「ゴ
サンス」の語
史

垣内松三氏
還暦記念日
本文學論致

東條操
關東地方の
方言分布

の提案と見るべきものか。

橋本氏の論文は體語通にあげた或る御説は徳川宗武の説であることを、玉函叢説の五十連言の辨と對照してこれを確め、これは秋成のいふ如く傳聞によるのではなく、假名に關する宗武と美樹との問答書があつて、秋成はそれを借りて寫したものを載せたものと考説したもの。

吉田澄夫氏の「難波鉦用語考」は延寶の頃に於ける大阪遊里の女房詞「ゴサンス」の語史を旨と述べたもので、これは「ゴサリマス」の變化したものであるが、その中間には京都には「ゴザリンス」といふ語のあつたこと、吉原にはその後「オザンス」、「ザンス」の如き詞が行はれてゐたことは遊士方言に證があるが、大阪にてはこれが「オマス」に株を奪はれたことを説き、その他難波鉦には「シャンス」、「ンス」、「サシャンス」、「サン」も行はれてゐたこと、その他の語にも及んでゐる。

垣内松三教授の還暦記念會より昭和十三年一月日本文學論致が出版された。中にことばの部には、北島霞江氏の「國文學の特殊表現から態象徴・音象徴について」、川口久雄氏の「平安朝中期に於ける言語教育」、湯澤幸吉郎氏の「假名書論語の言語について」、望月世教氏の「所謂カ行延言に關する諸説の批判」、東條操氏の「關東方言の方言分布」の五篇がある。

東條氏のは全關東各地の方言の分布を明かにする目的を以て、單語を中心とし、これに音韻と語法とを加味した質問集を發し、各縣の町村の調査の結果を集め、東の栃木・茨城、西の群馬・埼玉・東京(市

東部・西部・南部方言とその境界線の假名書論語の語法

及び附近を除く、神奈川、南の千葉の三區域に分つべく、東北的色彩を帯びた東部方言と、幾分本州・中部方言の色彩を帯びた西部方言との境界線を定めたもので、その方法手續をも委しく述べてある。

湯澤氏のは安田文庫叢刊第一篇に收めた高山寺本假名書論語につきて、假名遣と發音以下六項に分ち、當時早既にぢ・じ・づ・ずの混合した證例を擧げ、動詞の音便形についても、

子張問曰 を とつて曰はく

終夜不_レ寢以思 を もつておもつしかど

微_ニ管仲_一吾其被_レ髮左_レ衽矣 を くわんちうなかつせば

富而無_レ驕易 を とつておこることなきこと

百姓足…… を はくせゐたんば

其智可_レ及也 を そのちには我もをよんづべし

に於けるが如く、「ハ」「四」、「ラ」變等の促音便、特にマ行四段に「て」の加はつた時、促音便となる如き奇異の例を拾ひ説明を加へ、「ラ四」・「マ四」・「ナ變」動詞の下に連用形の下につく「ぬ」・「な」・「し」の來る時撥音便となる例を擧げ、動詞の活用の変化せる例を引き、助動詞「り」・「ぬ」・「つ」の新しき用例を考へ、助詞「を」・「は」・「や」の新しい用例を摘記してある。鎌倉時代の活用を明かにしてある。

望月世教氏の力行延言

望月氏は岡倉山三郎・岡澤鉦次郎・金澤庄三郎・安藤正次・橘宗利の説を擧げて批判し、力行延言の

北島霞江氏
の論文
音象徴と態
象徴

「く」形は萬葉集には純體言的のもの、詠嘆的のもの、連用的のもの、副詞的のもの如き用例を擧げ、鹿持雅澄の如くハ行延音を一つに説くのを指摘してゐる。

北島氏は一つの單位的の「こと」又はものに命名するに、一面に擬聲によりてこれを表現し、一面には擬態によりてこれを表す。音象徴と態象徴とを説き、言靈派の説を引き、それは一概に廢斥してはならず、またそればかりに據るのは不可であるとし、次に助動詞「つ」・「ぬ」・「たり」の音象徴を説き、新たに音聲の發聲と語義との相關を示さうとした。

高木市之助
氏の變字法

その他高木市之助博士は「變字法に就いて」と題し、記紀の歌謡の用字法に關し、例へば景行天皇紀に見えてゐる「みけのさをばし」の歌の

彌開能佐鳥變志

彌開能佐鳥變志

の如く、同一句又は類似句の反覆に方り、少數文字をことさらに變へて用ゐるが如きは、文藝上より見て面白味を感じる可視的作用から起つたものとの新説を立てられた。雁鳴かりなげと雁哭かりなきとはちがひがある。射矢遠放の「いや」、國方くにへか可開遊群かひるぐみの「ゆく」は用字の意を見て相互の様子が目にうつるやうなと説いてゐる。その他飛田隆氏の言語形象學の成立についての論文もあるが、今一々説かない。

上田博士追
悼記念

我が國語國文學界生みの親である上田萬年博士が逝かれてから一周年、昭和十五年十月、國語と國文

學は先生をしのぶ特輯號を出し、その記念とした。國語變遷の概觀としては橋本博士の「國語音韻の變遷」、安藤正次氏の「古代語法の變遷」、土井忠生氏の「近古の語法」、湯澤幸吉郎氏の「近世の語法」を始め、その他親しく教を受けられた人、また孫弟子等七人の論文を收め、先生の講義題目や著述目錄を舉げてある。

橋本博士の
國語の音韻
の變遷

古代音八十
七

橋本氏は我が千二百年の音韻の變遷を三期に分ち、音の組織を論じては西洋の音單位と我が音單位と異つてゐて、我にありては彼れの二音を合せたものから成つてゐる。これを音節と稱へ、言語の外形を形づくる基本單位となすべしといひ、第一期即ち奈良朝に於て八十七音乃至八十八音存在してゐたことを立證し、その末期に至りては「と」「の」等の假名に當る二音の別が次第に失はれたことを説き、東語に於てはその混亂が甚だしく、他の音組織も相違のあつたと説き、次に連音上の法則を述べ、藤原朝頃から支那人が音博士として來朝して一音や濁音で始まる音を學んだであらうといひ、また複合する場合に連濁を生ずる所以を説き、二期三期に互り、これが變遷を説き、最後に我が音韻變化の概觀につき六則を述べてある。

我が音韻變
化の概則

その中に從來の學者が古代の音韻を單純なものと考へる妄を辨じ、また古代に於て多くの音韻があつたのが後に至つてその數を減じたと見えるが、それは「い」「ろ」「は」等の一つ／＼の假名であらばさされた音韻だけのことで、新たな國語の音は加はつてゐることを述べ、國語音韻の變遷は母音の連音上

の性質に由來することが多いことを説き、また唇音退化の傾向を敘してある。母韻の性質に着目せられた説が長呼音を生じ、拗音を生んだ説明となつてゐる。

安藤氏は指定・打消・受身・使役・敬讓・時制・推量・條件・命令の九法につき一々例を擧げて説いてあり、土井・湯澤兩氏のは豊富な例を引いて、その概観を述べてある。

江戸時代中頃に於けるハ音の研究
だに・さへ
・すらの語
史の研究

京都言葉の
一時期

安藤正次

その他、有坂秀世氏の江戸時代中頃に於ける「ハ」の頭音の研究は支那語學の資料を多く引證してあり、松尾拾氏の「平安初期に於ける格助詞を」、加納協三郎氏の「院政鎌倉期に於けるダ・スラ・サヘ」、小林好日氏の「助詞」が『の表現的價值』、春日政治氏の古點の況字をめぐるては、いづれも細かな語史であつて、統計を擧げたりしてその用例から立説してある。眞下三郎氏の京都言葉の一時期は湯澤氏の近世の語法と共に江戸時代の語法を明かにしたもので、湯澤氏の一般的なるに對し、眞下氏は京都言葉の時期やその特徴を細敘して同じ上方言葉の中にも大阪言葉との差異に觸れてある。

佐久間鼎氏の
日本語の
論理的表現

臺北帝大教授安藤正次氏の還暦祝賀記念論文集は昭和十五年二月に發刊された。五十三人の論文を收め、千八百頁に上る巨冊で、中に國語學に關するものが半ばを占めてゐる。その中國語の本質につき特徴を述べたものには佐久間鼎博士の日本語の論理的表現があり、時枝誠記氏の懸詞の語學的考察とその表現美があり、佐久間氏のは日本語が論理的表現に適しないものがあるかのやうに説く意見に對し、我が國語の本質上より否定したもので、適當でないとする論者は主語の省略が頻繁であるとか、主辭と賓

措
定
辭

辭とを結びつける繋辭、即ちコプラを缺くとか、主語でないものに助詞「が」を附けるとか、關係代名詞がないので、理論の展開などに際し明確な表現をするに困難である等の非難に對し辯駁してある。歐洲では屢々、論理的に見た判斷様式と區別と語法的に考へた文の種類との間に齊合を缺くところがあるに拘らず、一方の考へ方を無理に他方へも押しつける缺點がある。狀態概念を賓辭とする物語判斷や性質概念を賓辭とする品さだめの判斷は存在を示す助詞「ある」や形容詞・形容動詞を述語とする構文によつて表現されるのに對し、對象概念を賓辭とする説明的判斷は、コプラの役目を荷つて登場する措定辭（その典型的なものは「だ」で、「さ」もこれに屬する）を述語として表現されるが爲に、判斷のそれ／＼の論理的特性を區別して考へる爲には却つて有利な立場にあると論じてゐる。ヴァンドリエスの説くごとく、構文の全體的特性から見て名詞文と動詞文とを對立せしめる要はあるが、國語ではコプラなしの名詞文が存在してゐることは實證され得る。のみならず、存在の表現と措定の表現とは日本語ではつきりと分れてゐて、言語的表現が他よりも簡明で適確である長所をもつ。日本語の性狀詞は西歐の言語の如くコプラを介在することなく述語として立つ。時間に超越してゐるかぎりはこれで十分である。もし性狀の變化に當面してこれを表白する實際生活上の必要があれば、措定辭は存在の動詞と接合して時の表現の可能性をもつてゐる。然るに外國文法にひかされてコプラのないのを不完全とするのは大きな誤と見てゐる。これは尤もなことである。而して一般に判斷をあらはすに方りその主語につける助詞は

「は」「及び」「も」を格助詞と見るべき論

「は」を以てするのが普通なるが、この「は」は格助詞に編入することは宜しくないとの通説に對し、氏はこの助詞を提題の助詞の名目中に收め、「も」は共説に用ゐるに對し、「は」は特説を本領とするが、尙「は」は多くは現前の場を離れたいはゞ非現場に於て提題の役割をつとめると共にその提起した題目について残りなく行きわたることを示す特色を有すと説いて通説を是正してゐる。これは古くは格詞に考へてゐた。それを近世人が更改したのを理由を附して還元したもので、前の措定詞の設定とゝに首肯さるべき新分類といへる。

時枝誠記氏の懸詞の語學的考察とその表現美

懸詞を語法上の問題となすべきことを提唱

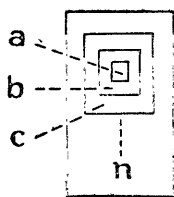
入子型構造形式

時枝氏のは論文を二つに分ち、第一部は懸詞の語學的考察で、更にこれを懸詞と二重言語過程、懸詞を含む文の統一性、及び懸詞を成立せしめる國語の構造即ちいれこ（入子）型構造形式の三目に分け、第二部は懸詞による表現美を旋律美・協和美及び滑稽美の三つに分け、麻姑を傭ひて痒きを搔くが如く説き去つてゐる。懸詞は語法上の問題としない語學家に再讀をすゝめる論文と云つてよい。懸詞は一語多義的な用法でなく、共通音聲によつて喚起せられた二つの概念の間には、明瞭な對比が意識されてゐるといひ、一般の文は詞辭の結合により統一性をもたしめるものであるが、懸詞は音聲の範圍によつて文の統一を保ちつゝ、一方その兼用の故に論理的脈絡を斷ち切らうとするものであるといひ、この二重言語過程によつて聯想的に統一されたものと説き、その原因に溯り、國語に於てかゝる表現技巧が成立する根據をたづね、同音異義語の多く存在するが爲となす通説よりも國語の入子型構造形式に基くと論

單位語認定
の困難なる
理由

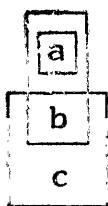
包擁し包擁
される二重
性格

神田氏の書
紀古訓考證
菊澤季生氏
の紀の歌謠
に見える假
名



じてゐる。元來國語に於ける單位語の認定の困難な重要な理由は國語がこの入子型構造形式をもつ爲である。入子型といふのは核子となるaと外皮となるnとを兩極としてその間にb・c乃至mを包含する。例へば「事ありげ」の如き「げ」は「事あり」を限定修飾語にしてその中に包攝する、「いと寒き夜」の「夜」は「いと寒き」を包攝し、「寒き」は「いと」を包擁し、また「夜」に包擁されるが如きをいふ。

さうして「げ」の如きも一單位と見做してある。國語に於ては語は包擁し、包擁されるといふ二重の性格をもつてゐる。それが變態として、次の圖の如くbはaを包擁するが、cはbの一部分のみを包擁するのが懸詞であつて、入子型の變形であると説いてゐる。この論にて注意すべきことは氏は接尾辭の如きも語の一單位と立てゝあることである。



古い假名文字音韻につきては神田喜一郎氏の「日本書紀古訓攷證」や菊澤季生氏の「日本書紀に見える假字用法に就て」、春日政治氏の「聖語藏御本唐寫阿毗達磨雜集論の古典について」、澤瀉久孝博士の「桂本萬葉集の文字の考察」があり、神田氏は書紀の中、登を「スナハチ」、宿を「モトヨリ」、流を「ホドコラン」、同船を「ハシフネ」、屬を「ハケミテ」、學を「オコナヘ」、別風を「ヨモノカゼ」と訓する所以を明かにし、菊澤氏のは紀の歌謠に見える假名を拾ひ、

A 全卷を通じて行はれるもの……鳥

B 書紀の前半にのみ見えるもの……鳩

C 書紀の後半にのみ見えるもの……鳴

の三種類に分つことが出来るといひ、その前半と後半との境は卷十三と十四との間にあり、Cの字形がA又はBに對して複雑になつてゐる。これはその記述が必ずしも同一人の手によつて時代順に進んだものでないからであらうといひ、また自註の假字は歌謡表記のものとは必ずしも一致しない。筆者の新たに用ゐた文字も少くない。

自註の假名
と本文の假
名

例へばア(軼) イ(怡) ウ(羽) エ(哀・埃) オ(淤) カ(迦・河) キ(伎・儀・既) ク(寒・苦・衢)

ケ(覓) コ(五・孤)……

これも註者は別人であつた爲であらうといひ、嘗て永田吉太郎氏が音聲協會々報³⁶に發表した日本紀歌謡の假名の研究を一層完成し、春日氏のは故大矢博士の遺された調査資料と國語科學講座に載せられた「片假名の研究」とにより一層精細にこれを論究されたものであらう。

大西雅雄氏の
視覺文法と
聽覺文法
石黑魯平氏
の語頭のグ
ライド臆説

音韻語法に關しては大西雅雄氏の「視覺文法と聽覺文法」の如き新しき見方や、石黑魯平氏の「語頭のグライド臆説」と題し、主として音聲學上から「入り涉」を新しく説いたものなどがある。石黑氏はこの頭音グライドを

W + A N + G N + D M + M

M + B U + W I + S I + Y

の八つの型に分けて説明してゐる。

國語學史に關しては服部正義氏の「國語學史上に於ける鈴木隼」の言語四種論や活語斷續語の詳しい批評や、酒井秀夫氏の玉緒變格考等があり、小山正氏の「石塚龍磨の萬葉研究」があり、吉田澄夫氏の「句雙紙抄について」があり、語につきては橋本進吉博士の『さふらふ』か『さうらふ』かがある。湯澤幸吉郎氏の「報ふ（ハ四）の用例」があり、形容動詞や數詞につきては吉澤義則博士の「品詞建設に關する二つの答」があり、方言に關しては柳田國男氏の「方言の成立」、東條操氏の「長野縣に於ける土語分布例」、宮良常壯氏の「青森秋田兩縣方言に於けるp音の研究」があり、朝鮮の韻書と辭書に關しては小倉進平博士の「朝鮮に於ける韻書と玉篇との關係」があり、支那書の譯音に關しては淺井惠倫氏の「日本語」があり、琉球の數記號に關しては須藤利一氏の「すうちうま」があり、外國人の研究紹介としては神保格氏のガーディナー氏の文の定義、吉町義雄氏の今より百六十年前に於ける長崎方言の資料を集めたる Isaac Titsingh の *Frinige Japanische Wouden* の紹介があり、我が屬領南洋諸島の *Palawan* 島やそのあたりの *Calamianian* 語と *Agotaya* 語の紹介がある。その他にも有益な論文があるが、今一々記さなう。

四十九 日本言語學會及び日本方言學會の設立

日本言語學會

言語研究

上田博士の傘下に新進の學徒が集つて組織してゐた言語學會が中絶してから、三分の一世紀は音なく過ぎて了つた。近年言語に關する研究は頗る旺盛をきはめ、從來夢想もしなかつた言語研究は、理論の開拓に事實の調査にその歩武を進め、言語哲學・言語心理學・言語美學・言語社會學・言語地理學・比較言語學・音聲學・言語史等新興の部門が開かれて來た。そこで一學派一運動の上に偏らない言語學會設立の必要を人々が認めて來たので、昭和十三年二月發起人會を開き、日本言語學會を組織するに至つた。新村出博士を會長に、小倉博士を副會長に、評議員を定め、五月に入り大會を開き、十四年一月より機關誌言語研究を一年三回發行することゝ定めて、機關誌言語研究を出すこと昨年末までに六號を重ねた。況く世界の言語研究に亘るので、突厥語に於ける數詞、蒙古文語の起原、朝鮮漢字音の一特質といふが如き近接國語から梵語・西歐語の古今に於ける研究もあるが、國語學に關する論文も少くない。今その二三を拾つてみると、(括弧内の數字は雑誌の號數を示す)

文獻學・言語學・語原學

(一) 福島直四郎

日本言語學會及び日本方言學會の設立

鳴と哉

(一) 柳田國男

諷經の唐音に反映した鎌倉時代の音韻状態

(二) 有坂秀世

日本語に及ぼした和蘭語の影響について

(三) 齋藤 靜

國語學史と上田萬年先生

(四) 金田一京助

歐人刊行日本語彙集覺書

(五・六) 吉町義雄

摩訶につきて

(六) 福井久藏

母韻の性質について

(六) 宮内玉子

のやうである。この會に於ける講演や機關誌所載の論文が、世界の言語學界にも大きな寄與をなすべきことは期して待つべきである。

日本方言學會

この會に後れること二年、昭和十五年五月新村出・東條操・柳田國男諸氏によりて計畫された日本方言學會は九月に至り成立し、柳田氏を會長に推し、十月に至り創立大會を開き、講演會を開き、會誌を出し、大いにその發展を期しられてゐる。曩に創立した東京方言學會は解消して、こゝに日本方言學會は成立したのである。かゝる有力な學會の誕生は躍進日本の前途に燦たる光を與へることは信じて疑はないところである。

五十 歐米人の日本語研究の一瞥

シルワの我が國訪問と語彙

フェルナデスの日本語彙

アルヴァーレスの日本語彙

天主教の我が國に入つてからすでに四百年を経てゐる。その傳道をなすにはまづ言語によらねばならぬ。そのかみ葡萄牙から派遣された教士たちは漂流民などにつきて日本語を學び、語彙は勿論、その語法の大いに異つてゐるものを注意し、その考察するところを次第して、ラテン文法の型に従つて我が日本語法の編述を企てた。その第一人者はリスボン生れのドアルテ・ダ・シルヴァ (Duarte da Silva) といはれてゐる。彼れは天文十九年九月十四日一行と共に種子島に來り、九月七日豊後に着き、印度副王の使命を大友氏に傳へ、一ケ年にして我が國語に通達して同二十二年ゴアに去つた。その間に日本語典 (Arte da Lingoa Japon) や日本語彙も作つたと云ふ。

尋いで西班牙人ジョアン・フェルナンデス (Joao Fernandez) は天文十八年八月十五日に鹿兒島に來り、これもその後日本語典 (Grammatica da Lingua Japoneza) を著はしたといふが、版にはならなかつた。

エマヌエロ・アルヴァーレス (Emmanuelo Alvares) の日本語典は文祿三年天章學林で版になつた。

これはそのラテン文典に日本に来てゐた耶蘇會士の幾人かゝ我が動詞とその變化を翻譯し、多少の説明を加へたものに過ぎないといはれてゐる。

吉利支丹教義

天草學林出版の平家物語

文祿の頃になると、我が國語を知る爲に種々の印刷物を見るに至つた。その中、吉利支丹教義は文祿元年天草學林で上版された。ローマ字でその扉に「日本のゼズスのコンパニヤのスペリオルよりキリシタンに相當の理を互の問答の如く次第を分ち給ふドチリイナ」と書かれてある。これは我が文語をローマ字を以てうつされたもの。同年同所で平家物語も出版された。これは「日本の言葉とイストリヤを習ひ知らんと欲する人の爲に世話に和げたる平家の物語」とある如く、當時の口語を以てうつしたものである。

天草版伊曾保物語辭書の刊行

翌二年には同所で伊曾保物語 (Isopono Fabulas) も版にされた。これも當時の口語譯である。同四年には同じく天草で、拉葡日辭書が版になり、慶長七年には日葡辭書 (Vocabulario da Lingua de Japan) が、翌年にはその補遺が長崎基督教學林で上梓、我が古今雅俗の口語三萬を葡語で譯してある。布教の爲にいかに語學研究を獎勵したかゞ想はれる。

ロドリゲス
日本文典及
び日本文典
要義

爰に葡國生れのジョアン・ロドリゲス (João Rodriquez) は、長い間我が國に傳道して日本語に關する深い智識を藏し、アルヴァーレスのラテン文典に倣つて日本文典を組織し、慶長九年長崎學林で日本文典を出した。後長老の命によりその要をつまみ、元和六年更に日本文典要義を撰んで媽港學林で出

版した。世にこれを氏の小文典と呼んでゐる。規範的態度が前書より濃厚にあらはれてゐる。

前書には引例も多く當時の標準口語を主として方言や文語に觸れ、連歌からも例をとつてある。音韻を説くことが詳密であつて、その體系を知る外に當時の言語音韻を知る上に貴い資料を提供してある。國語科學講座やその他の雜誌に土井忠生博士が詳しくこれを紹介せられた。它山の石といふが、それ以上の價を示してゐる。

その一二例を擧げて見れば、同じ名詞を重ねて複數を示すことがこの頃漸く少くなつて來た。而して尙使用されるものは高尚な表現であるとか、自稱の代名詞に「私」といふ語が使用され來つたこと、對稱に「なんたち」を用ゐるが、この頃は敬の意味が殆ど失せかゝつてゐたこと、御奉公の如き「御」は自分に附けるのではなく、御身様に對しての奉公の義であることから誤とすべきでないこと、數詞は場合により種々に發音されることも詳述してあり、助動詞の中、敬語の「まらず」は關東や九州地方では「申す」といふとか、「求めまじい」は上品な表現でないとか、方言の「べし」や「あげんず」・「せんず」・「のんず」・「ぞつた」等の方言の地域とか、鼻母音のこととか、種々の點に於て當時の我が文獻に記録の見えないものをそれ／＼細かに系統を立てゝ述べてある。

寛永九年に至り西班牙の宣教師ディダコ・コリヤード (Didaco Collado) が日本文典 (*Arte Grammaticae japonicae linguae*) をローマで出版した。ロドリゲスに次いで有名な日本語學者で辭書も出

大塚高信氏の譯

關係代名詞に代る表現

動詞の法

した。大塚高信氏の昭和九年の翻譯が世に行はれてゐる。ラテン文典やロドリゲスの文典に據つたことは勿論であるが、語法につきては新たに説を立てたところもある。品詞並びに文章法一般に互つて述べてある。名詞は「わ」「が」「から」「の」「より」の五つの助辭と連結して格を示すことを述べ、「に」「・」「と」を數へてない。關係代名詞は存在しないが、動詞が陳述をなす名詞の前に置かれる時その働きをなすといひ、或はその間に「ところ」の詞を補ふことがあるといひ、動詞の活用は三つの肯定と多數の否定だけであるといひ、その命令形・希求法・肯定法・否定法・否定法・可能法とその接續の助辭を説き、敬の動詞を説き、その他「頼みきつて」の如く「きつて」を動詞のある根に添へると、大きな力を與へ、「生焼く」の如く「生」を頭に置くと、不完全の意を表し、「けれ」を附するときは前を受け、敘述の確認及び終結を示し、「こそ」といふ辭は日本人間には頗る重要なもので、最初は反意的に用ゐたことより係結法にも説き及ぼし、副詞は場所を示すもの、理由に關するもの、問答に屬するもの、時及び否定・肯定・比較・最上級を示すもの、結論を呼び起すものに區別して論じ、連結辭と區分辭とを説き、文章論に於ては莊重體に於ける語の排列より獨立の接續法・讓歩法・否定法・條件法・使役法は直說法或は命令法の前に置かるべきことを説き、主格の無い場合、非人稱動詞には前に主格を必要とすること、必要の動詞には「私は金がある」に於けるが如く、二つの主格を支配するとか、能動々詞には主格の代りに對格を一つ若しくは二つ要求するが、受動々詞はどうとか、自動詞には受動々詞の如く對格

を支配するものがあるとか、同一敘述の中に時の動詞が二つあるときはその關係はどうなるとか、多くの形容詞を重ね用ゐるときはどうするとか、引用の「と」の意義だの、存在動詞がこの「と」の意を代辨するとか「とも」にて文の終るときは強い斷言を示す等示唆に説んだ説が少くない。

オヤングー
レンの文典
プレシユス
のタガラ語
と日本語と
の比較

シーボルト

日本語要略

その後西班牙のフライ・メルチオール・オヤングーレン (Fray Melchor Oyanguren) も日本文典 (Arte de la Lengua Japona) を我が元文三年に著した。これはメキシコで出版された。ミカエル・ヅ・プレシユス (Michael de Preces) 氏は Tagala 語と日本語との比較を試みたが、史的價値の外はない。久しく我が邦に來てゐて植物學等の研究に大きな業績を遺し、種々の著書や紀行を書いた獨逸人フキリップ・フランツ・フォン・シーボルト (Ph. F. von Siebold) は我が文政九年に日本語要略 (Eptome Linguae Japonicae) を著した。從來のものは葡萄牙語や西班牙語で書かれたが、この頃に至り和蘭語で誌された。有名な文法學者のホフマンはその門下である。蘭國のカピタンのドンケル・クルテウス (J. H. Donker Curtius) は長崎の出島に於て日本文典例證 (Proeve eener Japanische Sprachkunst) を著し、本國に送つて翻譯官ホフマンの意見を徴し、ライデンに於て出版した。長崎方言を多く取り入れてあるばかりでなく、ホフマンの名著日本文典の前驅をなしたものである。

ホフマン

ホフマン (Hoffmann) は、慶應三年に日本文典 (Japanische Sprachleer or Japanese Grammar) を著した。この人は來朝しなかつたが、我が留學生西周等より日本語を學びて著作したもので、翌年英

され、後にいふアストン及びチェンバレンにも影響を與へた。

ランドレス
ローニー
日本語とアジア大陸語との近似
フィン語との類似
トルコ文法との比較
ボラーの日本語のウラル・アルタイ語派に属する證例

フランス人の中には既述の「ロ」氏の小文典や「オ」氏の日本文典の翻譯を出したランドレス (Lands-dress) もあつたが、幕末から明治の初にかけてローニー (Rosny) が出て慶應の初に日本文典や日本語學須知を出版し、その少し前文久の初には日本語とアジア大陸語との近似 (Des affinités du japonais avec certaines langues) を説いたり、明治七年にはフィン語との類似 (Affinités des langues fino-japonaises) を論じ、明治十八年には日本文法とトルコ文法との比較 (Examen comparé de la grammaire turque et de la grammaire japonaise) を試みたりした。蓋し日本語の語族に關しては、
埃太利人ボラー (Boller) は安政四年に日本語のウラル・アルタイ語派に属する證例 (Nachweise dass japanische zum Ural-alai-chen stamme gehört) を書いた(これは後に詳説する)。

明治の直前から明治時代にかけて我が文典に大きな影響を與へたのは獨逸人ホフマンと英人アストン及びチェンバレン氏である。慶應三年に出たホフマンの日本文典には日支兩國語の關係を説き、は行P音考を述べ、動詞の語根をie二種に分ち、未來の語尾「む」は「見」より來たとし、受動態は能動に得るといふ動詞の結合したものとといふが如き動詞の原形論をも述べてゐる。

アストンは明治四年に日本口語小文典を、同五年に日本文語文典 (Grammar of the Japanese Written Language) を著し、その序論に日本語の特質を論じ、チュラニアン語族との比較を試み、

琉球朝鮮語
との近似

日鮮語比較
研究

我が擬聲語
と語源

チェンブレ
ン枕詞及び掛
言葉について

狂言記につ
きてダラスの米
澤方言チェンブレ
ンの會津方言につ
いて日本言語學
に於ける各種の
文體について

博言學を講
ず

日本語の發達・成熟・衰頽の時期を分ち、琉球語・朝鮮語との近似關係を説き、口語は文語と異り、附
着語から屈折語にうつりゆく傾向があるといひ、語辭の新しい分類を行ひ、動詞の古形を四段活とし、
動詞「得る」の複合して下二段活を作ることの説き、明治十二年には日鮮語比較研究 (A comparative
study of the Japanese and Korean language) をアジヤ協會雜誌に載せた。これは随分無理もある
が、その文典と共に我が國語學者に影響を與へた。尙氏は明治二十七年には我が擬聲語と語源について
論じた。(Japanese onomatopoeias and the origin of language)

外人中日本語に通じ種々の著を出したのはチェンブレン氏で、氏は明治十年アジヤ協會雜誌に枕詞及
び掛言葉に關する論文 (On the use of "pillow-words," and plays upon words in Japanese poetry)
を出し、枕詞をアッポジションに比較し、翌年には狂言記につきて (On the mediæval colloquial di-
allect of the comedies) を發表した。東北方言中米澤に關するものは興讓館の英語教師ダラスが夙く
明治九年に論述したものもあるが、チェンブレンは明治十四年に會津方言に關する論文 (Notes on the
dialect spoken in Abitzu) を出した。同十六年には日本言語學につきて (Notes on Japanese philo-
logy) を、十八年には日本文學に於ける各種の文體 (On the various styles used in Japanese lit-
erature) 及び日本語の動詞の語源につきて (The so-called root in Japanese verbs) を、十九年には
過去分詞につきて (Past participle or ground) をアジヤ協會雜誌に發表した。氏はその頃東京帝國大

日本小文典
大學紀要に
アイヌ研究
を出す

琉球語は我
が國語と同
系である説

神代文字に
つきて

國語の系統
論
エドキンス
の支那語系
統論
ラウエル
パーカー

學にて博言科を學問講し、日本小文典 (Simplified Grammar of the Japanese Language) を出し、帝國大學紀要としてアイヌ研究より見たる日本言語・神話及び地名の研究 (Language, mythology, and geographical nomenclature of Japan viewed in the light of Aino studies) を出し、文部省の依頼により邦文日本語典を作りて公刊し、翌年には上田萬年と共に日本古代に於ける語彙を出し、また明治二十一年には日本口語文典 (Handbook of Colloquial Japanese) を出し、二十八年には *Essay in aid of a grammar and dictionary of the Luchuan language* を發表して琉球語と我が國語との同系であることを説いた。この論文も學界に大きな示唆と影響とを與へた。

我が神代文字に關しては明治十年にケンペルマン (Kempermann) の紹介を始めとし、同十三年にはメチニコフ (Meehnikoff) もヒフミ・アナイチ、秀眞の神代文字に就いて、同十四年にはローニの日本神代文字古代刻銘について等の所論が發表されてゐるが、格別なものはない。

我が國語の系統に關しては有名な東洋學者・支那語學者のエドキンス (Edkins) は、夙く明治十三年にアジア協會雜誌に漢字の日本音に於ける支那方言の影響を説き、同十五年に載せた古代日本語彙には支那語系統と見做し、二十年には日本語と對岸アジア大陸語との結合を論じ、ラウエル (Lauvel) は日本語と緬甸語との比較 (A comparison of the Japanese and Burmese languages) を試み、パーカー (Parker) は明治二十二年から三年に亘つて古代日支兩國民及び相互の言語關係を論じた。併しそ

の多くはいづれも正鵠を失し、問題にならぬくらゐである。米人イムブリー (W. Imbrie) は明治二十年日英小言語學を著し、版を重ねた。

バチラー
日本の古代
地名の研究

またアイヌの父と呼ばれ、アイヌ語辭典や語典を著したジョン・バチラー (J. Bachelor) は日本の

古代地名の研究 (Helps to the study of ancient place-names in Japan) に於て地名は勿論事々物々

金田一博士
の發論

アイヌ語オリジンとする説も生じ、これを盲信するものもあつたが、金田一博士はその非を指摘された。

ボラーのウ
ラル・アル
タイ語説

先に一言したウイン大學のボラー氏の日本語のウラル・アルタイ語に属すべき證明は組織立つた所論

であつて、語根は母音母韻から成るといひ、語の構成上助辭の結合のさまが相類似し、名詞と動詞との區別がつきにくく、音韻變化の方則が大體相似てゐて、文章成分の排列が全く同一の點などを數へてゐる。

ウインクレ
グルンツェ
ル

プロシアの東洋學者ウインクレル (Winkler) は明治二十九年に日本語とアルタイ語とを比較し、グルンツェル (Grunzel) もその前年發表したアルタイ語の比較文法の上に日本語を説いてゐる。フィン

ラムステッ
ト

ランドの初代の駐日公使ラムステット (G. J. Ramstedt) は大正十三年にアジア協會雜誌にアルタイ

アルタイ語
と日本語と
の比較
音韻組織

語と日本語との比較といふ論文を載せ、ウラル語を引き放し、日本語の音節が短くあること、上代日本語は語頭に k t p の音のみで、g d b の音が無かつたので他との比較も困難であるが、音韻組織が單純で、子音の連結が非常に多いことは英獨語とは大いに異つてゐて、昔は他のアルタイ語と共通してゐた

ものがあつたであらうと推測し、また雑誌民族へ「朝鮮及び日本の二單語に就て」の一書を寄せ、南洋語系統を斥け、むしろ朝鮮語及びアルタイ語の表現に一致してゐることを唱へた。

ラベルトン
大洋洲言語
と日本語

ラベルトン教授 (Van Hinlopen Labberton) は大正十二年メルボルンにて開催の汎太平洋學術會議に「日本及び馬來ポリネシア語間に於ける始源的關係探究序説」を發表し、同十四年には大洋洲言語と日本語 (The oceanic languages and the Nipponese as Branches of the Nippon-Malay-Polynesian family of speech) をアジア協會々報に載せ、日本語と南洋語との一致を二十餘條に互つて論じた。

ワイマント
大洋洲起原
説

またワイマント博士は昭和元年アジア協會々報に日本語及び日本民族の大洋洲起原説 (The oceanic theory of the origin of the Japanese language and people) を載せたが、これは唯似寄つたものを少し擧げて論斷したに過ぎない。

エドワーズ
日本語の
アクセントの
研究
日本語の音
聲學

我が國語の音聲の研究を志して夙く渡來したのは英人エドワーズ (B. H. Edwards) で、氏は明治三十三年・四年我が各地を廻つて音聲をしらべ、その結果をソルボンヌ大學の學位論文として提出した。また三十七年から四十年に互つて現代日本語の音聲學 (The phonetics of modern Japanese) を發表した。これはロンドンの日本協會の需に應じた講演の速記を録したもので學位論文と變りはない。

ガウントレ
ット
アイエル

ガウントレット (E. Gauntlett) は明治三十八年に日英音聲學概説 (The elements of Japanese and English phonetics) を出し、アイエル (E. A. Meyer) は三十九年に日本に於ける樂的語調を、

ポリワノフ
フ
サンソン
日本歴史文
典

ポリワノフ (Polivanoff) は東京語の樂的アクセントを論じた。

英國大使館の商務官でロンドンのアジア協會の會長をしてゐたサンソンは、昭和三年に日本歴史文典 (An historical grammar of Japanese) をオックスフォードで出版した。内外先進の説により古典を引き、日本語の綴にはローマ字を用ゐ、論語などの引用は漢字を用ゐてある。(勿論字の間違ひもある) 山田博士の文法論に據つたところが多い。外人の日本語研究の爲に資料を提供するを目的とした。序論にまづ我が書法の起原を論じ、漢字の輸入と書法とを述べ、次に假名の發達を説き、漢字の用法が支那では表記文字として用ゐられ、我が邦にては表意文字として用ゐられてゐることを述べ、次には口語文法の別を説き、第二章以下實名詞・敘述詞・形容詞・動詞・助動詞・助詞・副詞を論じ、末に文章法を述べてある。我が動詞は時・態・法を示すには助動詞を加へ、複活用をなすが、氏はそれを接尾辭となし、その種類を表時接尾辭・表態接尾辭・使役接尾辭・否定接尾辭・不變化動詞の接尾辭に分ち、「まし」・「べし」・「たし」・「如し」は助辭的形容詞と呼び、「ある」・「する」の動詞も助助詞に數へ、「行かる」・「行かす」の如き八衢と同じやうに一動詞と見倣してある。而して接尾辭や活用語尾はもと獨立の詞であつたと説くのは危険であるといつてゐる。また連辭には指定の「なり」の外に「とす」をも加へてある。

ワシリエフ

歐米人の日本語研究の一瞥

文字論中漢字の取扱ひに關し、露國帝大教授のワシリエフは音符によつて排列した字書を編んだ。そ

助動詞を接
尾辭と名づ
けた

ローゼンベ
ルヒ

の音符は文字の右下線によつて排列した。東洋文獻の根本研究に志し、我が帝國大學に學んだ露國のロ
ゼンベルヒ (D. Rosenberg) は大正五年に五段排列漢字典を著し、引出に便しようと企てた。蓋し新
しい試みである。所謂五段排列とは漢字の有する根本の線には

第一 → の方向に進む線

第二 ↓ の方向に進む線

第三 ↘ の方向に進む線

第四 ↙ の方向に進む線

第五 ↑ の方向に進む線

の五種の方向がある。この方向と五種の變化に洩れる漢字はないから、これに基いて字母表を作り、二
十四根本線、線の獨立、結合、交叉、偏、垂、冠の順により二萬字表を示してある。これを康熙字典の
二百十四の部首を有し、字書を一々數へる煩を避けしめようとしたものである。

假名に關しては萬葉集の全譯を試みてゐるピアソン (J. L. Pearson) は昭和四年にアジア協會雜誌に
On the transliteration and transcription of the Japanese Kanji, archaic ancient and modern
を發表し、萬葉用字論として參考に供へようとしたものである。

この他ウエングステルンやノホットの日本書史を繕いてみると、外人の種々の研究が澤山に載つてゐ

るが、今一々擧げることをしてない。九大の吉野義雄氏が言語研究に載せられた歐人刊行日本言葉彙編書にも参考とすべきものが多く載つてゐる。今一々説かない。

結 語

國語學の發
生

對譯訓義と
眞假名

片假名・平
假名の發生

以上の記述を終へるに方り、今更に回想すれば、我が國語學の胚芽は遠く二千餘年の昔に發生したことは疑もない。然しそのかみの言葉は録音してないから、今は確かにそれと知るよしもない。漢字の渡來は上代人に喜ばれ採用されたが、彼我國語の性質を異にするので、その對譯に心を碎いたことは、吾人の想像以上であつたに違ひない。斯くて漢字の形音を借つた眞假名を始めて工夫し、また音にたよらないで意義をあらはす爲に訓義を案出した。我が漢字史や漢字々典の萌芽はこゝに根ざしたのである。上代の金石文字や二紀及び萬葉集はそれらの資料をゆたかに提供する。支那南北の字音や古音は音博士の招聘によつて時に是正されたであらうが、次第に我が國の音になつていつたと思はれる。

その後儒家や僧侶が漢籍・佛典を讀む爲に字の一部分を割截して標記に用ゐた片假名は次第に簡易化せられ、優美を尚び、國風を示す爲には平假名が創成された。こゝに音標文字の案出は輝かしい平安朝文學を産出せしめた。やさしい宮廷の女房詞を澤山に含んでゐる中古の語法は、それらの文學中に夥し

添疊學と反

五音相通説

點 圖

假名遣問題
往來物に見
るが如き新
語彙

切字の法
連歌から來
た語法

く織りこまれてある。東國の方言が京畿の言葉と異るのは勿論、奈良の都から平安の遷都に於てすら音韻・言語の著しい變化を來した。こゝに音聲學に屬する資料は數多く與げ得られる。乾菴の如き古語と生々しい新語の交錯が見られる。そこに古典解釋學が開かれ、その説明には學問僧によつて將來された悉曇學や音韻反切の智識で言語の轉訛、音韻變化の原理を説かうと企てられた。その爲に五十音圖が成り、五音堅横の相通説などが切りに唱へられた。平安朝ばまた歌會や歌合が流行して作歌の爲に言語の選擇、表現の方法がこゝろしく論究された。爰に歌學の爲の語學が発生した。今日より云へば、表現學の素となるべきものが少くない。儒家並びに僧侶が經典を讀習する爲に家々人々よりこゝに用ゐ來つた點圖は、言語の分類特にテニハの名目を生じ、次第にその使用法を論ずることが起つた。

武門政治が起り、東方の武士が京都をかためるに及んで、東西言語の混合を來し、音韻・語法共に一層の變化を生じた。こゝに假名遣問題が吟味されて、定家行阿假名文字遣が生じ、僧侶が文學を味讀し創作することが盛んになつて漢語彙が著しく増大し、中古の諸法はくづれそめ、漢語や往來物その他に見るが如き新語彙も増して來た。盲法師によりて語られた平語が一般に嗜まれ、「奉つける」・「詠みてんげる」・「何々ばし」等の如き新しい語法が始まつた。和歌に代つて連歌が盛んになるにつれ、言葉が小刻みに用ゐられ、切字の法が喋々せられ、「ぞかよ」のことゝか、七つの「や」の次第などがこゝろしく説かれ、語感がきびしくなり、體用を分ち、附け味を論じ、爰に連歌に於ける語學がすばらしい力を

秘傳的學問
の殻が破ら
れた

以て擴がついて、細かな特殊の語法論が組織された。

然もこれらの語學は一方に於ては學問技藝の世襲と一方に於ては世の戰亂の爲にやうやく傳授・秘授のことが起り、學問は次第に衰頹してしまつた。これが元祿以前の大勢である。

富士谷成章
の劃期的な
語學說
本居宣長
呼應の法則
音韻を明か
にし音圖を
正す
用字法の考
察

下河邊長流について圓珠庵契沖出づるに及び、從來の學問の專賣的秘傳的の堅い殻を破つて古學研究の道を聞き、歴史的假名遣が樹立され、一方に古典解釋學が鬱然として起つて來た。漢學者の間からは語源學者が出た。新井白石が語源や文字の上に遺した功績は中々すばらしいものである。遂に明和・安永に至り、斯道の天才富士谷成章が出て組織的頭腦を以て歌の上から歴史的文法を創立した。言語があるがまゝに系統を立てゝ分類した。現代語との相關をも考へた。表現の上をも案じた。茲に國語學のめざましい進展を劃した。時を同じくしやゝ後までも存へて古典學を大成した本居宣長は歌の上下の呼應法から考へ、上代散文の上にもこれが方則の存在を明かにし、その軌範を立て、また音韻の上にも意をとゞめ、漢字三音考・字音假字用格を著し、音圖の「お」「を」の所屬を是正し、古事記の用字法を考へ、活語の同系ものを彙類するなど、後の學者に甚大な示唆を與へた。日本精神の昂揚と共に國語學界にすばらしい影響を及ぼした。

本居語學の
能繼者

この二大人の後をうけてすぐれた語學者が輩出した。文法や音聲學や言語起原論に先鞭をつけた鈴木腹や、語の活用を決定した本居春庭、その門から出て幾多の良著を遺し、本居家の語學を完成した東條

方言辭書

義門、その他玉の緒學者・八衢學者の末流は數へもつくされぬ程で、これに對し、俳諧者流からかたこと、物類稱呼の如き方言辭書も出で、これが言語の大きな枝川となつて後に流れた。雅語・俗語大小いろいろの字典も續刊され、その前後には百科字典の如きたぐひも出た。

西洋流の文法

江戸幕府の末期は内外の物情洶々たる爲にすべての學藝は振はなかつたが、蘭學の流行より延いて國文典の上に西洋流の分類が試みられるに至つた。當時既成の國語學界からは注目しなかつたが、王政維新の後に至りては、英米の文法は蕩々として舊時の文法界を壓倒する形勢を馴致した。

國語國文改良問題

標準語問題

明治維新後は夙より國語國文改良問題が擡頭し、假名・ローマ字・新字論が識者の間に論議され、これと共に漢字節減・言文一致・文體改良問題が叫ばれた。前島密・南部義籌・山田美妙・外山正一・矢野龍溪等の人々がそのトップをきつた人、もしくはその熱心な主張者で、中にも美妙齋は明治十九年に夙くも言文一致を以て創作を試みた。三十七八年の交には上田萬年博士が標準語問題を提げて國語の改善を獅子吼し、それらの研究調査機關が帝國教育會等に設けられ、國字改良の請願が帝國議會に提出され、終に文部省は國語調査會を設けて委員を定め、調査方針を決定し、若々その進行を見るに至つた。明治の初期に教育令が布かれ、その教科目を定め、小學校に文法科を置かれた爲に幾多の文典が雨後の筍の如くに續出した。それらの中には舊來の型によるもの、洋文典に則つたもの、折衷的なもの様々であつたが、後辭書編纂に與つてゐられた大槻文彦氏が、辭書編纂の爲にものせられた語法指南は出色の

文 典

もので、後それを改定して廣日本文典となし、明治時代の文法界に範を垂れたことは今も記憶せられる事である。

上田博士

國語調査會

その事業

文部省は上田博士の主張に基き小學校に於ける假名遣改定問題に着手し、また關根博士の提出した語法私見をとりあげ、文法許容案を出したが、後その改廢されたことは我等の現實に遭遇したことで、それらの問題は今も識者の間に深き關心をもつところ、文部省に於ける國語調査會は多くの學者を集めて研究調査に従事せしめ、その業績の見るべきものが多きに拘らず、後帝國議會でこの機關が廢止せられるに至つたのは惜しみて餘りあることである。その業績は今茲に繰返すことを避けるが、音韻並びに方言の調査、口語文典の編纂、假名沿革資料の拾遺、疑問假名遣の編纂、平家の語法等學會の據とすべきものが少くない。またこれらの事業に従事した委員や補助委員や囑託の人々が、その後斯界の權威となつて斯道に活躍されたことは皆人の知るところである。

廣日本文典の後、草野清民氏が總主説を唱へて學界の議論を惹起し、岡澤鉦次郎氏が日本文典原理の如きむづかしい本を出したり、金澤博士が朝鮮語と比較した、文法論や文法新論を公にし、大槻博士が國語調査會で口語法及び同別記を執筆され、それと前後して松下大三郎・保科孝一・吉岡郷甫その他の人々が口語文典に指を染められたことは、維新前には殆ど顧みられなかつたことで、これにつれ諸國の方言語典や方言辭典が小規模ながら世に現れたことも認めなくてはならぬ。

口語法

國語調査會
に關係の人々

國語調査會に關係をもつた人々の中、大矢透博士が假名や音韻の上に築きあげた金字塔は永く後に傳はるべく、山田孝雄博士が日本文法論を完成して廣日本文典の壘をくつがへし、奈良朝文法史・平安朝文法史・平家物語の語法等我が歴史的文法に大きな寄與をされたことも皆人の知るところ、新村出博士がグリムやイエスベルゼンを紹介され、南蠻の日本語研究を紹介され、東北方言の地位を論じ、足利時代の言語を説かれたことも忘れてはならぬ。保科氏が國語政策に一生を捧げられてゐることも貴いことである。岡倉山三郎以來藤岡勝二博士、新村博士その他の先輩が言語學の智識を以て國語の新しい扱ひ方を行はれたことも世の知るところであらう。民間の學者大島正健氏が音韻や韻鏡等の上に盡されたことも記憶せらるべきであらう。また吉澤義則博士が平古止點や訓法の上に努力をつゞけられ、幾多の研究を發表されたことも隠れもない事實である。

大正から昭和にかけて新舊の學者が出て、新しい研究を發表されたことは數へきれない程であらう。

中に辭書の王ともいふべき上田萬年・松井簡治氏の大日本國語辭典の第一卷の出たのが大正四年で、同八年に第四卷が出、昭和三年に索引一卷が成つた。今修正版には更に八萬語を加へられるといふ。落合直文の原著ことばの泉の芳賀博士によつて改修され、日本大辭典言泉の第一卷が出たのが同十年に始まり、昭和四年で完成した。大槻博士の大言海の出たのは昭和七年から十年に互つてゐる。漢字典も服部小柳兩博士の詳解漢和字典、榮田猛猪氏等の大字典が、昭和五年と六年とに出た。高田忠周の古篇篇

辭書史

代表的な文法

百卷の出たのは昭和十一年で、柳田國男氏の山村語彙、産育習俗語彙、送葬習俗語彙、農耕語彙、歳時習俗語彙、居住習俗語彙の刊行されたのは昭和七年以降のことである。その他近松語彙等特殊なものも出た。各種専門語の字典の出たのもこの時代を多しとする。辭書史としては上田萬年・橋本達吉氏の古本節用集の研究が傑出したもの、近來岡田希雄の辭書史に關する有益な小論文が雜誌に載せられてゐる。大正の末から昭和にかけての文典はその數が多く、國學院大學の松下氏・松尾氏の浩瀚な著作があり、三矢博士の門下安川喜代門氏も新しい文典を出した。山田孝雄博士はこの期に至りては幾多の文法書を出し、多少舊説を改められてゐる。細江逸記氏の相や時の研究は小論文ではあるが、斬新なものがある。佐久間鼎博士の現代日本語の表現と語法など新味に富んだもので、將來いかに進展されてゆくかが矚目に値するものがあらう。

方言の研究

昭和になつて方言の研究の盛んになつたのは東條操・柳田國男兩氏の指導によることが鮮くない。東條氏の方言地圖や方言手帖がこの道に入る人の手引となつたことはいふまでもない。蝸牛考の名を知らぬものは稀であらう。この年方言學會の設立が所々に起り、雜誌方言が百號を重ね、言語誌叢刊の出版を見るに至つたことは、維新前の人々などの夢視しなかつたところであらう。南島方言資料や豊岐方言集や荏内・岩手方言集はいふまでもなく、各地の方言集の月々に上版するものが數へきれない程であり、民俗語彙や方言と方言學の如き新しい著述が續々と出たのは、恐らくは前後無比であつたであらう。方言辭典

の完成があまり多くの年を重ねないで出版されることを期待してゐる。また標準語と方言とが如何なる調和を見るか、或は甲地の方言が乙地の方言とどの程度まで融合すべきか永き眼で見るべきであらう。

アクセント
の調査

アクセントの調査に文部省が手を入れたのは大正になつてからのことで、最初は東京語に於けるアクセントを調べ、型を示したに過ぎなかつたが、熱意ある人々により地方特有のアクセントの調査も進められ、種々の型が明かになつた。この方面に大きな業績を挙げられたのは佐久間博士及び神保格氏を倡首とする。大正十五年に音聲學協會が生れてからアクセントばかりでなく、音聲の研究が科學的の進歩を見るに至つた。協會の雜誌は斯學の日進月歩の状を表示するが如く、その論文集には有益な研究が満載されてゐ、カイモグラフやオックスログラフの實驗を進められたり、内地方言アクセント境界線を決定するに至つた。この實地踏査が生きた言語の實體をつかみ得た結果である。

國語學史

國語學史は吉澤博士を始め、山田博士・伊藤愼吾・重松信弘・時枝誠記等諸氏の著作が出版されてゐる。その中には古に重きを置いたものがあり、近代・現代に力を注いだものもある。從來の如き著書の解題や傳記を省きて學の展開を旨とする傾向が從來とちがつて一般に濃厚になつて來た。言語意識の如くによつて取材内容に相當のひらきが生じて來る。山田博士の如く國民の自覺によつてなされたものを取るべきは勿論であるが、外人の日本語研究は國語學研究と切りはなさねばならぬかは一つの問題であると思ふ。它山の石として取扱ひたい氣持は誰もあると思ふ。また大正・昭和時代の研究はまだ未成品

のもの、なま／＼しいもの、自家のうへ、知友の著作に忌憚なき批評や宣傳は憚られるが、近いところ
に觸れないときは日進月歩の勢が分らないと思ふ。而して思想的背景から眺めるもの、文化史の一部
として考へるもの様々ある。併し啓蒙的には解題を加へる必要もある。國語學史の一部門を深く掘りさ
げて一篇となしたのも、近來漸くあらはれるに至つた。大矢博士の音圖並手習歌詞考の如き、山田博
士の五十音の歴史の如き、木枝増一氏の假名遣研究史の如き、上田・橋本兩博士の節用集の研究の如き
(字書史として) 國語學史の中に編入さるべきであらう。

國語學の内容を基礎づける國語史の研究はまづ起るべきであるが、國語學史に後れて世にあらはれた。
これは一見不可思議のやうであるが、事實がこれを物語つてゐる。その時代的區分は明治諸家によつて
立説されたが、一々具體的に實例を摘出し、その變遷を示すことは容易でない。近來は一語につきて、
例へば「デス」の語史であるとか、「おます」の語史といふ如く、一語の用例を資料を拾つてその變化を
あとづけることが漸次起つて來た。比類が多く出で、それを統合し、その變化・發展を考へてこそ完全
なる國語史は出來るのである。安藤正次氏が、國語の形成・發達・混亂・分化によりて時代を分つたの
も一の見方である。

吉澤博士が昭和六年に出された國語史概説はこの類の最初のものである。近年講座が盛んに行はれる
に及び、國語史を幾つかの時期に分ち、數人の學者に分擔せしめることが盛んになつた。一人で各時代

に互る研究が容易でないから、深く掘りさげた研究には數人の力を用ゐ、これを綜合せしめる用意が見える。尤も序説は別に説く人はあるが、各人の研究をまとめるまでにまだ至つてない。

明治書院の國語科學講座に上古・中古・近古・近世の四期に分ち、一期に二人づつ擔當者を定めて執筆を請ひたる如きこの適例である。中に土井博士の近古篇はロドリゲスの日本文典の如き倔強な資料を十分に利用し、室町時代の言語現象を詳述したるはその人を得たるもの。佐藤鶴吉氏の近世篇はその資料を研究する方をとつてあるが如く、諸家の研究態度が窺はれる。

刀江書院の
國語史

刀江書院の發行した國語史は十二卷の豫告であつたが、金田一博士の國語系統篇、安藤氏の國語史序説、佐伯梅友氏の上古篇、湯澤氏の近世篇、山田博士の文字篇、柳田氏の新語篇の六篇を出したぎり、他の六篇は今に刊行されない。すぐれた研究もあるが、未完のまゝであつて、系統的に見ることが出来ない。今後大いに開拓せらるべきであらう。

ラヂオ放送

國語學の普及の爲にラヂオ放送を開始したのは昭代の慶事であるが、國民をして倦まないやうにするには講師と題目との選擇が大切である。創始の頃はともかく、歳月をかさねた今日は特にその感が深いことは論ずるまでもない。このことばの講座は大衆的であると同時に新味を帶び、その研究は中核に觸れなくてはならない。これに對し飽くまでも學術的を要とする語學講座は近年はいよゝ盛んになつたのは喜ばしいことで、明治書院の國語科學講座には各種の問題を包括してあり、その數は七十二に上

つてゐるが、新しい題目には深みの乏しいものも混つてゐる。その新たなものの中に、フランコ・ス
イス學派の眞を傳へたものは大いに若い學徒に喜ばれたことはいふまでもなく、表現學・解釋學・言語地
理學・文體論等がその前後より大いに盛んになつた。この方面に力を注いだ、小林英夫・垣内松三・石
山脩平・城戸幡太郎諸氏の努力が認められる。その前後に成つた日本言語學會・日本方言學會等が日を
追うて盛んになり、指導的に立たうとするのは喜ばしいことである。吾人は新進氣鋭の學徒が研鑽を
怠まず、我が國語學の完成を圖り、萬邦無比の國家の隆昌を冀ふと共に斯學をして外國に範を垂れる
に至らむことを希望して止まざるものである。

國語學史 尾

年

表

聖代年表

推古天皇

十二年 憲法十七條を撰せらる

佛像光背銘

孝德天皇 大化元年 僧旻國博士となる

天武天皇 十年 境部石積等新字四十四卷を撰す

文武天皇 大寶元年 大學國學の制備はる

元明天皇 和銅五年 古事記成る

六年 風土記撰進の命下る

元正天皇 養老四年 日本書紀撰成る

楊氏漢語抄成る、日本紀私記一

卷成る

聖武天皇 天平五年 出雲風土記成る

光仁天皇 寶龜三年 藤原濟成の歌經標式成る

桓武天皇 延暦十六年 續日本紀成る

平城天皇 大同二年 古語拾遺成る

嵯峨天皇 弘仁四年 多人長の日本紀私記成る

十一年 空海の文筆眼心抄成る

十三年 日本靈異記成る

聖代年表

淳和天皇 天長五年 空海絲織種智院を開く

仁明天皇 承和二年 空海寂す

六年 菅野高平日本紀私記を撰ぶ

陽成天皇 元慶二年 善淵變成日本紀私記を撰ぶ

四年 菅原是善(東宮朝諱の著者)纂す

宇多天皇 寛平四年 新撰字鏡草稿成る

醍醐天皇 延喜四年 藤原春海日本紀私記を撰す

五年 古今集成る

十八年頃 本草和名成る

朱雀天皇 承平年間 源順の倭名類聚抄成る

六年 矢山部公望の日本紀私記成る

冷泉天皇 康保四年 橘仲遠の日本紀私記成る

圓融天皇 永觀元年 源順卒す

一條天皇 長徳四年 藤原佐理纂す

後一條天皇 長和元年 類聚名義抄成る

堀河天皇 嘉承元年 間 反音作法成る

鳥羽天皇 元永元年 藤原仲實卒す

鳥羽天皇	保安元年	藤原教隆卒す
近衛天皇	康治元年	藤原基俊卒す
六條天皇	永萬元年	藤原範兼卒す
高倉天皇	治承元年	藤原清時卒す
後鳥羽天皇	文治元年	袖中抄、顯昭の古今集註成る
土御門天皇	建久元年	上覺の和歌色紙抄成る
	建仁二年	千五百番歌合
順德天皇	元久元年	藤原俊成薨す
		八雲御抄御撰
後堀河天皇	嘉祿元年	慈圓歿す
四條天皇	仁治二年	藤原定家薨す
後嵯峨天皇	寛元三年	宇鏡集成る
龜山天皇	文永六年	仙覺萬葉集註を著す
後二條天皇	正安三年	釋日本紀成る
後村上天皇	興國二年	麒麟抄成る
	正平四年	連理秘抄成る
	二十二年	神代卷口訣成る
長慶天皇	文中元年	連歌新式撰成る

年 表

長慶天皇	文中三年	二條良基の知迎抄成る
	弘和元年	仙源抄成る
後龜山天皇	元中五年	二條良基薨す
後小松天皇	應永十三年	言鹿集成る
後花園天皇	文安元年	下學集成る
	三年	鑑彙抄成る
	五年	朝山梵灯庵歿す
	享德三年	撮環集成る
後土御門天皇	文明七年	心敬寂す
	十三年	一條兼良薨す
	十五年	手爾葉大概抄之抄成る
後柏原天皇	文龜二年	飯尾宗祇歿す
	永正元年	姉小路基綱薨す
後奈良天皇	天文六年	三條西實隆薨す
	十七年	運歩色葉集成る
正親町天皇	弘治三年	宗碩の藻汐草成る
	元龜元年	姉小路家天仁葉抄成る
	天正八年	無言抄成る

年表

聖代年號事項

後陽成天皇 天正十九年 節用集標本刊

慶長二年 匠材抄跋

三年 岷江入楚成る

七年 紹巴歿す

十三年 立圃のはなひ草成る

十五年 細川幽齋歿す

後水尾天皇 元和八年 春樹顯秘抄成る

寛永二年 八雲御抄刊

てには大概抄刊

後光明天皇 正保二年 松江重頼の毛吹草成る

慶安元年 障葉集刊

同 鱧重常の春雨抄刊

三年 安原貞室の片言成る

四年 俳諧御衆刊

承應二年 松永貞徳歿す

後西天皇 明暦二年 願空世話盡刊

三年 林道春歿す

五五四

聖代年號事項

後西天皇 萬治三年 源氏目安刊

寛文二年 松永貞徳の和句解刊

靈元天皇 五年 詞林三知抄刊

六年 類字假名遣刊

十年 枕詞燭明抄刊

延寶元年 和歌吳竹集刊

歌道秘藏錄刊

三年 湖月抄刊

四年 一步刊、假名字例刊

天和二年 永井如瓶の通言便蒙抄刊

貞享二年 源偶篇成る

本朝世諺俗談(松浦默)刊

東山天皇 四年 萬葉代匠記成る

元祿元年 整頭節用集刊

二年 萬葉代匠記精標本成る

四年 初心假名遣刊

五年 萩の葉成る

東山天皇 元祿七年 具原好古の和爾雅刊

八年 和字正濫抄刊、蜆縮涼鼓集刊、

世話重寶記刊

九年 倭字古今通例全書刊

十年 倭字正濫通妨抄成る、濱のまさ

ご刊、萬葉假名遣刊

十一年 倭字正濫要略成る、梨本集成る

十二年 和字解成る

十三年 和歌八重垣刊、梨本集刊、日本

釋名刊

十四年 契沖寂す、諺草刊

費永二年 北村季吟歿す

三年 戸田茂睡歿す、持明院基輔の能

書假名遣刊

五年 和歌禁忌遠慮の辨成る、書言字

考刊、佐々井祐清の假名遣拾芥

抄刊

中御門天皇 正徳年間 同文通考成る

年 表

中御門天皇 正徳四年 具原益軒歿す

享保二年 新井白石の東雅成る

四年 東音譜成る

十年 新井白石歿す

櫻町天皇 元文元年 荷田春滿歿す、有賀長伯歿す、

南留別志刊

桃園天皇 延享四年 豐光韻鏡刊

寛延元年 日本書紀通證成る

寶曆二年 和訓類林成る、三音正韻刊

四年 和字大觀抄刊、和歌童歌抄刊

七年 冠辭考刊

十年 手爾乎波義韻抄成る

萬葉考成る

後櫻町天皇 明和元年 以呂波間辨刊

二年 古言梯刊

四年 挿頭抄刊

六年 誦意考成る、賀茂眞淵歿す、古

今集助辭分類刊

年表

聖代年號事項

後桃園天皇 明和七年

てには綱引綱刊、楳取魚彦の續冠辭考成る

八年 天爾遠波逆鏡刊

安永元年 以呂波音訓傳刊

二年 脚結小鈴成る、深澤薫の類聚冠辭略解成る

三年 上田秋成の也哉抄

四年 物類雜呼刊、字音假字用楷成る、

服部高保の續冠辭考成る

五年 谷川士清歿す

七年 脚結抄刊、神國神字辨論刊、駭

以呂波間辨成る

八年 富士谷成章歿す、詞玉緒成る

光格天皇

蜘蛛のすがき刊

天明二年 御國詞活用抄成る、楳取魚彦歿す

三年 異名分類抄刊

聖代年號事項

光格天皇 天明五年

漢字三音考刊

七年 呵別腹成る

八年 蘭學積初刊、正誤假名遣刊

寛政元年 和歌成詞考刊

四年 詞葉新雅刊、新和歌政名草刊

五年 歌袋刊、和歌補刊

六年 吟草辨乃夷則成る、古言清濁考成る(享和元年刊)

八年 冠辭考續貂成る、振分箋刊

九年 電語通假字篇刊

十年 古事記傳成る、假名遣奥山路成る

石上刊、みやびこと玉かつら刊

十二年 地名字音轉用例成る

享和元年 雅語音聲考成る(文化十三年刊)

本居宣長歿す、假字大意抄成る

二年 雅俗辨成る

光格天皇 享和三年

讀雅俗辨、雅俗再辨成る、活語斷續譜成る

文化二年

北村久備の呂爾邊波考成る

三年

詞八衢成る(文化五年刊)

四年

俳諧天爾邊抄刊、雅言假字格刊

六年

上田秋成歿す、萬葉集見安補正刊

刊

八年

村田春海歿す

十年

古今假字つかひ刊

十一年

雅言假字格拾遺刊、訂正蘭語九品集刊、六格前篇刊

十二年

漢吳音圖成る、指出の磯成る

(天保十四年刊)、和蘭語法解刊

十三年

蘭風凡成る

高田與清の仙覺字類及び竟究音

家字類成る

仁孝天皇 文政元年

萬葉用字格刊

二年

神字日文傳成る、古史微開題記

年表

仁孝天皇

刊、てにをは倭文幸環成る

文政三年

磯の洲崎成る(天保十四年刊)

四年

増補古言梯標註成る、塙保已一歿す、雅語譯解刊

歿す、雅語譯解刊

五年

據字造語抄、萬葉枕詞解成る

六年

富士谷御杖歿す、友鏡刊

七年

言語四種論刊、清水濱臣歿す

八年

皇國之言靈成る

九年

詞玉橋成る(弘化三年改訂)、歌

詞考成る

十年

箋註倭名類聚抄成る、於乎輕重

義成る

十一年

詞通路成る、本居春庭歿す、文

教温故刊

十二年

古言衣延辨成る、詞玉釋刊、太

田全齋歿す

天保元年

嬉遊笑覽成る、語學九品九格總

括圖式刊、石川雅望歿す

年 表

聖 代 年 號 事 項

仁孝天皇 天保二年 語學新書成る(天保四年刊)

山彦冊子成る(天保十年刊)

四年 和語說略圖刊、應譯考成る、山口

栞成る、言靈のしるべ成る

五年 儲字例成る(天保十三年刊)、言

靈或間成る

六年 男信成る(天保十三年刊)、助辭

本義一覽(天保九年刊)、雅言成法成る、狩谷棧齋歿す

七年 山口栞刊、言葉の正みち成る

八年 鈴木腹歿す、古言譯通成る

九年 詞の緒環刊、鍼囊成る、饒木文字考成る

十年 古史本辭經成る(嘉永三年刊)

十一年 活語指南成る(天保十五年刊)、

關政方の聲調篇成る、神字小考成る

聖 代 年 號 事 項

仁孝天皇 天保十

十三年 活語雜語刊

活語餘論成る

十四年 東條義門歿す、平田篤胤歿す、

玉緒末分櫛成る(弘化二年刊)

弘化元年 稜威道別成る、活語四等辨成る

二年 語學捷徑刊

孝明天皇 三年 伴信友歿す、活語初の栞刊

四年 稜威言別成る、石上枕辭例、三代枕辭例成る、てにをは係辭辨

成る(嘉永二年刊)、増補古言梯

標註刊

嘉永元年 嘉定刪定神代文字考成る

二年 橋守部歿す、さよしぐれ刊

三年 假字本末刊

四年 櫛の囀手刊、高橋殘夢歿す、古

言譯解刊、祝詞講義成る、詞玉緒増補成る(嘉永七年刊)

孝明天皇 安政三年 足代弘訓歿す

四年 活語自他捷略刊、活用雜俗風諺

辨成る、辭格考抄本刊

五年 萬葉集古義成る(明治十年刊)、

鹿持難澄歿す

六年 鶴峰戊申歿す

萬延元年 字音假字用例刊

文久二年 音韻考證成る、古學傳考成る

三年 鈴木重胤歿す、増補雜言集覽成

る

四年 中島廣足歿す

明治天皇 慶應三年 言靈妙用論成る

明治元年三月 五ヶ條の御誓文(十四日)

七月 江戸を東京と改む(十七日)

八月 即位の大典(二十七日)

九月 明治と改元(八日)

玉緒縫添刊、開成所復興、獨人

ホフマンの日本文法發行

年 表

明治天皇 明治二年二月 新聞紙發行を許す

四月 柳川春三、布告文に假名文を用

ふることを建白す

五月 南部義繁の修國辭論

前島密・國文教育之儀に付建議

明治三年 福羽美靜寫西周の日本語典稿本

明治四年七月 文部省設置

十一月 文部省編語彙の部、語彙別記

發行、アストンの簡易日本口語

法(英文)發行

明治五年五月 東京に師範學校を設く

六月 ホイットネー・國語一變の不可

を論ず

七月 田中義廉外三名に新撰字書を編

せしむ

八月 學制頒布の詔(三日)

九月 アストンの日本文語法發行

明治六年二月 前島密・まいにちひらがなしん

年表

聖代年號事項

明治天皇

ぶんを發行

八月 福澤諭吉の文字の教發行

十月 黒川眞頼の皇國文典初歩發行

馬場辰猪の英文初等日本語典發行

明治七年七月 田中義康の小學日本文典發行

明六雜誌にローマ字論出る

明治八年七月 佐藤誠實の語學指南成る

九月 渡邊修次郎・國文を簡易にすべきことを建議す

明治九年三月 中根淑の日本文典發行

六月 文部省のローマ字の掛圖發行

明治十年六月 堀秀成の日本語學楷槓發行

八月 里見義の雅俗文典刊

十月 東京橫濱電話試驗

明治十年一月 柳原芳野の文藝類纂刊

七月 物集高見の初等日本文典發行

聖代年號事項

明治天皇

那珂通世・千葉師範學校にて發音的新假名を授く

明治十三年 十月 學士會院日本文法書編輯の議を定む、佐藤誠實の語學指南、ア

ストンの日鮮兩語比較研究（英文）發行

明治十三年 一月 大矢透の語學指南發行

二月 加藤弘之・博言學研究の爲留學生を出す事を建議

明治十四年 五月 文部省語彙い・うの部發行

二月 文部省留學活語指掌發行

十二月 東京學士會院雜誌に假名説を載す

明治十五年 四月 東洋學藝雜誌・矢田部良吉の羅馬字説

明治十六年 五月 かなのみちびき發行

七月 官報創刊、かなのくわい成る

明治天皇

明治七年 七月

同會かなのまなび發行
かなのしるべ發行

八月

三宅米吉・同誌に言文一致の必要を説く

十月

神田孝平・學士會院雜誌に言文一致論

十二月

外山正一・ローマ字會創立、谷千生の言語構造式發行

明治八年 一月

平岩愼保・六合雜誌に神代文字を國字とする説

六月

羅馬字會より雜誌發行
田中館愛橘・理學協會雜誌に羅馬字意見

八月

近藤眞琴のことばのその發行

十二月

權田直助の語學自在成る
井上馨・羅馬字會にて文法編纂の急務を説く

明治九年 一月

矢野文雄の日本文體文字新論發

年 表

明治天皇

七月

行、物集高見の言文一致發行
かなのしんぶん・かなのてかゞみと改題

九月

帝國大學に博言學科を置く、
チェンバレン教授

十一月

末松謙澄の日本文章論發行
大槻文彦譯の言語篇(ウイリアム・チェンバーのエンサイクロ

ペデア)

明治二十年 四月

チェンバレンの日本小文典文部省發行、濱田健次郎の言語哲學

發行

五月

中村正直・漢字不可廢論を説く

七月

二葉亭の浮雲發行
權田直助の國文句讀考發行

十月

假名學校開校
大學紀要にチェンバレン・アイヌ研究より見たる日本言語・神

年 表

聖 代 年 號 事 項

明治天皇

明治三十二年三月

語及び地名の研究、谷千生のチ
エンバレン日本小文典批評
かなぶんのかきかた發行

四月

末松謙澄・かなのくわい大會に
於て言文一致の著作をすゝむ

五月

始めて學位を授與(七日)

八月

山田美妙の夏木立發行

九月

西村茂樹・學士會院雜誌に言文
一致は文學に益なしと説く、三
宅米吉・雜誌「文」に言文一致論

十一月

言語取調所創立、チエンバレン
の日本口語文典(英文)發行

明治三十二年四月

落合直澄の言文一致(皇典講究
所講演)

五月

大槻文彦の言海發行

六月

パチュエラーのアイヌ英和三對辭
書發行

五六三

聖 代 年 號 事 項

明治天皇

十月

大日本教育會の總會に小學校に
國語の一科を設ける議提出

明治三十四年五月

言語取調所より言語を發行、坪
井九馬三・普通文に漢字を排斥
すべき説を載せる

十月

教育勅語下る(三十日)、言語取
調所書籍を帝大に寄附

十一月

日本訓旨點字に石川倉次案採用
岡倉由三郎の日本語學一般發行

十二月

東京横濱間電話交換(二十六日)
ランゲの日本口語教科書(獨文)
發行

明治三十四年一月

井上哲次郎・ローマ字採用の必
要を説く

三月

かなのでかぶみ五七號・カタカ
ナトヒラカナ

六月

佐藤寛・國文學に國語會話

明治天皇 明治三五年七月 山田美妙の日本大辭書發行

九月 イビー氏のローマ字鳩翁道話發行

明治三六年七月 第一高等學校にて國語講習會を開く、井上文部大臣講話（梧陰存稿）、小中村清矩同上（陽春廬雜考）

十月 福地源一郎・國民之友に明治今日の文章

十一月 加藤弘之の小學教育改良論

明治三七年四月 井上哲次郎の文字と教育との關係（東洋學藝雜誌第五百一十一號以下）

六月 物集高見の日本大辭林、伊澤修二・大日本教育會總會にて加藤氏の小學教育改良論を駁す（同會誌第五百十二號）

八月 清國に對し宣戰の詔勅下る

年 表

明治天皇

十一月 國學院雜誌創刊

十二月 上田萬年・太陽に歐洲諸國に於ける綴字改良論を説く

明治三六年二月 帝國文學創刊、同誌上田萬年の標準について

四月 日清講和、三宅雄二郎・太陽に漢字利導説、早稻田文學（第八十六號）關根正直の語法私見、坪内雄藏・同誌に新國文法論新國字論

五月 上田萬年・大學通俗講談會で新國字論、木村麗太郎の日本文字改良案（教育時論）

六月 臺灣總督府開應、元良勇次郎の縱讀横讀の利害に就て（東洋學藝雜誌）、岡倉田三郎の新國字論（帝國文學）

十月 岡田正美の漢字全廢論（帝文）

聖代年表

明治天皇

十二月

上田萬年の國語のため發行、菅沼岩藏の文字文章改良論

チェンバレンの琉球語の語彙と

語法の研究(英文)

明治三十九年三月

峯原平一郎・岡田正美の説を駁す(國學院雜誌)、尾崎紅葉の多情多恨(讀賣)

四月

四月

藤岡勝二の言語學上文學の價值(帝國文學)

五月

五月

岡田正美の自然假名遣法(國院)

十一月

上田萬年・國家教育社で初等教育に於ける國語教授に就いて

明治三十九年二月

大槻文彦の廣日本文典同別記刊

上田萬年の國語會議の必要(教育時論)

七月

七月

金澤庄三郎のことばのいのち

九月

帝大に國語研究室を設く

聖代年表

明治天皇

十一月

佐村八郎の國語解題第一分冊

十二月

小中村清矩の陽春賦雜考發行

幸田露伴の水上語彙

明治三十九年三月

保科孝一の方言に就て(帝文)、保科孝一譯の言語發達論

三月

白鳥鴻幹の新國字論發行

四月

朝比奈知泉の今後の文字文章(東京日々)

五月

五月

東大に言語學會を創立

七月

落合直文のことばの泉發行、加藤・上田・井上・嘉納・矢田部氏等國字改良會を創立

八月

上田萬年・金澤庄三郎の言語學(セイスの原著)

九月

井上哲次郎の國字改良論(太陽)

十月より

樋口勸治郎・小西信八・湯本武

北吉の教育童話九冊

北吉の教育童話九冊

大島正健の支那古韻考・音韻漫錄

明治三年二月

衆議院國語調査會設立の豫算を否決、三矢至松の口語の研究

(國學院雜誌)

三月

大矢透の國語溯源發行、宮田修の通俗言語學發行

四月

重野安繹の常用漢字文(學士會院)

五月

原敬の漢字減少論(大阪毎日)

六月

高橋順次郎の國語改良論に就て

八月

保科孝一の國語風小史

文)發行

明治三年二月

辻帝國教育會長より國字國語國文の改良に關する請願書を各大

年表

臣並びに兩院議長に提出、同國字改良部より國字改良請願書を同様

二月

議會は調査會設立を可決、言語學雜誌發行、井上圓了の漢字不可廢論發行、保科孝一の言語學大意發行

三月

帝國教育會内に言文一致會設立

四月

文部省前島密外六氏に國語調査委員を囑託

五月

自治館國語改良異見發行、北清事變起る

八月

石川倉次の明育共通字(教育公報)

文部省小學校令施行規則改正、假名の字體を定め、字音假名遣を發音的とし漢字を二千字に制限す(二十一日)

報)

文部省小學校令施行規則改正、假名の字體を定め、字音假名遣を發音的とし漢字を二千字に制限す(二十一日)

限す(二十一日)

限す(二十一日)

限す(二十一日)

聖代年號事項

明治天皇

十月

獨人ゲルストベルガーの日本新國字案教育公報、國字改良部總會、假名の字體及び假名遣決定

十一月

文部省・羅馬字會書方取調委員の調査報告を發表

國字改良部幹事會ローマ字書方を議す、フロレンツ及びチェンバレン・文部省のローマ字綴方を評す(言語學雜誌)、小澤政胤の國學家略傳

明治三十五年一月

國字改良部總會、ローマ字綴方決定

三月

言文一致會の建議兩院を通過、赤堀又次郎の國語學叢書

四月

松下大三郎の日本俗語文典發行、國字改良部は漢字節減の標準を

定む

聖代年號事項

明治天皇

七月

山田美妙の言文一致文例發行

八月

草野清民の日本文典發行、石川倉次のはなしことばのきそく發行、八杉貞利のストロング氏言語史綱要

十月

言文一致會の言文一致女子普通文發行

十一月

岡倉由三郎の發音學講話發行、新村出譯のイエスベルゼン言語進歩論抄發行、古事類苑(文學部)

明治三十五年一月

排言文一致會の大日本と文章の國民發行、日英同盟(三十一日)

二月

岡倉由三郎の應用言語學十回講話發行

文部省・外國地名人名稱へ方書方取調委員任命

明治天皇

三月 國語調査會設立、同七月調査事項を決定公示

四月 赤堀又次郎の國語學書目解題發行

五月 言文一致論集發行、大槻文彦の假名と羅馬字との優劣論(教育界)

六月 花岡安見の國語學研究史發行

七月 堀江秀雄の國字改良論集發行

八月 新村出の方言の調べ方に關する注意(言語學誌)

十月 大槻文彦の復軒雜纂發行、保科孝一の言語學講話

十一月 小森徳三の新案自由假名(日本新聞)(十六日)

明治三十七年二月 高橋作衛の漢文獎勵論(教育時論)、足立荒人の駁論(讀賣)

五月 小林法樹の新國字手引草發行

年 表

明治天皇

(速記文字)

六月 上田萬年の國語のため(第二)發行、増田乙四郎の大日本改良文字發行(片假名改造)、保科孝一の言語發達論發行

九月 國語調査會の音韻並びに口語法取調に關する事項印刷

十月 國學院・國文論集發行

十一月 高橋龍雄の國定讀本發音辭典發行

明治三十七年三月 露國に對し宣戰詔勅下る(十日)

四月 國定小學讀本新刊、國字國語改良論說年表發行(國語調査會)、片假名平假名讀ミ書キノ難勿ニ關スル實驗報告(同)

五月 前田默鳳の東亞新字發行

八月 大川茂雄・南茂樹の國學者傳記集成發行、宮澤甚三郎の日本語

五六

年 表

聖 代 年 號 事 項

明治天皇

語學發行

十月 國語調査會の方言採集簿發行

十一月 澤柳政太郎の國民の一大問題

(教育界)

明治三十八年三月

音韻調査報告書、音韻分布圖發行、文部省・許容文法案假名遣

改定案(文部省諮問)、假名遣改

定反對の國語會起る、假名遣對

照語彙(國語調査會發表)、伊澤

修二の反對(日本)

八月 上田萬年の普通教育の危機發行

日露媾和

九月 文部省・假名遣改定案ニ對スル

世論調査報告發行、林銑臣の日

本語原の研究發行、福井久藏の

新日本文典刊

十月 ローマ字ひろめ會創立、ローマ

聖 代 年 號

明治天皇

字創刊

十二月 文部省・文法上許容スベキ事項

告示假名遣諮問ニ對スル答申書

高橋龍雄の應用言語學、白鳥庫

吉の國語と外國語との比較研究

(史學雜誌)、金澤庄三郎・後藤

朝太郎共譯の言語學(マクス・

ミユラー原著)

明治三十九年一月 吉岡郷甫の日本口語法發行

二月 早大に文藝協會創立、田丸卓郎

の日本式羅馬字(東洋學藝雜誌)

三月 文部省の句讀法案、分別書キ方

案、藤岡勝二の羅馬字手引發行

十一月 文部省の新舊假名遣對照語彙發

表、田丸卓郎の羅馬字文の書き

方發行

十二月 口語法調査報告書發行

明治天皇

明治三十九年
より四十年

宮崎道三郎の日韓國語の比較研究(史學雜誌)

明治三十九年二月

西園寺首相ローマ字ひろめ會々頭就任、岡澤鉦次郎の新式日本

文典原理發行、小學にローマ字を課する建議案衆議案可決

二月

口語法分布圖發行(三月送假名

法發行)、藤岡勝二の國語研究法發行、臺灣總督府の日臺大辭

典發行

四月

金澤庄三郎の辭林發行

五月

金澤庄三郎・後藤朝太郎共譯の

言語學

八月

ローマ字ひろめ會のローマ字主

張百ヶ條發行

十月

福井久藏の日本文法史發行、國

語調査會の送假名法

十二月

保科孝一の國語學史發行

年表

明治天皇 明治四十年

安藤正次の國語學上に於ける歐米人の貢獻(國學院雜誌)、井上頼閑外二氏の難訓辭典、金澤庄三郎の日韓語の文字組織と梵語の影響

明治四十年一月

上山萬年の國語學叢話發行、高橋龍雄の世界文字學發行

四月

國語調査會の音韻並びに口語法取調に關する事項印刷

五月

同漢字取調發行、文部省内に臨時假名遣調査委員會設置

七月

我無線電信初開通(七日)

九月

山田孝雄の日本文法論發行、文部省・三十三年八月二十一日文

部省改めの三表削除

十月

戊申詔書下る(十三日)

十月より

田丸卓郎編の日本式ローマ字發

行

年表

聖代年號事項

明治天皇

十二月

三矢重松の高等日本文法發行

長連恒の國語學史發行、藤岡勝

二の日本語の位置(國學院雜誌)

明治聖年二月

文部省・臨時假名遣調査委員會

議事速記錄發表

三月

假名遣及假名字體沿革資料發行

六月

龜田次郎の國語學概論發行、後

藤朝太郎の漢字音の系統

七月

志田義秀・佐伯常麿の日本類語

大辭典發行

十一月

新村出の東國方言沿革考發表

安達常正の漢字の研究、高田忠

周の漢字詳解

明治聖年二月

金澤庄三郎の日韓兩國語同系論

發行

三月

藤井乙男の諺語辭典發行

五月

保科孝一の國語學精義發行

五七〇

聖代年號事項

明治天皇

六月

ローマ字新聞創刊

八月

日韓併合(二十二日)

十二月

金澤庄三郎の國語の研究發行

明治聖年二月

保科孝一の日本口語法發行

二月

村岡典嗣の本居宣長

四月

國語調査會・口語體書簡文に關

する調査報告發行

五月

文部省内に文藝委員會設置

九月

漢城外國語學校の國語の發音及

び語法に關する調査發表、大矢

透の假名源流考發行、伊澤修二

の國定小學讀本正讀法發行

十二月

伊波普猷の古琉球發行、谷川士

清先生傳(表彰會)

大正天皇

大正元年八月

大矢透の假名の研究

九月

國語調査會の疑問假名遣前編

十二月

金澤庄三郎の日本文法新論

大正天皇 大正元年

松見半十郎の義門法師、金田一京助の新言語學(スイト)、大島正健の韻鏡音韻考、同齋切要略、同改訂韻鏡、疑問假名遣前編(國語調査會本居清造編)

十一月 福井久藏の大正新文典

大正二年五月 山田孝雄の奈良朝文法史

六月 山田孝雄の平安朝文法史、金澤庄三郎の言語の研究と古代文化(獨譯を附す)、國語調査會廢止

九月 日下部重太郎の現代の口語

十月 池田四郎次郎の故事熟語大辭典

大正三年九月 大島正健の國語の組織

十月 田丸卓郎のローマ字國字論

十二月 山田孝雄の平家物語々法、大矢透の周代古音考同附圖、同周代古韻考韻徵、村岡典嗣の本居宣長(前者の増訂)

年 表

大正天皇 大正四年五月 上田萬年の日本外來語辭典

八月 新村出の南蠻記

十月 上田萬年・松井簡治の大日本國語辭典第一卷(同八年第四卷、昭和六年索引一卷、昭和十四年修訂版第一卷)

滿田新造の支那音韻斷、本居清造擔當國語調査會編疑問假名遣後編

大正五年三月 松村任三の語原類解

四月 保科孝一の國語教育創刊

六月 上田萬年の國語學十講

十二月 國語調査會の口語法、服部宇之吉・小柳司氣太の詳解漢和大事典、上田萬年・橋本進吉の古本節用集の研究、岡井慎吾の漢字の形音義

大正六年三月 柴田猛猪等の大字典

年 表

聖 代 年 號 事 項

大正天皇

四月 國語調査會の口語法別記

十一月 佐久間鼎の國語のアクセント

大槻文彦擔任口語法別記、大島

正健の動詞の組織

大正七年八月 大矢透の音圖及手習詞歌考

大正八年五月 澤柳政太郎・田中末廣・長田新

等の兒童語彙の研究

七月 文部省の「アクセントとは何か」

十二月 文部省の漢字整理案

佐久間鼎の國語の發音とアクセ

ント、折口信夫の萬葉集辭典、

橋本進吉の假名の字源に就いて

(明治聖德記念學會紀要)

大正九年二月 朝鮮總督府の朝鮮語字典

十一月 山下芳太郎の國字改良論

十二月 小倉進平の國語及朝鮮語のため

金澤庄三郎の言語に映じたる原

三二

聖 代 年 號 事 項

大正天皇

人の思想

大正十年五月 文部省の口語文用例集

十月 新村出の言語學概説

大正十一年一月 落合直文義芳賀矢一改修の日本

大辭典(言泉)(昭和四年十二月に

至り六卷完了)

二月 山田孝雄の日本文法講義

四月 前田太郎の外來語の研究

五月 垣内松三の國語の力

八月 川副嘉一郎の日本ローマ字史

十一月 神保格の言語學概論、山田孝雄

の日本口語法講義

岡田希雄の類聚名義沙に就いて

(藝文第十三卷十四卷)、小林好

日の標準語法精説

大正十一年 五月 臨時國語調査會・常用漢字と常

用略字發表

大正天皇

- 八月 東條操の南島方言資料
十一月 小倉進平の國語及朝鮮語發音概説

大正三年 三月 安藤正次の古代國語の研究、同

小さい國語學

四月 國語と國文學發刊

六月 山田孝雄の敬語法の研究

九月 吉澤義則の中等新國文典

十二月 松下大三郎の標準日本文法、臨時國語調査會・假名遣改良案發

表、大矢透の韻鏡考、吉澤義則

の中等新國文典別記、大島正健

の韻鏡新解二、同韻鏡と廣韻

大正四年 三月 東京中央放送局假放送(廿二日)

七月 本放送(十二日)

九月 伊波普猷のおもろ草紙、新村出

の南蠻廣記、神保格の國語音聲

學

年 表

大正天皇

- 十一月 新村出の續南蠻廣記、加茂延一の國字問題十講、金澤庄三郎の廣辭林、三矢重松の古事記に於ける特殊なる訓法

今上天皇 昭和元年一月 北里蘭の日本古代語音韻組織考

五月 後藤朝太郎の文字の沿革、宮良

當壯編の採訪南島語彙編、臨時

國語調査會の外國語の寫し方、

同當字發聲例

六月 臨時國語調査會の漢字整理案例

井口丑二の日本語原

七月 松岡靜雄の日本語學

八月 時枝誠記の國語國字の將來

九月 音聲學協會創立、三浦圭三の

綜合日本文法講話

十月 大島正健の韻鏡新解、尾上八郎

の平安朝時代の草假名の研究、

京都帝大・國語國文の研究創刊

年 表

五七四

聖 代 年 號 事 項

今上天皇

十二月

明治文化研究會編の日本耶蘇會
刊行書志

昭和二年一月

カナモジカイ編の國語國字問題
文庫創刊

二月

小林好日の國語國文法要義

三月

東條操の大日本方言地圖・國語
の方言區劃

四月

吉澤義則の國語國文の研究、安
藤正次の言語學概論

五月

時枝誠記の國語學關係刊行書目
(國語と國文學)

六月

金子健二の言語哲學と言語共和
國

七月

市河三喜・神保格譯のイエス・
ルゼン言語の本質發達及起原、

久松潜一の契沖傳(全集卷九)

九月

坪井九馬三の我が國語國民の曙

聖 代 年 號

今上天皇

號

事 項

九月

音聲學協會の音聲の研究第一輯
福井久藏の枕詞の研究と釋義

十月

新村出の東方言語史叢考

昭和三年一月

橋本進吉の天草版吉利支丹教義
の研究、小林英夫譯のソツシ
ール言語學原論

三月

安田喜代門の國語法概説、柳田
國男の方言の小研究(民族第三
卷第三號以下連載)、高田忠周

の漢字の起原と支那古代の文化

四月

松尾拾治郎の國文法論纂、五十
嵐力の國語の愛護

石黒魯平の國語教育の爲の音聲

學

五月

伊藤儼吾の近世國語學史

六月

川上嘉市の國字問題並其歸趨
芳賀矢一の日本文獻學・文法論

十月

今上天皇

・歴史物語

十一月 佐伯功介のローマ字綴り方について、日下部重太郎の標準ロー

マ字綴り方解説

十二月 岡倉先生記念論文集、湯澤幸吉

郎の天草本平家物語の語法

昭和四年二月 鬼澤福次郎の概観國語學史の研究

究

三月 安藤正次の國語學概説、石黒魯

平の國語教育の基礎としての言

語學

四月 後藤藏四郎の出雲方言、佐久間

鼎の日本音聲學、金澤庄三郎の

日韓同祖論

六月 小林英夫譯のバイイ生活表現の

言語學、木枝増一の高等国文法

講義、神谷敏雄の國語學總説

七月 山田孝雄の假名遣の歴史

年 表

今上天皇 昭和四年九月

村林孫四郎の鹿兒島語法

十月 大島正健の支那古韻史、田中館

愛橘・パーマ・菊澤季生等のロ

ーマ字綴方の進化

十一月 福永恭助の國字國語問題、大田

榮太郎・方言集覽稿(長野・群馬)

十二月 湯淺幸吉郎の室町時代の言語研

究、安田喜代門の高等國語法、

上田萬年の日本語を國際語たらしめたい(雑誌小學校)、岡澤鉦

治の新言語學綱要第一編人間の進化と言語

の進化

昭和五年一月 田中館愛橘の日本式のローマ字

綴方に就き主なる内外諸名士の

意見

二月 松下大三郎の標準日本口語法

三月 神保格の國語讀本の發售とアタ

セント(以下六冊續刊)

年表

聖代年號事項

今上天皇 昭和五年四月

北里蘭の日本語の根本的研究、

岡澤鉦治の言語學的日本文典

五月

上田萬年・樋口慶千代の近松語彙、金田一京助の言語學、松村

任三の語原類解、橘正一の方言と土俗創刊

と土俗創刊

六月

小林好日の國語學概論

七月

東條操の南島方言資料、柳田國

男の蝸牛考、安井洋の日本語原

の心理的解釋、三矢重松の莊内

語及語釋、山口麻太郎の壹岐島

方言集

十一月

文部省・ローマ字調査會を設置、

新村出の東亞語源志、同理珩記、

宮崎靜二の眞に祖國を愛する同

胞に訴ふ(ローマ字綴方)、宮良

當壯の八重山語彙

五七六

聖代年號事項

今上天皇 昭和六年一月

金田一京助のユーカラの研究

二月

吉澤義則の國語史概説

五月

放送局の放送講演集(九州方言)

大島正健の國語の語根とその分

類

六月

菊澤季生の國字問題の研究、森

本治吉の萬葉集の研究(岩波講

座日本文學)

七月

大西雅雄の國語の發音

九月

吉澤義則の國語說鈴、石黒營平

の言語觀史論、山田孝雄の日本

文法要論(岩波講座日本文學)、

湯澤幸吉郎の解説日本文法、春

陽堂・方言(雜誌)創刊

十月

安藤正次の國語學通考、大島正

健の漢音吳音の研究、木枝増一

の高等口語法講義、武内義雄の

今上天皇

支那文字學(同)

十一月 吉澤義則の點本月錄(岩波講座日本文學)

日本文學)

昭和七年一月 佐久間鼎の一般音聲學

二月 細江逸記の動詞時制の研究

三月 小倉進平の仙臺方言音韻考、金

田一京助の國語音韻論、荒垣秀

雄の北飛驒の方言、大田榮太郎

の滋賀縣方言集、安藤正次の國

語音聲學(岩波講座日本文學)

四月 三矢重松の文法論と國語學

六月 日下部重太郎の現代國語精説、

岡澤鉦治の言語學的日本文典、

佐々木博士還曆記念會の日本文

學論叢、東條操の方言研究の概

觀(岩波講座日本文學)

七月 山田孝雄の國語政策の根本問題

八月 平岡伴一の國字國語問題文獻書

年表

今上天皇

目、時枝誠記の國語學史(岩波

講座日本文學)、大矢透の隋唐

音圖

九月 藤村作編日本文學大辭典上卷、

三矢重松の國語の新研究、神保

格・常深千里の國語發音アクセ

ント辭典、厚生閣の教育國語教

育臨時號

十月 大槻文彦の大言海(第一卷)、荒

川惣兵衛等外來語研究(雜誌)創

刊、橋本進吉の國語學概論上、

下は八年一月(岩波講座)

十一月 土井忠生の^{明治}國語學書目解説

(岩波講座日本文學)、佐藤仁之

助の古語の新研究(尊稱篇)、金

澤庄三郎の新羅の片假字、丸山

林平の國語教育學

十二月 金澤博士還曆記念・東洋語學の

年 表

聖 代 年 號 事 項

今上天皇

研究、大矢透の古言衣延辨證補
(音聲の研究第五號)、柳田國男
の山村語彙、松井博士古稀記念
論文集

昭和八年一月 山形縣方言集

二月 土居光知の基礎日本語

四月 春日政治の假名發達史序説(岩

波講座日本文學)、新村出の言
語學概論(同)、日本文學社・國
文大講座を出す

五月 明治書院・國語科學講座を出す、

保科孝一の國家語の問題につい

て(東文理大紀要)、佐久間鼎の

國語音聲學概説(國語科學講座)

後藤朝太郎の文字學概説(同)、

福井久藏の^{新高等國文典}修

六月 木枝増一の假名遣研究史

五七八

聖 代 年 號 事 項

今上天皇

七月 小林淳男の言語學史(國語科學
講座)、菊澤季生の國語位相論
(同)、安田喜代門の中古の國語
(同)、岡井慎吾の漢字の研究
(同)

(同)

八月 服部四郎のアクセントと方言

(國語科學講座)、神保格の言語
學概説(同)、龜田次郎の國語書
目解題(同)

九月 奥里將建の國語史の方言的研究

十月 日下部重太郎の續現代國語思想

長井眞琴の梵語と漢語(國語科

學講座)、佐藤鶴吉の近世解釋

學、相良守次の國語韻律論(同)

十一月 淺野信の巷間の言語省察、細江

逸記の動詞敘法の研究、永田吉

太郎の方言資料抄、田邊壽利の

今上天皇

言語社會學(國語科學講座)、金田一京助のアイヌ語と國語(同)吉町義雄の九州の方言、伊波普猷の琉球の方言

十二月

岡井愼吾の王篇の研究、放送局のことばの講座、神保格・大西雅雄の國語標準發音圖表同圖解説、林甕臣の日本語原學、生田耕一の萬葉集難語難訓攷、松尾捨治郎の國文法概論、小林好日の日本文法史(國語科學講座)、木枝増一の文語法精説(同)、東條操の方言學概説(同)

昭和九年一月

小倉進平の朝鮮語と日本語(國語科學講座)、湯澤幸吉郎の口語法精説(同)

二月

福井久藏の増訂日本文法史、新井無二郎の呂爾平波の原理的研究、内田武志の靜岡方言集、橋正一・東條操の本州東部の方言(國語科學講座)

年表

今上天皇

四月 小林英夫の文法の原理(國語科學講座)、松本金壽の兒童語の表現(同)、土井忠生の近古の國語(同)、泉井久之助のメイエ史的言語學に於ける比較の方法

四月

六月 瀬戸重次郎の岐阜縣方言集

六月

七月 大西雅雄の音聲學史(國語科學講座)、柳田國男の新語論(同)

七月

九月 高橋龍雄の國語學原論

九月

十月 安藤正次の國語學總説(國語科學講座)、三宅武郎の音聲口語法、古澤義則の平假名の研究、岡倉田三郎の國語陶冶とラヂオ、城戸幡太郎の表現學序説(同)、岡井愼吾の日本漢字學史

十月

五九

年 表

聖 代 年 號 事 項

今上天皇 昭和九年七月

伊波普猷の南島方言史攷、田丸

卓郎のローマ字文の研究

十二月

重松信弘の國語學史（國語科學

講座）、橋本進吉の國語法要説、

山田孝雄の漢文訓讀と國文法、

東條操の本邦西部の方言（同）、

千葉勉の標準日本語發音權圖の

解説、小林英夫譯のアンリ・フ

レエの誤用の文法、平凡社大辭

典（十一年完成）、保科孝一の新

體國語學史、吉澤義則の高等國

文法、高田忠周の日本漢字正解

昭和十年二月

橋本進吉の新文典別記、新村出

の辭苑、新井無二郎の動詞の起

原的研究

三月

新村出の國語本統論（國語科學

講座）、安藤正次の國語發達史

五〇、

聖 代 年 號 事 項

今上天皇

序説、江實の言語地理學（同）

四月

小林英夫の言語學方法論考

五月

放送局のことばの講座、山田孝

雄の漢文の訓讀によりて傳へら

れたる語法

六月

小林英夫譯のカル、・フォスレ

ル言語美學

七月

橋本進吉の國語學研究法（雄山

閣講座）

八月

高松義雄譯のエルネスト・リチ

ヤード・エドワーズの日本語の

音聲學的研究

十月

柳田國男の産育習俗語彙、城戸

幡太郎の國語表現學、波多野完

治の文章心理學

十一月

興水實の言語哲學

十二月

藤岡博士功績記念言語學論文集

今上天皇

十二月

菊澤季生の國語音韻論、吉澤義則の國語學史概説（岩波講座日本文學）

昭和十二年 一月

瀨名寛祐の東大古族言語史鑑

二月

山田正紀の江戸言葉の研究

四月

菊澤季生の新興國語學序説、大西雅雄の教育音聲學

五月

橘正一の方言學概論、山田孝雄の日本文法學講義、佐久間鼎の現代日本語の表現と語法

六月

北條忠雄の九州方言語法考序説

七月

奥里將建の國語史の方言的研究

九月

松尾捨次郎の國語法論攷、湯澤幸吉郎の徳川時代の言語研究、杉村廣太郎の和歌山方言集、眞山青果の仙臺方言考、内田武志の鹿角方言集、小林好日の日本文法史

年 表

今上天皇

十月

徳田淨の國語法査説

十一月

高知女子師範學校の土佐方言の研究、國語と國文學特輯號・國文法の根本問題と文法教授、安藤正次の國語史序説、佐伯梅友の國語史上古篇、白鳥庫吉の日本語の系統（東洋思潮講座）、高田忠周の古綴篇百卷

昭和十三年 二月

木枝増一の高等國文法新講（品詞篇）

三月

小林英夫の言語學通論、湯澤幸吉郎の國語史近世篇、岩村魚返譯の支那言語學概説

四月

三ヶ尻浩の大部分方言の研究

五月

東條操の國語學新講、橘正一の方言讀本

七月

泉井久之助・高谷信一譯のトムゼン言語學、柳田國男の農村語

年 表

聖代年 號 事 項

今上天皇

彙、伊波先生記念南島論叢

八月 山田孝雄の國語史文字篇

九月 柳田國男の華淡習俗語彙

十月 小林英夫の言語と文體、同言語研究態度篇・問題篇

研究態度篇・問題篇

十一月 松村利行の支那古韻學楷榘、高橋龍雄の高等國文法概説

糸井善太郎の萬葉集語法私論、保科孝一の國語政策、吉武好孝の文體論序説

大西雅雄の國語音聲學教科書、吉澤義則・三宅武郎のアクセント表示新辭典

昭和三年 三月 金田一京助の國語史系統篇、福井久藏の國語學大系第一卷語法總記(一)

五月 春陽堂の方言終刊號・上田萬年

五八二

聖代年 號 事 項

今上天皇

博士追悼記念號、國語學大系第十四卷手爾波(一)

六月 東條操の方言と方言學、垣内松三の基本語彙學、國語學大系第二卷語法總記(二)

九月 山田孝雄の五十音圖の歴史、小山正の賀茂真淵傳、藤岡勝二譯のヴァンドリエス言語學原論、山本忠雄の文體論研究、國語學大系第十九卷方言(一)

十月 國語と國文學特輯號・國語變遷の諸相、山田孝雄の國語彙電の根本義

十一月 本校増一の高等國文法新講(文章篇)

十二月 國語學大系第四卷音韻(一)

昭和十四年 一月 日本言語學會創設、柳田國男の

今上天皇

臨時習俗語彙、放送協會座談會
「國語と現代の言葉」、兼常清佐
の日本語の研究

二月

文部省訓令・中等學校に時文を
加へるやう教授要目の一部を改
正、滿洲文化普及會・日本語の
海外普及政策實施に關する意見
書を文部省に提出

三月

今泉忠義の國語發達史大要

五月

松尾捨治郎の國語と日本精神、
柳出國男の居住習俗語彙、國語

學大系第七卷文字(一)

六月

文部省は國語對策協議會開催、
文部省・「新東亜建設に於ける

國語教育の使命如何」を國語教
育學大會に諮問

七月

雜誌解釋と鑑賞に「日本語の歴
史と諸相」を特輯

年表

今上天皇

八月 國語文化研究所より「コトバ」刊

九月

福永恭助の岩倉具實編日語辭典
刊、柳出國男の國語の將來、外
務省文化事業部の世界に伸び行
く日本語、國語學大系第九卷假
名遣(一)

十月

「放送」は標準日本語の理想的條
件を特輯、重松信弘の國語學史
概説

十一月

久松潛一編の國語國文學年鑑第
一輯

十二月

新村出・雜誌國語國文に「國語
問題の根本觀念」を發表、笹月
清美の語意考の成示過程を示す
二三の傳本について

昭和五年一月

國際文化振興會・「基本語彙選
定」に着手

年表

聖代年號事項

今上天皇

二月 安藤正次氏還曆祝賀記念論文集

四月 山田孝雄の國語の中に於ける漢

語の研究、佐久間鼎の現代日本

語法の研究、雜誌文學・「東亞に

於ける日本語」を特輯、藤村作

の國語問題と英語科問題、滿洲

國語研究會・雜誌滿洲國語創刊、

國語學大系第二十卷方言(二)

五月 日本方言學會創立

六月 平山耀男の全日本アクセントの

諸相

八月 雜誌文學・「文體の問題」を特輯、

石黒修の日本語の問題

九月 國語教育學會の標準語と國語教

育、日本醫事新報・「漢字問題の

學術的根據と具體策」を特輯、

國語學大系第八卷文字(三)

五六四

聖代年號事項

今上天皇

十一月 文部省圖書局内に國語課新設

十二月 時枝誠記の國語學史、橋本進吉

の國語の表音符號と假名遣、大

政黨餐會・臨時中央協力會議、

山本有三は假名の名稱改定の件

を提案、衆議院事務局速記課用

字例發表、有坂秀世の音韻論

索

引

(五十音順)

ア

アイヌ研究より見たる日本	五三三
言語・神話及び地名の研究	五三三
アイヌ語辭典	五三三
曖昧アクセント地方	四四五
奥義抄	四・四・七六
縣居書簡	二五七
赤堀又次郎	三三四・三五〇
秋田縣方言音韻及び口語法	二七
秋萩帖	五〇〇
明官共通字	二四三
國語アクセント辭典	四四四
アクセント地圖	四四四
アクセント特輯號	四〇〇
アクセントとは何か	四二〇
アクセントと品詞との關係	四二
アクセント二段觀と三段觀	四九
アクセントの調査	五四五
アクセントの表情	四二一

淺井惠倫	五三三
足利時代の言語の待遇法	四七
阿刈霞(あしかるとが)	二二
足代弘訓	一四七・一四八
アストン	三〇・三〇〇
遊ばせ詞	四三三
安達常正	三三三
東歌に見えた特殊の語法	二九
吾妻言葉	一九五
泰滿と契沖と比較	九五
阿奈以知	一七〇
姉小路式	七一
姉小路殿手簡越葉	七一
姉小路基綱卿	七三
會津方言	五三
相場長昭	一五四・一五六
阿比留字	二二
鴨東萩父	六二
天草版伊曾保物語	五六
天草版金句集の研究	三六
天草本金句集考	三六・五八
天草本平家物語	三三・五八

天地の歌	七
雨夜記	五
綾語	二〇
脚結	一〇八・一〇九
あゆひ抄	一〇四
脚結抄増補	一一
あゆひの五類	一〇八
脚結翼	一一
荒木田守訓	二七
荒木田盛徴	五九
新井白石	八・三四
有坂秀世	四六・四〇・五八・五七
孔名(ありな)	一〇五
ありなり	三〇〇
有賀長伯	七四・八六
或御説	二三
アルタイ語族比較文法	四九
アルタイ語と日本語との比較	五三
あるまじ	九三
アルヴァーレス(エマヌエロ)	五五

樽原(あをきがはら)	一八四
青森秋田兩縣方言に於けるP音の研究	五三三
青森縣方言訛語	二九一
青木鷺水	八五
安然	三五
安藤年山	八四
安藤正次	三〇三・三三三・四七・五〇八
宇禮牟曾考	五〇四
遊歴祝智記念論文	五二七
國語音聲學	四七八
イ	
宥朝の開套抄	一三三
幽時言串説	一八四
イユムスレーヴ	四八六
五十嵐篤好	一一一
壹岐島方言集	四〇一
壹岐島民俗志	四〇三
生田耕一の安寧天皇御陵名	

義私考	五〇四	一型アクセント	四二五	岩波講座國語教育	四八	以呂波字考錄	二八
井口丑二の日本語原	二九一	一條兼良	五八	岩波講座日本文學	四七	伊呂波字類抄	三三
池田蘆洲	三〇九	市岡猛彦	二五・三二	岩淵悦太郎の古語の清濁	五三	以呂波制作の理由	二八一
伊澤修二	二六一	一切經音義	二〇	伊波普猷	四七	以呂波聲母傳	二八
意字	一一	一齋點	三六六	飯尾永祥	四九	いろはぶん會	二四
石川倉次	二三三	五つの呼應	三三〇	飯室點	五〇六	以呂波問辨	二九・一六
石川雅望	一九〇	出水地方方言素描	四二	飯尾宗祇	七一	隱語	四三三
石黒魯平	一八〇	一般文法成立の可能性	四六	今泉忠義	四六四・五〇三	隱語集	二九〇
石田千穎	一五六	一步	五九・六〇	助動詞「き」の連體	五〇三	隱語の研究	二九〇
石塚龍磨	一四・三八	一步抄	四八	形の論文	五〇三	殷時代の龜甲文の研究	四八
石塚龍磨の萬葉研究	五三三	出雲族の語	三七	今井似閑	八四	印度本・伊勢本・乾本	三四二
石塚龍磨の研究の再檢討	四七	移動關係	五五	忌詞	四三三		
石山脩平	四九一	伊藤慎吾	二五・四七	意味論	四八七		
解釋學序說	四九〇	いとこ	三三	イムブリー	五三	ウ	
石井重穂	一九七	田舎言葉	四六	異名と戲語と隱語	四〇六	ウインクレル	五三三
伊勢貞丈	九三	田舎への狀	六四	意欲作用	四九四	ウラルアルタイ語	
伊勢物語童子問	九五	井上毅	三五	入江祝衛	三三二	族論	五五五
磯の洲崎	一五〇	井上哲次郎	二六	入り渉	五二	日本人とアルタイ	
石上枕辭例	一七七	岩崎文庫所藏尙書及び日本		入子型構造形式	五九	族	五五五
イタドリの方言分布論	四二	書紀古鈔本に加へられた		いろは歌	一七一	ウエンクステルン	五五五
一音五義派	一六七	る乎古止點に就きて	二四	いろは會	二四	浮雲	二七
一行一義說	一六六	岩田友靖の神字眞傳	一九	いろは作者に關する諸說	二七	語てにをは	六三

索引

五八

牛尾養庵

二二六

白杵方言と宮崎方言

四六七

歌合

四二

宇田川文海

二五五

宇多天皇宸翰周易抄御點

三七

歌と草假名

四七九

歌の大武根

一五九

歌枕

四三

うちあひ

一〇八

氏家剛大夫

四〇三

内田慶三の米澤言音考

二七一

菟道稚郎子皇子

一〇

上田秋成

九・三・一八七

上田博士追悼記念

五二五

馬詞集

一三三

海北若冲

八四・一八八

梅園春男

二二〇

ト兆宇

二二三

ト部懷賢

三九・四七

浦井有國

一一一

雲州往來

五一

海野幸典

二六

諺文

八六

エ

詠歌大概音義

七三

拗音の研究

四九

幼蟲狀の句

三八五

英文日本文典初歩

一〇五

諸曲(觀世梅若流)の發音に就いて

四一七

易林本節用集

五〇・三四六

越佐方言集

三四

悦目抄

五七・八六

エドキンス

五三

江戸言葉

二九

江戸言葉に就て

二七三

江戸言葉の研究

三二七

江戸の言葉の成立

四〇

エドワーツ

四〇・五四

榎並除璣

一〇七

FからH

四九八

宴歌集

三九

延喜時代に於ける岩崎文庫

三八

所藏尙書點

三六

延慶本平家物語

三〇一

延言

九

延言考

三三〇

延言に三種

一六三

縁語

四五

オ

應安新式

五二・六三

歐人刊行日本言葉覺書

五七

應聲考

一七〇

沖繩方言

一九八

送假名法

二〇四・二四九

押へと留り

二〇

雛妓の詞

四三三

落合直澄

一七・二一・三三

オッシュログラフ

四三

大石千引

九三

大國隆正

一六・二〇〇

大藏流の名匠虎明

三二

大阪詞大全

一九七

大島正健

三七・三八・三〇・三二

大田榮太郎

四〇四

太田全齋

一一五

大田豐年

一三五

大塚高信

五八

大槻盤里

一八三

大槻文彦

二九・三七・四三・四九

於保止布美

一〇五

大伴廣公

五〇

大西雅雄

五二

大原(孝道)線

四四

大町桂月の契沖阿闍梨

二五四

大命らま

三〇〇

大矢透

一一・四二・四六・四九・五二

大倭語學手引草

三〇一

澤湯久孝

五二〇

戲書について

四九七

表日本と裏日本の母音組織

三〇七

オヤングーレン

三〇・五三

和蘭語法解

一六一

挿頭

挿頭抄

かつみぶり

假名遣捷徑

二四

挿頭抄増補

一〇四・一〇

桂本萬葉集の文字の考察

假名遣近道

かなのまなび

二四

歌集類言類のひき

一一一

加藤景範

一〇三

假名遣近道抄

かなのみちびき

一一・三三・四九

春日政治

一〇九

歌道秘藏録

三〇・三三

かなづかひ近道略歌

五九

家族の稱呼

二九三

歌道非唯抄

一一一

假名遣つゞら折

五八

雅俗の別

四四四

加藤弘之

三三・三三

假名遣秘解

八五

荷田春滿

九四

「ガ」と「ノ」は同源から分化

三〇・三〇

假名遣問答抄

八五・四八

かたいと

一六

緋取魚彦

八八

假名調査部

二四二

片假名

一六

かな合字

一四

假名と吏道との關係

二八五

片假名の研究

四四

假名源流考

二四九

假名と吏道との關係

三三

片假名の「ツ」

五〇八

假字拾葉

三三〇・五〇一

假字の起原に就きて

三三〇

片假名の發生

三三七

假名字例

一一三

「かなのくわい」が研究した

二二四

片假名平假名の發生

三〇

假字大意抄

一一三・一五

重要な事項

二四

片假名平假名讀ミ書キノ難

一五八

假名遣

三三

かなのくわい大戦争

二五

易ニ關スル實驗報告

二四六

假名遣奥山路

一四・二九

假名の系統

四七九

かたこと

一四四

假名遣及假名字體沿革資料

三〇・四九・二七

假名の研究

三三六

かたばみぐさ

一六

假名遣觀

四八

かなの語源

一五九

かたひじき

一〇九

假名遣研究史

三〇九

かなのしんぶん

二五

假保存

四三

假名遣拾芥抄

八五

かなのと

二四

假名遣

二四

假名遣

二五

假名遣

二五

賀茂李應

三三

鹿持雅忠の語學	一六三	感動詞の歴史	四九八	記紀經緯抄	一七
賀茂真淵	九八	神字日文傳	一六・一六八	菊澤季生	四六
賀茂真淵傳	三五	閑亭の皇和神代字集	一六九	假字用法に就て	五〇〇
賀茂真淵と本居宣長	二五五	簡野道明	三四九	菊池俗言考	一九七
賀茂真淵の日本語原	二九三	漢文典	二六二	綺語抄	四三
鳥丸本悦日抄	五八	漢文の訓讀によりて傳へら	三四四	疑字篇	一六九
狩谷棧齋	二二	れた語法	四〇〇	擬聲語と擬態語	二八九
歌林模倣	一八七	漢文の訓讀法	四〇〇	北里闌	三〇六・四二七
歌林山分衣	五〇	漢文和讀例	三二・三六	北島葭江	五二五
歌林良材集	一〇三			喜多村信節	一九三
刊行方言書目	三九・四八			城戸千楯	一五六
鉗狂人	一一一	キ・ギ		城戸幡太郎	四九三
漢吳音微	一一五	救済法師	六	「キ」の音の假名	一一
漢吳音圖	一一五	九州方言	三九八	希望喚體	三八三
漢吳音圖說	一一五	九州方言講座	四六六	起伏式	四二
漢吳音圖の功罪	二二五	九州方言の古今の沿革	四六七	吸着語	三九六
漢吳音の歴史的由來	二二六	九州方言及び琉球方言に於ける代名詞の研究	四六七	木村騰太郎	三九七
漢吳唐三音	四三三			疑問假名遣	四四九
漢語と國語	二二〇	感情型	四三三	行阿	五四
漢語の影響によりて起りたる國語の種々の狀態	三六〇	神田喜一郎の日本書紀古訓攷證	五〇〇	行阿假名遣	五四
漢語の形態の觀察	三六八	感動詞に「ヤラ」	四五一	狂言記につきて	五二

京極中納言定家	三三	清原宣賢本の尙書卷七洪範	二八五	黒川貞頼	二八
強調研究	四四	第六古訓	一六七	黒澤翁緒	一四・七・五九
經典中漢音でよまれるもの	三六	清原道舊の言靈音義解	一六七	黒田太久馬	三三
京都言葉の一時期	五二	御物喪亂帖	四六一	華夷譯語	四三
京都語に於けるアクセント	四〇	嫁文字事	五三	皇國語學自在	二〇九
京都帝大國文學會創立二十		切支丹教義	三二・五二六	皇國古事徴	一七三
五周年記念論文集	五〇	切れ字	五七	廣日本文典	三〇〇
響尾考	一八四	切字の法	五九	光明皇后の樂綴論	四二
享辨	七四	近畿アクセント	四二〇	外國人の日本語研究年表	三五一
轉遊笑覽	一九三	禁忌習俗語彙	四〇六	外來語の研究	二九〇
共時的言語學	四八	禁忌の語	二九〇	外來文化とその語彙	三六九
共定分定格	二五	近畿方言	四四	蝸牛考	三九
玉座抄	五〇	近古の國語	三二五	過去分詞につきて	五一
玉篇考	三三	近世解釋學	四九〇・四九一	活語活理抄	一七六
玉篇の研究	三三	近世國語學史	二五・四七	活語雜話	一五五・一五六
虛字言葉	一〇三	近世文學圖表	四九一	活語指南	一五六
據字造語抄	一九三	近世文學の研究	五〇	活語捷徑標識	一六〇
虛體言	一八三	近代語の發達	四四五	活語斷續語	二六・三九
居住習俗語彙	四〇	金田一京助	四〇四・四〇八	活語二葉草	二〇九
清瀆	一八四	アイヌ語の清濁考	四九	活語の自他	一四四
清原貞雄	二五七	北奥地名考	五〇四	活語餘論	一五六
清原宣賢	二二三	金龍敬雄が安政七年神字論一六	五〇四	活用言各種の名稱	一七三

ク・ケ

久具郡名義考	三〇六	皇國語學自在	二〇九
草鹿祇宜隆	一三九	皇國古事徴	一七三
日下部忠説の留書	六四	廣日本文典	三〇〇
日下部重太郎	三三・四八	光明皇后の樂綴論	四二
草野清民の日本文典	二六三	外國人の日本語研究年表	三五一
來字活用考	一六一	外來語の研究	二九〇
孔雀經音義	三三	外來文化とその語彙	三六九
句雙紙抄について	五三	蝸牛考	三九
具體音聲と抽象音聲	四三	過去分詞につきて	五一
百濟記	二三	活語活理抄	一七六
百濟新撰	二三	活語雜話	一五五・一五六
百濟本紀	二三	活語指南	一五六
句の性質上の種類別け	三八二	活語捷徑標識	一六〇
久米千壽磨	一四八	活語斷續語	二六・三九
畑のすがき	一〇一	活語二葉草	二〇九
久留米方言集	一九七	活語の自他	一四四
グルンツェル	四九	活語餘論	一五六
九弄辨	一四	活用言各種の名稱	一七三
黒川春村	二七・二七・二六		

活用言の正格と變格

一四四

活用素材の考究

一四四

活用二十七會

二四

顯經四分律古典

二八一

關係代名詞に代る表現

二八一

管見抄

八一

元興寺露盤銘

一〇

冠辭考

九八

冠辭考續貂

九・三三・一六七

冠辭考の補篇

九八

冠辭懸緒

九八

冠辭の釋義

九八

喚體句と述體句

二七

觀智院本類聚名義抄

二四六

關東地方の方言分布

二五三

關東べい

二七

卷別にうかゞはれる用字の

二七

差異

五〇六

慣用音

三六九

郡村の語原

二九・三四

訓點復古

三六

訓育字

三六

ケ・ゲ

敬光の和字考

一六九

係結法成立の原因

三二

敬語の「ます」の語源

四四

繫辭

五八

形式從屬動詞

三七七

形式名詞

三六

經史莊嶽音

二四

形狀言五種活用

二〇

形狀言八衢

二〇

形狀の詞と作用の詞の差別

三六

係助詞

三六一

契沖阿闍梨

二五

契沖學

八

契沖書寫儀軌與書集

二五

契沖傳

二五

契沖の古語研究の理念

四六

契沖圓珠庵雜記

八

形容詞く活はしく活より

三五

形容詞の活用

四一

形容詞の成立

三六・五八

形勢動詞

二六

堯以法印

一三

教育令と小學校の文法科

二〇一

教行信證の訓點は阪東語か

二五

下官集

五七

下官抄

五三・五七

げすしき假名

五七

與本文字考

一六

ケレのレは元は助動詞

五〇三

言海

二九

幻交庵

一〇三

現行普通文改定案調査報告

二四六

之一

元龜字叢

五〇

源偶篇

一八

元慶の地藏十輪經の假名

二六

言元梯

五

言語學

五三

言語學會

三三

言語學者としての新井白石

九・三六

言語學方法論考

四七

言語學論文集

五〇八

言語活動

四五

言語研究

四三・五三

源語誌

一八

言語誌叢刊

五九

言語四種論

一三・二七

諺語大辭典

三四三

言語地理學

四七・四〇・四五

言語取調所

三三

言語の成立

二三

言語八種考

二〇八

言語美學

四七

言語變遷正訛辨

四九

言語音の貌

一七

源氏雅語纂解

一八

源氏に用ゐた使役の助動詞

四七

源氏物語玉の御須磨流

一八

源氏目安

七

言祝教育と辨證教育

四五

蜺縮涼鼓集

五九・六

謙稱の名詞

三六

顯昭

四・四三・七六

稗言泉

三三九

現代國語思想

三五三

現代國語書目

四三〇

現代國語精説

四三三

現代語法の研究

三九五

現代語法の本質

三六六

現代日本語の音聲學

三六四

現代日本語の表現と語法

三九三

現代の國語

四〇〇

現代方言學の展望

四〇〇

言文一致

二二七

言文一致會

二四二

言文一致論

二二七

言文一致論集

二四二

ケンペルマン

五三三

幻裡庵

二二七

言靈音義解

一六七

言靈觀

四三三

言靈古言考

一七七

言靈のしるべ

一四七・一五九

言靈名義考

一七七

言靈圖顯論

一七五

元祿文學辭典

三四三

コ・ロ

語意考

九六

語意考の是正

一三〇

小泉秀之助の東北地方教科

二七一

適用發音と文法

四〇・四八

五音相通

四〇九

口蓋圖

四〇九

孔廣林

四九

口語體書簡文に關する調査

四九

報告

二四八

口語の變遷

二九

口語法

三九七・四二

口語法調査報告

二四八

口語法別記

二四九・二六

口語文の起伏

三四四

孔侍中帖

四六一

江談抄

二〇・二七

口頭語と記錄語

三六

弘仁私記

三九

聲の教育

四七

吳音

三五五

本語學階梯

二〇七

舊學九品九格總括圖式

二二

語學系統

二二

語學系統説

三五

語學創見

三八

語學自在

二〇

語學指南

三三

語學所

二〇七

語學新書

二〇七

語學捷徑

二〇七

古學小傳

二五三

語格大成圖

二五三

古學傳統圖

二五三

古學の興起

九

吳漢音

四三

吳漢音の對應表

三六九

古今集註

一〇

古今要覽稿

一九二

古今集助辭分類

一〇一

國意考

九六

國意考

九六

國學略傳

三四

國學三遷史

三五三

國學史(清原貞雄)

二五七

國學史(藤岡勝二)

二五七

國學史概論

二五七

國學者谷川士清の研究

二五八

國學者傳記集成

二五八

國語阿克セント講話

二五七

國語沿革の大要

二五七

國語及び字音假名遣

二五七

國語及び朝鮮語の系統

二五七

國語及朝鮮語發音概説

二五七

國語音聲學概説

二五七

國語音聲學講話

二五七

國語音韻の變遷

二五七

國語音韻論

二五七

國語解題學

二五七

國語解釋學概説	四八八
國語學概論	三五一・三五五・四八八
國語學史	三六〇
國語學史(小島好治)	四四四
國語學史(保科孝一)	三五一
國語學史要	三三三・三五四
國語學史概説	四四四
國語學史から見た俳書	四五二
國語學史上に於ける鈴木服五三	四
國語學史の區分	四
國語學史の目的	三
明治國語學書目解説	三三三・四八〇
大正國語學書目解説	三三三・三七七
國語學新論	三五六
國語學精義	三三三
國語學小史	三三〇
國語學通考	三五四
國語學論考	三三九
國語假名遣研究史上の一發見	一四
國語會議に就きて	三七七
國語科學講座	四七一・四九〇・五〇七

索引

國語觀	五一二
國語教育の爲の音聲學	四二七
國語研究法	三五一
國語國文改良問題	五〇一
國語史	五〇六
國語史概説	四三三・五〇七
國語史上より見たるシラス	三〇六
・ウシハク	三〇三
國語史の時代區劃	三〇三
國語上より觀察した人種の初代	二九六
國語聲音學	二六二
國語說鈴	三七七
國語調査會	七・三四三・五〇三
國語調査會に關係の人々	五〇三
國語と國家と	三三六
國語に於ける東國方言の位置	二七二
國語に於ける母音の無聲化四八	三三〇
國語に及ぼした南方語の影響	四〇九
國語のアクセント	四〇九
國語の意義	四二六
國語の形態	四九三
國語の系統論	二九六・三五一・五〇九
國語の形容動詞について	五〇八
國語の研究	三七・三三三
國語の語根とその分類	二八七
國語の熟音の人口蒸實驗圖	四八
形	四八
國語の新研究	三七八
國語の心理學的研究	四九三
國語之組織	二八七
國語のため	三三六
國語の力	四八八
國語の統整	四九五
國語の特性	九六
國語の中に於ける漢語の研究	三八・四三三
究	四二一
國語の發音とアクセント	三三三
國語の發展	四三〇
國語の表記法	四三〇
國語表現學	四三三
國語表現學概説	四八八
國語の表現法と日本人の思想形態	四三三
國語の變遷	四三〇
國語は國家の藩屏なり	三・三三六
國語は國民の慈母なり	三・三三六
發音アクセント辭典	四四四
國語發達史大要	四四四
國語母音圖形考究	四八八
國字改良會	二四〇
國字改良の實意	三三三
國字國語改良論說年表	二四五
國字國語國文ノ改良ニ關スル諸願書	二四〇
國字國語問題文獻目錄	四八
國字定源	一七七
國粹的の學者	二二九
國文學記念論文集	三七九
國文學研究	四八八
國文學大綱	二五四
國文學柱	二一〇
國文學と日本精神	五〇
國文句讀考	二二

國文教育施行の方法	二〇〇	古史記に於ける特殊なる訓	二七四	古代解釋學	四九〇・四九一	言魂の幸はふ國	九
國文教育之儀に付建議	二〇〇	法の研究	二七四	古體假名	三三	言魂の助くる國	九
國文の新研究	三六	古事記の一節に關する私疑	三〇	古代國語の音韻組織	三〇四	辭公程	一八四
國祿原	二六	故事熟語大辭典	三〇九	古代國語の研究	三三・三四	言葉と文字にあらはれた我	三〇六
古言衣延辨の辨證	二六三	故事成語大辭典	三〇九	古代國語の研究資料	三〇四	が國民性	三〇六
古言學由來	一五	越谷吾山	一五	古代辭書の刊行	三〇六	詞の秋草	一〇三
語原辭書史	四八	古史徵問題記	一六	古代人名考	二九〇	ことばの泉	二九
古言清濁考	二八	五十音義訣	一五	古代日本語に於ける音節結	四六〇	詞通路	一四四
古言梯	二〇	五十音圖	三	合の法則	四六〇	詞の字	六
古言梯再考餘	二二	五十音圖を改む	一六	古代日本語彙	五三	言葉の島	四〇〇
古言梯標註	二二	五十音内外傳	一八四	古代日本語の國語に對する信仰	四七	ことばのすみなは	一七
古言の格	一五	五十音歴史	三四・四三	五段排列漢字典	三〇・三六	ことばのその	二〇・二八
語原の研究	七	古史本辭經	一五	誇張の強調	四四	詞直路	一四八
古言別音鈔	二九	小島好治の國語學史	四四	古點	四三	詞の經緯圖	一〇九
古言譯通	一五	興水賢	四九	古典講習科	二五	辭玉璫	一四七
語原類解	二八	誤寫の話	二九〇	古點の況字をめづつて	五七	詞玉緒	一三・一三
古言類韻	一五	語辭林香記	一五	古典註釋に現れた語學の方	四八	詞玉緒延約	一三
古語拾遺	二五	語性移動論	三九	法	四八	詞玉緒攷	一三・一〇〇
古語の新研究	二五	コソアド	三九	後藤朝太郎	四九	詞玉緒補遺	一七・六〇
「Nave」の發生	三八	「こそ」とos	三三	語頭グライド臆説	五一	詞玉緒縁接	一七・六〇
「ゴザンス」の語史	五三	古代音八十	五六	後藤點	三三・三六	詞のちかみち	一七六
古事記傳の總論	一三						

詞葉の錦	一八四
言葉の二道ぬるつるの辨	二〇九
詞の眞澄鏡	二〇九
ことばの正みち	一七六・一七七
詞の道しるべ	一四六・一五一
詞の八千種	二三
詞八衢	一四四
増補詞八衢	一四八
標註詞八衢	一四八
言葉の八衢疑問	一四八
詞八衢教法	一四八
言葉のやちまた語釋	一四九
詞八衢提燈玉礫	一四七
詞八衢類註	一四九
詞八衢道しるべ	一四八
詞八衢踏分	一七五
詞八衢補正	一四九
語の排列に於ける原理	三六二
語法私見	三六
語法指南	二九
剛き假名	五七
小林淳男	四六
小林歌城	一五六

索引

小林英夫	四八五・五二〇
小林好日	三五五・四五五・五八・五七
お・を混合の説	五一
戀詞	四三三
語尾「し」の發生	五〇一
後普光園院抄	五八
古本節用集の研究	五〇・五四〇
古文字	三三四
小山正	五三三
願野玉の玉篇	一九
古鑑篇	三四
語林類聚	一八二
語箋	一八三
婚姻習俗語彙	四〇六
混効驗集	一九八・四〇三
金剛般若經讀述の假名	二六
金光明最勝王經註釋の古點	五〇六
について	五〇六
今後の國語學	三七
根辭	二六五
權田直助	二七・四九・三九
語彙	二八

語彙活語指掌	三八
語彙別記	三八
五韻次第	三六・六〇・四三
サ・ザ	
西廣寺將了	一五
歲時習俗語彙	四〇六
撮壤集	四九
西墓點	五〇六
西洋紀聞	九一
采覽異言	九一
柴屋軒宗長	六三
創學校啓	九四
草假名の研究	四七九
相通	三六
さかいに	四三三
佐賀縣方言語典一斑	二七一
佐賀縣方言辭典	二七一
榮田猛猪	四〇八
佐賀辯と唐津辯	四〇七
酒井秀六	五三

作者個人の用字と送別の用字との交錯	四〇六
佐久間鼎	四〇〇
日本語の論理的表	五二七
現	五二七
作例類語	一六二
佐々木信綱	三五五
雀部信頼	一〇〇
佐々政一の續日本文典	二五五
佐々井祐清	八五
指出の磯	一〇〇
薩人書	一九
サトー(エルネスト)	二〇七
佐藤誠實	三三
佐藤鶴吉	四三三
佐藤仁之助	二九三
サフヘ	四三
「さふらふ」か「さうらふ」か	五三
佐伯功介	四七
佐伯梅友	四九七
狀(さま)	一〇五
様の字	四三〇

佐理書賀歌切

猿の言葉

ざるべし

産育習俗語彙

三音正鶴

三三相通

三語脈餘流

三身圖說

サンシ

山村語彙

三代枕辭例

三段活用

三條西實隆

三條西實隆の枕詞註

三轉四十三段

山途叢々

三寶字抄

三寶字類抄

三寶名義抄

三藐院關白臨定家卿書

山木麟麟

シ・ジ

自由假名	四〇六	自由假名	二四三	字音假字用格の批評	二六
ジイエロン	二四	字音轉換の方則	三三	指詞	一八
シーボルト	四三	爾雅	一九	志々幾活を認めぬ	二〇
秀句	一八四	時階の助動詞	四〇八	四十三轉	二四
周圍說	一一	辭格考	一七九	詞章八則	三九
修飾格	四〇五	觀學文法と聽覺文法	五二	辭書史	三四
修飾助詞	三八五	詞格用例	一四・一六一	時制の研究	三三
周代古音考	四〇六	滋賀方言集	四〇四	四聲の標記	一一
周代古音徵	一七	シ・キ・ケリの再檢討	二七五	字切	三
周代の古音	二・四九・五九	色彩感覺の表現	四九三	自他解等	一八
袖中抄	一一	鋪狀(しきさま)	一〇五	自他法	三〇
收入押明方	四・四・七六	敷島考	二九・三四	自他六等	一五
指要錄	一八四	式保存	四三	七十五音說	一七八
使役性中相	一四	字鏡集	四・四六	實質修飾副詞	一八
辭苑	三三	字鏡類字抄	四八	悉曇	三七
葉の折添	一六	四具攻證錄	一一	悉曇要訣	三
字音假名遣新法	三八	重松信弘	二五・四九・四四	悉曇要訣に於ける國語研究	四
字音假字用格	二四	國語學史	四九	悉曇學と反切	五九
字音假字用格追考	二五・三〇	字源	三九	悉曇學よりの國語研究	四三
		字庫	一四	悉曇藏	三
		時刻法	一〇	悉曇相通說と活用研究	四三
		芝狀(しきさま)	一〇五	悉曇字母新釋	一八

悉曇大抵	三三	じもの	五〇二	主格と述格との關係	三八一	初後相通	四三
静岡縣方言辭典	二七三	上聲	四〇六	主格を示す「い」	三三三	助辭音義考	三〇八
次點	四	淨聲	八一	受給關係	三九五	助辭頌	一八一
支那音韻斷	三三三	象形字	二二	熟語の研究	五〇八	助辭本義一覽	二八・五九
支那古韻考	三三六	匠材抄	七七	術語字引	二五一	敘述樣式副詞	三七七
字謎	二九〇	成實論天長點	二八一	シュビツェルの語詞藝術	四六七	初心假名遣	五九六〇
信濃方言地圖	四八	成實論天長點綴貂	五〇六	準アクセント	四三四	書體の沿革	四六
支那の文字・音韻・言語に	四八	章段結構	二九	春雨抄	一八六	初體用令助	九七
關する參考資料	三三	象徴音の研究	四七	春樹顯秘抄	三	書道上の假名遣	五八
支那文字學	三三六	莊内語及語釋	四〇三	春樹顯秘抄	三四	助動詞を接尾辭と名づく	五三
四のくちらゐ	一〇四	莊内方言考	一九七	準助動詞	三九五	初等日本文典	二六四
篠崎東海	九三	尙平語格之說	四〇三	順德院	七	白樂集	七三
芝葛康	四三	釋義八要訣	一六〇	泰登上人	二五・一六四	白鳥菊治の日本文典	二六三
拾芥抄	五二	釋日本紀	八	ジョアン・フルナンデス	五五	白鳥庫吉	一九六・四六〇
志不可起	一五	釋如得のいろは抄	二八	書意考	九六	白井寛齋	一一七
志布志方言	五〇八	寫聲說	二六	衝口發	三二	辭林	三四三
集注敘述の語形	三九四	暹羅支那兩國語の比較	三三	鏡鼎古文の特色	三三	詞林采葉抄	五〇
十八切字	六	洒落と地口の今昔	四九	鏡鼎等の金石文字	四七八	シルヴァドアルテ・ダ・	五五
字母の單純化	三	珠阿彌	一五	食物に關する言葉の變遷	四六八	志呂志女須	四四七
鹽井雨江の香川景衛	二五四	聚分觀略	三四	書契文談	九二	觀話音韻新論	四六三
清水濱臣	二二・四八・二五〇・一三	ジュエル	二四	舒言三輯例	一六三	視話文字	二四三
下河邊長流	七・八一			諸國方言物類稱呼	一九五	字彙莊録音	二四

梁の折添	二六	神代文字點畫考	一六九・一七一	成俊	五
新國字論	三七	神代文字辨	一六六	醒醉笑	七
神國神字辨論	二六	新日本文法教科書	二六五	清濁音	三六
心空の法華經音義	三九	人天合離對格	一七	清濁の區別	三
神宮文庫本	二九	秦篆の制定	四八	聲調編	一七
新吳竹集	一八	新文典	三九	星點	二六
新華嚴經音義私記	四三	神保格	四二	性と數とを示す法式	三三
新語篇	四〇	新政名紳	一八	西洋流の文法	五四
眞草二行節用集	五〇	新村出	三三・四七・三三・七三・九七	小日本文典	四三
眞宗聖教和語說	一五四	親類相通	四六	小學日本文典辨惑	四三
新式日本文典	二六	ス・ズ		小學篇の字	四二
新式日本字	二四			骨相の假名遣ちかみちの道	三八
新字四十四卷	一六			抄物	三八
新字調査部	二四			抄物に於ける語の用法	三九
新集藏經音義隨函錄	三六			抄物の假名遣と發音	三九
新撰字鏡	二〇	ブーゾー辯	四二	世界言語分布圖	四九
新撰字書	二八	數詞構成分布圖	四三	世界の語言の國際的調査に	四九
新撰體儀	四	數詞の語原	四五	積鼠漫筆	三四
新撰日本本文典	二六	菅原是善	三	關根正直	三五
新撰裝抄	一一	菅原爲長	三〇・四八・五〇	關政方	二七・二五
新撰類聚往來	五	「す」「さす」「しむ」の語	四七	關靖	三四
神代文字考	一六・一八一	史	一三		
		鈴木服	一三		
		鈴木重胤の語學捷徑	一七・二六		
		セ・ゼ		續重常	一六
				鈴木暢幸の日本口語典	二七
				須藤利一	五三
				角達ひの通じ	八四
				推古朝遣文假名字母表	一四
		末	一〇六	隋唐音圖	二六
		末松謙澄	二六	性と數とを示す法式	三三
		セ・ゼ		小日本文典	五四
				小學日本文典辨惑	四三
				小學篇の字	四二
				骨相の假名遣ちかみちの道	三八
				抄物	三八
		正格・偏格・別格	一六	抄物に於ける語の用法	三九
		生活表現の言語學	四八	抄物の假名遣と發音	三九
		勢語臆斷	五五	世界言語分布圖	四九
		正誤假名遣	六・三三	世界の語言の國際的調査に	四九
		聖語藏御本唐寫阿毗達磨雜	五〇	積鼠漫筆	三四
		集論の古典について	五〇	關根正直	三五
		聖語藏御本中觀論の古點に	五五	關政方	二七・二五
		ついて	五五	關靖	三四
		聖語藏御本の眞假名の研究	三〇		
		性詞	一八		
		正字法と音聲記號	四九		

接合動詞	三九五
接續格	三八四
節用集	四九
節用集考	三六一
節用文字	三六六
瀬戸内海方言特輯號	四〇〇
仙覺	四六
仙覺律師の萬葉集抄	四八八
漸強重母音	四四八
漸強母音	四四八
仙源抄	五〇
仙源抄の跋	五八
千歲笑と試過集	八三
專順法眼詞秘之事	六四
仙臺言葉	一九六
仙臺言葉以呂波寄	一九六
仙臺方言	四〇四
仙臺方言音韻考	四〇三
仙臺方言音韻組織考	四〇四
仙臺方言音韻論試作	四八六
箋註倭名類聚抄	二二・四六
前提法	二七三

索引

センテンス・メソッド	四八八
全日本アクセント諸相	四九五
宣命書	一七
宣命小書に關する意識	一八
專門餘言	一四
ソ・ジ	
宗祇	五〇
叢語	二六四・二六五
造語的接尾辭	三〇五・四一
送葬習俗語彙	四〇六
總主說	二二
雙數及び三數分布圖	四九
宗碩	五一・七
宗仲	一一三
增訂日本文法史	四二九
增補正誤假名遣	一三三
增註詞八衢	一四八
宗養の三卷抄	六六
そかた	三〇・四〇〇
ぞ・か・よ	六五

屬	一〇八
續壹岐島方言集	四〇三
促音の研究	四九
促音表記	二八五
續冠辭考	九・三〇・一八七
續新日本文典	二六六
續南蠻廣記	三三二
續日本文典	二六五
續漢沙草	五一
續八衢	一五八
ソシユールの言語學原論	四八五
ソシユールの言語學說	四八
指定辭	五八
タ・ダ	
だいちかながくかう	二四
待遇の助動詞	四七
大言海	三三
大古族言語史鑑	三八
泰山蔚	一五
體詞	四〇

大字典	四八八
大匠雛形規矩階梯	一九三
文語對照語法	二六七
太爲爾歌	二七
大日本アクセント分布圖	四六
大日本國語辭典	三九
諸忍	一六八
大扶桑考	一六五
代表的な文法	五四四
大寶戸籍帳	二四
大寶戸籍帳に見える假名の字母	二四
代名詞の變化	四五〇
代名助詞	三九五
代名詞を避けて用ゐる傾向	三五
太平洋言語	五四
體用の區別	九八
當爲の法則	四〇五
刀江書院の國語史	五四七
唐鈔漢書揚雄傳訓點	二八五
鷹犬詞大概	一九三
高木市之助	五二五

索引

鵜飼いろは歌	一五五	橋正一	四〇〇	玉緒變格辨	一八六	地蔵十輪經元慶點	二六二
鵜飼以呂波寄	一五三	橋守部	一八・一五・三〇	玉緒みだり	一八四	縮詞	四〇
鵜飼類寄	一五二	立本	一〇六	玉緒縫添	一七〇	地方發音の變化及其配布	二五五
高田竹山	三三三	喻來物	四四	玉橋	一七三	小さい國語學	三五三
高津鐵三郎の中文典	三三八・三三〇	田中延香	三三二	田安中納言宗武	九・一三三	持明院基輔	八五
高橋殘夢	一七・一八八	田中秀穂	三三三	グラス	三三三	地名字音轉用例	二五・三一
高松義雄	四〇九	田中義廉	三三三	——米澤方言——	三三一	貞觀の戸籍帳	二七
高山宗樹	三三	田中賴庸の神字考	三三三	單語品等差別分布圖	四九	長慶天皇	五〇
タガラ語と日本語との比較至元	四二	修苗辨乃異則	二二	淡齋如水	一七九	長秋記	五七
濁音考	四二	田邊方言	三四	單辭・複辭	一七九	町人のことは	四六
田鎖綱紀	二四一	谷川士清	九・一八・三六	膽大小心録	一三三	チャモロ語の研究	三九
田口鼎軒	二九六	日本魂谷川士清先生 の植化	二五七	丹峰和尚	五一	中古文典の意義範疇	三〇
卓立の強調	四四	谷眞潮	九	チ・ヂ		中相	三九二
武内義雄	三六	種子文字	三三			中山傳信錄	四〇三
——支那文字學	四八	鯛鯉の「ヒ」と朝鮮語の치	三三			重字	二
武島羽衣の賀茂眞淵	三五	玉穂	一三			中世解釋學	四〇・四九
武田祐吉の形容詞論	五〇一	靈の宿	一八			重點	二
章魚式	三〇	玉緒解紐	三三			重點字	二〇
田澤伸舒の字彙	一三・三四六	玉緒綴分	一三六・一三五			重點字	二〇
多識篇	一八六	玉緒六分櫛	一三六・一三九			中等日本文典(落合・小中村)三五	二六五
たすけ詞	四六	玉緒頭註	一三七			中等日本文典(白鳥菊治)	二六五
助竹字	五七	玉緒變格考	五三			中文典	三八・三三〇
						伊譽の切要抄	二二三
						笠源	五〇
						近松語彙	四四
						研究論文	三三
						日本文典	三三
						チュンパレン	五〇九・五〇一
						純音	三六

懲狂人	一三三
直音と拗音との境界線	一九六
直感直叙の様式	三九四
地理言語學	四八五
塵袋	五・六・七六
知連抄	六三
塵添瑤璣抄	七七
陳述語	二七六
沈文發	一七三
通訓定聲	三三四
通言	四三三
通時的言語學	四八五
通用名言	六七
津輕方言考	三三・三七二
津輕方言集	二七二
つぎねふ山しろ川	二九七
筑紫豊のそは考	五〇四
筑波集	六三
筑波問答	六三

ツ

對島方言	四七六
つゝ留	七〇
「つ」・「ぬ」の別	一六・二七三
常深千里	四四
「ツ」の字源	二七九
坪井九馬三	三三八
語接ね	七四
鶴峯戊申	一六九・一八一
テ・デ	
「である」調	四五四
定家假名遣	五四
定家卿口傳	五四
定家卿流かなづかひ	八五
庭訓往來	五一
ディルタイの解釋學	四八八
テ・ロールの分類法	四〇六
「と」「たち」	四九
疊音と疊語の一研究	五八
調査會編纂の口語法	二四九・二六六
朝鮮及び日本の二單語に就	

て	五四
朝鮮語研究小史	三三三
朝鮮動詞の使役形と受身・可能形	五二〇
朝鮮に於ける韻書と玉篇との關係	五三三
朝鮮の眞言集につきて	五四
朝陽閣字鑑	三三三
手紙のことばの變遷	四六九
てがを文典	三三三
デス	二七〇・二七四
「です」調	四五四
「です」の起原	三二八
てには綱引綱	一〇一
手爾葉大概抄	六九
手爾葉大概抄之抄	七一
手爾波の効力	六九
てにはの名義	一〇一
天爾乎波	三六
てにをは係辭辨	二七・二五八
氏邇乎波義慣鈔	一〇〇
天爾遠波賤の苧環	一二六

テニヲハ點	六七・二八四
亭爾乎波の辨	一〇二
てにをはの六次第	六三
てにをはの六種	一三八
てにをは紐鏡	一三三
手引の糸	一六二
寺島良安	一九三
天安の大智度論の假名	二
傳承回想	三九四
天治本新撰寫鏡	四四六
天長點成實論に於ける片假名	三〇
天長の成實論の假名	二六
點圖	三〇・二四・五九
點本書目	二八五
篆隸萬象名義	一九
ト・ド	
トアルテ・ダ・シルヴァ	五五
東音譜	九一
東雅	八八・九〇

索引

六〇五

同格	二七三	動詞と形容詞との別	三六〇	富樫廣蔭	一三六・四二・一三三・一〇〇	伴部安崇	一六八
同聲	四〇	動詞の原形	三〇三・三三三・四四五	どかた	四五〇	トルベツコイの形態音韻論	四六
東京辯	四二四	動詞の原形論	五三〇	榎井道敏	一〇一	土井忠生	三二五・四八・四〇・五七
東京切韻	三〇	動詞の前變格・末變格	二三三	時枝誠記	二五・四八・五九	ナ	
東京切韻佚文の研究	五〇	動詞の直說法語尾の音義	二九二	—— 國語學史	四八・四六・四七		
同會の調査方針	二四三	道春點	三六六	獨學綱	一六〇		
同語意識の崩壊	四〇六	統稱と各稱	一八三	徳川時代言語の研究	三七	内外轉の別	二八二
際孔榮	一七〇	東禪院心蓮の口傳	四四九	徳川前期の珍しい言ひ方	五〇八	内地方言アクセント境界線	四四
東國方言沿革考	二七二	東大寺點	二八六	讀史餘論	九〇	調査業績精算	四〇三
東語例	一九四	東大寺の獻物帳	四六一	都會と田舎の言語	一九五	中金正衡	三〇三
東西アクセントの境界	四二〇	東大寺諷誦文	一九四	どこ	四五〇	中澤宏榮の神字しらべ	一六九
東西言語の界線	四四〇	東條義門	一二七・二六・四六・一五〇	戸澤正令	一三七	中島廣足	一一八・四七・一六〇・九〇
東西二大方言の競争	四四六	東條操	三五六・四〇・四七・四八〇	俊頼口傳抄	四四	永田直行	一九七
東西兩京の言葉戦ひ	二七三	—— 中國方言の特徴	五〇九	俊頼秘抄	四三	永田吉太郎	三九三
動作態と同語の文法的範疇	五〇八	—— 同内相通	四八	戸田茂睡	八〇・八二	中津方言	四七
動作態の助動詞	四五六	東部方言と西部方言	四八	ドチリイチ	五三六	中二段の稱を上二段	一五九
動詞及び形容詞のアクセント	四二四	同文通考	九二	とねけ言葉	四四〇	中根淑の日本文典	二〇四
動詞形容詞一元論	三三二	東北發音矯正法	二六三	殿村常久	二六	長野主膳	一五九
動詞古形論	二六三・三三三	同韻	三六	遠江國學者の學界への貢獻	二五	長野義言	二六
動辭・靜辭	一七四	洞院公賢	五一	遠江文典	三六	中野柳閑	一八二
同字同聲病	四五	同韻相通	四八	友かゞみ	一七・一五四	那珂通世	三三〇
				友鏡底廻影		中村尙輔	三三

中村通夫の「デス」の語史 三二八

梨本集 四〇・四三

「な」と朝鮮の *nam* 四九

七千五百言 一八四

浪速方言集 一九七

摩 一〇六

なびきづめ 一〇六

摩伏 一〇六

直日靈(なほびのみたま) 二二六

男信(なましな) 一五三

男信質疑 二二・一五三

ナモ 四〇七

寧樂考 二九・三四

奈良朝文書の略體 五〇〇

奈良朝文法史 二九

生川正香 一四九・二九

南留別志 二九

南留別志の辨 三九・四〇

南島方言史料 三三

南登記 三三

南緯廣記 三三

南部義徳の修國語論 二〇〇

索引

二

二合字 二〇

貳過集 八三

二語併用地域に於ける教育 四四

二四相通 四三

西周 二〇四

西下經一の自他融合の文 五二

西村茂樹 二二七

日英音聲學概説 五三

日英小言語學 五三

日英大辭典 二三八

日蓮上人 四四六

日韓語同系論 三三

日韓正宗溯源 三八

日鮮語に於ける特殊研究 三七

日鮮語の音韻の比較 三四

日鮮語の助詞の關係 三六

日鮮語比較研究 五一

日鮮文字に於ける梵語の影 三三

日葡辭書 五二六

日本及び馬來ポリネシア語

間に於ける始源的關係探

究序説 五二四

日本音聲學 四三

日本學の樹立 四六二

日本漢字學史 三六

日本紀開講 元

日本紀覽歌集 元

日本紀纂疏 元

日本紀私記 三九・四三・四四

日言語學につきて 五二

日本語アリアン語比較表 二九七

日本語小文典 五〇

日本語口語法 二六

日本語口語文典 五三

日本語要略 五五

日本語がウラル・アルタイ

語に屬すべき證明 二九・五三

日本語學 三九

日本語學一斑 三八

日本語學階梯 二〇七

日本語學史 二二

日本語學須知 五〇

日本語希臘起源 二九

日本語原(井口丑二) 二九

日本語原(賀茂百樹) 二九

日本語源開題 二四

日本語原學 二七

日本語原の心理的解釋 二九

日本語古代語音組織考 三〇・四七

日本語古代に於ける語彙 三三

日本語古代文字考 一七・二二

日本語調學小史 三〇

日本語調學年表 四九

日本語典(アルヴァーレス) 五五

日本語典(ドアルテ・ダ・シ

ルヴァ) 五五

日本語典(西周) 二四

日本語典(フェルナンデス) 五五

日本語とアジア大陸語との

近似 五〇

日本語とアルタイ語との比較

三三三

日本語と縮句語との比較

三三三

日本語の位置

二九八

日本語の音聲的研究

四〇九

日本語の書き方

二六

日本語の系統

四〇

日本語の根本的研究

三〇七

日本語の動詞の語源につき

五二

て

一七三

日本古物學神字考

一七三

新式日本字

二四三

日本式ローマ字

二六

日本釋名

八八

日本書紀通證

九八

日本新國字

二四三

日本神字考

一三・二三

日本新文典

三八

日本小語典

三〇・五〇

日本小文典

三〇・五三

日本俗語文典

三三・三三

日本俗語文法論

三三

日本大辭典編纂に就きて

三四〇

「本」に於ける樂的語調

五四

日本の古代地名の研究

五三

日本方言學會

五四

日本方言學資料

四三

日本文學に於ける各種の文體

五三

日本文學論攷

五三

日本文語文典(アストン)

三〇

日本文章論

二六

日本文體新論

二六

小日本文典

二〇三

中等日本文典(落合・小中村)

三五

中等日本文典(白鳥菊治)

二六

日本文典(オヤングレーン)

二六

日本文典(草野清民)

三〇・五九

日本文典(コリヤード)

二二

日本文典(チェンバレン)

三三

日本文典(中根淑)

二四

日本文典(ホフマン)

三〇・三三

一七・五九・五〇

日本文典(ローニー)

五四

日本文典(ロドリゲス)

三〇

日本文典要義

五六

ニホンブンテンオホムネ

二五

日本文典原理

二四

日本文典初歩

二〇・二五

日本文典大綱

三九

日本文典例證

五九

日本文法要論

三〇

日本文法講義

三六

日本文法學概論

三五

新日本文法教科書

二五

日本文法史(小林好日)

四八

日本文法史(福井久藏)

二五

日本文法新論

三四

日本文法とトルコ文法との比較

五四

日本文章法大要

二四

日本文法論

三二

日本民族の太平洋起原説

五四

日本文字ノ資格

二四

日本譯語

五三

日本歴史文典

五五

二條良基

五・六二

にて留まり

六五

二百六韻の性質

二八二

入聲音

四九

似物

四九

似るをのる

四九

又

縫結大概

四〇〇

縫目結目

一七

ネ

猫の言葉

四〇五

能主格

一八三

能書假名遣

八九

能所關係
野田忠清
「の」と「が」
延假名
ノホットの日本書史

ハ・バ・ハ

パーカー
バイエ

俳諧天鵲波抄

方言

方言改良論

方言學

方言學概論

方言學その理論と實際

方言研究

方言研究會

方言研究法

方言採集手帖

方言採集簿

方言周圖論

索引

方言辭書	四〇〇・四五一	羽栗津齋	一八二	服部高保	九九
方言集覽篇	四〇四	橋本進吉	一四・四一・四二・四三・四四・四五	服部武喬	一九七
方言通用抄	一九七	四六・四八・五〇・五九・	「は」と「が」の區別	三九六	
方言地圖及び國語の方言區	五九	五二・五六・五三・五三	はなしことばきそく	三三三	
判	五九六	四七・四九六	撥字	七四	
方言讀本	三九七	波多野完治	刻字	七三	
方言と土俗	四〇〇	八丈島中之鄉村方言集	附字	五九	
方言と方言學	四〇〇	八丈島の方	「は」の係辭	五五	
方言取調仲間	四〇七	撥音	馬場辰猪	四〇一	
方言の研究	二二七	發音學講話	「侍り」と「さぶらふ」	四四四	
方言の調べ方に關する注意	五三四	撥音假字攷存疑	濱名寛祐	三八	
方言の性質及調査方	三三四	發音小辭典	濱菰	一六六・四四	
方言文學	四〇八	撥音の古來存在説	唯し詞	五〇一	
放送無線に於ける音の歪曲	四一八	撥音の表記	林泰輔	二四	
邦文日本語典	五三三	伐柯篇	林道春	一八六	
芳蘭訣斷八衢打聽	一六二	發語	林堯臣	三八・二七	
博士家及び僧家の點	三七	發語考	波羅調迷・阿答末涅	一四五	
芳賀博士	二四三・四九・五七	發生期の假名資料	「腹ぬ(う)」の語史	五三	
萩原廣道	一七・一五八	服部吟照	鏡麩	一六二	
ハ行音轉化の時期	四三	服部四郎	藩翰譜	九〇	
白櫻(新井)	九二	服部正義	藩ことば	一六	
博言學科	三三	服部線	半字法	三三	

半所相

三九三

反切

三四

反切製作の時代

二八三

汎太平洋學術會議

三三四

汎太平洋語系説

四九九

判斷作用

四九四

反本居學説及び宣長學の發

二五五

展

ヒ・ビ・ビ

ビイアソン

五三六

P 音考

二三八

P から F

四九八

比較言語學と方言學

四八七

東山往來

五一

久松潜一

二五六

肥前諫早町方言誌

四二〇

肥前詞

四二五

否定の古形

三三六

秀眞の神代文字に就いて

五三三

秘傳天隅波抄

七一

人丸秘抄

五四

鄙の歌

一五五

非なるべし

九二

日野資始

五〇

ヒフミ・アナイチ

五三

斐音味の存在

一六

ひも鏡うつし詞

一三五

紐鏡中の心

一三五

紐鏡旁註考

一三五

評雅語音聲考

一三七

平假名の成立

四四三

平假名の發生

二六

平田篤胤

一六五・三四・三五九

平山(輝男)線

四四

平山輝男

四四五

平井金三

二九七

平井重民

一五六

平岡伴一

四八一

廣さ詞

三九六

廣橋兼胤

一〇四

品詞の接續とアクセント

四四

品詞未分化時代の語法

五二

フ・フ・フ

伏目

一〇八

婦人のことば

四六九

布施御膳

一九七

藤林普山

一八二

藤原敦隆

四三

藤原清輔

四二

藤原(與一)線

四四四

藤原公任

四一

藤原仲實

四二

藤原定家

五

藤原範兼

四・四・六

藤原教長の古今集註

四

藤原濟成

四一

藤原道長

四三

藤原基俊

五七

藤村作

五〇

藤井乙男

四七

藤井貞幹

三二

藤岡勝二

二九八・五二・五〇八

普通國語學

三〇

普通語に付て

三三

普通人名詞に就きて

三八

風土記	一五
船首王後墓志	一〇
史部	二〇
ブラーグ派	四六
フランコ・スイス學派の紹介	五四
佛蘭西言語圖卷	四八〇
振分髪	一四五
フレエの誤用の文法	四八六
プレシユス	五二九
ブレンダー	四九四
文意考	九六
文雄	八六・一二三
分葉	五〇
文鏡秘府論	一九
芬甸爾國語の長音表記法	四一八
文藝類纂	二九
文論海照語法	二六七
口語淨瑠璃	四六七
文章心理學	四八七・四九六
文章撰格	二二〇
日本文章法大要	二六四

文章模式學	四九六
文體結構法	三九
文體論	四九六
文典唱歌	三八
文の研究の基礎としての句三六一	三八一
文の本質	四二一
文の抑揚と語のアクセント	四八七
文法學の原理的考察	三七
文法會	二四五
文法上許容案	四八六
文法の原理	二七五
文法論と國語學	一九
文筆眼心抄	四〇六
分類漁村語彙	四〇六
分類農村語彙	四〇六
文祿伊曾保を中心とした語法	三三五

平安朝文法概説	四八
平安朝文法史	三〇〇
平安朝文法史	三〇〇
平家物語考	三〇一
平家物語々法	二四九・三三・三三
平家物語につきての研究	二四九
平他字類抄	四八
平式	四二
平凡社大辭典	三四四
並立格	二七三
表現學	四八六・四九三
表現學序説	四九三
表現の詞	四九三
表現の様相	四九三
表現を目標とする語學	四三七
表型	四九三
表象作用	四九四
標準語と東京辯	四六七
標準語に就きて	二二七
標準語問題	五四一
表裏の別	一〇八
別記(廣日本文典)	二二〇
ヘボン式	二二六

反音作法	三三・四
反音抄	四三
反音の法	五五
變字法に就いて	二〇
辨色立成	三三
反照・使役・他動の原則	三三
反照性中相	三三
ホ・ボ・ボ	二〇六
ホイットネー	四八
母音間の父音の價值	二〇八
母音五義派	四九
母韻協和の現象	四九
母音の發生論	一三三
褒詞	四〇
補格	三六三
保科孝一	三三・三四六・三六〇・三三
友鏡底の影につい	五〇
て	二六
補助形容詞	四三

細川幽齋	七三	繙譯の問題	五〇	松下大三郎	三三	萬葉集古義	二五
細川幽齋附書	七四	本來の漢語と認むべきもの		松平圓次郎	二六五	萬葉集東歌	一六
細江逸記	三九〇	ト範圍	三八八	松永貞徳	七七	萬葉集東語彙	一九四
堀田正敦侯の仙臺言葉	一九七	本韻	四八	松前方言考	一九七	萬葉集に於ける文字の文學	五〇六
ボナベ語	三三一			松村任三	二八九	的用法に就て	五〇六
ホフマンの日本文典	三三〇			松本信廣のオーストロ説	四九九	萬葉集の語法	一三
ボラー	二九七・五九・五〇			松本亦太郎	二四六	萬葉集の研究	四七
——日本語のウラル・ア	二九七・五三			松井簡治	三九・四九	萬葉集の字訓假名について	五六
ルタイ語派に屬する證例	五〇	マイエル	五四	末韻	四六	萬葉集見安	一八
ポリヴァノフ	四三	眞假名	二三	松岡靜雄	三九	萬葉集類林	一八
堀季雄の續萩	一九六・四〇三	眞假名の發達	二四	松岡調	一七三	萬葉集詠	一八
堀秀成	三〇七	横島昭武	一八六	松尾拾	五七	萬葉詞林抄	一八
梵語新釋	一八一	枕詞	七七	眞名草	一八六	萬葉人の氏術波の意識	一八
梵語抄	一八一	枕詞及び掛言葉について	五三	舞鶴地方のアクセント	四〇	萬葉代匠記	一八
本辭	一六	枕詞註	七七	前島泰助	二〇〇	萬葉の調點	四
梵字形音義	三	磨光韻鏡	一三・一四	前田太郎	二八九	萬葉の用字例の複雑	四
本州中部方言	三九八	磨光韻鏡の批評	一六	前田利保	一八四	萬葉綴結抄	一七
本州方言	三九八	磨光韻鏡餘論	一五	前田本色葉字類抄	三四六	萬葉辭彙抄	九五
翻切門法	二四	ましど	一八〇	前波仲尾	二三	萬葉枕詞解	一六三
本朝四聲論	二六一	眞下三郎	五七	萬葉假名遣	八五	萬葉用字格	一六四
本邦辭典史	三四一	「ます」の語史	五七	萬葉假名の字數	四三	萬葉用字論	五五
		松浦道輔	一七三	萬葉管見抄	八一	饅頭屋本筋用集	三四六

未開展の句
御國詞活用抄
御國通辭
ミクロネシア語の綜合研究三九
道曆
御杖(富士谷)
滿田新造
水谷居秀
三矢重松
皆川洪園
源順
源親行
壬生忠岑
宮田和一郎
宮良當壯
——虹考
宮訛言葉の掃溜
見ゆ留
民俗語彙

索引

引

三六五 無言抄
二三 無相
二九七 武者小路實陰
三九 無主命題
一九四 村上織部
一一〇 村田春海
三三四 村田了阿
八五 村林孫四郎
三三・三三 村岡典嗣の本居宣長
一〇四 ムルタン語やフィリピン語
二 との關係
五四 室町時代の言語研究
四 室町時代の言語資料
五〇九
五三
五〇四
一九七
七〇
四〇六
明語記

明治國語學書目解説 三二五・四八〇
明治文典 二六六
明了房信範 一二三
メチニコフ 五三
七
蒙求臂鷹往來 五一
毛人方言 一九四
木食上人 六六・七七
目諸回想 三九四
藻汐草 五二・七七
望月世教の力行延音 五四
物集高見 四九
——日本大辭林 二九
物集高世 一九・一九四
元良勇次郎 四四六
本居清造 二四九
本居宣長 一三
本居宣長の語學 一九
本居春庭 一四三
本居春庭傳 三三八
物語的作品に於ける形容詞 五七
物の名のなづきしゆゑよし 二九四
謨徵字説 二九
森有禮 二〇〇
森正俊 四七
森末義彰 四七
森本治吉の萬葉集の用字法 四九
研究 四九
諸疑ひ 七四
モンクメール語 三九
文字の沿革 三三
文字の研究 三三
ヤ
楊氏漢語抄 二〇
八木立禮 二・二〇
約言 九
八雲の神詠 二
八雲御抄 三六・七
安田喜代門 四四・四七
平安朝文法概説 四〇

六二

六二

保田光則	二二	國語學史要	四九	吉野與守	一六	吉野義雄	三三・三七
安原貞室	一四	日本口語法講義	二六九	吉岡郷市の日本口語法	二七	吉岡義雄	二七
休め字	五七	日本文法論	二七六	吉雄俊藏	一八	吉雄俊藏	一八
安井洋	二九	文字篇	四六〇	吉雄永保	一三	吉雄永保	一三
矢田部良吉	二五	山田常典	二三一	用言變格例	一三	用言變格例	一三
八衢偽正考	一四八	山田直溫	一四八	用語大成	一六〇	用語大成	一六〇
八衢疑問	一四六・一五〇	山田正紀	三七	用字活用考	一六二	裝詞打合圖・脚結詞打合圖	一三
八衢大略	一四七	山田美妙	二七・四四	銓接動詞	三九五	圖裝抄	一〇五・一〇六・一一一
八衢略圖會友	一四六・一五四	日本大辭書	三九	橫河飲河	二五	裝の圖	一〇五
八衢駢の響	一四八	倭片假字反切義解	二七・三〇	橫山辰次	五〇八	米澤方言の研究	三四
八衢補翼	一四七	ヤマト語	三三〇	橫山英	五〇六	讀まうば	四三
八衢補遺	一四七・一六一	日本魂谷川士清先生	二五九	豫想敘述	三九四	夜の鶴	六八
柳川春三	三〇〇	山本格安	一九七	吉川忠行	一九二		
柳田國男	三九八・四〇六	山本道守	一五六	吉川彦富	一〇四		
矢野玄道	一七二	和ぐる假名	五七	吉澤義則	三三・三三・三八・四四・五三		
「や」の七種	五五	「やんす」・「やす」の本源	三九	國語學史	四八	ラウエル	五三
矢野文雄	二六			總主語說覺書	五一	老櫓	三五
山口麻太郎	四〇一			文章史	四四四	「ら」及び「ろ」に就きて	四四
山口高瑞	一〇四			吉田澄夫	三六・五三	ラ行子韻の描録曲線	四〇〇
山口栗	一五五			天草版金句集の研究	三六	ラ行父音の本體	四八
山崎吉里	八二	由阿	五〇	究	五三	羅振玉	三三
山田孝雄	二四・三三・三五・三八	行能卿家傳假名遣	五八	難波鉦用語考	五三	ラヂオ放送	五四
		湯澤幸吉郎	三〇・四三・五八				

ラベルトン	五四
南洋語系説	四九
ラムステット	五三・五五
アルタイ語系説	四九
蘭學凡	一八二
ラングとランガージュ	四八五
蘭字通・蘭學捷徑	一八一
ランドレス	五〇

リ

流行語	四九
琉球語と朝鮮國との相關	三〇
琉球語と我が國語	五三
琉球語の母韻統計	四七
琉球の數記號	五三
琉球方言特輯號	四〇
柳園叢書	二九
俚言集覽	一九
史道	一三
史道諺文考	一七
「リ」と「たり」との語史	四八

索引

ル

良鏝のイロハ天理抄	二
略言	九
略語	四〇
八南略開會	一四六・一四八
臨時假名遣調査委員會	二四
ルスロー	四三
「る」「れ」の語尾は別の民	四三
族の語法	四六
類字假名遣	五九・六〇
類字源語抄	五〇・七
類集文字抄	四九
類聚名義抄	三
類聚名義抄索語	三
レ	
變異記に於ける假名字體	三
靈語通	一三・一三
靈語通にあげた或御説	五三

ロ

靈語通秘訣	三四
靈辭	三六
了解の曖昧性を試みる實驗	四九
歴史的現在	三九四
歴史文典	二九
歴史辭書史の概	三四七
連歌辭新式	六九
連歌の大事三百五十九條	三
連歌より起つた語學	六
連語のアクセント	四四
連珠合璧集	五・六
聯成動詞	三九五
連續音及び音節	四二
連體格副詞	三七七
連體句	三七七
連體形が終止形に代つた跡	四四
連理秘抄	六・六
ローゼンベルヒ	五〇・五六
ローマ字會	二五

ワ

ローマ字索引國漢辭典	四四
LOMAJI ZASSHI	二六
羅馬字新誌	二六
ローニー	二七・三〇
口芬同系論	三五五
口文神代文字古代	五三
刻銘	五三
日本語學須知	五〇
日本文典	五〇
六選説	一〇九
六選辨	一一
六格	一八三
六格前篇	一八三
露人オウディエフの質問	三八八
ロドリゲス	三〇・四八・五六
論語徴にあらはれたる音韻	二六
論	
ワイマント博士の太平洋語	四四九・五二四
系説	

矮屋一家言

一七

王朝時代に於ける博士家使

二八五

用ヲコト點譜

四九

王念孫と江晉三

一〇八

往・日・來

五・五九

往來物

四三

倭音

一三

和歌爲辭抄

四・六七

和歌色葉抄

一三

わかかつら

三三

我が擬聲語と語源

五三

和歌紀聞抄

八八

和歌虛詞考

一〇三

我が邦通記術

三四

我が國の文字に即した文字

四〇

學

四〇

和歌吳竹集

一八六

我が國民國語の曙

三三

和歌詞の抄

一八七

和歌十三ヶ條口傳

七一

和歌十體

四一

和歌初學抄

四四

和歌童枕抄

四・七六

和歌童蒙抄

七五・一八七

和歌八重垣

一三

和漢三才圖會

一〇・五二〇

和漢平號字抄

一八九

和漢名數

一七〇

和翰名宛

七七

和句解

一八九

和訓采

一八七

和語說略問

一五五

和語說略問書

一八四

業詞

一七一

和讚

一八六

和爾雅

一八六

倭字古今通例全書

一八二

和字正濫鈔

一八二

和字正濫要略

一八四

和字大觀抄

一八六

和字通妨抄

一八三

和字傳來考

一八六

和字傳來考附錄

一六六

ワシリエフ

三〇・五五

わす

四五一

渡邊弘人

一四九

和讀要領

二二

和文典

三七・三八

倭名類聚抄

二

ワンドリエスの音韻法則の省察

四六六

牛

猪狩幸之助

二六二

井上圓了

二七

韻鏡

二二三

韻鏡音韻考

三七

韻鏡考

二八一

韻鏡索隱

二四

韻鏡新解

二六・三七

韻鏡藤氏傳

二五

韻鏡と漢吳音との研究

二六二

韻鏡と唐韻廣韻

三七

韻鏡の研究

二三

韻鏡の内外轉に就いて

五〇

エ

圓珠庵契沖

九・八一

遠藤嘉基

五七

圓仁

五五

悉曇字母集

二〇

ヲ

岡倉由三郎

二六四・四九

岡澤鉦次郎

二四

岡島隆紀の假名考

二八

岡田正美

二四

岡田眞澄の假字考

一〇

岡田希雄

一〇・三四・五〇

小川正

三五

岡部東平

一四六

岡本千太郎

五一

岡本保孝

一〇・三四・四九

岡井慎吾	一五・二〇〇
萩生徂來	二六一・三三三・三三五
小倉進平	九二
	三六・四〇三・四一六
	五〇・五三三
乎古止點	三七・二八四
ヲコト點の種別	二八六
ヲコト點語	三七
ヲコトハ點	三七
小澤蘆庵	一四五
男聲	四六・四八九
小幡重一	四三・四七一
尾張方言	一九七
小山田與清	三三
折口信夫の形容詞論	五〇三
溫故知新書	五〇
女聲	四六・四八九

索

引

昭和十七年四月八日 初版印刷
昭和十七年四月十一日 初版發行
昭和十七年七月十八日 再版印刷
昭和十七年七月二十日 再版發行
(C. 000部)

認 承 協 文 出
號 100491 あ



配給元

東京市神田區淡路町二丁目九

日本出版配給株式會社

國語學史 ⑧【定價七圓八拾錢】

著者 福井 久藏

發行者 岡本 正一

印刷者 東京市神田區神保町三丁目十番地
春山治部左衛門

印刷所 東京市神田區神保町三丁目十番地
共立社印刷所

發兌 厚生閣

振替東京五九六〇〇番
電話九段三二一八番

文學博士 福井久藏著

〔内容見本進呈〕

菊判八百餘頁 挿畫豊富
皆革上製函入 別刷口繪附

價

十圓
送料四十錢

諸大名の學術と文藝の研究

本書は慶長の前後より明治の初頭に至る二百七十餘年間に於ける三百諸侯の著作を検討し、學術文藝の上に遺したるその業績を考へ、併せて全國各地方文化の一端に觸るるを以て目的とし、久しく隠れたる諸侯の反面を闡明せんとしたる博士畢生の近業である。諸侯の政治・軍事は世或は之を知る、その外に至つては關知するもの甚だ稀である。博士は夙に之を遺憾とし、二十餘年間奉職せる學習院の地位を利用して東行西走、よく諸侯の祕庫に探りて貴重なる資料を得、帝國學士院より研究費を補助せられて前人未踏の本研究を大成した。現代の史家、文學者、科學者、軍人、歌人、俳人の一讀を要する權威書である。

抄	容	内
序論	本書の成立・第一	諸侯と儒學―藩學の興起・第二
第四	諸侯と國學・第五	諸侯と歷史・第六
教訓	諸侯と兵學・第一	諸侯と地誌・第七
九	諸侯と科學・(一)數學・二	諸侯と政令と教訓・(一)政治・二
侯と錢貨	諸侯と科學・(二)醫學・三	諸侯と鷹・第二
文學・六	諸侯と科學・(三)和歌・二	諸侯と鷹・第二
樂・平曲・能樂・演劇・二	諸侯と科學・(四)連歌・三	諸侯と鷹・第二
繪畫・三	諸侯と科學・(五)俳諧・四	諸侯と鷹・第二
書道・四	諸侯と科學・(六)紀行文學・五	諸侯と鷹・第二
茶道・第十三	諸侯と科學・(七)音聲・二	諸侯と鷹・第二
雜・(一)隨筆・二	諸侯と科學・(八)漢文學・八	諸侯と鷹・第二
結語	諸侯と科學・(九)漢詩・狂歌合・第十二	諸侯と鷹・第二
索引	諸侯と科學・(十)雜・(一)隨筆・二	諸侯と鷹・第二

附 三六頁附

國語大學系

編輯 藏久井福 士博學文

行刊約豫卷四廿全

第十二卷	第十一卷	第十卷	第九卷	第八卷	第七卷	第六卷	第五卷	第四卷	第三卷	第二卷	第一卷
活	假	假	假	文	文	音	音	音	語	語	語
	名	名	名						總	總	總
語	遣	遣	遣	字	字	韻	韻	韻	記	記	記
第二十四卷	第二十三卷	第二十二卷	第二十一卷	第二十卷	第十九卷	第十八卷	第十七卷	第十六卷	第十五卷	第十四卷	第十三卷
句	語	語	語	方	方	手	手	手	手	手	活
讀						爾	爾	爾	爾	爾	
法	源	源	源	言	言	波	波	波	波	波	語

國語學書として權威ある古今の稀書珍籍を蒐め、系統的に分類して翻刊或は影寫し、昭和十三年四月より毎月一冊刊行中。毎冊福井博士筆の詳密なる解題を附す。（内容見本送呈）
 菊判布裝函入 各三百五十頁内外
 會費各冊四圓 送料各三十錢

文學博士 清原貞雄著
神道史

價五・〇〇 千・三〇

高群逸枝著
大日本女性史

價六・八〇 千・三〇

高群逸枝著
増補大日本女性人名辭書

價六・八〇 千・三〇

相磯貞三著
記紀歌謡新解

價六・八〇 千・三〇

文學博士 福井久藏著
諸大名の學術文藝の研究

價一〇・〇〇 千・三〇

神道史研究の第一人者として清原博士の名はあまりにも有名である。前著「神道沿革史論」の絶版を期として、こゝに全然新稿をもつてその謬誤を是正しその後の研究をも洩らさず網羅した七百頁の大冊。

我國に眞の女性史なきを慨き、面壁九年の悲願遂に成つて茲に先づ「母系制の研究」を産んだ。古代女性の國家的寄與及び家族制度、婚姻制度の種々相を女性史眼を通じて闡明した學界初發の大著である。

上古より現代に及ぶ代表の女性一千九百名を盡く史實に據つて詳細に書いた女性の手に成る最初の女性國史百科。附録として歷朝、女院、齋宮・齋院の一覽表、及び總索引を附した。

……前人の尊い業績は概れ紹介され著者独自の識見を以て批判されてもある。口譯は歌詞に極めて忠實で、語釋は音韻・文法に重點をおき、考證は例證豊富な觀察が行はれてある。(佐々木信綱氏序より)

本書は徳川時代に於ける三百諸侯の著作を検討し、學術文藝の上に遺したその業績を考へ併せて全國各地文化の一端に觸るゝを以て目的とし、諸侯の反面を闡明せんとした博士學生の近業である。